

黄金船の長い旅路 或いは悲劇の先を幸せにしたい少女の頑張り

雅媛

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ゴールドシップはメジロマックイーンの子孫である。

没落したメジロ家の血を引くものとして、幾多の成績を上げてきた。

彼女はトレセン学園過去の悲劇を、祖母の悲劇を知る。

その悲劇を変えたい。そんな彼女の祈りは女神に届き、過去へと飛ばされる。

悲劇を乗り越えた先にみんなで幸せになるために、彼女の孤独な努力は続いていく。

アニメ版に近い世界観ですが、各所異なります。

未来人ゴルシちゃん概念もつと流行れ

現在未来編不定期投稿

# 目次

人物紹介(第一部開始時)	1
序章 ゴールドシップの居た未来―惨劇の世界線にて	
20XX年 ゴールドシップの知る未来	5
???? 女神様の願いと少女の願いと	11
第一部 第一章 過去に戻ったゴールドシップ	
入学式と新しい出会い	14
憧れのあなたとの大事な時間	17
学園第1レース 入学式特別OP 廊下 1200m	21
中山レース場 第1レース 弥生賞 芝 2000m	27
これからのことと、チームのことと	31
チーム・スピカ	34
閑話 相部屋の相手はいったい誰か	40
第二章 超光速の貴公子と運命の分岐点	
それは光速を超える運命の出会いで	44
歴史の流れが変わるとき	48
スカーレットに交われば赤くなる。	51
アグネスタキオンのスピカ加入	55
アグネスタキオンの日常	60
閑話 ゴールドシップとマックイーンのお出かけ	64
第三章 ワンコ娘スズカと天皇賞(秋)	
サイレンススズカの東京優駿	67
偶然で必然な出会い	74
スピカ加入歓迎会	79

スズカの困惑と白銀の彼女との出会い

84

よく見ると気づくこと

89

スズカの『お姉さま』

93

第116回天皇賞(秋) 東京レース場 芝 2000m

96

閑話 マックイーンとゴールドシップと小さなほころび

101

#### 第四章 メジロの因縁と精霊ウマ

メジロのおばあ様へのご挨拶

106

玄孫と高祖母のじゃれあい

110

桜色のあなたを探して

113

学園模擬レース

116

貴顕の使命を果たすべく

120

閑話 マックイーンのスピカ加入歓迎会

124

#### 第五章 スピカのダイエツト大作戦

事の発端

127

ダイエツト大作戦始動

130

トレーニング前の分析

134

スタミナトレーニング LV15

138

結果は失敗か大成功か

141

ダイエツトは食から見直すべき

145

タキオンの誕生日

150

#### 第六章 運命の日

スペシャルウィークの弥生賞と皐月賞

153

サイレンススズカの宝塚記念

156

運命の時まであと3歩

160

サイレンススズカの毎日王冠

164

月の下のセレナーデ	167
サイレンススズカの天皇賞秋	170
第七章 南海に舞う桜吹雪	
悲劇を乗り越えた月曜日	174
高知への旅	181
高知トレセン学園でのあいさつ	184
砂浜に行くウマ娘たち	187
一仕事終えて	191
第八章 二人の道が離れてそしてまた交わるまでの物語	
運命の分岐点を超えたところで	195
すれ違う二人	198
正気でならば狂気にて	201
青空に浮かぶ雲の悔恨	205
一流ウマ娘の諦観	210
運命の宝塚記念	213
そして少女は再び歩き出す	216
ようやく交わった終着点	219
閑話 学園障害3600m ドキドキドキ君の愛馬の指の数	222
はあと何本記念	
間章 それぞれのあり得た未来という名の悪夢	227
それは長い本当の悪夢	
彼女の恋が始まって、そして終わるまでの話	230
春色のちよつとした幸せな夢	236
それは何の変哲もないあり得た可能性	239
あるお昼のお茶会	243

間章 それぞれの物語の断片

南国の桜と不撓不屈の王

スピカの夏合宿

メジロマックイーンと、ライアンと、パーマーと

皇帝の孤独と勝利を誓う彼女

第二部 第一章 脳筋マックとナメクジテイオーのホープフルステークス

人物紹介(第二部開始時)

スピカのメジロマックイーン

リギルのトウカイテイオー

テイオーとマックイーンの希望の一戦 パドック

テイオーとマックイーンの希望の一戦 本戦

マックイーンの今後

テイオーの今後

第二章 三冠を目指すテイオーとチーム・カノーパス

マックイーンの日常とチーム・カノーパス

ゴールドシップのファクション研究

東条トレーナーの悩み

気づいた三人の話し合い

王は孤独であるべきか、王は慕われるべきか

最速の貴公子のクラシック戦線異状なし

不屈の王の宝塚記念

閑話：マックイーンとサトイモとゆかいな仲間たち

第三章 二人の『英雄』と『普通』のウマ娘

「普通である」ということ

334

329

325

322

317

312

309

305

301

297

292

287

284

280

276

265

260

256

252

246

誰がウサギで誰がカメか | 340

小倉レース場11R 芝2000m 小倉記念 本馬場入場

344

小倉レース場11R 芝2000m 小倉記念 本戦・

敗者たちの反省会 | 348

菊の花が咲くころに | 354

京都レース場11R 芝3000m 菊花賞 パドック | 357

京都レース場11R 芝3000m 菊花賞 本戦 | 360

夢の終わり | 364

閑話：タキオンとダスカとウオツカのジュニアクラス | 368

#### 第四章 物語の始まり

テイオーとお姉さまの出会い | 373

絶対と黄金の船 | 377

愚者の走り | 381

膨れまんじゅうと黄金船とそれに挟まれたリョテイ | 384

テイオーとの話し合い | 387

閑話：何をすべきか | 390

練習 | 394

それは最初の一步 | 400

【100話記念】ゴルシちゃんネル | 404

マックイーンの見る光景 | 408

閑話 ティオーのスピカ加入歓迎会 | 411

#### 第五章 春の風が吹く

春の風吹くシニア戦線 | 414

阪神レース場11R 芝2000m 大阪杯 パドック | 418

阪神レース場11R	芝2000m	大阪杯	本戦	424
悔しいという気持ち				427
焦燥と負けたくない気持ちと				430
閑話：スぺちゃん生徒会長のはじまり				433
閑話：ゴルシちゃんネル	ぱーと2			437
閑話：ファイナーレまではもう少し				442
第六章	春の終わり			
作戦会議				446
京都レース場10R	芝3200m	第105回天皇賞	本バ場	
入場				451
京都レース場10R	芝3200m	第105回天皇賞	本戦	
454				
宴の後に				459
春の終わりまでに後少し				462
アグネスタキオンの東京優勝				466
継る想い				471
運命の宝塚記念				474
私の夢	あなたの夢	彼女の夢	そしてみんなの夢	478
閑話：ゴルシちゃんネル	ぱーと3			482
第七章	最終章まであと少し			
夢の祭りの後				487
夏合宿の始まり				491
夏の星空の下で				494
夜の闇は安らぎであり				497
閑話：ウマ娘脚漕ぎボートレース				500



第八章 秋の風が吹くころに

秋の戦いの準備

何のために走るのか

テイオーの天皇賞秋

吹きすさぶ木枯らしに

皆でいれば温かい

閑話：ゴルシちゃんネル ぱーと4

第九章 頂点までの道のり

絶対に勝つために

想いを一つずつ集めて

とどかぬ指先に祝福を

特別なところ

閑話：幸せな未来への覚悟

年末のグランプリ

祭りの始まり

決着

祭りの後

閑話：ゴルシちゃんネル ぱーと5

最終章 すべてのウマ娘を幸せに

ドリームトロフィーシリーズ

大きく跳ぶには一度かがむ必要がある

最後の休養

終わりの始まり

響けファンファーレ

その結末は

その夢が終わった時	578
長い旅路の終着点	582
そしてすべての始まり	586
エキストラパート おまけのお話	
マヤの隣の幽霊さん	588
ゴルシちゃんネル ぱーと6	591
やり直し転生系主人公になったゴルシちゃん	596
第三部 未来でのゴールドシップ 第一章 黄金船の入学	
黄金船の入学	599
黄金船の学園案内	602
黄金船の姉のルームメイト	606
黄金船のルームメイト	611
黄金船の日常	615
黄金船と姉のチーム見学 1	618
黄金船と姉のチーム見学 2	621
デープブリランテとカワイイウマドル	624
ジャスタウエイと本物の魔法使い	630
黄金船とその姉のトレーナー	636
閑話：ゴルシちゃんネル フューチャー part1	640
第二章 黄金船のチーム探し	
トレーナー探して難しい	643
チームスピカ	647
入部試験レース	650
レースの後で	654
歓迎会	657

閑話：ゴルシちゃんネル

フューチャー

part 2

661

## 人物紹介（第一部開始時）

七章有馬記念終了時

ゴールドシップ

身長：170cm

体重：維持

スリーサイズ 88／55／88

肩書 チームスピカサブトレーナー

未来から来たメジロマックイーンの子孫。

惨劇の世界線たる世界を変えるために三女神の力で過去へと渡ってきた精霊ウマ娘。

未来では両親は既に死別しており天涯孤独だった。

スタート以外は何でもできる。

尊敬する人物はメジロマックイーン

未来での戦績は28戦13勝

主な勝鞍は宝塚記念2回 皐月賞・菊花賞 有馬記念 天皇賞（春）

メジロマックイーン

身長159cm

スリーサイズ 70／50／78

肩書 メジロ家令嬢

名家メジロ家の令嬢。ライアン、パーマーと合わせてメジロ三羽鳥と呼ばれる。

厳しく礼儀作法などを躾けられてきたお嬢様。その姿は憧れの的。スイーツに目がないが、昔は体型維持のために控えている。

尊敬する人物はメジロのおばあ様

アグネスタキオン

身長：159cm

体重：微減（不摂生のため）

スリーサイズ 82／54／80

肩書 アグネス家令嬢

名家アグネス家の令嬢だが、ほぼ勘当されている状態のウマ娘。

天才的な頭脳を持つが、理解されがたく浮いている。

甘いものに目がなく、紅茶党。研究に没頭して生活が乱れがち。

好きな人物はマンハッタンカフェとダイワスカーレット

ダイワスカーレット

身長：163cm

体重：維持

スリーサイズ 90／56／82

肩書 新入生

名家ダイワ家の令嬢。優等生であり、基本はまじめだが時々暴走する熱血少女。

入学後、困っていたところをアグネスタキオンに助けられてから慕っている。

尊敬する人物は母親

好きな人物はアグネスタキオン

ウオツカ

身長：165cm

体重：維持

スリーサイズ 76／55／78

肩書 新入生

名家タニノ家の庶流の娘。

絶賛反抗期だが、成績はダイワスカーレットに並ぶ優等生。

不良ぶっているところがあるが、根は真面目でいい子。

尊敬する人物は父親

サイレンスズカ

身長：143cm

体重：微減

スリーサイズ 70／53／76

肩書 チームリギルメンバー

リギル所属のウマ娘。寡黙な性格で周囲から浮いている。

そのスピードの素質はとんでもないが、あまりうまく使えていない。

成績は実はあまり良くなく、中の下程度である。

好きな人物はエアグルーヴ

戦績は1戦1勝

スペシヤルウィーク

身長：158cm

体重：微減（入学のストレス）

スリーサイズ 81／56／81

肩書 転入生

トレセン学園に編入してくる田舎ウマ娘。

根性がすさまじく、何か困ったらすぐ根性でどうにかしようとする。

ヒトより牛が多い田舎で育つたためコミュニケーション力は皆無。だが根性でどうにかする。

尊敬する人物は二人の母親

エアグルーヴ

身長：165cm

体重：維持

スリーサイズ 90／57／86

肩書 生徒会副会長

女帝の異名を持つウマ娘。

口調が強く厳しく見えるが、基本的に誰にでも優しく親切なみんなのママ。

ひそかに裏で行われているミストレセン学園3年連続1位。

戦績は9戦6勝

主な勝鞍はオークス

沖野トレーナー

肩書

チームスピカメイントレーナー

チームスピカのトレーナー。

現状あまり流行ではない、自主性を重んじる指導をするトレーナーである。

ウマ娘に考えさせ、決めさせ、トレーナーはそれを支える、という方法を取っている。

指導、特に能力を上げさせるのは上手いが、恋愛沙汰は非常に苦手である。

無事これ名馬を座右の銘にしており、健康管理にだけは非常にうるさい。

東条トレーナーとは同じトレーナーについていたことがあり、弟弟子にあたる

東条トレーナー

肩書

チームリギルメイントレーナー

チームリギルのトレーナー

管理主義を徹底し、それによりトレーニング業界に管理主義を流行らせた人物。

膨大なデータから導き出された最善を常に提示し、行わせていく手法は天才と評される。

初めて受けもったシンボリルドルフに対抗できるウマ娘を育てるのを目標としている。

序章 ゴールドシップの居た未来―惨劇の世界線にて

20XX年 ゴールドシップの知る未来

ゴールドシップはメジロ家の令嬢である。

正確には、彼女が生まれたときにメジロ家はすでに没落していたため、血筋的には、という注釈がつくのだが。

彼女はかのターフの名優と謳われたメジロマックイーンの孫なのだ。

いつも表情豊かでコロコロと表情を変えるため、彼女の真顔を見たことのある人間はほとんどいない。

だが、その長い銀髪と整った顔立ちは祖母であるメジロマックイーンと瓜二つだ、と亡き彼女の祖母を知る者はよく話していた。

圧倒的な才能と、体の丈夫さに恵まれた彼女は、トレセン学園に入学し、いくつもの記録を作った。

日本ダービーを落としたためクラシック三冠バにこそなれなかったが、皐月賞と菊花賞には勝利し、さらに宝塚記念二連覇など、今までなかった記録を達成してきた彼女は、トレセン学園でまた、いろいろなことを知った。

祖母メジロマックイーンを襲った悲劇。

なぜ彼女がメジロ家を没落「させた」のか。

断片的であるが、何が起きたのかを推測させるに十分な情報がトレセン学園では手に入った。

天皇賞秋の直前、メジロマックイーンはターフを去った。

そんなメジロマックイーンを元気づけるため、奇跡を起こすと宣言し有馬記念に臨んだライバル、トウカイテイオーは、そのままレース中の事故で帰らぬヒトになってしまう。

落ち込むマックイーン。

そしてそんな彼女のとどめになったのは、ライスシャワーの事故だったらしい。



マックイーンの天皇賞春三連覇を阻み、その後スランプに陥り、しかし奇跡の復活を遂げて天皇賞2勝をしたライスシャワーは、次走の宝塚記念での事故で帰らぬヒトになってしまった。

「彼女はターフを恨んでいました」

一時は祖母と恋人関係にもあったというイクノデイクタス教官は、ゴールドシップがメジロマックイーンの孫だと知ると断片的ではあるがいろいろな昔話を語ってくれた。

「大事なライバルを、先輩を、後輩を次々と奪っていくターフに、往年の情熱を失い、徐々に恨みを重ねていったのです」

「……先生は後悔してるんですか？」

「……………そう、ですね。後悔しかありません。私は彼女を救えなかった」

イクノ教官は、学園で一番優秀な教官である。

最低でもゴールドシップはそう思っていたし、周りからも多く同意をしてもらえるほどの名教官であった。

その献身的、時には自己犠牲的に見える指導は、後悔からくる代償行為なのだということを、聡いゴールドシップは悟った。

いや、おそらくその後悔に含まれるのはマックイーンのことだけではないのだろう。

遠くを見るその瞳に映っているのは、一人だけを懐かしんでいるとはとても思えなかった。

それだけ深く、悲しい目だった。

ゴールドシップは考える。

別にメジロ家を再興する、なんてことは考えていない。

名家の生活というのは全く想像できないし、今の生活だって別に極貧生活を送っているわけではないので十分幸せである。

生まれる前に無くなった自分の由来など、ゴールドシップにとって気にする対象ではなかった。

ただ、自分の由来というのは気になるものだ。

そして調べれば調べるほど出てくる多くの悲劇。

これがゴールドシップを苦しめた。

既に物語はバッドエンドで終わり、スタッフロールは流れてしまった後だ。

どうしようもないのはわかっているが、それでも無性に悔しかった。

ゴールドシップは往年の祖母を知るだろう人に会いに行った。

残念ながらメジロの同期で活躍していた人は見つからなかった。

人当たりが良く明るかったといわれたスペシャルウィークは、偏屈で人を拒絶する雰囲気をもとって何も話してくれなかった。

おしとやかな大和撫子と謳われたというグラスワンダーは、野原で惚けた様にぼーっとしていただけだった。

過去のことを話してくれる人は多くなかった。

それでも話してくれる人は何人かいた。

一人はトウカイテイオーと同期で、祖母の一つ下の年次で走っていたナイスネイチャだ。

北九州でバーを営んでいた彼女は、世話好きなのだろう。

東京から来たゴールドシップをいたわりながらいろいろ教えてくれた。

圧倒的強さだったトウカイテイオー。

白い風になって走る祖母。

大切に保管していたらしい当時の映像を見せてくれながら、一つ一つ教えてくれた。

その光景は非常に鮮やかで、だからこそ悲しかった。

「あんなキラキラした子たちになうわけないのはわかってるんだけどさ、それでも、私がもうちよつと才能があつたならば、つて思うこともあるわけよ」

飾らない言葉で優しく語っていたネイチャが遠い目をする。

良い才能、という名前を受けた彼女は素質にはそこまで恵まれなかったらしい。

トウカイテイオー最後の有マ記念の時、やはり三着だった彼女は、トウカイテイオーの悲劇を間近で見えていたらしい。

「テイオーはさ、頑張ってたんだよ」

「……」

「すごかったよあれは。本当に。ダービーの時のテイオーもすごかったけど、あの時ほど強そうと思ったことはなかったよ」

「……」

「ちょうど第四コーナーを曲がり切ったあたりだったね。私を抜き去ろうとするテイオーを追いかけてラストスパートを駆けたら、いやな音がしたんだ。で、一拍置いてすさまじい轟音が目の前で起きて、すぐに後ろに飛んで行った」

「……」

「それでおしまい。マックイーンが人目をはばからず泣いてたのはあの時しか見たことはないよ」

ゆつくりと、思い出しながら語り、最後は泣きながら崩れ落ちて寝てしまった彼女を、やさしい目をした彼女の夫に預けてゴールドシツプはその場を去った。

もう一人はキングヘイローだった。

祖母の一期上に当たる人だ。アパレルにスイーツ、広く事業を手掛ける彼女に会えるとは思っていなかったが、手紙を送ると二つ返事で会ってくれることになった。

彼女はマックイーンとは直接一緒に走ったことが無いから多くは語れない、と言いながらもいろいろ話してくれた。

彼女の話の中で興味深かったのは、サイレンススズカの話だろう。一時期メジロマックイーンもトウカイテイオーもスペシャルウィークに世話になっていたと聞いていた。

だがさらにその一つ上の先輩が関係しているとは思わなかった。

「そういえば、スペちゃんにはもう会ったかしら？」

「スペちゃん？」

「ああ、ごめんなさい、スペシャルウィークさんよ。あと、グラス、グラスワンダーさんにも、その感じだと会いに行ったかしら？」

「ええ、二人ともお元気でしたよ」

「ごまかさなくても結構よ。二人とも、話なんて聞けなかったでしょ？」

「…… はい、でも体はお元気そうでした」

「心が死んでるのだから、あまり意味はないけどね」

「どういうことですか？」

「私たちの時間は、たぶん、スズカさんが天へと駆けて行ったときに止まってしまっているんですよ」

「サイレンススズカ……」

沈黙の日曜日の話はゴールドシップも知っている。

だが、それが一期が下の彼女らにそこまで大きな影響を与えているとは思わなかった。

「スペちゃんとスズカさんが寮で同室だったの、ご存じかしら？」

「いえ……」

「スペちゃんはスズカさんのことが大好きだったわ。本当、恋人みたいだった。もしかしたら言っていないだけで恋人だったのかもしれない」

「……」

「それがあの日、スペちゃんは変わったわ。勝利だけを追い求め始めた」

「……」

「うちの同期、あの頃とても仲が良かったのよ。だからみんなで試行錯誤した。エルは実績を見せつけるのを目指してまた海外へと行った。」

「……」

「グラスはスズカさんの代わりになろうとスペちゃんに挑み続けた」

「……」

「セイちゃんも頑張って復帰して、あきらめないことを見せようとしていた。2年もかけて復帰したのよ、あの子」

「……」

「それで私は、同期で一番才能がなかったから、別の道もあるのを見せるために引退した」

「……」

「結果はどうなったか、聴いあなたならわかるでしょう?」

どれも、うまくいかなかったのはわかった。

エル、おそらくエルコンドルパサーさんだろう、彼女は海外で帰らぬヒトとなった。

グラスワンダーさんはスペシャルウィークさんに勝って、勝って、そして恨まれただけだった。

セイウンスカイさんは、復帰したが結果はボロボロで、そのまま引退になり早逝した。

キングヘイローさんは、きつとそれにいまだにとらわれている。

悲劇はそこら中に転がっており、縄のように絡まりつながっていた。

「早く、月曜日が来ないかしら」

明日は月曜日だ。しかし彼女の月曜日はおそらく、ずっと来ないのだろう。

調べれば調べるほど、ただ気持ちが沈むだけだった。

学園に戻り、ぼんやりと中央の噴水の淵に座る。

三女神の像が噴水の中央にあった。

ウマ娘の原点といえる三女神は、ウマ娘達の願いを叶えるという。

しかしゴールドシップはそれに非常に懐疑的だった。

現実主義者というのものもあるが、それ以上に、助けてくれるのが本当ならばなぜ、こんなにも悲劇があふれているのだろうか。

半ば八つ当たりに、ゴールドシップは落ちていた小石を拾うと、三女神の像に投げつけた。

????

## 女神様の願いと少女の願いと

ゴールドシップは気が付くと不思議な空間にいた。

どこだかわからない。真っ暗な中に光が見える、そんな空間だ。

光っている方に行けばいいのか、逆に行けばいいのか。

どうしていいかわからずに迷っていると声が聞こえてきた。

『ゴールドシップ、あなたは悲劇を変えたいと思いますか?』

優しい女性の声だ。そんな声が天から問いかけてくる。

「変えたい」

ゴールドシップは迷わずにそう答えた。

変えられるものなら変えたい。そんな気持ちがあった。

変えられないからあきらめていたのだから。

お世話になったイクノ教官の涙を止めたかった。

優しいネイチャさんの後悔を止めたかった。

苦しそうなキングさんの苦悩を止めたかった。

止められるなら、確かに止めたかった。

『それに、代償を払う意思はありますか?』

「代償? 代償とは何ですか?」

最初の声と違う声で、また問いかけてきた。

少し凜とした感じの女性の声だ。

急に物騒な話が出てきたと感じたゴールドシップは聞き返す。

ゴールドシップは聡い娘だ。何もわからないうちにすぐ飛びつく、

なんてことはしない慎重な娘である。

代償とは何か、問いかける。

相手は何だかわからないのだ。

神だとしても、彼らに人の心はわからない。

悪魔だとしても、彼らには人の心はわからない。

同じ言葉を使っても、違う意味の可能性がある。

慎重に、慎重に話を進めていく。

『あなたを、悲劇の起点、メジロマックイーンの学園入学の時に飛ばすことができます』

「……すごいですね。代償もすごいのですが」

また違う声が響く。少し幼げが残る声である。

なんとなく気づく。おそらくこの声は三女神様のものだろうと。

こんな経験は初めてであるが、伝承や、いろいろな人から聞いた噂を合わせると何となくそう察した

とするとここは運命の岐路なのだろう。

自分の、もしくは世界の、何かが変わる重要なポイントなのだ。

三女神様と運命の分岐点だということを考えて、過去に飛ばす、というのが荒唐無稽に聞こえないから不思議だ。

ただ、過去に飛んで歴史を変えるなんてことをしたらとんでもないものを取られそうだ。話をちゃんと聞こうとゴールドシップは身構える。

『時間を移動すること自体には代償はありません。ただ、あなたがすることは歴史を変えることです』

「そうですね。全く別の歴史になるように思います」

『変わった歴史がどこに流れ着くのか、私たちにもわかりません。ただ、大きく歴史を変えれば、あなたが生まれてこなくなる可能性が高いのです』

「そりやまた盛大な話ですねえ」

タイムパラドックス、みたいなものか。

時間旅行をした者がいない以上、想像の産物の話だったが、それに近いことが起きるといふことだ。

悲劇も喜劇も全部積み重なった今に、自分は立っている。

悲劇をなくせば土台は崩れるのだ。その先に積み重なるモノは全く別のものだ。

そうなれば自分がいなくなるかもしれない、というのは理解できる話だった。

「生まれてこなくなると、変わった歴史はどうなるんです？」

『そのまま流れていきます。ただ、場合によってはあなたは消えてしまいます。流れの中に存在しない存在になりますから』  
「なるほど」

『消えなくても、大きなものを失う可能性があります』

「神様でもわからないんですね……」

「どうやら自分がいなくなっても、変わったものは変わったままらしい。」

変えた者がいなくなっても変わった結果は変わらないというのは、なんだか不思議である。

ゴールドシップは考える。

自分が消える、というのはなかなか怖い話だ。

だが、それもあんまり問題ないのでは、と思った。

両親もすでに亡く、やりたいことはある程度やりつくした。

この悲劇をなくすことができるならば、それも価値があることだろう。

直感的にやるべきだと感じた。

ゴールドシップは自分の直感を疑わない。

だから、直感に従い返事をした。

「ではお願いします」

『本当にいいのですか？』

「悲劇からみんなを救うってかつこいいでしょう？　　いっちょよ世界を救ってきますよ」

『わかりました。どうか、よろしくお願いします。私たちの愛しい娘たち……』

暗い空間の中、光が強くなっていく。あちらに駆けていけばいいのだろう。

そうしてゴールドシップは、全速力で光の中に飛び込んでいった。



## 第一部 第一章 過去に戻ったゴールドシップ 入学式と新しい出会い

ゴールドシップは気づいたらトレセン学園に居た。  
いつも通っている、6年間通い続けた学園だ。

しかし、その風景は見慣れたものと少し違った。

校舎が全体的に新しい。

あのおんぼろだった校舎が、どことなく全体的にきれいだった。

一方で新校舎が無かったり、新しい建物がいくつか存在してない。

本当に過去に戻ったのか、そんな風に驚くゴールドシップの横を、赤絨毯が走っていく。

「なんだこれ？」

思わず声が出る。真っ赤な絨毯が校内の通路のど真ん中にいきなり出てきたらさすがのゴルシちゃんでも困惑する。

そうしてその赤絨毯の真ん中を歩いてきたのは、一人の茸毛の少女だった。

一目見て、それが誰だかわかった。

メジロマツクイーン。自分の祖母だ、と。

なんせ顔が似ている。

体格は、自分の方がかなり大きい。

年齢差があるから顔も彼女の方が幼い。

だが鏡を見るようにそっくりだった。

静々と、しかし堂々とその赤絨毯の真ん中を歩いていくメジロマツクイーン。

その美しい姿に、ゴールドシップは……

「マツクイーン♪」

「きゃあああああ!？」

いたずら心を我慢できずに、彼女の目の前に飛び込むと過去最高の変顔をした。

トレセン学園非公式全校対抗にらめっこ大会6年連続優勝者ゴールドシップの渾身の変顔である。

いけ好かないトーセンジョーダンすらねじ伏せた渾身の変顔である。

それを見たマックイーンは化け物を見たかのような悲鳴を上げた。悲鳴すらかわいいとか、うちのばあちゃんかわいすぎだろ、とゴールドシップは思った。

自分がこんなことされたら、きつと「ごるああああ」みたいな可愛くない威嚇しかできない。

「はっはー、マックイーン、にらめっこは笑ったら負けなんだぞ♪ 悲鳴を上げたからマックイーンの大負けだ」

「いきなりなんですの!?!」

「なんだかんだと聞かれたら、答えてやるのが世の情け!」

「意味が分かりませんわ!!」

「ゴルシちゃんは、マックイーンに会いたくて、遠い未来から来た未来人なんだZO♪」

「日本語をしゃべってくださいまし!!」

ぶんすか怒るマックイーン。うちのばあちゃん、かわいすぎか。

ぶんすかかって擬態語が見えるぐらいかわいい怒り方だ。

自分だったら大暴れして周囲を荒野のようにぶち壊す。ついでにトーセンジョーダンを蹴り飛ばす。

かわいさなんてかけらもない。恐怖と荒廃しかそこには残らない。

マックイーンと自分、どうしてこんなに差がついたのか。環境の違いか。

確かに雑草な自分とお嬢様なマックイーンは血はつながっていても環境が違い過ぎる。

すぐにゴールドシップは自己完結した。結論、うちのばあちゃんはとてもかわいい。

という事でもっと愛でることにした。

「という事で、マックイーンのおごりで食堂行こうぜ! スイーツ食べ放題だ!」

「スイーツ！ ……って違いますわ！」

「という事でしゅっぱーっ」

「放してくださいまし!!」

まあそんな違いはどうでもよかった。

抱きしめて、頬をすりすりしながらマックイーンを連れて食堂へと向かう。

マックイーンは全力で抵抗し逃げようとするが、年齢差、体格差、経験差、身体能力差、どれをとっても自分の方が上だ。

一切抵抗を許さずに、食堂へと連れ込むのであった。

## 憧れのあなたとの大事な時間

「嘘をつきましたね!」

「はい、あーん」

「もぐもぐ…… だから嘘をつきましたね!」

「嘘ついてねーよ。はい、あーん」

「もぐもぐ…… スイーツがないではないですか!」

立ち上がろうとするマックイーンの口に、果物をあーんする愉快的な作業を続けるゴールドシップ。

拒否せずに食いついてくるマックイーンがちよろすぎて少し心配になる。

学食で出る甘いものは果物かヨーグルトにかかったフルーツソースぐらいしか基本的に存在しない。

当たり前である。

甘い物好きで食欲旺盛なウマ娘達にケーキなんか食べ放題で出したら、一瞬にして食べつくされて、体重計とトレーナーの悲鳴が学園中に響くだろう。

なのでそういった類のものは特別な時だけ、しかも一人一個といった個数限定でしか配られない。

果物類ですら、基本量が制限されているのだ。

「そんなにスイーツ食いたきや、外で食べばいいじゃねーか、はい、あーん」

「もぐもぐ…… 買って食べると、カードの使用履歴からおばあさまにばれるんです……」

「カード……」

どんなお嬢様だよ、と思ったがよく考えたらとってもお嬢様であった。

未来でもメジロ家最盛期といわれた時期だ。お金はいっぱいあるのだろう。

焼きそばとかお好み焼きを売るところから始まり、溶接の免許まで取ってバイトしていた苦学生ゴルシちゃんとの待遇の違いに驚きながら

も、あーんをつづける。

それはそうとして、あーんと果物を食べるマックイーンもまた非常にかわいい。

そしてその口元にちよつとエロスを感じる。

なんだうちのばあちゃん、魔性の女か。

黙ってれば美人といわれたゴルシちゃんとは何が違うのか。

育ちか。育ちだろうな…… 顔は基本一緒だし。

ゴールドシップは一人納得した。

「そういえば、あなた、名前なんて言いますの？ 学年は？ 先輩ですの？」

「ゴルシちゃんはゴールドシップだZE！ 職業は未来からみんなを幸せにするために来た未来人なんだZE！ 未来人だから学年なんてかんけーねー！」

「……」

実際学年とかどうなってるんだろうか。

制服のまま来たしウマ娘だから学園生だという事は疑われないで済んでいるが、よく考えたら戸籍すら存在しなさそうである。

食事は学食で三食食べられるが、もしかしてこれ、家なき子ではないだろうか。

財布は持っているが、そんなにお金が入っていない。

というか、未来のお金、使えるのだろうか。確かこのころの万札って福沢諭吉だろ？ 渋沢栄一じゃないんだろ？

財布の中の万札完全おもちやねーか！

世界の未来よりも自分の未来が不安になるゴールドシップである。まあもしも部屋が無ければマックイーンの部屋に居座ろうと心に

誓う。

「未来から来たなら、わたくしが天皇賞に勝てるかどうか、知っているんですよね？」

「もちろん知ってるZE！ マックイーンは天皇賞春連覇するんだZE！ まあ、宝塚記念三連覇したゴルシちゃんには及ばないがな！」  
どや顔しながら語るゴールドシップ。

ゴールドシップが知っている未来とこれからが同じになるかはわからない。

いや、同じにならないようにゴールドシップがするのだから、同じにはならないだろう。

でも、マックイーンには天皇賞を連覇してほしかった。

ついでにマックイーンに褒めてもらいたくてゴールドシップは思わず戦績を盛った。本当は三回目の宝塚記念は思いつきイレ込んで大敗北している。

「すごいですねー、ゴールドシップさん……」

「ごめんなさい二連覇です。思いつき盛りました」

この時点で宝塚記念二連覇以上したウマ娘がいないことは、マックイーンも知っているだろう。

ゴールドシップが二連覇した時に初といわれていたのだから、このころにそんな記録がなくて当たり前である。

ゴールドシップが言ったことは出まかせだ、と思ってもいいはずだが、普通に感心されてしまった。

キラキラした目で見られてゴールドシップの心は折れた。盛った自分が恥ずかしくなって思わず心の中で土下座した。

「……ところでマックイーン」

「なんですの?」

「入学式、いいのか?」

「……え?」

「もうすぐ始まると思うぞ?」

「……え?」

壁の時計が9時を指している。

入学式は9時からである。

つまりもう始まる時間だ。

「なんでそれをいわないのですのー!!」

「いやー、マックイーンといるのが楽しくて」

「初日から遅刻ですのー!!!」

二人して跳びあがるように立ち上がると、一目散に駆けだした。

学食から入学式の会場である講堂までの距離は約1200m。東京ドーム17個分の広さを持つ学園をまたぐ形なので結構距離があるのだ。

学園第一レース 廊下 1200m 入学式特別OPが始まった。

m

「さて、早々遅刻しそうなマックイーンは果たして入学式に間に合うのか。実況は三女神の一人、エクリップスが」

「解説は私、同じく三女神のマツチエムがお送りします」

「あれ、ヘロドちゃんは？」

「入学式見に行ってるから今回は不参加だつて」

「ヘロドちゃん、会長さんが大好きだからねえ。しょうがない」

「という事で出走バの紹介です。1番、メジロマックイーン。スイーツがないといいながら果物に夢中です」

「食べ過ぎて重め残りが無ければいいのですが」

「2番、ゴールドシップ。こちらはマックイーンに夢中です」

「イレ込み過ぎてますね。恋人の様に甘やかしています。レースに影響しないか心配です」

学食にはだれもない。

見ているのはゴールドシップを見守る女神たちだけである。

といつても三女神の1柱はお気に入り、の会長シンボリルドルフとトウカイテイオーを見守るため別のところを見ていて、今回は不参加である。

神のみぞ知る、と言わんばかりに誰もいない学食で恋人のようにいちやついている二人。

二人はそんなつもりは全くないのだろうか。

そんなやり取りをしていて、ゴールドシップはふと時計を見た。

「ゴールドシップが時計に気づきました」

「入学式の時間に気づいたようですね。時間一杯です。各バ一斉にゲートイン」

「今、スタートです」

遅刻寸前の状況に気づいたマックイーンが学食を飛び出し、ゴールドシップが続く。



学食の扉というゲートを潜り抜け、廊下を爆走していく。

「ゴールドシップ、出遅れていますね」

「スタートが苦手なウマ娘ですからね。その分最後の追い込みは怖いですよ」

「先ずは最初の直線。渡り廊下のカーブまで400mほど直線が続きます」

メジロマックイーンは入学式に遅れるわけにはいかなかった。

当たり前である。入学式から遅れるなんて不真面目もいい所である。

さらにマックイーンは入学生代表であいさつすることになった。

挨拶文は既に頭に入っているし、スケジュールも理解しているが、最後の打ち合わせがあつたはずである。

つまりすでに遅刻状態だ。これ以上遅れるわけにはいかなかった。全力で廊下を駆けていく。

学内にはだれもない。

だが後ろから凄いプレッシャーがかかる。

「な、なんで追いかけてきますのおおお!!」

ちらりと後ろを確認すると、なんとゴールドシップが追いかけてきている。

なんで追いかけてくるのか、何を考えているのか何もわからない。ただ、真剣な顔で追いかけてきている。

その恐ろしい状況とあまりのプレッシャーに、マックイーンはペースを上げた。

ゴールドシップがマックイーンと同時に出発したのは、特に意味はない。気分である。

ただ、憧れの祖母と競つてみたいという気持ちがあつたのは否めない。

現役時代、どう頑張ってもよくならなかつたスタートは今回も悪いままで、完全に出遅れてしまった。

ただ、まだ勝ち目はある。コースは廊下を400mほど直進し、曲がって渡り廊下を200mほど進んで、残りはまっすぐの直線だ。直線で差し切る。そんな決意でゴールドシップは走っていた。

「さて、第三コーナーを曲がって渡り廊下に入りました。こここの直線は200m。第四コーナーで直角に曲がることを考えると、あまり速度は出せませんね」

「マックイーンは快調に飛ばしていますね。ゴールドシップは……!?!」

「ゴールドシップ、仕掛け始めましたよ!? ここから仕掛けて、果たして第四コーナーは曲がれるのか!?!」

「これは読めなくなってきましたよ!」

半分が直線のコースだ。第四コーナーを曲がってから仕掛けると思っていたが、ゴールドシップはこのタイミングで仕掛けた。

確かにゴールドシップの持ち味はロングスパートだが、さすがに無理な仕掛けではないだろうか。

解説と実況の二柱は思った。

「ひいひいひい!!!」

マックイーンは圧力が強くなったのを感じた。

それは単に気配、というだけではない。

ドツ! ドツ! ドツ! ドツ! ドツ!

エンジンか削岩機か、そんなものに聞き間違うような重い音が後ろから近づいてくるのだ。

音が怖すぎて振り返れないでいるが、ゴールドシップの足音だろうことは想像がついた。

ウマ娘の踏み込みは確かに重い音がするが、ここまで重く、地面がえぐられるような音は初めて聞いた。

しかもテンポは異常に遅い。マックイーンの3歩走る間に音は2回ぐらいのテンポだ。にもかかわらず徐々に音が近づいてくる。一歩でどれだけ踏み込んでいるのが怖くなる。

マックイーンは悲鳴を上げながら、第四コーナーをきれいに曲がった。

マックイーンは予想以上に速かった。

いくら伝説のターフの名優とは言え、今はまだ入学したての若ウマ娘である。

ドリームトロフィー所属で全盛期である自分なら簡単に追いつけると油断した自分を、ゴールドシップは恥じた。

直線が600mほどあることを考えても、あの速度で走るマックイーンに対して10バ身近い差を詰められるか自信がなかった。

だからゴールドシップは早めに仕掛けた。

自分の売りは、祖母譲りのスタミナと、それに支えられたロングスパートだ。

それを見せるためにも、ゴールドシップは渡り廊下に差し掛かってすぐ仕掛けた。

問題は最後のコーナーだが……

「でりゃあああああ!! まがれえええええ!!」

最高速で走れば、このコーナーが曲がり切れないのはわかっていた。

だから、曲がり切れない分は壁を走った。

ドゴツ! ドゴウ! ゴツ!

鈍い音をたてながら、壁を三歩ほど走れば、遠心力は重力に負ける。

ゴールドシップは、コースヘスピードのロスなく戻れた。

速度もテンションも最高潮である。

マックイーンの背中は間近に迫っていた。

「ゴールドシップ! 速い! これは速い! マックイーンに並んだ!」

「いえ、並ばせません！ 一気に追い抜いた！ そのまま講堂の入り口を蹴り開けて……」

「ゴール!!」

「いやあ、すごかったですね」

「あのゴールドシップの追い上げ、とんでもない脚ですね」

「一着はゴールドシップ、三バ身離れてメジロマックイーンという結果に終わりました」

「という事で実況はエクリップス」

「解説はマツチエムでお送りしました」

先に講堂にたどり着いたゴールドシップは、その勢いのまま、講堂の扉を蹴り開けた。

大きな音がして、扉が開く。

皆が音の元であるゴールドシップを振り返った。

ここでゴールドシップは正気に戻る。

あれ、自分はどのようにして走っていたんだろうか。

別に入學式、自分は関係ないよな？

だが、そう思っても蹴り開けてしまった後である。

ひとまず騒がせたお詫びにその場で土下座をした。

周りから見たら、見たこともない長身の美人がいきなり飛び込んできて、いきなり完璧な土下座をした、という状況だ。

見ていた者は全員困惑した。

マックイーンはこの隙に講堂に潜り込んだ。

沈黙があたりを支配する。

ゴールドシップも困惑した。

土下座でも許されないというのか。

ならば、一発芸で場を和ますしかない。ゴールドシップは覚悟を決めた。

「ゴルシちゃんの一発芸！ 変顔しながら何も無い所からシルクハットを出します！」

後輩にバカ受けだった一発芸だ。

トーセンジョーダンすら爆笑させる変顔をしながら、フジキセキ流手品術の奥義であるシルクハットを何も無い所から大量に取り出すというゴールドシップの108ある奥の手の一つだ。

いきなり出てきた大量のシルクハットととんでもない変顔に、周囲は困惑を深めた。

声一つ上がらない。

だが、ゴールドシップは一発芸をした時点で、みんなにわかってもらったと一人納得して、その場を堂々と立ち去った。

シルクハットだけが大量に残される。

マックイーンは遅刻を会長に見つかり怒られた。

中山レース場 第11レース 弥生賞 芝 2000 m

ゴールドシップは学内を回り一通り確認して、自分がずいぶん都合のいい存在になっていくことに気づいた。

未来で学園生として使っていた学生証が過去に戻った今でも普通に使えた。

学生専用の部屋に入るときも、図書室で本を借りるときにも、使えるのだ。

未来で使っていたものだから、学生番号がほかの人たちとは一桁ぐらい違っている。

ちゃんと確認したら、偽造か、記載ミスを疑うと思うのだが、特に誰にも何も言われなかった。

住む場所も、栗東寮に普通に自分の部屋があった。

未来の荷物もまるまるそのまま、未来と同じ部屋が自分の部屋になっっていた。

未来の製品があつたら一儲けできると思ったが、残念ながら部屋には大したもの置いていなかったの、そうだったことはできなかった。

全自動掃除機とか、ゴルウェイとか、絶対受けたと思うんだが……

とゴールドシップは残念に思った。

ちなみに学年は無しである。

授業は受けなくて済みそうだが、授業時間の間何をするかがなかなか悩みどころである。

それもおいおい考えないといけない。

なんにしろ、家なき子も、無職も避けられた。

おそらく三女神の加護とか、そういった何かなのだろう。

都合がいいのでありがたく乗らせてもらうことにした。

ひとまず暇だし、という事でゴールドシップはレースでも見に行く

ことにした。

レース場の隅の人気のないところで観戦しながら、今後のプランを練るつもりだった。

図書館は気が散るし、部屋で一人きりで作業するのは寂しい。

レース場はうるさくはあるが、皆レースを見ていて観戦者を見ていない。

考え事するにはちようどいい賑わいなのだ。

ゴールドシツプがレース場についたときは、ちようど第1レース弥生賞のパドックが始まったところだった。

弥生賞

クラシツク三冠の初戦、皐月賞のトライアルレースであり、三つある皐月賞トライアルレースでも一番強豪の集まるレースである。

本番と同じ距離、同じレース場であるため、経験を積むにもちようどいいのだ。

そういう事で参加者のだれもが闘志をみなぎらせているのだが…… 出走者の中に一人だけぼーつとしてるやつがいた。

栗毛の美少女だ。

基本的にウマ娘は皆見目麗しいのだが、その中でも目を引くぐらい綺麗な子だった。

しかし、なんかすごいぼーつとしてる。目の焦点もあってなさそうだし、パドックもふらふらしていた。

えつと、5枠14番、サイレンススズカ、か。

あの美人だけどぼーつとした姉ちゃん、サイレンススズカっていいのか。

何か聞いたことがある名前で見ることがある顔だな、と思いながら、記憶を探るが……

「えっ!? あれがサイレンススズカなのか!?!」

思わず声を上げてしまった。

やつとあの、最速の機能美、孤高の逃亡者といわれたサイレンススズカと、目の前のぼーつとした少女が結びついた。

確かに記録映像で見た顔と同じだ。見れば見るほど美少女である。

まあ、ゴルシちゃんにはかなわないし、うちのマックイーンの方がもつと美人だ、とゴールドシップは内心思った。

だが、記録映像で見たサイレンススズカはレースしか見ていないよな、抜き身のナイフのような危なげな雰囲気を持つていた。

まかり間違っても夜更かしして寝不足で眠いんですみたいな目をしてレースに挑むような雰囲気ではなかった。

ゴールドシップは名前を三度見したが、やはりサイレンススズカだった。

時期的にも、マックイーンが入学した年にクラシック戦線にいたはずだから間違いないのだが、まったく信じられなかった。

そんな予想外のスズカの姿に驚くゴールドシップだったが、さらに、レース直前のサイレンススズカにさらに驚いた。

なんと、スタート前にゲートの下を潜り抜けたのだ。

そしてゲートを潜り抜けると、迷子になった子犬が飼い主を見つけたような雰囲気であたりを見回し、そして観戦に来ていたエアグルーヴを見つけると、嬉しそうにそちらへ走り寄っていった。

なんだあれ、可愛すぎるだろう。ウマ娘じゃなくてワンコ娘とか、そういう生き物なんじゃなからうか。

何より、ゲートの下を潜り抜ける、という発想に、ゴールドシップは衝撃を受けた。

エンターテイナーゴルシちゃんは、きれいなスタート以外のあらゆるスタート方法をしてきた、と思っていた。

ゲートを蹴り開けてスタートすることから始まり（なお、ゲートは固くて蹴ってもあかなかつた）、スタート前に喧嘩を売ってきたトーホウジャツカルの野郎に、威嚇してゲートに飛びついたこともあった。

綺麗なスタート以外は何でもできる、なんて異名すらもらったことがあるゴールドシップは、スタートのエンターテイナーである、という要らない自負があった。

しかし、ゲートの下を潜り抜けたことはなかった。

ゲートの下は確かに空間がある。そこを潜り抜けるというそのサ



イレンススズカの発想力の前に、ゴールドシップは負けを認めた。

サイレンススズカの悲劇を回避する、これは未来から来た自分の目的の一つである。

だが、そんなこととは関係なく、ゴールドシップは彼女と仲良くなりたくなった。

これからのことと、チームのことと

ゴールドシップは決めた。

サイレンススズカと同じチームになる。

そしてサイレンススズカを愛でる。

悲劇を回避するため、とかいう理由ではない。

あの種族ワンコ娘スズカを愛でるために、同じチームに入る。

ゴールドシップは強く決意した。

サイレンススズカの所属はチームリギルである。

東条ハナトレーナー率いる、当代最強のチームだ。

ゴールドシップの居た世界線では、トウカイテイオーの事故後、チームを解散してしまい、その後行方が分からなくなってしまうていた。

しかしその管理能力には未来でも評価が高かった女傑である。

だが、ゴールドシップはリギルに入るつもりは毛頭なかった。

ゴールドシップは管理されるといのがトーセンジョーダン並みに嫌いなのだ。

実力的に入れる自信はある。ゴールドシップは、未来ではG1を6勝もしているのだ。

その実力は、あの最盛期のリギルのやばいメンバーと比べても遜色がないだろう自負がある。

だが入るとい選択肢は取れなかった。

ならば一つ、自分に合うチームを見つけ出し、そこにスズカを移籍させる。

これしかなかった。

東条トレーナーが移籍に納得する相手で、かつ自分に合うチームを探す、というのは非常に大変そうだった。

まず、ゴールドシップにあうチーム、というのがほとんどなさそう  
だ。

未来では、管理をガチガチやるチーム、というのはあまり存在しな  
かった。

精神力の大小が、ウマ娘の能力に大きく影響するという理論がアグネスタキオン博士により確立し、主に精神的な理由からそういった方法は好まれなくなったためだ。

もちろん一から決めてもらうのが好きなウマ娘もいるので、管理や束縛が強いチームがまったくなかったわけではないが、大体のチームはのびのびとウマ娘を育てる方針だった。

だが、この時代のトレーナーは管理主義全盛期である。

その風潮は、東条トレーナーが管理主義を徹底して、実績を大きく伸ばしたからに他ならない。

だが、そんなチームにゴールドシップが入ったら最後、部室もトレーナーも全部蹴り壊すまで止まらない自信があった。

ひとまず東条トレーナーが移籍を認めそうなトレーナーを探すところから始めて、最悪そいつを調教して性格を変えるか、なんて物騒なことを考えていたゴールドシップだったが、すぐにいい相手が見つかった。

スピカのトレーナーだった。

チームスピカ

未来では聞いたことのない名前のチームだった。

おそらく記録をあされば出てきたのだろうが、このころのある程度メジャーなところは全部抑えていたゴールドシップが知らないぐらい無名なチームだ。

トレーナーの名前も聞いたことが無い。

おそらく歴史に埋もれてしまったチームなのだろう。

だが、トレーニングを見学していればすぐに、彼が非常に優秀なトレーナーだとわかった。

まずウマ娘を見る目がある。

選んでいるウマ娘はどれもこれも、才能があつて、しかし我が強く癖がありそうな子ばかりだ。

自分もそうだが、ああいう癖があつて自分がやりたいことしかやりたくないタイプのウマ娘は、ガチガチに管理しても心が弱り、弱くなってしまう。

放任主義的な指導方法に合った、それでいて才能があるウマ娘を見抜く、その目は確かなのだろう。

もう一つ、ウマ娘の不調をすぐ見つけるといっても、見る目があつた。

遠目で見えていたゴールドシップはわからなかったが、一人トレーニングをやめさせて寮に戻らせる、という事をしていた。

すれ違う時に気づいたが、少しだけ足取りがおかしい。おそらくソエだろう。

走っているウマ娘の異常をすぐに見抜くのだから、かなり目がいいのだろう。

次にトレーニング方法もよい。

ゴールドシップが知っているのは、今よりかなり未来の、新しくトレーニング方法が確立した時代の方法である。

それと比較しても、遜色のない指導が行われている。

一人一人にそれとなく、しかしそれぞれに合った指示を出すのはよほど知識と経験がないとできないはずである。

だが問題もある。

トレーナーとウマ娘の間の信頼関係がうまくできていない。

若干口下手なところがあるのだろう。聞かれないと説明せずにやらせる傾向がある。

また、管理をしないという方法が、彼女らに「ちゃんと指導してくれない」という印象を与えている。

他のチームのやり方は同じクラスの子から聞いていたりするのだろう。

不満が爆発しそうな雰囲気を感じ取れた。

だからだからこそちようどいい。

今入ればスピカで大きな顔ができるだろう。

また、東条トレーナーと個人的な付き合いがあるのを見れば、彼女もまたスピカのトレーナーを評価しているのはわかった。

非常に都合がいい。

ゴールドシップはスピカに狙いを定めた。

## チーム・スピカ

沖野トレーナーは悩んでいた。

今日、また2名のメンバーが辞めた。

残り2名もすでにほかのチームに移籍するべく、加入テストを受けたり他のトレーナーと交渉したりしている。

最近の流行と自分の指導方法がまるで違うのは理解していた。

厳しく鍛えて強くする、という方法が間違っているとは言わない。

だが、それに合うウマ娘もいれば、合わないウマ娘もいるのだ。

だからこそ合わないウマ娘を見つけては勧誘して加入させていたが、彼女らにとってトレーニングとは強制されるものなのだ。

自分で考えてトレーニングする、という方法が彼女たちにはわかりにくいようだった。

だからしょうがないのだ。

メンバーが0人になったら、才能がなかったと思ってあきらめよう。

チームをたたんで、実家に帰って農業でも継ぐことを決意していた沖野トレーナーの視界に、いきなり蹄鉄付きの靴底が飛び込んだ。きた。

「ゴルシちゃんきーつく!!」

「ごはああ!」

「よし、100点満点だな!」

「何が100点満点だ!」

「む、入りが浅かったか。もう一発、行っておく?」

「いらねえよ! なんだよ一体!」

「ゴルシちゃん、スピカに入ることにしたから。ここにサインしてくんねーかな」

「え?」

「すきありー」

ゴールドシップは沖野の手を取ると、出ている鼻血を親指につけさせて、そのまま拇印を申請書に押させた。

あとはこれを提出すれば、晴れてゴールドシップはチームメンバーである。

「ちょ、ちょっと待て、ゴールドシップといったな。なぜうちに入ろうと思ったんだ!?!」

「そうだな、あんたのトレーニングを気に入ったのが一つ、ワンコ娘を引き抜いても許されそうなのが一つ、だな」

「ワンコ娘?」

「リギルのサイレンススズカ」

「お前、何考えてるんだ!?!」

「いいだろー、リギルにはあれだけチームメンバーがいるんだから一人ぐらい」

「ペットを飼うようなノリで他のチームのメンバーを求めな!」

「あ、後マックイーンも誘うからよろしくな」

「マックイーン? メジロマックイーンか!?!」

「そうそう、あたし含めて美少女三人だ。うれしいだろう?」

「はあ…… まあいい。来る者は拒まないのがスピカの本 motto だ。で、ゴールドシップといったな」

「ゴルシちゃんでもいいぜー。長い付き合いになりそうだからな」

「おまえ、なんだ?」

苦笑していたのが一転、真剣な表情になる沖野に、ゴールドシップも怯んだ。

何に気づかれた?

どこまで気づかれた?

焦る気持ちがあふれ出てくる。だがそんな焦りは表情に出さずに笑顔で対応する。

「ゴルシちゃんは未来から来て、みんなを幸せにする愛の使者なんだ Z E ♪」

「なるほど、で、何が起きるんだ? いや、聞いても意味が無いか」

「トレーナーのいう事はわかりにくいんだ Z E ♪ ゴルシちゃんにもわかるように説明してほしいんだ Z E ♪」

「ゴルシ、お前、三女神様に導かれてここに来たんだろう?」

「……」

まさかそこまでばれるとは思っていなかったゴールドシップは押し黙った。

これ、ばれていいことなのだろうか。

それすらゴールドシップにはわからない。

ここで黙るのは肯定に等しいのだが、今まで荒唐無稽すぎてばれな  
いだろうと油断して、ばれることを想定していなかったゴールドシッ  
プは黙るしかできなかった。

「とって食おうとしてるわけではないんだから、そんな不安そうな顔  
をするなよ」

「してないZ E ♪ ちゃんと説明するんだZ E !」

「精霊ウマ、っていうんだがな。何十年に一度、三女神様の加護でいき  
なり現れるウマ娘がいるんだよ。彼女たちは皆、ほかのウマ娘達を助  
ける存在だといわれている」

「そんな話、聞いたことないぞ?」

「専門的過ぎるマイナーな神話だからな。だが、記録上存在が証明さ  
れているものでもある。伝承ではどこから来たかは不明だが、未来か  
ら過去へ訪れている、と予想はされているがな」

「……」

ゴールドシップは気まぐれゆえに優等生ではないが、成績は優秀で  
あった。

スタート以外は何でもできる、の何でもに勉学だって含まれている  
のだ。

もちろんウマ娘神学だって、一通り知っているが、それでも全く知  
らないぐらいマイナーな話だった。

しかし、ゴールドシップがそういう存在だと、なんでわかったのだ  
ろうか。

そんな疑問が顔に出たのか、トレーナーはすぐに答えた。

「お前さんぐらい良いトモをしたウマ娘のこと、俺が知らないはずが  
ないからな。だからすぐに分かった」

「少女の太ももを見て欲情するなんて変態だな、トレーナー。もう一

度蹴飛ばしてやろうか」

「すまん、怯えさせるつもりはなかったんだ」

「まあいいってことよ、でトレーナーはゴルシちゃんから何を聞いた  
いんだ？」

「本当はすべてを聞きたい。ただ、それは意味が無い」

「意味が無い？ ゴルシちゃんに協力できないってことかよ!!」

「そうじゃない。最大限お前には協力してやる。そうじゃなくて、お  
前が未来のことを語っても、俺には聞こえない、という事だ」

「……？」

「ひとまず何でもいい。未来のこと、話してみろ」

「私の最初の目標は、サイレンススズカの死亡を避けることだ。天皇  
賞秋レース中に、サイレンススズカは転倒事故を起こし、全身打撲で  
死亡する。それを避けたいんだ」

「……」

「トレーナー？」

「ゴールドシップが真剣に何かを語ってくれたのは表情からわかる。  
だが、何を今言ったか全くわからなかった」

「!？」

「カサンドラの呪い、とも言われてる現象だ。全く理解できなくなる  
というからどんな風に認識されるのか興味があったが、まさか気味の  
悪い雑音にしか聞こえなくなるとは思わなかった」

「おいおいおい、縛りがきつすぎないか？」

「未来から来たなんて言うのが突拍子もなさすぎて信用されにくい  
のに、未来のことは聞いてもらえないとかひどすぎる。」

「先ほどトレーナーが言った意味が無い、という意味がゴールドシッ  
プにもわかった。」

「トレーナー！…なんでだよ！…もつとちゃんと聞けよ!!」

「そういつて事細かにゴールドシップは説明を始める。」

「協力者ができそうなのだ、情報共有したいのだ。そして、あの惨劇  
の世界線を変えたいのだ。」

「だが、いくら話してもトレーナーは聞き取れないようだ。むしろ頭



痛を堪えるような表情をし始めた。

気味の悪い雑音、とトレーナーはさつき表現した。聞こえない、だけでなく、聞くのが苦痛でもあるのだろうことに気づいたゴールドシップは話を止めた。

「……」

「すまん」

「なんでだよお、わたしは、マックイーンを、イクノ先生を、みんなを助けたいのにい……」

未来で、ゴールドシップがトレセン学園に入学したとき、ゴールドシップのことを複雑な目で見る者は多かった。

髪型を変えて、帽子をかぶり始めたらそういう目がなくなったのであまり気にしなかったが、過去にきてその意味が分かった。

ゴールドシップを見て、皆、その後ろにメジロマックイーンを見ていたのだ。

それくらい、自分とメジロマックイーンの外見はそっくりだった。体格は全く違うが、顔がそっくりだ。

イクノ先生なんか、元恋人だったなんて言う話だから余計複雑だったのだろう。

だが、誰もマックイーンを責めるようなことはゴールドシップに言わなかった。

悲しい顔をして、少しだけ、過去の話をしてくれた。

だからそんな過去を変えたかった。

文字通り命を賭しても変えたかった。

そのために、誰かに手伝ってほしかった。

やっと手伝ってもらえそうな相手ができたのに、これはひどすぎる。

涙が出て止まらない。

「ゴールドシップ」

「……」

「お前を手伝ってやる。肩を並べることがは、俺ではできないのだろう。でも、後ろから背中を押してやることはできるはずだ」

「……トレーナー……」

「だから、頑張ってくれ……」

「……がんばる」

トレーナーの優しく頭を撫でる手は、亡くなった父を思い出させた。

## 閑話 相部屋の相手はいったい誰か

チーム加入の手続きを終えて、ゴールドシップは寮へと帰る。  
ひとまず気持ちは落ち着いたし、整理もできた。

トレーナーは並ぶことは難しくても協力者にはなってくれると約束してくれた。

それで十分だ。最初は自分一人で全部やるつもりだったのだから、理解し助けてくれる人がいるだけですさまじく大きな前進である。そう考えると気持ちはむしろ明るくなった。

気持ちの切り替えが早いのは、ゴールドシップのいい所である。今後についてはまた明日考えよう。

今日は疲れたし、部屋の片づけを少しだけして、夕食を食べて、風呂に入って寝る。

そんな予定で寮の自分の部屋に戻ろうとしていた。  
部屋に戻ると、部屋の中から音がする。

泥棒か、とも思ったが、基本寮内ではそういった事件は起こらない。外部犯は見つかればバ力が違うウマ娘にタコ殴りにされる。

内部犯の可能性も0ではないが人が多いここではリスクが高い。そもそもカギはちゃんとかけていたはずだ。

もしかしたら、同室の相手だろうか。

未来ではゴールドシップの部屋はずっと一人部屋だったが、過去に戻った関係で、誰か同じ部屋になったのかもしれない。  
誰だか知らないが、ここは一発ガツンとかましてやろう。

どちらが上か、はつきりさせるためにも、最初が肝心だった。  
「ぐろおああああ！ 泥棒か？ 泥棒だな！ 神妙にお縄につけ！」

「えっ？ むぐっ!？」  
ゴールドシップはトビラを蹴り開けると、部屋の中にいたウマ娘に襲い掛かった。

最大速度でとびかかると、口を押さえて悲鳴を上げられなくしたうえで、ベッドに押し倒した。

左手で口を塞ぎ、右手で相手の両手を押さえつける。

体格差があるからか、バ力の差か、容易に押さえつけることができた。

「ん〜!!!」

「全く、ゴルシちゃんの部屋に相部屋しようなんて100万光年早い…… ってマックイーンなんだけぜ？」

押さえつけて、ゴールドシップはその相手がメジロマックイーンだと気づいた。

涙目でムームー言いながら身をよじっている。

服装は薄緑色のワンピースである。

ネグリジェっぽくて、何かいけない感情に目覚めてしまいそうな、そんな光景だった。

制服とジャージを着まわして、私服なんてないゴルシちゃんに謝ってほしいぐらい女子力が高かった。

ひとまずウマっ気が抑えきれなくなっしてはいけない過ちをする前に、ゴールドシップは手を離れた。

マックイーンは後ずさりすると、怯えた表情でゴールドシップを見た。

「ゴールドシップ、なんであなたがここに……?」

「いや、ここゴルシちゃんの部屋だし」

「あ、あなたと相部屋ですの……?」

「そんな顔して喜ばれると、ゴルシちゃん照れちゃうぜ」

「絶望してるんです!!」

てしん、てしんとベッドを尻尾でたたきながら、怒りをあらわにするマックイーン。

かわいすぎか。ゴールドシップは思った。

ほわほわした気持ちで愛でていると、不満なのかマックイーンは怒りをベッドをたたきたくことで表現し始めた。

ぽすん、ぽすん、てしん、と尻尾と平手でベッドをたたきマックイーン。

怒っています、というのを伝えたいのは伝わるのだが、実際に出てくる感想はかわいさだけだった。

マックイーンの周辺で、何かすべてをかわいくするやばい世界のバグでも起きているのではないか。ゴールドシップはそんな感想すら浮かんだ。

ずっと惚けるように愛でていたら、うちが明かないと思ったのか、マックイーンが立ち上がった。

「寮長に部屋を変えてもらうように交渉してきますわ」

「そ、そんなー！」

「とめてもむだ……」

「わ”だじば、まつぐいーんとおなじべやで、うれじがっだのにい……」

立ち去ろうとするマックイーンの腕をつかむゴールドシップ。

揶揄おうとしても無駄だと振り払おうとして振り返ると、そこにはゴールドシップが本気で号泣していた。

人目をはばからないマジ泣きだ。マックイーンは焦った。

ゴールドシップは自分がやり過ぎていたことは理解していた。

普段から斜に構えて人をからかうのが好きだが、許されるラインの見極めはしっかりしていた。

だが、マックイーンに対しては、明らかにそれを超えているのが分かっていたにもかかわらず絡むのをやめられなかった。

かわいいし、憧れの祖母だし、求めていた家族だった。

拒否しながらも優しく笑うから、ついつい甘えてしまった自分をゴールドシップは恥じた。嫌われる、そう思うと涙が止まらなかった。

「まつぐいーん……」

「そんな泣かないでくださいまし！ は、反省するなら許してあげてもいいですわよ」

マックイーンは名家の出である。

箱入り娘であり、基本チヨロかった。

「ほんど？」

「誠意を見せれば、ですわ」

「まつぐいーんのすぎぎょうな、でらつくすメロンパフェあじだおごる

がらあ……」

「許しますわ！」

ターフの名優、スイーツの前に即墮ちであった。

## 第二章 超光速の貴公子と運命の分岐点 それは光速を超える運命の出会いで

チームスピカのメンバーを増やすため、ゴールドシップは校内を彷徨い歩いていた。

残念ながらゴールドシップ加入時にいた二人はやめてしまったが、トレーナーはやる気を出しており、チラシを配りまくったことで新規メンバー二人が加わった。

ダイワスカーレットとウオツカだ。

ゴルシちゃんのセンスあふれる、まるでデザイナーに発注したかのようなチラシには反応せず、トレーナーのクソださチラシで二人釣れたのはゴールドシップにとって心外だったが、まあそれはそれでいいだろう。

ちなみにマックイーンはまだメンバーではない。

泣き落としにパフェにケーキと、手を変え品を変え誘ったのだが、いろいろ見比べてから入るチームを決めると断られてしまったのだ。隙を見てまた勧誘するつもりだが、今はまだメンバーではなかった。

なんにしろいま重要なのは、入った二人は逃がさないようにすることだ。

そのためトレーニング方法の変更も行った。

内容自体は変えていない。増えたのは、トレーニング内容の説明だ。

いちいちすべて、何を目的として、何を鍛えて、どうなれば成功か、を教えるようにトレーナーに言うようにきつく指導したのだ。

リギルのように管理調教ゴリゴリならば、そんなことする必要はない。

教えている時間分無駄だし、アレンジが加わってトレーニング効果が落ちる可能性があるのを考えるとマイナスしかない。

だが、スピカは自主性を重んじているのだ。

だから自分が何をしているか、何が必要か、それを納得の上でやらなければ意味が無いのだ。

この管理主義全盛期のご時世だから、トレーナーもそのところが分かっていなかった。

ゴールドシップが実質的なサブトレーナーとしてトレーニングを見ることによって、足りないところを補って、チームは回り始めた。

ここで必要なのは更なるメンバーである。

ワンコ娘のサイレンススズカと、マックイーンの加入はゴールドシップの中では決まっているが、二人ともいつ入ってくれるかわからない。

それに、もう少しメンバーは増えてもいい。そう思っただけで校内をうろつき、新メンバーを探していた。

「タキオン、退学するって本当なの？」

「ああ、この前の選抜レース、申し込んでもいないのに強制参加させられたあれが最後通告だったらしい」

そんな風にふらふらしているところに、何やら物騒な話が飛び込んできた。

退学か……

何をやらかしたのか。サボタージュだろうか。

未来の学園でも、選抜レースをサボタージュする奴はしばしばいた。

理由はいろいろだが、大体は自信がなくなってしまう、そのせいで走る気力がなくなってしまう場合が多かった。

そんな状態になってしまったウマ娘達をフォローするのはイクノデイクタス教官だった。

自信がなくなっただけではなく、やる気がなくなっただけよく授業をバックレたゴールドシップも、教官にはよくお世話になっていた。

教官はやる気を出させるために、辛抱強く話を聞いたり、甘いものや小物といったプレゼントをあげたり、どこかに連れだしたり、本当



に親身になって対応していた。

教官のああいうところを、ゴールドシップは尊敬していた。だから、教官ほどの腕が無くても、ゴールドシップは教官の真似をしたいと思った。

ひとまず目の前の二人に視線を向ける。

一人は真っ黒な髪と綺麗な金色の目が特徴的なウマ娘だ。

そしてもう一人は栗毛に真っ赤な目、白衣を羽織っているのが特徴的なウマ娘だった。タキオンと呼ばれたのはこちらの子である。

見た瞬間、何かが引つ掛かった。あの特徴的な外見、そしてタキオン……

未来で見たような……しかしここで折れてしまうような子が、未来まで名前を残すだろうか。

少し考えをめぐらして……ゴールドシップは気づいた。

「あー！ アグネスタキオン博士だ!!」

叫ぶように声を上げて、思いつきり指をさしてしまった。

向こうもこちらに気づいたようで、こちらを振り向いた。

アグネスタキオン

未来では流浪の天才といわれたウマ娘である。

海外を巡りながら、ウマ娘の研究に生涯を費やした彼女は、ウマ娘生理学を確立した研究者である。

彼女の確立した生理学、スポーツ医学はウマ娘の治療に多大な影響を与え、彼女の研究成果反映後、トレセン学園で発生する故障は半分以上に、ケガによる引退者は数分の一になったというウマ娘の偉人である。

そんな彼女がトレセン学園に居た、という事実をゴールドシップは知らなかった。

どうしてその事実が広く知られていないか、まあおそらく答えは目の前の状況だろう。

彼女は退学処分になってしまったのだろう。だからこそ、記録としても大々的に公開されていなかったのだ。

なんにしろいまするべきことは一つだ。

ゴールドシップはおもむろにアグネスタキオンに近づく。

アグネスタキオンは面白そうにこちらを見ており、マンハツタンカフエはタキオンの後ろに隠れた。

「アグネスタキオン博士！」

「博士ではないが、なんだい？」

「サインをください！ここに、大きく！」

「へ？」

ゴールドシップはアグネスタキオンにペンをわたし、制服のど真ん中にアグネスタキオンにサインを求めた。

## 歴史の流れが変わるとき

「うほほーい！」

ゴールドシップはテンションマックスだった。

ゴールドシップは天才だ。

だから、全体的に他人を見下す傾向がある。しかし、自分がすごいと思った相手には敬意と好感度が振り切れる。好き好き大好き暴走船になってしまふ。座礁しても突っ走る、はた迷惑な黄金船と化す。

もちろんそんな相手は多くはない。その少ない一人に、アグネスタキオンがいた、というだけである。

ゴールドシップが知る未来では、ノーベル医学賞確定といわれたアグネスタキオンは、しかしその生涯は恵まれていなかった。

海外を放浪し、何度も迫害されながらも、その研究に生涯を費やした。

誰も恨まず、誰も憎まず、ただただウマ娘のために研究するその姿は、徐々に人々を惹きつけ、最後には偉大な成果を残した。

しかし、その放浪の時の無理がたたたり、アグネスタキオンは早くして亡くなってしまふ。

その遺言は「私はまだ、限界の先に、ウマ娘達の可能性の果てにたどり着けていない」だったという。

その姿を想像し、ゴールドシップは素直にすごいと思ったものである。

今回の逆行で、彼女のことは全く考慮に入れていなかった。

時代的には彼女の学生時代と大体あっているが、出会う事なんてないと思っていたからだ。

しかし、出会ってしまった。これは運命である。きっと運命の出会いである。

運命の出会いじゃないというならば、三女神の首根っこつかんでパイルドライバーかましてでも運命の出会いにしてやる。

ゴールドシップは誓った。運命を捻じ曲げてやると。

アグネスタキオンのサインを制服のと真ん中にでかでか書いて

もらって、ゴールドシップのテンションは壊れた。

邪神でも召喚しそうな怪しい踊りをしている。

その光景を、マンハッタンカフェとアグネスタキオンは、ただ見つめていた。

「それで、キミは何といったかい？」

「ゴールドシップです！ アグネスタキオン博士！」

「私は博士ではないのだがなあ…… で、用事はこれで全部かい？」

「いえ、博士を退学にしようとする勢力の殲滅を図りたいと思います！ ひとまず生徒会長と理事長と理事会の主要メンバーはケツから手をつ突っ込んで奥歯がたがた言わせてやりますよ！」

「物騒すぎる!?!」

どこからかとりだした釘バットとシルクハットを振り回すゴールドシップに、マンハッタンカフェが叫ぶ。

アグネスタキオンは苦笑しながら、ゴールドシップを諫める。

「出会ったばかりのキミがそこまでする必要もないよ。無駄な時間を使いたくないだけなんだから。海外でも研究はできるし」

「博士の時間はウマ娘にとって、いや、人類にとって、いや、宇宙全体にとって最も貴重なんですよ!?! 海外で新しく拠点を構える手間なんて取らせません！」

「いや、だから……」

「大丈夫です。証拠は残しません」

そういう問題ではないのだが…… ゴールドシップを見る二人は思った。

ゴールドシップの殺る気は十分だった。

ゴールドシップにとって、アグネスタキオンは絶対だ。

彼女を助けるためなら、トレセン学園を更地にしてもおつりがくると思っている。

ふんす、ふんすと鼻息荒くイレ込んでいるゴールドシップを見て、アグネスタキオンも困惑していた。

嫌われるのは慣れている。

嫌がられるのも慣れている。

その原因が自分にあることもわかっていいるから、相手が悪いと思っ  
ていない。

あまり興味がないから、ただ聞き流すだけである。

だが、こうやって好意全開で来られると非常に居心地が悪いのだ。

そう、あの子と一緒にいるときのよう……

「タキオン先輩!!」

大騒ぎしているところを訪れたのは、チームスピカのメンバーに  
なったダイワスカーレットだった。

スカレットに交われば赤くなる。

ダイワスカレットは優等生である。

成績はいつも一番。

誰からも頼られ、誰からの信頼にも応える。

そして正義感の強い彼女は不正や中傷を嫌った。

そんなスカレットが一番気になる相手が、アグネスタキオンだった。

アグネスタキオンは優しい人である、とスカレットは思っていた。

周りの評判は最悪であった。

怪しい薬でズルをして速く走っている。

ズルをして成績を上げている。

サボってばかりいる。

そんな話ばかりである。

確かに話を聞くと、授業やトレーニングはサボりがちなようである。

他人の悪口を言って自分の精神を安定させる性根自体がスカレットは気に食わないが、事実な部分もあるのでまだギリギリ彼女にも許せた。

しかし、ズルをしている、という部分については許せなかった。

なぜ、タキオンが他人の目を気にしない生活をしているのか。それは彼女を良く見ていれればすぐにわかった。

タキオンの足は繊細過ぎる。そして彼女はその治療と対応にすべてのリソースを割いているのだ。

鍼灸、食事療法、漢方、クールダウン、そういったものをすべて使いながら、ギリギリのところまで走っているのだ。

だから長時間走れない。その短い時間を最大効率でトレーニングしているのだ。

勉強だつてそうだ。彼女は本当に幅広い種類の本を読んでいる。図書室の貸し出しカードにタキオンの名前がない本を見つけてるのが

難しいぐらいだ。

ズルなんて何一つしていない。ただの憶測と嫉妬で、他人を悪く言うことが、スカーレットには許せなかった。

タキオンは優しい人である。

良く他のウマ娘達のトレーニングを見学している。

そうして、ケガをしたり、ケガをしそうな娘たちを積極的に助けていた。

故障した子が出ると、大体一番に駆けつけて、応急処置をするのが彼女であった。

タキオンに聞くと観察と実験でしかない、とひねくれたことを言うが、その対応が最善のものであるのは、スカーレットが見てて明らかだった。

助けられた子は何人もいたはずだ。救われた子も何人もいたはずだ。

なのに、それなのに、誰もタキオンの今を助けない。

それが悔しくて、苦しくて、悲しくて。

自分が何もできない無力をかみしめていた。

今日、タキオンが退学処分になる、という噂を聞いたスカーレットは、焦って教室を飛び出した。

そうして見つけたのが、アグネスタキオンとマンハッタンカフェ、そしてその周りでイレ込んでいるゴールドシップであった。

「タキオン先輩、退学になるって本当ですか？」

言い方があるだろう。スカーレットは自分の発言に自分でそう思った。

しかし、この胸の焦燥を抑えきれなかった。

「正確には退学勧告さ。従わなきゃ退学にするぞっていうだけだね。もつとも、退学にならないための条件はトレーナーと契約して、チームに所属すること、だ。実質退学命令と一緒にだね」

「私、抗議してきます!!」

明らかに噂に流された処分だ。

タキオンの学年には、多くはないとはいえまだチームに所属してい

ない者だっているはずだ。

成績だつて悪くないどころか上位に食い込むレベルだし、退学になる理由はないはずである。

公平を欠いた処分にスカレットの正義感は爆発した。

早速抗議に出向こうとするスカレット。

「いや、それには「よし、スカレット、よく言った!!」っ!？」

アグネスタキオンは止めようとした。

タキオンもスカレットを憎からず思っている。

そして、彼女が自分をかばうことで、最近若干立場を悪くしているのにも気づいていた。

捨てておいてくれ、そう言おうとしたところに割り込んできたのはゴールドシップだった。

どこからともなく取り出した目出し帽と釘バットをゴールドシップはスカレットに渡す。

完全に殴り込みに行く不審者だった。

さらにゴールドシップは目出し帽をマンハッタンカフェに被せ、釘バットを渡していた。

カフェは完全にとぼっちりだった。

カフェが助けてほしそうにタキオンを見ている。

「よし、いくぞー!」

「おー!」

「タキオン、助けて……!」

殺る気満々な二人に、巻き込まれたカフェという不審者集団が出来上がった。

訳の分からないゴールドシップはまだしも、さすがに慕ってくれる後輩と友人を犯罪に巻き込むのはタキオンも気が引けた。

予想外、想定外、規格外なゴールドシップをどうにか止めようとした。

「待ちたまえゴールドシップ君。私の退学に反対したいなら、するべきことは襲撃じゃないぞ」

「ほえ?」



「さつき言っただろう？ 退学勧告と。私の満足するトレーナーを連れてきたまえ。そんなのがいれば、契約して退学は回避できる」

「たしかに!!」

「キミら、バ鹿だろう?」

「そりやアグネスタキオン博士に比べたらさすがのゴルシちゃんもバ鹿ですよ」

気持ち悪いぐらい持ち上げてくるこいつはいったい何なのか。

タキオンも若干泣きたくなってきた。

カフェは既に泣き始めている。

スカーレットは鼻息荒くイレ込んでいた。

「なんにしろ、私の満足するトレーナーを連れてきたまえ。条件は、私のすることに文句を言わず、自由に実験を許す奴だ」

「大丈夫です、心当たりはありません!」

「ふふ、そんなの無理だろう? ってえ?」

「スカーレット。スピカに連れて行くぞ!!!」

「らじゃー!!!」

「なんだそのズダ袋は!? なんで近づいてくるんだ!? たすけてカ」

ぼすつとアグネスタキオンにズダ袋が被せられる。

藻掻くタキオンをゴールドシップとダイワスカーレットが担ぐと、そのまま運んで行った。

目出し帽をかぶって釘バットを持たされたカフェがその場に残された。

どうしていいのか、彼女には全く分からなかった。

## アグネスタキオンのスピカ加入

「という事でスピカに新メンバー、アグネスタキオン博士が加わりました」

「わーい!!」

「え?」

「え?」

「え?」

上からゴールドシップ、ダイワスカーレット、沖野トレーナー、アグネスタキオン、ウオツカの発言である。

「ちよつと待ってくれ、なんで新メンバー本人が疑問に思っているんだ?」

「ちよつと待ってくれ、なんでトレーナーが疑問に思っているんだ?」  
「意味が分からない、誰か助けて……」

トレーナーは意味が分からなかった。

チームルームに来たら、知らない新メンバーが増えていた。

なんだ、トレーナーも知らない新メンバーって。

トレーナーは困惑した。

アグネスタキオンは意味が分からなかった。

ズダ袋に入れられたと思ったらチームに所属していた。

誰か説明してほしかった。

だがトレーナーすらこの状況を理解していなかった。

ゴールドシップからちゃんとした説明を聞けるとは思えない。

アグネスタキオンは困惑した。

ウオツカは意味が分からなかった。

新しいメンバーが増える、というのはいい。喜ばしいことだ。

ただ、その事実をトレーナーも新メンバーも理解していない、というのはどういうことなのか。

ウオツカは困惑した。

一番早く立ち直ったのは、付き合いが一番長く、ゴルシ耐性がついてきたトレーナーだった。

「あー、すまないが、なんで俺の許可なしにチームメンバーに加えられたんだ？」

「そりゃ、ゴルシちゃんがトレーナーのハンコを借りて、トレーナーのサインを代わりに書いてあげたからだよ」

「なんで本人の許可なしにチームメンバーに加えられたんだ？」

「そりゃ、ゴルシちゃんがタキオン博士のサインをまねして代わりに書いてあげたからだよ」

「完全な偽造文書じゃねーか！」

「大丈夫、万が一筆跡鑑定されてもばれねーから♪」

「大丈夫じゃねー!!」

何一つ大丈夫な要素がない。トレーナーは頭を抱えた。

だが、書類が受理されてしまったならしょうがない。

トレーナーとして、新メンバーに対して確認しよう、と向き直った。

「しょうがない、ひとまず確認したいことがいくつかある。アグネスタキオン、いいかな？」

「まあ、少しは付き合っただけよ。時間が惜しいが、この混乱した状況を収めるのが先だ」

「そうだな。まず、デビューするつもりはあるのか？」

「したいとは思っている。だが、その時期も、そのレースも自分で決める」

「手伝わなくて大丈夫なのか？」

「問題ない。口を出すな」

「わかった、困ったら言えよ」

「……」

「次にトレーニングだが、どうする？」

「必要なトレーニングを必要なだけする。キミの助力は必要ない」

「わかった、困ったら言えよ」

「……トレーナー君」

「なんだ？」

「仕事したらどうだ？」

「お前さんが要らないって言ったんだらう？ それに何をしろってい

うんだ」

「……たしかに」

「籍は作ってやる。困ったら言え。お前さんは頭がいいみたいだからな。いわれてから俺が動いても遅くはないだろう?」

「……」

完全放置である。いいのだろうか、とタキオンは思うが、それが自分が望んでいたのだから、問題ないかと気を取り直す。

「ちなみに」

「ちなみに?」

「あっちのイレ込んで二人を止めるのは、トレーナーの仕事じゃない」

「えっ?」

トレーナーが指さした先には、ゴールドシップとダイワスカーレットがいた。

とても良い笑顔で、手をワキワキさせていた。

「だから、対応は頑張れよ」

「ちよつとまってくれ!? それがトレーナー君の一番重要な仕事じゃないのかい!?!」

「しらん!」

「そんな薄情な!!」

ゴールドシップとダイワスカーレット、二人は満面の笑みを浮かべた。

とてもきれいな、10人居たら10人見惚れそうな笑顔である。

アグネスタキオンも笑みを浮かべた。

とてもひきつった笑顔だった。

「おいトレーナー、本当にいいのか? タキオン先輩、悪いうわさがあるんじゃないか」

そんなまつまりそうな瞬間、言っではいけないことを言ってしまったのがウオツカだった。

ウオツカだって悪いウマ娘ではない。

むしろ、曲がったことや陰口を嫌う、一本気な性格である。

ふだんのウオツカならばこんなことを口に出すことはなかっただろう。

しかし、何が起きてるかわからず、自分だけ置いて行かれている、と彼女は感じてしまった。

これが、ゴールドシップとトレーナーだけだったら彼女もあとで聞けばいい、と鷹揚に構えることができただろう。

だが、よく知るライバルであるダイワスカーレットが熟知り顔でいるのに、自分だけが全く何もわからない、という状況が彼女に強烈な疎外感を与えた。

言ったあと、しまったとウオツカは思った。

その発言に対する反応は四者四様だった。

タキオンはその通りだといわんばかりに鷹揚にうなずいた。まったく気にしてない様子だった。気を悪くするどころか、どこか満足そうだった。

トレーナーはばつが悪そうにした。ウオツカの疎外感を察したのだろう。

スカーレットは怒りを爆発させようとして顔を赤くしていた。陰口や噂で他人を予断することをスカーレットは嫌う。これも予想通りの反応であった。

ゴールドシップは…… 表情が無になっていた。

無である。能面のような表情だ。

普段おかしな顔ばかりしているからわかりにくいが、寒気がするほど整った美しい顔だ。

それがただ、何の表情も見せずにこちらを見ている。まるで人形の様だ。

そして次の瞬間、ウオツカは殺気を感じた。

そしてウオツカは気づいた。あれは、何も表情がないのではない。怒りの表情だ。深すぎる怒りに、表情が追い付いていない顔だ。

ちびりそうな殺気を感じたウオツカはゴールドシップに土下座した。しないと死ぬ、と思ったからだ。

「ウオツカ」

「はいい!？」

「頭下げる相手が、違うだろう?」

「ごめんなさいタキオン先輩!」

「いや、その通りだから何も気にしていないよ。ゴールドシップ君も、後輩虐めは感心しないな」

「……すいませんタキオン博士!」

タキオンがたしなめると、ゴールドシップはウオツカに土下座した。変わり身が早すぎる。

土下座リレーが完成し、タキオンも、トレーナーも困惑した。

## アグネスタキオンの日常

チームスピカに入って、アグネスタキオンの実験は飛躍的に進み始めた。

今までの実験のモルモットは概ね自分、時々カフェ、ぐらいだった。カフェに薬を飲んでもらうといっても、基本的に嫌がるので大変だった。

カフェはコーヒー狂いなので、タキオンは自分で自家焙煎したコーヒーで釣っていたが、短期間にそう何回も釣れるものではない。

それが今では予算や人員が組まれるようになり、さらに正式な臨床実験なども行われるようになった。

かつてタキオンは何を飲ませているか一切説明をしなかった。時間をもつたいたいと思っただからだ。

しかしゴールドシップが分かりやすい説明文を作り、ダイワスカレットが丁寧に説明をして回ったら、志願者が一気に増えた。

タキオンの研究はウマムスコンドリアの実在と効果を解明することで、より体を丈夫にして怪我をしにくいウマ娘を作るものだ。

彼女は薬と知っているが、まだ学生で薬剤師資格もない彼女が使える物は基本食品ばかりだ。

つまり単にクソまずい飲み物や食べ物でしかない。

そしてその効果は疲労回復、骨や筋の発育を促したり修復を促したりするものである。

タキオンの雰囲気と説明不足、モルモットと表現するコミュニケーション障害がマッドな雰囲気醸し出していたがその内実はなんてことはない。

栄養豊富で体にいい食べ物でしかなかった。クソまずいが。

トレセン学園のウマ娘達は怪我を一番恐れている。

怪我をしにくくなる食べ物、と言われて嫌なウマ娘は一人もいない。

その成分の意味や材料まで公開されると、クソまずいタキオン製のどろどろした「お薬」ではない、美味しいおかずやスイーツも大量に出回り始めた。

学園に所属するウマ娘は料理が得意な子も少なくないのだ。

ゴールドシップとダイワスカーレットの大々的なマーケティングにより、タキオンの評判も怪しいマッドで不真面目なウマ娘、からウマ娘の将来と病弱な自分の体を思いやる真面目なウマ娘、に変化した。タキオン自身は困惑した。

とはいえ、学園内に出回っているレシピは効果が確実に変わったと確認できたものだけだ。

追従実験としての意味はあり、大事であるが、新しいものはどうしても挑戦的な実験になる。

そんな実験を引き受けるのは、タキオンはお願いしていないにもかかわらず、ゴールドシップとダイワスカーレットの二人だった。

スピカのメンバーがトレーニングをしている。

アグネスタキオンは今日も見学だ。まだ膝の調子が良くない。

ただ、チームトレーニングの様子は毎日見に来ていた。

目の前を走るゴールドシップは目が輝いていた。文字通り、目から凄いい光を出して輝いているのだ。まるでサーチライトの様だ。

真昼間の太陽の下なのに、目から光が出ているのが分かるぐらいの凄いい光量だった。

ダイワスカーレットはその真っ赤な髪が、真っ赤に発光していた。ついでに拳も真っ赤に発光していた。

全体的に赤い光が出ていて、赤い謎のオーラのように全身を覆っている。スーパーウマ娘とかになってそうな外見だった。

二人とも快調のようで、その足取りはしっかりしていた。

ウオツカはタキオンを見ている。

トレーナーもタキオンを見ている。

トレーナーは約束通り、トレーニングについても、レースプランについても何も口を出さない。

それはありがたかった。

ただ、二人の目は言っていた。

慕う二人をこうして、良心は痛まないのか、と。



タキオンは言い訳したかった。

自分は何もしていない、と。

確かにチーム加入当初、タキオンは一度だけ二人を実験台にした。ちよつと強めの、おそらく全身が黄緑色に輝く薬を二人にのませた。

この光は、ウラムスコンドリアが過剰なエネルギーを受け取った時に、そのあふれるエネルギーを光に変えて放出する現象である。

異様ではあるが大した意味があるわけではない。

タキオンはよくモルモット君と、呼ぶ相手を光らせた。

これで実験に協力してくれる相手か、ふるいにかけているのだ。

やり方が完全にコミュニケーションのそれであった。

そんなことがあつた後、二人はなぜかテンションを上げた。

光るなんてすごい、と感心し、さらなる実験を求めた。

無垢な善意を向けられて、疑念と猜疑心のみだつたタキオンは自分の行いを恥じた。

それ以来、タキオンは二人にそういつた光つたり、へんなことが起きそうなものは飲ませていない。

ただの栄養剤みたいなものしか二人には渡していなかった。

しかし二人は光り続けた。

なんでだよ、と一言言いたいのはタキオンだった。

どうやら二人とも、自主的に薬を作り、自主的に飲んでいるらしい。

そのデータをうれしそうにタキオンに回すようになって、タキオンはそれに気づいた。

そもそも、最近は二人を実験台にする必要性がないのだ。

認められたタキオンの研究に対し、予算も、人員も割かれるようになって、正式な臨床実験もし始めている。

いくつもの画期的な発見もされている。

最近配っているものは安全性が臨床実験で証明されたものだけである。

二人に渡しているのも、そういつた種類のものでしかない。

なのに二人の物理的な輝きはどんどん増していくし、最近はウマ娘

格闘技や子供向けのおもちゃとして、輝く成分が入ったものを流通させ始めた。

予算は増えた。名声も増えた。胃薬の量も増えた。

レースで使う者も出始めたが、目が眩んだエアグルーヴ副会長が激怒したことで禁止され、光量規制のルールが制定された。

なんだ光量規制って。ウマ娘は光るものじゃないんだぞ。

だが、かつこいいという理由でトレーニング中に使うやつが時々いる。

最近では夜になるとトレーニング場の夜景がきれいである。そんな中でも二人の輝きは群を抜いていた。

「不沈艦、ばつびよおおおおお!!!」

ゴールドシップが目を光らせながら、タイヤのついた縄を振り回し始めた。

5tもある、牽引トレーニング用のタイヤである。

かなり慣れた、パワーのあるウマ娘でないと引くことすらできないそれをゴールドシップは振り回していた。

「私の右手が真っ赤に燃える！一番をつかめと轟き叫ぶ!!!」

その奥では、ダイワスカーレットが瓦割りをしていた。

10枚重ねられた瓦をやすやすと割り、地面にクレーターを作り出していた。

訳が分からない。光る成分は、単にウマムスコンドリアのエネルギーを溢れさせて発光するだけである。

身体能力には一切影響しない。

おそらくプラシーボ効果かなにかだろう。限界の身体能力を發揮しているに違いない。

トレーナーとウオツカの視線が厳しくなる。

タキオンは言いたかった。私は関係ないと。

しかし根本的にコミュ障な彼女は、はた目には不敵な笑みを、実際は引きつった笑みを浮かべることしかできなかった。

## 閑話 ゴールドシップとマックイーンのお出かけ

ゴールドシップとメジロマックイーンは、毎週末土曜日、二人で出かける。

ゴールドシップがメジロマックイーンに、お詫びとしてスイーツを奢るためだ。

最初に出会った日にゴールドシップがしてしまったことは、翌日にお詫びとしてスイーツを奢ったことで無事和解した二人。

だが、その後もゴールドシップのメジロマックイーン構いは続いた。

最初のように、授業や行事、トレーニングに遅刻するようなことはしなくなったが、それ以外がひどい。

当たり前のようにマックイーンのベッドにもぐりこんだと思っただらベッドから鳩を出したり。

当たり前のように食堂で隣に座ったと思っただらデザートプリンを最高級ウニにすり替えて、醤油を引けばプリンになるから、と言いはじめたり。

当たり前のように一緒にお風呂に入ってきて脱出マジックとか言い始めたと思ったら、お互いの尻尾を結んでほどけなくなったり。

やったことは完全にストーカーだった。

ゴールドシップにも言い分はあった。

まずマックイーンが可愛すぎるのが悪い。

これでも授業中や昼食時、トレーニング時間は邪魔してないから我慢している方だ。

何の言い訳にもなっていなかった。

当然マックイーンは切れた。

マックイーンが怒るたびにゴールドシップはスイーツを奢ることとで和解をしてきた。

それが慣習化し、毎週土曜日は「ゴールドシップがメジロマックイーンにスイーツを奢る日」として定着した。

その状況にゴールドシップはこういった。

「反省も後悔もしていない。もつとやりたい」  
マックイーンは泣きたくなかった。

このスイーツだけはゴールドシップは毎回本気で選んでいた。  
一度ふざけて茶碗蒸しをプリンと言い張って食べさせたらマック  
イーンがガチギレした。

ヒトは本当に怒った時、表情がなくなるというのをあの時はじめて  
知った。

一週間、部屋に入れてもらえずに廊下で寝ることになった。  
もう二度とスイーツでふざけることはしないと心に誓った。

いや、もう一度プリンをウニにすり替えたが。

この時も三日ほど部屋に入れてもらえなかった。

今回食べに来たのは某有名ホテルのパンケーキである。

某政治家も好むというそれは季節ごとにとツピングが変わるが、  
ゴールドシップ達が行った時はイチゴがメインだった。

マックイーンは甘いものなら何でも好きだが、特に好きなのはク  
リームとイチゴとふわふわしたものだ。

だからマックイーンが選ぶケーキはショートケーキが鉄板である。  
逆に苦いものは苦手で、チョコレートはあまり得意ではないよう  
だ。

チョコレートケーキが学食で出たときは少しションボリしていた。  
柔らかく、しかししっかりと焼かれたパンケーキに、たつぷりのク  
リーム。

イチゴのソースにイチゴのジャムに生のイチゴとイチゴのコラボ  
レーションで飾られたそれは、さすが有名ホテルといわんばかりのキ  
レイな盛り付けであった。

それを一口ずつ、味わって食べるマックイーン。  
すさまじく幸せそうである。

ゴールドシップも食べながら、同時にマックイーンの写真を撮って  
いた。

フラッシュは使わない。目が眩んだら、せっかくスイーツを楽しんでいるマックイーン的笑顔が一瞬曇るからだ。

目を発光させ、手のひらも発光させて影ができないようにライティングしながら、マックイーンの最上の笑顔を写真に写し込んでいく。タキオン博士もいいものを発明してくれた。これで好きなタイミングで好きにライティングができる。

ゴールドシップはアグネスタキオンに感謝した。

綺麗に切ったパンケーキを口に運ぼうとする真剣な表情は、まるで芸術のように美しく。

クリームが口に入る瞬間のその口元は、なぜか極めて官能的で。

美味しそうに頬張る姿は、とても可愛らしく。

マックイーンのあらゆる表情を、ゴールドシップは撮影し続けた。

これだけでゴールドシップはお腹いっぱいである。

ゴールドシップは結局自分のパンケーキは一口しか口をつけず、残りはマックイーンにあげることとなった。

ちなみにこうやって撮影された写真は、ゴールドシップからメジロマックイーンファンクラブに流される。

ファンクラブからは、お金とともにスイーツや名所の情報がゴールドシップに回ってくる。

そのお金と情報をもってゴールドシップはマックイーンを毎週土曜日連れ出す。

完全な循環がここに成立していた。

### 第三章 ワンコ娘スズカと天皇賞（秋） サイレンススズカの東京優駿

競バのセオリーは序盤抑えて足を溜め、直線で追い抜くことだ。

逃げはセオリーではない。

これはなぜか。

逃げが一番いいコースを走れる。

踏み荒らされていない綺麗な芝。

一番内側の最短コース。

これだけ考えたら逃げが一番よさそうにも思える。

しかしそんなことはない。逃げはやはり弱者の戦法なのだ。

競バは競走であり、タイムトライアルではない。

どれだけタイムが遅くても、1番でゴールに飛び込んだものが勝者だ。

だからこそ駆け引きが非常に大事になる。

逃げというのは先頭を走らなければならない。

だから、ペース配分も展開も自分で考えて作っていく必要がある。

後ろの馬は前の馬の展開をみて、自分に適した方法をとるだけでよい。

この差は非常に大きい。考える労力や調整する労力が非常に多いのだ。これが非常にスタミナを削る。

空気抵抗の差もある。

スリッパストリームしかり、他バの後ろにつけば空気抵抗が少なくスタミナの消費を抑えられる。

一番抵抗が大きくスタミナを消費するのは先頭なのだ。

そういった不利はコースの有利を帳消しして余りあるのだ。

正確なタイムでラップを刻み続けられる精神力と時間感覚でもあれば別だが、そうでもない限り逃げは定跡となりえない。

残念ながらサイレンススズカはかなり感覚派だ。

だから、そんな正確なラップを刻むなんてサイボーグの様な逃げは

できない。

そしてその末脚はすさまじい。

だからこそ、後からの競バをして、直線で差す、というトレーナーの指示は常道としては非常に正しいのだ。

だからこそ、抑えて最後で差す、そんなレース展開をする予定だった。

スタート後、サイレンススズカは3番手につけてしまう。

本来はもつと後、7, 8番手ぐらいで行く予定だったが、どうしても気が前に急いてしまう。

前に行きたい。誰もいない先頭の景色を見たい。

レースに勝ちたい。トレーナーさんの指示を守らなきゃ。

二つの意識が衝突する。

そのままふらふらと3番手を何となく維持したまま、サイレンススズカは最終コーナーに入った。

そこからはもう、いいところなしである。

前は開かない。

脚はもう残っていない。

後ろからすさまじい追い上げを受ける。

終わってみればなんてことはない凡走。

サイレンススズカは9着で東京優駿を終えた。

「……」

「エアグルーヴ。サイレンススズカを移籍させるわ」

「トレーナー。スズカが要らない、という事ですか」

「もちろん違うわ」

「ではなぜ……」

「私の力不足ね」

東条ハナは自分の実力が良くわかってる。

大量のデータを収集、蓄積し、それに基づき最適を計算する。

そしてそこに、限りなく近くなるようにウマ娘達に指導する。

その方法が間違っているとも思わないし、それにより実績を出して

きた。

シンボリルドルフやマルゼンスキーをはじめ、目の前のエアグルーヴも、自分でなければここまで育てられなかっただろうという自負がある。

だが、それは育てる相手を厳選して来たからである。

誰でもいいわけではない。いや、自分に合ったウマ娘はすさまじく少ない。

東条ハナが求めたウマ娘は、東条ハナのいう事を理解し、それに従うウマ娘だ。

それ以外の素質も素養も求めない。力不足はトレーニングとデータ、レース選択で覆す。

だが、言ったことを理解し、言ったとおりにしてもらえなければ成果を出せないのだ。

その指導法の利点も欠点も東条ハナはわかっていた。だからこそ、素直で賢く真面目な子しか受け入れなかったのだ。

そういうウマ娘は協調性が高く学内組織でも受けがいい。だから、リギルには寮長や生徒会のメンバーが多いのだ。

サイレンススズカは、そういう子ではなかった。

そんなの最初から分かっていたことだ。

素質、特にスピードが素晴らしく、スタミナもある。一方で群れるのが下手で、トレーナーに全くアピールできていなかったのだ。

そんな彼女を心配し、また、その素質にほれ込んだエアグルーヴが、リギルに彼女を推薦したのが始まりだ。

断るべきだったのはわかっていた。

東条ハナが求めるのは従順さと頭の良さである。

素質なんてなくてもいい。いくらでも補強してやる、というのが自分のスタンスだった。

だがその、どこまでも駆けていきそうなスピードに目を眩ませて信条を曲げてしまったのが失敗だったのだ。

安請け合いましたことで、サイレンススズカとエアグルーヴ、二人の心に傷を負わせてしまうことになってしまったのは心苦しい。



本当は最後まで面倒を見てやるべきなのではないかとも思う。だが、トレーナーとウマ娘は二人三脚なのだ。合わない相手といつまでも組むのがいいわけがない。今回のダービー、完全なプランを組んだが、結果はさんさんだったのがそれを物語っていた。

「それで、スズカをどこに移籍させるんですか？」

「チームスピカよ」

「スピカ!?! トレーナーはスズカをバックに回すっていうんですか!?!」

トレセン学園は、皆が皆レースに全力勝負するわけではない。

学業に専念するものも少数いるし、サポートに回る子も少なくない。

また、レース場の整備のための園芸や、看護学なんかを学んで体調管理をする整備側に回る者もいる。

そういったレースの裏方をバックといった。

ウマ娘の本能との関係上、そういった子たちも一応レースには出るのが、自分の専門に活かすため、といった風合いが強く、未勝利やせいぜい1勝しておしまい、というのが大半だ。

バックの子たちが劣るわけではない。そういう子たちに学園もトウインクルレースも、ドリームトロフィーも支えられているのだから、単なる役割分担の話だ。

だが、スズカは走るのが好きな子だ。裏方向きではなかった。

スピカというと、バックのチームとして最近有名になってきたところだ。

もともとはレース専門だったはずだが、いつの間にかメンバーを総入れ替えしてチームリーダーをゴールドシップに、そしてメンバーにアグネスタキオンを迎えて色がガラッと変わった。

新生スピカになってから半年ほどだがその実績はすさまじい。

予後不良級の怪我を幾人も癒す治療法と理論を発表し、現に再起不能と思われた数人がすでに現役復帰している。

アグネスタキオンを追い出そうとしていた頑迷な連中を逆に追い出すことにも成功し、生徒会の仕事もずいぶん楽になった。

おかしな発光薬をつくったりと時々暴走するが、全体として見ればその実績は学園一といっても過言ではなかった。

だが、レース実績はメンバー入れ替え前も後もさっぱりである。

アグネスタキオンは相変わらずレースどころかトレーニングもしていない。

ゴールドシップもトレーニング場で光ったり将棋をしたりタイヤを振り回したり、碌なトレーニングをしていない。

ダイワスカーレットとウオツカはまじめにトレーニングを重ねてるが、デビューまでは時間がある。

せいぜいよく見て新興チーム。バック専門のチームというのが大方の見方だった。

「そんなことないわ。私は自分が信用できない相手に大事なウマ娘を預けたりはしない」

「でももつと実績のあるところがあるではないですか！ リゲルとか、デネブとか！ どうして!?!」

「そこよりもスピカが上だからよ」

即断したトレーナーにエアグルーヴは黙る。

リゲルから移籍する、という事は今までも2、3例あった。

どうしても合わない相手はいるし、合わない時には無理せず合っていないところへとちゃんと移籍させるのが東条トレーナーだった。

エアグルーヴが挙げたチームはどちらも実績も信頼もある古参チームであり、現に移籍して実績を上げた子が行ったところだった。

エアグルーヴは東条トレーナーの言ったことは理解できない。

理解できないが東条トレーナーが自信をもって上だと断言したという事は理解できた。

ならばこれ以上聞くことはない。

エアグルーヴは東条トレーナーを信用していた。だからその判断に異議を唱えることも、理由を聞くこともしなかった。

「ちなみにエアグルーヴ」

「なんですか？」

「あなたのトレーニングプラン、変えるわ。このままじゃ天皇賞秋、あなたはサイレンススズカの影すら踏めない可能性があるわ」

「!?」

トレーナーが意味の分からないことを言い出してエアグルーヴは余計混乱した。

スズカには菊花賞は長すぎる。秋の大舞台は天皇賞秋に照準を合わせてくることは予想していた。

天皇賞秋はエアグルーヴも狙っていたところだった。

だが、慢心でも何でもなく、エアグルーヴはスズカに負ける気はしなかった。トレーナーだってそう考えていたはずだ。

「あの子が私に、この女帝に勝つ可能性があるというんですか？」

「あのチームに行つて、スズカがどう化けるかはわからないわ。でも、最大限見積もれば、そうなるでしょうね」

「そうですか…… ふふふふふ」

推測のように話しているが、東条トレーナーは確度の低いことは言わない。

だから、現実とは言わないまでも、東条トレーナーにとってはまず起こる未来を話しているのだろう。

エアグルーヴの体が震える。恐怖でも、悲しみでもない。

これは、歓喜だ。

あのウマ娘というよりワンコみたいなスズカが、約半年後には自分の最大の壁となるというのだ。

あのスピード、あの末脚を持った彼女に惚れ込んでいた自分は、これを待っていたのだ。喜ばずして何と言おう。

そうならば、自分は喜んで彼女を送り出す。そのうえで完膚なきまでに叩き潰す。

エアグルーヴの迷いは完全に吹っ切れた。

「もちろん、わかっているわよね」

「チームリギルは、そして女帝は最強です。勝ちます」

「トレーニング、かなりきついわよ」

「勝つためならば」

サイレンススズカよ。かかってこい。女帝は、すべてねじ伏せてやる。

エアグルーヴの興奮はしばらくおさまりそうになかった。

## 偶然で必然な出会い

サイレンススズカはチームリギルと契約解除になった。

そして東条トレーナーから紹介されたチームはスピカというところである。

スズカの知らないチームだ。

紹介されたからには、加入はできるだろうが、自分が行っているのだろうか。

そもそも指示された内容を満足に実行できない自分に意味はあるのだろうか。

スズカは落ち込んだ。

一人きりになれる誰も知らない場所で、いろいろ考えたかった。

スズカは学園裏の森へと消えていった。

「スズカ、リギル解約後にそっちに紹介したんだから、ちゃんと面倒見なさいよ」

「え？」

「え？」

夕方、東条トレーナーが沖野トレーナーにスズカのことを連絡に行って初めて、お互いの間のディスコミュニケーションが発覚した。

東条トレーナーはてっきりスピカとスズカの間の移籍の下交渉は済んでいて、すでに移籍を誘っているものとはかり思っていた。

なんせ目の前の男はウマ娘を狂愛している。見込んだウマ娘に付きまとい過ぎて警察沙汰になりかけたことも何度もある。

そんな彼がサイレンススズカを見込んだのはすでに半年近く前だ。

その間、彼がスズカに何を吹き込もうが一切妨害しないで置いたのだ。

それなりに話はできているだろうと勝手に思っていた。

沖野トレーナーはてっきり今年いっぱいにはスズカはリギルにいるとばかり思っていた。

スズカは晩成傾向が強い。秋に本格化する可能性を考えると、秋一

杯は試行錯誤すると思ひ込んでいた。

そもそも目の前の彼女は冷徹を装っているがかなり情に深い。手放す決意はなかなかできないと思つていたので。

最近はゴールドシップとアグネスタキオンの対応でいっぱいいっぱいだったのもある。

そろそろ落ち着いてきたからアクションを起こそうと思つていたところだった。

付き合いは長い二人は、だからこそお互いがどう動きそうか予想し、それに基づいて動いてしまった。

そして今のやり取りだけで、失敗を悟った。

「スズカ、うちには来てないぞ?」

「契約解除は今朝だから、もう来ててもいいはずなのに」

「スズカの仲の良いメンバーは?」

「エアグルーヴは合宿の下見に行ってるから明後日まで帰ってこないわ」

「同室は…… あいつ一人部屋だよな……」

「ひとまずめばしい所に行ってみるわ」

「俺もまわってみる」

二人は手分けしてスズカを探し始めた。

スペシャルウィークは森に迷い込んでいた。

トレセン学園への編入のため故郷から飛行機で東京まで来て、そこから電車に乗って学園の近くまで来たのまでは良かった。

しかしそこから迷子の始まりだった。

間違つて少し遠い府中駅で降りてしまい、駅員さんに教えてもらったように道をまっすぐ進んでいた。

しかし、故郷では分かれ道がない道しか基本見たことが無かった彼女には府中の入り組んだ道は全く意味が分からなかった。

神社に迷い込み、さらに直進して森に出て、森の中を現在進んでいた。

何か違うような気がするとは思っていたが、愚直にまっすぐ進み続

けるスペシャルウィーク。

最悪根性でどうにかなるし、森の中なら食べ物にも困らない、という謎の決意を胸に進んでいた。

草木をかき分け、道無きに道を踏破し、そうして進んだ先、やっとひらけたところに出たスペシャルウィークは、一人泣いている少女を見つけた。

「あ、あのー… どうしましたか!?!」

ぽてぽてと駆け寄るスペシャルウィーク。

そのまま少女の目の前にしゃがみ込む。

赤みの強い栗毛のウマ娘だ。その泣く姿は非常に美しく、芸術のようで、スペシャルウィークは息を呑んだ。

「ううう……」

「大丈夫ですか!?! お腹空いたんですか!?! 良かったらおにぎり食べますか!?!」

うづくまつて泣いている少女に対して、スペシャルウィークはお母ちゃん特製、おにぎりをリュックサックから取り出し前に出す。

少女は一目おにぎりを見て、ぽかん、とスペシャルウィークを見返した。お腹が空いているわけではなさそうだ。

「も、もしかして食べ過ぎてお腹が痛いとか? お薬もありますよー!」カバンから胃腸薬を取り出す。お母ちゃんが用意してくれた市販薬だ。

今まで風邪を引いたこともおなかを壊したこともない優良児のスペシャルウィークだが、お母ちゃんが心配して入れてくれたのだ。なお、先の話になるがこの薬が使われることはなかった。

今まで泣いていた少女は困惑した様にスペシャルウィークを見る。泣いてた姿も絵画の様だったが、こうやって見返されるとかわいらしさの方が先に来る気がする。

ウマ娘も、同年代の子も見たことが無かったスペシャルウィークは、同年代らしいウマ娘を見てテンションが上がり切っている。

同時に泣いている目の前の子をどうにかしてあげたいと、少ない経験をもとに頭をフル回転させていた。

そうして出した結論は……

「これ、どうぞ！ 空港で買ったんですよー！」

カバンからニンジンのはちみつ漬けを取り出し、ふたを開けて少女へと差し出した。

少女は困惑した。

「あの、これ……」

「苦しいときも、悲しい時も、つらい時もありますが、甘いものを食べれば少しだけ前に気持ちが向けられると思うんです！」

「……」

「あの……？」

「ふふ、心配してくれてありがとう。一つだけ頂くわ。えっと……」

「スペシャルウィークです！」

「サイレンススズカよ」

スズカは差し出されたカップから、一本だけニンジンを取り出し口に運んだ。

暴虐的なぐらいな甘さが口いっぱい広がる。

甘い。すごく甘い。

気持ちはまだ晴れない。泣きたい気持ちはまだ残ってる。

でも、立ち上がって学園に戻るぐらいの元気は、顔を前に向けられるぐらいの気は出た気がした。

一本、ニンジンを食べ切ると、おもむろにスペシャルウィークは口を開いた。

「すみません、スズカさんはウマ娘さんで、トレセン学園の生徒さんですよね？」

「そうだけど？」

「一つお願いがありましたー！」

「お願い？」

「トレセン学園の場所、どこでしょう…… 道をまっすぐ進んだら、つて言われてきたんですが、神社に入って、森に入ってここにきてしまったんです……」

どこをどう進んだら駅からここにたどり着くのだろうか。



非常に不思議である。

ただ、髪の毛に葉っぱや枝がついているし、森の中を進んできたというのは間違いないだろう。

スズカは立ち上がると、スペシャルウィークの髪についた葉っぱや枝を丁寧に取った。

「案内するわ。私も学園に戻るところだったから」

「ありがとうございますー！」

今の時期にトレセン学園のことをあまり知らずに来たスペシャルウィークはおそらく転入生だろう。

情けない姿しか見せてない自覚はあるが、先輩として、学園に連れて行ってあげるぐらいはできる。

スズカはスペシャルウィークの手を取る。

ぎゅっと握り返された手はひどく温かく、迷子の様な自分に少しだけ心強さを与えてくれた。

## スピカ加入歓迎会

失踪事件翌日の放課後、スズカはスピカの部室を訪れようとしていた。

学園に戻ってきたスズカを待っていたのはトレーナー二人の謝罪だった。

二人の間のホウレンソウの欠如と、スピカはスズカを待っているといわれたことで、スズカの気持ちも少しだけ落ち着いた。

だが、チームスピカにすぐに行く気持ちにはならなかった。単純に新しい人と会うのが怖かっただけである。

スズカは人見知りが激しい。

なんせ学園で雑談する相手はエアグルーヴ以外に多くない。クラストメイトとも話すことは多くなかった。

東条トレーナーとすら必要な会話以外あまりしなかった。

新しい人間関係を築くというのがスズカにはハードルが高かった。おそらく誰も何もしなければ、一週間ぐらいはスズカはスピカの部室に来ず、エアグルーヴに引きずられて連れ出されることになっただろう。

そんな彼女が翌日にスピカの部室に来たのは、偏にスペシャルウィークに引きずられてきたからである。

「スズカさん、スピカの部室に行きましょう！」

スズカへの説明を横で聞いていて、さらに寮でも同室になったスペシャルウィークは、放課後当然のように高等部のスズカの教室に乗り込んできて、当然のようにスピカの部室へ同行した。

スペシャルウィークのコミュニケーション能力が高いわけではない。

同年代の人もウマ娘もない環境で育ち、そもそも他人すら少ない北海道のへき地で育った彼女のコミュニケーション能力は実は非常に低い。

現に編入当日の挨拶では早口で誰にも聞き取れない挨拶をしたうえで転ぶという醜態をさらしている。

だが、人を疑わない人懐っこさと、迷ったら前に進む行動力、そして問題があっても根性があればどうにかなるという前向きさが彼女にはあった。

そうしてあれよあれよという間にスペシャルウィークに連れ出されたスズカは、しかし玄関前で不審者に囲まれた。

サングラスとマスクをした、不審者5人組である。

二人はビビった。

「サイレンススズカとスペシャルウィークだな」

「え、ええ、そうですが……」

「スカーレット、ウオツカ、マックイーン、やっしておしまい！」

「おー！」

「おー！」

「なんでチームメンバーでないわたくしまで巻き込まれますの!? あとタキオン先輩も仕事してください!」

「馬鹿野郎! タキオン博士はポキオン博士と異名をとるぐらい病弱なんだ! 箸より重いものを持たせちゃいけないんだぞ!」

「ゴールドシップ君、なんだいその不名誉な異名は。あとさすがにスプーンぐらいは持てる」

「名前を言ったら変装の意味ないですよね!」

スペシャルウィークは思わずツツコミを入れた。

しかしそれが隙を生んだ。2人はズダ袋をかぶせられ、そのまま5人に担がれてスピカの部室へと連れていかれるのであった。

「それでは、サイレンススズカとスペシャルウィークの加入を祝して一曲『winning the soul』」

部室に連れていかれた二人は、そのまま椅子に座らされた後、ズダ袋を脱がされた。

目の前には料理が

向かい側にはスピカのメンバーが

隅にはトレーナーが、

逆の隅にはどうしていいかわからないマックイーンがいる。

スズカは困惑した。訳が分からなかった。

どうしていいかわからずに縮こまることしかできない。多くの視線が注がれて、泣きたくなかった。

スペは飯を食い始めた。

そうしているうちに歌が始まった。

センターはタキオンだ。無茶苦茶声がいい。そして無茶苦茶上手い。

振り付けもキレツキレである。ちょっと動きが早すぎて逆に気持ち悪いぐらいキレている。

ダンスも超光速だからといわんばかりの切れである。

バックダンスはゴールドシップ、ダイワスカーレット、ウオツカが踊っている。3人だから少し配置的にバランスが悪い。

「おい、マックイーンも踊れよ」

「なんでですの!?! そもそも知らないから無理ですわ!?!」

「くそっ、マックイーンなのになんでだよ!?!」

「なんでわたくしが踊れるのが前提なんですか!?!」

無茶振りされたマックイーンが叫ぶ。

入学してまだ半年。ライブのレッスンはまだ基本的なものばかりであり、クラシック三冠で勝ったときに踊れる曲など当然練習していない。

それを拙いながらもバックダンサーとして踊れるダイワスカーレットとウオツカがおかしいのだ。

ゴールドシップはキレツキレで踊っていた。

「ちっ、これだとタキオン博士の歓迎ライブが不完全になってしまう

!。スペ! は昨日来たばかりだから無理だな……スズカ、踊れ!」

「えっ!?!」

「スズカさんおどれるんですか?」

「えっ!?!」

「お前ダービー出てたんだから踊れるだろ!」

「私も先輩の見てみたいです!」

「俺も見てみたいです!」

「ふむ、キミのスピード、私も気になるな」

「えっ!？」

「先輩、頑張ってください」

「えっ!？」

呆然としていたスズカに急に白羽の矢が立つ。

確かにスズカはダービーに参加していた以上、履修済みの楽曲である。

しかしここでそれを披露しろといわれるとは思わなかった。

スズカはスぺを見る。期待したまなざしを向けられる。

トレーナーさんを見る。目をそらされた。

マックイーンを見る。目をそらされた。

正面の四人は期待に目を輝かせている。

完全に逃げ場がなかった。

「あの、私ダービーも負けたし、次は菊花賞ではなく天皇賞を目指す予定だし……」

「そうかそうか! じゃあ『winning the soul』じゃなくて『NEXT FRONTIER』だな!」

「あの、そうじゃなくて……」

「そうだな、景気づけという事で、キミにセンターを譲ろう。予行練習とはいえ他人がセンターを踊るといのは縁起が良くないだろう」

「さすがタキオン先輩! 優しい!」

今まで流れていた曲が途中で終了となり、天皇賞のライブ曲になる。

スズカは先ほどまで踊っていた4人に囲まれると部室内の突貫舞台の真ん中に立たされた。

目の前でスぺが期待に満ちた目で見ている。

隅でマックイーンがやはり期待したような眼で見ている。

トレーナーも、こちらを見ていて逃がすつもりはないようだ。

後ろのバックダンスが始まった気配がする。

スズカは、意を決しておもむろに歌い始めた。

スペシャルウィークは感動した。

先ほどまでアグネスタキオンが歌っていたのも素晴らしかった。計算されつくしたような歌に、正確で素早い振り付け。

若干落ち着かないようなざわめきが胸に起きるほど良かった。

それに比べてサイレンススズカの歌は別の方向で素晴らしかった。

どこまでも、空高く駆けていきそうな歌声。

速いながらも柔らかさのある振り付け。

どこか可愛らしさも残りながらもとても美しいライブだった。

こんなにキラキラした人たちが学園に居るんだ。

スペシャルウィークは感動し、そして決意した。

日本一のウマ娘になるには、彼女らに並び、追い抜かないといけな  
い。

スペシャルウィークの目に闘志が宿った。

## スズカの困惑と白銀の彼女との出会い

スズカの日常は一気に騒がしくなった。

まず朝から騒がしい。

スペシャルウィークは朝が強いらしく、なぜか日の出から起きていて、部屋の真ん中でよくわからない体操をしている。

そうしてスズカが起きると、朝食に誘われ、返事をする間もなく食堂へと連れていかれる。

食堂に行くとチームメンバーが大体いる。

ゴールドシップをはじめウオッカにダイワスカーレット、スカーレットに引きずられてきたアグネスタキオンあたりと、当然のように同席をして食事を食べる。

時々スペシャルウィークと同じクラスらしいキングヘイローとハルウララ、ゴールドシップが引きずってきたメジロマックイーンも同席する。

今までずっと、隅でパンを食べていたのとは違う騒がしい朝食である。

学園の授業中やその合間時間は特に誰かが話しかけてくることはない。

前はごくまれにエアグルーヴが様子をうかがいに来ていたが、チームが変わってからそういうこともなくなった。

この時間だけが静かな時間だった。

授業が終わればチームに行く必要がある。

ここでのトレーニングもまた騒がしい。

まず、大体ウオッカとダイワスカーレットが喧嘩する。

そして併せウマを始める。

そしてどっちが勝つただの負けただの、毎回大騒ぎだ。

さらにスペシャルウィークがスズカに併せウマをお願いしてくる。

彼女も編入してきただけあり、素質あふれるウマ娘であるようでも速い。

現状勝敗は五分五分程度に収まっているが、本来クラシッククラス

な自分とデビュー前の彼女では力量差があって当然なのだ。

自らの力不足をはなはだ感じた。

これだけでも騒がしいのに、そこにチームメンバーではないメジロマツクイーンが時々連行されてくるともうカオスである。

普段は大人しく囲碁や将棋を打っている（なぜそんなことをしているのか、スズカにはまるで理解できないが）ゴールドシップのテンションが振り切れる。

タイヤは飛ばし、瓦は割れるし、レース場にクレーターはできる。

さらに調子がいいときにだけ来るタキオンが交じるとみんななぜか光り始める。

もうしつちやかめつちやかだった。

トレーナーさんにトレーニングはどうすればいいか聞いても、自分で考えろと言われてしまう。

そんな指導あるのか、と思うが、ほかのメンバーはそれでメキメキと力をつけていつている。

きつとおかしいのはトレーナーさんではなく自分なのだろう。余計落ち込んでしまった。

「なんか、調子くるつちやうわ……」

スズカの本音だった。いや、もうとつくに狂いっばなしだ。

ただ、よくよく考えると自分の調子が良かったことなんてあっただろうか。

みんなのせいで調子を狂わされたなんて責任転嫁もいいところだ。

今まで全くいい所なんてなかったのだから。

真つ暗な部屋。響くのはスペシャルウィークの小さな寝息だけだ。

どうしていいのかわからない。

なにをしたいのかすらわからなかった。

ふらりと部屋から出る。

部屋すら自分の居場所でなくなってしまったように感じる。

だがどこに自分の居場所があるのかわからない。

もともとどこにも居場所なんてなかったのかもしれない。



スペシャルウィークが来る前から、部屋には寝に帰っていただけだ。

もともとここも自分の居場所ではなかった気がする。ふらりふらりと歩いていき、特に意味もなく屋上に行く。そこには見たことのない葦毛の美女がいた。長身で長い髪をたなびかせる彼女は、とても美しかった。

メジロマックイーンに似た面影がある。葦毛だし、メジロの方なのだろうか。

そんなことを考えていると、声を掛けられた。

「こんばんは、良い夜ですね」

美女が優しい声で挨拶をしてきた。

どうしていいかわからずに立ちすくんでいると、美女はスズカの手を取った。

「何かお困りごとでも？」

そういいながら彼女はスズカの手を引き、屋上のベンチに座らせた。

「星が、きれいですね」

美女は空を見上げながら、そういった。

上を見上げると確かに満天の星だった。

空なんて、最近全く見上げたことが無かった。

「そう、ですね」

やっと出た声はかすれて、聞き取れないほど小さかった。

恥ずかしくてしようがないが、美女はくすりと上品に笑った。

「この空を見ていると、どこまでも駆けて行けそうに思いませんか？」  
もう一度スズカは空を見上げた。

初夏の空。

満天の星。

その先に、きつと素晴らしい景色がある。

そんな気がした。

「少し、走りませんか？」

彼女がそういったとき、少し驚いた。

自分の服装は薄手のワンピースにスリッパと、とても走るような恰好ではない。

彼女の服装も同じような格好だ。とても走れるような恰好とは思えなかった。

「裸足で夜空の下、走るウマ娘がいてもいい、自由とはそういう事ですよ」

スリッパを脱ぎ、丁寧に置くと、ちよつといたずらをするような笑顔で彼女は言った。

散歩するには十分に広いが、ウマ娘が駆けるには狭い屋上を、特に合図もなく二人で並んで走る。

全速力とは程遠い、ゆつくりした走りだ。

生ぬるい初夏の夜の風が頬を撫でる。

小高い丘の上であり、さらに建物自体も高い寮の屋上から見えるのは夜空だけだった。

輝く星々

浮かぶ糸のように細い月

星の光を反射して輝く彼女

そして自分

とても静かで、おとぎ話のように幻想的で、  
何かが分かりそうな気がした。

「もっと周りを見るといいと思いますよ」

走りながら、彼女がそんなことを言う。

「きつと周りにも素晴らしいものがあふれているのですから」

「……」

本当だろうか。こんなきれいな光景が、ほかにもあるのだろうか。  
ただ、この綺麗な星空にすら気づけなかった自分より、彼女の言葉

の方が信じられる気がした。

「また明日、ここでお待ちしていますね」

一周まわったただけだが、いろいろ軽くなった。

そのまま彼女と別れたスズカは、そのままベッドへともぐりこんだ。

## よく見ると気づくこと

夜が明ければ、また騒がしい日々が始まった。

ただ、あのきれいな景色を見たせいも、スズカの心は少しだけ落ち着いていた。

「スペちゃん、今日は二人で、ゆっくり食べない？」

「は、はい、スズカさん！」

落ち着けば、見えてくるものはいっぱいあった。

スペシャルウィークは、慣れない中、みんなと仲良くなろうと頑張っていた。

それはとてもいいことだと思うが、少し無理をしているように思えた。

話と他人への対応で時間を取られ、毎回最後に掻き込むようにご飯を食べているのが気になったのだ。

話しながら食るとか、そういったことが苦手なようだ。

時には二人でゆっくり食べるのもいいだろう。

そう思つてスズカはスペを誘い、食事を部屋に持ち込んだ。

あいかわらず、スペの食事は大盛りの白飯である。

それを味わうように、ゆっくり食べている。食べる速度が遅いわけではないが、そう速いわけでもない。

今まではやはり少し無理をしていた様だ。

「どうしました？ スズカさん？」

「おこめつぶが、頬についているわ」

「え？ 本当ですか？」

「とつてあげる」

「へ、ひゃああ」

スズカはスペの頬についた米粒を取つてあげる。

真っ赤になった彼女は、とても可愛らしかった。

教室に行くと、タイキシヤトルがこちらを見ているのに気づいた。同じリギルのメンバーであり、チーム時代は多少交流があったが、どうしたのかとスズカから声をかける。

「何か用？ タイキシヤトル」

「いえ、新しいチームでうまくやれているかなって思いまして」

「そうね、リギルよりかなり賑やかだから、まだちよつと慣れないかも。でも大丈夫よ」

「そうですか。エアグルーヴが期待していましたよ」

「エアグルーヴが？」

期待とはなんだろうか？ 心配ならわかる。あの一つ上の先輩は、自分を良く心配してくれていた。

「天皇賞秋、勝つのは私だって」

「？」

「ライバル、だそうですね」

「ライバル……」

スズカは驚いた。

自分は彼女にとつて、保護される対象でしかないと思っていた。競う相手だと認識されたことに、不思議な感じがした。

「心配してくれてありがとう、タイキシヤトル」

「いえいえ。仲間ですから♪」

「エアグルーヴに伝えて」

「？」

「天皇賞秋、私が勝つって」

「ふふふ、わかりました」

自然とそんな言葉が出た。

言っておいてなんだが、勝てるとはかけらも思えない。相手はあのリギルが誇る女帝

自分はリギルに耐え切れなかったただの敗北者。

だけど、その彼女がライバルと言ってくれたのだ。

その期待には応えたいとスズカは思った。

同時に、チームを辞めても仲間といってくれるタイキシヤトルもありがたいと思った。

「トレーナーさん」

トレーニングが始まるときに、スズカはトレーナーに声をかけた。

「今度の天皇賞秋、エアグルーヴに勝ちたいんです。どうすればいいか、アドバイスもらえませんか」

「ふむ、戦法はどうするつもりだ？」

「逃げます。最初から最後まで、先頭をゆずりません」

「いいんじゃないかな。じゃあそれを実行するのに足りないのはなんだ？」

「スタミナです。第四コーナーまで先頭はキープできますが、おそろくそこから先が足りません」

「ほかにはあるか？」

「スタートも心配です。天皇賞秋のコースは外枠不利なので……」

「じゃあ、スタミナ強化とスタート練習、あとはスタート時のレース展開の研究だな。おーい、スカーレット！」

「なんですか？」

「スズカと併走しろ！ 坂路3本！」

「はあ!？」

「お前、昨日の併せウマでウオツカに差されただろ。スタミナが足りてねえ。それには坂路が一番だ。あとスズカの逃げ方を盗め！ ほら、行ってこい」

「わかったわよ……」

「よろしくね、スカーレットちゃん」

「よろしくお願いします。スズカさん」

今までトレーナーにスズカは、トレーニングをどうすればいいかと漠然としか聞かなかった。

だが、具体的にどう言う目的で、どうしたいかを聞けば、ちゃんと答えは返ってきた。

ダイワスカーレットもスズカのように逃げるとまではいかないが、

先行策が得意なウマ娘である。

前に出る作戦は、何より最後までばてないスタミナが必要である。最初はしぶしぶ、といった風なスカーレットだったが、並んで走り始めれば闘志全開である。

似たような展開、似たようなペース配分である故、力量差がすぐわかる。

負けたくないと思死に食いついてくるスカーレットをスズカは少しづつ引き離しつつ、一本目を終わらせる。

「スズカ先輩速すぎるう!!」

「ふふ、私の勝ちね」

「もう一本お願いします!!」

「負けても泣かないでね」

スペとの併走とは違うトレーニング。似たような脚質ゆえに自分の欠点も利点もすぐに浮かび上がる。

結局三本ともスズカが勝利し、スカーレットは不貞腐れた。

スペはその間、ウオッカと並走トレーニングをしていた。

ゴールドシップはゲートからクラウチングスタートでくぐりつつスタートしようとして、ゲートにおでこをぶつけていた。

一日が終わり寝る直前、スペの尻尾を櫛で梳かしながら、スズカは思った。

自分が何も見えていなかったことが。

周りに気を使ってもらっていたことに気づいた。

なんてことはない。自分で壁を作って、その中で苦しんで調子を崩していただけだった。

櫛をスペに渡す。手が触れるととても温かい。

迷子の時に導いてくれそうな、そんな温かさがあった。

交代して、スズカの尻尾をスペが梳かし始める。

慣れていないようだが、痛くないように慎重にしてくれる。

あまりにゆっくり過ぎて少しくすぐったかった。

## スズカの『お姉さま』

「私、何も見えていませんでした」

「見えるようになったならいいのではないですか？」

尻尾の梳かしあいをした後、スベはすぐに寝てしまった。

スズカはまた部屋を抜け出し、白銀の彼女に会いに来た。

彼女はスズカに気づくと手招きをする。

そのままなんとなく、膝枕をしてみらう体勢になった。

甘い香りが鼻をくすぐる。とても落ち着いていく。

「今まできつと、みんなに迷惑を掛けました。それでもっ…」

「良くしてもらった相手に言うのは『ごめんなさい』じゃないですよ。

『ありがとう』です」

「……」

そういいながら優しくスズカの頭を撫でる。

くすぐったくて、落ち着いて、耳がぴくぴく動いてしまう。

「スベちゃんは、慣れない中一生懸命仲良くしてくれました」

「とてもいい子ですね」

「エアグルーヴは、付き合いが下手な私と根気よく向き合ってくれて、

ライバルと言ってくれました」

「とてもいい子ですね」

「タイキシヤトルも私のこと心配して声をかけてくれました」

「とてもいい子ですね」

「トレーナーさんも私のことをよく見てくれます。チームのみんな

なもよくしてくれます」

「良い人に恵まれていますね」

「こんな私なのに……」と思っています

「あなただからいいのですよ。彼女たちも、私も」

優しく頭を撫でていた手が、耳の先に触れる。少しだけ、くすぐる

ように撫でられる。

耳がピコピコ動いてしまう。

「どうすればいいのでしょうか」



「難しくはないですよ」

「本当？」

「友には贈り物を、ライバルには勝負を、恩師にはお礼を送ればいいのです」

「……」

「あなたも、とてもいい子です。どうすればいいか、わかるでしょう？」

「……はい」

明日、スペちゃんにはお礼を言ってお菓子をあげよう。きっと喜ぶはずだ。

エアグルーヴには、天皇賞秋で見せつけるのだ。自分が、エアグルーヴの、最強の女帝の横に並ぶ存在だという事を。

タイキシヤトルや東条トレーナーさんにはお礼を言いに行こう。世話になったのに、挨拶もしていなかった。遅くはあるが、遅すぎることはないはずである。

沖野トレーナーさんにもチームのみんなにもお礼を言わないと。飴を付けたら喜ばれるだろうか。

スズカはなんだか明日が楽しみになってきた。こんな気持ち、久しぶりかもしれない。

ゆっくりした時間が流れる。

星は今日もきれいだ。

柔らかい彼女の太ももの感覚。

砂糖のように甘い、彼女の香り。

優しい彼女の手。

とても優しく、スズカの心が落ち着いていく。

「そういえば」

「なんですか？」

「なんてよべばいいですか？」

お互い名乗ってもいない。栗東寮の生徒なのは疑いないだろうが、あいにくスズカは彼女のことをここ以外で見たことが無かった。

「名前で呼ぶのも無粋ですから…… お姉さま、とでも呼んでもらえれば」

「お姉さま……」

「はい、私の愛しのポニーちゃん」

ポニーちゃん。甘やかすときに時々使う言葉だが、スズカはそんなこと、家族にも言われたことが無かった。

それを彼女、お姉さまに呼ばれると、恥ずかしいような嬉しいような。

複雑な気持ちになった。

きつと顔は真つ赤になっているだろう。

そんなことを言ったお姉さまはどんな表情をしているだろうか。

上を向くと、星々の空とお姉さまの顔が見える。

「あれ、お姉さま、額のところ赤いですよ？ ぶつきました？」

スズカは彼女の額が赤くなっているのに気づく。

白い肌の彼女だからこそ、余計目立っているように思う。

「昼間、ちよつとぶつけちゃいました」

ばつの悪そうに笑うその姿もまたきれいで、でも少し可愛らしかった。

第116回天皇賞（秋） 東京レース場 芝 2000m

天皇賞秋の前哨戦として参加した神戸新聞杯では、サイレンススズカはぶつちぎりの一位であった。

大逃げにもかかわらず、第四コーナーを回って直線に入るとさらに末脚が残っているという走りを見せた。

二番人気のマチカネフクキタルの猛然とした追い込みを、同じ上がり3ハロンのタイムで引き離し、大差で引き離しての勝利であった。

「スズカさん！ すごいです!!」

「これもスペちゃんやトレーナーさん、みんなのおかげよ。ありがとう」

夏合宿を挟んで、スズカはトレーニングを重ねた。

一つずつ、何を鍛えるべきか、何を伸ばすべきか

トレーナーと話をして決めて、それに合ったトレーニングを重ねた。

ダイワスカーレットと併せてスタミナやペース配分を

スペシャルウィークやウオッカと併せて追われる感覚やその突き放し方を

そして数字的な分析と体調管理はアグネスタキオンが手伝ってくれた。

ゴールドシップはよく昼寝をしていた。

夜にはお姉さまが悩みを聞いてくれてレースでの心意気などのアドバイスをくれた。

夏が明けたときに、スズカは確実に成長していた。

その成果は神戸新聞杯で現れた。

圧倒的なその速さに観客もチームメンバーも驚いた。

天皇賞秋への準備は万全であった。

大歓声に沸く東京レース場。

メインレースである天皇賞秋に向けて、スズカは控室を出た。チームメンバ―みんなが応援してくれた。

お姉さまも、昨日の夜だが応援してくれた。負けたくない。

そんな気持ちが強かった。

本バ場へ向かう地下道の途中。

スズカは前を歩くエアグルーヴを見かけ、声をかけた。

「エアグルーヴ」

「スズカか」

「今日は負けないから」

「ふふふ、トレーナーの言っていたことは本当になったな」

「トレーナーさん？ 東条トレーナーさん？」

一瞬スピカの沖野トレーナーを頭に浮かべたが、エアグルーヴが言ったのはおそらくギルの東条トレーナーのことだろう。

「トレーナーはな、スズカがギルをやめるときに言ったんだ。『このままじゃ、スズカに天皇賞秋で敗ける』ってな」

「！」

「この前の神戸新聞杯の走り、見ていたよ。確かに今のスズカに、あのまま普通にトレーニングしていた私では手も足も出なかっただろう」

「……エアグルーヴ」

「しかし最強は、勝利はリギルとこの女帝のものだ。叩き潰してやる」  
「もう一度言うわ。負けないから」

その言葉を最後に、二人は本バ場へと向かう。

送り出してくれた東条トレーナーとエアグルーヴのためにも、スズカは負けたくなかった。

ファンファアールが鳴り響く。

各バ続々とゲートに入っていく。

スズカの心が研ぎ澄まされていく。

ウマ番は5枠9番、真ん中あたりであるが先に行きたいスズカにとって少し不利であった。

だが、そんなことは関係ない。  
彼女が見ているのはあくまでゴール。  
そしてエアグルーヴだけであった。

ゲートが開くと真つ先にスズカは飛び出した。

出遅れもなく並んで出たウマ娘達から、快調に飛ばし一番につく。  
天皇賞秋という一大レースに参加している一流のウマ娘達すら置き去りにするサイレンススズカの大逃げであった。

「もつと、もつと速く……」

スタートの1ハロン、10秒台で駆け抜けていくスズカの大逃げ。  
そのあと1ハロン1秒台でラップを刻んでいく。

圧倒的な速度に後との差がどんどん広がっていく。

実況がスズカと二番以下の差を測る単位がバ身から、メートルへと変わる、それだけの差をどんどん作っていく。

そうしてスズカはそのまま、最終コーナーへと飛び込んだ。

東京レース場は左回り、スズカの得意なコーナーだ。

コーナーに入って、一度息を入れる。最後の末脚分を發揮するための一息だった。

また、速度を少しだけ落として、コーナーリングをきれいに、最短距離で回る事も意識していた。

そうやってスズカが一息入れたタイミングで、他の後続バが必死に間を詰めにかかる。

既にセーフティリード、先頭に行くスズカがばてても追いつけない距離になっている可能性すらある。

あまりのリードに焦った後方集団が一齐にスピードを上げた。速度を上げたままスズカに続くようにコーナーを曲がっていく。

当然トップスピード近くでコーナーに突っ込めばうまくは回れずに後方集団は外側にばらけた。

コーナーを抜けるとそこから直線に入る。

大きく息を吸い、吐いたスズカは最後の力を振り絞りスパートをかけた。

大きく回ってコースロスをした後続集団を一気に突き放しにかかる。

そのまま一気にゴール目指して駆け抜ける。

目の前には素晴らしい風景が広がっている。そう、広がっているはずだった。

ぞくり

強烈なプレッシャーを後ろから感じた。

既にスパート態勢に入っているスズカに振り向く余裕はない。

だが、後続集団はみなコーナリングがうまくいっていないのはスパート前に確認した。

だからついてこれるわけがない。にもかかわらずプレッシャーはどんどん大きくなっていく。

「どりゃああああ!!」

エアグルーヴが内から一気に上がってきた。

エアグルーヴと東条トレーナーは天皇賞秋を制覇するための方策を練っていた。

スズカが逃げるのは明らかだ。

才能を開花させ始めた彼女が前で崩れるのを期待するなんてナンセンスである。

神戸新聞杯の勝ち方を見る限り、直線で多少速度が落ちても、末脚をさらに発揮して先頭を維持するだろうことは予想できた。

それを差し脚でとらえるためには二つ、絶妙な距離感と、絶妙なタイミングでの仕掛けが必須だった。

東京レース場の特徴。それは長い直線である。

その距離は日本のレース場で一番長く、526mもあり、中山レース場の1.5倍以上である。

このラストの直線を使えば、ギリギリスズカを差し切れるはずであつた。

しかしそれにはスズカの逃げに引き離されすぎないこと、そして、絶妙なコース、絶妙なタイミングで仕掛けることが必須だった。

引き離されすぎると最後に届かない。

コース取りを間違うとやはり最後に届かない。

仕掛けるタイミングが早すぎるとコーナーで遠心力がかかり、外にぶれてやはり届かない。

遅すぎると最後にやはり届かない。

東条トレーナーが計算したほとんど誤差の許されない勝利の方程式。

それを実行するだけのエアグルーヴの知性と身体能力、そして信頼。

それが証明される時が来ようとしていた。

外側に振られた後続集団の後ろから、大内の最短コースを通過して、切り裂くばかりの鋭い末脚で上がってくるエアグルーヴ。

そうして残り1ハロンでスズカに並ぶ。

スズカは力を振り絞る。すでに末脚は使い切ってしまった。もう何も残っていないが、それでも全身のどこかにこびりついた余力を総動員して走り続ける。

エアグルーヴも力を振り絞る。限界まで末脚を使って、残り100mを切ったこのタイミングで追い抜くはずであったが、執念で粘るスズカを引き離せずにいた。

走る

走る

走る

並んだ二人は、そのままゴールへと飛び込んだ。

第116回天皇賞（秋）の結果は

1着エアグルーヴ

2着サイレンススズカ

であった

その差数cmという接戦で幕を閉じた。

閑話 マックイーンとゴールドシップと小さなほころび

メジロ家のみんなと一緒にコスメを見に行くことになった。

なんとなくマックイーンが雑誌を見てみると、学園の近くに可愛らしいコスメシヨップができたことが載っていた。

マックイーンも年頃の少女である。

基本スイーツばかりが頭にあるが、こういったおしやれにも興味があつた。

ただ、一人で行くのは怖すぎる。全くこういうものに知識がないからだ。

なのでメジロ家の面々、ライアンにドーベル、パーマーを誘っていくことにした。

そして何をどう聞きつけたのか、当然のようにゴールドシップもついてきた。

メジロのご令嬢4人にゴルシー人という組み合わせでコスメシヨップに来たが、令嬢4人はすぐにどうしていいかわからなくなつた。

筋トレしかしていないライアンに、男嫌いで社交性のないドーベル、走ることしかしていないマックイーンとパーマーでは、こんなキラキラした世界、何も理解ができなかった。

三人寄れば文殊の知恵というが、0はいくつ掛けても0であつた。そんな中、活躍するのがゴールドシップであつた。

店員さんに何か言うと、店員さんと二人で4人に化粧を施し始めた。

4人並んで座らされ、あれよあれよと何かを塗られていく。時々何かを聞かれる。

マックイーンはスイーツみたいな名前だな、と思った。

ライアンはトレーニング器具みたいな名前だな、と思った。

パーマーはダイタクヘリオスが良くしゃべるパリピ語みたいだな



と思った。

ドーベルは話しかけられて目を回していた。

誰一人として、店員とゴールドシップの言っていることを理解できなかつた。

そうして出来上がった四人の顔は美しかった。

もともと皆、ウマ娘ゆえ顔が整っているし、育ちが良いのでそれにもじみ出てきれいな娘達である。

ただ、化粧をするとそれがより栄える。

マックイーンはよりお嬢様っぽくなつたし

ライアンは女性っぽさが増した。

パーマーはゆるふわ美女になり、

ドーベルはちよつときりりとした美麗さが増した。

その出来に、店員さんとゴールドシップは満足げにうなずいた。

普段は皆走るばかりだが年頃の少女である。

キヤツキヤツキヤツキヤとお互いのことをしゃべり、写真を撮りあい、楽しい時間が流れる。

マックイーンが少しゴールドシップから目を離すと、奥から一人の女性が出てきた。

流れるような茸毛

人形のようにひどく整った顔立ち

少し切れ上がった目

なんてことはない、頭の飾りを取ってかなりしつかり化粧をしているが、ゴールドシップであつた。

マックイーンは思った。

黙っていれば本当に美人だなと。

またこんなことも思った。

自分と顔がかなり似ているなど。

もしかしたらメジロの傍流とかなのだろうか、と。

あとで調べてみようと思ひながら、マックイーンはゴールドシップに声をかけた。

「ゴールドシップ、あなたもすごくきれいですよ」

ゴールドシップは驚いた顔をした。

ライアンも、パーマーも、ドーベルも驚いた顔をした。

マックイーンは失礼な、と思った。ゴールドシップと付き合うのは面倒だし大変だが、感謝している側面もある。

それに綺麗と思っただら綺麗と褒める、それくらいの素直さは自分だつてあるのに、と。

しかし、何かがおかしかった。

「ゴールドシップ？ どこにいらつしやるんです？」

「ゴールドシップなら奥に行つたままもどっていないじゃない」

「マックイーン、大好きなゴールドシップがいないからって幻覚見てるんじゃない？」

なかなかひどい言い回しである。

びつくりするぐらい印象が変わつた化粧とはいえ、間違えるほど変わっていないだろう。

「ほら、これがゴールドシップですよ？」

「ゴルシちゃんはマックイーンにお褒め頂き光栄だZE！」

しゃべればもう一発でわかるだろう。しゃべり方も声もゴールドシップそのものなのだから。

しかし、3人の反応は芳しくない。

目の前の女性を認識はしている。

声も認識している。

顔だつて認識している。

だがそれがゴールドシップと認識できていない。

そんな感じである。

ふざけているのかとも一瞬思ったがそれも違いそうだ。

パーマーはノリが良いので周りがそうすれば乗る傾向にあるが、根が素直でお堅いのでこういうことを率先してやることはない。

ライアンは質実剛健実直を体現したようなウマ娘ゆえ、こういう悪ふざけは苦手だ。

ドーベルは多少揶揄うことはあつてもこういうことは苦手である。そもそも、今のマックイーンはかなり焦つた表情をしている自覚が

あつた。

優しい三人はこういう時にまでふぎける性格じゃない。

現に三人も、マックイーンが焦っているのを察して焦っているが、なんでマックイーンが焦っているか、まったくわからないようだった。

ゴールドシップは一瞬悲しい顔をすると奥に戻っていき、化粧を落とすいつもの被り物をして戻ってきた。

三人は嬉しそうにゴールドシップにお礼を言いながら、各々気に入った化粧品を買っていた。

何かがおかしい、マックイーンの胸はぎわめいた。

マックイーンはゴールドシップについて、同室ながらよく知らなかった。

調べ始めると不思議なところがいっぱいあつた

チームはスピカ所属。

しかし学年は不明。当然クラスも不明。

不明ってなんだ。学園側の職員でサブトレーナーか、という考えも一瞬よぎったが、現役の学園生でないと栗東寮には入れない。だからそうではないはずだ。

出身も不明。実績等も不明。

全く訳の分からない存在だった。

あのゴールドシップだからしょうがない、という考えが何度かよぎり、それがまた胸をぎわめかせる。

しょうがない、ってなんだ。

非開示じゃなくて、データ上不明と出るってどう考えてもおかしい。

学園側のミスならば、報告するべきだし、しょうがないとはならないだろう。

頭がひどく痛んだ。

スピカの沖野トレーナーにも聞いたが彼は一言、「精霊ウマを調べてみる」と言うだけだった。

何かを知っているのだろう。ただ、あんな悲しい顔をしてそれだけしか言わないのだから、言えない何かがあるのだろうと思い、それ以上は聞けなかった。

精霊ウマについては学園の図書館で調べたが何も出てこなかった。ならばとゴールドシップがメジロの血縁では、と思いメジロ家の家系を調べることにした。

おばあさまにすべてを話す。特に後ろめたいことをしているわけでもないし、おばあ様はウマ娘業界の大御所だ。

何か知っているだろう。そう思って聞いたのだが……

「二度、ゴールドシップさんを連れてきなさい」  
それだけを言われた。

## 第四章　メジロの因縁と精霊ウマ メジロのおばあ様へのご挨拶

ゴールドシップはメジロマックイーンに連れられてメジロ家を訪れることになった。

「おばあ様」とマックイーンが呼ぶ人から呼ばれているという事で、半ば強引に連れてこられた。

話を聞くとマックイーンの祖母らしい。

つまり、自分から言ったら曾祖母か？ いや、これだと祖母の母だな、なんてことを考えながら、立派な黒塗りの高級車に乗せられて、メジロの屋敷にたどり着いた。

屋敷も驚くぐらい立派である。

かつては小さなアパートに家族三人で住んでいたゴールドシップは、世界の違いを感じた。

広すぎてとても使いにくそうだな、という感想がまず浮かぶあたり、育ちが違い過ぎる。

「広過ぎね？　ここ、ホテルでもしてるの？」

「いえ、おばあ様とか、メジロ家の皆さんが住んでいるだけですよ？」

「いやだって、これだけ部屋あったら100人ぐらい住んでそうじゃない！　一部屋でも寮の部屋より広そうだし！」

「使用人の方も一部住んでいますけど……」

「やべえ、世界が違い過ぎる。扉開いたら異世界に飛ばされてチートもらえそう」

「そんなわけありませんわ」

マックイーンと話が合う気がしない。

マックイーンの癖に、とか謎の感想を抱きながら、ゴールドシップは屋敷の中に入っていく。

幸い扉を開けても異世界に飛ばされることはなかった。

そうしてゴールドシップはじいやさんに連れられて、おばあさまの

部屋を訪れる。

おばあさま。茸毛で初めて天皇賞を勝利した、偉大なウマ娘の一人である。

既に真っ白な髪の毛が日光に反射している。

そんな彼女が目の前にいた。

「いらつしやい、ゴールドシップさん」

「呼ばれたぜ、婆さん。悪いんだけどさ、一つお願いしていいか」

「なんですか？」

マックイーンから失礼がないようにと再三再四言われたが、そんな関係ないのがゴールドシップだ。

そもそも別に、相手と自分に上下関係はない。礼儀を尽くす義理も何もない。

ここに来たのもマックイーンのお願いがあつたからでしかない。他の人間だつたら絶対に断っていた。

「逆光でまぶしい。あと、椅子くれないか。疲れちゃってさ」

ふてぶてしくそんなことを言ったが、目の前のおばあさまは気にした様子もなかった。

「ごめんなさいね。偉くなるとどうしても偉ぶりたくなっちゃって。悪い癖だわ。そちらのソファで話しましょう」

そういつて右手にあつた応接セットに案内された。

座るとソファはふかふかであり、目の前には紅茶セットが置いてあつた。

ゴールドシップは目の前のスコーンを取って、かぶりつく。ほのかな甘さが上品な味だった。

「で、婆さん、何の用だ？」

「単刀直入に言うわ。ゴールドシップさん。あなた、精霊ウマでしよう？」

「ゴルシちゃんは精霊ウマが何だかわからないから、答えようがないぜ」

嘘ではない。単語自体はトレーナーから聞いたが、その意味は概要しか聞いていない。自分で調べてもろくな情報は出てこなかった。

だからなんだかはわからない。そもそもトレーナーが言っていたのと同じ意味なのかもわからない。

だからゴールドシップはごまかした。

だが、目の前の彼女は気にした様子もない。

「やっぱり、そうやってごまかす姿がマックイーンそっくりね。本人はうまくごまかしてるつもりみたいだけど、視線が左によって、耳が少しだけ動いているわ」

「……」

なんだこの婆さん。祖母だからなのか、そんなのよくわかるものだ。

マックイーンと同じ癖、といわれるとうれしいような複雑なような、そんな気持ちになった。

「顔もそっくりね。マックイーンの娘かしら？ 孫かしら？ 孫かしらね」

「マックイーンちゃんはとてもまじめな子だから、その子孫がゴルシちゃんみたいな子になるわけないんだぜ！」

「そっくりよ、本当に」

「……」

確定的に言われると、ゴールドシップも言うことが無くなってくる。

完全に相手のペースに巻き込まれていた。

おそらく彼女は自分の正体を確信しているのだろう。

精霊ウマについて、ゴールドシップは自身で調べたが、古文書などに散見されるだけだった。

良くあの勉強嫌いそうなトレーナーがそんな概念と内容を知っていたと思うぐらいだった。

メジロ家は歴史もあるし、そういった知識も残っているのかもしれない。

そうすると、こうやって確定的に言ってくるのも何となく納得できた。

「それで、ゴールドシップさん、一つおばあちゃんからお願ひがあるん

「だけど」

「聞くだけは聞かせ」

今までののはきつと前置きである。

目の前の老人は、ゴールドシップがメジロマックイーンの縁者であるのも察している。

マックイーンの娘か孫であるというあたりもつけているようだ。

そして自分がメジロの血を継ぎながら、メジロの名を継いでいない理由も、おそらく察しているだろう。

メジロ家の没落

これだけ条件がそろえば推測はそう難しくないはずだ。

彼女はメジロ家の長である。ならば、その維持を気にかけるはずだ。

何を言ってくるか、緊張し身構えたゴールドシップに、目の前の老人が告げたのは意外なことだった。

「未来に帰ってくれませんか？」



## 玄孫と高祖母のじやれあい

「意味が分からないんだZE ゴルシちゃんはここにいるんだZE」

「ふふ、メジロ家存続を願うと思いましたが?」

「……」

「玄孫、かしらね。大事な子の命と比べれば、家なんて何でもないわ」

「……」

「納得してない顔ね」

「帰れって言われて帰るほど覚悟は浅くない」

「それはわかっています。でも、私は帰ってほしい。あなたに幸せに生きてほしい」

「幸せは私が決める!!」

「わかっています。だから、おばあちゃんお願いします」

「……」

ゴールドシップは本気だ。自分の命を懸けてでも過去に来た。

その覚悟に他人が口を出してほしくなかった。

しかし、目の前の老人は、ゴールドシップのことを愛しい直系として認識し、ゴールドシップの幸せを願っているのもわかった。

「私が子供の頃、精霊ウマの娘に会ったことがあります。多分」  
「多分?」

「記録には何も残っていません。誰の記憶にも残りませんでした。私だけが覚えていることです。それが正しいことだと、現実のことだと確信できますか?」

「……」

「私が覚えているのは、私が彼女を好きだったからです。でも、今は名前も思い出せません」

「……」

最期は歴史から消える、という話は三女神から聞いていた。

きつとその彼女も消えたのだろう。

だが、愛か、執念か、彼女は彼女の彼女を断片だけが覚えているよ  
うだ。

「風にたなびく桜色の髪を今でも覚えています」

「……」

「とてもきれいなヒトでした。それだけではなくとても優しい人でした。春の日差しのように、とても和むヒトでした」

「……」

繋ぎとめるように、振り絞るように、老人は言葉を重ねる。

「速く、賢く、少し天然で、まさに理想のようなウマ娘でした。彼女によつて何が変わったか、正確なところは結果しか見ていない私にはわかりませんが、彼女のおかげで私も、メジロ家の皆も幸せになりました」

「……」

遠くを見る目はしかし何も見えてないように思えた。

顔すら覚えていないのかもしれない。断片的な記憶すら必死に記憶の底から絞り出そうとしているのかもしれない。

「私の初恋でした。しかし彼女はいなくなりました。そこにぽっかりと穴があるのに、誰も彼女を覚えていませんでした。そこにぽっかりと穴があるのに誰も疑問にも思いませんでした」

「それでも私は、皆を幸せにする」

「あなたも優しい子ですね。ですが、今は今の子どもたちのもんです」

「傲慢といわれようと、自己満足といわれようと、間違いといわれようと私は迷わない」

強く老人を睨みつけるゴールドシップ。

さすが年の功だ。言っていることはすべて正しかった。

だが、ゴールドシップは譲るつもりはなかった。

少しの間のにらみ合い。

声を上げたのは老人の方だった。

「……まったく、誰に似たんだか」

「たぶんおばあ様ですよ」

「そうでしょうね。血は争えませんが」

「話はこれだけですか」

「もう一つ、お願いがあります」

「聞くかどうかはわかりませんよ」

「おばあちゃんには優しくしてほしいわ」

「で、なんですか?」

「あなたの通う学園に桜色の髪ของウマ娘がいるはずよ。彼女について教えてほしいの。来週ぐらいに報告してくれないかしら?」

「報酬は?」

「あなたの尊敬するアグネスタキオンの研究をメジロ家も大々的にバックアップするわ。特に資金的にね」

「……わかりました。では、来週また参ります」

良く調べている。ゴールドシップはそう思った。

ゴールドシップは立ち上がる。

老人の出した条件は、ゴールドシップの目標に合っていた。

メジロ家といえばウマ娘の健康の研究の第一人者の組織でもある。

そのバックアップはありがたいので、引き受けることにした。

そして立ち去る前に扉の前で振り返る。

「最後に一つ」

「なにかしら?」

「私もマックイーンも、上品なお菓子より、クリームたっぷりでイチゴたっぷり、チープなぐらい甘いふわふわなケーキが好きです」

「次はそういうのを用意しておくわ」

「あと飲み物は紅茶より薄目で軟めのはちみつがいいです」

「その組み合わせ、甘すぎない?」

くすくすと笑う老人を背に、ゴールドシップは退室をした。

## 桜色のあなたを探して

桜色の髪をしたウマ娘はすぐに見つかった。

というか、既に知っていた。

ハルウララだった。

スペの同級生であるキングヘイローと同室の彼女はよくよく考えれば異質だった。

トレセン学園というのはエリートウマ娘の集まりだ。

最低限の足の速さを求められるが、彼女の速さは明らかにそれを下回っていた。

かといってバツクを目指して入学した、というようにも見えない。頭の出来もあまり良いわけではない。キングヘイローや友人が良く勉強を教えていた。

そしてあの桜色の髪だ。

染めているわけではない、きれいなピンク色の髪。

ウマ娘では基本的に見ない色だった。

もっともタキオン博士に聞くと、絶対に出ない色ではないらしい。白毛よりもさらに珍しく、奇跡的な確率で発生する色らしい。なので、その色は非常に目立っていた。

そのような髪のウマ娘は、トレセン学園には彼女しかいなかった。おそらく日本中探しても彼女しかいないのではないだろうか。

「えっほーえっほー」

ハルウララは今日も走っている。

真面目ではあるのだ。

授業だってちゃんと聞いている。頭の回転が遅いようだが、頑張つて必死に授業についていっている。

周りの助けも得て中の下ぐらいはキープしており、決してできるわけではないが、進級には問題ないラインの成績を維持していた。

トレーニングも毎日真面目にやっている。

ただ、すごく遅い。

ゴールドシップは一応タイムを計ったが、芝600mで40秒以上

かかっていた。

トレセン学園での普通なら40秒もかからない。

ゴールドシップの上がり3ハロンは33秒台である。

びつくりするぐらい遅かった。

だが、なんとというか華があった。

どんなレースでも楽しそうに走り、レースが終わればどんな順位でもみんなに手を振る。

遅いのだが、それでも見ている人々を和ませる雰囲気があった。

ゴールドシップが見ているのに気づいたハルウララが、駆け寄ってくる。

ぱたぱたと走る感じはとても愛らしい。

「あー、ゴルシちゃん、みててくれたの？」

「おう、ウララ。よく見てたぞ！」

「今日の走りどうだった!? どうだった!？」

「一生懸命走っていたな」

「うん！ ウララ、一生懸命走ったよ！ 5着だったけど、でもがんばった！」

「そうだな、頑張ってたな」

「見てほっこりとする娘である。」

なんとというか、原始的な欲求を感じるのだ。

競走というものがなかった時代の、走ることを楽しんでいただけのウマ娘の欲求というものだろうか。

彼女にとって、きつと順位は重要ではないのだろうか。

一生懸命みんなで走ることが楽しく、嬉しいのだろうか。

ゴールドシップも彼女がどうして人気者になるのか、わかる気がした。

トレーニングが終わると、ウララは商店街へと練り出す。

そこで商店街のお店の手伝いをするのだ。

アルバイトですらない無償の手伝いのようにあり、各所で荷物運びや迷子探し、おばあさんの手を引くなどしていた。

さすがウマ娘だけあって、常人よりは多少パワーがあるが、正直ト  
レセン学園に居るウマ娘と比べるとかなり見劣りをした。

ただ、その一生懸命手伝う姿は商店街の皆さんに好評のようだっ  
た。

商店街の中にハルウララ後援会までできていた。

トレセン学園の足下であるはずなのに、買い物に来るぐらいで交流  
が少ないのは改善するべきかもしれないな、とゴールドシップは感じ  
た。

ウララは手伝いのお駄賃に袋一杯のニンジンコロツケをもらいと  
てもご機嫌そうだった。

そのまま大量のコロツケを抱えてウララは寮に戻った。

その足で食堂に向かい、知り合いにコロツケを配り始める。

渡す相手も非常に多岐にわたった。

キングヘイローやその取り巻きという名の友人たちなどをはじめ、  
クラスメイトやスピカの面々、どういう繋がりかすらわからない相手  
にも配っていた。

大量にあったコロツケはすぐになくなってしまい、ウララ本人は一  
口も食べていなかった。

それでもみんなにいいかい聞いて回り、おいしいと答えた相手に  
はどこで買えるかを宣伝していた。

とても楽しそうで、幸せそうな光景だった。

あの老人が、なぜゴールドシップにハルウララのことを調べさせた  
か。

ゴールドシップは大体想像ができていた。

一週間後のメジロのおばあ様との面会の場所は学園にしよう。そ  
してあの子を見せよう。

ゴールドシップはそう思ってじいやさんに電話をかけた。

## 学園模擬レース

一週間後、メジロのおばあさまにトレセン学園へと来てもらった。名目は視察である。

さすがのメジロ家であり、その要望は簡単に通った。

「それで、調査はどうでしたか？」

「はい、これです」

トレーニング場の観客席でゴールドシップはおばあ様と面会した。おばあ様の要望に従い、調査内容をまとめた書類を渡す。

目の前の老人の目的はこんな調査ではないだろうとは思う。

だが、約束は約束なので形式だけかもしれないが書類を渡した。

「彼女はハルウララ、といいます」

「ハル、ウララ……」

「なにか、思い出しましたか？」

「ハルウララ…… そう、ハルウララ…… ウララ…… お姉ちゃん

……」

ぽっかり空いたパズルのピースが少しずつ色を取り戻しながら埋まっていっているようだ。

ぼんやりと空を眺める老人に対し、ゴールドシップは話を続ける。

「学力はまあ、中の下、といったところです。赤点をとったり追試になつたりはしませんが、その程度のレベルです」

「……」

「走力はまあ、ひどいですね。トレセン学園入学の最低水準にも届いていません。最新のレースでは上がり3ハロン40秒を優に超えますからね」

「……」

「今から模擬レースが始まります」

模擬レースといっても大したものではない。

トウインクルレースなどの公式ではないレースは全部模擬レースという。

模擬レースで一番大きなものは全校選抜レースであり、本番さながらに行われる。

また、チームメンバー選抜のためのレースなど、大きささまざまな模擬レースが毎日行われている。

いま、ウララが参加しているのは有志達が行う個人的なレースである。

ウララは本当に遅いがウララが走りたがること、また慕われていることからみんなとよくレースをしていた。

今回は同室のキングヘイローとその取り巻きという名の友人、カワカミプリンセスやゲレイロ、メーディアと走る様だ。

ゲートも使わない簡易なレースが今始まった。

ダート1000mという短い距離のレースである。

天気は良く良バ場。ダートの場合、良バ場の方が重バ場より走りやすい。

上手く走らないと砂が巻き上がるだけで推進力を得られないのである。

ゴールドシップは一步に力を込めて進むストライド走法で走る関係上、少しでも地面の蹴り方を間違うと推進力が得られないためダートはあまり好きではなかった。

今日参加している5人は皆ダートに走り慣れていた。

ゲレイロ、メーディアの二人が先行し、ウララはその二人に必死についていこうとする。

だが、根本的な走力に差がある。キングヘイローの周りの集団は一流のウマ娘ばかりだ。競うにはウララには荷が重かった。

ずるずると引き離されていき、道中で後方待機をしていたプリンセスとキングに追いつかれる。

そのまま直線に入れば、あとはいいところなしである。スパートを仕掛けた二人にも置いていかれて、前にいた二人に詰め寄ることもできず大差の5位で終わった。

「あの人は、とても速かったですよ」

レースが終わった後、ぽつりぽつりと、老人が話し始める。



「まだ八大競走と呼ばれていた時代の春の天皇賞。桜舞う中、桜色の彼女はとても速かった」

「……」

「速すぎて、「後方待機策をとる！」って言っていたのに、ずっと先頭を走り続けて、そのままゴールしていました」

「……」

「いくつものレースで、彼女は絶対でした。競バに絶対はないなんて言う言葉をあざ笑うかのようでした」

「……」

「子供の頃、何度も一緒に走ってもらいました。いつも優しい彼女も走るとなると大人げなくて、練習でも彼女の影を踏めたことは一度もありませんでした」

「……いまの彼女を見て、どう思いました？」

「とてもきれいでした」

「そうですね」

「とても楽しそうでした」

「そうですね」

「でも、とても無様だと思ってしまうました」

「……」

その感想を、ゴールドシップも否定できなかつた。

努力をしているのは感じる。だが、どう頑張っても前を走るほかの娘に追いつけないのもわかってしまう。

ずっとウマ娘達のレースを見ていた目の前の老人は、その気持ちはより強いだらう。

「あの人は、皆を、わたしを幸せにしてくれたんですよ」

「……」

「どうして……」

「……」

老人の目から、輝く何かが一粒だけこぼれた。

「ゴールドシップさん、これでもあなたは、使命を全うするというのですか」

「します」

「世界から、あなたの居場所がなくなってもですか？」

「関係ありません」

「今持っているすべてを失ってもですか？」

「それで皆が救われるなら」

「……」

老人は思う。このような結果になることを知っていたら、彼女は止めただろうか、と。

おそらく止めなかっただろう。

彼女はとても優しくかった。不条理に憤り、悲劇に涙する、そんなウマ娘だった。

目の前の愛しい玄孫のように。

老人は初めて、三女神を恨めしく思った。

「ゴルシちゃん！ こんにちは！ みててくれた？」

「こんにちはウララ。みてたよ。いい走りだった」

「あれ？ おばあちゃん、大丈夫？ お腹痛いの？」

「ええ、大丈夫よ」

レースが終わったウララがこちらに駆けてくる。

ぱたぱたと走り、こちらに来るとすぐに隣にいる様子のおかしい老人を心配する優しい良い子だ。

「これあげる！ 甘いもの食べると元気になるよ！」

そういつて彼女が取り出したのは飴玉だった。

とてもうれしそうに尻尾を振りながら、彼女は老人に飴玉を渡した。

「ありがとう。ありがとう…… ウララさん」

「どういたしまして！」

老人のお礼に、ウララは何も知らない無邪気な笑顔で答えた。

## 貴頭の使命を果たすべく

マックイーンはおばあさまに呼び出された。

応接セットのところに座ると、目の前にはふわふわのイチゴショートケーキがあった。

飲み物ははちみつだ。スイーツにスイーツを重ねるといふ暴虐的な展開にマックイーンの調子は上がった。

しかし、マックイーンにとって少し意外でもある。

おばあさまはあまり甘いものが好きではないと思っていた。

今まで渡されるのはほのかに甘い素朴なお菓子が多かった気がする。

それはそれでマックイーンは嫌いではないが、やはりこの暴虐的な甘さが子供舌なマックイーンは好きだった。

「ゴールドシップさんはいかがでした？」

「とてもいい子でしたね」

「そうですか……」

あのゴールドシップのことだから、何かとんでもないことをしたのではないかと気にしていたマックイーンはひとまず安心した。

「あなたは彼女に好かれているようですね」

「……良くはしてもらっています」

毎日のようにからかわれているが、なんだかんだでいろいろ良くもしてもらっている。

好かれているのかはよくわからないが、彼女を憎めない自分がいるのにマックイーンも気づいていた。

「ほら、こういうのを見ればすぐにわかります」

「……!？」

おばあさまがタブレット型コンピュータを取り出した時、マックイーンは違和感を覚えた。

おばあさまは古い人なので、こういった最新の電気機器は苦手なはずだ。

それを手慣れたように扱い、マックイーンに画面を見せてきた。

そこにあつたのはマックイーンの写真だった。

1枚や2枚ではない。数多くの写真が画面には映っていた。

「おばあさま!?!」

「ファンクラブだそうですよ。私も会員になってしまいました」

「おばあさま!?!」

「とてもよく撮れてますね。あなたのことが本当に好きなんだとわかります」

「おばあさま!?!」

「しかし、少し甘いものを食べ過ぎではないですか？ 体重管理、できていますか?」

「おばあさま!?!」

日記のように、マックイーンの日々の写真が掲載されているファンクラブのサイト。

誰がやってるか、マックイーンはすぐにわかった。ゴールドシップだ。

こんなに毎日自分の写真が撮れるのは、彼女以外にいない。

どうしていいかわからずにマックイーンは目の前のスイーツを食べ始めた。

反対して止めさせたかったがおばあさまがゴールドシップ側についてしまっている以上止めさせる方法がない。

ケーキの舌がしびれんばかりの甘さが体に染みる。気分が落ち着いてくる。

ダイエットは明日からにしようとマックイーンは誓った。

体重はそろそろ微増では済まなくなりつつあった。

「それで、おばあ様、ゴールドシップさんのことですが、何かわかりましたか?」

「そうですね、私の推測も多く含まれますが、彼女が三女神様に導かれた精霊ウマであることは間違いないさそうです」

「精霊ウマ?」

「ウマ娘達を助け、導く三女神様の神子です」

「……」

急に大それた話が出てきて驚くマックイーン。

ただ、彼女は冗談や悪ふざけは多いが、誰かを助けるために一生懸命なのはマックイーンも知っていた。

そういわれてもあまり不思議には思わなかった。

「驚きました？」

「いえ、なんとなく納得しました。それで……」

「それで？」

「ゴールドシップは、どうなるんですか？」

「わからないです」

「わからない……」

「何十年に一度現れるといわれる存在です。情報も何もかも少ないのです。ただ……」

「ただ……？」

「どの物語もすべて、彼女たちが消えていなくなること、終わります」

「！」

「私の大事な人も、そうでした」

「おばあ様……」

優しく、厳しかった祖母。

いつもしっかりしていた祖母が、そんな遠い目をしているのを見たのは初めてだった。

「あなたも大事な相手なら、全力で追いかけてください。彼女たちは驚くほど速い。少しでも戸惑えば置いていかれます」

「……はい」

「私は追いつけませんでしたが、でも、追いかけたその努力は無駄ではなかったと最近やっとわかりました」

「……おばあ様」

「きつとあなたは、わたしよりもっと賢くて、速いウマ娘です」

「そんな……」

「頑張りなさい」

「……はい」

マックイーンは頷いた。

すべてが分かったわけではない。

だが、テレたりしている余裕が全くないことだけは気づいた。

このままだと、彼女が失われる。

その時どう思うのか、目の前の祖母を見ていればなんとなく想像ができた。

「おばあさま、ありがとうございます。学園に戻ります」

「これ、ゴールドシップさんと二人で食べなさい」

「……ありがとうございます」

おばあ様が持たせてくれたのは、クリームたっぷりイチゴシチュークリームだった。

翌日、マックイーンはスピカへと入部した。

## 閑話 マックイーンのスピカ加入歓迎会

「という事で三日後の歓迎会、ライブやるからこれ覚えておいてくれよ」

「はあ!?!」

「ちゃんと、マックイーンのためにいい曲選んであるからさ!」

「ちよ、ちよつと待つてください!?!」

「サンプルデータもマックイーンのスマホに入れておいたからよろしくな!」

「まっつっていつてるんですー!!!」

マックイーンがスピカに正式加入して三日後

歓迎会をやってくれる、という話はマックイーンも聞いていた。

スイーツが食べられると楽しみにしていたマックイーンを待ち受けていたのは、なぜか野外ライブだった。

トレセン学園には野外ライブ場があり、申請をすれば利用が可能である。

だが、1つしかない上にその使用の優先度はチームの活躍で決まるため、弱小チームであるスピカは基本使えないはずであった。

そう、普通の方法なら使えないはずだったのだ。

「ないなら作ればいい」

ゴールドシップは言った。

「そうだね、モルモット君たちにお願いしよう」

タキオンがつぶやくと、光る謎のウマ娘達が集まった。

「根性で頑張ります!!」

スペは張り切ってハンマーをふるい、親指をたたいて腫れさせて、スズカに看護されていた。

そうして主にタキオンがお願いしたモルモット君という名のタキオンファンにより、学園の一角、もともと森があった場所に新しいライブ場ができた。

なんせみんな光っているから夜間作業が得意なのだ。

墨俣の一夜城ならぬ、学園の一夜ライブ場が完成した。

「おかしいですわ！　おかしいですわ！！　ぜったいおかしいですわ！！」

大事なことなので三度も言った。

なんで歓迎される側が主演でライブをするのか。全く訳が分からなかった。

だがスピカの面々は誰もマックイーンに賛成してくれなかった。

ゴールドシップがゴーを出すと、基本スピカでは誰も反対をしな

い。  
タキオンは悪乗りするし、タキオンが悪乗りすればスカーレットもそのまま乗っかる。

スズカはなんとなくぼーっとしているし、スペは勢いだけでゴールドシップに流される。

ウオツカだけは気の毒そうにマックイーンを見ていたが、我が身かわいさもありません。

そしてトレーナーは干渉を貫いた。

マックイーンは叫んだが、抵抗の余地はなかった。

マックイーン的生活は、必要最低限以外はライブの練習で埋め尽くされた。

授業すらなぜか免除されてライブの練習に明け暮れた。

何度逃げ出そうとしたかわからないが、その度にゴールドシップのスィーツに釣られた。

最近のマックイーンのお気に入りには、ゴールドシップ特製のイチゴ大福だった。

これを出されると、マックイーンの機嫌が良くなる。そしてもう少しだけ付き合っただけよう、と折れるのだ。

マックイーンはひどくチョロかった。

そうして当日になると、すさまじい数の人が集まった。

学園のウマ娘だけではない。



近隣の住民も参加し、屋台なんかも数多く出ている。  
メジロ家の面々もみな見に来ていた。

会のタイトルは

新野外ライブ場こけら落とし 兼 近隣住民交流会 兼 タキオ  
ン研究所・メジロ家技術提携祝賀会 兼 マックイーンのスピカ加入  
歓迎会

に変わっていた。

「おかしいですわああああ!!」

既に「マックイーンのスピカ加入歓迎会」がかなり隅に追いやられていた。

しかし、マックイーンのリブがメインプログラムとして組み込まれたままだった。

マックイーンは叫んだが、何も変わらなかった。

マックイーンは切れた。

本気になったマックイーンを止められる者はいなかった。

ライブで歌と踊りを完ペきにこなしながら、要所所でゴールド  
シップを投げ飛ばし

ケーキ大食い大会でオグリキャップやスペシャルウィークを圧倒  
して勝利し

最光モルモット決定戦では「メジロの科学は世界一チイイイ!!」  
と叫びながら薬も使わずに根性だけでまばゆく輝くことでメジロの  
技術をアピールし

ゴールドシップ印の焼きそばを15分で完売してついでにゴール  
ドシップを鉄板で焼いた。

ゴールドシップはボロボロになり、タキオンはうるさいからと早々  
に家に帰った。

スペとスズカは楽しそうに二人でお祭りを巡って、スカレットと  
ウオツカはいつものように競うように祭りを回っていた。

マックイーンの騒がしいスピカ加入歓迎会は幕を閉じた。

## 第五章 スピカのダイエット大作戦 事の発端

ある日のスピカのチームルーム。

ゴールドシップがおもむろに口を開いた。

「なあ、マックイーン、丸くなってね？」

パンドラの箱が開いた。

「そ、そんなことっ!？」

「目算（ぴー）キロぐらい増えてるとゴルシちゃんは思うな」

「ほっぺた揉まないでくださいませ!？」

マックイーンのほっぺをぷにぷにしながら、ゴールドシップは言う。

他のスピカメンバーも最近のマックイーンを見ていて、体重は増えていそうだなと思っていた。

もつとも、もともとマックイーンはかなり華奢で小柄な体格であったし、女性的な丸みが成長で増えただけだろうと思っていた。

増えた体重を聞いてそれは少しやばくないかとメンバーは思った。

「そういえば、スぺちゃん」

「な、なんですかスズカさん？」

「いよーお」

すぺんっ！

そんなゴールドシップとマックイーンのやり取りを背景に、スズカがいきなりスぺに話を振る。

体重について心当たりがあり過ぎたスぺは動揺するが、スズカがしたことは想像の斜め上に言っていた。

スズカがスぺのお腹をたたいたのだ。

まさに腹鼓である。

なんというか、女の子のお腹からしてはいけない音がした。

スぺも明らかにむっちりしていた。

最初学園に来たときはかなり細かったので、食べさせた方がいいと周りが食べさせ続けた結果だ。

「すずかさああん」

あまりの仕打ちにスぺは涙目になった。

「かわいい……」

スズカは満足げにしていた。

「なん、だと……」

ゴールドシップは驚愕していた。

太ったことを指摘するのに、そんな手があったかとゴールドシップは衝撃を受けた。

弥生賞の時といい、今回といい、スズカは天才エンターテイナーゴルシの想像を上回る方法を編み出してきた。

ゴールドシップの中でスズカはワンコで愛しいポニーちゃんだけでなく、芸の師匠になった。

なんにしろ、スぺの体重もやばそうである。

「話は聞かせてもらった!!」

「タキオン博士!!」

そんな話をしていると、なぜか窓から入ってくるアグネスタキオン。

普通に窓を開けて、よっこいしょと窓枠を乗り越えてきた。

そうして窓枠に足を引っかけて「ふげえ」と地面に落ちた。

扉から入るべきでは？ とその場の全員が思った。

「さて、マックイーン君も、スぺ君も太ったという事だね！」

「あの、タキオン先輩、まず起き上がった方がいいのではないですか？」

ウオツカが心配そうに倒れたままのタキオンに声をかけるがタキオンは一切気にせず倒れたまま話を進める。

「奇遇だね！ 私も（ぴー）キロ太ったよ！」

「タキオン先輩!？」

「スカーレット君が食べさせるからもう太ってしょうがないんだよ！  
ちなみにスカーレット君も私が残した分まで食べるから（ぴー）キ  
ロ太った」

「スカーレット!?!」

「タキオン、私も実はスペちゃんに釣られて（ぴー）キロ太ったわ」

「スズカ先輩!?!」

「今度はエアグルーヴに負けない……」

「スズカ先輩！ 太ってつくのはお腹の肉だけです！」

みんな完全に太っていた。乙女としてどうなのかと思う重量増加だ。

一人だけ適正体重を守り続けているウオツカは頭を抱えた。

## ダイエット大作戦始動

「という事でスピカダイエット大作戦始めるぞー」

「おー！」

「おー！」

「おー！」

「おー！」

「おー！」

「……」

ダイエットが必要という事で、なぜか作戦会議が始まった。

動いた方がいいんじゃないか、とウオツカは思ったが、なぜかほかのメンツはやる気満々だった。

「では、まずどうすれば痩せるかについてだ」

「はい!!」

「スぺ！ 元気がいいな！ 何か意見はあるか？」

「根性で走り続けます!! 坂路100本ぐらいやれば痩せると思います!!」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「スぺ先輩、それ脚壊しちゃいますよ……」

スぺが第一声、努力と根性があればどうにかなるみたいなお手段を提案する。

スぺは走るのが好きだし、とにかくべらぼうに根性があるし、何よりびつくりするぐらい丈夫だ。

タキオンが羨むぐらいの健康優良児である。

これは止めないと本気でやるパターンである。良くも悪くも有言実行なのがスぺだ。

過酷すぎてあまり本人にもよくなさそうだとウオツカが止めよう

とする。

そう、止めようとしたのだが……

「そうね、スペちゃん、わたしたちはウマ娘、走って痩せるのが王道ね……」

「スズカ先輩!？」

「ですよね! やっぱり走るべきですよね!!」

「スペ先輩!？」

基本的に走る事に狂ってるスズカの心に響いてしまったようだ。

二人して着替え始めて走る気満々である。

しかし、このままいかせたら明らかにオーバーワークになるのが目に見えている。

スズカは香港の国際レースに行く予定があるし、スペはメイクデビューに近い。

トレーナーがいれば止めてくれるのだが、残念ながら今は席を外していた。

どうにか止めなければならぬが、ウオッカもそうトレーニング技術に精通しているわけではない。

(ぴー) キロ痩せる方法がほかに思いつかなかった。

どうするかと悩んでいると、タキオンがいきなり立ち上がった。

おでこはまだ赤かった。

「ふっふっふ 実はここにとってもいい薬があつてね」

「タキオン先輩!？ 痩せる薬はやばいですよ!」

「大丈夫だ、カップサイシンたつぷりでクソ辛くて、さらにいろんな食べ物にいい苦み成分を濃縮配合しているだけだからな。飲むとしばらく味がなくなつて食欲がなくなる。さらにカップサイシンの発汗効果で痩せるといふわけだ」

「やばいじゃないですか!」

「ちなみに一昨日飲んでみたんだが、お腹を壊した」

「ダメじゃないですか!？」

「カップサイシンが強すぎたみたいだね。昨日は地獄だったよ。出し切ったからもう大丈夫だが」

「大丈夫じゃないですよ!?!」

タキオンが取り出したものはマッドすぎる代物だった。すぐに奪い取ってごみ箱に捨てた。

ゴールドシップやダイワスカーレットが不満そうにするが知ったことではない。

タキオンはにやにやしていた。絶対わかってやってる。

ウオツカは必死に考える。

食べ物ネタは論外だ。そっちに持っていくと絶対タキオンが変なものを出してくる。

かといって単に量を減らすのは、特にスペができそうにない。

そしてスペは本当においしそうに食べるから、周りも絶対釣られる。いい方法ではない。

ではやはり運動量を増やす方向だろうか。

だが、走らせたら根性だけで本気でどこまでもやるスペと走り狂いのスズカが暴走する雰囲気を感じていた。

つまり、足に負担を駆けない何かが必要である。

「そういえばタキオン博士」

「なんだい、ゴールドシップ君」

「この前タキオン研究所に研究用プールできましたよね」

「ああ、そういえばそうだね、あそこを使うかい」

「それですよ! プールなら走るより脚の負担が少ないです!!」

ウオツカは目の前に垂らされた蜘蛛の糸に飛びついてしまった。

ウオツカも走るのが嫌なわけではない。というかウオツカも結構とんでもないハードなトレーニングをする。

だが、今のダイエツトに毒されたオーラからして、明らかにとんでもないことになりそうだ。

そう察して必死に方向修正をしていたに他ならない。

しかし、研究用プールというものが何か、もう少し彼女は考えるべきだった。

「じゃあ、今から水着持って、みんなプールに出発だ」

「」「おー!」「」

少女たちは楽しそうに準備を始めた。



## トレーニング前の分析

「すげープールだ!!」

ウオツカは興奮の声を上げた。

タキオン研究所地下にあったプールの空間はとても広かった。そしていろいろなプールが存在していた。

50m競泳用のプールから、流れるプールに波の出るプール。

他にもぽつと見ではよくわからない用途のプールがいくつもあった。

なんか秘密基地っぽくてそういうのが好きなウオツカはテンションが上がった。

みんなに先んじてさつさと出てきたウオツカ

体重は増減なし

もともと均整の取れたモデル体型の彼女は水着になってもそのスマートさは変わらなかった。

「わー、本当にすごいですね!」

そういつて続いて出てきたのはスペシャルウィークだった。体重は大幅増である。

ただ、ウオツカが見た限り体形が崩れているわけではないように思えた。

夏合宿の時、田舎から出て来たばかりのスペシャルウィークはガリガリだった。

食べさせてもらってなかったとか言うわけではなく、単純に牧場の仕事の負担が大きかったようであった。

それが食べて肥えて、すごくむっちりしていた。

一方、お腹がそんな出ているようには見えない。童顔だが体はかなり大人で、なんとなくウオツカは恥ずかしくなった。

「さすがタキオン先輩の研究所ね!」

続いて出てきたのはダイワスカーレット。体重は増である。

もともとスタイルがいいスカーレットだが、最近ちよつと肉がつき

すぎているようにウオツカは思っていた。

特に寝ぼけて抱き着いてくるときの柔らかさが増している気がする。

「ちよつと絞るべきだな、とウオツカは思った。

「そう褒めてもらえると光栄だね」

一緒に出てきたのはアグネスタキオン。

体重は大幅増である。

だが、増えたといつてもスタイルもいいし、何か問題があるようには見えなかった。

スピカに加入した頃は顔色も悪く髪も尻尾もぼさぼさで、なんとうかマツドサイエンティストという感じだったが、今は髪も尻尾もつやつやだし肌もつやつやで、普通に理系の美女な雰囲気である。

スカーレットの努力のたまものではなからうか。

増えたからと言って絞る必要があるのだろうかと疑問に思う。

「うう、はずかしいですわ……」

こそこそと出てきたのはメジロマックイーン。

体重は増である。

マックイーンの水着姿を見たのはウオツカは初めてだが、そう太っているようには見えなかった。

マックイーンもスペと一緒にでもともと痩せすぎていたのでは？

という疑問が浮かぶ。

まあその辺りは本人の判断だろう。

その後ろから出てきたゴールドシップは、なんというか、見た目はとても美しかった。

体重は測定不能

なんだ測定不能って、と思う部分と、まあゴールドシップだから、と納得できる結果である。

ただ、黙っていれば見た目だけは美人だった。

「ごめんなさい、少し遅くなったわ」

最後に出てきたのはサイレンスズカ。

体重は大幅増

しかし、その姿に皆息を呑んだ。

最速の機能美。まさにそれを体現した体だった。

もともと見目麗しいウマ娘の中でも美少女だったスズカだが、今の彼女の体は研ぎ澄まされた日本刀のようだった。

多くもなく、少なくともなく、まさに走るために最適な筋肉がついた手足。

そして、女性らしさを失わない丸みと脂肪。

体重が増えたといっていたがなんてことはない、筋肉が増えて、研ぎ澄まされただけであつた。

その美しさに皆息を呑み……

「タキオン先輩！ 俺、スズカ先輩みたいになりたい！」

「ウオツカずるい！ 私もなりたい!!」

「スカーレットには無理だろ！ いろいろつきすぎなんだよお前！」

「はあ？ うるさいわね貧相ウオツカ!!」

「なんだとデブスカーレット!!」

スズカの様になりたいと言いながら、いつものように喧嘩する二人。

それを見て苦笑するタキオン。

「私はスペちゃんみたいになりたいけどなあ」

「スズカさん!」

スペのお腹に頬ずりを始めるスズカ。

「これ、どうしますの……?」

「ひとまず二人でなんかすつべか」

「案外までもですのね、ゴールドシップ」

「ぶにぶにマックイーンも嫌いじゃないけどな」

「ぶにぶにじゃありません!!」

「ステイヤーならば絞っておいた方が有利なんだぜ。筋肉はスピード出すのに必須だが、余計にスタミナ使うからな」

「へえ、珍しくまともなこと言うではありませんか」

「ゴルシちゃんだってたまには真面目になるんだぜ！」

そんなことを言いながら、マックイーンとゴールドシップはプール

のうちの一つに向かうのであった。

## スタミナトレーニング L V 15

「痩せるためにはまず、カロリー消費量をできるだけ多くしないといけないわけだ」

「そうですね」

「で、基本的にカロリー消費量は、動いている部位の量と、負荷の強さで決まる」

「なるほどですわ」

マックイーンを連れたゴールドシップが論評を述べる。

基本的な話である。マックイーンはそんな話をしながら一つのプールに連れていかれる。

「で、脂肪や糖を消費するには酸素が必須なわけだ。で、痩せるために完成したプールがこれだ」

「これ、ですか……」

目の前にあるプールは丸いプールだった。

直径5mほどの、特に変わったところがなさそうなプールである。深さは1.5mぐらいか。

つま先立ちしないと息ができないぐらいの深さだった。

「はい、このマスクをつけて」

「なんですの？」

「酸素濃度が高い空気が出るんだ。脂肪燃焼効果を増やすためだな」

「へえ」

そういいながらマックイーンは酸素マスクをつける。小さなボンベがついた、少し仰々しいマスクだ。

ゴールドシップは操作盤の前に立った。

「あとはとにかく耐えればいいだけだからな！ 頑張れよマックイーン！」

そういつてゴールドシップがスイッチを押すと、プールの中の水が激しく動き始めた。

「にゃああああああ!!!」

マックイーンは謎の悲鳴を上げた。

水流の流れは激しく、まったくもって耐えることができない。

右に回され、左に回され、前に動かされたと思っただら後に、左右に揺さぶられる。

酸素マスクが無ければとつくにおぼれていそうなプールの中で、マックイーンは翻弄され続けた。

洗濯機の中の洗濯物になったような気分になりながら、マックイーンはかき混ぜられ続けた。

「マックイーン♪」

「たすけてくださいまし!!」

「とりやー!」

「なんではいつてくるんですの!?!」

「マックイーンが楽しそうだから♪」

「にやあああああ!!」

「マックイーン♪ がんばれ♪ がんばれ♪」

「へんなどころさわらないでくださいまし〜!」

それを見たゴルドシップは同じプールに飛び込んだ。

二人してもみくちやにされ、洗濯されてしまう。

しかも操作する者がいなくなったため、時間が切れるまで止まりそうにない。

マックイーンの苦難はしばらく終わりそうになかった。

「うぐぐぐぐぐぐ!!」

「うぎぎぎぎぎぎ!!」

スカーレットとウォツカは小さな円形コースのプールを歩いていった。

一見すると何の変哲もないプールだが、実際は非常に特殊な装置が使われている。

水圧が通常の10倍かかるプールなのだ。

全身で加圧トレーニングができる最新式のトレーニングプールとして作り出されたこれは、当然使えば負荷もすさまじい。

慣れていない二人は必死に水の中を歩き続けた。

「二人とも、あと2分経ったら一度上がってくれ。データを取ったらまたトレーニング計画修正するからね」

「わかりましたあ!!!」

水中なのでケガをする危険性は基本ないが、負荷が高いため溺れる危険性はそれなりに高い。

タキオンは注意しながら二人を見守っていた。

「スズカさーん!」

「スペちゃん、楽しそうね」

「はい!」

スペとスズカは波の出るプールで浮き輪に乗って遊んでいた。

## 結果は失敗か大成功か

一週間のプールトレーニング後、結果が出た。

「納得いきませんわあ!!!」

マックイーンが叫ぶ。

マックイーンの体重は、さらに増加していた。

原因はいくつかある。

一つは単純にトレーニング効果で筋肉が増えたからである。

マックイーンの利用した高速水流プール、通称洗濯機は、有酸素運動中心で減量効果を狙ったものだが、負荷が高いため筋トレ効果も出ている。

そのため筋肉がついた分重くなっていた。

もう一つはスイーツである。

ゴールドシップが同じプールに飛び込んだり投げ揃うものだから、その度にマックイーンが切れて、お詫びスイーツが積み重なっていた。

ゴールドシップも、食べさせ過ぎじゃないかとうすうす思っていたが、可愛いのでどんどん与えてしまっていた。

一応フルーツ中心にしたり、普通の食事たんぱく質を多くしたりして栄養バランスに気を付けていたが、当然のようにマックイーンの体重は増えてしまっていた。

「しかもなんでお二人は減っているんですの!!」

マックイーンが指さしたのは、スズカとスペである。

他のみんながトレーニングに励んでいる間、スズカとスペはプールを満喫していた。

波の出るプールで二人で遊んでいたたり、ウォータースライダーで遊んでいたたり、流れるプールで遊んでいたたり、なんにしろ二人してイチヤイチャしていただけだった。

それなのに二人とも体重が少し減っていた。

苦労した自分が増えていて、遊んでいた二人が減っているのにマックイーンは納得いかなかった。

指を差されたスズカは答えた。



「スぺちゃんがかわいいからよ」

「スズカさん!」

「意味が分かりませんわ!」

なぜか胸を張って緑色に光るスズカ。

スピカに染まったスズカの言動は徐々にスピカに毒されつつあった。

「仕上がりはどんなもんだ?」

「トレーナーさん!」

そんな風に騒いでいるところにトレーナーがやってくる。  
様子を見に来たらしい。

「トレーナー、納得いきませんわ!!」

「なにがだ」

「なんで二人がやせてわたくしが増えますの!」

「いや、マックイーンは普通に甘いもの食べすぎだろ」

「うわーん!!!」

トレーナーからの当然の指摘にマックイーンは号泣した。

そのままゴールドシップがまた、洗濯機までマックイーンを抱えていき、二人してかき混ぜられる作業を再開した。

「トレーナー君」

「タキオン、みんなの仕上がりはどうだ?」

「スぺ君とスズカ君はぼっちりだね。最初遊びみたいなプールを作ってくれていうから何かと思ったが、こういう風に使えとは思わなかったよ」

「最後の仕上げは結構悩みどころだったからな」

「データもぼっちりさ」

「あとで見せてくれ」

レース前のトレーニングというのは沖野トレーナーだけでなくほかのチームでも結構悩みどころだった。

普段は皆ハードなトレーニングをしているのもあるので、レース直前期の追切前には体調を戻すために一定の休養と気分転換は必須である。

だが、そこで完全休養にしては鈍ってしまおうし、町なんかに出かけさせるとだいたい暴食をして体重が太め残りになる。

かといってトレーニング場に連れてくると、特にスズカみたいな性格のウマ娘は暴走して走り過ぎて休養にならない。

直前期の追切前、調整に使えるプールとしてこれらを準備したわけだが、今回はかなりうまくいったようだった。

もともと走るのが好きなスペとスズカの二人はかなりオーバーワークなトレーニングをしていた。

その分体も栄養を求めて過食気味だった。

今回ストレスが抜けたことで適正な体重に戻ったのだろう。

「ただ、もう少しデータが欲しいね」

「リギルの方にも使わないか打診してみる。そろそろおハナさんへの借りが溜まり過ぎてやばいんだ」

「リギル…… 会長のところか。わかった。私からも会長に話しておこう」

「タキオン、お前、チームメンバー以外と付き合いがあつたんだな……」

「失礼だねトレーナー君。会長にはお世話になったからね。借りを少しずつでも返しておかないと」

「スペのデビュー戦と、スズカの香港国際カップはうまくいきそうである。」

あとの追切は、トレーナーの仕事だ、とトレーナーは気合を入れた。

「で、マックイーンはどうなんだ？」

「悪くはないよ。スペ君と一緒に今までが細すぎたんだ。スペ君と違って病弱な傾向もあるし、できればゴールドシップ君ぐらいまでは体格を増やしてほしいんだが……」

「その辺りはタキオンとゴールドシップに任せるよ」

「トレーナー君」

「なんだ？」

「仕事したらどうだい？」

「下手に手を出すとゴールドシップが睨んでくるからな。お姫様のこと」

とはお任せするよ」

「まったく」

「で、スカーレットとウオツカは？」

「若干仕上がり過ぎになりつつあるから、しばらくは遊ばせた方がいいかもね」

「年末近くには一度選抜レースに出すから、それくらいの仕上げでイメージしてくれると助かる」

「全く、わたしの仕事ばかり増やさんでくれよ」

「でも、いやじゃないだろ」

「……まあね」

タキオンは苦笑した。

「そういえば、トレーナー君」

「なんだ」

「私の心配はしてくれないのかい？」

「口は出さない約束だからな」

「……むう」

「尻尾でたたいてくるなよ」

## ダイエットは食から見直すべき

「という事で、第一回スピカお料理教室を始めます」

結局体重が増えたままになってしまったマックイーン。

トレーナーに聞いても

「それくらいがちょうどいいと思うぞ。というかもっと増やした方がいい」

なんて乙女心が分かってない回答しか来ないので、自分で対策を考  
えることにした。

運動量をこれ以上増やすことは難しい。

あのタキオン研究所高速水流トレーニングプール、通称洗濯機は一  
度受けるともうへとへとだ。

毎回体力を絞りつくすまで洗濯されるので、運動量を増やす余地が  
あるとは思えなかった。

という事で食事の方を変えることにした。

テーマはカロリーが低いスイーツである。

このカロリーを減らせれば減量できるだろうという算段である。

本来スイーツ食べるのやめろよ、というところであるが、スイーツ  
に脳内汚染されたマックイーンに食べないという選択肢はなかった。

マックイーンの提案の下、スピカのチームメンバー全員で、栗東寮  
の食堂に集まっていた。

栗東の食堂は、料理を出してくれる場所以外に、生徒たちが料理で  
きるスペースもある。

そこで、それぞれがダイエット向きのスイーツを作るという企画で  
ある。

各々が好きな材料を持ち寄って料理を始めていた。

「できたぞ」

そういつて一番に持ってきたのはアグネスタキオンだった。

ミキサーに楽しそうに何かを入れていたが、出来上がったのは虹色

の物体Xだった。

「……なんですか、これ？」

「タキオン博士のスィーツ、いただきます！」

ゴールドシップは果敢にもそれに挑み……

「げろまずっ!!」

虹色の逆噴射をした。

「そんなバカな…… げろまずっ!!」

タキオンが苦笑しながら自分のレインボーを飲み、やはり虹色の逆噴射をした。

「タキオン先輩、これ、何が入ってるんですか……?」

「漢方の五色思想を参考に、赤にニンジン、白に白ごま」

「そうへんなものではなさそうですね」

「黄に味噌」

「みそ汁作ってるんじゃないんですのよ!」

「青に笹の葉」

「ウマ娘はパンダじゃありませんわよ!」

「黒にすっぽんを入れた特製ドリンクだ」

「なんでそれで行けると思ったんですの!?! とうかスィーツじゃないじゃないありませんか!」

「いやあ、昔はよくこういうの飲んでいたんだけどなあ」

「スカーレットさん! タキオン先輩の面倒これからも見てあげてくださいね!!」

タキオンの料理下手と生活習慣のやばさが浮き彫りになった。

スカーレットがいなくなったらタキオンは大変なことになりそうである。

「タキオン先輩、ダメですよへんなことしちゃ」

「スカーレット君、いや、これでも一生懸命作ったんだが」

「はいはい、これでも食べていてください」

「もぐっ、もぐもぐ」

「スカーレットさん、それは?」

「塩大福です。はい、マックイーンさんも」

「ありがとうございます。こ、これは……」

見た目はただの白大福だ。

甘さは控えめだが、絶妙な塩加減で甘さを最大限引き出している。さっぱりした後味で何個も行けてしまいそうである。

「スカーレット君の手料理はおいしいねえ」

「ふふんっ、ミスパーフエクトですから！」

どや顔をするスカーレットだが、胸を張るのが分かるぐらい美味しかった。

しかも糖分控えめ。趣旨をよく踏まえたスイーツだ。

「こういうのは苦手なんだよなあ…… 一応できましたけど」

続いて持ってきたのはウオツカだった。

クッキーに牛乳を持ってきていた。

「おからクッキーです。結構ぱさぱさするので牛乳もどうぞ」

そういつて出されたクッキーは、こちらも素朴な味である。

ただ、しっかりお腹にたまりそうな重量感と、濃厚な牛乳によくあつた、これはこれで美味しいスイーツだった。

「この牛乳、おいしいわね」

「スペ先輩の実家、畜産業しているからそこから送ってもらったらしいぜ」

「へえ…… 本当においしいわ」

「ほかにもいろいろ送ってもらってみたいだから、スペ先輩張り切ってたぜ」

この時マックイーンが台所から漂うカロリーの香りに気づいて逃亡していれば、この後の悲劇は起きなかっただろう。

しかしマックイーンは目の前の豆大福とおからクッキー、そして濃厚牛乳に心奪われていた。

そうして、運命の時が訪れた。

「あ、スペ先輩とスズカ先輩も出来上がったみたいですよ」

そうして続いて出てきたのはスペシャルウィークとサイレンスス

ズカであった。

濃厚なバターの香り

甘いクリームの香り

それらが鼻腔をくすぐる、とても大きな大きなショートケーキだった。

マックイーンは固まった。

理解できなかった。

ローカロリーなスイーツを作るという企画だったはずだ。

なぜカロリー爆弾の様なケーキが出てくるのか。

「あ、あの、スペ先輩。これは……？」

「はい！ お母ちゃんが新鮮なクリームとバターを、あとお隣のおっちゃんを作ってる有機小麦粉を送ってくれたんです！」

「そ、そうですの…… いいお母さまですね」

「それで、この材料で一番おいしく食べられるのっていうと、やっぱりショートケーキかなって！」

「そうですの……」

満面の笑みでいうスペシャルウィーク。絶対に会の趣旨を忘れている。

ゴールドシップは早く食べたいといわんばかりに尻尾を振っている。

ゴールドシップの食べ物の好みはマックイーンと似ている。つまり、甘くてふわふわしたイチゴのショートケーキは大好物だ。

ウオツカとダイワスカーレットも目を輝かせている。濃厚なクリームとバターの匂いからして絶対においしそうである。早く食べたそうにしていた。

タキオンは既に席を立ち、スペに一切れもらっていた。超光速である。

誰も止める人がいなかった。

マックイーンは苦悩した。絶対美味しいショートケーキである。なんせ材料が全部北海道直産である。しかも生産者直送だから鮮度もいいし、おそらく厳選された一番いいのが送られてきている。

メジロ家でもまず食べられないおいしいスイーツだ。

しかしあれを食べたら絶対記録を更新する。乙女的に更新してはいけない記録を更新する。

スピカメンバーだけでなく、寮のほかの皆もケーキに群がる中、断腸の思いで断ろうと席から腰を浮かせた瞬間、マックイーンはスズカと目が合った。

非常に鋭く光るその目が雄弁に語る。

何うちのスペちゃんんとスペちゃんのお母様、つまり将来私の義母になるかもしれない人の好意を無駄にしているんだと。

その殺気にマックイーンは固まってしまい、その隙にゴールドシツプがケーキの載ったお皿をマックイーンの目の前に置いた。

一番大きなイチゴが載った大き目の一切れである。

マックイーンの我慢は限界を超えた。

一口食べると濃厚なクリームの甘さとコクが

二口食べると芳醇なバターの香りと小麦の甘さが

口の中に広がり、この世の全ての幸福にマックイーンは包まれた。

スピカ主催試食会は大盛況に終わり、スペの実家は学園から食材の注文が殺到したため経営が安定したという。

そしてマックイーンのある数値は最高値を更新した。



## タキオンの誕生日

「という事でタキオン先輩の誕生日会をはじめます」

「」「わーい！」「」

「……スカーレット君、誕生日を祝ってもらうほど私は幼くもないのだが……」

「という事でまずはタキオン先輩に送るミニライブから行きます！」

「やばい、まったく聞いてもらえてない」

アグネススタキオンの誕生日

新野外ライブ場で行われるパーティーは、ダイワスカーレットの司会で始まった。

本人は全く忘れていた誕生日だが、ゴールドシップとダイワスカーレットは完全に覚えていた。

引きこもるタキオンを引きずり出して、ライブ会場のど真ん中に座らせると、イベントが始まった。

まずは誕生日祝いのライブらしい。

センターがダイワスカーレット、左右がゴールドシップとマンハッタンカフェである。

カフェだけ露骨にめんどくさそうな顔をしている。

バックダンサーは光る101匹モルモットウマ娘が埋め尽くしていた。

ダイワスカーレットが投げキッスをする。

とてもかわいい。タキオンはご機嫌になり尻尾が揺れる。調子は絶好調だ。

ゴールドシップが投げキッスをする。

何か違うな、と思ったが祝ってくれるのは嬉しいタキオンはご機嫌になり尻尾が揺れる。調子は絶好調だ。

カフェは嫌そうな顔をして投げキッスをしてくれなかった。

タキオンは悲しくなった。調子は絶不調になった。

その瞬間、カフェに無言の圧力がかかる。

スカーレットとゴールドシップ、そして後ろの101匹モルモット

ウマ娘に、タキオンと一緒にライブを見ている大量の光るモルモット  
ウマ娘軍団の圧力だ。

耐えきれなくなったカフェが涙目で恥ずかしそうに投げキッスを  
した。

あまりのかわいらしさにタキオンの調子は絶好調になったが興奮  
しすぎて体力が30下がった。

それが終われば食事会だった。

そういえば今朝はスカーレット君が来てくれなかったから何も食  
べてないな、と思ったタキオンの前に出されたのは巨大ケーキだっ  
た。

「今回は本気を出しました」

スペガどや顔でいう。

前回のカロリー爆弾ショートケーキはあれでもセーブされていた  
らしい。

本気を出したというショートケーキは輝くように美しく、狂おしい  
ほどの甘い香りを放っていた。

実はタキオンはすさまじい甘党である。

おいしそうなショートケーキを出されて食べざるを得ない。

すごい勢いで食べていくタキオン。明日はきつと体重が大変なこ  
とになるだろうが、明日のことは明日考えようというダメな発想のも  
と食べ始めた。

甘さに包まれたタキオンは、とても幸せであった。

タキオンの体が弱いとはいったいどういう事か。

最近のダイワスカーレットとゴールドシップとの間のテーマだっ  
た。

心肺機能には特に問題はない。というか肺活量はウマ娘の中でも  
かなり高く、むしろかなり丈夫な方だ。

胃腸の能力も弱くない。ケーキを1ホール食べてもおなかを壊し  
たりしないあたりかなり丈夫だ。

骨が弱いという事はない。むしろ丈夫な方だろう。ただ、とにかく

速いので負担が大きいのは疑いようがない。

筋肉が弱いか、というところもなさそうだ。

ここまで考えて二人は結論付けた。

タキオン、単に不摂生し過ぎだと。

平気で食事を抜くし、平気で徹夜する。好き嫌いは多いし、そりや体に悪いことをしていればすぐに体調を崩す。さらにロクに食べないくせに運動量が多いから明らかに痩せすぎている。速すぎて負担が大きいんだからそういうった不調がすぐに体に出るのもある。

なのでひとまず適正体重まで増やすのを優先に、とにかく食べさせていた。

ケーキを食べさせたら次はニンジンのグラッセである。

とても甘いグラッセにタキオンはとてもご機嫌である。

二人のタキオン育成計画は、まだ道の途中である。

目指せ、体格スカーレットを合言葉に、二人は努力を続けていた。

料理を食べた後も様々なイベントが行われた。

最光モルモットコンテストは、前回チャンピオンのメジロマックイーンとの一騎打ちを制したタキオンが二代目王者となり

みんなでツイスターゲームではタキオンは速攻潰れてみんなにもみくちゃにされていた。

VR人生ゲームでは宇宙へ飛び立ったゴールドシップを他所にウオツカが無難に勝利していたし

ドキドキ タキオンロシアンルーレット では当たりしかなくてもみんなで虹色のものをリバーズした。

「全く、今日は研究が一切進まなかったじゃないか」

終わった後に感想を聞かれたタキオンは笑顔でそう答えた。

にぎやかな彼女の誕生日は終わった。

## 第六章 運命の日

### スペシャルウィークの弥生賞と皐月賞

「ということで、弥生賞の研究をしていこう」

トレーナーがこういつたときに、止めるべきだったとスズカは後悔した。

年が変わって、その年のスピカの初戦はスペシャルウィークのきさらぎ賞、そして弥生賞という順番であった。

早速スペは圧倒的な強さできさらぎ賞を勝利し、弥生賞へとコマを進めた。

早くも三強と謳われ始めたスペシャルウィークだったが、弥生賞にはキングヘイローとセイウンスカイが出る。

あの二人に勝つには、単にトレーニングを重ねるだけでなく研究も必要であるという事で、展開の研究やコース分析などを行うことになってしまった。

そして教材となったのが去年の弥生賞だった。

「へー、スズカさんも出てたんですね」

「……」

ワクワク、といった体でビデオを見るスペ。

去年の黒歴史を掘り起こされたスズカは顔面蒼白である。

他のメンバーもスズカが負けたという事だけは知っていたいそうだが、これから起きることについては知らなそうである。

いや、ゴールドシップだけはニヤニヤしているので確実に知っている。

トレーナーが苦笑しながら、ビデオを再生し始めた。

ビデオの中のスズカはスタート直前、ゴールゲートの下をくぐった。

「スズカさん!？」

スpegが悲鳴を上げる。

「「スズカ先輩!？」」

マックイーンとスカーレット、ウオツカも悲鳴を上げる。

「これはなかなか……」

タキオンは興味深そうに見ている

「ふふっ」

ゴールドシップは笑いをこらえていた。

スズカは真っ赤になつて固まっていた。

しかし、これで受難は終わらなかつた。

「スズカ、どうしてこういうことをしたんだ?」

トレーナーからのさらなる問い詰めである。

トレーナーとして理由を知りたいのは当たり前である。当時の東

条トレーナーにだつてかなり理由を聞かれた。

公開処刑すぎる状況に、スズカは真っ赤になりながらもしぶしぶ答える。

「前日…… 緊張しちゃつて眠れなくて…… それで当日も寝ぼけて

て全然覚えてないんです…… 多分エアグルーヴが世話してくれて

連れてつてくれたんだと思うんですけど……」

「なるほど」

「それで、ファンファーレで目が覚めたんですけど、何が起きてるかわからないし、エアグルーヴを探して……」

「スズカさん……」

真っ赤になりながら理由をしゃべるスズカ。

自分でもひどい理由だと思つている、あるまじき暴挙だった。

「繰り返さないようにしないとな」

「はい……」

「大丈夫ですよ! スズカさん、緊張して寝れそうにないときはわたしと一緒に寝てますから!」

「スペちゃん!？」

反省しなきや、とスズカが気合を入れた瞬間、スペシャルウィーク

から大暴露が始まった。

「緊張している時、スズカさんは部屋ですつとぐるぐる左回りしてるんですけど、寝ないと体に悪いと思って。ぎゅって胸に抱きしめるとすぐ寝るんですよ、スズカさん」

「スペちゃん!?!」

「逆に私のレース直前は、スズカさんがぎゅってしながら寝てくれるんです。スズカさん、いいにおいがしてよく寝れるんですよ」

「スペちゃん!?!」

「香港国際カップの朝なんか、勝利の女神の……」

「スペちゃん!?!」

慌ててスズカはスペの口を手で押さえた。

香港国際カップは、去年の年末にスズカが招待された香港で行われた国際G2だ。

スズカにはトレーナーの他にもスペが同行していたが、まさかそこまでしていたとはだれも知らなかった。

ちなみに絶好調のスズカは全員ぶっちぎって優勝していた。

スカーレットとウオツカは真っ赤になっていた。

空気に耐えられなかったタキオンは、窓から逃げようとして窓枠に足を引っかけて地面に落下した。

ゴールドシップはマックイーンを見た。

マックイーンはスイーツ食べたいな、と思った。

「あー、対策ができていて何よりだな、うん」

トレーナーが強引に話を締めた。

誰も見ていないところでビデオの中のスズカが惨敗をしていた。

結局弥生賞は、スズカの勝利の女神のおまじないのおかげか、スペが圧勝した。

しかし皐月賞はスズカが恥ずかしがって拒否したため3着に終わってしまったのであった。

## サイレンススズカの宝塚記念

スペは残念ながら初G1に負けてしまったが、その後も調子は良かった。

そしてスズカの方の調子は絶好調であった。

時期の関係上スズカの出られるG1レースは多くない。天皇賞春のロングデイスタンスは彼女には長すぎたため、最初目標とするG1は安田記念の予定だった。

しかし、スズカは宝塚記念への出走を希望した。

「エアグルーヴと、もう一度走りたいので」

エアグルーヴが宝塚記念に出るのはほぼ決まっていた。

去年の最優秀ウマ娘だ。トラブルがなければ出てくるのは間違いない。

そして、スズカはもう一度彼女と走りたいと思っていた。

宝塚記念の出走権はファン投票で選ばれる。

スズカは最近注目を集めているが、勝利したのはG2止まり、G1に勝利しておらず、選ばれるかどうかには少し不安があった。

実績を積んで、出走を確実にするため彼女は重賞3連戦に挑んだ。

そうして出た結果は圧倒的。

全て一番人気で出走し、すべて圧勝し続けた。

特に三戦目の金鯱賞は、2着に1秒以上差をつける圧勝で、スズカの強さを際立たせた。

年末からの4連勝

海外重賞勝利

そして最近の圧倒的な結果により、スズカは宝塚記念に選出された。

宝塚記念

上半期の総決算となるグランプリレース

そのスタート前の地下通路で、スズカは見慣れた影を見つけた。

「エアグルーヴ」

「スズカか」

「今日こそ勝つから」

「そうか。愛しの彼女に勝利の女神のはおまじないしてもらったか？」

「エアグルーヴ!?!」

ダービーの時、スペがパドック時にスズカにおねだりし、勝利の女神のおまじないを全国放送中のカメラの前で行うという暴挙に至った。

ダービーはスペがぶつちぎりて勝利し、スズカは生徒会に、というか目の前のエアグルーヴにしこたま怒られた。

「まあいい、色ボケしてようと最高潮だろうと、わたしは、女帝は容易い相手ではないぞ」

「もう一度言うわ。今日こそ、あなたに勝つ」

「それでこそサイレンススズカだ」

機嫌よさそうに、エアグルーヴは頷くとそのままレース場に向かった。

一度は負けた。それはいい。彼女は偉大な女帝だ。

だが、スズカは負けに慣れたくはなかった。

レースが始まった。

サイレンススズカは快調に逃げていく。

(速い…… 想定以上だ)

エアグルーヴは中団につけながら先頭を快調に走るスズカを見て思った。

東条トレーナーの想定より明らかに速い。

その想定を聞いたとき、エアグルーヴはオーバーペースだと思ったが、実際のレースのスズカはそれすら上回って飛ばしていた。

オーバーペースか? と一瞬悩む。

オーバーペースならばついていくのはばかばかしい。

最後に体力を使い果たし、直線で差されるのがオチだ。

しかし、エアグルーヴは確信していた。直線でバテるのを期待でき



ないと。

天皇賞秋の時よりもさらにスズカは凄みを増している。あの時ですら最後垂れなかったのに、今回200m伸びただけでへばるのを期待できるはずがなかった。

周りはスズカがオーバーペースと判断し速度を落としていく。

そんな中、エアグルーヴは当初のプランより少し前目で、スズカに離され過ぎないようにしていくことにした。

宝塚記念は阪神競馬場の内回りコースで行われる。

その直線は350m強とかなり短い。さらに中山競馬場のように最後の坂が急なわけではないので、差すには非常に不利なコースである。

天皇賞秋の時の東京競馬場とは違う。直線に入ってからでは明らかに間に合わない。

既にリードは目算で10バ身以上。第三コーナー中ほどに来ていたスズカを追いかけて、エアグルーヴは第三コーナー入口から早めに仕掛けた。

コーナーリングを丁寧に、一息入れるようにゆっくり回っていくスズカの背を追いかける。

ハイペースでのコーナーリング。ある程度外にぶれるのは織り込み済みとしても、前目で進めたのだからあまり外にはぶれたくない。

そういつたコーナーリングをエアグルーヴはここ最近はみっちり練習していた。

練習時よりも最適なコース。遠心力が適度にかかり、それでいて外に大きくぶれないコーナーリングを成功させたエアグルーヴはスズカの背を全力で追いかける。

スピードが落ちるところか、さらに末脚で速度を増すスズカ。

阪神の下り座の直線を駆け抜けつつ、あと少しで並ぶ、そんなところまで詰め寄ったエアグルーヴだったが……

スズカはそこからさらに伸びた。

(馬鹿なっ!?)

エアグルーヴですら脚はほとんど残っていない。

何よりスズカは直線に入って一度伸びていた。スズカもすでに限界まで来ているという考えが甘かったとエアグルーヴは気づいた。一步、二歩、そう速くはないが、確実に一步ずつ引き離されていく。結局だれも並ばせることもさせず、スズカは逃げ切った。

宝塚記念のウイニングライブを見る東条トレーナーは底知れない不快感を感じていた。

この不快感はいったい何だろうか、と考える。

元メンバーのサイレンススズカが活躍したことか。

それは違うだろう。スズカはリギルとは相性が悪かった。

それに悔しいが、沖野はトレーナーとして天才である。あいつならばあそこまで育てても不思議ではない。

それを比較して一喜一憂するほど自分は若くない。

では、エアグルーヴが自分の計算と違い負けたことか？

それ自体は確かに悔しいが、スズカが予想以上に強かったというだけだ。

エアグルーヴへの申し訳なさや自分の不甲斐なさは感じるが、それでここまで不快に感じるほど自分は若くはない。

しかし予想以上、というのが近い気がした。

スズカのデータは元チームメンバーだったのもありかなり充実している。

それでここまではずれ、というのが非常に予想外であった。

ライブも終わりを迎えた。

東条トレーナーは沖野トレーナーに電話をした。

## 運命の時まであと3歩

リギルとスピカの交流は実はかなり多い。

所属メンバー同士の交流は少ないが、トレーナー同士の話し合いはしよつちゆう行われている。

また、タキオン研究所で開発されている各種トレーニング器具のモニターをリギルがしているのでそういう意味でもかかわりは多かった。

だからこうやって、スピカのトレーナーとサブトレーナーに一応なっているゴールドシップ、そしてタキオンの三人と東条トレーナーが話す、というのも実は珍しくなかった。

スペ牧場特製カロリー爆発。パウンドケーキと、タキオンが淹れたスカーレットティーが用意され、いつものようにお茶会のような雰囲気です話し合いが始まった。

「で、なに？ おハナさん。宝塚の恨み言は聞かないよ？」

「いうわけないでしょ。スズカ、次毎日王冠でるんでしょ。うちからエルとグラスが出るから、叩き潰して意趣返ししてあげるから」

「おハナさん、その情報どこから？」

「スズカが嬉しそうに教えてくれたわ」

「……」

スピカに来た頃は皆を拒絶するような雰囲気を持っていたスズカだったが、ここ最近はふわふわである。

もうちよつと自分のスケジュールは黙っていてほしいな、と遠くを見た沖野だった。

「で、本当に何の用？」

「あなたよりタキオンの意見を聞きたいんだけど」

「わたしかい？」

「なんだよ、仲間外れか？」

「天才肌で直感で理解するあんたじゃ多分他人に説明できないでしょ。タキオン、これ見てくれない？」

「スズカ君のデータだね。良く調べてある」

そういつて東条がタキオンに自分の端末を見せたことに、沖野は驚き、また嫌な予感がした。

あの端末は彼女のトレーナーとしての全てといってもいい。あらゆるデータを集積し、分析したものがあそこに保存されている。

だから他人には、それこそリギルのチームメンバーにすら絶対に見せない代物だった。当然沖野も見ることが無い。

それを一部とはいえタキオンに見せていることに、いやな予感がしたのだ。

「もちろん精度が悪い部分はあるんだけど、私の予測だとこれくらいになるはずなのよ」

「確かに、かなりいい分析だと思うよ。ちよつと待ってくれ、スズカ君の最新の情報をそっちに送る。悪用はしないでくれよ」

「おいタキオン、ライバルに情報渡すのどうなんだよ」

「トレーナー君、文句はあとで聞く」

タキオンもデータを見て何かに気づいたらしい。

沖野からの抗議を封殺し、タキオン自身の端末を操作している。

「素晴らしい分析だね、東条トレーナー。最新情報とほとんど誤差がないよ。私のトレーナーにならないかい？」

「お断りね。あなたみたいなじやじやウマはスピカがお似合いよ」

「んー、残念」

そんな軽口をたたく二人だが、表情は真剣である。

タキオンはすでに何かに気づいているらしい。

「まあいい、なるほど確かに、東条トレーナーが血相を変えてきたのが分かるよ」

「どういうことだ？」

「スズカ君が速すぎるんだ」

「速すぎるっ..」

速すぎる、というのがいまいちよくわからない。速さを求めるのがウマ娘達の性である。

それが過ぎるとはどういうことか。

「想定値より最大速度が10%ほど速い。単純計算でも予想値より約1.2倍の負荷がかかるっていう事さ」

「……ちなみにその想定値、っていうのはどうやって出してるんだ？」  
「目の付け所がいいね、ゴールドシップ君。私が言った想定値は筋力や体重などから統計的に計算される数値で、平均より3標準偏差離れたところの数字だ」

「99.9%はその想定値以下に含まれるっていう事か」

ゴールドシップも理解した。

現状は何も問題はない。しかし将来起きると予想されることと、知っていることが結びつつあった。

「東条トレーナーがどう計算してるかわからないけど、似たような数値だからそんな計算なんじゃないかな」

「すまん、統計とか数字は苦手なんだ、結論を頼む」

「まったくトレーナー君は……単純に、スズカ君の体格で最大限想定される速度より出過ぎているんだ。競走バとしては素晴らしいけど、体への負荷は大きいってことさ」

「それ、大丈夫なのかよ？」

「今のところは大丈夫だね。宝塚記念後の健康診断でも異常は一切ない。だけど、気を付けていた方がいいね」

「なるほど……」

「東条トレーナー、助かったよ。ありがとう。お礼は何がいい？」

「そちらのトレーナーに貸しとして付けておくわ」

「そのうち借りが多すぎて返せなくなりそうなんだが……」

「そしたら体で返してもらおうから」

「勘弁してくれよ」

そのまま東条トレーナーはお土産にスペ牧場特製カロリー爆発パウンドケーキを3本受け取り帰っていった。

「で、スズカの調子はどうなんだ？」

「かなり気を付けた方がいいと思うね。体の限界をスピードが超えつつあるっていう事だからね」

「遅く走れ、とは言えないものなあ」

「まあ、現状は健康上何も問題ないよ。わたしもママに検査するよ。  
ゴールドシップ君も頼むよ」

「ああ、スぺにも言っておく」

## サイレンススズカの毎日王冠

### 毎日王冠

秋の初めに東京競バ場で行われる1800mの重賞戦であり、主に距離の近い天皇賞秋やマイルチャンピオンシップへのステツプレースとして利用されるレースである。

毎回実力のあるウマ娘が出走し、また、クラシックのウマ娘とシニアのウマ娘が初めてぶつかるレースの一つでもあった。

そして今回のレースは宝塚記念勝者のサイレンススズカとジュニア王者だったグラスワンダー、そしてNHKマイル王者エルコンドルパサーの対決となった。

クラシックの雄たちとシニアの雄がぶつかるこのレースには多くのファンが集まり、入場者は10万人を超えた。

「スズカさんお久しぶりです」

「グラスさん、お久しぶり。体調はどう？」

「今日は勝ちますよ」

「エルが勝ちます!!」

「エル！」

「……ふふふ」

「? どうしましたか?」

レース直前の地下道、リギル時代の後輩だったグラスワンダーとエルコンドルパサーに声を掛けられたスズカ。

その二人にまっすぐした目で勝ちます、と告げられるとおかしくなってしまった。

純粹な、それでいて確固たる意志を感じる言葉。

自分がエアグルーヴに天皇賞秋で似たようなことを言ったときもこんな感じだったのだろうか。

そう思うと嬉しいような、くすぐったいような、そんな気持ちになっただが、まだ負けるつもりは毛頭なかった。

だからこそ、返す言葉は一つだ。

「最速は、勝利はスピカと私のものです。叩き潰してあげる」  
スズカは笑顔でそう答えたのだった。

レースが始まった。

いつものようにスズカは逃げる。その展開は一方的だった。

スズカの逃げは展開に左右されない。先頭で走る彼女こそがレースの展開を作るのだから。

感覚で逃げ続ける彼女だが、きれいな景色を追い求め続けるその感覚は幾多のレースで磨かれ続けた。その本能に従い、スズカは最速のラップをたたき続ける。

その速度、最初の3ハロンが34秒6である。

去年の天皇賞秋の時のエアグルーヴの上がり3ハロンが34秒7だったのだから、その速度が分かるだろう。スタートで最初の1ハロンが遅いことを考えれば、その速度は驚異的である。

一流バの末脚と同じ速度で逃げるスズカの影を誰も踏むことができなかった。

通常ならばこんなハイペースで逃げてしまえば最後は体力が切れてへばってしまう。

後ろから勝負するウマ娘はそれを狙って差せばいいのだ。

しかし、スズカはそんな常識にとらわれない。とらわれないからこそ異次元の逃亡者なのである。

それはエルもグラスもわかっていた。

普段後ろから展開して直線で差すレースをすることが多い二人は、かなり前目につけていた。

あの逃げを後ろから差すには直線までにかなり詰めておかないと届かないのはわかってる。

だからこそ、前へ、前へと進んでいた。

だが、第三コーナーに入ると、スズカはスピードを上げた。

スズカが得意なのは左回りである。

なので左回りの東京競馬場のコーナーは非常に得意だった。



距離も宝塚記念から比べれば400mも短い。

あの頃よりも夏合宿でさらにスタミナが強化されているのもある。体力はまだ余っていた。

息を入れることなくそのままコーナーを曲がりながらスパートをかけたのだ。

予想以上の早いタイミングと速度の末脚に、一流と謳われた二人ですらついていけなかった。

無理にそれについていこうとしたグラスはそのまま沈み5着に。

エルはどうか食い下がり続けたが、結局影も踏めずに2着に終わった。

「恐ろしいほどの速さでしたね……」

「次は負けません」

「私も負け続けるつもりはありません」

先輩の背を見て彼女たちは決意する。

それはスズカがたどってきた道でもあった。

だからこそスズカは先頭を走り続ける。

そう、走り続けるはずであった。

## 月の下のセレナーデ

白銀のお姉さまとポニーちゃんの交流は、基本的に毎週金曜日に行われていた。

レースは基本日曜日にある。そしてスペカスズカのレースがある場合、土曜日はスズカは夜には抜け出せない。

必然的に会うのはなんとなく金曜日の夜になっていた。

明後日はスズカの天皇賞秋である。

そんな日の夜。

サイレンススズカは寮の屋上のマットの上で、ゴロゴロと転がっていた。

どこから持ってきたのかわからない、かなり広いマットである。

畳10畳はありそうなその上で、気の抜けた表情でスズカがごろごろ転がっている。

うまびよい伝説の時の「でもやせたい」の表情である。

そんな感じでゴロゴロゴロゴロしていた。

別にスズカがかわいいからさせている、というわけではない。

いや、とてもかわいしいし、無茶苦茶光りながら撮影しているが、それは目的ではない。

転倒時の受け身訓練である。

ゴールドシップの居た時代と、現代とでは年代としてかなりの差があり、その間に発明されたものはいろいろあった。

その中の一つに、レース転倒時の受け身というものがあった。

最高時速70kmで走るウマ娘達が転倒すれば大惨事になることは多い。

そのために勝負服やコースの改良がかなりされていたが、一番重要なのは転倒した本人のその場の対応である、というのが未来での考えだった。

その一環として、受け身の習得はゲート試験と同じく必修とされていた。ゴールドシップはこの習得にかなり苦労したものだ。

動作自体はとっさにするもので難しくないのだが、なんせむかつくやつがいると蹴り飛ばしたくなってしまう。

特にトーセンジョーダンが気の抜けた顔で転がっていると思わずそっちに転がっていつて蹴とばしてしまい、そのせいで3回も再試験になった。

補習と再試験の繰り返しでマスターレベルまでゴロゴロ受け身を極めたゴールドシップはそれをスズカに教えていた。

受け身の基本は力を抜いて、コースと平行に転がる、というだけである。

コースは基本凹凸もゴミもなく、また芝が敷かれていて柔らかい。そのコースを横になって転がれば、首や胴体などの重要部分を守ることができる。

それで命を守る、というのがこの受け身の神髄だった。

ただ、力を抜くという関係上、どうしても表情がうまびよい伝説の「でもやせたい」のときの表情になってしまう。

これはスズカだけでなくウマ娘の一般的な反応だった。

「ヤセタイ反応」と未来ではタキオン博士が命名したものである。なぜこうなるかは未来でもわかっていなかった。

スズカの調子は絶好調である。

おとといの追切も万全で、素晴らしいタイムをたたき出していた。

昨日はタキオンやメジロ家の主治医にお願いしてスズカの脚の検査をしてもらったが、異常は全くなかった。

タキオンの計算上、現状で何も故障が無い以上いくら速く走ったとしても大きなけがはしないだろうという事だった。

だが、ゴールドシップの嫌な予感は消えなかった。

単に未来のことを知っているから嫌な予感がするのかもしれない。だが、できるだけのことはしておきたかった。

泥縄的な対応が、この受け身の練習だった。

この受け身は一度体に身につけておけばそう難しいことではない。

右側に倒れてそのままゴロゴロ……

左側に倒れてそのままゴロゴロ……

平和な時間が流れる。ゴロゴロするたびにうまぴよい伝説の「でもやせたい」のときの表情をするスズカはとてもかわいかった。

「でも、お姉さまがこんな練習を提案するなんて珍しいですね」

うまぴよい伝説の「でもやせたい」のときの表情をしながら転がるスズカが話を始める。

「そうですね。少し、いやな予感がしまして」

普段は膝枕しながらお話をして、レースの悩みを聞いたりコースのポイントを聞いたりするだけである。

あとは軽くぺたぺた走ったり、それくらいのことしかしない。

こうやって何かしら行うのはおそらく初めてだろう。

「でも、やって損はないと思いますので、頑張ります」

そんなけなげなことを言うスズカだが、表情はうまぴよい伝説の「でもやせたい」のときの表情である。

そのギャップが可愛らしくて、笑ってしまうゴールドシップであった。

運命の時は近づいていた。

## サイレンススズカの天皇賞秋

サイレンススズカの秋冬期の参加予定レースのG1初戦は天皇賞秋だった。

去年、エアグルーヴと競い合い、僅差の2着だったこのレースに、スズカは堂々参戦した。

だが、この年の天皇賞秋は若干盛り上がり方を欠いていた。

有力バがスズカ以外出ていなかったからだ。

むしろこの次にスズカが出走する予定のジャパンカップにこそ期待が集まっていた。

エアグルーヴ、エルコンドルパサー、そしてスペシャルウィーク。

シニアクラシック入り混じった有力バに、外国バまで参戦する、期待の高い一戦になっていた。

とはいえ去年天皇賞秋を惜敗したスズカは一切手を抜くつもりはなかった。

確実に勝ち切って次に行く。

そして、ジャパンカップでスペちゃんを競う。

それが今の彼女の夢だった。

見学に来ている者は多い。

東京競馬場という立地故、トレセン学園からアクセスが容易である。

スピカのメンバーが応援に来ているのはもちろん、リギルのメンバーも見学に来ていた。

もちろん他のウマ娘も、一般観客も大勢集まっていた。

レースは順調すぎるほど順調に準備が整い、スタートした。

サイレンススズカは今日も快調に飛ばして、すぐに先頭についた。

スタートダッシュとコース取りの巧みさも超一流の彼女は、いつものように誰も邪魔されず、先頭の景色を楽しめる位置についた。

そのままいつも以上の速度で駆けていくスズカ。

最初の3ハロンのタイムは34秒6。

前回の毎日王冠の時と同じ速度で、出だしは入った。

圧倒的な速さで逃げるスズカを捕まえることは誰もできない。

そうしてその速度を維持したままスズカは1000mを通過した。

57秒4。

前走、前々走のタイムを上回る速さである。

後続との差がどんどん広がっていく。

既に関況はバ身、ではなく秒でその差を測っていた。

このまま直線に行けば、たとえば失速したとしても確実に後ろは追いつけないほどのセーフティリードである。

(きもちいい……)

スズカは先頭を走り続ける。

何度か走ったことのある東京競バ場だがいつもと違う風景が見えている気がした。

とてもきれいで、とても静かで……

そんな中をスズカは駆けていく。

疲れが全くないわけではないが、脚はまだ動くどころか走りたがっている。

体中が走るためのものになったかのような気持ちになりながら、彼女は走っていた。

この先が続くのが何なのか。

スズカはさらに脚に力を入れる。

第四コーナーに入るところで、スパートをかけるべく最大限、左脚を踏み込んだ。

メキッ

ひどく嫌な音がした

左足首に激痛が走り、足首の先の感覚がなくなる。

スズカは、自分がケガをしたことは一瞬でわかった。

今まで経験したことのないような激痛に、意識を失いそうになる。

それを必死にこらえながら、朦朧とした意識の中、一昨日お姉さまに習った対応法を、必死に一つずつ行っていく。

まずは現在の勢いのまま、脚を進め続ける。

感覚がなくなり、左脚の先に激痛が走るがモモや膝はまだ動いた。

一步、二歩、三歩。

最高速度で走っていたため、とても減速できそうにはない。

止まるまで意識を保つことも、脚を動かすことも難しいのは本能で理解した。

そのままスズカは、おとといの夜、長々と練習をした受け身を取り、地面を転がり始めたのだった。

サイレンススズカが故障した地点は、ちょうど観客席からは大げやきのせいで見えない位置であった。

だが、その故障にすぐに気づいたものもいた。

耳の良いウマ娘達は、その異様な音に気付いたのだ。

「トレーナー！ 救急車！」

エアグリーブが悲痛な声で叫ぶ。

何が起きているかわからない東条トレーナーは、しかしその声に反応しすぐに競走運営本部に連絡を入れる。

「スズカさん！！」

最前列で観戦中だったスペシャルウィークもまた、異変にすぐ気づいた一人だ。

次の瞬間、柵を飛び越え、コースに飛び出て走り始める。

大外の、レースに邪魔にならない位置とはいえ、れっきとしたレース妨害行為である。

ウマ娘ならば本能的に拒否感が出るそれをしかし一切戸惑うこともなく行つたスペシャルウィークは走り続けた。

走る

限界すら超えてスペシャルウィークは走る。

レースとは違う、ペース配分すら一切無視した全力全霊である。

誰も見たことのない速さで走り抜けたスペシャルウィークは、その

まま転がるサイレンススズカを左手で抱きしめ、庇う。

スペシャルウィークはそのまま勢いを、空いた右手を地面に突き立てて必死に殺そうとする。

しかしサイレンススズカの全力の速度を殺しきれずに背中から外ラチにぶつかった。

「スぺー！ 左脚を地面につけるな!!」

スペシャルウィークを追いかけて走る沖野トレーナーが叫び、スペシャルウィークは条件反射のようにスズカの左ももを持ち上げ、地面につかないようにする。

救急車のサイレンが鳴り響く。

観客席からは悲鳴のようなざわめきが上がる。

サイレンススズカとスペシャルウィークが救急車へと運ばれていくのを、ゴールドシップは茫然と見ることしかできなかつた。



## 第七章 南海に舞う桜吹雪 悲劇を乗り越えた月曜日

「……」

スズカの事故後、スピカ内の雰囲気はお通夜の様なものであった。幸い、スズカの命は助かった。

しかし、脚の怪我は深刻で、復帰は難しいかもしれないと、医者はかなり婉曲な表現で告げた。

前々日の精密検査でも一切何も異常がなかったスズカの脚だが、その左の足首は砕けていた。

「スピードに体が耐え切れなかったかねえ……」

Bプランがどうだのぶつぶついうタキオンもまた、かなり憔悴していた。

スぺの負傷も軽くはなかった。

スピードを殺すために芝に右手の指を突き立てたせいで、右手はロボロ。

体中に打撲傷もできていた。

スぺが芝に指を突き立てた、5本の跡が東京競馬場に残っていた。彼女の献身的な行動が無ければスズカの命も危うかつただろうことが想像できる跡だった。

スピカの主力の一斉負傷である。

だが、マックイーンはそれでもよかったと思っていた。

スズカの事故はその時見ていた状況からしても、今思い返しても命にかかわるものだった。

走れない可能性があるとはいえ、命が助かったのだからその点は安堵してよいと思った。

スぺの怪我もかなり重いとはいえ、今後走ることや生活に恒久的に支障が出るようなものではない。

スズカを助けるための代償としては重いが、ひとまず最悪は避けたのだから喜んでいいようにすら思っていた。

こういう時に沈んだ雰囲気をぶち壊すのがゴールドシップである。トレーナーは軽そうに見えて基本責任感が強い。こういう時にふざけられる人間ではない。

タキオンも似たようなところがある。今頃診察に見落としがなかったか、そして今後の治療について血眼になっているだろう。

スカレットとウオッカもこういう時にあまり役に立たない。良くも悪くも素直な二人は、空気感に完全に飲まれているだろう。

だからこそ、マックイーンはゴールドシップに期待したのだが……  
「ゴールドシップ……」

そのゴールドシップが部屋のベッドの中に閉じこもってしまっていた。

ゴールドシップは後悔に苛まれていた。

油断していた。自分をそう分析していた。

スズカが怪我するなんて十分わかっていたはずだ。

だが、ゴールドシップは油断した。

スペとスズカが仲良くしており、精神的にも非常に安定してたのに胡坐をかいた。

タキオン博士やメジロ家の主治医に精密検査をしてもらい、何も問題がないといわれて問題ないと考えてしまった。

おばあ様を助けた彼女はどれだけの覚悟と苦労があったのだろうか。

自分には覚悟も何も足りていないとゴールドシップは感じていた。結局スズカを助けたのはスペの献身であった。

一瞬の迷いもせずスズカへと駆け寄り覆いかぶさり庇った彼女。観戦時隣にいた自分は茫然と見ているだけしかできなかった。

結果スペは重傷を負った。来週の菊花賞も、月末のジャパンカップも参加すら難しいだろう。

予想できていた自分がまず一番に飛び込むべきだったのにそれができなかった。

救急車を呼んだり裏方の作業もできなかった。

ただただ、呆然と立ち尽くすことしかできなかったのだ。

なんとという無様さだろう。

おぼあさまが未来に帰れと言ったのはこういうところを見抜いていたのだろうか。

やはり自分には荷が重かったのだ。

本当に未来に戻ろうか、そんな考えまで浮かぶ。

おそらく諦めれば、三女神様たちが元の場所へ戻してくれるだろう。

そんな直感にすら従いたくなるほど、ゴールドシップの心は折れていた。

事故の日、病院でスズカの命が助かったと聞いてから、ゴールドシップは布団に籠城していた。

マックイーンが何かを言っていたが聞きたくなかった。

彼女に罵倒されたら、もう生きていく気力すらなくなる気がした。

マックイーンも最初はゴールドシップを見守っていた。

案外繊細なところもあるものだ。一晩寝れば元気になるだろうと思っていたのだが、一向に出てこない。

時々もぞもぞ動いているから生きてはいるのだろうが、布団の塊と化したままずっと変わらなかった。

そのうちマックイーンはイライラして来た。

全くゴールドシップらしくない。

いつもは要らないぐらい構ってきて、要らないぐらい騒いだきたくせに。

自分だって心細いのに、構ってほしいのに、それなのにゴールドシップだけ引きこもるなんてずるいと思った。

だから容赦しないと決めた。

「ゴールドシップ!!!」

ゴールドシップのベッドをひっくり返して粉碎し、そして布団を破

り捨てた。

ベッドも布団も無茶苦茶苦である。

マックイーンは物理的に引きこもり状態をぶち壊した。

ついでに部屋のドアも壊した。これで引きこもることは物理的に不可能になった。

「ま、まっくいーん?」

泣き続けたのだろうひどい顔をしているゴールドシップ。

いつもと違う弱気な表情に、マックイーンの加虐心がくすぐられる。

そのまま寝巻のゴールドシップに、いつもの帽子をかぶせてから引きずって食堂へと向かう。

「やだ、やめてよー!」

「やめてと行ってやめる奴はいませんわ!! あなたが今まで私を振り回してきた罰を受けてもらいます!!」

ゴールドシップが必死に抵抗しているが、二日も食事を抜いて引きこもっていたゴールドシップではウマの波動に目覚めたマックイーンには一切かなわなかった。

そのまま食堂で、限定のスペ牧場特産ショートケーキを待機列を蹴散らして奪い取ったマックイーン。

ショートケーキをゴールドシップの口に詰め込み、さらに追加でLサイズの薄目軟めはちみつを2本流し込んだ。

「ぐえ……」

「次は野外ライブ場に行きますわよ! 皆さんも一緒に来なさい!!」

大声でマックイーンがそういうと、栗東寮の食堂でくつろいでいた生徒たちが、勢いに負けてゴールドシップを引きずるマックイーンについていく。

謎の大移動が始まった。

野外ライブ場で即興オペラをしていたティエムオペラオーを蹴散らし、占拠したマックイーンは、即興で野外ライブを始めた。

「スペ先輩とスズカ先輩を励ますライブ映像を撮りますわよ!!」

と櫛を飛ばすマックイーン  
無意識で踊り続けるゴールドシップ。

ついてきたウマ娘達は、何が起きているかわからないが、逆らうと  
ゴールドシップのようにされそうだと恐怖して従っていた。

「なんで私が……」

そうしてセンターをやらされているのは食堂に偶然いて、押しが弱い  
ナイスネイチャだった。

譲り合い合戦の末、センターで踊らされていた。

「そこで勝利の女神のおまじないですわ!!」

マックイーンが櫛を飛ばし、皆が真っ赤になる。

勝利の女神のおまじない。それが何を指すかは皆知っていた。

なんせスペシャルウィークが今年のダービーでサイレンススズカ  
におねだりしたうえ、衆人環視の中でやらかしたものである。

ライブ中だから投げキッスでもしろという意味合いだろうとは察  
していたが、基本的に純情なウマ娘達はマックイーンの指示に固まっ  
てしまった。

「ふむ、こんな感じかな？」

なんとなく流れに身を任せ、参加していたイクノディクタスが投げ  
キッスをした。

見ていたマックイーンの性癖に突き刺さり、マックイーンは真っ赤  
になった。

中性的な外見がツボだったらしい。

結局センターをやらされていたネイチャも投げキッスをさせられ  
た。

「あとはお見舞いの品ですわ!!」

「も、むり……」

ベッドに引きこもっていた時とは別の理由で憔悴しきったゴール  
ドシップを引きずりマックイーンはデパートを訪れる。

財力に任せているいろいろなものを買いきくと、その品ごとゴール  
ドシップを箱詰めにした。

スズカの分と、スぺの分。

二箱を担ぐと、そのまま猛ダツシユで二人が入院する病院へと走り始めた。

「ちーつす！ メジロマックイーン急便ですわ！」

「マックイーンちゃん!？」

「マックイーンさん？ お見舞いですか？」

いきなり病室に飛び込んできたマックイーンに、入院中の二人はかなり引いていた。

テンションがいつもと違い過ぎる。まるでゴールドシップのようである。

そんな引いている二人を無視して、マックイーンは箱を開けた。

「お見舞いの品を持ってきましたわ。スぺ先輩にはスイーツ詰め合わせ、スズカ先輩には風景のジグソーパズル、ゴルシちゃんを添えてですわ」

「ゴールドシップさん!？」

「ほら、ゴルシちゃん。何伸びてるんですわ？ いつもみたいにうっとうしいぐらい騒ぎなさい」

「ぎにやあああああ!!」

箱詰めされたゴールドシップを取り出すとそのまま気付けを決行するマックイーン。

「マックイーンちゃん!？」

「は、いったい何が…… マックイーンに一日中無茶苦茶に振り回される夢を見ていたような」

「うれしいでしょう。現実ですわ、ゴールドシップ」

「マックイーンちゃん!？」

スぺもスズカもツツコミが追い付かなかった。

「ゴールドシップ。二人にお見舞いの挨拶をしなさい」

「え?」

「早く」

「あ、え、えっと、スズカ。大変だったな」

「そうですね……」

「でも、生きててくれて、良かったよお……」

「ふふ、ありがとうございます」

「スぺえ」

「は、はい！」

「がんばったな……」

「根性だけなら負けませんから！」

「はい、では面会時間とつくに過ぎてますし、騒いでナースさんに怒られそうなので退散します！」

「ま、マックイーンちゃん!？」

「あ、これ、栗東寮のみんなで作ったお見舞いライブ映像です。あとで見てください」

そうしてマックイーンは端末を置いて、ゴールドシップをわきに抱えると、そのまま窓から出ていった。

ちなみに4階である。

スズカもスぺも、嵐のように去っていくマックイーンをただただ見ていることしかできなかった。

## 高知への旅

マックイーンが発破をかけてチームは回り始めた。

ひとまずマックイーンはへこんでいるゴールドシップと、どうしていいかわからずにいたダイワスカーレットとウオツカを捕まえると、タキオン研究所の高圧水流プールに投げ込んで十二分に洗濯した。

そうして洗濯しきって気合を入れさせた後、スカーレットをタキオンへ派遣して生活改善をするようにお願いしながら、マックイーンは残りの二人を連れてトレーナーのところへと向かった。

チームの部室には、既に退院し、3日後の菊花賞に参加すると表明したスペシャルウィークがいたので、彼女の追切りを手伝うことになった。

「スぺ先輩、大丈夫なんですか？」

ウオツカが心配そうに聞く。

スペシャルウィークの怪我は軽くはなかった。

骨折などはしていないが、右手の肌は全部擦り？け、また、スズカをかばって外ラチにぶつけた背中には大きな打撲傷があった。

脚など直接走るのに影響がある部分に怪我はなかったし、骨折などもなかったが、安静にするべき状態だっただろう。

しかし……

「これくらい、根性でどうにかしますよ！ スズカさんに、不可能なんてないって見せるんです！」

胸を張ってそういうスペシャルウィークを止められるものはいなかった。

左脚足根骨粉碎骨折

これがスズカの傷名だった。

過酷なオーバートレーニングを行うと発症する致命的な怪我である。

スズカの場合、データ上その予兆はレース前には一切見つからず、速さに足が耐えられなかったのではないか、というのが医師の



予想であった。

現状、タキオンの要請にメジロ家も協力して名医を集めており、粉々になった骨の整形手術を行う予定にはなっている。

だが、それでも歩けるようになるかはわからない。走るのは不可能というのが医者の見立てだった。

そんなスズカを見て、一番諦めていないのがスズカであった。

不可能なんてないことを見せつけるため、菊花賞、ジャパンカップ、そして有馬記念の連戦と勝利をスズカに約束したのだ。

追切なのにオーバークになりそうなスズカをチームメンバー全員で諫めながら、どうにか完璧な仕上がりに持って行くのだった。

一度沈んで停滞したチームは、マックイーンの働きで再び動き始めていた。

マックイーンのチームでの仕事なんてこれくらいである。

自分は一番新参のメンバーだ。トレーニングプランやらレースプラン、体調管理なんかはトレーナーたちの仕事である。

あとはしなければならぬことと言ったらゴールドシップのケツを蹴りあげることぐらいだろうか。

どうせ自分も彼女も公式戦には出ていないのだ。そうだ旅行に行こう。

全体的にまだうだうだしているゴールドシップの首根っこつかんで箱詰めすると、そのままマックイーンは出発するのであった。

「高知ぜよー!」

「ぜよー!」

「高知ですね」

「……なんで高知なんだ?」

「わたくしの知り合いが高知トレセン学園の理事長でして、助力を求められたからですね」

「さすがおばあ様」

「おばあちゃん凄いな!」

「……」

ゴールドシップはマックイーンに再度箱詰めされて、気付いたら高知に来ていた。

意味が分からない。

同行者はマックイーンとハルウララ、そしてメジロのおばあ様だ。

どういう組み合わせだかも全く分からなかった。

「長期外泊をしようとおばあさまに許可を取るため連絡したら、おばあ様と一緒に高知に行くことになっただけですわ」

「意味わかんねえよ!？」

「うららー! 土佐犬の真似!」

「かわいいわねえ、ウララちゃん」

「えっへん」

「じゃあアイスクリンでも食べましようか」

「なにそれ? おいしいの?」

「とても甘くておいしいのよ。マックイーンも食べるでしょ」

「食べますわ!!」

そうして嬉しそうに三人は屋台へと向かう。

ゴールドシップはどうしていいかわからずにその場で立ち尽くしてしまった。

「ゴルシちゃん! はい、これゴルシちゃんの分ね!」

「ゴールドシップ、本当になんというか、ふにゃふにゃですわね。はい、これも食べて元気出しなさい」

三人はすぐに戻ってきて、ウララとマックイーンがそれぞれゴールドシップに三段重ねのアイスクリンを渡す。

二つ渡されたせいで両手がすぐにふさがってしまったため、溶けるといけないと舐め始める。

冷たくて、甘くて、優しい味だった。

## 高知トレセン学園でのあいさつ

「ウララちゃんだ!」

「おかえりウララちゃん!」

「元気だった? 虐められなかった?」

高知トレセン学園につくと、ウララは生徒たちに囲まれた。

もともと高知トレセン学園から転入してきたウララは、当然友人がこちらにもたくさんいた。

人気者だったらしく、囲まれてもみくちやにされ、楽しそうにしている。

「大丈夫だよー! みんな優しくかったもん! これ、お土産!」

「「「わーい!!」」」

某有名菓子店の一口羊羹を皆に配り始めるウララ。

東京駅でお土産に購入したものである。

中央のトレセン学園と違い、高知のトレセン学園の人数は少ない。総勢で100人強しかおらず、中央トレセン学園の10分の1以下であった。

とはいえそれでも数はかなり居る。

このお土産は、おごづかいをはたいてお土産を買おうとしていたハルウララの代わりに、おばあさまがカードで購入したものだ。

「「「あまーいー」」」

ウマ娘は甘いものが大好きである。

すぐに羊羹を啜えて皆嬉しそうに声を上げた。

ほわほわした空気感が漂う中、キャツキャウふふと騒ぐウマ娘達。

そんな中ウマ娘達をまとめている教官が声をかける。

「ほら、今日はお客さんが来るって言っただろ。一度静かにしろ」

「お客さんってウララちゃんだけじゃないんです?」

「ウララもそうだが、ほかにも来てるんだ。すいません騒がしくて」

「いいですよ」

そうして出てきたのは3人。

高齢のウマ娘

びつくりするぐらい美人の長身のウマ娘

小柄だがやはり神々しいぐらい美少女のウマ娘の3人だった。

三人とも顔が似ているし、血縁だろうか。

親と姉と妹だろうか、そんな予想を皆がした。

「こちらはメジロ家総裁のメジロアサマさん」

「気軽におばあちゃん、って呼んでね」

「おばあちゃんだいすきー♪」

「ありがとう、ウララちゃん」

まず出てきたのが大物すぎて生徒たちはビビった。

メジロ家と言えばウマ娘界隈ではトップクラスの名家だ。

そんなところのトップなんて話しかけるのも憚られる。

それをおばあちゃんと軽々しく呼ぶウララに、皆戦慄を覚えた。

東京は怖いところだ、と皆思った。

「そしてこちらがゴールドシップさん」

「ん」

「ゴールドシップ！」

「ん？」

「ちゃんと!! ご挨拶!!! しなさい!!!」

「うげっ!!」

「!!!ひっ!!!」

次に紹介された姉っぽい人はゴールドシップといった。

メジロの名前を冠していないが、二人と顔が似ているし、葦毛だし、

おそらく親族ではあるのだろう。

気の抜けた返事をした瞬間、横にいた神々しいほどの美少女が動い

た。

叱り声とともに一瞬にして技の形に持っていくと、キン肉バスター

をゴールドシップへ放った。

そのまま大股開きの無様な格好で墮ちるゴールドシップ。

東京は怖いところだ、と皆思った。

「大変失礼しました。メジロマックイーンと申します。よろしくお願

いします」

今までの蛮行がなかったかのような、とてもきれいな笑顔で挨拶する美少女、メジロマツクイーン。

東京は怖いところだ、そしてとんでもない連中が来た。

生徒たちも、教官たちも思った。

## 砂浜に行くウマ娘たち

「皆さん、行きますよ！」

「はい！」

「スイーツ！」

「スイーツ！」

「スイーツ！」

「スイーツ！」

奇妙な掛け声をしながら走るウマ娘の集団が砂浜に行く。

ゴールドシップが先頭をマックイーンが最後尾を走りながら、ウマ娘の集団は走っていった。

高知トレセン学園が、中央からメジロ家と呼んだ目的は二つあった。

一つは全体的なレベルアップである。

地方と中央の差は抜き差し難いところまで来ている。

だが、ハルウララが中央に転入できたことをきっかけに、何らかのコネが作れないかと試行錯誤がされていたのだ。

高知トレセン学園の理事長が伝を使い、メジロ家とハルウララを呼んだのはそんなところがきっかけだった。

トレーニング指導するのはマックイーンとゴールドシップである。

特にゴールドシップは今を時めくスピカのサブトレーナーだ。

トレーニング技術に優れた彼女の指導の下、トレーニング方法の急激な変更が行われていた。

マックイーンはゴールドシップの補助という名の尻タタキである。

いまいち調子の上がらないゴールドシップにメジロ殺法100手で気合を入れる、そんな役割だった。

高知トレセン学園のウマ娘達に、最も恐れられているのがマックイーンであった。

もう一つは、学園のレースの人気上昇である。

現状学園のレースの見学者は1開催で100を超えないときも少

なくなかった。

これでは単なる保護者参観でしかない。

下手すると保護者すら来ない。

そんな人気低迷っぷりだった。

もちろんレベルも設備も周辺人口も何もかも中央とは違うのはわかっている。1度で数万も集めるつもりは誰もない。

だが、せめてコンスタントに数百人。黒潮ダービーなどのメインイベントなら1000人以上の観客が欲しいと考えているようだった。

そんな要望の中、メジロのおばあちゃんが着手したのは組織改編からであった。

現状の高知トレセン学園の教官たちは、薄給でも奮起し理想で頑張る者と、ここにしか来れないからここにいろどうしようもない者しかいなかった。

使えなさそうな数人を栄転と称して中央のタキオン研究所所属に引き抜くとともに、タキオン研究所やメジロ家から新人トレーナーを数人まわしてもらうことにした。

通常新人トレーナーは数年間どこかのトレーナーの下働きをする場合が多いが、高知に来ればすぐに数十人という大型チームと同じだけの人数を管理するトレーナーになれるということで、経験を積む目的も兼ねて転属してくる者は多かった。

最低限の下地を確保出来たら、次はトレーニング方法の改定だった。

といっても大して特別なことをしていない。

高知トレセン学園は、高知の名所桂浜の近くにある。

つまり海と砂浜が近いのだ。

これを利用しない手はなかった。

トレセン学園近くの砂浜から、桂浜まで毎日ランニングをし、その上で桂浜でライブの練習をし始めた。

これはいくつもの効果を狙ったものであった。

まずはトレニング効果。

砂浜は正確な走りをしないと力が逃げてしまうため、走り方の矯正には非常に良い。

中央のトレセン学園でも毎年夏、わざわざ砂浜のある海岸で長期合宿を行うぐらいトレニング効果に優れていた。

それが毎日無料で使えるのだから使わない理由はなかった。

また、波打ち際を走ればクールダウンにも使える。外海で波が荒く泳ぐには難しかったが、それでもかなり有望な天然のトレニング施設だった。

トレニング場所にゴミがあると怪我の原因となるため、トレニング前には徹底的なごみ拾いが行われる。

生徒たちがそれを毎日するのだから必然的に周囲の評判は良くなる。

生徒たちにとってはただの日課でしかない行為がアピールにつながるのだから利用しない手はなかった。

他にも朝夕砂浜を走るウマ娘の姿は、単純に美しく絵になる光景である。

それがいち段落して、やっと一息吐けた感じだった。

他にもライブ練習をすれば、必然的にそれを見る人たちも増える。

高知の地で、こういうことが行われているという周知にもつながった。

「こういうのは、凝ったことより単純な方がいいのですよ」

計画をしたおばあさまはマックイーンにそう言ったという。

「でりやあああああ!!!」

ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！

と砂柱が砂浜に上がる。

ゴールドシップが全速力で走っているのだ。

それを見ているウマ娘も、周辺の住民も、観光客も感嘆の声を上げる。



走る姿を参考にするために見せる、という建前でゴールドシップは走っていた。

圧倒的な速度とパワーである。豪快且乱暴に見えて、実は理にかなった美しいフォームで地面に最大限力を伝えているのだ。

わかるものにはわかるし、わからないものだって美しいそれに皆が見惚れていた。

「やっと、少し調子が戻ってきましたわね」

高知に来てからも、ゴールドシップを振り回し続けた。

トレーニング指導も、お偉いさんへの挨拶も、何ならマスコミからのインタビュも全部ゴールドシップに丸投げした。

普段だったら嫌がって逃げそうなものだが、やっぱり調子が悪いのだろう。どれも完ぺきにこなしていた。

一通りトレーニングが終われば、今度は地元の人を作ってくれた砂浜近くの特設会場で、みんなでライブ練習である。

きっとこれも完全にこなすのだろう。

絶不調なほどきちんとこなすゴールドシップ。

人によっては、というかほとんどの人が、今の状態のままの方がいいのではないか、と思うだろう。

だが、マックイーンはやっぱり、大暴れするゴールドシップが元気で好きだった。

「さて、もうちょっと仕事を押し付けますか」

おばあ様から、できるだけゴールドシップを前面に出して仕事をさせるように言われている。そのせいでゴールドシップの知名度は爆上がりである。

これでいつもの調子に戻ったら皆驚くのだろうか。

それはそれで楽しそうだな、と思ったマックイーンだった。

## 一仕事終えて

高知トレセン学園は良くも悪くも地域密着である。

基本的に高知県で生まれ育ったウマ娘しか入学してこない。

瀬戸内海側の四国三県のウマ娘は、皆神戸の方のトレセン学園へ行く。四国山脈を越えるのはアクセスが非常に悪いからだ。

そうすると在学生も、OGもみな地元の間ばかりだった。

それらの伝とコネを全力で使い、地元の新聞社や公官庁に働きかけ、新聞や公報紙に宣伝を載せたのだ。

地元の祭り出張ミニライブを行う、なんてこともした。

なんだかんだでウマ娘はお祭りが好きだし、地域的にもお祭り好きな者が多い。

こうして高知競バ場と高知トレセン学園の知名度はすぐに上がっていった。

全国的に知らせる必要はない。地元で有名になればいいのだ、と考えばそう難しくはなかった。

一度調子に乗れば、あとは好循環が続いていく。

次に変わったのは衣装だった。

高知にはよさこい祭りというお祭りがある。

地元の皆が踊り子となって、よさこい節に合わせて踊るというそれは、衣装も振り付けも特に制限がないというおおらかな祭りだ。

それゆえ、きれいな衣装というものを作ることへの意識や情熱も、技術や伝もあった。

誰かが中央のG1レースを見てこういういだしたのが発端だった。

「うちの子に、レースに出る時ぐらいこれくらいきれいなのを着せてあげたい」

そうなれば動きは速かった。

地元で後援会が結成され、それぞれに思い思いの衣装が作られていく。

一人が始めれば対抗意識で他の子の衣装も出来上がっていく。

そのうちレースに参加する子たちは、たとえデビュー戦であっても

煌びやかな衣装を着るようになっていった。

もちろん専門家が作ったわけではない衣装だが、地元の人たちの思いがこもっているせいで体操着などよりよほど効果が高いバフ衣装に仕上がっていた。

さらによさこい節を改良した歌や踊りもいろいろなパターンが開発されていき、ライブもどんどんにぎやかになっていく。

こうなればもはや毎回の開催がお祭りである。

地元ケーブルテレビでも中継されるようになり、目標の観客を超える人が集まるようになった。

「ゴールドシップ、お疲れ様」

「ああ、マックイーンもお疲れ様」

大盛況だった重賞「土佐春花賞」も終わり、二人は丘の上でのんびりしていた。

とんとん拍子でうまくいったが、当然裏方の多大な努力があつてこそであり、二人は駆けずり回っていた。

光りながら色とりどりの衣装で踊るウマ娘達を肴に、ふたりでニンジンジュースを飲む。

本当にいろいろな苦労があつた。

まず広報に出すための文章を考えるときは大変だった。

ゴルシもマックイーンも、高知についてほとんど知識がないため在学生数人に書かせたのだがあまり文章がうまくなかった。

書き直してみたり、校正してみたり、試行錯誤して原稿を作り上げたところには二人ともへとへとになっていた。

出張ミニライブだって大変だった。

書式を作り、それを広報しないと手続きが進まない。

適当になじみのウマ娘に言つて終わり、とすると責任問題も生じて大変なのだ。

だから申込期限を設けて参加メンバーを募集する期間を設けながら、お祭りの予定を聞かされた時に実行委員会に売り込みに行くという作業をし続けていた。

最後の方は公共交通機関を使うのが面倒で普通に走って回っていたぐらいだ。

お遍路さんのおかげで道はあったので走ること自体は可能だったが、アツプダウンに距離にとかなりへとへとになった。

衣装だつて大変だつた。

そもそもレースに間に合わないなんていう事態や、作ってもらう後援会を組織できないなんて言う場合すら出てきた。

地域ごとに出身者全員の後援をする組織にしてもらって、いくつかそれぞれ枚数を出してもらって予備を確保したりする必要があった。

それでも足りない場合はおばあ様とゴールドシップとマックイーンとで深夜ミシンを回して作ったりまでした。

それに加えて日々のトレーニング指導やらライブ指導やら、休む暇がないぐらい大変だつたのだ。

それがひと段落して、やっと一息付けた感じだつた。

「それでゴールドシップ、調子は少し出てきましたか」

「まあまあ、かな」

忙しく動いていると、悩んでいたのが少しずつ馬鹿らしくなくなる気がしていた。

ただ、まだ本調子とはいいがたかつた。

「それで、何を悩んでいましたの？」

「スズカのこと、かな」

「ふむ……　もしかして、事故のこと、自分のせいだと思ってます？」

「……」

「ゴールドシップ？」

振り向くと、近くにはマックイーンの顔。

そしてゴールドシップはほっぺたを引っ張られた。

「にやにしゅりゅんだまつきゅいーん」

「ゴールドシップがおバカオブおバカみたいですから、一度気合を入れて差し上げようと思ひまして」

「にやんりゃとー」

「あなたが頑張っていたのは知っています。スズカ先輩のことだつて

異様に気にしてたのも知っています。もしかしたら事故のことを知っていたのかもしれない、と思っっています」

「むにゅー」

「事故はあなたのせいではないのです。助かったのはあなたのおかげかどうかまでは私にはわかりません。でも努力をしていました」

「らって、もうはしれにやいかも」

「その責任を負うのはあなたではありません。助かったことを喜んでください。できたことを誇ってください。あなたのおかげで、幸せになつた人はもういっぱいいるのですから」

「……」

「それにきつと、あなたの使命はまだ終わっていないのでしょう?」

「ふにゅっ」

「じゃあこんな風に腑抜けていてはだめですよね」

「……そうだな」

マックイーンに励まされて、やっと気合が入った気がした。

スズカの件は最善には程遠いが、最悪は避けられたのだ。

そしてまだ、悲劇は残っている。

ここで戸惑っている時間はなかった。

「ひとまずあなたはスズカの激励に行きなさい。愛しのポニーちゃんのお姉さまなんでしょう?」

「……マックイーン? 何を知っている?」

「下手にばれたらスぺ先輩に刺されてもスぺ先輩は無罪かな、って思うようなことですね」

「そこまで手を出していないのぜ!」

「冗談です。ほら、早く行きなさい、お姉さま」

若干納得がいかないゴールドシップは、しかし立ち上がった。

既に高知での仕事の大体の道筋はついている。もうここに居なくてもことは進むだろう。

おばあさまに断りを入れると、翌朝の飛行機でゴールドシップは東京へと戻るのであった。

## 第八章 二人の道が離れてそしてまた交わるまでの物語

運命の分岐点を超えたところで

負けるわけにはいかない。

そう、スズカさんと約束したのだから、負けるわけにはいかないはずであった。

「なんでっ！ なんでええ!!！」

菊花賞

クラシック三冠の最後のレース。

もともと強いウマ娘が勝つといわれたこのレースに、スペシャルウィークは負けるつもりはなかった。

3000mという長距離はレースでは初めてであったが、地元では通学などで走っていた距離であり、苦もない距離だったはずだ。

レースプランだって完璧なはずであった。

トレーナーさんやタキオン先輩とも話し合い、今の自分が走るのに最適なプランを作ったはずだった。

現にその通りに走ることができた。

逃げるセイウンスカイを余裕でとらえられるタイミング。

京都のカーブが終わったところからのラストスパートをしたはずなのに。

その背中は遠かった。

最後の末脚で伸び悩んだスペシャルウィークは、菊花賞は3着に終わった。

とても、スズカさんに顔を合わせられない。

スペはそう思った。

「負けられない！ 負けられないのにつー！」

その次のジャパンカップ

東京競馬場芝2400mで行われるここは、日本ダービーと同じ

コースだ。

直線も長く、差し脚鋭いスペシャルウィークには有利なコースであった。

今度こそは絶対負けられない。

そんな決意で挑んだレース。

しかし、ライバルたちはスペの上をいった。

スペより少し前目で展開した怪鳥エルコンドルパサー

そしてスペより少しだけ早い、最善のタイミングでスパートをした

女帝エアグルーヴ

末脚をいくら発揮しても同じ速度で直線突き進む二人をスペシャルウィークは捉えきれなかった。

全く追いつけない二人の背中。

展開で敗けたスペシャルウィークのジャパンカップは3着に終わった。

とても、スズカさんに顔を合わせられない。

スペはそう思ってしまった。

「なっ!? なんでなんでなんでなんでっ!」

そして年末の有馬記念。

同期のセイウンスカイにキングヘイロー、ジャパンカップで追いつけなかったエアグルーヴ、そして長期休養から復活した同期グラスワンダーが出場するこの年最後のグランプリ。

今度こそ万全の対策をもって挑んだはずであった。

セイウンスカイに逃げ切りをさせずに最適な距離を保ち直線で差し、

キングヘイローやエアグルーヴの差し脚に対しても負けない最適なタイミングでの仕掛け。

今度こそ勝てる。

そう思った時だった。

「私を忘れていませんか? スペちゃん?」

地に響くような声が

本当にかすかな声が

しかしスペシャルウィークの耳に突き刺さった。

名刀で薙ぎ払うかのような豪快な差し脚で、後続もスペシャルウィークも、一気に抜き去ったグラスワンダー。

サイレンススズカに勝つことを想定し鍛え上げられた、圧倒的な切れ味の差し脚は、スペシャルウィークでは太刀打ちできるものではなかった。

結局スペシャルウィークの有馬記念は2着で終わった。

とても、スズカさんに顔を合わせられない。

スペはそう思ってしまったのだ。

そうでなかったはずなのに。

それをたしなめられる者がいなかったのがこの時災いした。

普段チームをまとめているゴールドシップは高知に行ってしまった。細かい事に気を回すメジロマツクイーンも同様だ。

ウオツカもスカーレットも、タキオンの世話に忙殺され、スペの様子まで確認していなかった。

血を吐く思いでスズカの治療に当たっているタキオンは推して知るべしである。

そして沖野トレーナーは広がり過ぎたスズカ関連やらタキオン関連の対応にやはり忙殺されていた。

皆、自分の事でいっぱいだった。

いや、それは言い訳に過ぎないだろう。

皆、スペシャルウィークに、強くて優しい彼女に、本当はちっぽけな少女でしかない彼女に甘えてしまっていたのだ。

有馬記念のライブの翌日スペはスズカに会いに行った。

結果を告げ、そして涙ながらに謝った。

スズカが求めていたものが何かすら、スペにはわからなくなっていた。

そしてスズカから決定的な一言が出てしまった。

「私たち、もう会わない方がいいわ」



## すれ違う二人

スズカは自分の不甲斐なさに涙していた。

スペが無理に菊花賞を出るといったときに止められなかった自分

スペが「秋のG1を3回勝つから、スズカさんの脚が治らないなんてことはない」と言ったときに止められなかった自分

そして負けるたびに悲痛な涙を流すスペに寄り添えない自分。

生まれて初めて、スズカはいなくなりたいと思った。

スズカはスペを愛している。

その気持ちに気づいたのは、あの香港での夜であった。

勝利の女神のおまじない。

そんなことをふざけて提案し、スペが恥ずかしがりながら頬にしてくれたその時であった。

スズカはあの時ほど自分に驚いたことはなかった。

愛というものの存在は知っていた。

だが、自分がだれかを愛することが想像できなかった。

一人綺麗な風景を見るために走り続けるのだらうと信じていた。

だから、誰かがこんな好きになるなんてことはないだらうと思っていたのだ。

だがそれはとても心地よいことだった。

二人で遊び、二人で競い、二人で鍛える。

一人では見えなかった景色がたくさん見られた。

世界がどんどん広がった。

そうして二人で走っていけば、その先にもっと素晴らしい未来があると信じていた。

そう、あの時までには。

自らの左足を見る。

重く、動かない左足。

その怪我の意味を自分が一番わかっていた。

タキオンやメジロ家のお医者様が必死に治そうとしてくれているのはわかった。

手術も成功し、骨はきれいに元に戻ったと教えてもらっている。だが、動かせる気がしなかった。歩くぐらいはできるように思うが、走るなんて到底難しいだろう。

走れないことは悲しいが怖くはなかった。

だが、スぺの横で走れないことが、二人で走れないことが何より怖かった。

菊花賞3着 ジャパンカップ3着 有馬記念2着

この実績自体は素晴らしいものである。

だが、相当無理をしていたのは、スぺをずっと見ていたスズカにはわかった。

末脚が十分に伸びない。体のダメージと疲労が抜けていないのだ。

怪我は体と手だから走るのに支障がない、とスぺは言っていたがそんなことはない。

痛みは集中を削ぐし、何より走るといふのは全身運動だ。

手の怪我也体の怪我也、影響するのは明らかである。

おそらく、1レースに絞れば、スぺは勝てただろう。

しかし、無理して3レース出ってしまった。

それすら止められない自分に、スズカは不甲斐なさを感じ涙した。

有馬記念の後、スぺはスズカの病室を訪れた。

泣きながら土下座するように謝るスぺに、スズカは心を決めた。

自分はもう、彼女と一緒に走れない。

自分はもう、彼女の隣に居られない。

自分はもう…… 彼女を愛する資格もない。

自分が彼女の重荷になつてること気づいてしまった。

優しい彼女は自分を捨てることはできない。

自分を見放すことはできない。

ただの重しでしかない自分を背負い続けるのだろう。

だから、スズカは逃げることにした。

そう、逃げである。スズカはスペに向かい合うのが怖かった。

「私たち、もう会わない方がいいわ」

「……え？」

「もう、病室にも来ないで」

「な、なんで!？」

「話すことは、ないわ……」

「スズカさん!？」

「出て行って……」

「……」

しばらく呆然と立ち尽くしたスペは、のろのろと病室から出ていった。

スズカは静かに泣き続けた。

正気でならば狂気にて

何が悪かったのだろうか。

スペシャルウィークは問い続ける。

スズカさんが怪我をしたことだろうか。

そうではない。

怪我というのは偶然のものである。そこに善悪はない。

では、自分がスズカさんをかばって怪我をしたことだろうか。

それも違う。あそこで自分が飛び込まなければ、スズカさんの命すら危なかったのだ。

自分が仮に走れなくなったとしたって、自分は迷いなく飛び込んだ自信があつた。

それが間違いであるはずがない。

結局、自分が悪いのだ。

走れないかもしれないというつらい気持ちにあるスズカさんを、支えられなかった自分が悪いのだ。

勝つといった秋のG1三戦。結局一つも勝てなかった。

2着でも十分？ ライブに全部残れたからすごい？

何を言っているのだ。すごいならなぜスズカさんに見限られてしまふのか。

あの優しくてきれいなスズカさんに、なぜ見限られたのか。

簡単である。

自分が弱すぎたのだ。情けなさ過ぎたのだ。

あの状態のスズカさんを支えることどころか、自分で立てずに頼り切ってしまったスペシャルウィークに価値なんてないのだ。

「あはっ」

そこまで考えてスペシャルウィークは、初めて理解した。

何を甘いことを考えていたのだろうか。

こんな自分がスズカさんの横にいるなんて烏澁がましいにもほどがあつた。

走れるかもわからない、つらい状態のスズカさんに寄りかかっ

たのは自分だったのだ。

こんな自分、捨てられて当然である。

スペシャルウィークはスペシャルウィークを憎んだ。

だから、今の自分を捨てよう。

勝ち続ける強い自分になろう。

まずは春のシニア三冠である。

それを取れば、自分は、自分を捨てて強くなった自分はスズカさんに会いに行く程度の資格は得られるだろう。

そう思うと、胸の奥に暗い闘志が宿る気がした。

スペシャルウィークが年明け後春の初戦に選んだのは金鯨賞であつた。

去年サイレンススズカが圧勝し、春のシニア三冠の初戦である大坂杯のトライアルレースでもあるこれを、スペシャルウィークは選択した。

会場には多くの観客が集まつた。

ダービーウマ娘であり、秋は惜敗を繰り返したが実力は認められたスペシャルウィーク。

また、明るく表情がころころ変わり、人懐っこい彼女は実力以外の面でも人気が高かつた。

サイレンススズカが復帰が絶望的といわれている中、仲が良かったスペシャルウィークを励まそうというファンも多々いた。

その皆が、スペシャルウィークを見て息を呑んだ。

鍛え抜かれ研ぎ澄まされた肉体。

獲物を狙う肉食獣のような殺気。

甘さを一切削り取った眼光。

春の草原のような柔らかな雰囲気は、今の彼女にはなかった。その仄暗い闘志に、会場も、そして他のウマ娘も飲まれた。

レースは圧倒的だった。

最初に先頭に立ったスペシャルウィークは、そのままゴールまで影

も踏ませなかった。

サイレンススズカの再現か、と言われたが、そうでもあり、そうではなかった。

単にいつも通り、差しの戦法でスペシャルウィークは走っただけである。

単にレベルが違い過ぎて最初から最後まで、他のウマ娘が追い付かなかっただけである。

会場が息を呑む中、完璧なウイニングライブをこなしたスペシャルウィークは、静かに一礼をしてその場を去っていった。

続く大阪杯にはエアグルーヴが参戦していた。

スペシャルウィークを見たエアグルーヴは息を呑んだ。

あれはいったい誰だ。

エアグルーヴは目を疑った。

纏う雰囲気は全く違ったからだ。

まるで殺気のような重苦しさと敵意をスペシャルウィークは纏っていた。

エアグルーヴとスペシャルウィークの付き合いはそう浅くはない。

エアグルーヴはサイレンススズカと仲が良い。察もスズカやスぺと同じであり、共に食事をとることも少なくなかった。

また、前期のジャパンカップ、有馬記念で競い合った相手でもある。

才能のあるウマ娘だとは思っていたが、こんな雰囲気を出すウマ娘ではなかったはずだ。

先日スズカのお見舞いに行ったときに、スペシャルウィークのことを聞いたら言葉を濁されたが、これを見れば何かがあっただろうことは容易に想像できた。

だが、彼女には何もできなかった。

声を掛けても、彼女は何も反応しなかった。

レースになればスペシャルウィークの独壇場だった。

圧倒的速度で走っていくスペシャルウィークに、誰もがついていく

のがやっとだった。

直線になり、追いつがったエアグルーヴを、さらに差し脚を發揮して、スペシャルウィークは一気に突き放した。

結果を見ればスペシャルウィークの圧勝であった。

## 青空に浮かぶ雲の悔恨

セイウンスカイは、自分が生きるのが下手だとわかっていた。群れるのは嫌い。

真面目にやるのも嫌い。

皆と同じことをするのも嫌い。

楽しいことが好きだが、トレセン学園はつまらなかった。

それが生きる上でマイナスに働くこともよくわかっていた。

だが、周りに合わせることもできずにいた。

クラスでもずっと浮いた存在で、本当に雲のようにふわふわと日々を過ごしていた。

下手するとこのまま退学かなあ、なんて他人ごとに思っていた、何も無いふわふわした日々が、彼女が転入してきてから変わった。

スペシャルウィーク。

編入してきて、最初の挨拶の時にギャグのような転び方をした彼女はとて面白かった。

そしてそれ以上にいろいろ面白い子だった。

まず他人との距離の取り方がおかしい。基本的にすさまじくぐい来る。

噂によるとド田舎の、ウマ娘も、同年代の子供もいない地域で育つたらしい。

だから他人との距離感を測るのが下手なのだろうが、そこで戸惑わずに根性で頑張るとばかりに突っ込んでくるのだ。

そんな彼女の態度にプライドが高そうに見えて基本世話好きなキングヘイローや、こちらも世話好きなグラスワンダー、面白い物好きなエルコンドルパサーを巻き込んで仲良しグループを作り始めた。

そしてなぜかその中にセイウンスカイも組み込まれた。

今でもよくわからないが、セイがスペにいたずらを仕掛けたことから、気に入られてると判断されたらしい。

しかし、そうして彼らとつるんでいると、予想以上に楽しかった。基本ポンコツなキングに、大和撫子に見せかけて根が畜族発想のグ



ラス。騒がしいように見えて実は真面目なエルにやっぱり何も考えてないスベ。

最初の印象とのギャップが多くてとても楽しかった。

一緒に遊びに行ったり、一緒にトレーニングしたり。

前は面倒でしかなかったことがとても楽しくて、こんな風に普通を楽しめることに気づかせてくれたスベに、セイウンスカイは感謝していた。

仲良くなつた私たちは、同時にライバルにもなつた。

ジュニア級王者でありながら負傷してしまったグラスちゃんと、海外遠征を目指してクラシック三冠を目指さなかったエルちゃんは別路線を歩んでいたが、スベちゃんとキングちゃん、そして私はクラシック三冠を競い何度も対決した。

結果は私の2勝、スベちゃんの1勝。残念ながらキングちゃんは1勝もできなかった。

だがそれでも、私もキングちゃんもとても楽しかった。

先頭に行く私と、それを追いかける二人。油断するとすぐに差されるような緊張感。

勝つても、負けても、とても楽しかった。

皐月賞の時先着した私とキングちゃんに、スベちゃんは祝福の言葉をくれた。

とても悔しかっただろうが、同時にライバルの勝利をととても喜んでくれていた。

ダービーで同じようにスベちゃんとキングちゃんに差された私は、身を引き裂かれそうに悔しかったのと同時に、ライバルの勝利が心から嬉しかった。

だから、本心から二人に祝福の言葉を述べられた。

そんな言葉をくれたのが何よりもうれしかったし、その言葉を述べられる私もとても誇らしかった。

雲のようにつかみどころのないだけの、なんでもなかった私を、ウマ娘にしてくれたのは、きつとスベちゃんである。

そんなスぺちゃんと、みんなと競える有馬記念を私は楽しみにしていたのである。

だが、スズカさんの事故から何かが絶望的に狂い始めていた。命は助かったが選手生命は絶望的と言われたスズカさん。

明言はしていなかったが、恋人であつただろうスぺちゃんは、そのころからおかしくなった。

菊花賞、ジャパンカップ、有馬記念というハードスケジュール自体は丈夫さと根性が売りのスぺちゃんらしいところもあるが、スズカさんの事故の際負傷したスぺちゃんには重すぎるスケジュールだった。菊花賞の時から異変は起きていた。

負けて呆然として抜け殻のようになったスぺちゃんは、ライブの時も、そのあとも何も話すことが無かった。

キングちゃんと二人で何度も話しかけたが、まさにバ耳東風といった感じで何も聞いていなかった。

ジャパンカップの時に勝利したエルちゃんにレース後話を聞いたが、やはり同じような感じだったらしい。

そして有馬記念。

グラスちゃんがG1レースでみんなと初めて走ることになった時のことだった。

全力で走るスぺちゃんは圧倒的に速くて、しかしそれを執念で差し切ったグラスちゃんは本当に強かった。

キングちゃんと二人、完敗だったね、と悔しいながら、しかし笑いながら控室に戻る途中、それは起きた。

「なんでっ、なんでえ……」

廊下でグラスちゃんに詰め寄り、崩れ落ちるスぺちゃんが居た。

その小さな悲鳴は絞り出すような、恨むような声であつた。表情を一切出さずにその場を立ち去ったグラスちゃん。

しかし彼女が一番傷ついていたのは私だけでなく、キングちゃんも、応援に来ていたエルちゃんも察しただろう。

ジュニア級の終わりに負傷して、半年以上走れなかったグラスちゃん。

そして、スペちゃんのことを好きだったグラスちゃん。

ダービーの時の勝利の女神のおまじない事件で失恋し、しかしそれでもスペちゃんと一緒に走り競うために今日まで頑張ってきたグラスちゃん。

まさに一日千秋の思いで今日を待ち、全力全霊を尽くしての勝利の後に待っていたのはただの恨み言だったのだから。

有馬記念が明けて、スペちゃんは完全に壊れた。

勝利のみを追い求めるまさに鬼になっていた。

私たちがいくら話しかけても、叫んでも、何も反応をししてくれなくなった。

スピカのトレーナーさんも明らかに持て余していた。必死に止めようとしていたが、その言葉すら全くスペちゃんには届いていなかった。

どうすれば振り向いてくれるか。試行錯誤をした結果、結局レースで勝つしかない、という結論になった。

何をしても本当にバ耳東風だったスペちゃんが、しかしトレーニング中一瞬でも追い抜くと反応することにみんな気づいていた。

スペちゃんのスケジュールは春のシニア三冠。

初戦の大阪杯には私たちは誰も出ないが、エアグルーヴ先輩が出ることになっていた。

女帝といわれた彼女なら、今のスペちゃんに対してでも勝ってくれるのではないか。

そんな期待を一瞬にして崩したのがスペちゃんの圧倒的な走りだった。

女帝すら歯が立たずに敗北した。

しかし、私たちはあきらめなかった。

二戦目は天皇賞春

シニアクラスの3200mの長距離レース。

私の得意な距離であり、かつて同コースの3000m菊花賞をレ

コードで勝利していた私は、勝ち目があると信じていた。

有馬記念明けから死ぬ気でトレーニングをした。

今までは努力する姿を他人に見せるのが恥ずかしくて、トレーニングは隠れてこそこそ行っていたが、そんな余裕なんて一切残っていなかった。

あの圧倒的な気迫のスペちゃんに、そんな甘いことを言っつて勝てる気がまるでしなかった。

当日の調子は最高潮。

トレーニングも十分積んで、今までで一番いい仕上がりでレースに挑めた自信があった。

結果は惨敗だった。

スタートから逃げる私のさらに一步前を走りだしたスペちゃん。

つぶしあいになるぐらいのハイペースで飛ばすスペちゃんに、どうにか食らいついていくのが精一杯になった。

スタミナには自信がある私すら潰れかねないハイペース。

しかしスペちゃんは直線に入りさらに伸びた。

圧倒的な差し脚。すでに道中でスタミナが切れていた私も、そのハイペースに飲まれてスタミナを切らした後続も、まったく追いつぐることができなかった。

かろうじて2着には滑り込んだが、スペちゃんとの差は大。測定不能なほど引きはがされていた。

それを惨敗といわずしてどういふべきか。

そのまま静かに控室に戻るスペちゃんに、私はかける言葉もでなかった。

## 一流ウマ娘の諦観

自分には才能がない。

それをあれほどみじめに思ったのは、あの時以外なかった。

キングヘイローの母親はアメリカG1を7勝し歴代最高と謳われたウマ娘だった。

そんな母に比べて、自分に才能がないことは、自分が一番わかっていた。

母が才能がない、帰ってきなさいと言う意味もよく分かっていた。

母が母でなければ、おそらく自分は一流のウマ娘として何も煩わされることなく居られただろう。

だが、自分は母と常に比べられる。

そして、自分の才能では母を超えるどころか、並ぶこともできないことはよくわかっていた。

放任主義に見えて心配性な母は、そのような風評が娘に立つことで、娘が傷つくことを心配したのだろう。

自分は自分、母は母。そういう気持ちで入ったトレセン学園では、しかし母の想定した通りの扱いを受けた。

勝手に期待され、勝手に失望される。

そんな繰り返しにどんどん心がささくれ立って行っていた。

徐々に荒れていくだけの状況だったが、そんな自分を助けてくれた子が二人いた。

一人はハルウララ。ルームメイトの彼女は、とても遅くて、しかしとても可愛らしくて、そして底抜けにいい子だった。

少しでも調子が悪そうにしていると、彼女は少ない語彙で最大限褒めてくれた。

すごい、はやい、かつこいい、つよい。

彼女が褒めてくれるからこそ、もう少しだけ、もう少しだけ、と頑張ることができた。

そしてもう一人はスペシャルウィークだった。

編入してきた彼女も、とても純朴でいい子だった。

無遠慮に対人関係の距離を詰めてくると、そのままみんなと仲良くなつていく彼女。

出自ゆえ遠巻きにされていた自分。学校生活になじめず浮いていたセイちゃん。トップチーム所属故高嶺の花としてやはり遠巻きにされていたエルちゃんとグラスちゃん。

そういつた子たちとも積極的に仲良くなつていった。

いつの間にか皆でお昼を食べたり、遊びに行ったり、一緒にトレーニングしたり。

仲良くなつたみんなで過ごす時間が何よりも楽しくなつていった。シルバーコレクター。

勝てない自分はそんな風に揶揄されるようになっていったがそれも気にならなくなつていった。

確かに皐月賞でもダービーでも2着になり、ついでに菊花賞でも2着になつた。

だが、それは自分にとっては誇りであつた。

ライバルたる一流のウマ娘のスペちゃんとセイちゃんと競い、肩を並べて競うことができたという証なのだから。

悔しくないわけではない。

1位が欲しくないわけではない。

でも、恥じるものではないと彼女が教えてくれたのだ。才能がないのが何だというのだ。母が何だというのだ。

そんな風に胸を張ることができたのだ。

だからこそ、そんな恩のある、大切な人であるスペちゃんが壊れていくのを見て、そして何もできない自分が本当に悔しかった。

有馬記念の後、スペちゃんに声を届けるには勝つしかない。そうみんなと結論付けたのは間違つていないと思う。

だが、必死になるグラスちゃんとセイちゃんに比べ、自分の非才を思い知ることになつた。

特にスペちゃんの大阪杯の圧倒的な強さを見て、気付いてしまったのだ。自分ではどう頑張つても勝てない、という事に。

セイちゃんは得意の長距離で活路を、グラスちゃんは持ち前の執念と努力で活路を見出そうとしていた。

二人とももしかしたら、と思える強さがあった。

それに比べ、自分はどうあがいても手が届かないのが分かった。

人生で初めて、心の底から自分の非才を呪った。

それでも死ぬ気で努力はした。

特にセイちゃんがスペちゃんに天皇賞春で完全に叩きつぶされたのを見て、余計あきらめたくなかった。

ただ、努力すればするほど、届かないことを痛感するだけであった。決戦である宝塚記念。

その前哨戦として挑んだ安田記念にはグラスちゃんも出ていた。

結果はグラスちゃんの勝利。自分はまた2着であった。

グラスちゃんは宝塚記念に照準を絞っていた。

だが、一流の自分には一緒に走ってわかった。おそらくグラスちゃんでも、今のスペちゃんには一步届かないことを。

キングヘイローは生まれて初めて、勝負を捨てることにした。

## 運命の宝塚記念

シニア春の三冠の最終戦である宝塚記念。

スペシャルウィークの姿もそこにあつた。

圧倒的一番人気で登場した彼女の圧倒的な雰囲気は誰が見ても明らかであつた。

ライバルとして同期のグラスワンダーやキングヘイローが挙げられていた。

特に去年有馬記念を勝ったグラスワンダーは快進撃を続けるスペシャルウィークへ対抗できるのでは、という期待があつた。

しかし、当日来ていた観客は、スペシャルウィークの勝利を確信した。それぐらい、彼女のオーラは圧倒的だつた。

出走前のゲート裏は静かであつた。

スペシャルウィークの放つオーラに誰もが圧倒されていた。

グラスワンダーも、キングヘイローもレースに集中しているように見えた。

特にトラブルもなくゲートインが完了し、そして特にトラブルもなく、レースは始まつた。

先頭に立ったのはスペシャルウィーク、ではなくキングヘイローだつたのは、観客も、他の参加しているウマ娘も、スペシャルウィークも驚いた。

キングヘイローはスピードで勝負するタイプのウマ娘だ。

彼女の瞬発力は驚異的で、末脚の鋭さは今のスペシャルウィークやグラスワンダーすら上回るものである。

一方でスタミナに難があり、その脚を長く使うことはできない。安田記念の走りから、短距離向き、下手するとマイルも長すぎるのではないかという話が出ているほどであつた。

だからこそ、ためて最後で差す、という戦術が彼女の常だつたのだ。それが先頭を切る大逃げである。



確かにキングヘイローが全力で走ればセイウンスカイすら逃がさなかったスペシャルウィークの前にも立てる。それだけの速さが彼女にはあった。

だが、その速度で競り合つて、最後までスタミナが持つとはだれにも思えなかった。

無視するのが正解だろう。しかし前を行かれるのを嫌ったスペシャルウィークは積極的に競り合いに行つた。

もしかしたら、キングヘイローに何か秘策があるのかもしれない。

観客も、他のウマ娘も、そしてスペシャルウィークも。

ただ一人を除いて、そんなことを考えていた。

圧倒的なハイペースでレースは展開した。

去年の宝塚記念でサイレンススズカが逃げた速度よりもさらに早いタイムで1000mを通過する。

キングヘイローとスペシャルウィークは競り合いながら、さらに速度を上げた。

だが、そんな速度で走つてスタミナに劣るキングヘイローが持つはずがなかった。

第三コーナーを回る頃にはキングヘイローは完全にガス欠を起し、ずるずると後退していく。

ただの破れかぶれだったか。

そう、誰もがそう思った。

ただ一人、彼女を除いて。

そうしてコーナーを回り切り、直線に入れば、スペシャルウィークの独壇場である、はずだった。

後続をさらに突き放しながら、スペシャルウィークが先頭でゴールすると誰もが思っていた。

そんなところをグラスワンダーが猛烈な末脚で襲い掛かった。

一瞬視界の後方に入ったグラスワンダーを、しかしスペシャルウィークはすぐに無視した。

確かに彼女の末脚は強烈だ。だが、このリードと自分の力を考えれ

ば、追いつけるわけがない。

一気に突き放してやる。そう考えてラストスパートをかけようとしたスペシャルウィークは異変に気付いた。

脚が動かなかった。

当たり前である。スタミナに優れ、過酷なトレーニングで凄みを増したスペシャルウィークとはいえ、全身全霊を賭けた破滅的な逃げについていって何もないわけがなかった。

ただの無策の大逃げではないのだ。キングヘイローの勝負も、プライドも、すべてを捨てたスペシャルウィークを潰すためだけの逃げだったのだ。

想定以上のハイペースに末脚をつぶされ、完全に体力を使い果たし、それでも執念だけで走るスペシャルウィーク。しかしその速度は普段の彼女とは雲泥の差だった。

とはいえ、キングヘイローが勝負を捨ててスペシャルウィークを潰しに行ったことを察していなければ、このハイペースに巻き込まれてスタミナを消耗し、先頭を執念で走るスペシャルウィークに追いつけなかつただろう。

現にほかのウマ娘は、ハイペースに巻き込まれ皆同じように失速していた。

だが、グラスワンダーだけは、彼女だけはこの瞬間が訪れるのを言葉も交わさずに理解していた。

完全なタイミングで全力を尽くしたグラスワンダーの末脚は、スペシャルウィークを一瞬で差し切った。

グラスワンダーが見事宝塚記念を制したのであった。

そして少女は再び歩き出す

「どうして……」

コースから帰る地下道。

スペシャルウィークを待っていた3人に、彼女は弱弱しくこう言った。

既にスペからあの禍々しいともいえるような雰囲気はなくなっていた。

迷子になった子供のような、そんな弱弱しい雰囲気しかうかがえなかった。

「どうして邪魔するんですか!! 弱い私は要らないのに! 無様な私は要らないのに!! 負ける私は要らないのに! 強くないとスズカさんと会えないのに! どうして!!」

その大きな瞳からはとめどなく涙があふれている。  
限界を迎えた彼女の叫びだった。

「無様ですわ。スペちゃん」

「!」

「最下位だったわたくしより、ずっと無様な2着ですのね、スペちゃん」

「キングちゃん……」

「わたくしは、あなたたちと勝負して、ずっと2着でした。勝てたことはありませんでした」

「……キングちゃん?」

「でも私は一流のウマ娘。それで自分のことを弱いと思ったことも、無様だと思ったこともありません!」

「!」

「負けることは悔しくても恥ずかしいことではない! そう教えてくれたのはあなたじゃないですか!! それでも価値があると教えてくれたのはあなたじゃないですか!! どうして自分を貶めるんですか

!! どうしてそんなこと言うんですか!」

「キングちゃん……」

キングが泣きながら叫ぶ。その声は確かにスぺに届いていた。

「私は、本当に何もかもどうでもよかった」

「セイちゃん……」

「スぺちゃんが学園に来て、遊んでくれるようになるまで、私は一人ぼーっと生きてきた。それでいいと思ってた」

「……」

「スぺちゃんが教えてくれたんだよ。みんなと走る楽しさを。みんなと遊ぶ楽しさを。みんなと競う楽しさを。みんな忘れちゃったの……? 楽しく、なかったの……?」

涙が頬を伝うセイのつぶやきも、また、確かにスぺに届いていた。

「スぺちゃん」

「グラスちゃん……」

「私、スぺちゃんのこと好きなの」

「グラスちゃん……?」

「もういいでしょう? スぺちゃんのことを捨てた冷たいスズカさんのことなんか忘れましょう? またみんなで走りましょう?」

「……」

唇と唇が触れる。

冷たく、そして涙の味がする口づけ。

スぺは気づく。グラスの瞳の奥の悲しみに。

ゆっくりと二人の距離が離れる。

「グラスちゃん、ありがとう、あと、ごめん」

「ふふ、やっといつものスぺちゃんになりましたね。はい、これ」

「?」

「新幹線のチケットです。今から飛び乗れば、夜までに東京に、スズカさんのところにつけるでしょう」

「! ……でもライブが……」

「スぺちゃんは怪我によりライブが難しいって伝えてきますわ。大丈夫、いぎとなったらわたくしが代役を務めてさしあげますから」

「キングちゃんはいつも2位だからサイドでのライブ得意だもねえ」

「ふん、次こそはセンターで踊るから問題ないですわ。ほら、愛しのズカさんのところに早く行きなさい」

「…… みんな、ありがとう」

スペは走り出した。

その足取りは震えていたが、迷いはなくなっていた。

「……行きましたわね」

「……でもさ、良かったの？ グラスちゃん」

「なにがですか？」

「グラスちゃん、スペちゃんのこと好きだったでしょ？ あのまま丸め込めばよかったんじゃない？」

「セイちゃん、本当に空気読みませんのね……」

「いいんです。私の初恋は、もう終わっていましたから。あれは、単なる残滓です」

「……わたくし、運営本部にスペちゃんのライブ欠席を伝えに行きますわ。セイちゃん、後は頼みますわ」

「キングちゃん、ずるいなあ…… グラスちゃん」

「なんですか」

「私でよければ、胸を貸すよ」

「……」

残された二人。

すすり泣く声が静かに廊下に響き続けていた。

ようやく交わった終着点

「こんばんは、ポニーちゃん」

「あ、お姉さま……」

東京に戻ってその日の夜。ゴールドシップはスズカの病院に忍び込んだ。

面会時間はとうに過ぎており、さすがにこの時間に会いに行ったら怯えられるか、と思っただが、そんなことは全くなく、フラットな感じでスズカは迎えた。

さすがにちよつと警戒心がなすぎるとはならないかと心配になった。

「最近忙しくて会えなくてごめんね。調子はどう？」

「……おねえさまあ……」

「ほらほら、泣かないの」

急に号泣を始めたスズカを抱きしめ、そのまま膝枕をするゴールドシップ。

泣いている原因は大体わかっていた。

ゴールドシップとマックイーンが東京を離れ、高知へ行ったのがちょうどスズの菊花賞の頃だった。

それから今日行われた宝塚記念まで、正直高知の仕事で手いっぱいだったのだ。

なんせ人員が少なすぎた。手が足りない分動ける者が動かざるを得ず、ゴールドシップもマックイーンも働きづめであった。

そのせいで中央で何が起きていたか、まったくノーチエックだったのだ。

大したことは起きていないだろうという予想をしていたのも悪かった。

東京に戻ってくる間、そういえば中央の状況はどうなっているだろうかと確認したら、スズが覚醒して、大暴れしていた。

スズは確かに優秀なウマ娘だが、こういう身を削るような走り方をする娘ではなかったはずだ。

原因はなんとなく予想ができた。

スペがそんなになるのなんて、目の前のスズカが原因以外考えられなかった。

とはいえ普通にG1を6戦して1着2回、2着2回、3着2回でライブを外してないんだからかなり優秀な成績である。

今度会ったらいっぱい褒めてやろうと誓いながら、スズカの頭を撫でていた。

「あのね、スペちゃんがね、すごくむりするの……」  
「なるほど」

「スズカ寂しくてね、一緒にいてほしかったのに、全然来てくれないし」

「ふんふん」

「それでスペちゃん負けると悔しくて泣いちゃうのに、スズカを頼ってくれないし…… お姉さまも来てくれないし……」

「ごめんね、忙しくて」

スズカの頭をなでなでと撫でる。

寂しき大爆発して若干幼児退行していた。

「スペちゃんにね、無理してほしくなかったの」

「それで？」

「スズカが原因で無理するなら、もう会わなきやいい、って思ったの」  
「ふむふむ」

「だからもう会わないって言ったの。なのに余計無理してるの。スペちゃんのばか、ばかばか、あんぽんたんーん！」

「それ、スペちゃんに言ったのかしら？」

「言ってる……」

「ポニーちゃんもちゃんと言わなきやだめだよ。ねえ、あんぽんたんなスペちゃん」

「!？」

膝枕の体勢だったスズカががばっと起き上がる。

扉の前にはよれよれになったスペがいた。

「スズカさん、その人はだれですか？」

「え、えつと……」

「説明してください。スペは今、冷静さを欠こうとしています」

「あ、あの……」

「スペちゃん、落ち着いて。私はただのポニーちゃんのお姉さまよ。恋人なあなたとの敵ではないわ」

「……」

「はいはい、席を譲りますから」

手を上げながらゴールドシップがその場から離れ、病室の隅に移動しようとするが、そのゴールドシップをはね飛ばし、スペはスズカに駆け寄り、抱き着いた。

「スズカさんのほかあ、寂しかったんだからあ」

「ほかはスペちゃんだもん！ 私も寂しかったもん！」

抱き合いながら、お互いの体温を感じながら、お互いに本音をぶつけ合う二人。

とても楽しそうな二人を背に、邪魔はしないようにしながら、ゴールドシップはその場から去った。



閑話 学園障害3600m ドキドキドキ君の  
愛馬の指の数はあと何本記念

「そういえばゴールドシップさん」

「なんだ？ スペ」

「スズカさんの呼んでたお姉さまってゴールドシップさんですよね」

「！」

「!?」

「……」

ある日の放課後の部室

やっと退院できて、現在リハビリ中で歩くことはできるようになつたサイレンススズカ

スズカの周りを甲斐甲斐しくウロチョロするスペシャルウィーク  
スイーツを食べるメジロマックイーン

そしてゴールドシップの4人だけしかその時にはいなかった。

高知の仕事もいち段落して、夏合宿前にマックイーンもまた東京に帰ってきていた。

一方でウオツカとダイワスカーレットは実家に帰っており、タキオンとトレーナーもまだ部室へ来ていなかった。

そんなのんびりした時間の中で、スペが爆弾を投げ込んだ。

「何のことなんだZE?」

「ゴールドシップさん？ そもそもお姉さまってなんなんですか？」

「ゴルシちゃん身に覚えがないんだZE!」

「ゴールドシップさん、なんでごまかすんですか？ スズカさんに下心があるんですか？ 指の一本一本折っていけば素直になりますか？

？ 大丈夫、足まで合わせれば20本ありますから」

「こわい!!」

「スペ先輩! ちょっとスズカ先輩! 止めてください!」

「え？ お姉さまが、ゴールドシップさん？ え？」

「こっちはこっちで大混乱してらっしゃる!!」

ゴールドシップはごまかそうとしたが、失敗していた。

スぺはこの前まで纏っていた重い威圧感を伴う黒い殺気を纏い、ゴールドシップに詰め寄っていた。

やばいと思ったマックイーンが必死に止めようとスぺを羽交い絞めにするが、殺意の波動に目覚めたスぺのバ力は10万バ力といわんばかりのパワーでずると引きずられていた。

スズカでないと止めきれない、と思ったマックイーンが助けを求め、スズカは絶賛大混乱中であった。

「ちよ、ちよつとゴルシちゃんは木星までドーナツ食べに行ってくるんだZE!!」

「待ってくださいゴールドシップさん！ 痛いのは最初だけですから！」

「変なものに目覚めさせられる！」

部室を飛び出したゴールドシップ。

そのゴールドシップを追いかけて、マックイーンを振り払ったスぺシャルウィークが部室を飛び出した。

全速力で飛び出したゴールドシップはかつてない素晴らしいスタートが切れた自信があった。

捕まったらやばいと、凱旋門賞の時よりも必死に走り出すゴールドシップ。

「逃がしませんよ？」

しかし後ろからの圧力が一向に減らない。

怖くて後ろを振り向けないが、スぺがきつと全力で追いかけてきているのが背中に刺さる殺気から感じられた。

このままでは追いつかれる。

そう考えたゴールドシップは食堂へと飛び込んだ。

食堂に入った瞬間、スぺは条件反射でどんぶり飯を受け取っていた。

これを食べている間に距離を離す、そんな作戦だったのだが……

シユパン

どんぶり飯3杯が一瞬にしてなくなった。

「食うの早すぎだろ!？」

「ちゃんと三十回噛みました」

「余計こえーよ!!」

栄養補給で体力を回復したスぺの猛烈な追い上げは先ほど以上である。

ゴールドシップは作戦の失敗を悟った。

そうしてそのまま次に飛び込んだのはタキオン研究所であった。

ゴールドシップが向かったのは鉄骨渡りの場所である。

某漫画に触発されたアグネスタキオンがひとまず作ってみたはいが、使い道がなくて放置されている場所である。

ゴールドシップはバランス感覚に自信があり、簡単に渡っていた。

しかしスぺは、バランス感覚は正直あまり良くないのをゴールドシップはわかっていた。

ダンスもちよつと不格好だったり、ツイスターゲームがへたくそだったり、基本バランス系に弱い。

ここなら落ちてくれるのではないかと思いいここに突入したのだ。

ゴールドシップがさつきと渡った後、スぺもついてこようとしたが、ゴールドシップの予想通りスぺはすぐに落っこちた。

20m下の人参ハンバーグクッションの上に落ちればしばらく上がってこれないだろうとゴールドシップは予想したが……

「逃がしませんよっ」

下に着地したスぺは、そのまま壁を駆けあがり始めた。

すぐに上ってきそうなのを察したゴールドシップはまた全力で逃げ始めた。

そうして走っているゴールドシップは飛び込み台に駆け上がる。

スぺが苦手になっていたものに飛び込みがあったのを思い出したのだ。

よくよく考えれば下で待ち受けられたら容易に捕まえられるのだが、頭の中がスズカさん一色に染まったスぺは、そこまで頭が回らずに愚直に追いかけた。

そうしてゴールドシップの飛び込み。

スタート以外は何でもできるという名に恥じぬ美しい飛び込みから、着水後の着衣水泳まで完璧に行い逃げていくゴールドシップ。

スぺは根性と勢いで飛び込み台から飛び出したはいいが、お腹から着水し悶えながら沈んでいった。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ……」

マックイーンの血を引きスタミナに自信があつたゴールドシップも、長時間圧力をかけられながら走るのはかなり過酷だった。

既に息が上がり、へろへろになつていた。

そんな中、最期の気力を振り絞つて部屋に戻ってくる。

後ろからは殺意の波動に目覚めたスぺが最後の追い上げをしてきていた。

死ぬならマックイーンの手で、そんな覚悟を決めたゴールドシップ。

ゴールドシップを捕まえようとしたスぺを抱きしめて止めたのは、スズカだった。

「スぺちゃん?」

「スズカさん?」

「スぺちゃんは、私の人参よ」

「スズカさん!」

ひしつと抱き合う二人。

傍で聞いていたマックイーンもゴールドシップもスズカの発言の意味が全く分からなかったが、おさまったようなので良しとすることにした。

「で、お姉さま?」

「……」

「説明してくれますよね？」

「スズカがとてもかわいかったから、お姉さんぶりたかった。反省も後悔もしていない」

「……はあ……仕方ないですね。また甘えさせてくださいね、お姉さま」

ゴールドシップの左腕に抱き着くスズカ。

「スズカさんのお姉さまなら私のお姉さまでもありますよね！」

スズカと目と目で通じ合ったスペは超理論を展開してゴールドシップの右手に抱き着く。

キヤツキヤしながら擦りつく二人に基本かわいい子が好きなので、まんざらでもなさそうなゴールドシップ。ミシミシ言っている右手は気にしないことにした。

「……わたしも交せてくださいまし！」

それに寂しさを我慢しきれなくなったマツクイーン。

勢いをつけてゴールドシップに飛び込むのだった。

## 間章 それぞれのあり得た未来という名の悪夢 それは長い本当の悪夢

夢を見た。

ひどく現実的な夢であった。

夢の中の私もまた、スペシャルウィークだった。

しかし、いろいろなものが違った。

夢ではスピカというチームはなく、私は違うチームに入っていた。チームではマックイーンさんが一緒だったが、スズカさんはリギルにいて、ゴールドシップさんはマックイーンさんがいるのにどこにもいなかった。

タキオンさんもスカーレットちゃんもウオツカちゃんもいなかったし、すごく不思議な感じがした。

チームは違ったがスズカさんとはルームメイトであり、やはり仲が良かった。

どちらから言わずとも、恋人みたいな感じだった。

速くて、きれいで、優しいスズカさん。

でもあの時、あの運命の日曜日に、夢の中のスズカさんは帰らぬヒトになった。

伸ばした手は届かなかった。

夢の中の私は泣き叫んだ。

夢であってほしいと何度も叫んだ。

心が張り裂け、苦しみ、そして諦めた私は、すべてを捨てた。

ただ日本一のウマ娘を目指すだけの存在になった。

グラスちゃんが、エルちゃんが、セイちゃんが、キングちゃんが皆私を呼んでいた。

皆私に手を差し伸べていた。

しかし夢の中の私はすべてを拒絶した。

すべてを叩き壊し続けた。

勝ち続け、壊し続け「絶対」という異名すら得た私に残されていた

のは何もなかった。

称えられ、褒められた先にあつたのは何もなかった。

家に帰らない間に、お母ちゃんは亡くなった。

エルちゃんは凱旋門賞に再度挑戦し、最後はレース中の事故で亡くなった。

セイちゃんは怪我から復帰したが、実力は戻らず私に叩き潰され引退。その後早逝した。

何も残っていないことに初めて気づいた私は、残っている人にだけでも謝りに行こうとした。

ただの自己満足かもしれない。意味が無いかもしれない。でも謝りたかった。

そうしてまずはグラスちゃんに会いに行つた。

私を愛してくれ続け、しかし私が壊し続けた彼女。会いに行つたそこにいたのは既にただの肉の抜け殻だった。

本当の絶望はその時に知つたのだと思う。

お母ちゃんの残滓が残る牧場に私は帰つた。

それはただの抜け殻だった。

何をしなくても遊んで暮らせる財も、会う人会う人に褒め称えられる賞賛も、何も価値がなかった。

私が欲しかったのはお母ちゃんが喜んで抱きしめてくれることだった。

私が欲しかったのはみんなまで走って遊んで競って楽しむことだった。

私が欲しかったのは、大事なあの人を助けられる手だった。全て失つた。いや、自分がすべて捨てたのだ。

自分が憎かった。もっと苦しめばいいと思つた。苦しんで苦しんで苦しんでのたうち回りながら死ねば、少しは自分も許されるだろうか。そう思っていた。

キングちゃんやウララちゃんはそんな私すら、無価値な私すら心配し訪ねてくれた。

しかしそれすら私には苦痛だった。

結局夢の中の私の希望通り、夢の中の私はのたうち回りながら、苦しみに泣いて、孤独に死んでいった。

目を覚ますとそこは学園の寮の自室だった。

とても怖かった。あれは単なる悪夢ではない。自分のあり得た未来だった。

あれほど苦しんでも衰えない無念が、身を焦がした。

怖くて怖くて、私はスズカさんのベッドにもぐりこんだ。

スズカさんのぬくもりを感じ、私はやっともう一度眠ることができ  
るのだった。



## 彼女の恋が始まって、そして終わるまでの話

一目見たとき、私、グラスワンダーは彼女に墮ちた。

理由はその時はわからなかったが、付き合いが長くなればなるほど、その理由はよくわかった。

トレセン学園に於いて、クラスメイトはライバルと同義である。

隣のあの子が次のレースで自分を追い抜くかもしれないという恐怖が常にある。

仲良くするなんてとんでもない。

皆がそれぞれ、孤独に戦う、そんな空間だった。

そんな雰囲気にも染まらない子もいないことはなかった。

例えばハルウララ。

桜色の彼女は、走るのが好きであり、誰とでも仲良くなろうとしていた。

そんな彼女と仲良くなった子は何人もいた。

特にルームメイトのキングヘイローとは非常に仲が良かった。

しかしそれだけであった。

彼女はあまりに遅すぎた。

学園の異物であり、異物だからこそ受け入れられたに過ぎなかった。

そんな中、彼女が学園へと編入してきた。

皆が警戒する中、教室に入ってきた彼女は盛大に転んだ。

それがとてもおかしくて、しかし彼女の本領はここからだった。

クラスメイト一人一人に挨拶をし、お菓子を配り、そして遊びに行く約束やトレーニングする約束を取り付けていった。

自分の速さに自信がないからおもねっていることを疑いもしたが、そうではなかった。

彼女は、誰よりも速かった。

短距離も中距離も長距離も

どれでも彼女は速かった。

最初の頃はレース場に慣れていなかったようだが、それにも慣れてしまえばあとは彼女の独壇場であった。

しかし、そんな彼女は周りも心配になるくらいお人好しで優しかった。

他の子に、走り方やレースのアドバイスをしたり、なんていうことを日常的に行っていた。

「みんなで走った方が楽しいですよ♪」

それが彼女の口癖だった。

彼女はとても人気があった。

思春期の娘が集まり、惚れた腫れたの話も多いトレセン学園。

そんなのくだらないと斜に構えていた私が、真つ先に彼女に惚れるのだから救いようがなかった。

よほどわかりやすかったようで、皆にすぐばれた。

私が彼女に惚れているのを知らないのは、それこそ彼女自身と、あとはハルウラさんぐらいたったのではないだろうか。

怪我で走れない自分をいたわり、ときにはいろいろ手伝って優しくしてくれた彼女。

リハビリにも協力してくれて、一緒に走るのが楽しみだと言ってくれた彼女。

一緒に過ごせば過ごすほど、私は彼女を好きになっていった。そうして、私の恋は、あの時に終わった。

日本ダービー。一生に一度しか出られないレースに彼女は出ていた。

一番人気であった彼女は、パドックでルームメイトのサイレンススズカさんと口づけを交わしていた。

きつとスズカさん以外は誰も見たことが無かった、幸せそうな彼女の笑顔。

私は、勝負すらせずに負けたことを悟った。

失恋はつらかったが、案外あきらめがつくのは早かった。

自分はそのそも、恋のレースに参加すらしていなかったのだ。

周りが自分を応援してくれているから慢心していたのだ。負けたのが当然だというのはすぐにはわかった。つらくはあっても、受け入れられた。しかし、彼女と勝負したいという気持ちはより高まっていった。綺麗な彼女の走りに私は惚れたのだ。だから、彼女と競いたかった。勝ってみたかった。

毎日王冠。

おハナさんに無理を言って参加させてもらったそれは彼女の大好きなスズカさんと、一度戦ってみたかったゆえだ。

案外甘いおハナさんは、いやそうにしながらも許可をしてくれた。そうして、スズカさんと走った。

圧倒的な彼女の速さに、影を踏むことすらできなかった。

彼女の強さと美しさに、負けを認めた自分がいた。

だがすべてをあきらめたわけではなかった。

有馬記念。

ここにはフランス遠征が控えていたエル以外皆が参加する予定だった。

だからこそ、ここに目標を合わせて私は頑張ってきた。ここで、彼女と競うことができるはずだった。

そしてその本番、彼女に私は勝った。

集中を欠いていた彼女は私に全く気付いていなかった。

本当に集中していたら、私は彼女を差し切れなかっただろう。

速度的に届くかもわからなかったし、何より少し横に動いてブロックされてしまえば、ギリギリの私は彼女に届かなかった。

その意識の隙間を突いた勝利だった。

そうして初めて彼女と競い、そして勝った私に待っていたのは

「なんでっ、なんでえ……」

崩れ落ち、私を責める彼女であった。

彼女が壊れ始めていたことを、鈍い私は初めてこの時察したのだっ

た。

そんな彼女を見て、私はショックを受けた。

彼女に拒絶されたから、ではない。

彼女が壊れつつあったから、でもない。

そんな状態の彼女に気づけない自分に、身勝手な自分にショックを受けた。

状況は、情報を集めればすぐにわかった。

スピカメンバーとは仲が良いし、スズカさんは元リギルだけあってエアグルーヴ先輩など状況を知っている知り合いは多かった。

いろいろ聞いた私は気づいた。

『彼女の隣が今、空いている』

とどかないはずだった恋が、とどくのが見えてしまった。

邪念を振り払えない私は、三日三晩考えて、何が正しいのかわからなくなっていた。

終わったはずの恋が胸を焦がした。

どうしていいかわからなくなった私は、スズカさんに、彼女を捨てたヒトに会いに行くことにした。

スズカさんは私の恋心に気づいていた。

あれだけわかりやすいのだから当然だろう。

私が行けば何を言われるか、スぺちゃんを取らないでと詰められるのではないかと身構えていた。そんな彼女から告げられたのは

「スぺちゃんをお願いね」

という一言だけだった。

もう走れないかもしれない彼女は、しかし今でも強くて綺麗で優しくかった。

私はまた、負けを認めた。

私のすべきことは決まった。

「で、何良い子ぶっているんですか？」

「……」

「スズカさんは言っていましたよね？『スペちゃんをお願い』って」  
「……」

「誰が文句を言うんです？ エルも、セイちゃんもキングちゃんも、スズカさんも、絶対に文句を言わない。祝福してくれる。おハナさんやリギルのメンバーだって、スピカのみんなだって祝福してくれる。何を血迷っているんですか？」

「……」

「ほら、何を言えればいいかわかるでしょう？ 何をすべきか、わかるでしょう？ その死んでしまいうまくない苦しかった恋が、叶うんですよ？ あと一歩ですよ？」

「……」

「ほら」

「それで、私は何を手に入れたんですか？」

「っ！」

「その選択をした私は、恋に踊ったあなたは怎么样了ですか？」

夢の中で語りかけて来た彼女が自分だというのはすぐにわかった。

何かが少しずれた世界の私だとすぐにわかった。

恋に狂った彼女は何が起きるか読めなかったのだろう。

だが、冷静になれば何が起きるか、簡単にわかった。

「……」

「自分勝手な恋を押し付けて、彼女を壊して、自分も壊れた哀れな私」

「……」

「この恋はもう終わったんです。また恋に落ちて、スズカさんに挑んでもいいかもしれませんが。でも今は、ちゃんと終わらせないといいけないんです」

「……」

「身勝手な恋を終わらせないと私もスペちゃんもスズカさんも、先には進めないんですよ」

「だって今しかないじゃない！ スペちゃんが私のものになるのは今しかないのはあなたもわかるでしょ!!! スズカさんに私が！ 身勝

手な私が勝てるわけないじゃない!!」

子供のように叫ぶ私。

スペちゃんを壊し、自分を壊すことでしかスペちゃんを手に入れられなかった私。

愚かしく、哀れで、しかし狂おしいほど愛しい私がそこにいた。

「交わることはなくても、並ぶことはできます」

「……」

「私は並ぶことを選びました。大切な彼女を壊さない道を選びました」

「……」

「さようなら、愚かな私」

「まっつてよお、一人にしないでよお……」

「それを選んだのはあなたです。私ではない」

すすり泣く声とともに彼女は闇に沈んでいった。

魔法を解くのは口づけだと相場が決まっている。

私たちは皆、自分勝手な恋の魔法に捕らわれていた。

魔王を倒した今こそ、お姫様の恋の魔法を解かなければならなかった。

私の醜い自分勝手な初恋という魔法も

スズカさんの相手を思いすぎた故の恋という魔法も

スペちゃんの勝利を捧げるといふ行き過ぎた恋の魔法も

きつとこの口づけで解けるはずだ。

初めての口づけは、冷たく、そしてしょっぱかった。

甘酸っぱさなんてかけらもないそれで、しかしスペちゃんはやっと恋の魔法という悪夢から目を覚ましたようだ。

こうなれば私にできることは何も無い。

スズカさんのところに向かいたいだろう彼女の背中を押すだけである。

やっと、私の自分勝手な初恋は、ここで終わった。

## 春色のちよつとした幸せな夢

桜散る木の下に、彼女はいた。

葦毛の少女が、彼女に駆け寄る。

「元気だった？」

「お姉ちゃん！」

「ここが夢だとはわかっている。

夢幻の狭間。変えられた運命の残滓が漂う場所だというのはわかっていた。

「相変わらず、あなたは頑張り屋さんなのね」

「お姉ちゃんには及ばないよ……」

桜色の彼女が、くすくすと笑う。

葦毛の少女も、釣られて笑った。

「今は幸せ？」

「うん、とつても。かわいい子供や孫、曾孫もいて、最近は玄孫にまで会えたもの。全部、お姉ちゃんのおかげ」

「それは違うわ」

「？」

「全部あなたの頑張りの結果よ」

「そうじゃないよ」

「いいえ、そうよ。あなたの人生は、あなたのもの。私はただ、ちよつとだけ手を引いて、背中を押しただけよ」

「お姉ちゃん……」

桜色の彼女はとても楽しそうに、幸せそうに笑った。

「私の人生はとても幸せだったわ。あなたが愛してくれて、感謝してくれて、とても楽しかった」

「でも、お姉ちゃんは誰にも覚えられてない」

「あなたが覚えてくれたじゃない。それ以外何もいらわないわ」

「お姉ちゃん……」

桜色の彼女が、葦毛の少女にくちづけを落とす。

最初で、最後の交わり。

それはとても暖かった。

「最後に一つお願い」

「何でも聞くよ」

「あの子を、ハルウララを、お願いね。私と、あなたの子供みたいなものだから」

「子供…？」

「あなたの願いと、私の願いの残したもの。私の残滓。それはたぶん子供みたいなものよ」

「ふふ、そうかもしれないね」

「それじゃあ、ね」

既に物語は大きく変わっている。

彼女のおかげで、そして愛しい玄孫のおかげで、幸せな結末が生まれつつある。

それはつまり桜色の彼女の物語が消えつつあるという事。

この時間は本当に刹那の瞬きでしかないのはどちらもわかっていてた。

唐突に吹き荒れる春一番。

桜吹雪に消えていく桜色の彼女

葦毛の少女は思わず抱き着く。

「お姉ちゃん！ 私は！ あなたと一緒に生きたかった！ あなたの横を歩きたかった!!」

「わかってる」

「でも…… 私は幸せでした。お姉ちゃん、ありがとう」

「私も、幸せだったわ」

葦毛の少女の口づけが、その桜色の唇に落とされ、そして空を切った。

「おばあちゃん？」

「あら、おはよう、ウララちゃん」

「疲れてるの？」

桜色の少女が、葦毛の老婆を心配そうに見る。



とても幸せな、とても懐かしい、そしてとても悲しい夢を見ていた。自分の物語が、やっと幸せな終わりを迎えたのだと、彼女は気づいた。

「ちよつと、懐かしいものを見てしまいましてね」

「大丈夫？ おばあちゃん」

「ふふ、ありがとう。ウララちゃん。大丈夫よ」

桜色の彼女と葦毛の少女の物語は終わった。

だが、葦毛の老婆の物語はまだまだ先が長いのだ。

例えば、目の前の桜色の少女の幸せな物語はまだ始まったばかりである。

彼女と自分の子供のような桜色の少女を、目いっぱい幸せにしななければならぬのだ。

他にも、孫と玄孫の物語もまだまだ続いている。

先は険しく、難しいだろう。だが年老いた自分でもできることはあるはずだ。

全てにハッピーエンドを。

そう願った桜色の彼女のために。

まだまだ葦毛の彼女の頑張りは終わらない。

それは何の変哲もないあり得た可能性

私は夢を見た。

胡蝶之夢

現実か夢か分からないような夢である。

その世界では、ゴールドシップがいなかった。

退学勧告をされる時、彼女は飛び込んでこなかった。

カフェが無表情にボクに退学について聞いてくる。

彼女なりの精いっぱい心配であるのは今の私にはわかったが、夢の中のボクは心配している振りでもしているのか、と斜に構えたことしか考えていなかった。

スカーレット君も興奮しながら抗議する、と息巻いていたが、それすらどうでもよかった。

どうでもよくないはずなのに、どうでもいいと思っただボクはそのまま退学した。

実家から幾何の金をもらったうえで絶縁させられたボクは海外に渡った。

オーストラリア、フランス、イギリス、アメリカ、中国やインドといったアジアにも向かった。

途中途中でウマ娘達をモルモットにして実験を重ねた。

治ったものもいれば、治らなかつたものもある。

ボクはあくまで医師であり研究者であつて神ではないのだ。

時に感謝されたが、怖がられたり恐れられたり気味悪がられたり、そういったことを繰り返しながら世界を巡った。

ウマ娘というのは調べれば調べるほど面白かつた。

カフェやスカーレット君はボクのことを心配してくれていた。

全てを捨ててまで、ボクを助け、尽くしてくれた。

それに対してボクは都合のいい駒だと思わなかつた。

私はそれに絶句した。

最後には二人とも、力尽きるようにボクから離れていき、日本へと帰った。

ボクはそれに対して、静かになって清々したとしか思わなかった。  
研究に研究を重ね

狂気に狂気を重ねた先に

ついにウマ娘の可能性の先が見えた。

ウマ娘とは何か。

そうして追求した先にあつたものは何か。

それを見たボクは、賞賛に包まれながら一人で死んでいった。

運命が終わった瞬間、視界が暗転する。

何もない暗い空間。私と彼女がいた。

「……キミはいつたいなんだ」

「ボクはキミ、キミはボクだよ。わかるだろう？」

「…… 可能性の残滓、運命の残滓といったところか」

それは単なる直感だが、確信があつた。

何かが大きく変わり、そして未来が変わつた感覚がどこかにあつた。

変わったという事は元があつたはずであり、その元あつた何かが形を作つたのが、私である彼女だという事は、直感としてわかっていた。  
「正解だよ。そしてキミはボクなんだ。こうなるのはわかるだろう？」

「私はキミにはならない！ カフェを！ スカーレット君を！ みんなを捨てたりはしない！」

「はっはっは。本気かい？ そして正気かい？ わかるだろう？ ウマ娘の可能性の先は、こうしないとたどり着けないことぐらい。なんせキミはボク、ボクはキミなんだから!!」

狂つたように笑う彼女。

言われなくてもわかつていた。

「ウマ娘の可能性の先」とは、全てを捨ててようやくたどり着けるそういう境地だと。

だから私は深呼吸して、言った。

「もう一度言おう。私はキミでキミは私だ。だが私はキミと同じ轍を

踏まない。そんなものより大事な物を知っているのだから」

「……」

「キミもわかっているのだろうか？」

「ふふ、隠し切れないか」

「私はキミでキミは私だからね」

「そうさ、皆はボクを天才と称えたがね。結局ボクは大事な物すらわからなかった愚者さ」

「そうだね」

「辛辣だね」

「自分の愚かさは常々感じている」

「はははは、そうかいそうかい」

「だがキミには感謝するよ。自分が間違っていないことが確信できた」

「それならよかった、ボクの本当に無価値だった人生にようやく価値ができた」

「ありがとう。間違った私」

「がんばれよ。これから先に行くボク。ついでに餞別に一つ教えるよ」

「……？」

「ウマ娘の可能性の先、そこには、何もなかったよ」

「……なにも？」

「輝かしい未来も、素晴らしい世界も、何もない、ただの荒涼たる場所だった」

「……」

「絶対に間違えるなよ」

そうして私は目を覚ました。

時刻は午前9時

全くの寝坊だった。

久しぶりにカフェの苦いコーヒーが飲みたくなった。

「カフェ」

「なに？」

「苦い」

「はい、砂糖とクリーム」

「……」

「……」

「カフェのコーヒーはおいしいなあ」

「……ありがとう」

遠くからスカーレット君の呼ぶ声が聞こえる。

カフェと二人で飲むコーヒーは、苦くて、そして甘かった。

## あるお昼のお茶会

「カフェはさ、私のどこが好きなんだい？」

「寝言は寝てから言ってください」

アグネスタキオンは、基本的に毎日マンハッタンカフェとお茶会をする。

アグネスタキオンは絶対の紅茶党

マンハッタンカフェは絶対の珈琲党である。

だから二人の好みは一切合わなかった。

お菓子だって、タキオンは砂糖をはちみつで煮詰めたような甘いものが好きで、一方カフェは素朴でさっぱりした味のものが好きだった。

だがなぜか、毎日昼食後に二人でお茶会をしていた。

当然二人が飲食するものは全く違う。

今日のタキオンはスぺ牧場特製激甘ショートケーキに、ミルクとはちみつたつぷりのミルクティーである。

一方カフェはおからクッキーとブラックの珈琲である。この素朴な味が、カフェは気に入っていた。

「だっておかしいじゃないか。食べ物好みも違う。話題も違う。なんでカフェはボクと一緒にお茶をすすってるんだい!？」

「私は珈琲をすすってます」

「そういう意味じゃないの分かってるだろ！ だからきつと、カフェは私が好きだと思ったのに！」

「それなら、タキオンが私のことが好きなのでは？」

その理屈ならタキオンがカフェのことが好きになってしまいうだろう。

どうせ役に立つモルモットぐらいにしか考えていないだろうな、と思っただけはあきれたようにそれを指摘した。

どうせ不敵な笑いをするだろう、と思っていたカフェ。

タキオンは少し悩み。

さらに悩み。

ポン、と手を打ち

そして真っ赤になった。

「カフェ、大事なことを気づいてしまった」

「ろくでもないことな気がしますね」

「気の迷いかもしれないが、私はカフェのことが好きなのかもしれない」

「うん、気の迷いですね」

「カフェが連れない!! 冷たい!!」

「いつもです」

「そうだね、いつもだったね」

立ち上がったタキオンが座った。

ケーキを一口食べる。とても甘い。

ミルクティーを一口飲む。とても甘い。

甘いのと甘いので、タキオンは幸せに包まれた。

「一応聞いてあげますが、なんであなたが私を好きだという結論に達したのですか?」

「好きとは何か、分析してみたんだ」

「なるほど」

「特定の相手と一緒にずっといて落ち着くことじゃないかと思ったわけだ」

「なるほど」

「つまりカフェだ」

「なるほど」

「カフェ、聞いてないだろ」

「聞いてないですね。興味ないですから」

「悲しい……」

「それならダイワスカーレットさんやゴールドシップさんのことも好きなのでは?」

「スカーレット君はちょっと違うな。こうやってゆっくりする相手じゃない。ゴールドシップ君は全く落ち着かないから絶対違うな」

「なるほど」

カフェが珈琲を飲む。とても苦くて、そして豊かな香りがした。

「あなたが」

「うん？」

「あなたが私のことを好きだという結論に達したのは、これで97回目ですよ」

「97とはキリがいいね。100以下の数字の素数で一番大きな数字だ」

「そうですか」

「それでカフェはさ、私のどこが好きなんだい？」

「寝言は寝てから言ってください」

何の変哲もないお昼の時間が過ぎていく



## 間章 それぞれの物語の断片 南国の桜と不撓不屈の王

キングヘイローは、夏合宿として高知を訪れていた。  
宝塚記念。

あれが間違っていたとは今振り返っても思わない。  
だが、やはり悪いことだったと今でも心に刺さったままである。  
はつきり言って八百長である。

グラスちゃんを勝たせるために勝負を捨てたのだから、八百長以外の何物でもない。

それに気づいている者はほとんどいない。

自分と自分のトレーナーを除けば、スぺちゃんやいつものみんなと、グラスちゃんやスぺちゃんのトレーナーぐらいだろう。

誰もがそれを口にしない。

誰もがキングを糾弾しない。

だからずっと明らかになることはないのだろう。

だからこそ、キングヘイローは自分が嫌になっていた。

自分のことを心配する母

自分のことを慕うみんな

自分のことを応援するファン

たくさんの人を裏切ってしまった。

負けることはしようがない。

勝負というのは一人の勝者とたくさんの方者を作ることだ。

勝つことを期待されていても負けることは当然ある。それは裏切りではない。

だが、勝負を捨てること、勝つことをあきらめることは、許されるものではない。

皆が私が、キングが勝つことを望んでいるのだから。

勝つつもりがない勝負をすることは裏切りではない。

だが、今回のことを間違えと言いたくもなかった。

間違いなら正せばいい。省みて、直せばいい。

無様と言えども、それが王の王たるプライドである。

しかし、スペちゃんを助けることが、すべてを捨てて裏切っても助けることが、間違いだとは言いたくなかった。

優しい母も、慕う友人も、もし正直に話しても皆自分のことを責めないのはキングもわかっていた。

だからこそ、そう、だからこそ、キングは自分のことが許せなかった。

どうしていいかわからずにいたキングに、トレーナーは高知へ合宿へ行くように命じた。

最近ではメジロ家のテコ入れで、中央と高知の交流が盛んになっている。

設備も最近更新されたため、ぼろい中央の合宿所よりよほど夏合宿に良いと高知へ行くウマ娘が増えていた。

「みんなー、キングちゃんが来たよー！」

「キング！」「キング！」「キング！」

「ちよ、ちよつとなんですのこれ!？」

高知トレセン学園に到着したキングを待ち受けていたのは、ハルウララとキングコールだった。

全く予想していなかった事態にキングは混乱した。

ハルウララが、キングのために一夜漬けで仕込んだものだが、ノリの良い友人たちはすぐに覚え、力いっぱい連呼していた。

「キングちゃん！ はしろー！」

「はしりたーい！」「この前の中山記念すごかったですね！」「安田記念も惜しかったですよね！」

「ま、待っててくださいー!!」

キングの手を取り引つ張るハルウララと、その周りの子たち。口々にキングの実績を褒めてくれる。

そんな子たちに引きずられ、キングはレース場まで連れられていくのであった。

高知競バ場のコースは、中央のトレセン学園と異なりトレーニングコースを兼ねている。

そこには何十ものウマ娘がおり、模擬レースを楽しんでいた。体操着姿の子は少なく、勝負服のようなキラキラした服を着ている子も多かった。

体操着の子は、見たことがあることが多い。おそらく中央から合宿に来ている子だろう。

そうじゃないキラキラした服を着ている子はいったい何なのか。これは練習の模擬レースではないのか。

あと観客がすごい多い。模擬レースじゃないのか。全く意味が分からなかった。

「キングちゃん、走ろう！」

「ウララさん！ まだ私、着替えていないですよ！」

「大丈夫だよ！ キングちゃんの服、かっくいーし！」

「何が大丈夫かわかりませんわ!？」

キングの服は私服である。

一応日常的に使えるように、走れるような工夫がされているハイローブランドの高級ウマ娘服ではあるが、しかし勝負服でなければ体操服でもない。

レースには、特にダートコースには不向きな服であった。

しかしそんな異論を一切ウララは聞いてくれず、結局レースに無理やり出させられるのであった。

コースはダート800m

中央では行わない超スプリントレースである。

レースの駆け引きも何も無い距離ではあるが、しかし一息に全力で駆け抜けるべき距離である。

全速力の感覚を得るにはちょうどいいコース距離かもしれない。

服はまあ、走れる服である。私服であるが一回二回のレースで破けるようなものではない。

靴はコンクリート用の普通靴である。

ダート用の靴を借りようかと思ったが、貸し出しているダート靴は無難なスニーカーであり、明らかに今の私服とあっていないかった。ダートなのでグリップが足りないという事は起きないだろうし、走りにくいだろうが問題はないと、そのままの靴で走ることにした。

勝負相手はハルウララとウララの周りにいた子たちである。

実力はウララ以外は未知数である。相手の癖などもわからないしあまり駆け引きをしたくはなかった。

ならば全力で逃げる。

そんなことを考えながらゲートに入る。すぐにレースはスタートした。

さすがに中央の重賞級であるキングは速かった。

スプリントレース自体キングが得意とする距離である。

ダートもそんなに苦手ではない。さすがに地方トレセン学園のウマ娘では勝つことはできなかった。

何人も勝負を挑んでくるものだからつい張り切ってしまい、5戦して5勝してしまった。

「キングー」「キングー」「キングー」「キングー！」

競バ場を揺らすキングコール。

これって、練習の模擬レースではなかったのかしら。

キングは訳が分からなかった。

短距離とは言えさすがにくたくたである。よく考えたら800mだつて5本走れば4000mである。

長距離を余裕で超えていた。

へ口へ口になったキングを待っていたのはやはりハルウララだった。

「大丈夫？ キングへ口へ口になってない？」

「もう本当にキングへ口へ口よ。ウララが走らせるから……」

「だつて走るの好きだもん！ キングちゃんもそうでしょ！」

「そうね……」

走るのが楽しい。

ウララはそういった。しかし、今の私はそれに素直にうなづけなかった。

「キングちゃん、この前の宝塚記念、なにがあつたの？」

「うん、ちよつとね」

「…… スペちゃんのこと？」

「ちよつと、違うかな」

ウララは能天気に見えるし言動は基本勢い任せなところが多いが、本質的に聡い子だ。

スペがおかしかったことも、キングがおかしかったこともおそらく察しているのだろう。

そして私を勇気づけるため、元気づけるためにこれだけの大騒ぎをしていたのだろう、というのは容易に想像できた。

「あの宝塚記念の時、キングちゃん、スペちゃんだけ見てたからそうなのかなって」

「そうね、私らしくなかったわよね。かつこ悪いなって」

「そんなことないもん！ キングちゃんかつこよかったもん！」

「ウララ……」

「スペちゃんおかしかったもん！ キングちゃんはそれをどうにかしたんでしょ！ かつこ悪くないもん!!」

「ふふふ」

ギューツと抱きしめると甘いミルクのような香りがする。

いつもこうやって、私が欲しい言葉をくれる彼女が、私は好きだった。

「キングちゃんは、一流のウマ娘なんだから、いつもかつこいいもん、ウララのあこがれだもん」

「ありがとう、ウララ」

一流のウマ娘はきつと、一人ではなれないのだろう。

ウララがいて、取り巻きのみんながいて、ファンがいて、競う友達がいて。

それできつと私は一流のウマ娘なのだ。

手を離すと、ウララが満面の笑みを浮かべていた。

ああ、本当に私は、ウララのことを好きだな。

おそらくスペちゃんやグラスちゃんに中てられたのだろう。

そんな思いが頭を離れなかった。

「今日はごちそういっぱいあるからね！」

「ウララも食べ過ぎて、太らないようにね」

「いっぱい走るから大丈夫だもん！」

ウララに手を引かれて、私はみんなの待つ場所へと向かうのであった。

## スピカの夏合宿

宝塚記念後の夏合宿はかなり豪華なものとなった。宿自体は、いつもの古びた温泉旅館である。

かなり古い建物ではあるが、なんせ温泉が広くて源泉かけ流しだったりするし、部屋も和室だがかなりきれいであり、値段の割にはとても過ごしやすい宿である。

どこに豪華さを使ったかという食事である。

最高級ニンジン山盛りにも最高級の肉にも最高級の魚介類である。

スペはモリモリ食べて、すぐにまたスペ腹に戻った。研ぎ澄まされた肉体なんて、このごちそうの前では5秒も持たなかった。

「スペちゃん？」

「なんですかスズカさん？」

「……」スペーン

「スズカさあん……」

いつものようにいちやいちゃしている二人である。

ギスギスした雰囲気だったスペが元のスペに戻って一同安心していった。

退院したスズカの状況も順調である。

もちろん衰え切った足のリハビリは軽くはない。

だが後遺症もない状態に戻っており、鍛えれば走れるようになるだろう。

どこまで走れるかは後はスズカ次第である。

メジロマックイーンのデビューも決まっている。

高知の砂浜トレーニングにお遍路トレーニングを重ねた上に、各地での歓待で皿鉢料理をたらふく食べた彼女の体格は一回りも二回りも物理的に大きくなっていった。

身長は既にウオツカを超えて、ゴールドシップに迫り、体型はダイワスカーレットに並ぶほどになっている。

ゴールドシップはマックイーンって貧相だと思っていたが、ダイ

エツトのための節制が成長を微妙に妨げていたようで、食べさせたらすぐ立派になってしまった。

最近は無敗の三冠を取る！　と言い出したマックイーンだが、それ自体もあり得そうなくらいの強さを持っていた。

スピカの将来は明るかった。

「で、トレーナー、そんなに落ち込まなくてもいいんじゃないやね？」

「でもさあ……」

トレーナーの個室。そこにゴールドシップとトレーナーだけがいた。

密室に男女二人きりだが色っぽい話では全くない。

複雑そうな顔をする沖野トレーナー。

今回のスぺの件で一番責任を感じているのは彼であった。

「スぺは秋のG1、3つともライブに入れたんだし、春からは4戦3勝、G1が2勝じゃん。結果は万々歳じゃん」

「でもさあ……」

「怪我や事故は起きないようにしてたんだろ？」

「まあ、な」

メジロの主治医と相談し、スぺの体調管理は慎重にしていたらしい。

スズカのあの事故の時、スぺは右手と背中中の怪我をした。

そのため、菊花賞から回避するべきかという問題があったのだ。

診断結果は100%の能力で走ることができるかというのと難しいが、ケガや事故が起きるような怪我ではないだろう、という判断だった。

そのため本人の希望もあり走らせたというところらしい。

そんな調子が悪い状況でも3連戦でライブを外さない程度には調整しきったんだからよくやれているとゴールドシップは思っている。

「いや、あれはやっぱり……　止めるべきだったな。菊花賞とジャパ

ンカップを回避して調整すれば、有馬記念は勝てただろうし」

「それ、できたのか？」



「…… おハナさんだったらびしつと決めるんだらうけどなあ」

「スタイルがちげーじゃん」

菊花賞を回避すれば、それはスぺの怪我のせいという風に思われる。

第三者はまだしも、スズカがそう思うだろうことをあの時のスぺが許容出来たとは思えない。

スズカが説得すれば納得したかもしれないが、左脚粉碎骨折して手術まで控えた重病人がそんなことできたはずはない。

かといって第三者がいくら言ってもスぺは聞きそうにないだろう。ジャパンカップだってそうだ。

あれはスぺが無理を言つて、スズカと対戦できるのを楽しみに登録したレースだ。

それを回避するなんていうことはスぺが許容できなかっただろう。たしかにリギルなら止めただろう。

それはリギルの勝利を第一に考えるというスタイルと、東条トレーナーに対する信頼故だ。

情を全く無視するわけではないが、勝利へ邪魔になるなら勝利を優先させるという強い信念がそこにある。

だがスピカはそういうスタイルではない。

ウマ娘たちが自分で考え努力し、トレーナーは支える。

それがスピカである。

スぺも馬鹿ではないので、本当に怪我をしそうだったりすれば説得できたのだろうが、幸いというか不幸にというか、スぺは信じられないほど頑丈だった。

あんな事故でも骨に罅すら入らないほどだし、あんなオーバーワークの塊みたいなレーススタイルしても、少し休めば元通りになるんだから羨ましいほどである。

「多分さ、あそこでスぺを止めるのは、私の役割だったのさ」

「それは違うだろ!？」

「違わねーよ。あそこで私が本調子だったら、タキオン研究所辺りの医者連れてきて、大げさで紛らわしい診断書作って止めてたと思う

ぜ。でもさ、それトレーナーやれねーじゃん」

「……」

「そういう役割じゃん？」

あの時のスペを止める方法なんて、理屈で考えればいくつもある。例えば出走取り消しをトレーナー名義で出してしまえばいい。そうすれば出走は止められる。だがそんなことすればスピカはおそらく空中分解するだろう。

それが出来ないんだから、後はスペを大きさに紛らわしいことを言って煙に巻くしかない。

だがそれはトレーナーの役割ではなかった。彼は真摯に、そして真剣に、時にはやり過ぎても付き添うのが役割だったのだから。

結局トレーナーの取れた選択肢なんて実質的にはレースに出させる一択でしかなかった。

そして、そういう場合に道化を演じるのはゴールドシップだった。

「それでもその責任はゴールドシップにあるわけじゃない。チームの責任はすべて俺が負う話だ」

「ま、だから暗くなるなって。結局スズカもスペも仲直りしてるし、スペもかなり強くなった。スズカもどんよりへこんでたおかげで絶対安静が守れて脚は完全に治ったみたいだからいいことづくめじゃん」

「……」

「あんまり暗くしてると、マックイーンの本ジロバスターが飛んでくるぞ。痛いんだから、あれ」

「そうだな。次に生かそう」

「そういうこった」

全く、世話の焼けるトレーナーだ。

そう思いながらゴールドシップは立ち上がる。

世話が焼けるのはあなたもですわ、と脳内マックイーンがゴールドシップに文句を言っていた。

メジロマツクイーンと、ライアンと、パーマーと

メジロの三羽鳥、と呼ばれる三人のウマ娘がいた。

メジロライアン　メジロパーマー　メジロマツクイーン。

同世代でメジロの名を継ぐ優れた三人のウマ娘。

それが彼女らであった。

頼りがいがあり快活なライアン

優しく気配りができるパーマー

その二人に比べ生まれた時期が遅く、小柄で人見知りだったマツクイーン。

ほかの二人はマツクイーンをかわいい妹のように思ってたかわいがっていた。

かわいがる二人を、マツクイーンもまた姉のように慕っていた。

半年の高知滞在から帰ってくるマツクイーンに会うのを二人は楽しみにしていた。

仲の良い三人だ。半年以上も会わないなんてことは今までなかった。

電話で声は聴いていたので元気なのは知っていたが、やはり会うのは楽しみであった。

ドーベルも誘ってまたコスメショップでも行くか。

いや、野球観戦がいいのではないか。

そんな話をしながら待っていた二人を待っていたのは……

成長した美女であった。

「え?」

「え?」

「ただいま戻りましたわ。ライアン、パーマー」

見たこともない美女が、自分たちの名前を呼んでいる。

目の前の女性がマツクイーンだという事は、理性が告げている。

しかし、理解がしきれなかった。

まずデカイ。

ライアンもパーマーも、平均的なウマ娘の身長より背が高かった。一方でマックイーンは平均より少し低いぐらいであったはずである。

しかし目の前のマックイーン（仮）は明らかに自分たちより背が高かった。

次にゴツイ。

マックイーンはよく言えば女性的でしなやかなモデル体型。

悪く言えば貧弱で貧相、小柄だった。

しかし目の前のマックイーン（仮）はどうだ。

まずスカートから少しだけ覗く太もも。とても太い。鍛え上げられたトモである。

筋肉に自信があるライアンより太そうである。しかも、ただ太いだけでなく女性的な丸みもちゃんと帯びていて、むちつとした、ちらりと見えているだけでもかかわらずそこはかとなないエロスを感じる蠱惑的な太ももである。

胸部も極めて女性らしさが増していた。すさまじく柔らかさそう大きい。きつとあれに顔をうずめてお昼寝したらとても気持ちよさそうなの、そんな胸部である。

他にも腕も腰も、全体的にかなり筋肉がついており、しかし女性的な丸みを忘れない脂肪もありすさまじい色気を放つ美女だった。

そのあり得ない色気に、恋愛耐性が低いライアンは鼻血を吹き出した。

慌ててパーマーが対処する。

「ライアン、大丈夫ですよ!?!」

心配そうに寄ってくるマックイーン（仮）を目と仕草で止めるパーマー。

それ以上近づかれるとライアンが持たない。パーマーはそう判断した。

ついでに自分もきつい。

「おかえり、マックイーン。いろいろ大きくなってとても綺麗になって、私もライアンもすごく驚いたよ」

「そ、そんなに変わってますか？」

「成長したと思うよ。ちよつとライアンの調子が悪いみたいだから、また夕飯の時にね」

「わかりましたわ」

シヨンボリしながら部屋を出ていく超絶美女。仕草はやはりマックイーンで、あれがマックイーンだという事を二人は理解した。

その後、マックイーンの色気にやられて廊下に倒れていたドーベルを拾った二人は、ドーベルを交えて対マックイーン緊急会議を開催するのであった。

「あれはやばい」

「あれはやばいよ」

「あれはやばい」

三人の意見は一致した。

マックイーンはもともと神々しいまでの美少女だった。

成長したら美人なんだろうなーと思っていたが、実際はちよつと存在しちやいけないんじゃないかと思うぐらい美人だった。

「妹みたいな存在なのに、私血迷いそう」

「お姉さま、ドーベルはお慕いしております……」

「二人とも血迷わないで!!」

目がイってるライアンとドーベルを必死に揺さぶるパーマー

別に二人のどちらかがマックイーンと恋愛関係になっても文句はないが、今は完全にマックイーンに酔っぱらっている状態だ。

このまま突き進んだらろくなことは起きないのが分かっていた。

「ま、まあ、ひとまずおいておこう。で、あのマックイーンを放っておいていいのだろうか」

「よろしくないのでは？ 血迷う人が何人も出ると思うわ」

「現に二人が血迷ってたもんね」

げんなりするパーマー。

だが心配はわかる。あそこまできれいで蠱惑的だと、何をしでかすかわからない者も出てきそうだ。

一番箱入りだった彼女がそれに対応をちゃんとできるかはパー  
マーも心配だった。

「おばあ様はなんて言ってるんだろう」

「そうよね、高知にはおばあ様と一緒に行ってたわけだし」

「一度話を聞きに行こうか」

わからなかったら人に聞く。三人はおばあ様のところに向かった。  
途中で庭でお茶をしているマックイーンとゴールドシップを見か  
けた。

ゴールドシップ。マックイーンの一番の親友だろう。

同じチームでいつも一緒にいる彼女との仲は、圧倒的な分厚い信頼  
があった。

恋仲ではないのだろう。そういう気配は全くなかった。だが、自分  
たちとおばあ様の間にあるような、絶対的な信頼が二人の間にあるよ  
うに感じていた。

おばあ様にも気に入られているゴールドシップがメジロの屋敷に  
いるのは特に意外でも何でもなかった。

仲が良いな、ぐらいにしか思わなかったが……

「ゴールドシップ!!」

「なんだぜ?」

「ケーキは一人三つでしょ!　なんで四つ食べてるんですの!」

「マックイーンはもう少し減量した方がいいんだぜ!」

「わたくしのケーキを!　返しなさい!!」

上品さのかけらもないことを叫びながら、マックイーンはゴールド  
シップに技をかける。

メジロスパーク。メジロ殺法100手の奥義だ。

綺麗に技が決まったゴールドシップは庭に倒れ伏した。

それを見ていた三人は、目が覚めた。

結局マックイーンはマックイーンだった。なんかいろいろ遅しく  
なっているが。

これなら大丈夫かと、思いながら、三人は部屋に戻るのであった。

## 皇帝の孤独と勝利を誓う彼女

「おハナさん」

「なに？ ルドルフ」

「次の生徒会長は、スペシャルウィークはどうだろうか？」

「は？」

ある昼下がり。

部屋にはリギルのトレーナー、東条ハナと、生徒会長シンボリルドルフしかない。

チームトレーナーとして、生徒会顧問として書類を処理している中で、ルドルフは急にそんなことを言い始めた。

「何か悪いものを食べた？」

「私は本気だよ」

「わかってるわ。わかってるから聞いているの。何か悪いものを食べた？  
って」

皇帝シンボリルドルフ。

絶対的な強さを持った七冠ウマ娘。

無敗の三冠以降、ずっと生徒会長を務める彼女が、その席を譲ると言い始めたのは今回が初めてだった。

候補ならいままで幾人もいたはずだ。

例えば副会長のエアグルーヴ。彼女なら人格的にも能力的にも任せられるだろう。

今年いっぱいまでトウインクルシリーズを引退しドリームトロフィーに移行することを考えればちょうどいいはずだ。

彼女だけではない。適当なウマ娘は今まで何人もいたはずである。

しかしこのようなことをルドルフが言うことはなかった。

そんな彼女が初めて後継者候補として挙げたのがスペシャルウィークである。

実績として他者に見劣りするわけではない。丈夫な彼女のことだ、今後もういくつかG1を取る可能性は高いだろう。

そういう点では彼女が悪いわけではない。

頭もそう悪いわけではない。なんせ編入生だ。最初の頃は赤点を連発していたらしいが、最近はそれなりの成績を維持している。

だが、悪く言えば『それだけ』でしかない。

『ルドルフに比べれば』、大したことが無い子、という風にいえるだろう。

だから、なんで彼女を選んだのか、東条は気になった。

「この前の宝塚記念を見ていたんだ」

「うちのグラスが勝ったやつね」

「そう、グラスが勝ったんだ。あのスペシャルウィークに勝ったんだ」

「……それってグラスがすごいんじゃないの？」

珍しく興奮しながらルドルフは話す。

今年の前半から、スペシャルウィークが異様な雰囲気でも勝ち続けていたのは、東条も確認していた。

沖野が持て余しながらも、必死に彼女の体調管理をしていたのも知っている。

確かにあの頃のスペシャルウィークは絶対のオーラを纏っていた。

シンボリルドルフの現役時代を思い起こすほどの強さだったのは確かだし、沖野の慌てっぷりはシンボリルドルフの現役当時の自分を思い出したほどだ。

「確かにグラスはすさまじかった。おハナさんの計算でもそうだったと思うが、彼女では『あの』スペシャルウィークには2歩分程度届かなかった。それを1歩分縮めたのは、彼女の力だ」

「そうね」

ルドルフの分析は東条譲りである。徹底的な情報から客観的に分析する。

東条もルドルフも当然グラスに勝ってほしいと思っていた。だが、それはそれだ。確実にグラスは届かないというのは明らかだった。

それが届いた要因の一つは彼女自身の努力だ。届かない脚を、限界の先に一歩進めたのだから。

計算以上の力を出したのだ。どれだけの思いの力が、どれだけの努力がその裏にあったのかも二人は知っていた。



「だが、届いた要因のもう一つ、わかってるだろう」

「キングヘイロー」

彼女が破滅的な逃げでスペシャルウィークを潰したからこそ、グラスの脚が届いたのだ。

グラスもキングも、打ち合わせも何もしていなかっただろう。そういう八百長をするような子たちではない。

だが、それをお互い言わずとも理解していたわけだ。

言えば八百長を疑われるし、それに気付いているのもおそらくごくわずかだ。だから東条も何も言わないが。

「そうだ。それで、どう感じた？」

「意外だったわね」

キングヘイローはプライドが高く、正々堂々を好み、勝負を決して捨てない、良くも悪くも意志が強いウマ娘であった。

だからこそ、あんな、他人を勝たせるための走りをするなんて意外でしかなかった。

だからそう告げたわけだが……

「ああ、そこが私とおハナさんでずれているんだね」

「……ルドルフはどう感じたの」

「嫉妬」

「……」

「狂おしいほどの嫉妬だった。私は、スペシャルウィークが羨ましく見えた」

「……」

「スペシャルウィークがああなつてくれた時、私は嬉しかった」

「……同類だと？」

「そうだね。唯一抜きんでて並ぶものなし。そんな皇帝に並ぶかもしれない『絶対』を有する者が現れて、私は嬉しかったんだ」

「……」

「だから、負けたスペシャルウィークに嫉妬した。怪我でもない。運でもない。『友人に負けたスペシャルウィーク』に、そんな友人を持つ彼女に嫉妬した」

「……」

「私には、そんな相手はいなかった。ミスターシービー君？ 三冠を取った彼女も相手にはならなかった。マルゼン君？ 彼女だって敵ではなかった」

「……」

「皆、私の後ろにいた。私が守るべき相手でしかなかった」

「……」

「スペシャルウィークは、唯一抜きんでる存在になるはずだった。私に並ぶかもしれない存在だった。でもスペシャルウィークには、並ぶ者がいた。グラスにセイウンスカイ君。キングヘイロー君。おそろく今フランスにいるエルだって、日本に居たら協力しただろうね」

「エルをフランスに留めるの、大変だったのよ」

「そうだろうね。彼女らだって、あの絶対のスペシャルウィークにはかなうとは思わなかっただろう。しかし、それでも彼女らはあきらめなかった。挑み、絶対の彼女に勝った」

「……」

「そうだ、私はね、おハナさん。並んで走ってくれる誰かが欲しかったんだ」

「……」

「すまない、戯言だ。忘れてくれ」

窓の方を向く彼女を背に、東条は部屋から立ち去った。

「おハナさん」

「……何？ エアグルーヴ」

「私では、足りませんか？」

「……」

「シンボリルドルフに並ぶウマ娘に、私では足りませんか？」

「……」

「……」

「……残念ながら」

「……」

「……」

「では誰なら？」

「まだ見つからないわ。でも、あの子ならもしかしたら」

## 第二部 第一章 脳筋マツクとナメクジテイオーの ホープフルステークス

### 人物紹介（第二部開始時）

#### 第二部開始時

チームスピカ

ゴールドシツプ

身長：170cm

体重：変化なし（意外と気を使っている）

スリーサイズ：88／55／88

肩書 チームスピカサブトレーナー・タキオン研究所所長

未来から来たメジロマックイーンの実孫。

惨劇の世界線たる世界を変えるために三女神の力で過去へと渡ってきた精霊ウマ娘。

未来では両親は既に死別しており天涯孤独だった。

スタート以外は何でもできる。

尊敬する人物はアグネスタキオンとサイレンススズカ

好きな人物はメジロマックイーン

未来での戦績は28戦13勝

主な勝鞍は宝塚記念2回 皐月賞・菊花賞 有馬記念 天皇賞

（春）

メジロマックイーン

身長：169cm

体重：激増（スイーツうめえですわ）

スリーサイズ 92／59／94

肩書 チームスピカメンバー

名家メジロ家の令嬢。

ライアン、パーマーと合わせてメジロ三羽鳥と呼ばれる。

厳しく礼儀作法などを躾けられてきたが、最近は地を隠せなくなってきたらいる脳筋令嬢。

頭がよさそうに見えるが成績は中の中程度。

よくイクノデイクタスに勉強を教えてもらっている。

スウィーツに目がなく、昔は体型維持のために控えていたが、今は我慢するという事を投げ捨てた。

十分な栄養と適度な運動により成長し、ゴールドシップを超える体型になりつつある。

尊敬する人物はおばあ様

好きな人物はゴールドシップとイクノデイクタス

戦績は2戦2勝

アグネスタキオン

身長：159cm

体重：増（幸せ太り）

スリーサイズ 88／57／86

肩書 タキオン研究所主任研究員

名家アグネス家の令嬢だが、ほぼ勘当されている状態のウマ娘。

天才的な頭脳を持ち、ウマ娘の生理的研究ですでにいくつもの画期的な結果を出している。

偽悪的なふるまいをしがちだが、

大体ダイワスカーレットとゴールドシップに超善意解釈されるのであまり意味が無い。

甘いものに目がなく、紅茶党。

最近は大イワスカーレットのおかげで規則正しい生活をしている。

好きな人物はマンハッタンカフェとダイワスカーレット

デビュー時期に悩み始めており、デビューしなくてもいいかとかすら考え始めている。

ダイワスカーレット

身長：163cm

体重：減（過労気味）

スリーサイズ 88／54／80

肩書 チームスピカメンバー

名家ダイワ家の令嬢。優等生であり、基本はまじめだが時々暴走する熱血少女。

実はアグネスタキオンに並ぶ頭脳の持ち主。

タキオンの言う事をすべて理解できる数少ない人物。

タキオンの世話を焼きすぎて少しやせた。

尊敬する人物は母親

好きな人物はアグネスタキオン

デビューはまだしばらく先の予定

ウオツカ

身長：165cm

体重：微減（鍛えて絞れた）

スリーサイズ 76／55／78

肩書 チームスピカメンバー

名家タニノ家の庶流の娘。絶賛反抗期だが、成績はダイワスカ

レットに並ぶ優等生。

不良ぶつているところがあるが、チームスピカ唯一の良心。

だが、押しが弱いので結局チームスピカは大暴走する。

尊敬する人物は父親

デビューはまだしばらく先の予定

サイレンススズカ

身長：143cm

体重：微増（幸せ太り）

スリーサイズ 70／55／78

肩書 チームスピカリーダー

リギルから移籍したウマ娘。

スペシャルウィークと出会い天然な性格が露わになりつつある。

成績は実はあまり良くなく、中の下程度である。

寂しがり屋なところがあり、毎日スペシャルウィークと同じベッ

ドで寝ている。

脱ぐと鍛え上げられた体がすごい。

スピカの最年長でありチームリーダーという事になっているが、

リードすることは基本ない。

実はスピカで一番小さく次に小さいスペシャルウィークと比べても15cm差がある。

好きな人物はスペシャルウィークとエアグルーヴ

戦績は18戦10勝

主な勝鞍は宝塚記念

スペシャルウィーク

身長：158cm

体重：微減（レース前は緊張で減る）

スリーサイズ 88／56／88

肩書 チームスピカサブリーダー

トレセン学園に編入してきた田舎ウマ娘。

根性がすさまじく、何か困ったらすぐ根性でどうにかしようとする。

成績は現在はそれなりな位置をキープしている。

愛嬌◎であり、編入生にもかかわらずクラスの中心的人物になっている。

とんでもなく大食いであり、料理も得意。スぺ印ショートケーキは絶品。

実はかなりモテるが、ダービーでの勝利の女神のおまじない事件から、皆諦めた模様。

レースでは常に三着以内に入りライブを外したことが無い安定感がある。

だが、ウイニングライブ自体はあまりうまくない。

尊敬する人物は二人の母親

好きな人物はサイレンススズカ

戦績は17戦10勝

主な勝鞍は日本ダービー・大阪杯・天皇賞春・天皇賞秋・ジャパンカップ

沖野トレーナー

肩書 チームスピカメイントレーナー

現状あまり流行ではない、自主性を重んじる指導をするトレーナーである。

ウマ娘に考えさせ、決めさせ、トレーナーはそれを支える、という方法を取っている。

指導、特に能力を上げさせるのは上手いが、恋愛沙汰は非常に苦手である。

無事これ名馬を座右の銘にしており、健康管理にだけは非常にうるさい。

東条トレーナーとは同じトレーナーに師事していたことがあり、弟子にあたる

チームリギル

トウカイテイオー

身長：150cm

体重：微減（トレーニングを重ねている）

スリーサイズ 77／53／74

肩書 チームリギルメンバー

チームリギルの最年少メンバー。

シンボリドルフに憧れており、『絶対』を目指す少女。

中性的な美少女であり、男女問わず人気が高い。

トレーニング風景を見た者はおらず、リギルの秘蔵っ子と呼ばれる。

デビュー以来圧倒的な強さで勝っており、皇帝の再来をささやかれる。

戦績は3戦3勝

エアグルーヴ

身長：165cm

体重：微減（会長のジョークのせい）

スリーサイズ 89／55／86

肩書 生徒会副会長

女帝の異名を持つウマ娘。

口調が強く厳しく見えるが、基本的に誰にでも優しく親切なみん



なのママ。

ひそかに裏で行われているミストレセン学園3年連続1位。

スズカの才能にあこがれと軽い嫉妬を覚えている。

夏からドリームトロフィーカップに移籍した。

戦績は19戦9勝

主な勝鞍は オークス 天皇賞(秋)

グラスワンダー

身長：152cm

体重：微増(みんなが慰めてくれたから)

スリーサイズ 78/54/84

肩書 チームリギルメンバー

大和撫子の皮をかぶった鎌倉武士。舐められたら差す。

実はスペちゃんだけでなく、スズカのことにも気に入っている。

最近はスペちゃんと一緒にいてハラハラするスズカを眺めるのが趣味。

自身の色恋沙汰はしばらくいいかなと思っている。

戦績は 10戦9勝

主な勝鞍は 朝日杯フューチュリティステークス 安田記念

宝塚記念 有馬記念

エルコンドルパサー

身長：163cm

体重：微減(スペちゃん心配かけさせすぎなのデース)

スリーサイズ 86/56/88

肩書 チームリギルメンバー

フランスに行っていた怪鳥

ジャパンカップの時点でスペちゃんのおかしさに気づいていた。

だがフランス遠征が控えていたせいで何もできずに渡仏。

何度も帰りたいと騒いでいた。

現在は日本に戻ってきている。

戦績は 11戦9勝

主な勝鞍はNHKマイルC ジャパンカップ イスパーン賞

サンクルー大賞

東条トレーナー

肩書 チームリギルメイントレーナー

チームリギルのトレーナー

管理主義を徹底し、それによりトレーニング業界に管理主義を流  
行らせた人物。

膨大なデータから導き出された最善を常に提示し、行わせていく  
手法は天才と評される。

シンボリルドルフに対抗できるウマ娘を育てるのを目標として  
いる。

チームカノーパス

キンイロリヨテイ

身長：134cm

体重：微増（ゴールドシップが最近付きまどつてる）

スリーサイズ 67／58／69

肩書 チームカノーパスリーダー

非常に小柄なウマ娘。本人はもっと成長すると言っているがこ  
れ以上成長することはない。

タフさには定評があり、30戦以上しているがオープンクラス以  
上で勝利したことはない。

最もエアグルーヴを抑えて宝塚記念2着や、サイレンススズカ故  
障時の天皇賞秋でも2着など実力は本物。

ただし勝てない。阿寒湖というと怒る。

チームカノーパスのシルバーコレクター1号

この前飛び級で入学してきたニシノフラワーに身長等で負けて  
ショックを受けている。

未来でのゴールドシップの父親である。

戦績は30戦3勝

主な勝鞍は阿寒湖特別

キングヘイロー

身長：159cm

体重：微増（ウララさん、もう食べられませんか！）

スリーサイズ 85／60／85

肩書 チームカノープスサブリーダー

歴代最強と言われる母を持つ良家のお嬢様。

傲慢・とつつきにくいと思われがちだが、根はやさしい少女。

キングの取り巻きはキング語の習得が必須である。

クラシック三冠がみな2着だったり、ほとんどライブを外したことなくかったりと

成績自体は優秀だがタイトルは欲しい。

チームカノープスのシルバーコレクター2号

好きな人物はウララさん

戦績は15戦5勝

主な勝ち鞍は中山記念

ハルウララ

身長：141cm

体重：増（成長期）

スリーサイズ 80／58／79

肩書 チームカノープスの天使

桜色の髪を持つみんなの天使。極度のポジティブ思考であり、人を貶すことを知らない。

ゴールドシップの先代の精霊ウマ娘。

ある人物のおかげで歴史のはざまに消えずに済んだ。

現在は高知で活動中。

好きな人物はキングちゃん

戦績は35戦0勝

イクノデイクタス

身長：163cm

体重：完璧

スリーサイズ 75／53／82

肩書 チームカノープスの頭脳

メガネが似合うことなく中性的なチームカノープスのウマ娘。

真面目で頭が良いので一見とつきにくく見えるが、基本的にノリはとても良い。

マックイーンとゴールドシップに懐かれまくっているが、本人もまんざらではない。

最近1人部屋だった寮の部屋のベッドがキングサイズに置き換えられて、三人で寝ることも珍しくない。

勝つより走るのが大好き系ウマ娘であり、ウララと同類である。

実はゴールドシップの母の父に当たるが、未来で彼女がゴールドシップにそれを言うことはなかった。

戦績は10戦2勝

ナイスネイチャ

身長：157cm

体重：かわいい

スリーサイズ 79／56／80

肩書 チームカノープスのかわいい担当

自分に自信がないチームカノープスのウマ娘。

良い素質の名前通り素質は確かなのだが、自信がないために実力を出し切れずにいる。

最近カノープスに入り浸るゴールドシップとマックイーン、そして同じチームのイクノとターボにかわいい責めをされている。

かわいいがゲシュタルト崩壊するぐらい言われて、徐々に洗脳されて自信を得つつある。

マックイーンやテイオーと同期だが、まだデビューはしていない。

ツインターボ

身長：146cm

体重：増（みんなが甘いものをくれる）

スリーサイズ 74／52／75

肩書 チームカノープスのみんなの妹

爆逃げが大好きな逃げウマ娘。常に全力で、1000mも走ると逆噴射する。

天真爛漫でその小柄でかわいい外見も相まって、デビュー前にもかかわらず人気があつたりする。

わがままに見えて基本素直で、言えば聞かないことはほとんどない。

彼女が譲らないことは、絶対に譲ってはいけないことだけ。

マックイーンやテイオーと同期だが、まだデビューはしていない。

南坂トレーナー

チームカノープスのトレーナー。

普段は昼行燈で弱気だが、体調管理が非常にうまく、ケガをさせずに長く走らせるのが得意。

どうにか一回ぐらいはどの子にもG1を勝たせたいと思っており、そのための秘策を練っている。

その他

セイウンスカイ

身長：155cm

体重：維持（結構気にする）

スリーサイズ 77／55／80

ふわふわ系女子。

基本面倒見がよいが、団体行動が苦手。

努力しているところを見せたりするのが嫌いだが、結構負けず嫌いで努力は惜しまない。

趣味は釣り。

最近入学してきた後輩に迫られている。

戦績は12戦8勝

主な勝ち鞍は皐月賞 菊花賞

メジロのおばあ様

身長：161cm

葦毛のメジロのおばあ様。マックイーン、ライアン、パーマーの祖母。

ドーベルの曾祖母。

メジロ家総裁であり、メジロ家の全てを差配する。  
普段は威厳のある姿を見せていて孫たちに怖がられているが、本  
来はお茶目な性格。

メジロ殺法100手の正統継承者

## スピカのメジロマックイーン

宝塚記念から半年

サイレンススズカは先進医療を駆使した甲斐もあつたらしく、無事復帰。事故から一年経った年末のOP戦に出場し、復活を見せつけた。

スペシャルウィークは天皇賞秋、そしてエルコンドルパサーを破ったブロワイエの参加したジャパンカップに勝利し日本の総大将といわれ、有馬記念に向けて調整中だった。

そしてマックイーンはメイクデビュー戦に勝利し、ジュニアウマ娘王者を決める戦い、ホープフルステークスへと駒を進めていた。

そこで待ち受けるのは生涯最大のライバルになるであろう、トウカイテイオーである。

デビューから重賞2勝を含む3連勝。

どのレースも大差で勝ち切る無敗の貴公子。その目標はかの皇帝シンボリドルフと同じ無敗の三冠、そして皇帝を超える無敗の八冠を目指すと公言する、まさに最強の相手である。

最初、マックイーンが目指すのはシニアの天皇賞春、そして天皇賞秋、クラシックでは菊花賞ぐらいか、というつもりでいたのだ。

だが、トウカイテイオーの圧倒的な強さに魅了されたマックイーンは、テイオーに挑むことにした。

その初戦が、ホープフルステークスであった。

「だけど、正直かなり厳しいと思うぜ」

ゴールドシップはマックイーンに正直に告げた。

マックイーンの力は超一流である。

ゴールドシップが食べさせ続け、鍛え続けたマックイーンの体格は、入学当時より二回りぐらい大きくなり、背もかなり伸びている。

軽量さを生かしたスピードとスタミナで勝負していた前より、パワーもついて、スピードも増しており、かなり成長したと言えるだろう。

正直、トウカイテイオーが居なければ、三冠も難しくないと考えるほどの実力に成長していた。

しかし、相手はトウカイテイオーである。

リギルの秘蔵っ子と呼ばれる彼女の速さは絶対的である。

シンボリルドルフを思い出させるほどの強さを、若しくは天皇賞春の頃のスペを思い出されるような絶対さを、既にジュニアクラスにして彼女は持っている。

マックイーンに勝ってほしい、そう思うゴールドシップですら、ネガティブな評価をせざるを得ないほどであった。

「タキオン博士、分析は？」

「いやあ、どうしようもないね。さすがリギルのおハナさんだよ。レースプランもガチガチだね。隙が無い」

最近はレースの分析まで始めたタキオンに、ゴールドシップは話を振る。

しかしタキオンもお手上げの様だ。

先行して、2番手から5番手ぐらいのベストな位置をキープし続け、第四コーナーで抜け出す、というお手本のようなレース運び。

先行するウマ娘のレース展開として教本となりそうなら、美しいレース運びを三回もされれば対抗する方法も思いつかなかった。

追い込みや差しと違って紛れも少ない。

大逃げでペースが崩れるレースでも、自分のペースを守り続ける。

まさに絶対の体現者だった。

「トレーナーはどうよ？」

「マックイーンがすべて負けているわけではない。特に体格とパワーでは小柄なテイオーは不利だ。それを生かせればいいんだが……」

「重バ場になったら勝てるかもしれないか」

「あとはスタミナだろうな。マックイーンの脚を使わないときの走りの速度はおそらくテイオーを抜いている」

「え、マックイーンがあれより速いと思えないんだけど」

「ペース展開がベストだからどこで脚を使っているかわかりにくいんだが、3戦目の中盤の速度を見ているとマックイーンの方が速い。完



全に脚を使っていない状況なら、マックイーンの方がそれなりに速いはずだ」

「ふむ、確かにトレーナー君の言う通りかもしれないね。京都2歳ステークスのラップを見ると中盤はそこまで絶望的に速いわけではない」

ウマ娘の走りには、有酸素運動つまり「脚を使わない」運動と、無酸素運動、「脚を使う」運動がある。

そして「脚を使わない」有酸素運動は基本どれだけの距離でも使えるが、「脚を使う」無酸素運動は限りがある。

その二つをバランスよく使うのがウマ娘のレースでは重要になるのだ。

つまり、「脚を使う」無酸素運動が使えない距離が長いとマックイーンが有利という事だ。

すなわち……

「長距離で重バ場なら、マックイーンが有利、と」

「そういう事だな……」

「でも長距離戦の重賞なんて、菊花賞までねーだろ？」

「そういう事だ……」

ジュニアでは最長の部類に入るホープフルステークスだが、それでも距離は2000m

ジュニアクラスには長い距離だが、同期から突き抜けて強いテイオーとマックイーンには中距離の負担でしかないだろう。

当日の天気やバ場状況なんてそれこそ調整できるものではない。

勝ち目がないわけではないのはわかったがやはり不利なのは否めなかった。

「大丈夫ですわ！」

「マックイーン？」

「頑張りますもの！」

「……」

「……」

「……」

何が大丈夫かわからないマックイーンの発言に、どう答えていいかわからない三人は顔を見合わせる。

メジロマックイーンはメジロ家のご令嬢である。

しかも、メジロの三羽鳥と一緒にされるライアン、パーマーに比べると非常にお嬢様然としている。

だが、その本質は脳筋であり、ライアン以上に力こそパワーといわんばかりのレーススタイルである。

学園の勉強の成績も実はそこまで良いわけではない。

一夜漬けや、学年首席のイクノダイクタスに教えてもらったりして、やっと中の中ぐらいをキープしている程度である。

ゴールドシップは、悪影響を与え過ぎたかと少し反省したが、おばあ様が

「昔からマックイーンはこんなものでしたよ。私も若いころはこんな感じでした」

と言われて血筋を感じるとともに、ゴールドシップ自身は頭がいいので、自分はいったいどこの血筋なんだと悩んだぐらいである。

「では、ケーキを食べて英気を養ってきますわ」

「いや今食べたら太め残りになるだろ!？」

「走れば大丈夫ですわ!」

「追切り後に絞るぐらい走っちゃダメに決まってるだろ!？」

けーき、けーきというマックイーンを引きずって、ゴールドシップは部屋に帰るのであった。

結局、大したことは決まらずに当日を迎えることになる。

## リギルのトウカイテイオー

リギルの最近の大型新人と言えば、トウカイテイオーである。シンボリルドルフが見初めたというその素質は圧倒的である、という噂は既に立っていた。

リギル側から、無敗の三冠を目指す、八冠以上を獲得し皇帝超えを目指す、という話も漏れ聞こえてきていた。

だが、デビューまでに、その姿を見た者は少なかった。

学園の授業にはちゃんと出ているが、チームでのトレーニングは一切公開。

時々垣間見える少年のような中性的でしかし整ったルックスはデビュー前からファンを増やしていた。

一部には実力が大したことないのではないか、という噂もあったが、デビューすればそんな声もなくなった。

デビューから3連勝。どれも二着とは大差をつけての圧勝。

そのレース展開も極めて鮮やかかつ正確なもので、彼女の強さを物語っていた。

次のホープフルステークスで、メジロ家の最終兵器ともいわれるメジロマツクイーンとの対決に、周囲の期待は高まっていた。

そんなトウカイテイオーは今何をしているかというところ……

生徒会室の会長の机の下に丸まっていた。

なんかジメジメするオーラを放ち、机の上の書類を不快な程度に湿らせていた。

しつとりテイオーである。

誰が呼んでも出てこない。

シンボリルドルフが呼ぶと少しだけ反応し、お菓子をあげると食べるがそれくらいである。

テイオーのトレーニングもできないし、邪魔で生徒会の仕事も進まない。

いつも最終的にキレたエアグルーヴが塩をつかんで投げつけてい

た。

「ぐろおああ!! テイオー!! 邪魔だあ!! 早くトレーニングに行きやがれ!!」

エアグルーヴが、キャラを崩壊させながら生徒会室に常備された塩をつかみ、テイオーにぶっかける。

「にぎやあああああ」

という謎の悲鳴を上げて、机の下から抜け出したテイオーが駆けだしていった。

テイオーの生息地の一つ目が生徒会室の会長の机の下ならば、二つ目はリギルの専用トレーニングルームである。

トップチームであるリギルは設備面でも恵まれている。部室を二棟使用しており、一つはトレーニング機材が置いてあった。

といっても少々機材が古く、他のメンバーはここを使わずに学園のトレーニングルームを使うのが常であった。

だが、種類だけはそろっているトレーニングルームであり、生徒会室を追い出されたテイオーはいつも一人でトレーニングしていた。

メニユーはおハナさんが毎日一度以上は見に来てくれる時に更新してくれる。

基本的におハナさんが怖いので、陰に隠れて話をすることになるが、ちゃんとその時ごとに合ったトレーニング方法を教えてくれた。

そうして決められたトレーニングメニユーを二周すると、テイオーは部屋に戻っていった。

ナメクジなテイオーの三つ目の生息場所は寮の自室のベッドの下である。

テイオーはルームメイトのマヤノトップガンが苦手であった。

明るく人懐っこい彼女はまるで太陽のようで、自分の様なナメクジは話しているだけで蒸発していく、と思っていた。

幸いマヤノは早寝遅起である。だいたいマヤノが寝るぐらいに部屋に戻り、万が一夜マヤノが起きても気づかれないようにベッドの下で寝ていた。

そうしてマヤノが起きる前に、テイオーは起きて身支度をして、部屋を出ていった。

なお、マヤノは一人部屋だと思い込んでいるし、幽霊さんが隣のベッドに住んでいると思ひ込んでいる。

朝練として、トレーニングルームに行つて、メニューをまた一周行う。

そうして授業が始まる前に、最後の日課を行っていた。

「ふへへ、マックイーンさん、今日もきれいだなあ……」

メジロマックイーンのアナウンサーの確認であった。

ナメクジテイオーは重度のメジロマックイーンのアナウンサーであった。

なんせ最初期からのメジロマックイーンのアナウンサーメンバーで会員番号1番である。

メジロ家の令嬢にふさわしい美しさと上品さ、そして知性のあふれるマックイーン。

しかしそれでも気取り過ぎないマックイーンに、テイオーは信仰に似た憧れを抱いていた。

テイオーは他人が怖かった。

見られるのが怖かった。

話しかけられるのも怖かった。

レースするのだって怖かった。

嫌だったが、会長みたいに、シンボリルドルフみたいになるため、と思つて頑張つてゲートに入った。

スタートすれば周りにたくさんウマ娘がいる。

それが嫌で、必死に走り続けて、それで一位を取り続けていた。

無意識に走るだけで、最適なルートで走れる天性

圧倒的な速さで走れる筋力と関節の柔軟さ

そして人の数倍に及ぶ努力が彼女にはあった。

彼女が毎日三周しているトレーニングメニューは1日1周こなすのも難しい量であり、おハナさんも一周しかしていないと思つて準備していたものだった。

次のレースだけは、テイオーにとっては楽しみであった。  
なんせ、憧れのメジロマツクイーンが参加するのだから。

無様なところは見せられない、とテイオーはさらにトレーニングメニューを1周追加した。

## テイオーとマツクイーンの希望の一戦 パドック

運命のホープフルステークスの日。

ジュニアクラス最速を決めるこのレースで注目されるのは二人であつた。

一人はメジロマツクイーン

メジロ家の最高傑作

スピカの次期エース

といわれる彼女。

入学時は線の細い、まさに深窓の令嬢と言つた外見であつたが、現在かなり成長し大柄な美女になつていた彼女は、その外見でも人気があつた。

もう一人はトウカイテイオーである

絶対を継ぐ者

無敗の八冠を得る者

そんな風に言われる彼女。

マツクイーンと比べると身長差約20cm だがその中性的で整つた外見と小柄ながらすさまじいスピードはやはり人気が高かつた。

この二人の勝負を見るために多くの観客が集まつていた。

実質この世代のトップの二人の勝負である。

人気も二分し、伯仲していた。

パドックに先に現れたメジロマツクイーンのオーラはすさまじいものだった。

今から人を殺します、と言わんばかりの威圧感。

若干イレ込みが心配になるほどの闘志であつた。

特に、後から現れたトウカイテイオーを殺さんばかりの殺気でらみつけている。

きつとマツクイーンは、テイオーをライバルとして見ており、勝とうとしているとスピカの上層部以外誰もが思つた。

ゴールドシップは知っていた。

あれは単に、スイーツが食べられなくて不機嫌になっただけである。

なんせレース直前、景気づけとしてパフェを三杯も食べようとしていたのを止めたのだ。

別に一杯ぐらいなら食べてもいいが、三杯は明らかに食べ過ぎである。

「レースで体が重くて走れなくなるぞ」

と冷静なツツコミをするゴールドシップに

「レース前に3000mぐらい走れば大丈夫ですわ」

と華麗に答えたマツクイーン。

当然パフェは全部没収となった。

それで不機嫌になっているだけである。

テイオーをライバルとして見ているのは確かであるが、睨んでいるのはおそらく彼女から甘い匂いがしているだけだろう。

「勝ったら祝勝会でスペ特製ショートケーキをホールで食べてもいいが、負けたら没収」

と伝えてあるので、きつとやる気は十分だろうし、これ以上は放置することにしたゴールドシップであった。

パドックに現れたトウカイテイオーもまた、マツクイーンを見ている。

普段は誰を見ることもなく、眼中にないと言ったクールな、ある種傲慢な態度をとるトウカイテイオーだが、今回はマツクイーンをずっと見ている。

きつと自分のライバルとして、マツクイーンを見ているのだろうか。誰もが感じていた。

試合前の追いはちみーをキめたテイオーは、パドックに入るとマツクイーンばかりを見ていた。

なんせ初めての生マツクイーンである。

モニター越しの写真はスマホに穴が開くぐらいという比喩どころ



か、現に開くまで見ていたが、実物は初めてであった。

パドックを華麗に決めるマックイーンさんもきれいだな、と思いな  
がら、本人的にはチラ見、周りから見ればガン見していた。

目があっている気もしたが、マックイーンさんがボクなんか見てい  
るわけないよね、自意識過剰だよね、と思っているので何も気にして  
いなかった。

レース出走前、ゲートインまで重苦しい空気が流れていた。

あいかわらずマックイーンは『お前ら全員ぶつ殺す！』みたいな雰  
囲気を醸し出しているし、テイオーはテイオーでマックイーンのこと  
しか見ていない。

そんなおかしな空気の中で、何かできるウマ娘は一人もいなかった。  
た。

ゲートインも素直に行われていく。

そうして、何らトラブルもなく、ホープフルステークスはスタート  
した。

## テイオーとマックイーンの希望の一戦 本戦

レースがスタートした。

さすがどのウマ娘も、G1に出場するだけの實力を持った子たちである。

あのマックイーンの重々しいスイーツオーラにのまれて出遅れることもなく、きれいに並んでスタートをした。

快調に飛ばすトウカイテイオー

他のウマ娘のほとんどは、テイオーをマークする作戦を取っていた。

今までのレースでわかっていることは、テイオーはかなり理想的なレース展開をするという事だ。

すなわち、彼女のペースで走るのがベストに近い、という事である。ならばそれをマークして勝負するというのは間違いではない。

テイオーの一步前にいて同時にスパートして競り勝つ

テイオーの一步後ろにいて足を溜めスパートで勝つ

テイオーの横にいて一步早くスパートをする

ただ普通に競ったら勝てないがゆえに、対テイオーの戦術としてそれぞれがテイオーに勝つ方法を、策を練っていた。

一方マックイーンは比較的後めの展開を取っていた。

マックイーンもまた、王道の先行策を好むウマ娘である。先に行つて勝つのがいままでのスタイルだった。

それが一転後方待機策である。

マックイーンをマークしようとしていた娘達も、これには面喰らい、ふらふらと自分の位置を定められずにいた。

マックイーンは考えていた。

テイオーにどうすれば勝利できるか、という事である。

テイオーのレースはどれも生でも見たし、ビデオでも何回も確認した。

頭の中でテイオーと競ったが、勝てる気がしなかった。

それくらい彼女は速かった。

一か八かでいつもと同じように走る選択肢は当然あった。

だがそんな、相手の失敗を待つような方法は性に合わなかった。

だからマックイーンは奥の手を使うことにした。

参考にしたのはゴールドシップの走りだ。

入学式の時、そして高知で彼女の走りは見た。

すさまじく広いストライド。

そして圧倒的なパワーによる踏み込み。

その走りは本当にかっこよかった。

何度か真似をしようとしたが、しかしなかなかうまくいかなかった。

ゴールドシップに比べ、体格が小さく体重も少ない自分では、踏み込みの反動に耐えきれず、体が宙に浮いてしまったのだ。

だが、今なら、体も完成し、十分なパワーがある自分なら、きっとできるはずだ。

あと1000m。第三コーナーが見えてきたあたりで、決意を込めて、マックイーンは一步、思いつき踏み込んだ。

ドンッ！

鈍い音がレース場に響く。

大きな音だが、何の音だか誰にもわからなかった。

ドンッ！

また鈍い音が響いた。

レース場の方から音がしている、と多くの者が気づいた。

皆がレース場を見る。

だがその音が何か、見てもわからなかった。

ドンッ！

鈍い音が繰り返し返しレース場から響き続けた。

「おい、マックイーンのあれ、なんだ？」

「たぶんアタシの走り方の真似だと思っただが……」

「ゴールドシップの？」

トレーナーがゴールドシップに聞くと、ゴールドシップはそう答える。

過去では基本的にゴールドシップが本気で走ることはなく、トレーナーも見ることが無かった故にそれを知らなかった。

ゴールドシップは自分の走り方の真似かと最初思った。

だが、ゴールドシップも不思議に思った。

踏み込みごとに最大の力を地面に伝える方法は、ゴールドシップと似ている。

だが、ゴールドシップのやり方だと反動で高く地面が跳ね上がるのだ。

砂浜でやれば砂柱が立つし、硬いターフの上でもちぎれた芝や土が大きく跳ね上がる。

だがマックイーンのそれはそういう気配が一切ない。

音がして、ストライドが非常に長くなったこと以外、何も変化がないのだ。

きつと似ているが違うなにかだ。

そう思うとゴールドシップもワクワクし始めた。

一歩ずつ、一歩ずつ、少しずつ加速していく。

急加速はしない。だが、一歩ずつ確実に速度が上がっていく。速度が上がるたびに反動が強くなっていく。

それを次の踏み込みで必死に押さえつける。

反動を地面を蹴り上げる力にすべて変えて、一切逃がさずに体全部で受け止めながら、マックイーンは走り続ける。

とんでもない走法である、とマックイーンは思った。

一歩ずつの加速が目を見張るほど大きいわけではないが、体力がもつ限り無制限に加速していく。

だが、加速すればするほど、反動が累積していく。

コーナーに入れば殺人的な遠心力が体にかかり、全身が軋む。

綺麗になんて曲がることはできない。外に振られながら、必死に曲

がり続けるしかない。

その遠心力でさらに体は加速し、反動が増していく。

しかし、これを押さえつけられ

これを使いこなせば

テイオーにきつと届く。

やっと直線にたどり着いたマックイーンは、大外から一気にスパルトをかけた。

テイオーは少し失望していた。

マックイーンは出遅れたのかわからないが、いつもと違って後方待機だ。

自分と競り合ってくれろと思っていたのに、肩透かしを食らった気がした。

その後マックイーンはずっと後方に待機したまま、コーナーに入ると大外へと振り回されて飛んで行った。

こんなレースじゃ勝負になるわけがない。

他の子も大したことはない。

せっかく楽しみにしていたが、G1とは言えこんなものか、とテイオーは思った。

だが手を抜くつもりはなかった。いつものように、直線に入る最適な瞬間、スパルトをかけるテイオー。

マークしていた子たちは、早く仕掛けた子も遅く仕掛けた子も、すべて一瞬にして置いて行かれた。

レベルが違い過ぎた。

後はもう、作業でしかない。

テイオーはそのまま直線を、いつものように走っていた。

既に周りなんて見えていない。そんな余裕もない。

いつものスパルトなんて目じやないほどの速度。

体がバラバラになりそうな反動が一步ごとに襲ってくる。

少しでも後ろに踏み込みを間違えば地面に突っ込みそうな反動が

少しでも前に踏み込みを間違えば体が吹き飛びそうな反動が  
少しでも左右に踏み込みを間違えば脚がへし折れそうな反動が  
マックイーンの体を襲う。

しかし

しかし

しかし

マックイーンは一步ずつ、さらに加速していく。  
すでに彼女にはゴール板しか見えていなかった。

テイオーが異変に気付いたのは中山の坂に差し掛かったところ  
だった。

鈍い音が左からしてくる。

ドンッ！

という鈍い音だ。

レース中ずつとしていた音だが、いつの間にか前の方から聞こえて  
くるようになっていた。

何かと試してみると、そこには……

メジロマックイーンがいた。

すでに坂の中腹ぐらいの位置にいるマックイーン。

自分より圧倒的に前にいるマックイーン。

全く意味が分からなかった。

大外に振られて投げ出され、勝負にならないような場所にいたはず  
だ。

それがなぜ、自分より前にいるのだ。

テイオーは必死に追いつがろうと脚に力を入れる。

しかし、テイオーのトップスピードより明らかに速い速度でマック  
イーンは駆け抜けていく。

結局差は開くばかり。

まったく追いつがることができずに、ホープフルステークスはメジ  
ロマックイーンが勝利したのであった。

## マックイーンの今後

ホープフルステークスの後、マックイーンは休養になった。

明確に負傷したわけではないが、全身の筋肉がダメージを受け、ひどい筋肉痛になったのだ。

やはりあのロングスパートの体への負担が大きかったのだろう。

すさまじい力で踏み込み、その反動で進むあれは非常に負担が大き  
いようだった。

ゴールドシップも似たような走り方をするが、マックイーンのように反動をすべて体で受け止めたりはしない。

それなりにパワーロスがあり、それが土柱なり、砂柱として上がるのだ。

ゴールドシップ自身、マックイーンの真似を試してみたら確かに走法としては可能ではあったがその反動は殺人的であり、数歩で限界であった。

「私もやってみまっつ、ぴいっ!!」

「すぺちやああん!!」

スペシャルウィークもマックイーンの真似を試してみようとしたが、体重や体格が足りなかったのだろう。一步目で吹き飛んで宙を舞い、スズカが悲鳴を上げた。

かなり体格に恵まれていないと難しい走法であるのは間違いないかった。

「まあ、しばらく休養するとして、今後どうすんだ？ 三冠取るとしても、こんなやべー走り方してたら体壊すぞ」

「ひとまず練習とトレーニングしながら、天皇賞秋を目指しますわ」

「だよなあ、止めろと言ってやめ…… え？ 天皇賞秋？」

「最優先事項はおばあ様との約束、天皇賞制覇ですわ。三冠よりもそっちの方が大事ですし、ひとまずそれを取っておこうかなって」

「え？ テイオーと戦わなくていいのか？」

「正直、もう興味がありませんわ」

「マジで!？」

ゴールドシップにとつてもちよつと意外であった。

テイオーと勝負するがためにわざわざホープフルステークスに参加した様なものである。

マックイーンはあの強さと戦えることを楽しみにしていたように思えた。

そしてテイオーは今後も成長していくだろう。

そういった強敵と戦う。もしくは叩き潰す。そういったことを望んでいるとばかり思っていたからだ。

「弱い者いじめは好きではありませんの」

「弱い?」

「最初は、テイオーは皇帝を超えることを考えていると思っております」

「そんな噂もあつたな」

『絶対』である彼女に勝つ。最低でも挑む、そんな気概があるのだらうと思っていました。そんな相手が同期にいて、すごいわくわくしたのですわ」

皇帝、シンボリルドルフは絶対的な強さを持っている。今でもまれにドリームトロフィーシリーズに出てくるが、その強さは確かに絶対だった。

トウカイテイオーがシンボリルドルフに憧れている、という話もあつた。

同時に皇帝超え、無敗の三冠をめざす、なんていううわさも流れていた。

「そうじゃなかったか? 別に無敗じゃなくなったから皇帝超えができないってわけでもねーだろ?」

「当り前ですわ。勝敗なんて表面的な話はしておりません」

「じゃあどういう意味だ? テイオーの走りすごかったじゃん」

「あんな、信念も渴望も目標もない、ふわふわした憧れだけ抱いた走りなんて、軟弱としか言えませんわ」

「ふむ……」



ゴールドシップは二人の関係に対しては所詮観客だ。

感じることは限られている。だがマツクイーンは感じることもあったのだろう。

「例えばこの前の天皇賞秋。スペ先輩が勝ちましたが、とてもすごかったですよね」

「ああ、良いレースだったな」

「スペ先輩の勝とうとする意志の強さ、キンイロリョテイの汚名返上しようとする意地の強さ、セイウンスカイ先輩やキングヘイロー先輩のスペ先輩に勝利を見せつけようとする執念。とても素晴らしかったです」

「確かにそうだな」

「ほかにもみんな、ある意味とても美しく、ある意味とても汚い生の感情がぶつかり合っていました。G1レースというのはそういうものだと思っていました」

「そういうもんだろうな」

ゴールドシップだって心当たりがある。

あのクソ生意気な三冠のオルフェーヴル

いけ好かないが確かに速かったトーセンジョーダン

精神的にも物理的にも圧力がすさまじかったジエンテイルドンナのアネキ

他にもたくさんライバルはいた。

あのヒリヒリした空気感は、確かにG1でしか味わえなかった感覚だった。

「ホープフルステークス。確かに実力は私やテイオーに劣っていた子ばかりでした。だけど、みんな勝とうとしていました。わたくしやテイオーをどうやって出し抜くか、どうやってねじ伏せるか、みんな虎視眈々と勝利を狙っていましたわ」

「そうだったな」

「でもテイオーは、たぶん何も考えていませんでしたわ。あの子は勝って当然、程度にしか思っていなかったでしょう」

「傲慢だつてことか？」

「そうは言いませんわ。だってあの子は、確かに速いのですから。ですがそこには信念も何もなかった、と言っています」

「ふむ……」

「あんな子と競っても面白くありませんもの。だから三冠を目指すのは中止して、天皇賞秋を目指しますわ」

そんな軽さでいいのだろうか。

トレーナーの方を見たが、トレーナーも

「マックイーンがそれでいいならいいんじゃないかね？ メジロ家的にも天皇賞の盾は欲しいはずだしな。それに、あの走法を完成させるのは時間かかるだろう」

ぐらいしか言わない。

「あんなナメクジテイオーを相手にするぐらいなら、そうですね、カノープスの皆さんとかの方が勝負して楽しそうですわね」

「カノープス？ イクノさんのところか」

「そう、あのイクノデイクタスさんがいるところですよ！」

「マックイーン、本当にイクノさんのこと好きだな……」

イクノデイクタスはマックイーンと同じクラスの生徒だ。

実力は悪くはないし、頭が良く、マックイーンはよく勉強を教えてもらっていた。

マックイーンは、イクノの中性的な外見とメガネがお気に入りらしい。

ゴールドシップも未来でよくお世話になっていた関係で、イクノのことはかなり好きだった。

最近ではよく、イクノの部屋に二人で押しかけて、そのまま泊まったりすることもあった。

「もちろんイクノデイクタスさんだけではありませんわ！ ナイスネイチャさんとツインターボさんも、なかなか面白いんですよ！」

「そうか」

「ネイチャさんもターボさんもデビューは遅くするみたいですし、そっちと勝負しに行きたいですよ！」

「まあその辺りは、ゆっくり考えようぜ」

「楽しみですわ」

そんな話をしながら、マツクイーンの今後の予定を詰めていくのであった。

## テイオーの今後

テイオーは負けた。

無敗の夢は破れた。

皇帝に追いつかないことが確定してしまった。

「惜しかったな。次は頑張ろう」

東条トレーナーはテイオーにそう声をかけた。

テイオーは意味が分からなかった。

テイオーはシンボリドルフに憧れていた。

トレーナーはシンボリドルフに並ぶウマ娘を育てることを目指していた。

テイオーがリギルに入ったのは、シンボリドルフがいたという事もあるが、トレーナーがシンボリドルフを目指していたからだ。

だが、負けてしまったては、無敗の三冠になれないではないか。

「次」なんて永久に来ないではないか。

シンボリドルフに、永久に追いつけないではないか。

テイオーには意味が分からなかった。

トレーナーはいろいろ言っているが、テイオーの耳には何一つ入ってこなかった。

どうにか理解したのは、次が皐月賞だという事だけだった。

トレーナーと別れた後、テイオーはぼんやりとマックイーンのサイトを見ていた。

そこに記載されたマックイーンの今後の予定にテイオーはさらにシヨックを受けた。

クラシック三冠回避、秋の天皇賞を目指す。

自分はマックイーンを見ていたが、マックイーンが自分を見ていないことがはつきりと分かった。

故障により休養、という話は書いてあった。それが本当かウソか、テイオーにはわからない。

だが、自分を気にしているならば、天皇賞秋ではなく、菊花賞を目

指すはずである。

自分は三冠を目指すと公言しているのだし、マックイーンはおそらくステイヤーだ。菊花賞の方が距離的に得意であるのだから。結局残ったのは無様な自分だけであった。

どうしていいか、テイオーにはわからなかった。

休養として、レース後数日はトレーニングが禁止になった。

いつものトレーニングルームにカギがかけられてしまい、テイオーはいつもの生息地で生息できなくなつた。

ベッドの下に戻るのには、マヤノが眠つてからだ。それまで生息できる場所を探さなければならぬ。

マルゼンスキーやタイキシヤトルが遊びに誘つてくれたが、キラキラウマ娘と一緒にいると溶けそうになるので丁重に断つた。

しかしすることが無い。

ひとまず適当に散歩をすることにした。

学園近くには大きな神社がある。由緒正しい神社であり、人通りも多いのだが、裏の森は、基本人もおらず、ジメジメしていてテイオーにはなかなか快適だった。

そんなところでボーッと湿気浴をしていたテイオーだったが、人影が近づいてくるのであつた。

「あの、トウカイテイオーさん、ですよね？」

「!!」

「私、キタサンブラックといいます！ テイオーさんのファンなんです!!」

振り向くとそこには、黒毛の少女がいた。

小学生ぐらいだろうか。まだ年幼い、といった感じだ。

「えっと……」

「キタちゃんって呼んでくださいー!」

「えっと、キタちゃん？」

「はいー!」

「ファンって、何かの間違いじゃない？」

テイオーは信じられなかった。

こんなナメクジで無様に負けた自分にファンがいるなんて信じられなかった。

思わずそんなことを言ってしまった。

「間違いないですよ！ テイオーさんはかっこいいです!!」

「でもこの前のホープフルステークスだって、マックイーンさんに負けたし……」

「それでもかっこいいです！ すごい綺麗で素晴らしい走りでした!!」

「でも無敗の三冠じゃなくなっちゃったし……」

「無敗じゃなくても三冠は取れます!!」

「でも会長にそれじゃ勝てないし……」

「シンボリルドルフさんだって、3回も負けてるじゃないですか！

1回しか負けてないテイオーさんの方が勝ってます!!」

凄いキラキラしているし、すごい押しが強い子である。

非常に溶けそうなオーラを感じるが、しかし、なんだろうか、彼女の言葉で少し元気が出る気がした。

周りがジメジメしているのもいいのだろう。

「でも、テイオーさん、この前レースしたばかりですから、疲れてますよね？ 地面に寝っ転がるならお膝、貸しましょうか？」

「？」

「ほら、膝枕ですよ」

そういうキタちゃんは、地面に正座した。膝を貸してくれるらしい。

テイオーはなんとなくキタちゃんの膝に頭を載せた。

とても暖かくて、なんとなく安らぐ気がした。

「次は皐月賞ですか？」

「うん、そうだね」

「応援してます！」

「ありがとう。頑張るよ」

「目指せ三冠、ですもんね！」

「そうだね」

応援されて、少しだけ頑張れる気がした。

## 第二章 三冠を目指すテイオーとチーム・カノーpus マックイーンの日常とチーム・カノーpus

マックイーンの今後の予定について決まった。

クラシックの上半期は全くレースを入れずにトレーニングに励み、新しく生み出した必殺走法をものにする。

そして夏ごろから復帰し天皇賞秋、そして調子次第でジャパンカップや有馬記念を目指すことになった。

ゴールドシップもその方針には一切反対しなかった。

未来でマックイーンが引退した原因は？ 靱帯炎であった。

基本的に靱帯炎は脚の酷使により生じるわけだし、体調管理に慎重になつてなり過ぎることはない。

タキオン博士の診察も受けながら、慎重にやつていくことになった。

そうしてスピカのトレーニングは3組に分かれることになる。

一つはトレーナーが見るスペとスズカだ。

またスペとスズカが仲たがいでもして前回のようになると大変だという事で重点的に二人を見ることになった。

スペは天皇賞春から宝塚記念を目指し、スズカもまた、一昨年と同じように重賞戦から宝塚記念を目指す。

そして二人で宝塚記念で競う予定らしかった。

スペは宝塚記念を最後にドリームワールドトロフィーに移行し、スズカも移行するか、留学するかで迷っているらしい。

二人の予定が春期いっばいだし、マックイーンが本格的に動くのは夏以降なので、二人に重点を置くのに誰も反対しなかった。

もう一つはタキオン博士が見るスカーレットとウオツカだ。

そろそろ二人とタキオンもデビューを見据え始めており、その調整に入っていた。

タキオンが自分で調整をやるとずいぶん駄々をこねて、マンハツタ



ンカフェに珈琲をキめさせられていたが、それでも譲らなかつたのでトレーナーが折れた形である。

で、最後にマックイーンとマックイーンを見るゴールドシップのペアだ。

こちらは最近、別チームであるカノープスと一緒にトレーニングしていた。

カノープスの南坂トレーナーとスピカの沖野トレーナーは兄弟弟子にあたるらしく、沖野トレーナーがお願いしてくれており、また、マックイーンの激烈なプッシュにより一緒にトレーニングすることになっていた。

「今日もイクノさんはかつこいいですわ……」

「マックイーンさんも今日も美人ですよ」

「キヤー、褒められてしまいましたわ!」

こんな感じでいつもいちゃつく二人。

イクノデイクタスの方は単に素で言っているだけだろうが、傍から見たらいちゃついているようにしか見えない。

そしてマックイーンは舞い上がりまくっていた。

「はあ、二人とも仲いいねえ」

「そういうネイチャさんも、今日もかわいいですわ。大丈夫ですわネイチャしか勝たん!」

「あはは、お世辞でも褒められると照れ臭いね」

「お世辞じゃありませんわ! 本音だと信じてもらえるまで100万回コールしましょうか?」

「やめて!」

「そうだぞ! ネイチャはかわいい!」

「そうですね、ネイチャさんはかわいいと思います」

「何この褒め殺し!」

マックイーンのお気に入りその二、ナイスネイチャである。

名前の通りの良い素質と、そして人受けするかわいさを持ったウマ娘だが、妙に本人に自信がない。

南坂トレーナーもその点を気にしていたが、マックイーンがそれを

聞きつけて毎回過剰なぐらい褒め称えていた。

まあマックイーンのことだから全部本気だろうけど……

「ったく、遊んでないでさっさと練習しようぜ」

「うるさいですわ阿寒湖」

「阿寒湖って言うんじゃねえ!!」

ガルルルル、と威嚇するマックイーンとにらみ合う非常に小柄な彼女はキンイロリョティ。

スズカと同期の彼女はカノープスのリーダーであり、マックイーンとは妙にウマが合わない。

そして、彼女はゴールドシップの、未来ではすでに亡くなっていた父親であった。

ウマ娘というのは未知の部分がかなりある。

そのよくわからない生態の中に、ウマ娘同士のパートナーからウマ娘が生まれることがある、という事がある。

男性と結ばれるウマ娘は多いが、ウマ娘同士、またはヒトの女性との間からも子を成すことができるのだ。

ゴールドシップの母はマックイーンの娘だが、父は目の前の彼女であろうことはゴールドシップは察していた。

ゴールドシップが知る父は、すでに引退後であり、現役時のウマ娘としての名前を名乗ったことが無かった。

なのでゴールドシップには名前だけではわからなかったし、世代的にもこの時代のウマ娘だと思っていなかったので最初は空似とかかとおもっていた。

だが実際に会って、話をして、今ではゴールドシップは確信をしていた。

「ほら、マックイーンもリョティも喧嘩するなつて」

「ゴールドシップ！ いつも言っているだろうが！ 抱き上げんな！

頬ずりすんな!!」

「リョティは小っちゃくてかわいくてなあ」

「ゴールドシップ！ なんでリョティの肩をもつのですか！」

未来の父は、小柄で上品で非常に大人しく優しい人だった。

ゴールドシップはそんな父が大好きだった。今の元気な彼女を見ていると思わず抱きしめたりしたくなってしまう。

マックイーンはそれに嫉妬するし、リョティはじたばたと暴れるが、ゴールドシップも止める気はなかった。

「はいはい、皆さん遊んでいないでください。トレーナー、今日のメニューは？」

「キングさん、いつもありがとうございます。これでどうでしょう？」  
「良いと思いますよ。リョティも、今度こそ勝つんでしょ？ 頑張らないとだめなんじゃないですか？」

「そうだ！ 俺が次こそは勝つんだからな!!!」

「ターボも勝つ!!」

「そうですね、頑張りましょう」

「みんな元気だねえ」

キングヘイローがトレーナーを連れて練習場に現れた。

彼女もまたカノープスのメンバーで、実質的などりまとめ役であった。  
彼女の一声で、マックイーンも交ぎって皆練習を始めたのだった。

## ゴールドシッパのフアツション研究

「新機軸の勝負服技術？」

「そうだ。タキオン研究所で研究は進んでるんだけど、服飾側の協力がいいねーんだ。キングさんなら助けてくれないかなってな」

怪我を防止するという観点でできることはないかと考えたゴールドシッパが考えたのは、勝負服の改良であつた。

トレーニング方法の改善や食事の改善、定期的な診断などは既にアグネスタキオン主導で行われている。

ウマ娘についての研究も進んでおり、ゴールドシッパが来た未来ほど、とまではいかないが格段に進歩しているのは疑いもなかった。

最近はコロコロ受け身も必修になった。

うまびよい伝説の時の「でもやせたい」の表情で転がる練習をするウマ娘も毎日学園のどこかで見かけられる程度には流行っていた。

若干のダイエット効果があることも証明され、年頃の乙女に大人気の運動となっている。

だが、ここまでやってもスズカの事故は防げなかった。

最悪は回避できたが、まだ工夫の余地があるのはよくわかつた。なのでゴールドシッパはさらに先に進めることにした。

それが体操着及び勝負服の改善だつた。

未来の勝負服や体操着にくらべ、現在の服が非常に頼りない、とゴールドシッパは常々感じていた。

まず脚部防護。

未来ではサポーター機能があり、脚部負担を自動的に和らげてくれる効果があつた。

また、万が一骨折など重大な怪我があつた場合には硬化して走るのを補助し、転倒しにくくしてくれる。

そのため未来ではみんな勝負服も体操服も最低限タイツを履いていた。

過去に来て、生脚率の多さにゴールドシッパは最初の頃ドキドキし

ていたものである。

他にも勝負服には転倒時の頭部と首、胴体の保護等、いくつかの機能が搭載されていた。

そういう意味では勝負服は極めて高価であり、また未来のものの方が圧倒的に重かった。

この重さを嫌って、導入当時は着るのを嫌がるウマ娘も少なくなかったらしいが、ゴールドシップが活躍していたころはこれらの機能の搭載が義務になっていた。

なのでゴールドシップはその重さに慣れており、これらの機能が無い服は非常に心もとなく感じていた。

すでにタキオン博士や周りの優秀な研究者により、研究はかなり進んでいた。

ただ、それはあくまで生理学的にこのような補助があった方がいい、と言ったものだけであり、実現化にはまだ先が長かった。

なんせ、服についての知識を持つ人が誰もいないという、乙女にあるまじき状況なのだ。

タキオン博士は放置すれば下着すら替えないずぼらだし、デジタル博士も機械は強いが服関係はさっぱりだ。

ダイワスカーレットは服は好きみたいなので全く役に立たないわけではないが、彼女は作る側の者ではない。

結局理論と研究ばかり深化し、実用化のめどが全く立っていないかった。

ゴールドシップは、だが、未来の知識で知っていた。これを実現したのが目の前の彼女、キングヘイローだという事を。

この技術は未来では、彼女が独自で一から組み立てたものだ。

かなりの年月がかかったというが、故障した同期や仲間たちを見て必死に開発したものらしい。

既に歴史はかなり変わりつつあるが、人が変わったわけではない。おそらく彼女の助力を得れば、完成できるのではないかという思惑があった。

彼女の功績を横取りしているようで気分が良いものではないが、そ

の辺りは今までの研究の成果を渡すことで許してもらおうと内心思っていた。

ひとまず資料を一通りキングヘイローに渡すゴールドシップ。

キングヘイローはすぐに一通り読んだようだ。

「うちの母に頼みたいっていう事？　口利きぐらいならしてあげてもいいけど」

「いや、キングさんに協力をお願いしたいんだ。作成なんかは専門家に頼むことになると思うけど、デザインや指揮はキングさんが適任だと思う」

「私はまだ現役なんですけどね……」

「無理は承知でお願いしたいんだが……」

有馬記念での決戦後、キングの同期の多くはドリームトロフィーシリーズへの移籍をした。

グラスワンダーとセイウンスカイは有馬記念を最後にトウインクルシリーズを引退しドリームトロフィーシリーズへ移籍した。

エルコンドルパサーはもう一年、凱旋門賞に挑む予定だが、結果にかかわらず終了後にドリームトロフィーシリーズに移籍予定だった。

スぺは半年間、宝塚記念まではトウインクルシリーズに残るが、それを最後にドリームトロフィーシリーズに移籍予定だ。

そんな中、キングヘイローだけはまだトウインクルシリーズの続行を決めていた。

出来ればG1を勝ち、カノープス念願の優勝杯を手に入れたかったのだ。

今期は完全に短距離に目標を絞り、春だけでG1にはダートも含めた3戦に挑む予定だった。

そういう事で忙しいキングは、協力する余裕はほとんどなかった。しかし一方でゴールドシップの持ってきた技術には非常に惹かれていた。

怪我をして夢をあきらめる子を何人も見てきた。

彼女の取り巻きといわれる友人たちにもそんな子がいた。

パツと読んだだけでも、実現すればかなり怪我を予防でき、また、事

故も減りそうだとわかっていた。

「大したことはできませんが、おそらくこの理論で測定したデータがあれば、サポートタイツぐらいはすぐに作れると思いますわ」

「ほえ?」

「ひとまずいくつか試作を作ってみましようか。予算はお願いしても?」

「大丈夫だぜ! タキオン博士のおやつ代と、マックイーンのおやつ代はいくらでも流用できるからな!!」

「突っ込まないでお願いしますわ……」

母に頼めばおそらく作ってくれるウマ娘の被服メーカーの紹介ぐらいはしてくれるだろう。

予算はゴールドシップの方でどうにかできるだろう。

後はこの理論にあった注文を出すだけだ。試作品をいくつか作って、それで試行錯誤していけば、良いものができそうだった。

## 東条トレーナーの悩み

東条トレーナーはトウカイテイオーに手を焼いていた。

もともとリギルは癖のあるウマ娘も多く、手を焼く場合も少ないわけではなかったが、それでもトウカイテイオーはサイレンススズカ以来のめんどくささだった。

いや、サイレンススズカも面倒な子ではあったが、まだ話は聞いてくれたし、指示にも従おうとしてくれた。

テイオーはそれ以上に面倒だった。

まず、隠れていてなかなか出てこない。

見つけるのから一苦労なのである。

マルゼンスキーやタイキシャトル、フジキセキやヒシアマゾンあたりと協力して、テイオーがどこにいるか探すのはもはや日常になっていた。

トレーニング風景も見せてくれない。

正しいフォームでトレーニングしているのか、正しいやり方で行っているのか、というあたりは非常に重要なのだが、それも恥ずかしがって見せようとしない。

時々シンボリルドルフがトレーニングフォームやランニングフォームなどを確認していると聞いている。

ルドルフの知識は自分に並ぶほどであるから、ルドルフが大丈夫というならば大丈夫だと思うが、直接確認できないのはトレーナーとしてかなり鬱憤が溜まる現状であった。

レースプランを決める相談にも顔を出さない。

レースの走り方についてはチームによって非常に色が出る。

スピカなんかは基本ウマ娘に丸投げであり、悩んでいることについてトレーナーに聞けば答えてくれる、というかなり放任主義だ。

だが、リギルは全く逆である。東条トレーナーがそのウマ娘にあった、勝てるプランをガチガチに固め、その上でそのレースプランに従って走る、というのが基本だった。

だが、テイオーはそもそもそういった相談に出てこない。



強引にメンバーが縛り上げて連れてきても、人が怖いと言って机の下でじめじめし始めて、あまり話を聞いてくれない。

結局本人に丸投げするしかなかった。

医者嫌いも深刻である。

リギルはタキオン研究所とかなり強く提携している。

定期的な健康診断から、レース直前のメデイカルチェックまで、怪我予防の対策を非常に頻繁に行っていた。

そのためチームメンバーはかなりの頻度で診察を受けに行くように東条トレーナーは指導していた。

だが、テイオーは全く来ない。

本気で来ない。

逃げ続ける。

仕方がないのでエアグルーヴとナリタブライアンに、会長の机の下に隠れているときに縛り上げて、連れてきてもらうのが日常だった。

管理も何もあつたものではない。

シンボリルドルフが強く推すから加入させたが、完全に手を焼いていた。

移籍も考えたが、さすがにこの子を他に押し付けるのは相手に悪い。うちではまだルドルフのいう事は聞いているが、よそに行ったら誰のいう事も聞かなさそうである。

一度スピカの沖野トレーナーに軽く打診したが、断固拒否といわれてしまった。

こうなったらルドルフに頑張ってもらうしかないかもしれない。

幸い、次期生徒会長候補にスペシャルウィークは上がっている。

彼女がドリームトロフィーへ移籍したところに正式に就任してもらうことも考え、既に打診もし始めている。

メンバーも、ナリタブライアンはもともと向いていないという事で退任予定だ。

エアグルーヴは他のウマ娘の世話を焼きたいだけなので、上がだれになろうとあまり気にしないという事であった。先任副会長として

留任予定である。

代わりにグラスワンダーにはすでに生徒会入りしてもらっているし、セイウンスカイにも参加を打診していた。

そういう事もあって、現状ルドルフの手が比較的あいている。

ルドルフをサブトレーナー扱いにして、テイオーについてはメインはルドルフをお願いすることも本気で検討していた。

「にぎやああああ!!」

エアグルーヴに塩をまかれたテイオーの悲鳴が聞こえる。

東条トレーナーの苦労は終わらなそうである。

## 気づいた三人の話し合い

「なあ、マックイーン」

「なんですの、いたいいたいいたい!!」

ある日のトレーニング。

キングヒーローとゴールドシップは出かけ、トレーナーとネイチャはターボと一緒に買い出しに行っている。

他のメンバーだけでトレーニングしているときの話だ。

現在マックイーンは柔軟性を上げるトレーニングを重点的に行っていた。

怪我防止のために柔軟性を上げるというのは非常にいいことなのである。

丈夫さに定評のあるリョテイもイクノも、非常に柔軟性が高かった。

一方でマックイーンはかなり固い。

前屈で90度にしか行かないのはかなりやばいと周りも思った。

そのため今、後から必死にイクノが押して、前からはマックイーンの手を握ってリョテイが引っ張っていた。

「他のメンバーもいないから聞くが、ゴールドシップ、ありやなんだ？」

「なんだって…… 私のルームメイトですわ。ついでにスピカのサブトレーナーで今はカノープスの一時的なサブトレーナーですわね」

マックイーンとゴールドシップがカノープスにいる理由は、なにもマックイーンのがままだけではない。

カノープスは最近人数が増えており、トレーナーの手が回らなくなりつつあった。

そのため、トレーナー同士仲が良いスピカから、サブトレーナー格であるゴールドシップをマックイーン付きで送ったというのもあるのだ。

スペとスズカに専念し、あとのデビュー前のメンバーは実質的なサブトレーナーでもあるタキオンが面倒を見ている。

スピカは現状、手が余っている状態だった。そのためカノープスに一時的な移籍のようなことを行っていた。

リヨティもゴールドシップ自体に何か不満があるわけではない。

何かあるたびにパパと呼んで抱き上げてくるのはうっとうしいし意味が分からないが、不愉快なほどではない。

あらゆる知識は豊富であり、現在ゴールドシップがキングと出かけているのは、新機軸の勝負服を作るためだと聞いている。

信用できないわけでもない。

だが、何か見逃してはいけない何かを見逃しているような、違和感があった。

他のカノープスのメンバーにそれを話しても、イクノ以外は同意を得られなかった。

だが、イクノだけは似たような違和感があるらしい。

だからこそ、おそらく何か知っていそうな、マックイーンに聞くことにしたのだ。

若干ずれた答えをするマックイーンに、イクノが尋ねる。

「マックイーンさん、ゴールドシップさんの学年、どこですか？」

「……」

「学園生なのに所属クラスすらありません。そもそもいつ入学かも、データがありません」

「……」

「サブトレーナーの資格もありますが、取得年度がかなり未来でした。学生番号も本来あり得ない数字でした。学園の学生番号は開校からずっと通し番号ですから、数字から考えればかなり未来の数字ですね」

「!？」

「調べると、案外わかるものですよ。ちよつと言えない方法を使いましたが」

イクノが告げた情報は、基本的にプライベート情報なので第三者が知ることができない。

それをしれつと調べるあたり、なかなかやばい手を使っているよう

に思うが、イクノは表情を変えない。

カノープスのやばさの片鱗を、マックイーンは見た。

「リョテイ、この情報から何を推測しましたか？」

「かなりくだらない、ファンタジーみたいな妄想が混じるがいいか？」  
「構いません、あなたの直感は無稽な時ほど予言めいて当たりますからバカにできないんです」

「お褒め頂きドーモ。結論から言えば、ゴールドシップは未来から来た、俺ら3人の血縁じゃねーかっていう事だ」

「どうしてそう思いますの？」

「イクノが出した情報を鵜呑みにすりゃ、ゴールドシップは未来から来てるってことになる。すさまじく荒唐無稽だし方法も何もわからんが、そこを前提にして話をさせてくれ」

「構いませんわ」

「ゴールドシップの顔はマックイーンそっくりだ。未来から来たなんて情報がなきや、普通にメジロの庶流とか、そういう系統のウマ娘だろうなって思う程度には似ているな」

「そうですね」

「同じ葦毛だしな。だがマックイーンと違うところも当然ある。マックイーンより輪郭がシャープだし、目も少し鋭い。見ているとその辺りイクノに似てる気がすんだよなあ」

「素晴らしいながらリョテイはイクノのメガネを外す。」

メガネを外したイクノとゴールドシップは似ているといわれたら、似ているような気もする。

しかしマックイーンは、リョテイがイクノのメガネを外すしぐさがかっこよかったことに嫉妬して頬を膨らませていた。

「くだらん嫉妬するなって。で、ゴールドシップは時々ふざけてマックイーンをおばあちゃんちの畳みたいな匂いがするとか言うだろ」

「言いますわね。言うたびにメジロドライバーですが」

「まあ、こじつけみたいなものだが、そうするとマックイーンとイクノの孫じゃねーかっていう話になるわけだ。おばあちゃんだしな」

「!? そんな、イクノさんとわたくしはまだそんな深い仲ではあり

「ませんわ!」

「私はマックイーンのこと、好きですけどね」

「!!」

「そもそも好意のない相手を部屋に入れたり、一緒のベッドで寝たりはしません」

「!!」

真っ赤になったマックイーンはそのまま撃沈した。

「はいはい、のろけはいいから」

「事実を言ったのみです」

「イクノはそういうところが天然だからなあ……」

「で、でもそれだとリョテイは関係ないではありませんか」

「俺のことをパパって呼ぶのと、あとはこの違和感に気づいたのが俺だから、血縁かなあとと思った程度だ。全く根拠はねえ」

「そもそもその推論だと、リョテイがゴールドシップの父じゃないですか。あなた、私やイクノより二つも年上ですわよね? 祖父母より年上の父ってヤバくないですか?」

「やべーな。絶対やべー。だから多分俺は無関係だろう」

「そんなことはないかと、ゴールドシップの目の色がリョテイと全く同じですし、何か企んでいるときの笑い方は全く一緒です」

「……」

「そんな目で見るとなよマックイーン」

「大丈夫ですわ、たとえばあなたが自分の子供ぐらいの年のウマ娘に手を出す変態だったとしても、ちゃんときつちり私とイクノさんのかわいい子に手を出す前に警察に送って差し上げますから」

「ブタ箱送り確定かよ!?!」

「ちゃんと差し入れぐらいはしてあげますわ」

「ふんっ」

「いたいいたいいたい!!」

リョテイがマックイーンの上半身を引っ張る。

股裂き状態になったマックイーンは悲鳴を上げた。

「まあ本当にこじつけも多い、フィクションみたいな話だ。おそらく

間違っていることもいっぱいある。だが、前提としてゴールドシッパが過去に来たつてところを前提にすると未来でよくないことが起きるってことだろ」

「そうかもしれないわね」

「推測する情報がまだ足りなすぎるから、マックイーンなら何か知らないかと思っただよ」

「私もあまり知りませんわ。おばあ様は、『三女神様に導かれた精霊ウマ』とか、『ウマ娘達を助け、導く三女神様の神子』とか……あとは……『彼女らが消えていなくなることで、終わる』とか言っていました……」

「あまりいい情報じゃねえな。イクノ、精霊ウマって知っているか？」  
「知りませんね。一度調べてみましょう。メジロのおうちの古文書とかそういうものも見られると助かりますが」

「おばあさまに頼んでみますわ」

「俺も調べよう。マックイーンにこういう知的作業を頼むのは、いまいち心もとないからな……」

「……」

「なんだマックイーン」

「わたくしとイクノさんの愛の結晶は渡しませんからね」  
「……」

「いたいいたいいたい!!」

リョティがマックイーンの上半身を引っ張る。

股裂き状態になったマックイーンはまた悲鳴を上げた。

王は孤独であるべきか、王は慕われるべきか

キングヘイローの母親、グッバイヘイローが日本に帰ってきていたのに合わせて、キングヘイローはゴールドシップを連れて行くことにした。

キングが日本のトレセン学園に通っていることからわかるように、現在のグッバイヘイローの活動拠点は日本にある。

尤も、元々がアメリカのウマ娘であるため、アメリカで活動することが多く、案外日本にいる期間は少なかった。

だが偶然帰ってきた母に、キングはゴールドシップを連れて家に帰ったのだ。

ゴールドシップの説明は非常にわかりやすく、母も納得していた。自分が設計したプロトタイプของ サポータータイプについても、いくつか先人としてのアドバイスをするだけで、そのまま認めてくれた。その有用性についても、ゴールドシップと私を褒めてくれた。昔の私なら、外面ばかり気にして、と内心憤ったりしていたのだろうが、今では素直に喜べる自分がいた。

結局母も自分も同類で、不器用な人間なのだ。素直に褒めてくれることは喜ぶことにした。

ゴールドシップは夕食も一緒に食べる予定だったのに、「マツクインがスイーツをむさぼっている気配がするから止めるために帰るぜ!!」とさっさと帰ってしまった。

気を利かせてくれたのだろう。

結局夕食は母と二人きり。

食事はいつものニンジンハンバーグであった。

おそらく母の手作りの、あまり格好が良くなくて、しかし昔からの好物だった。

「お母様。先ほどの新勝負服の件ですが……何か意見ありますか？」

「……」



少し悩んだ様子を見せる母。

おそらく何か、母に見えている問題があるのだろう。

それを言うべきか、悩んでいるのだろう。

私を傷つけてしまうことを言うのを悩んでいるのだろう。

昔はこのよくわからない間が、とても嫌いだった。そして出てくる言葉はたいてい、辛辣なものだった。

自分も母も不器用だな。と、今の私なら思う。

結局似た者親子でしかなかった。

「お母様、失敗できないのです。お願いします」

「……製品自体は問題ないと思うわ。もちろんもつとデザイン的に洗練させたりする必要はあるでしょう。ですがそれはあなたやあなたの周りが頑張ればいいこと。性能もある点を除けば必需品にしたい気持ちもわかるわ」

「……ある点……重さ、ですか」

「そう。重すぎるわね。走力に影響が出るレベルなもの」

重さについてはかなり問題になるのはわかっていた。

ウマ娘のパワーならそう大きな問題になるものではない。

だが、明らかに走力に影響が出るだろうぐらい重かった。

ほんのわずかだが、遅くなる。だが、0.1秒すら争うウマ娘のレースにとつて厭われるレベルの重さだった。

「ゴールドシップさんはスピカのサブトレーナーです。私もカノープスのサブリーダーとして、自分のチームへの導入を強く推す予定です。2チームが導入すれば」

「導入しても他には広がらないわよ。それだけ致命的な欠点なもの」  
「……」

母の指摘はもつともだった。

もしかしたら2つのチームで導入すればリギルも動いてくれるかもしれない。

だが楽観的に見てもそこで終わりだ。

スピカにはスペちゃん人とスズカさんがいる。マックイーンさんもいる。時代のエース級3人が着れば、広告塔には十分だと思ったが、

それは甘いと母は一蹴したのだ。

「どうすれば……」

「……一つだけ、手があるわ」

「どういうものでしょう」

「キング、あなたの春の予定は、フェブラリーステークス、高松宮記念、そして安田記念だったわね」

「そうです」

「これを着て、それを全部勝って、そのあとにさらに宝塚記念でスペシャルウィークさんと、サイレンススズカさんに勝てばおそらく導入に弾みがつくわ」

「!？」

「シルバークレクターといわれるあなたが、急に覚醒し絶対的な強さを得る。今まで勝てなかったスペシャルウィークさんにも勝つ。そうすればその理由は皆が探すでしょうね。そして……」

「明確な違いは新規導入したサポータータイツ。ゲン担ぎでも使うウマ娘が増えると」

欠点を隠し利点に見せればいいのだ。たとえばそれが思い込みであろうと。

母のいう事は絶対に効果があるだろう。

ただ、致命的な欠点を除けば。

「無理ですわお母様」

「無理じゃないわ」

「わたくしが、勝てるわけがない。スペちゃんやスズカさんに、そこにピークを持ってきている二人に勝てるわけがない」

「そんなことないわ」

「慰めは結構です!! 才能がないことは自分が一番わかっています!!!  
そもそも、お母様だっていつも才能がないとおっしゃるではありませんか!!!」

皆で走った最後の有馬記念だってそうだった。

前で雲のようにとらえどころなく逃げるセイちゃん。

その後ろで舞うように軽やかに走るエルちゃん。

王者と言える堂々さでコースを邁進するスペちゃん。皆を見ながら虎視眈々とゴールを狙うグラスちゃん。

みなすごかった。

私も勝負にはなっていたと思うが、しかし並ぶことはできていなかった。

自分は結局5着で終わり、皆との差を感じてしまった。

悲しかった。

これだけ努力しても追いつけない絶対的な差に。

とても楽しくて、とても輝いていたのに、同時にとても悲しかった。

今年の春の短距離戦線はライバルになる子はいても、とびぬけた子はいない。

自分でもおそらく1勝、もしかしたら2勝ぐらいできるだろうと思っっている。

だがそれだけだ。

全勝するなんて無理だし、そのあとあのスペちゃんとスズカさんにな、おそらくすべてを賭けて挑む二人に勝つなんて無理としか思えなかった。

立ち上がって逃げようとした私をお母様はあわてて駆け寄り抱きしめた。

「キングちゃん、ごめんなさい。お母様が悪かったわ」

「お母様」

「今までお母様が、間違ったことを言い過ぎたわ。でも、あなたが孤独になってほしくなかった。あなたに王になってほしくなかった」

「お母様?」

「G1を7勝、歴代最強。その称号は私に欲しいものは何一つ与えてくれなかった」

「……」

「友もない。家族もあなた以外にいない。そんな孤独をあなたに繰り返してほしくなかった」

「……」

「学園で、お友達、いっぱいいるんでしょう？ ウララさんでしたっけ？ とてもいい子なんでしょう？ あなたが優しく良い子になってくれて、お母様はとても満足でした」

「お母様……」

「でも、それまで私は間違っただことを言ってきたしまいました。たくさんあなたを傷つけていたわ。ごめんなさい。キングちゃん」

「おかあさまあ……」

「お母様のことは嫌ってくれて構わない。捨ててくれても構わない。お母様が間違っていたのだから。だから、キングちゃん、自分をもう少しだけ、信じてあげてくれないかしら」

「……」

「あなたのトレーナーさんも、いろいろ考えてくれているみたいだから、きつと大丈夫」

「トレーナーさんが？」

「ええ。絶対に勝たせる、と言ってくれたわ」

「……」

「私のことは信じなくてもいい。けど、トレーナーさんを、信じてあげて」

「……わかりました」

## 最速の貴公子のクラシック戦線異状なし

皐月賞

クラシック三冠の初戦の日、トウカイテイオーは姿を現した。今までと同じく、それまでのトレーニングはすべて公開されずにいた。

しかし、シンボリルドルフと共にいる姿や、トレーニングルームに入る姿はしばしば確認されており、シンボリルドルフから仕上がりは万全だという回答は出ていた。

当日の人気は トウカイテイオーが一番人気

ミスターシービーと同じチームのシガーブレイドが二番人気であつた。

「テイオーさーん!! がんばってくださいーい!!!」

大歓声の中からでも、耳聴くキタサンブラックの応援の声を拾ったテイオーは、彼女がいる方向に笑顔で手を振った。

歓声はひとときわ大きくなり、キタちゃんも満面の笑顔になった。

今回のレースは単なるステップレースの一つだとシンボリルドルフは考えていた。

メジロマツクイーンへのホープフルステークスでのあの強さは予想外だったが、三冠には出てこないのだ。

それにもしも出てきたとしても、今のテイオーなら勝負できると考えていた。

シガーブレイドは確かに速いが、『テイオーと比べれば』大したことない。

例年ならば三冠のうち一つか二つは取れそうな実力だが、その程度ではテイオーには勝てないだろう。

テイオーの素質は類まれなる柔軟性と、その精神性にある、とシンボリルドルフは分析していた。

柔軟性により非常に怪我をしにくい体質である。関節系の負傷はまず起こさないだろう。

骨折だけは心配だが、最近の研究の進展や食事療法などもあり、こちらの可能性も非常に低いと思われた。

怪我をしないというのはそれだけでウマ娘にとっては非常に大きな才能である。

ハードなトレーニングにより能力を伸ばせるという事だし、レースプランもプラン通りに遂行できる。

そのアドバンテージは非常に大きかった。

もう一つはテイオーの精神性だ。

臆病で特に他人を怖がる。対人関係は壊滅的で、おハナさんとすらろくに会話できず、シンボリルドルフか、あの応援に来ているキタサンブラックぐらいしか会話をしない。

ルームメイトのマヤノトップガンとすら話さないのだからそのコミュニケーション能力は致命的だろう。

しかし一方で、その分一人で淡々と努力し続ける才能があった。

やるように言えば、特にメンタルフォローをすることもなく淡々とメニューを消化する。

どれだけハードなトレーニングでも音を上げない。体の丈夫さも合わせれば、伸びる余地が非常に大きいウマ娘だった。

また、レースに対して常に平静を保っているのもシンボリルドルフは評価していた。

他人に興味がなく勝負にも執着がないのは、闘志が欠けると考える者もいるだろうが、好不調の波が非常に少ないという事と同義でもあるのだ。

ウマ娘によっては好調により波乱を起こすのを狙うこともある。それ自体、シンボリルドルフは否定しない。

だが、「絶対」を目指すならば、負けないようにすることを重視するべきなのだ。

そういう意味でも、トウカイテイオーは皇帝に並びうる素質を持ったウマ娘であった。

レースは順調に推移した。

テイオーは圧倒的な速さで逃げていた。

テイオーは今までは比較的前目につけて直線で抜け出すというスタンスを取っていた。

王道のレース展開であり、テイオーの才能ならば、上手いレース展開は難しうなさそうだった。

しかし、本質的にほかのウマ娘を嫌うテイオーならば駆け引きは止めた方がいいのもあり、逃げた方がいいだろうと思ったルドルフは戦法を変えさせたのだ。

マークを複数からされても、抜け出せないなどの展開が起きにくいだろうことも戦法変更の理由だった。

高速で逃げるテイオーに追いつけるウマ娘は一人もいなかった。

結局前半1000mを60秒、後半1000mも60秒で走破した。

結局誰にも影を踏ませることなくテイオーは一勝目を飾った。

高く突き上げられた一本指が、彼女の自信を示していた。

結局日本ダービーまで、彼女は無欠の存在であった。

圧倒的に逃げ切って走るテイオーの影を踏むものはいなかった。

二冠を取ったテイオーは、秋の三冠目、菊花賞に向けて努力を重ねるのであった。

## 不屈の王の宝塚記念

宝塚記念まではそんなに心配する必要はない、と南坂トレーナーは言っていたが、果たしてその通りであった。

もちろん楽な勝負ではなかったが、勝てない勝負でもなかった。

最初のフェブラリーステークス。

中央でのダートレースは初めてだったが、ダートレース自体は模擬レースでかなりの経験があった。

いつも通りキングは中団につけたので、砂がバンバン飛んでくる。

良バ場のダートコースはいつもこれである。

これこそがダートレースの醍醐味であり他者の後ろに付けば楽になる芝コースとの違いであった。

勝負服が砂にまみれ、髪も砂にまみれながらも、直線で一気にスピードを出す。

今回から導入しているサポートタイツも非常にキングとは相性が良かった。

重さの分マイナスであるのは確かだが、いくら力を入れても壊れないような安心感があるのだ。

瞬発力で勝負してきたキングは、本当の全力を出せていなかったのだろう。

本当の全力を出すと自分の脚がもたないのでは、という漠然とした不安が常に無意識にあったのにキングは気づいていた。

無意識に脚をかばっていた分を、全力を出すと怪我をするのではなにかという恐怖の分を、これなら無視することができた。

このほんのわずかな差が、勝負では絶対的な差になる。

すさまじく砂を撒き上げながら全身全霊でラストスパートをかけるキングヘイロー。

大外から一気に差し切った彼女は、見事初めてのG1の栄光を得たのであった。

その後の高松宮記念も一気に差し切って勝利

安田記念は先行策から前に出て逃げ切って勝利



遅咲きの王に、不屈の王に、皆が熱狂した。  
そしてキングは最後の決戦に挑む。

宝塚記念。

最速の機能美、復活の逃亡者といわれ、大阪杯含む重賞3連勝を経て宝塚記念に挑むサイレンススズカ。

現役最多のG1、6勝 日本総大将、日本一のウマ娘といわれ、あとはグランプリが欲しいスペシャルウィーク。

この二人が出走する宝塚記念にキングも挑戦をするのであった。

ゴールドシップとしてはぜひ、スペカスズカに勝利してほしかった。

キングヘイローには今回の勝負服の件でずいぶん世話になった。

だがやはり勝ってほしいのはチームメンバーであった。

「マックイーン。今回の宝塚記念。誰が勝つと思う?」

「キングさんが本命、リョテイが対抗ですかね」

「おいおい、チームメンバーを応援しろよ」

「ゴールドシップもわかってるでしょう? あれだけいろいろ言っていましたし」

「……まあな」

「ウサギとカメ、ですわね」

「?」

「おばあ様が昔よく読んでくれた絵本ですわ。なぜカメがウサギに勝ったか、わかりますか?」

「そりゃウサギは昼寝したからだろ」

「ウサギはカメを見ていたから、カメはゴールを見ていたから、そうおばあ様に教えてもらいました」

「……」

「スペ先輩は誰を見えていますか? スズカ先輩は誰を見えていますか?」

そしてキングさんは、リョテイは何を見えていますか?」

「……」

「つまりそういう事ですわ。それが分かっているからこそ、ゴールド

シップもトレーナーさんもいろいろ言っていたんでしょ？」

マックイーンの指摘はとてもの確な説明だった。

似たような懸念は、ゴールドシップも沖野トレーナーも抱いていた。そのためいろいろとアドバイスや指摘もしていた。

だが、スズカもスぺも思い込んだら頑固なところがある。特に今回は二人とも本当に待ち望んでいた直接対決だ。あまり効果があったとは言えなかった。

「まあ、これで人生が終わるわけじゃあない。ドリームトロフィーもあるし、高いがいい勉強代だと思うしかないな」

トレーナーは最終的にこう判断していた。

本格化をしたキングとはいえ、絶好調のスペやスズカと勝負したら多少劣るような気がするのがゴールドシップの本音だ。スペかスズカか、どちらかしか出てこないようならば、おそらく出たのが勝つ可能性が高かっただろう。

しかし、レースとはそういうものである。

すべての終わりとなる、勝負が始まった。

いつものように先頭を逃げるサイレンススズカ。

そして先行策を取り2番手につけたスペシャルウィーク。

二人だけで走っているかのように、快調に飛ばす二人。

スズカにとって2200mは得意距離だ。

いつもの軽快なペースで飛ばしていく。

スぺもまた、先行策である。

普段は後方待機で差すことが多いが、シニアの頃から前に行くレースも覚えており、今回も非常に前目につけていた。

二人と後ろの距離がどんどん離れていく。

そもそも、阪神2200mは内回りコースであり直線が短く、前に行くレースをするウマ娘の方が有利なのである。

勝負は二人に決まった。観客も、二人も思っていた。

先に行くレースが有利だという事は、キングもリョテイも知ってい

た。

だが、実は分析をすると、阪神2200mで有利な戦法が他にもあるのだ。

大外からマクする戦法である。

レースは6月の梅雨時であり、レースも盛んにおこなわれる阪神2200mの内バ場はかなり荒れている。

一方外側は非常にきれいなバ場である。

第三コーナーからロングスパートをかけ、コーナーでの遠心力も利用して加速、一気に差し切る。

二人はこの戦法に賭けていた。

直線に入り、スペとスズカは並んで競り合いを始めた。

周りに他のウマ娘はおらず、勝負は二人のどちらかに決まったように見えた。

残り200mの急勾配の坂に二人が差し掛かる。

その時に、大外からすさまじい勢いで二つの影が突っ込んできた。

全く周りを見ていなかったスペとスズカに、そのマクリは完全な想定外だった。

しかも、今までの競り合いで脚を完全に使い果たし、トップスピードで突っ込んできた二人に追いつくことができなかった。

最後のギリギリで、突っ込んできた二人のうち、キングハイローがハナ差で差し切り、宝塚記念を制したのであった。

限界以上の力を出し切り、酸欠で真っ青になってゴール直後に倒れてしまうキングハイロー。

倒れたキングを支え、手を振りながらコースから去るキンイロリョテイ。

そんな姿を、スペもスズカも呆然と見守ることしかできなかった。

閑話：マックイーンとサトイモとゆかいな仲間たち

「イクノさん！ 私とイクノさんの子を拾いました!!」

「ちよつと待てマックイーン。すべてがおかしいのにまず気付け」

ある日の練習中。

学園一周のランニングから帰ってきたマックイーンが、小さい子を拾ってきた。

小学生だろう、とてもかわいい子である。

ふんす、ふんすとなぜか偉そうにしていた。

そう、拾ってきたのである。すべてにおいて問題しかなかった。

「そうですね。この子は鹿毛。栗毛の私と、葦毛のマックイーンさん  
の間の子供として無理があるのでは?」

「そういう事じゃねーだろイクノ!!」

「隔世遺伝かもしれせんわ」

「マックイーンは少し黙ってる!!」

ひとまず收拾がつかなくなりそうなので、マックイーンからゴール  
ドシップはその子を受け取った。

「お嬢さん、お名前は?」

「サトノダイヤモンドです!!」

「お父さんとお母さんは?」

「マックイーンさんとイクノさんです!」

「よくやりましたわ! サトノちゃん!」

「ふんすつ!!」

「よし、マックイーン、お前スイーツ一週間抜きな」

「なんでですの!?!」

「あほなことやった罰にきまつてんだろ!」

「そんな!」

確実にマックイーンがあほなことをこの子に仕込んだのだろう。

スイーツを抜かれることが決定したマックイーンは絶望の表情を  
浮かべる。

「マックイーンさん」

「イクノさん!!」

「そもそも私とも、マックイーンさんとも似ていませんしその設定は無理があるかと。あとサトノさんには大事なご両親がいらつしやるはずです。おふぎけでもそういったことはするべきではありません」「うぐつー!」

そこに追い打ちをかけるイクノの正論にマックイーンは撃沈した。ごめんなさい、許してくださいまし、捨てないでくださいまし! とイクノにすりつくマックイーンを背に、ゴールドシップはサトノダイヤモンドを連れて、場所を移すのだった。

「で、サトイモ」

「サトノダイヤモンドです!」

「そうか、それでサトイモ」

「サトノダイヤモンドです!」

「お前、マックイーンファンクラブの鉄の掟、わかってるよな!?!」

ゴールドシップの低い声にサトノダイヤモンドは驚いた。

そして告げられたそれには余計驚くのだった。

メジロマックイーンファンクラブ。完全会員制のメジロマックイーンのファンクラブだ。紹介が必須の会であり、一見さんお断りの敷居の高いファンクラブである。

しかしその情報は精度、詳細さ、そして何よりも内容と写真の多さから、非常に人気があった。

それだけの情報量だ。確かにマックイーンの近くにファンクラブ関係者がいてもおかしくない。

サトノダイヤモンドは身構えた。

「ファンクラブ鉄の掟第12条、マックイーンに不用意に近づくなかれ。おまえ、最近マックイーンをつけてたよな?」

「っ!?!」

「どう落とし前つけるんだ?」

「くつ、ですがあなたにどんな権限があるんですか! 私はナンバー

2ですよ!!」

サトノダイヤモンドもまた、最初期のマックイーンファンクラブメンバーだった。

毎日マックイーンのファンサイトを確認し、見過ぎてスマホに視線だけで穴をあけたこと2回。

現在の目標は、あのファンクラブナンバー1と大好きな親友のキタサンブラックを奪った腐れテイオーの抹殺であった。

財力と社会的地位で最悪ゴリ押す、という危険思想に染まりつつあったサトノダイヤモンド。しかしゴールドシップは涼しい顔だ。

「サトイモ」

「な、なんですか?」

「私が、ファンクラブのマスターだ」

「!?!」

マスター。それはファンクラブの運営者だ。

一人で大量のマックイーン情報を送り付けるその存在はファンクラブにおけるまさに神であった。

ファンクラブナンバー1を上回る、ゼロナンバー。

イケメンのあしながおじさんだという噂があったが、実際それがゴールドシップだったとは、サトノダイヤモンドも知らなかった。

「私が今、ここをクリックすれば、お前はファンクラブから永久に追放される」

「あ、あ……」

「ついでにお前の書いた、マックイーンとの夢小説もご両親に送信する」

「それだけはやめて!?!」

「あととはご両親と三者面談もありかもしれないなあ……」

「ごめんなさい許して下さい!!」

サトノダイヤモンドは土下座した。

勝負ははつきり決まった。

「だってえ、キタちゃんがテイオーさんばっかりで構ってくれない

しい！ あとテイオーさんとお出かけしたりしているしい！！ 羨ましかったんです!!!」

「でもルール違反はダメだろ？ そもそも学園に部外者が入っちゃだめだぞ。まあその辺はマックイーンが悪いんだが」

「マックイーンさんは悪くありません！ 悪いのは私です！」

「忠義にあふれた武士みたいなムーブは止めろ」

「ごめんなさい」

シヨンボリするサトイモ。

可愛らしいが、ケジメは必要だ。

「そりやマックイーンが喜ぶのはいいんだが、ファンに集られても対応が大変だからルールがあるんだ。サトイモみたいなのが一気に来たら完全にパンクしちゃうだろ」

「おっしやる通りです……」

「今度何か勝ったら、祝勝会には呼んでやるから、それで我慢しろ」

「本当ですか！」

「まあいつも応援してくれてるからな、1度ぐらいは許されるだろう」

「わかりました!!」

「じゃあ今日は帰れ」

「はい！ お世話様でした！」

「ゴ機嫌になったサトイモは、意気揚々と家に帰るのであった。

翌日

「また捕まえました!!」

「まずだあ、だずげでくださいいい……」

マックイーンはサトイモの抱き心地が気に入ったらしい。

近くに住んでいるサトイモを見つけると、拉致ってきたようだ。

サトイモもさすがにマックイーンから拉致られるのは想定外だっただろう。

遠くから見守れない状況に、どうしていいかわからずに泣いていた。

「マックイーン？」

「なんですかの？」

「ごるしっ!!」

「めじろっ!!」

マックイーンをかちあげて上空に吹き飛ばすゴールドシップ。

飛んで行ったマックイーンはそのままきりもみしながら落下し、ダートの地面に逆さまに突き刺さった。

マックイーンが抱えていたサトイモは、ゴールドシップが無事キヤッチした。

「ほら、サトイモ、泣くなって。マックイーンが悪いのはわかってるか  
らっ」

「まずだあ……」

結局サトイモはゴールドシップに肩車されながら、カノープスの練習を見ていた。

マックイーンはしばらくダートに逆さまに刺さったままだった。



### 第三章 二人の『英雄』と『普通』のウマ娘

「普通である」ということ

ナイスネイチャは自分が普通であることは既に十分自覚していた。うぬぼれかもしれないが、地元では脚が速くてかわいいウマ娘として通っていた。

中央でもやれると思っていた。

しかし、トレセン学園のみんなはキラキラしたウマ娘ばかりだった。

まばゆい彼女たちに比べて、自分は平凡すぎた。

チームのメンバーだって皆輝いていた。

例えばキングヘイロー先輩。

今まではずっと2着といった惜敗を繰り返してきた彼女だが、今年に入って本領を発揮し、G1を4連勝である。サポーターシステムも開発し、今一番輝いているウマ娘だろう。

例えばキンイロリョティ先輩。

最近やつと目黒記念に勝利し重賞を制覇した彼女。

シルバークレクターともいわれる惜敗続きであり、いまだキング先輩のようにそこから抜け出せてはいないが、それでも数々の名勝負に参加してきたウマ娘だ。

実力は本物であり、トレーナーさんも彼女を勝たせるためにいろいろ策を練っているようだった。

例えばハルウララ先輩

走力だけで言えばチーム最低。いや、学園最低かもしれないのろさである。

しかしその愛嬌とどれだけ遅くてもレースをあきらめない姿勢、そしてレースを楽しむ姿勢は多くの人に慕われていた。

故郷の高知にあるトレセン学園を立て直した立役者の一人でもあり、走りだけのウマ娘とは違うところで非常に輝いていた。

例えばイクノデイクタス

圧倒的な丈夫さでレースを繰り返す、ウララ先輩と同類のレースを楽しむ彼女。

だが実力もあり、常に勝負になるラインで走り続けていた。

頭もよく学年首席。チームメンバーの出るレースに対してレース分析をするのも彼女であり、サポートの面でもチームになくはない存在だった。

例えばツインターボ。

大逃げをするむらっけのある彼女だが、ハマった時は本当に強い。

この前のラジオたんぱ賞だって、最後はバテながらも圧倒的な大逃げで勝利していた。

惨敗か、圧勝か。その走りは多くの人を魅了していた。

また、明るく人懐っこい性格は皆の癒しであり、そういう意味でもチームに貢献しているのが彼女だった。

きらびやかなメンバーばかりのチームの中で、一人だけ普通である自分は、なんとなく居心地が悪かった。

最近は特に、メジロマックイーンもチームの練習に交じっている。

メジロの令嬢にして去年の最優秀ジュニア級ウマ娘。圧倒的な実力を持ち天皇賞秋を目指す彼女は、やはり輝いていた。

「で、そんな普通な自分に自信がなくて、落ち込んでたってわけか」

なんとなく調子の悪そうなナイスネイチャを捕まえて、町に繰り出したゴールドシップ。

いつもマックイーンと一緒に来ているカフェで、ネイチャにメロンパフェを奢っていた。

「わかるわー、私も普通だもん。カノープスのみんなってキラキラしてるもんねー」

ゴールドシップが連れてきたもう一人はマチカネタンホイザ。

チームカノープスの新メンバーであり、マチカネ家のご令嬢である。

いつも「普通」を自称するが、実力もあり、また名家の令嬢である。お前のような普通がいるか、とネイチャは常々思っていた。

特にマチタンがやる「普通の練習」が狂気じみている。すべてこなすと1日が足りないぐらいの超ハードトレーニングである。

「普通」という概念を語りながら「普通」という概念を壊してくる一番キラキラした狂気存在であった。

最近は何の前のゴールドシップが相談を受けて内容を効率化したので、1日の中に納まるようになったが、付き合うネイチャとしてはたまったものではないというのが本音であった。

「でもさー、普通ってそんな悪いことか？」

「きらきらしてるのに勝てないじゃん」

「それは別の話だろ」

「ゴルシちゃんだってキラキラ系じゃん。私みたいな普通な子なんて相手しても怖くないでしょ」

「え、一番相手にしたくないタイプだけど」

「またまたー、じゃあ私がマックイーンに勝てると思うわけ？」

「まあ勝てるっしょ」

「でしょー、ってえ？」

ゴールドシップの回答にネイチャは面食らった。

ゴールドシップとマックイーンはさまざま仲が良い。

少しでもマックイーンをバカにするような行動をとる奴が出ると本気でシメに行くぐらい、ゴールドシップはマックイーンに首つたけだ。

そんなマックイーンに勝てるわけがないっていうと思ったのに、勝てるというゴールドシップにネイチャは面食らったのだ。

「うーん、敵に塩を送るみたいなことしたくないんだが、まあ、南坂さんにもカノープスのみんなにも世話になってるしなあ……」

「いやいや、無理しないでいいって」

「まあ最近マックイーン調子乗り過ぎてるし、一度痛い目にあった方がいいと思うんだよなあ。ネイチャの次は小倉記念だったよな」

「その予定だよ」

「じゃあそこにマックイーン出すから。そこでネイチャが勝つ、ぐら

いで勘弁してくれ。G1でやらかすとさすがに利敵行為すぎて怒られそうだし」

「いやいやいやいやいや、ちょっと待ってよ!?!」

小倉記念はネイチヤの次の目標であり、地元で錦を飾るためにも予定していたレースだった。

十分勝ち目があると思っていたが、そこにメジロマックイーンが来たら勝てるわけなくなってしまう。

それは止めてほしかったのだが……

「最近マックイーン、イクノさんとかリョテイさんとかとばつかりつるんで構ってくれないし、アドバイスしてもいまいち乗らないし、一度レースでわからせないと天皇賞秋で斜行して降着になりそうだし、こちらを助けるつもりで頼むよ」

「半分ぐらい私情じゃない、それ……」

最近マックイーンが構ってくれなくてゴールドシップは拗ねていた。

まあマックイーンはマックイーンで、キングヘイローあたりとよくつるんで構ってくれないゴールドシップに対して拗ねていて、完全にすれ違っていたのだが、周りは痴話げんかは犬も食わないと放置していた。

「まあおいておいて、まずは分析だ。ネイチヤがマックイーンに勝つてるところはどこだ?」

「そんなのないでしょ」

「はい!」

「はい、マチタン」

「かわいいさ!!」

「ちよっ!?!」

「ああん!?! うちのマックイーンがネイチヤよりかわいくないだど?」

「ネイチヤかわいいもん! ネイチヤしか勝たん!」

マチタンを睨みつけるゴールドシップに、えいえいむんつ! と睨み返すマチタン。

「……この争いは千年戦争になりそうだ。ネイチヤの可愛さは否定しないが、他の点を頼む」

「そうだね、可愛さはそれぞれの心の中にあるもんね……」

「なんなの、このテンションのアップダウン」

すでにネイチヤは付いていけなくなりつつあった。

「レースで言えば、視野の広さと後レース研究についてはマックイーンさんに勝てそうだよね」

「なるほど、確かにマックイーンは一途なところがあるし、勉強あまり好きではないからな」

「あとは状況に合わせて前のレースも後ろのレースもできるところかな。ターボに付き合って練習してることもあるから逃げもできるでしょ」

「いやそれくらい普通でしょ」

ネイチヤがそう言うのとゴルシとマチタンの二人は顔を見合わせて、ため息をついた。

「普通を主張する普通の破壊神が私の普通を壊してくる」

「それマチタンじゃん！ いつも普通普通とか言って頭おかしいメニューばかりやってるし！」

「頭おかしいメニューって言われた……」

ゴールドシップは思った。確かにマチタンのメニューは頭がおいしいことが良くある。メニューを調整したゴールドシップから見ても頭がおかしかった。

だが、それに付き合つてさらにターボやイクノの練習にも付き合つたりするネイチヤが頭が一番おかしいとゴールドシップは思っている。だが、それを口にしない優しさがゴールドシップにも存在した。「総合的に言えば、相手に合わせて駆け引きするのがうまいってことだな」

「それって利点かなあ」

「陸上の短距離走みたいなタイムトライアルで競うなら意味のない能力だな。だが、うちらがやるのはレースだ。だから非常に重要な能力だろ」

純粹なタイムトライアルをしたらおそらくマックイーンやテイオーにネイチャは勝てない。

そういう意味ではネイチャは『劣る』のは認める必要があるだろう。だがそれと『勝てない』は別次元の話だ。

「で、マックイーンはどう出てくると読んでは？」

「そりやせつかく新しい走法完成させたんだし、それ使ってくるでしょ。でもあれ、集中力要るからおそらく後ろから来るんじゃない？

前につけて周りでいろんな子がうろちよろされたら気が散って使えなさそうだし。おそらくちようど1000mのハロン棒通過したところで使ってくるから、その周りでちよろちよろして潰せば……」

「ごめん、ちよつと待ってネイチャ」

「なに？ マックイーンがそれを読んでメタ張ってくる可能性あるから、その対抗手段も考えないといけないですしおすし」

「マチタン、ごめん、やっぱりアタシマックイーンの方に戻るわ。代わりにイクノかトレーナーさんこっちに呼ぶから、作戦考えてくれ」

「え、なんか悪いことした？」

「ネイチャはなにも悪いことはしてないよー 普通って怖いねっていう事だね」

ゴールドシップが予想していた以上に、ネイチャは研究し、おそらく対抗策を練っている。

おそらく他のメンバーに対しても対抗策を考えているだろう。

ゴールドシップが聞くと、ゴールドシップからマックイーンに伝える可能性まで考慮し始めてきつと泥沼になると判断したゴールドシップはさつきと撤退することにした。

マックイーンやイクノ、ターボの世話を焼いている南坂トレーナーとポジションを代わるべく席を立つのであった。

誰がウサギで誰がカメか

「小倉記念、楽しみですわ〜♪」

ウキウキしながら練習に励むマックイーン。

すさまじい轟音を立てながら、完成した豪脚を周りに見せつけていた。

ホープフルステークスから、いくつか改良した走法だ。

一番は、それなりに外に力を逃すことにした点だろう。

ホープフルステークスの時は、反動を体で全て受け止めて推進力に変えていた。

しかしそこまでしなくても、十分推力はでるし、そこまでしてしまうと調整がピーキーすぎる。

結局ゴールドシップと同じようなある程度地面に反動を逃す走法が一番バランスがいいという結論に落ち着いた。

また、サポータータイトの導入も、走法を後押ししていた。

キングヘイローが開発したこれは、宝塚記念後、ヘイローブランドからゴールドシップシリーズとして発売されていた。いつの間にかゴールドシップの名前が使われていて、ゴールドシップは抗議したのだが残念ながら公表後であったため変更ができなかった。

売上はかなり好調である。

勝負服だと大幅改造が必要なためまだ導入している者は少ないが、体操着の下にはほぼ全員確実に装着しているぐらいの売れ行きだった。

生足が減って、ゴールドシップもほつとしたものである。

マックイーンも当然使っているこれは強度を重視したタイプだ。怪我をしにくくなっているという点では非常に優れており、これならば負担の大きな走り方をしてても怪我はしにくいだろうと考えられていた。

初期の負担が大きい走り方をしてても、器具の改造に加えてマックイーンの成長もあり、筋肉痛にならずに済むほどになっていた。

そんなマックイーンの復帰戦は小倉記念である。

ナイスネイチャの目標レースであり、また、イクノデイクタスも参加するレースだ。

マチカネタンホイザのメイクデビューも小倉の予定であり、チームカノープスのメンバーの大半が参加する遠征になっていた。

マックイーンの仕上がりも完ぺきである。

これ、G1だったっけ？　と思うぐらいの完璧に仕上げていた。

マックイーンとネイチャを比べれば、現状走ることだけ見ればマックイーンが勝っているのは明らかだ。

だがおそらく、今回の小倉記念。ネイチャが勝つとゴールドシップは予想していた。

まずモチベーションが違う。

ネイチャの現在の目標は、菊花賞、そこでトウカイテイオーに勝つことだ。

そのための前提であること、小倉記念で負けるわけにはいかないだろう。

さらに小倉はネイチャの地元である。彼女にとって負けたくない気持ちはG1以上かもしれない。

一方マックイーンはネイチャやイクノと走りたいだけだ。

この後京都大賞典、そして天皇賞秋へとステップアップしていくが、このレースはプログラム編成としては出る必要があまりないものだった。

準備の度合いも違うだろう。

南坂トレーナーのことだ。死ぬほど対策を練っているだろう。

一方こちらにも通常通りの検討はしているが、その程度である。

残念ながら、スピカは現状アグネスタキオン、ダイワスカーレット、ウオツカのデビューで大忙しだ。サポートタイツのおかげでケガの心配がかなり減ったタキオンは、急にメイクデビューすると言いつし、それにスカーレットもウオツカも続いてしまった。

スペとスズカがドリームトロフィーに移籍するので手が空くと思われる。われていた沖野トレーナーはてんやわんやである。



マックイーンについては、京都大賞典から天皇賞秋にかけては、あらかじめ準備していた分があるのでまだましだが、こちらも飛び込みでスケジュールに入れた小倉記念なんて、とてもじゃないけど沖野トレーナーは面倒が見切れない状況だった。

何よりも、マックイーンは『普通』の怖さを知らない。

走力だけでレースが決まるなら、たぶんゴールドシップは三冠を余裕で取っていただろうし、天皇賞春と宝塚記念は三連覇していただろう。

だが当然そうはなっていない。

レースは自分だけが主役で周りが脇役ではないのだ。

一番人気、一番強いと目されていた奴が虎視眈々と狙ってきた勇者に倒されるなんて言うのが日常茶飯事なのが、レースの楽しさであり怖さである。

ゴールドシップがそれを思い出すのは日本ダービーだった。

ライバルになるような相手はいなかったはずだった。

親友だったジャスタウェイはいたが、あの頃の彼女はまだ貧弱な少女だった。

フェノーメノの奴なんて眼中にもなかった。

そもそもそれまで連対を外したことがなかったゴールドシップ。負ける気がしなかった。

しかし結果は散々だった。

道中イン目につけたが前は一分の隙間もなく開かなかった。

当然である。皐月賞のゴールドシップを見たほかの娘から見れば、前を開けるなんて論外だっただろう。

仕方ないのでそのまま大外に持ち出したが、出るタイミングでももまれた上にタイミングが遅すぎた。

どうにか抜け出しても、そこからではとても先頭を走る娘たちに追いつけなかった。

完全に駆け引きで負けていた。

感触から言って、ちゃんと走れば勝っていたように思うレースだった。しかし、驕りが、油断が、敗北につながった。

あの頃ゴールドシップが持っていた傲慢さはおそらく、マックイーン譲りだろうと思う。

現に今のマックイーンは強すぎた。だからこそ、今のマックイーンは普通の怖さを知らない。一度それを知っておかないとどこで足を掬われるかわからない。

それはここがいいタイミングだろう。大事なG1レースで思い知るのにはコストが高すぎる。

万が一マックイーンが、ゴールドシップの助言を本当に理解して態度を改めれば小倉記念はマックイーンがおそらく勝つだろう。

だが、ゴールドシップにはそんな風景がどうしても思い浮かばなかった。

マックイーンがテンション上がり過ぎて、また盗んだサトイモを抱えて走り出した。

ゴールドシップはマックイーンを捕まえるべく全速力で走り出すのであった。

小倉レース場11R 芝2000m 小倉記念 本馬場入場

小倉記念は8月の真夏に行われる。蟬の音が降り注ぎ、日差しが突き刺さる中、小倉記念は開催された。

小倉レース場第6レースで行われた新馬戦では、無事マチタンが勝利し、カノープスとしても一安心であった。

えい、えい、むんつ！ という謎の掛け声にはみんな対応できずにつっこけていたが、まあみんな楽しそうであった。

しかしこれは前座ではない。

メインレースは第11レースの小倉記念なのだ。

地方のグレードスリーのレースにもかかわらず、観客は数多く詰めかけた。

ゴールドシップも最前列で、サトノダイヤモンドを肩車しながら、スズカとスぺと一緒に観戦していた。

沖野トレーナーやタキオンたちは来ていない。さすがにメイクデビューが近くなっているので、そちらの準備に専念しているのだ。

今回はメジロマツクイーンが出るという事で、観客もいつも以上に多かった。

そんな中、一角にひとときわ目立つ集団がいた。

ナイスネイチャの応援団だ。

地元の商店街から集まったおおよそ100人ほどの集団がネイチャを応援していた。

「ナイスネイチャー!!」

マチタンも合流したその一団が声を上げる。

ネイチャは笑顔で手を振ると、投げキッスをした。

応援団は盛り上がった。

「サトイモ、今日は誰が勝つと思うっ?」

「そりやもちろんマックイーンさんですよ!! マックしか勝たん!!」  
「スズカはどう思う?」

「マックイーンだと思っわ。レースは水物だけど、実力的にはマックイーンが一番上だもの」

「スぺは?」

「うーん、マックイーンちゃんだと言いたいところですが……」  
「ですが?」

「ナイスネイチャさんじゃないですかね?」

「なんでだ?」

三人の意見が割れるのもそうだろうとゴールドシップは思った。

サトノダイヤモンドはマックイーンファンだからマックイーンびいきだ。

それを抜いても純粋な観客として見ればマックイーンが勝つと思うのが普通だろう。

スズカはタイムトライアルみたいな走り方をする逃げウマ娘だ。

基本的に走力で実力を測りがちだし、そうするとマックイーン一択だろう。

しかしスぺは、多くのライバルとしてのぎを削ってきたスぺは違う結論を出したようだ。

「だって、一人だけ闘志が違いますもん」

「闘志?」

「クラシック三冠の時のセイちゃんとか、グランプリシリーズの時のグラスちゃんとか、この前のキングちゃんとかみんなあんな感じで絶対に負けないって気持ちが見ただけであふれてるんですよ」

「なるほど」

「ああいう相手に勝てたことないんです。今日もし私がこのレースに出るとしたら、マックイーンちゃんにもイクノデイクタスさんにも負ける気がしませんが、ナイスネイチャさんとはやりたくないですね」

「ゴールドシップも同感だったが、一方でスズカは首をかしげている。た。」

スズカみたいなタイプはああいうのが相手でも問答無用でぶつち

ぎるのかもしれない。そういったレーススタイルの差もあるだろう。誰の予想が当たるか、それはレースを見ればわかることだった。

ネイチャはこのレースにかなり準備を重ねてきた。

トレーニングだけでなく、それぞれの参加者への対応から、レースプランまで、完璧に詰めてきたのだ。

それだけでなく、南坂トレーナーから厳しい指示が飛んでいた。

自分を貶めるような発言、態度、考えの一切禁止である。

すぐにネガティブなことを言いがちな自分の徹底的な矯正であった。

少しでもそういう態度をとると、くっついてきているカノープスの誰かからすさまじいかわいいコールの攻勢を食らうのだ。

最近はキングとその友人に囲まれていることも非常に多かったのだ、ネイチャかわいいコールを連呼され続けて本当に恥ずかしかった。キングコールに慣れた彼女らのコールは声が大いし、無駄に揃っているし、しかもパターンが豊富なのだ。108式まであるとか言い始めて全部やられた時には、本当に恥ずか死するかと思ったほどだった。

他にもウララの100%善意のエンドレス誉め言葉など、普段のトレーニングよりよほど精神的に来ることをやられていた。

恥ずかしすぎて最近は吹っ切れたネイチャは、応援団に余裕で投げキッスアピールできる程度まで成長した。

この慣れが何を意味するのかまでは結局ネイチャにはわからなかったが、レース前、案外フラットな気持ちで他の参加者を見ることができるようになっていた。

イクノはきつといつものようにただただ、走りたいように走るだろう。

逃げるあの子の後ろにつけて、2番手あたりで展開するはずだ。

逃げる彼女とイクノ以外は、おそらくマックイーンのマーク気味に入るのではないかと思う。

あれだけ走るマックイーンをあまり自由にはさせたくないはずだ。

そしてマツクイーンは、それをぶち抜く気しかないだろう。  
あの走法が完璧にペースに乗ってしまえば、止める方法はない。だ  
が止めてしまえば……

勝ち筋は見えた。あとはその勝ち筋に乗るだけだった。

小倉レース場11R 芝2000m 小倉記念 本戦

レースはいつも通り、滞りなくスタートした。

綺麗にスタートする中、シンボリスキーが先頭を走り、そこにイクノデイクタスが続く。

その後ろにはウマ娘の集団が出来上がっていた。

内枠、2枠2番のマックイーンは、内ラチ際を進む展開になった。

久しぶりのターフは走って気持ちよかった。

いつもの練習とは違う、びりびりした感覚にマックイーンは興奮した。イクノは前に見える。

ネイチャは横にマークする様だ。

全部をぶち抜いてこそ、勝利は心地よいのだ。

一歩ずつ力強く踏み込みながら、マックイーンは軽快に走っていくのであった。

「調子、良さそうですね、マックイーン」

「走りは悪くないな」

「頑張ってくださいマックイーンさーん!!」

久しぶりのレースだが、ブランクを感じさせない軽快な走りをするマックイーン。

サトノダイヤモンドは声援を上げた。

しかし一人、スペだけは難しそうな顔をする。

「これ、まずくないですか?」

「何がまずいの? スペちゃん」

「最後まで抜けられない気がします。ネイチャさん、完全にブロックするつもりじゃないですか?」

スペとズカは仲が良いが、こういう時に見方にはかなり差があった。

スズカはとにかく逃げるから走りの良しあしに目が行く。  
スベはつぶしあいも経験しているからこういう時に駆け引きに目が行くのだろう。

「前めに行くプランも話はしたんだけどな…… マックイーン、完全に舞い上がってるみたいだな」

そもそもマックイーンの得意戦法は先行なのだ。

前目に行く王道の走り方の方が一番得意だ。

差しや追い込みもできるのもわかるが、レースによって使い分けるべきだった。

今回は前が少ないがマックイーンは最内枠だから塞がれやすい。前に行くのはあらかじめ戦術の候補として話していたが、マックイーンはその選択を取らなかった。

スベはそれに気づいたのだろう。

ネイチャが完全にマークしている。

最内にいるので、外側である左をブロックされてしまえば、バ群を抜けたとしても逃げるイクノ達二人で前がふさがれてしまう。

そうなれば速さなんて関係なく負けるのだ。

マックイーンはそれすらを抜くつもりだろうが、ネイチャがそれを許すとはゴールドシツプは思えなかった。

ネイチャにとっては想定通りの展開だった。

ここでマックイーンに先行力を発揮されてイクノに並ばれたり、あまつさえ一番先頭に立たれるのが一番まずかった。

イクノに並ばれたらイクノが邪魔でブロックできる気がしないし、先頭に行かれたら完全に止める手段がない。

だがそうならなかった以上ネイチャは勝ちを確信した。

ゴールまでの道筋も見えている。

みんなの応援も聞こえてくる。

ここで絶対負けたくない。

闘志もみなぎっている。

決意の光を目に宿らせ、そのタイミングを待ちながら、ネイチャは



走り続けた。

後方集団中ほどを走るマックイーンだが、すぐ前を走る子が外にぶれたのを確認した。

まっすぐ走る、というのは単純に見えて案外難しい。内ラチに触れたらすさまじいタイムロスだし、場合によっては事故になる。

まっすぐ走る目安である内ラチは、一方で最大の障害物なのだ。

そのせいで外にぶれたり、内にぶれたりすることはよくある。そしてぶれたため、マックイーンの前をブロックする形になっている子たちの間が空き、ちょうど通れそうな隙間ができたのだ。

その瞬間、マックイーンは決意を込めて一步踏み込んだ。

ドンツ!!

鈍い音がして、ちぎれた芝と砕けた地面が舞い上がる。

ドンツ!!

鈍い音がして、マックイーンが加速する。

ドンツ!!

前にいた二人の間に自分の体をねじ込み、そのまま一気に抜けるマックイーン。

ドンツ!!

そうしてバ群を抜ければ前の二人以外には誰もいないはずだったのに、しかし左側にはぴったりネイチャがマークしていた。

マックイーンあの走りは、いくつか欠点があるのはネイチャにはわかっていた。

一番は外に振られることである。

遠心力が強く、絶対に外にぶれる。

そのため走り始めてから内側に潜り込むことは難しい。

ゴールドシップだとそこからさらに内に切り込んだりできるようだが、マックイーンのコナーリング技術では少し難しそうだった。

もう一つは使い始めてから減速ができないことだ。

詰まったりしたら一度止めないといけない。そして一度止めたら

おそらく使いどころがない。

加速に時間がかかるので、1レースで2回使う時間的余裕はなかった。

つまり、このままマークして外に行かせないようにしていけば、前にいるイクノで引つかかる。

そうなればマックイーンは完全に不発になるのだ。

速度が完全に乗った状態ならおいていかれるだろうが、まだ加速し始めた段階だ。

追いつくのもそこまで難しくなかった。

罠にはまったことをマックイーンは悟った。

競走中、他の競争者に後ろから乗り上げるのは違反行為だ。

多少ぶれてくれれば強引に体をねじ込んで跳ね飛ばすこともできるが、完全に内ラチ沿いに走るイクノを後ろから弾く方法は存在しない。

だから外に出なければいけないのだが、それをネイチャが完全にブロックしていた。

減速して後ろに回れば外に出るのは難しくないだろう。

だが一度スパートをかけた状態であるこの状況で、減速するのは非常に難しかった。

こういう場合の手は一つしかない。

外のブロックする相手を体当たりで弾き飛ばすのだ。

前に強引に割り込むのは進路妨害でルール違反だが、前が詰まっている状況で並んでいる相手を弾き飛ばすこと自体は違反ではない。

一番力が出るタイミング。

コーナーに入り遠心力がかかり始め、一番パワーが出る段階で、マックイーンはネイチャに体当たりを仕掛けた。

ネイチャの体格はそう悪いわけではない。平均より少し大きいぐらいの、中の中から中の大の間ぐらいである。

だが、マックイーンの体格は大の大。とても立派であり、ネイチャ

と比べれば体重も身長も上回っている。

当然パワーもマックイーンの方が強い。

ブロックした時に、体当たりしてくる可能性もネイチャは当然考えていた。

ブロックされている側からしたら、むしろしてくるのが普通である。

単純にパワー勝負をしたら、ネイチャでは普通に競り負けてしまう。

ただ、体当たりを仕掛けられたとしてもパワーが劣る方が勝つ方法も存在するのだ。

体当たりは、体当たりする方が不利な面もある。

バランスを崩す形になるわけなので、力が入りにくいのだ。

一方で、仕掛ける方の有利な点は好きなタイミングで仕掛けられる点だ。

つまり、読みあいなのである。相手のタイミングを読み切った方が勝つ駆け引きだ。そして、そういった駆け引きこそが、普通でしかないネイチャがマックイーンに勝てる点であった。

今回は完全にネイチャが読み勝った形だった。

第三コーナーに入り、イクノとの距離が完全に詰まってどうしようもなくなるとなるタイミング。

遠心力分のパワーも上乗せて体当たりできるタイミング。

ここで来るだろうとネイチャは読んでいた。

そして来るとわかって構えていれば、相手がパワーに勝っていたとしても耐えるのは難しくない。

体当たりしてくることを考えて、耐える練習もキングたちとして来ていた。

マックイーンが体当たりをしてきて、肩と肩が当たる瞬間。ネイチャは腰を落としたのだ。

身長差もあり、マックイーンの下に潜り込む形になったネイチャは、そのままマックイーンの肩を肩で上へはねあげた。

予想外の方向に力が加わったマックイーンの上半身は宙を泳ぐ。

バランスを崩したマックイーンはそのまま失速していった。

一瞬腰を落としたネイチャは、その力を使ってスパートをかける。小倉の直線は短く300mもない。

第三コーナー中ほどからスパートしても500mぐらいである。

前に行く二人を抜けば、あとは独走状態であった。

ナイスネイチャが1着を獲得し、イクノディクタスが2着であった。

結局体勢を崩したマックイーンは凡走し、どうにか5着に滑り込むのがやっとであった。

## 敗者たちの反省会

「マックイーン、風邪を引きますよ」

「大丈夫ですわ。私みたいなバカ者は風邪をひきませんもの」

「夏風邪はバカが引くらしいですし、ダメですよ」

「ふふふ」

試合後、私服に着替えたマックイーンは一人海を見ていた。

自分が情けなくて、恥ずかしくて、誰にも会いたくなくて。

一人にしてほしいとみんなに一方的に連絡だけして、海を見ていた。

そんな中、ライブを終えたイクノデイクタスは目ざとくマックイーンを見つけたのだった。

「イクノさん。ごめんなさい」

「何がですか?」

「私、イクノさんもネイチャさんも、下に見て侮ってました」

「ふむ?」

「一緒に走るのが楽しみ、と言いながらどこか下に見ていました。負けるわけがないと思っていました。そんなおごりが、今日の走りにつながりました」

「なるほど」

イクノはマックイーンに近寄る。

何かと振り向くマックイーン。そんなマックイーンの唇に、イクノは自分の唇を落とした。

「私は、マックイーンのことを好きですよ」

「は、恥ずかしいこと言わないでくださいまし!」

「私は、傲慢なマックイーンも、情けないマックイーンも、愚かなマックイーンも、もちろんきれいなマックイーンも、どれもみな好きですよ」

「っ!!」

「私にとって、好きというのはそういう事です。マックイーンが存在自体が、私の心を乱すのです」

人生初めてのキス、そして告白に、マックイーンは真っ赤になった。いつもイチヤイチャするスぺとスズ力を見ていて耐性はあると思っていたが自分にされるのは全く別口の話であった。

「私も今日のレースを走って思いました」  
「？」

「私は走るのが好きでした。レースに出るのも好きでした。だけど、ただ、走るだけならレースに出なくてもいいじゃないか、とそう思っていました」

「……」

「今までなんとなくレースに出ていました。でも、今日のレースでわかりました。キラキラ輝くネイチャさんみたいになりたい、と」

「なるほど……」

「そして、また悔しがるマックイーンも見たいと」

「それは悪趣味じゃありませんか!？」

顔を上げて膨れるマックイーン

かわいいと言いながら再度口づけをするイクノ。

マックイーンはまた真っ赤な焼きまんじうになった。

「私はいまだに、負けて悔しいという気持ちがいまいちわかりません。だけど、あなたやネイチャのように輝きたいと憧れは抱きました」

「イクノも、輝いていますわ」

「いいえ、あなたやネイチャに比べれば、私はまだ屑石のような存在だと今日気づきました。だからこそ……」

イクノはマックイーンを見つめた。

「次に競うときは、あなた以上の星になって見せます」

「…… 楽しみにしていますわ」

そうして二人して笑うと、イクノは立ち上がった。

「さてと、あまり待たせるのも悪いですね」

「待たせる？」

「ほら、あそこに、スピカの皆さんがいらっしやいますよ」  
「!？」

指さす方を見ると、こちらを見つめる四人の姿があった。

「おい、サトイモ、やっぱりスマホのカメラじゃ暗すぎてダメだ。そっちはどうだ」

「ふっふっふ、暗視機能付き最高級デジカメですからばっちりですよ。秒間16連射でちゃんとりました」

「二人とも仲よしね」

「そうですね」

スピカとして応援に来ていたゴルシ、スペ、スズカとサトノダイヤモンドである。

「あの、いつからいましたの……」

「いつからって、マックイーンが一人にしてツていうメッセージを送ってから30分後には集合していたな」

「ずいぶん前じゃありませんか!!」

「さすがにあのメッセージ受け取って一人にはしとかねーだろ」

「確かにそうですが!!」

つまり、今のキスシーン含めて全部見られていたという事だ。

マックイーンはまた真っ赤になった。

「さて、そろそろ行きましようか。ネイチャの祝賀会はネイチャ一色で居場所がないんです。スピカの方にお付き合いさせてください」

「お、良いぜ。スペ、予約一人追加で」

「はーい。おいしいフグのお店予約してますから!!」

「いやそれ、本当に予算大丈夫なのかよ」

「私に任せてください!!」

「サトイモに集るのはダメだろどう考えても!?!」

騒ぎながら移動を始めるスピカのメンバー

マックイーンはイクノに手を引かれて、皆についていくのであった。

## 菊の花が咲くころに

小倉記念での敗北の経験は、マックイーンをさらに成長させた。不要な甘さがなくなりレースへ真摯になったマックイーンの成長は著しかった。

京都大賞典では、マックイーンは戦法を先行策に戻した。

そもそもゴールドシップのあれは、スタートがへたくそなのと、スaminaはあるが瞬発力がなくて前に行くことができないからこそその走法なのだ。

スタートが得意で、スタートダッシュも得意、するすると自然と前につけることができるマックイーンには必ずしも必要な走法ではなかった。

京都大賞典では、同じメジロ家のメジロパーマーと先頭を争い続け、完全にパーマーを競りつぶした挙句にそのままさらに直線で伸びて圧勝を飾っていた。

弱い者いじめにすら見えるぐらいの圧倒的な勝利だった。

天皇賞秋もまた、圧倒的だった。

外枠で不利な状況の中、第二コーナーを曲がってすぐ大外に出たマックイーンは、なんとこのこり1600m付近からロングスパートをかけたのだ。

すさまじい轟音と土煙を上げながら速度を上げていくマックイーン。

マックイーンあの走法をつぶし方は、小倉記念から知れ渡っていた。

内バ場に閉じ込めてしまえば簡単に封印できるものであるという認識が広がっており、そう恐れるに足りないと参加者は思っていた。

だが、そんな欠点をあざ笑うかのようにマックイーンは最初から外に回ると、すぐにスパートをかけ始めたのだ。

こうなると止める方法はない。

早すぎる仕掛けに、逃げつづれることを周りは祈ることしかできなかった。



だが、マックイーンがつぶれることはなかった。  
メジロの歴史と誇り。

自分の意地。

観客や友人の声援。

トレーナーやゴールドシップの指導。

全てを背負い、このレースだけでも絶対走り切るといふ執念の走りである。

油断も何もない。絶対に勝つという意志を持ったその走りを止められるものはいなかった。

圧倒的な大差をもってゴールに飛び込んだマックイーン。

酸欠で真っ青になり、文字通り全力を振り絞ってふらふらになりながらも、手を振り、観客の声援にこたえていた。

「え、何これ、やばくない?」

キンイロリョティが参加していたために天皇賞秋にも観戦に来ていたチームカノープス。

マックイーンの圧倒的な走りを見てネイチャはビビっていた。

小倉記念で勝ったし、私も少しはキラキラできるかな? なんてほんの小指の先ほど調子に乗ろうとしていた小市民なネイチャの心をへし折る圧倒的な走りであった。

「大丈夫、ネイチャしか勝たん!!」

ターボはあれを見てもご機嫌である。

凄いと思っではいるだろうが、それでも勝つ気力があるらしい。その精神力は素直にすごいとネイチャは思った。

「ネイチャ、次のネイチャのレースは菊花賞で、相手はテイオーです。

マックイーンの強さに惑わされなくてください。やるとしても年末の有馬記念とかでしょう」

「予想以上にすぐだった。あと2カ月ちよつとじゃん」

「その前に来週の菊花賞のことを気にしましょう」

「ん、そだね」

「それに、あの走法は今回限りだと思いますよ」

「え？」

「いくらマッククイーンさんが丈夫で、キングさん所のゴールドシツプシリーズを着用しているといっても、あれは無茶が過ぎます。天皇賞はマッククイーンさんのみならず、メジロ家の悲願でもありますから後先考えずにああいう走りをしたのでしようが、あんなのを繰り返したら体をすぐに壊してしまいますよ。ほら、呼吸音もひどい」

「……」

声援にかき消えて聞こえにくいのが、ウマ娘の聴力では、かひゅー、かひゅー、というマッククイーンの呼吸音を捉えることができた。

手を振るマッククイーンに駆け寄ったゴールドシツプが慌ててマッククイーンを抱えて本馬場から退場するのを見ても、限界以上の走りをしていただろう。

今回だけの方法である、と言われても納得ができた。

「さて、私は申し訳ないですが、マッククイーンのところに行ってきた。あんな無茶なことしてお仕置きをしないといけないので」

「お仕置き？」

「人工呼吸から体を洗ってあげて寝るまで添い寝する予定です」

「……まあ、がんばって」

すさまじいのろけを見せられたネイチャはどのような表情をしていかかわからずに、イクノを見送った。

ひとまずは目の前の菊花賞、そしてテイオーとの対決である。

ネイチャは気合を入れなおした。

京都レース場11R 芝3000m 菊花賞 パドック

この年の菊花賞はある種異様な雰囲気にも包まれていた。絶対強者であるトウカイテイオーの一強、そして三冠が確信されていた。

ここにメジロマツクイーンがいれば、まだ勝負になっただろう。彼女は先週の天皇賞秋に参加し、見事勝利している。

その圧倒的な強さに、菊花賞に出ていたら、という事を考えるファンも多かった。

そんな感じで、結果が見えたレースと一般的には思われていた。

三番人気になったナイスネイチャも、その異様な感じを感じていた。

観客数自体は非常に多い。

10万を超えていそうな感じで、観覧席は満員である。

観客席のほとんどがテイオーファンのようであり、この人たちはテイオーの三冠を見に来ているのだらうな、とびりびりと感じる。

そんな無言の圧力で、萎縮している参加ウマ娘もいるようである。そんな中でもネイチャは比較的落ち着いていた。

確かに大多数はテイオーのファンなのは間違いない。

しかしネイチャも三番人気なのだ。この中の一部。もしかしたら1割もないかもしれないが、それでも数千ぐらいはネイチャのファンがいるのだ。それはすごい数だと素直に思った。

大きなテイオーコールにかき消され聞こえにくいのが、それでもネイチャを呼ぶ声は確かに聞こえていた。

その人たちのためにも、頑張ろうと決意を胸に秘めるのであった。

ゴールドシップとマツクイーンは、サトノダイヤモンドとキタサンブラックを連れ、菊花賞に観戦に来ていた。

きつかけはサトノダイヤモンドからのお願いだ。

さすがに小学生二人きりで、京都まで観戦に来るのは親から許可が出なかつたらしい。

サトノダイヤモンドはテイオーにはあまり興味はないが、キタサンブラックは熱狂的なテイオーファンだ。

どうしても生で見たいとおもっているのをサトノダイヤモンドが察して、ゴールドシップとマックイーンに引率をお願いした形である。

という事で今回はカノープスと離れた位置で観戦をしていた。

マックイーンがサトノダイヤモンドを、ゴールドシップがキタサンブラックを肩車している形である。

人が多いので、ちびっこ二人が良く見えるように、肩車をしていた。

「ちなみに今日は誰が勝つと思う？」

「テイオーさんです!!」

テイオーファンのキタサンブラックは即答した。

まあその気持ちはわからなくもない。

二番人気のリオターナルは日本ダービーでテイオーの2着

三番人気のナイスネイチャは夏から上がってきたウマ娘だが実力は未知数。

絶対的な強さを誇っているテイオーに対抗できないと考えるのも不思議ではないだろう。

「ネイチャさんです!!」

それに対抗してサトノダイヤモンドが声を上げる。

サトノダイヤモンドは熱狂的なマックイーンファンだ。

だから、そのマックイーンに小倉記念で勝利したナイスネイチャを推すのだろう。

二人でぐぬぬぬ、とみあっている下で、ゴールドシップはマックイーンに聞いた。

「マックイーンはどう思う？」

「ネイチャさんですね。身びいきや負けたことを差し引いても、テイオーがネイチャさんに勝てるとは思えません」

「なんでですか！ テイオーさんのほうが速いです!!」

マックイーンの見解にキタサンブラックが噛みついた。

実績から言っても、今までのタイムから言ってもテイオーの方が上回っている。

だからこそ、テイオーが負けるといえるのが納得できないのだろう。

「説明が難しいところですが…… ネイチャさんの目ですね」

「目？」

「カノープスの南坂トレーナーは昼行燈に見えて切れる人です。きつと今回も勝ち筋を考えているでしょう。ネイチャさんの態度からもそれが見えます」

「それで？」

「テイオーの走りに対する姿勢はホープフルステークスと変わりません。周りを見ていない、あこがれだけのふわふわした走りです。それは単調で非常に読みやすいでしょう。勝ち筋が見えているなら、テイオー相手ならまぎれることもまずないでしょう」

「じゃあどうやって勝つんですか！ テイオーさんみたいにすごい勢いで逃げるウマ娘にどうやって追いつけるんですか！」

「それは私にはわかりません。あとは結果をご覧くださいろ、ですな」  
「むう」

キタサンブラックは納得がいつていないようだがまあしようがない。マックイーンの言ったことは的確な部分はあるが、答えは示していない。

「どうやって勝つかわからない以上、それを正解とは認めがたいだろう。」

「ゴールドシップさんはどう思いますか？」

「見ている限りテイオーはネイチャを警戒していない。マックイーンに勝ったウマ娘ということで警戒していたならできないが、そうじゃないならアタシでも思いつく手は一つあるな」

「なんですか？」

「まあそれは、見てりゃわかるさ。あの南坂トレーナーのことだ。もしかしたらもつと違う手を考えているかもしれねーから、ここでしや

べって外すと恥ずかしいし」

「ぶー」

ゴールドシップの頭上でキタサンブラックが膨れた。

ゴールドシップが焼きニンジンンを差し出すと、キタサンブラックはもぐもぐと食べ始めるのであった。

京都レース場11R 芝3000m 菊花賞 本戦

スタートはあまりきれいにそろわなかった。

異様な雰囲気の中、緊張しすぎて出遅れを起こしたウマ娘が何人もいた。

一人だけホームであとはアウェイみたいな状況だと緊張しすぎるウマ娘もいるだろう。

ばらばらと出ていく中、一番先頭をトウカイテイオーが駆け抜ける。

誰もそれを止めることができない。

そんな中、スタートダッシュを決めたネイチャが、テイオーの後ろにぴったりとついた。

ネイチャは何でも一通りできるウマ娘だった。

スタートだってターボやほかのメンバーに付き合っただけ死ねほど練習している。

最近メイクデビューを目指すマチタンのスタート練習にも付き合っているからかなりスタートが上手い方だった。

もつとも基本的に差しの彼女に、スタートのうまさはそこまで求められていない。

だが、今回だけはそれが役に立った。

スタートから快調に飛ばすテイオーの後ろにぴったりとつく。

ターボの逃げの練習の併せ馬もするネイチャは、逃げで走ることでも可能だ。

だが、逃げる戦法は、基本的に走力に自信がなく駆け引きが好きなネイチャには向いていない戦法であり、基本あまり意味が無いものだった。

しかしその練習が今回は生きた。

最初から速いペースで飛ばすテイオーにペースを合わせることができたのだ。

後ろに入ってしまったえばスリップストリームの恩恵にあずかることができる。

特にテイオーのように速いと、その恩恵は顕著だ。

もつとも通常ならば後ろに入れば左右に振られたり、土を蹴り飛ばされたりして後ろにつき続けるのは拒否されるのが通常だ。

しかし、テイオーは後ろを気にしてすらいなかった。

入ったのがマックイーンだったらテイオーも気にしただろう。

だが、テイオーはその慢心により敵はいないと考えていた。タイムトライアルの気分で走っているのだろう。

だからこそ、ぴったりつけるネイチャに対して何も対抗策をしなかった。

すぐについてこれなくなる、と考えたのもあるだろう。

奇妙な二人だけの旅は、そのままずっと続いていった。

「1000mのタイム、60秒ぐらいですわね」

「速いな。どれだけ飛ばすんだよ」

完全に二人旅になっているレースだ。後ろとの差はすでに10バ身ぐらいまでいっていいそうである。

通常なら耐えきれないハイペースだが…… 最後まで残ることができるのか。スタミナが切れたら後ろに追いつかれるのか、それかわからなくなってきたレースであった。

「テイオーさんなら、3分フラットで勝ちます!!」

「キタちゃん、それはさすがに無理でしょ……」

普通なら殺人的なペースだ。2000mぐらいしか持たないペースだが、それでもテイオーならそのペースで逃げそうなぐらいの強さがあった。

そんなペースで逃げるテイオーにぴったりとくつついたネイチャ。

そのまま後続を引き離しながら、二人は2000mを通過した。

今まで走ったことのない速いペースだが、しかしネイチャは体力的には余裕があった。



スリップストリームは速ければ速いほど力強く、また大きく発生する。

テイオーが小柄なことを考慮しても、十分な追い風をネイチャは受けることができていた。

だが、スリップストリームを受けながら走るといのは実はそれもまた容易なことではない。体勢は普段より前に行きがちになる上、前のウマ娘に乗り上げたなら失格になるため調整が容易ではないのだ。

そういったことも調整しながらの2000m以上の走行は精神的な負担が非常に高かった。

だが、ネイチャはそれを走り切った。

淀の坂を上り、下り始めたタイミングでスパートをかける。

トップスピードを坂の勢いを加えることで増しながら、ネイチャは自然とテイオーに並び、全力全霊をもって走り出した。

テイオーはいつものように逃げ、いつものように走っているはずであつた。

後ろからネイチャがついてきているが、どうせ追いつけないと思つていた。

ネイチャがスパートをかけた瞬間、テイオーもスパートをかける予定だつた。

スリップストリームを利用していたとしても、実力差で押し切れる、そんな予定だつた。

力を入れてスパートをかけようとするテイオー。

しかし、足が動かない。

既に脚がほとんど残っていないかつた。

「テイオーさんっ!?!」

キタサンブラックが悲鳴を上げる。

1バ身、1バ身とネイチャとテイオーの距離が離れていく。

完全に足が残っていないかつた。

ネイチャに残りの脚をつぶされたのだろう。

ネイチャはただ後ろからついていくだけではなかった。少しづつ、後ろからプレッシャーをかけてペースを無理やり上げさせていたのだ。

テイオーは意識としては全くネイチャを無視していたのだろうが、後ろにいる足音や空気の流れはテイオーも感じていたはずだ。

いくら無視してもそういうことを感じている以上、意図的に圧迫をかけることは可能だ。直感と天性で走るテイオーはむしろそういった無意識への働きかけに流されやすいタイプといえるだろう。

そうして意識をしていない部分でネイチャは確実にテイオーの脚を消耗させていたのだった。

テイオーの主観ではまだ脚が残ってるつもりだったのかもしれないが、実際は全くそんなことはなく。

スパートをかけるネイチャに全く追いつくことができないテイオーは、追いつがることもできず。

そのままネイチャがゴール板の前に飛び込むのを、テイオーは後ろから見つめることしかできなかつた。

## 夢の終わり

京都レース場は異様な雰囲気にも包まれた。ざわつき、困惑の声がレース場を包む。

今日は三冠ウマ娘が生まれるのではなかったのか。なぜ、テイオーは負けたのか。

そんな、若干非難がましい音がレース場を包む。

ナイスネイチャは、そんな状況でも特に困惑も覚えなかった。

自分のファンでもなければ、勝負の結果を受け入れられずにこちらに敵意を向けてくる相手など、自分にとっても敵でしかない。

そんな人たちを相手にするだけ無駄だ。それよりも自分の勝利を祝ってくれる人たちに対してファンサービスをするべきだろう。

カノープスのみんなや自分の応援団に手を振る。

スピカの二人と、二人に連れられた子たちも手を振ってくれていた。なのでネイチャは手を振り返した。

そのあとのウイニングライブもネイチャは普通に行った。

こういう大番狂わせが起きた後のウイニングライブは荒れる傾向が強い。

そんな中でも、ネイチャはとてがんばりながらウイニングライブを行っていた。

ウマ娘は皆、見目麗しい乙女である。

ナイスネイチャも、その原則に外れず可愛らしい少女である。

G1ウマ娘となると通常はアイドルであり、非常に高嶺の花である。

だが、ネイチャは商売つきの多い商店街育ち、しかも母はパブの経営という事で、人一倍愛想を振りまくのが得意であった。

例えばテイオーなどは中性的で非常に美しい少女だがどこことなく触れ難さがあり壁を感じてしまう。しかしネイチャはそういう壁の内側にするりと入るのが得意な子である。

ネイチャは、数万人に囲まれたライブでも、普通の少女、に見える

存在だった。

そんな彼女だが、ライブ中の動きはいちいちあざとい。

動作がともかわいなのだ。私はかわいいでしょと言わんばかりの可愛さである。

南坂トレーナーが、他のメンバーからの尊厳を犠牲にしてネイチャに教え込んだあざとさであった。

ターボ以外にはあざとすぎると不評だったものだが、こうやってステージの上に立つネイチャを見ると、確かにすさまじくかわいい。

テイオーファン一色だった会場が、徐々にネイチャへ染まっていくのを誰もが感じていた。

とどめのアドリブ、勝利の女神の投げキッスで、会場は完全にネイチャに染まった。

最初はざわついていただけのライブも、最後にはネイチャコール一色で幕を閉じる素晴らしいものとなったのだった。

トウカイテイオーはどうしていいかわからなくなっていた。

無敗の夢は敗れた

三冠の夢も敗れた

これ以上どんな夢を紡ぐべきか、テイオーにはわからなかった。

ナイスネイチャはとるに足らない、普通のウマ娘だとテイオーは思っていた。

油断があったのは認める。

だが、今思い返すと、どうしてもテイオーはネイチャに勝てるビジョンが浮かばなかった。

いくら揺さぶっても、ネイチャはおそらくマークを外さない。

むしろテイオーが揺さぶった分、ネイチャの方もテイオーを揺さぶってくるだろう。

そんな駆け引きの潰しあいをして、彼女に勝てる気がしない。

では後方待機をしたらどうか、といえばやはりネイチャが牽制をしてくるのが容易に想像できた。

むしろ周りに他のウマ娘がいてそれを利用できる分、後方待機の方

が不利である。

結局どうやっても勝てなかっただろうことに、いまさらながらに気づいたテイオーは愕然とした。

ライブだってそうだ。

ネイチヤのライブはよく言えば上手、悪く言えば無難で華がない。そう感じていた。

あの大番狂わせの中の空気感で、失敗してしまえという薄暗い望みすら、テイオーには浮かんでいた。

しかし、終わってみれば大盛況である。

テイオー一色だった会場内を、ネイチヤ一色に染め上げたのだ。

普通ではなかった。

普通のウマ娘だったはずの彼女だが、普通ではなかったのだ。

結局

とても素晴らしいキラキラしたウマ娘と

驕って油断し無様に負けたウマ娘と

その二つが明確になったただけだった。

「テイオーさん!!」

「……キタちゃん?」

どうしていいかわからずにとぼとぼと歩いていたテイオーを見つけたキタサンブラックが駆け寄ってくる。

隣にはサトノダイヤモンドも一緒にいた。

「あ、あの、今日は惜しかったですね! でも二着でもすごいです!

次は頑張りましょうね!!」

精いっぱいキタサンブラックの励ましは、しかしテイオーには届いていなかった。

「次なんてないよ」

「えっ?」

「クラシックは一生に一回、次なんてない」

「ご、ごめんなさい、そういう意味じゃ……」

「無理に励まそうとしなくていいよ。マックイーン達と一緒に来たんでしょ。ネイチヤたちの方に行きなよ。ボクなんて放っておいてさ」

「テイオーさん！」

「どうせ今日だつて、ネイチャたちの応援に来たんでしょ？ お情けなんていらないよ」

「テ、テイオーさあ…」

「良いから放つておいふぐあつ?!」

涙目になるキタサンブラック。

そんなキタサンブラックを拒否したテイオーのみぞおちに、サトノダイヤモンドが突き刺さった。

「痛いですか？ でもキタちゃんの心はもつと痛かったですよ！」

「ダイヤちゃん!」

「い、いきなり何なのぐへっ?!」

「これもキタちゃんの分!!」

テイオーの体に再度サトノミサイルで追撃する。

テイオーのみぞおちにサトノダイヤモンドが再度突き刺さり、テイオーの体が高く浮いた。

「ダイヤちゃん!」

「そしてこれも!! キタちゃんの分だああああ!!!」

宙に浮いたテイオーを捕らえたサトノダイヤモンドは、そのままメジロバスターを放った。

テイオーはそのまま地面に倒れ伏した。

「テ、テイオーさん、大丈夫ですか?」

「キタちゃん、行きますよ!」

「ダイヤちゃん!」

「こんなナメクジと一緒にいても腐るだけです！ ナメクジやろー、少し反省しなさい！ ついでにマックイーンファンクラブナンバーワンの地位をよこしなさい!」

「ダイヤちゃん!」

困惑するキタサンブラックを抱え、これ以上は問答無用だとサトノダイヤモンドはその場から去った。

よろよると立ち上がるテイオー。  
迷子になった彼女はどうかかわからなくなっていた。

閑話：タキオンとダスカとウオツカのジュニアクラス

アグネスタキオンとダイワスカーレットとウオツカは、同じタイムングでデビューをした。

皆てつきりタキオンはデビューしないまま終わるのかと思っていたが、タイツの件もあつて非常にやる気満々であった。

メイクデビュー自体は1度したら止められないが、学園所属中ならいつでもできる。

なので、デビューした時にかなり年齢差があることも珍しくない。既に社会的な地位まで確立しているタキオンは最年長のデビューだった。

タキオンの強さは絶対的だった。

メイクデビューは圧倒的な差で勝利。そのあとの重賞も勝利して、次は年末のG1を目指していた。

スカーレットもウオツカもそれぞれメイクデビューで危なげなく勝利し、OP戦にも勝つたため同じく年末のG1を目指すことになっていた。

問題は、三人がそれぞれのG1を目指すかというところだった。沖野トレーナーと三人が、その調整の話し合いをしていた。

「私はホープフルステークスかな。短いマイルよりも、長い距離の方が正直好みだ」

ジュニアクラスのG1は3つある

朝日杯フューチュリティステークス 中山レース場芝1600m

阪神ジュベナイルフィリーズ 阪神レース場芝1600m

ホープフルステークス 中山レース場芝2000m

の3つである。

タキオンは2000mのホープフルステークスを狙いたいようだ。適性的にも長い方がいい脚が使えるそうなので、それは構わないだろう。

しかし他の二人がそれに思いっきり流された。

「じゃあ私もホープフルステークスがいい!!」



「スカレットuzziいぞ！俺もホープフルステークスがいい!!」

タキオンがホープフルステークスを選ぶと言った瞬間二人ともホープフルステークスに出たいと騒ぎ始めたのだった。

「なー、トレーナー、いいだろ?」

「私が先よ！トレーナー、良いでしょ?」

沖野に縋り始める二人。

沖野は悩んだ。

チーム的には三人が分かれてレースに出た方がいい。

一つの席を取り合うのは避けたいというのが通常だ。

また、適性の問題がある。

体が完全に出来上がっている上に適性が長めのタキオンはホープフルがベストだ。

一方まだ成長途中な上に適性距離が短めな二人は、マイルの方がよさそうなのだ。

とはいえ、これらが根本的な原因ではない。

「タキオン、お前とスカレット、ガチ勝負してどこまで脚がもつ?」

一番の不安は二人の脚部不安であった。

体質改善に道具の改善で、故障の可能性はかなり減っている。

だが一方で、ウマ娘の体の解析もかなり進んでいて、個々人の脚部不安の有無も数字的にわかるようになりつつあった。

昔の様に触って確かめるなんて言う職人芸をする必要はなくなっている。

だからこそ、どこまで丈夫か、というのまで白日の下にさらされるようになっていた。

スピカの場合、スペヤウオツカは体が非常に丈夫だ。多少無茶をしても全く問題ない丈夫さである。

スズカも基本丈夫である。あんな大怪我した理由はいまだよくわからないぐらいだ。

マックイーンは速すぎて脚部負担が強く多少不安な部分があるが、体格を増して強化しているしゴールドシップが慎重に見ているからおそらく大丈夫だろう。

問題はタキオンと、あとダイワスカーレットだった。

体質的に、二人とも筋肉や腱の強度に不安がある。人並み程度の強さはあるのだが、それ以上に脚力が強すぎるのだ。あまり本気で走り過ぎると、屈腱炎や蹄靭帯炎などを引き起こす可能性が高い、というのがタキオンの率直な分析だった。

現状、レースでは二人とも逃げ目の先行策で走らせて、極端な負荷が起きないようにしている。

脚をこまめに使って、速度に急激な変化を起ささないようにすればその分脚部負担は減るのだ。

だが、おそらく三人を同じレースに出せばそんな調整をしながらのレースはできないだろう。

スカーレットの性格上、ウオッカやタキオン相手なら絶対に燃える。

そうなれば全身全霊を以て走ってしまうだろう。

タキオンも冷静に見えて負けず嫌いだ。

おそらく二人と走れば全力以上の力を出してしまうだろう。

三人はおそらくこれから何度もぶつかる。

避けられる対決は、できれば避けたいところだった。

「まあ、そこまで不安に思わなくても大丈夫だと思うよ。それに怪我して走れなくなっても、わたしは本望…… すまない、トレーナー君。不謹慎だった」

怪我してレース場で倒れても本望である、というのはタキオンの本音だ。

しかしそれだけは言うてはいけなかったとタキオンは途中まで言っただけだ。

スズカの時だってあそこまで憔悴していたトレーナーだ。

他の全ては許容しても、怪我だけは許容できないだろう。そのことをトレーナーの無言の圧力から思い出したのだ。

どうせ3人で競うレースはまだいくつもあるのだ。そう思ったタキオンは今折れるところだろう。

ならばあとは二人の説得だ。

「ウオツカ君」

「…… しゃーねーですね。じゃあ俺はジユベナイルに回ります。差すのを考えたら直線が長い阪神の方がいいです」

阪神の1600mコースは外回りであり、直線が470mもある。コーナーも大きいので差しに向いたコースであった。

ちなみに阪神の2000mは内回りなので差しには不向きである。トレーナーの言いたいことも察したウオツカは早々に自分が折れることにした。

「スカーレット君」

「……」

「スカーレット君?」

「ぶー」

「ね、スカーレット君」

「ぶー」

スカーレットはどうしてもホープフルステークスに出たかった。タキオンと勝負したかった。

でもトレーナーの心配もわかる。

何よりウオツカがあきらめたのに、自分がわがまま言うのは死ぬほどかつこ悪い。

ここで駄々をこねるのも死ぬほどかつこ悪い。

適性的にもフューチュリティステークスの直線の短い中山1600mが適当なのはわかっている。

でもどうしてもうんとは言えなかった。

「トレーナー君、スカーレット君の説得は私ですから、後はよろしく頼むよ。レースの参加手続きもそのまましておいてくれ」

「ぶー」

「ああ、わかった」

ぶー垂れるスカーレットを担いで、タキオンはチームルームから出ていった。

トレーナーは苦笑するしかなかった。

## 第四章 物語の始まり テイオーとお姉さまの出会い

ゴールドシップはキタサンブラックとサトノダイヤモンドを探していた。

レース後、キタサンブラックがテイオーを探しに行ってしまったため、見失ってしまったのだ。

とはいえサトイモが一緒だし、テイオーの行動範囲にいるだろうと思っただけであまり焦ってはいなかった。

だが、そうして探していたところに、なぜかトウカイテイオーが落ちていたのはビビった。

道端に落ちているウマ娘である。意味が分からない。

ひとまず負けて落ち込んでいるのだろうとあたりをつける。

頭の飾りを外して気合を入れ、お姉さまモードになるとテイオーを抱き起した。

「大丈夫ですか？」

「……」

テイオーは泣いていた。

何が起きたのかさっぱりわからないゴールドシップは焦った。

だがひとまずここに置いておくのも体に悪い。

死闘を繰り広げて体が疲弊しているはずだし、エネルギーが足りなくて体が冷えるはずだ。

ひとまず甘いものでも食べさせるために、レース場近くの喫茶店に入るのであった。

だいたいこういうところはウマ娘用のメニューが置いてある。

予想通り、ウマ娘用のメニューがあったので、温まるようにと特大お汁粉を二つ頼む。

どんぶりの大きさのお汁粉がすぐに出てきた。

「ほら、食べましょっつ。」

「……」

食べるように促すが、どことなくぼんやりしたテイオー。全然反応がなかった。

ひとまず蓮華で搦って、口にお汁粉を突っ込んだ。

「あちやああああい!？」

「あ、やっと反応しましたね」

「なに!? なんなの!？」

「お汁粉星人の襲来です」

「何それ!? 怖いんだけど!？」

「だから早くお汁粉食べましょう。食べないとまたお汁粉星人が来ますよ」

「というかお姉さん誰!？」

「私のことはそうですね、お姉さまと呼んでください。ポニーちゃん」

「え? え?」

「ひとまずもう一度、お汁粉星人襲来です。えいっ!」

「ふぎやああああ!!」

熱さのせいか、甘さのせいか。

少しテイオーは元気が出ていた。

また口に熱々のお汁粉を突っ込まれてはたまらないと、テイオーは自分でお汁粉を食べ始めた。

「で、どうして落ち込んだの、ポニーちゃん」

「……」

「何があつたか教えてくれないかな?」

「どうせ、お姉さんには関係ないでしょ」

「ふむふむ、そういう憎まれ口を好きな子に言っちゃったのかな?」

「!？」

「負けたからって八つ当たりはいけないなあ、ポニーちゃん」

「……見てたの?」

「見てなくなつてわかるわ。あなたがどこのだれか、有名人なんだから私だって知っているし」

「……」

「普段冷静なあなたがそういう精神状態にいるのを見れば、ああ、他の子、そうね、あなたを一番応援してくれていた子にも似たような事言っちゃったんじゃないかなって簡単に推測はできるわ」

「……」

顔や耳に感情は出やすいし、テイオーの考えは非常に読みやすい。勝負の相手だし、ある程度周りの人間関係や性格も情報収集しているからゴールドシップにとってそれくらい予想するのは簡単だった。だが、そうなるテイオーが悪態ついてしまった相手はおそらくキタサンブラックだろう。

大丈夫だろうか、テイオーが見えていない位置でノールックでマックイーンとサトイモにメールを打つ。

「ほら、元気出しなさい。今度はお餅星人襲来よ」

「ふぎゃああああ!?!」

油断していたテイオーの口にお汁粉を突っ込み、メールの返信を確認する。

どうやらキタサトはマックイーンと合流できたらしい。

少し用事ができたことと、カノープスに合流するようにお願いするメールを送った。

さて、今後どうしようか。

キタサンブラックとの関係もどうかした方がいいだろう。

一度詫びを入れさせる仲介でもするべきか。

しかし、そもそもリギルのメンツもテイオーを探しているのではなかろうか。

後はトレーナーの地位にいるはずのルドルフなどもどうしているのか。

必死にお汁粉を食べるテイオーをひとまず置いて、あたりを探すべく外に出た。

「こんばんは、シンボリルドルフさん」

「こんばんは、ゴールドシップ君」

そうしてゴールドシップは皇帝に出会ったのであった。

## 絶対と黄金の船

ああ、こいつはやばい奴だ。

ゴールドシップは察した。

未来でもシンボリドルフの伝説は残っていたし、過去に来て、遠目で見たり、スペの引継ぎの時は実際話したりすることもあった。

その時は気づかなかつたが、こうやって一対一で対面してやつと皇帝の本質を理解した。

空虚なる孤高の頂。強さと虚無が満ちたその目は化け物かのように恐ろしかった。

なぜこうなってしまったのか。

リギルには頼れるトレーナーが、優しい親友であるマルゼンスキーが、慕う後輩たちがたくさんいたはずだ。

生徒会でも近寄りがたいという者はいたが、慕う者ばかりだったはずだ。

誰もいなかったわけではないはずだ。

ウマ娘が皆幸せになるという、笑ってしまうぐらい理想主義な理想が、それを真顔で言う素晴らしさも持っていたはずだ。

それがなぜ今、これだけ空虚な皇帝になってしまったのか。考えれば、一つだけ思い当たることがあった。

スペシャルウィークか。

ゴールドシップは思った。

この空虚なオーラはあのスペシャルウィークを思い出させられた。

当時結局直接会っていないが、のちに残ったレースの光景は寒気がするほどであった。

あれと目の前の皇帝は非常に似ている、とゴールドシップは思った。

変装した自分のことをすぐに見抜くあたりもそっくりである。

単に「同格が現れた」だけなら壊れることはないだろう。

いやむしろ、もっと人になれたはずだ。



きつときつかけはあの宝塚記念。絶対だったはずのスペが負けた時だ。

並ぶものが欲しくなったか。あるいは自分を倒す者が欲しくなかったか。

絶対的な皇帝は、その時魔王に堕ちたのだろう。

いやはや、ずいぶん未来がいい方に転がっていたと思ったがとんだラスボスが残っていたものだ。

そしてその魔王が自分を倒す勇者を育てようとしてるんだから無駄茶が過ぎるつてものだ。

一人何役しようとしてるんだか。

今のままでもマックイーンがメジロ家や全てのウマ娘を恨みながら死んでいくなんてことは起きないだろう。だがまあ、これもまた自分の使命か。魔王退治をゴールドシップは決意した。

「それで、皇帝さん、何の御用でしょうか？」

「テイオーを探していてな。知らないか？」

「知っていますけどね、教えませんよ」

「ふむ、どういうつもりだね？」

テイオーを渡す選択肢はすでにゴールドシップになかった。

きつとこの魔王は、テイオーを鍛えて鍛えて、きつと自分ごとテイオーを潰してしまうだろう。

それをおハナさんが止められるだろうか。きつと止められなかったからあの未来の惨劇なのだろう。ゴールドシップは自分で止めることにした。

「私、あの子が気に入ってしまいましたね。もらおうかと」

「マックイーンがいるだろう？」

「まあそれはどうにかしますよ」

ニッコリ笑顔のゴールドシップ。

無表情のシンボルドルフ。

にらみ合いが始まった。

「ただで譲るわけにはいかないな」

「あら、交渉の余地があるのですか？」

「そうだな、単純に一つ。私に勝てばいいだろう」

「なるほど、勝負ですか…… なら」

「ああ、何でもいいぞ」

皇帝は負けるつもりがないのか、それとも結果がどうでもいいのか。

なんにしる傲慢な態度だ。

いかさまで勝つのは簡単だがそれじゃあつまらない。

なのでちよつと挑発をすることにした。

「競走しましょう」

「本気かい？」

「ええ、簡単です。あそこまで行って、帰ってくるだけ。速い方が勝ちです」

指をさしたのは道の向こうにある大きな街路樹だった。そこまで行って帰ってくればいい。単純な徒競走だ。

「負ける気がしないな」

「油断してくれれば助かりますね。では、スタートは私が合図しても」

「構わないよ」

「では、よいスタート」

夜の京都の町で、誰も知らないレースが始まった。

## 愚者の走り

スタートはスタートの合図をしたゴールドシップの方が有利だった。

しかしシンボリルドルフのスタートも良く、ほとんど遅れずについてきていた。

真面目に走って勝つことも考えたゴールドシップだが、しかしその考えはすぐに捨てた。

ゴールドシップは走力に自信があるとはいえ、ここ最近はトレーニングを現役時代ほどしていない。

さらにレースにも出ていないから勝負勘は衰えているだろう。

迷子の困った皇帝ちゃんから単にテイオーを奪つても大して興味を持たれない可能性がある。今後彼女が暴走しすぎないように、自分に興味を向けさせるためにこのような手を取った。

だが正攻法ではさすがに難しそうだ。なので路上レースならではのいろいろをすることにした。

ゴールドシップは小さいころから悪ガキだった。

母を早くなくし、父も病弱だったため、結構やりたい放題であった。

小遣い稼ぎに野良レースに出るのも日常茶飯事であり、車やバイクと競つたりするのはもちろん、格闘技まがいのレースや町中を迷惑も考えずに障害物競走のように走るレースなんかもしばしば出ていた。

コンクリートの上を走るこのレースこそがゴールドシップの原点であった。

ひとまず喫茶店からくすねてきた手に握った瓶のふたを開けて、手を振ると同時にシンボリルドルフの顔面にそれをぶちまけた。

気づいたシンボリルドルフは顔を腕で覆い、ばらまいたそれを払いのけ……

「ハクシヨンっ!!」

皇帝は大きくくしゃみをした。

ばらまいたものは胡椒である。

こういう妨害行為には卓上の粉胡椒が一番有効だとゴールドシッ

プは知っていた。

目潰しなら唐辛子の方が有効だが、手や腕で防がれやすい欠点がある。

その点粉胡椒だと、防がれても粉が細かいので呼吸により鼻に入りくしゃみを誘発できるのだ。

ウマ娘の肺活量は伊達ではないため、これを防ぐのは息を止めないといけない。

そこまで初見でできる者は基本いないのだ。

さすがの皇帝もそこまでは見切れなかったようで、大きなくしゃみをした。

くしゃみでヨレる皇帝を突き放し、ゴールドシップはさっさと折り返しの街路樹までたどり着き…… 次のいたずらを見つけた。

「焼きそば500円あたああっく!!」

くしゃみを3回ほどした後リスタートをして走り出した皇帝の前から迫ってきたのは、牽引式の焼きそば屋台だった。

今回のコースは折り返し地点の街路樹が一番高く、緩やかな上り坂になっていた。

そして、道端に置いてあった牽引式の焼きそば屋台を見つけたゴールドシップはそれをかっぱらうと屋台を思いつきり押しして加速し、それに乗り込んだのだ。

レースなどで垂れてきたウマ娘を躲すことは多いが、あくまでそれは併走している相手を躲すだけでしかない。

正面からウマ娘並みの速度で突っ込んでくる大型の物体を躲す経験なんてルドルフにはなかった。

慌てて横に飛びのくルドルフ。またしても失速してしまった。

ゴールドシップは屋台を乗りこなし、すごい勢いでゴールである最初の店の前に向かうのであった。

結局やりたい放題したゴールドシップが先にゴールに到着し、やりたい放題されたルドルフが後に到着することになったのだった。

「私の勝ちですね」

「キミは、とんでもないウマ娘だ」

「お褒めにあずかり恐悦至極に存じます」

皮肉を言う皇帝に慇懃無礼な態度をとるゴールドシップ。

ここでできるだけ、彼女の注目を自分に集めないといけない。

「……キミなら、テイオーをこの皇帝に並ぶウマ娘に育てられるというのかい?」

「そんなつまらないことは言いませんよ」

「?」

「私のマックイーンも、そしてテイオーも、あなたに、皇帝に勝ちますよ。絶対に」

「ならばそれを楽しみにしていよう。おハナさんには話しておく」

ただそれだけ言って去っていく皇帝。

その背中をゴールドシップは見送った。

「本当に壊れてるな、あんたは」

テイオーだって皇帝を慕っていたはずだ。

もともとの皇帝はそういう相手に慈悲を与える度量があったはずだ。

テイオーは絶対に渡さない、最後まで守る。そんな態度をとっても良かったはずだ。

それは傲慢だったかもしれないが、優しさでもあったはずだ。

そんなことすら彼女は忘れてしまったらしい。

まあ、現在彼女は実務の第一線から離れているし、テイオーを引き離せばその被害を受けるのはせいぜいおハナさん程度だろう。

さっさとあの余裕綽々な横っ面をぶんなぐって正気に戻す必要がありそうだ。

ゴールドシップは気合を入れなおした。

膨れまんじゅうと黄金船とそれに挟まったりリョテイ

「バカですよの!?! バカですよの!?!」

「そうポリポリすんなよマックイーン。三回言わなくてもわかってるって。ほら、ポツキーやるから。京都限定の抹茶味だぜ」

「ポリポリ…… って騙されませんわよ!」

疲れて寝てしまったテイオーを抱え、一度マックイーンと合流したゴールドシップ。

キタサンブラックとテイオーが揉めたらしいこともマックイーン経由で聞いていたので、年少二人は今カノープスに預かってもらっている。

二人ともネイチャの髪をモフモフしてどうにか機嫌が戻っているらしい。

ネイチャパワー凄いな、とゴールドシップも感心した。

そしてテイオーである。

このままゴールドシップだけならまだしも、揉めたキタサンブラックと一緒に帰るのはさすがにやばいだろう。

とすると年少二人とマックイーンだけ先に帰すか、というところだ。

という事でその辺りの話をマックイーンにしたら怒涛の三連悪口であった。

「パパ、 たすけて〜♪ マックイーンが怖いのに」

「うるせえのしかかるな! 重い! 暑い!」

「ロリコンのリョテイにキタちゃんやんとサトちゃん預けたら大変な大変なことになるからダメですわ!」

「おいマックイーン、のしかかるな! 重いんだよお前も! あと誰がロリコンだ!」

「はあ? マックイーン! パパはロリコンじゃなくてむしろ熟女好きだぞ!」

「おいゴールドシップ! お前はお前で不名誉な発言し始めるんじゃないぞ!! あと重いって言うてるだろうが!!」

口論するマックイーンとゴールドシップ。その二人に挟まれて潰れているキンイロリヨティは心底うんざりしていた。

リヨティはこの場ではカノープスリーダーとして話し合いに参加しているのだが二人の痴話げんかに挟まれるだけになっていった。

別にあの年少二人をマックイーンと一緒に連れていくこと自体どちらでも構わない。どうせ府中までみんな今日中に戻るのだから引き受けるのも問題ない。

問題はこの二人の面倒な喧嘩と、それをなぜかリヨティの頭上でやっていることだろう。

二人とリヨティは身長差が40cmもあるから二人の胸部にリヨティの頭が挟まっている状態だ。

暑いし重いし、最悪であった。

「さすがに今日はティオーはリギルで連れて帰った方がいいと思うからこちらで預かるよ。幸いルドルフはマルゼンスキーと別口で帰るみたいだしね」

話し合いに交ざってるのはもう一人、リギルからフジキセキが来ていた。

ティオーの応援に来ていたリギルだが、ライブ後ティオーを見失い、その後ルドルフだけ帰ってきてティオーをスピカに移籍させるとか言い出したものだから大混乱であった。

ひとまず京都まで車で来ていたマルゼンスキーがシンボリルドルフを引きずって車で帰る事となったようだが、いまだにリギル内で混乱が続いているようだった。

「大丈夫なのか？」

「リギルの問題もあるからね。ひとまずティオーとこちらでもよく話しておくよ。それに、そっちもちゃんと説明した方がいいでしょ？」

「説明するのですわ！　ですわ!!」

マックイーンが怒りと混乱で語彙を失いつつあり、ゴールドシップに迫るマックイーンに押しつぶされて、リヨティが体力を削られているた。

「ほかにも沖野トレーナーに話したりも必要でしょ。たぶんそっちに

「移籍する方向でまとまると思うけど」

「そうだな。面倒掛けてごめんな。ほらマックイーン、八つ橋食って落ち着け」

「いい加減俺のことを放してくれないか」

「パパは譲らない！」

「ですわ！ ですわ!!」

「じゃあひとまず、テイオーは預かっていくから」

大混乱しながらいちやつく三人のことをキセキはあきらめたようだ。

ベンチで眠っているテイオーをフジキセキが抱きかかえた。

お姫様抱っこである。

「フジ、俺のことも助けてくれ……」

「リョテイ、頑張れ」

「……」

「ですわ!!」

「ほら、マックイーン。ひとまずスイーツ食って落ち着け」

「ですわ!!」

テイオーはキセキが連れて行った。

もぐもぐと饅頭を食べ始めるマックイーン。

リョテイは死んだ目をしながら、いまだ二人に挟まれていた。

後日、テイオーは正式にリギルからスピカへ移籍することになった。

さすがに捨て置けなかったゴールドシップの説得に、マックイーンが折れた形だ。

これが今後どう転ぶかは、誰にもわからなかった。



## テイオーとの話し合い

移籍が決まり、目に見えて落ち込んでいるテイオーを励ましつつ話を聞かため、今日もゴールドシップはテイオーを引き連れて出かけた。

マックイーンはメジロの家に用事があるらしく、今週は一週間自主練としている。

マックイーンの今後のスケジュールは春まで休養予定であった。

秋天の走りはやはり無理があり過ぎた。

有馬記念に出ることも検討されたが、そこで出ても調整が十分できない。

どうせならという事で、秋冬期はすべて取りやめになった。

春になれば大阪杯から春のシニア三冠を目指すというのがマックイーンの予定だった。

そんな状態でマックイーンは現在メジロ家の方で何かいろいろやっているらしい。

名家のお嬢様だしいろいろあるのだろう。そう思って特に気にしてはいない。

体重だけは後でちゃんと量っておこうとは思っていた。

そんなことよりテイオーである。

結局リギルから捨てられたと本人は思っており、ひどく沈んでいる。

それを優しくなだめながら、ゴールドシップはひとまず個室の喫茶店に連れてきていた。

同行しているのはサイレンススズカだけである。

ウインタードリームトロフィーも目指しながら頑張っているが、最近手は空いている。

今回は元リギルであり、半年ほどではあったが同じチームに同時に所属していたというのもあってゴールドシップについてきたのだ。

トレーナーはタキオンたちの最終調整真つただ中である。

リギルとの調整もあり、とてもではないがこちらに関わる余裕はなさそうだった。

ひとまずシヨンボリテイオーにテイオーの好きなかつ丼を食べさせ、はちみつを飲ませる。お腹がいっぱいになれば案外気持ちが落ち着くものだ。

テイオーは食欲がなさそうにしているので、あーんして一口ずつスプーンで食べさせた。

なぜかスズカが対抗意識を燃やして口を開けてきたので、熱々おでんを突っ込んだら膨れてしまった。

お腹いっぱい食べさせると、少しだけ血色も良くなり落ち着いたようだった。

「……ゴールドシップはボクに何をさせたいの？」

「んー、まあ何でもいいですよ？」

「なんでも？ レースもう出ないって言っても？」

「良いんじゃないですか？」

「えっ？」

ゴールドシップは皇帝に啖呵を切ったが、別にテイオーが走りたくないならそれで構わないと思っている。

テイオーの実績はクラシック二冠で2着2回の完全連対である。

ここでやめてもトップクラスである。ここにいるスズカだって勝鞍は宝塚記念と大阪杯のG1の2勝である。そもそもG1を1勝でもできれば十二分に誇れる実績であった。

「期待してないってこと？」

「そうじゃないですよ。まあ私としてはシンボリルドルフを完膚なきまでに叩きのめしてほしいと思いますが、テイオーがやりたくないのにやるのも違いますしね」

「……」

「テイオーがどうしたいかですね」

「……」

「ゴールドシップ」

「なんです、スズカちゃん？」

「私も口を挟んでも？」

「いいですよ」

「ではテイオー」

スズカも何か言いたいことがあるのだろうか。

まあ一時期同じチームにいたわけだし、きつと何かいいことを言うてくれるに違いない。

そうゴールドシップは思っていた。

「テイオー」

「何？ スズカ」

「良いからさつきと走りなさい!!」

「ピイ!？」

「!？」

そんなことを期待した自分が失敗だったとゴールドシップは悟った。

「スズカちゃん、なんでそれでいいとおもったのかな？ かな？」

「え？ あの、逃げ切りシスターズと一緒に活動しているミホノブルボンさんから、励ますときにはこれがいって……」

「スズカちゃん、あとでお話ね？」

「はい……」

スズカの予想以上のボンコツっぷりに気を取り直す。

テイオーの方を見ると、しかし案外覚悟の決まった顔をしていた。

「でもボク…… やっぱり走りたい……」

「テイオー？」

「走りたいし、かつこよくなりたいたい。それでやっぱり勝ちたい……マックイーンにも、ネイチャにも勝ちたい……」

「テイオー……」

「ボク、なれるかな。マックイーンやネイチャに勝てるウマ娘に。シンボリルドルフさんを超えるウマ娘に」

「なれますよ、きつと……」

本当はゴールドシップはマックイーンの肩を持つのが正解なのか

もしれない。だが、テイオーを見ていて見捨てられない自分がいた。きつとテイオーなら、マックイーンのいいライバルになるだろう。頭をなでると、テイオーは大人しくなった。少し決意を話して落ち着いたのだろう。

そのまま少しずつ、今後について決める話し合いをしていくのであった。

## 閑話：何をすべきか

メジロ家の屋敷の中には、メジロ家に連なるウマ娘しか入れない場所がある。

敷地の一角にある倉庫なのだが、重要なものが隠されているといわれるそこは、当主の許可なく入ることはできない。

精霊ウマ娘について調べるために、マックイーンはそこに行くことにした。

とはいえ、マックイーンだけでは全く心もとない。

基本マックイーンは脳筋であり、頭脳労働は苦手なのだ。

なのでイクノデイクタスとキンイロリョテイを巻き込んだ。

メジロに連なるものではないが、イクノは将来を誓い合った仲だという事で押し通し、さらにキンイロリョテイは自分たちの娘婿だという事で押し通した。

おばあ様は複雑な表情をしながら、二人が入ることを許した。

リョテイは憤慨していた。

なんだ娘婿って。娘もまだいないのに娘婿って意味わからないだろう。

マックイーンとイクノの仲は正直傍から見ていてうんざりするほど良いのだし、二人が将来を誓い合った仲だというのはまんざら嘘でもないだろう。

というかわマ娘は恋愛に関して本能が働き基本一途で相手を変えらる事はめったにない。マックイーンとイクノが別れるなんてリョテイには全く考えられなかった。

だからそこに自分を交ぜるな。リョテイは言いたかった。というかメジロの総帥の前で普通に全部叫んだ。

だがイクノの冷静な分析がさく裂した。

目の色から髪の毛の質、表情の同一性、さらにゴールドシップのリョテイに対する態度や呼び方を録画した記録映像まで、リョテイの叫びを全く無視した冷静な説明で、メジロの総帥を説得したのだ。

彼女がリヨテイを見る訝しげな表情は気のせいではないだろう。ついてこないで適当に時間を潰せばよかったとリヨテイは後悔した。

蔵の中は整理整頓が全くされていなかった。

ひとまずイクノとリヨテイは、書類関係をあさり始める。

古文書的な文書には、見慣れない神聖ウマ娘文字で書かれているものが散見された。

「うーん、まったくわかりませんね。リヨテイはわかります?」

「まあ、辞書を見ながらならば……」

ネット上の辞書を見ながらリヨテイが読解を始める。

イクノはこう言った古代文字は一切分からなかったため、もう少し新しそうなものや読めるものに当たり始めた。

マックイーンは、歴代の勝負服からおそらくかなり古いモノであるう、巫女服を見つけ出し着替えていた。

古い文書群をうんうん言いながら翻訳するリヨテイ。

比較的新しい文書群をまとめるイクノ。

そして虫干しと称してファッシュンショーをしているマックイーン。

一人だけ戦力外の中、調査は進んでいく。

夕方までの時間で一通りまとめた後、3人はおばあさまのところに戻るのであった。

「あら、三人とも可愛らしいですね」

戻って最初のおばあ様の感想がこれであった。

マックイーンに駄々こねられて、三人とも昔の勝負服らしい巫女服を着ていた。

動きを阻害しないためか紅袴の丈が異常に短いし、肩出しだし、露出が多くて結構恥ずかしい格好だ。

マックイーンとイクノはノリノリだが、リヨテイは死にたくなりつつあった。

「それで、何かわかりましたか？」

「断片的な情報ならそれなりに。ただかなり推論が入るな、こりゃ」

メジロ家に保管されていた文書は参考になる記載が多くあった。

だが、当たり前なのだがまず用語から統一されていない。

精霊ウマ という表現の他に 巫女 やら 神子 やら 運命のウマ娘 やらいろいろな表現がされている。

さらに比喻表現なのか、一般的な職業を指しているのか、それとも同じものなのかもわかりにくい。

情報は増えたが結局多くを推論で埋めないといけない状況であった。

「確実なのはほとんど60年周期、丙午の年に現れる現象だな。んで、大体5年ぐらいいて、最後はいなくなる。これが共通の現象みたいだ。あとは、女神様から、ウマ娘達を救うとか、未来を変えるとかお告げがあったという記述がいくつかあったりもした。このあたりが共通項だ。イクノの方は何かわかったか？」

「こちらは結局大したことが書いてなくて何もわかりませんでした。ただ、それでは何かと思って海外の事案をインターネットで探してみたのですが…… 都市伝説レベルで似たような言い伝えがあるらしいのは見つけました。未来から来たウマ娘がみんなを幸せにして最後は消える、という話です」

「マックイーンは？」

「イクノさんの巫女服かわいいですね」

「全く役に立たないのはわかった」

「リョテイもかわいいですよ」

「はいはい、ありがとう」

約一名まるで役に立っていないのがよく分かった。

「で、ここからは、精霊ウマが何らかの方法で未来から来たと仮定した場合の仮説だ。タキオン研究所でタキオンとデジタル主導で、未来から来たウマ娘がどうなるか、でさえコンピューターつかってシミュレーションしてもらったんだ」

「それって可能なんですか？」

「わからん。変数が多いからモデルが数パターン出来てしまったって言うってたがな。でまあ、数年かかると消えるというモデルがこれってわけだ」

リヨテイが取り出したのは厚さのあるペーパーだった。

イクノが受け取り読み始める。

「未来から来た者は世界にとって異物なわけだから数年で弾き出されるらしい。で、その弾き出された先だが、何もしていなければ元のところに戻るようだな」

「ふむ。戻るんですね」

「あるように修正されるはずだから、元の場所に戻ろうとする力が働くらしい。だが、大きく未来を変えると、帰る場所がなくなつて、世界から消えてしまうようだ」

「なるほど」

「ちなみにあの、ゴールドシップはどれだけ未来を変えたと思う？」

「……」

他の全員が黙った。

未来がどれだけ変わったか、なんていうことは全く分からない。

だが、ゴールドシップが成したことは数多い。

すでにかなり変わっているのではないかと予想された。

「で、解決方法は？ あなたのことでだからそこまで考えているんでしょう？」

「世界から全部消す、というのはそれはそれで大変なことだ。痕跡ひとつ残らず、なんていうのはかなりエネルギーが必要になる。だから、逆にたくさん爪痕を残せばいいんじゃないやねえかっていうことは考えられるな」

「ふむ」

「消し切れないほど、ゴールドシップのことを世界に刻めばいい。そうすればおそらく、未来に戻ったどこかにねじ込めるはず、というのがタキオンやデジタルの予想だ」

「中途半端じゃなく、ひどく変えてしまえと言う事ですか」



乱暴な理屈だ。

未来を変えれば未来で居場所がなくなる。だが今をとんでもなく変えてしまえばその痕跡を消し切れず、どうにかなるだろうという話のようだ。

「あんまりこういう賭けは好きじゃねえが、わかんねーもんはやってみるしかねー。正直時間的にそう余裕があるもんじゃないだろうからな」

「確かにそうですね」

マックイーンがゴールドシップに出会ったのは入学の時だ。

あれから4年弱。5年程度というならそう時間が残っているわけではない。

「それにメジロのぼーさんも、その方針で動いてるんだろ？」

「そうですね……」

ゴールドシップの公的な肩書はかなりの数がある。

スピカのサブトレーナーだけだったはずだが、トレセン学園の外郭団体で研究部門に昇格したタキオン研究所の所長、トップはアグネスタキオンではなくゴールドシップだ。

他にも高知トレセン学園の理事長職も名目上ゴールドシップにしている。

どちらもメジロから大幅出資している場所なのでそういった地位をねじ込んだ形だ。

肩書だけでなく、どちらでの活動でも大幅にゴールドシップは動いている。特に広報関連ではゴールドシップのほぼ独壇場である。

ユーモアあふれるキャラクターでもあるのでかなり知名度の高いウマ娘として一般的に知られていた。

「じゃあ私も頑張らませんと」

マックイーンが気合を入れる。

マックイーンの前トレーナーとなっっているのがゴールドシップだ。

この前の天皇賞秋の優勝でメジロ家の悲願の達成と報道された時、トレーナーとして一緒にインタビューを受けていた。

スピカのチーフトレーナーである沖野トレーナーには申し訳ない

が、今後もゴールドシップをプッシュしていくために、勝つ必要があると気合を入れなおした。

まずは春の三冠。続いて秋の三冠、最後にはそのまま年始のウインタードリームトロフィーである皇帝をぶちのめして優勝する。

そんな覇道をマツクイーンは目指し始めるのであった。

## 練習

スイーツで脳筋なメジロマックイーンだが、当然練習には非常に真剣である。

ちよつとやり過ぎではないかというぐらいトレーニングをしており、空いている時間にかなり一生懸命スイーツを食べさせないと体重が減ってしまう程度にはハードなトレーニングをしていた。

怪我が心配になってしまふのでしよつちゆう健康チェックをするレベルだったが、そんなマックイーンのトレーニングをうわ回るほどのトレーニングがトウカイテイオーのトレーニングだった。

一応定期的にタキオン研究所で健康診断を受けているので、心配になつて聞いてみたが、今のところ怪我の心配はないらしい。

関節の柔軟性が尋常ではないため、非常に怪我をしにくいのだとか。

ただ、今までのトレーニング内容はかなり偏っているのもあるため内容を多少削り、また変更することにした。

「ターボが勝つから!!」

「あはははは……」

マシントレーニングの周回数を減らし、追加されたそれは併せウマである。

今までテイオーのトレーニングはマシントレーニングメインであつた。

マシントレーニングは筋肉を増やしスピードやスタミナ、パワーを増やすのには非常に効果的で、また、走つて同じだけ鍛えるのに比べて負荷がちいさいので、大半のチームが利用するトレーニング方法である。

だが、テイオーは、そしてルドルフもそうだったらしいが、ほとんどがマシントレーニングで鍛えていたらしい。

未来でもあつた方法だが、欠点が二つほどあつた。

一つはバランスが崩れやすい。部位ごとに鍛えるので、一部が過剰

に鍛えられたり、一部が全く鍛えられなかったりする。そのバランス調整が非常に難しいのだ。

もつともテイオーもルドルフもそういうバランスの崩れは見られないので、よほど良い調整をしていたのだろうか。

もう一つは勝負勘がどうしても鈍るのだ。

走って競うことは、確かにフィジカル的にはマシントレーニングに劣るところが多いが、メンタル的な問題で言う競走意欲が落ちていく。

それでも勝ててしまうルドルフやテイオーが異常なのだ。

だがそんな異常な状態にしくなくても、多少併せて走るだけでいい感じにできるはずである。

という事で併せウマにカノープスからツインターボを借りてきた。

スピカで手が空いているのはスズカぐらいしか今のところいない。

そしてスズカは最初からクライマックスといわんばかりの大逃げで、正直まったく併せられない。あれについていくのはスpegぐらいだ。

ターボも似たような脚質だが、授業はテイオーと同じクラスだし実力差的に、併せるのにちょうどいいだろうとゴールドシップは考えていた。

それに、きつといろいろ学べることは多いだろう。

距離はウッドチップトラックを1周。約1600mである。

よーい、ドンで走り始めると、ターボは一気に最高速に達し大逃げを始めた。

圧倒的スピードで逃げていくターボ。その速度はスズカにも劣らないだろう。

だが、その速度は一周全部は持たなかった。

大体第三コーナーに入ってきたころにはもうバテバテのヘロヘロである。その時点で大きいときは20バ身以上あっただろう差は、直線に入るともう5バ身ぐらいに詰められていた。

最後の直線で追い上げるテイオー。

ウッドチップコースなんてろくに走ったことなさそうなのに、きれいに走るそれは本当に天才的である。

そうして残り200mを切ったあたりで、テイオーはターボに並んだ。

そのままテイオーはターボを突き放すと思いきや、ターボは必死に食いついてくる。

結局ターボはテイオーの末脚に死ぬ気で付いていき、そのままほとんど並んでゴールに飛び込んだ。

ゼーゼー、と荒い息をするターボに酸素缶を注入して呼吸を整えさせるゴールドシップ。

テイオーは意外そうな顔をしてターボを見ていた。

クラシック戦線でもターボのことは見たことが無い。クラスで時々見ていた程度の記憶しかない彼女に最後に粘られ並ばれたのが非常に意外だったのだ。

少し呼吸が落ち着いたターボを抱え上げてからベンチに座らせ、ゴールドシップはテイオーのところへとやってきた。

「どう思いました?」

「簡単に抜けると思ったのに、全然抜けなかった。なんでだろう」

「気持ちの差かな」

「気持ち?」

「ターボちゃんは力を使うのがとても上手いウマ娘ですから」

「?」

「人はだれでもそうですが、後先考えない全力を振り絞るって難しいんですよ。ターボちゃんはそれが上手ですからね」

「よく、わかんないかも」

「今、ターボちゃんは歩くのもつらいほど力を振り絞りました。テイオーちゃんは歩く余力が残っているし、何なら後半周ぐらいは走れると思うけど違う?」

「そうだね」

「ターボちゃんは足りない速さをその余力で埋めたっていうことです

よ」

テイオーもなんとなくわかった。

さっきの自分の走りは油断したりしたわけではないが、本当に100%全身全霊をもって走ったものかといわれると確かに疑問だ。

そういった力を振り絞った差が先ほどの接戦ならば…… 確かに単純な実力ではないところで勝負が決まることもあるだろう。

「じゃあボクももう一周走ってきます」

「え、ちよつと!?!」

そう言われるとテイオーは本気で全力を振り絞ったことが無い気がした。

ホープフルでマックイーンに負けたときも、菊花賞でネイチャに負けたときも、どこかにまだ余力があつた気がした。

一方でマックイーンもネイチャも、勝つたとは思えないぐらいよろよになつていた記憶がある。

二人が持つていて自分が持つていないものがある。ならばまずは練習だ。それを手に入れないときつと二人には追い付けない。

この一周で全力を使い切るつもりで、テイオーは走り出すのであつた。

そうして全力で走つてガス欠を起こしたテイオーは、第三コーナー真ん中あたりでよろよと倒れた。

慌ててゴールドシップが拾いに行つて介抱したが、テイオーはどことなく満足そうだった。

## それは最初の一步

「キタちゃん、本当にごめん」

二人でいつも会っていた神社裏の森の中。

テイオーはキタサンブラックに頭を下げた。

菊花賞の後、テイオーがキタサンブラックにひどいことを言ったという自覚はあった。

テイオーはどうしようかと悩んでいたが、事情がある程度知っているゴールドシップからも謝罪するなら早い方がいいとアドバイスを受けた。

「でも、許してもらえるかわからないよ……」

「謝罪は、許してもらうためにするものじゃないですよ」

「え?」

「もちろんきつかけとなって許してもらえることもあるかもしれない。でも許す許さないは相手の気持ちですから」

「じゃあ、どうして謝るの?」

「決意を示すためです」

「決意?」

「失敗を認め、省みることを誓い、そして先に進む。そんなとても身勝手な儀式なんですよ、謝罪というのは」

「……」

そんなことを言われると、余計テイオーは萎縮してしまった。

テイオーにとってキタサンブラックは大事な相手だった。

傷つけたにもかかわらず、また傷つけてしまう事だけはしたくなかった。

「それでも、あなたはするべきですよ」

「どうして?」

「キタちゃんはあなたのファンだからね。傷つけてしまったからこそ、テイオーの決意を、テイオーの信念を、テイオーの道を見せなきゃいけないわ」

「……」

「キタちゃんはテイオーにあこがれているんだから。皇帝に憧れた、あなたのように」

「……」

サトノダイヤモンド経由で、キタサンブラックの情報はゴールドシップに伝わっていた。

ある程度元気にはなっているようだがどこことなく落ち込んでいるらしい。

場を用意するのはゴールドシップには簡単だ。

あとはテイオーの決意しかない。

「ボク、それなら、言いたいことがある。キタちゃんに、ごめんなさいと、ありがとうを言わないといけない」

「じゃあ、準備するから。今日の夕方ね。ちゃんと何言うか考えておいてね」

「早くない!?!」

そうしてその日の夕方には、いつもの神社の裏の森で、皆集まることになったのだった。

サトノダイヤモンドとゴールドシップが立ち会う中、テイオーは頭を下げた。

そしてそのままテイオーは語り始める。

「ボクはキタちゃんに甘えてた」

「テイオーさん……」

「キタちゃんなら甘やかしてくれるから、キタちゃんなら許してくれるから、そんな気持ちで、この前もひどいこと言った。ごめんなさい」

「テイオーさん、私も…… 調子に乗っていたかもしれない」

「そんなことないよ。キタちゃんはボクを支えてくれた。背中を押してくれた。だからこそボクはここまで頑張れたんだ」

マックイーンに負けたとき、絶望した自分を励ましてくれたのは確かにキタちゃんだっただ。

それがなければ、クラシックに進む気力も起きなかったかもしれない



い。

ここまでこれたのはキタちゃんのおかげだった。

だが、彼女は自分より年下の若い少女でしかない。

これ以上、彼女を理由にするのはきつといけないことだ。

「キタちゃん、ごめんなさい。そしてありがとう。ボクはキタちゃんの期待に応える、強くてかっこいいウマ娘になるよ」

「テイオーさんは、今でも強くてかっこいいです!!」

「ふふ、ありがとう。でも、ボクは今のままじゃダメだと思ってる。キタちゃんを支えられて導けるぐらい、強くてかっこいいウマ娘になりたいんだ」

「テイオーさん……」

「だからボクはもう、ここには来ない。でも、ここでキタちゃんがしてくれたことは、きつと忘れない。ありがとうキタちゃん」

「テイオーさん……」

言いたいことをテイオーは言った。

キタサンブラックがどう思うか、気になったがそれでも変わる気はなかった。

「サトノちゃん」

「なんです?」

「これ、あげるよ」

「……!」

付き添いで来ていたサトノダイヤモンドの手に、テイオーは小さなコインを置いた。

マックイーンファンクラブの会員の証である。1という数字が書かれたそれは、今までテイオーが大事にしている、サトノダイヤモンドが欲しかったものだった。

「ボクにとつて皇帝が強くてかっこいいウマ娘なら、マックイーンは速くて綺麗なウマ娘だった」

「……」

「どちらもボクのあこがれだった。でも、気付いたんだ。憧れているだけじゃ近づけないって。むしろ、逆に遠ざかってるって」

ただ遠くからキラキラしたものを眺める。

それはとても楽しいことだ。

でも、そこに並びたいなら、そこに近づきたいなら。

泥の中を這いつくばってでも、血反吐を吐いてでも、なりふり構わず必死に近づかなければならない。

それが必要だと教えてくれたのは、この前のツイインターボだった。あの必死さが自分に足りないものだった。

それはきれいなものではない。

だが、テイオーはそれを選んだ。これからテイオーが目指す場所は、マックイーンのライバルだ。

だからこそ、テイオーはマックイーンファンであることを、憧れるだけであることを止めた。

「キタちゃん、ボクは春は大阪杯から天皇賞春を目指すつもりなんだ」

「は、はい」

「マックイーンに勝って見せるから…… 応援してくれると嬉しいな」

「テイオーさん！ ずっと応援しています!!」

「ありがとう。キタちゃん」

話は終わった。

いつもより脚は重く、胸は苦しい。

だが、やっと一歩、テイオーは踏み出せた気がした。

## 【100話記念】ゴルシちゃんネル

「ということで、チームスピカの宣伝担当 兼 タキオン研究所宣伝大臣 兼 高知トレセン学園宣伝部長 兼 ブランドヘイロー宣伝執行役員のゴルシちゃんだぞー」

「肩書多すぎません!？」

「だってー、みんながゴルシちゃんに役職押し付けてくるんだもん」

「断ってもいいのでは?」

「ほとんどがお前んところのおばあ様が持つてくるんだが」

「おばあ様あ……」

暇だったのでウマチューブで配信を始めることにしたゴールドシップは、マックイーンと一緒に配信を始めた。

特に何をするか決めてもない、適当な配信である。

「で、配信って何すればいいんだ、マックイーン?」

「私に聞きますの!？」

「だってゴルシちゃんもよくわかんねーし」

「適当すぎませんか!？」

「ということで視聴者からの要望を聞いてみようと思います」

「視聴者ってどなたですの!？」

「ということだふつおたのコーナーだぜ!」

いきなり始まったコーナーにマックイーンはどうしていいかわからなかった。

そしてなぜかいきなり虚空からお手紙が現れ、ゴールドシップの手の内の収まった。

「なになに? ナイスネイチャの投げキッスが見たい?」

「なんでネイチャさんですの!？」

「マックイーン! ネイチャをさらってこい!!」

「仕方ないですわね!」

マックイーンは部屋の窓から飛び出した。

そうして3分後、トレーニングしていたネイチャをさらってきた。「な、なんです!？」

「ネイチャ、カメラに向かって投げキッスをするんだ……」

「いきなりなんです!？」

「ネイチャさん、投げキッスしなければ、ここにいるサトノさんをもちもちに揉みこみますのよ!!」

「きゃー、たすけてー!」

「いったい何が起きているんです!？」

キヤーキヤー騒ぎながら、サトイモを抱きかかえるマックイーン。カメラをネイチャに向けるゴルシ。

ネイチャは何が起きているか全く意味が分からなかった。

結局わけのわからないゴルシちゃん空間にとらわれたネイチャはしびしび投げキッスをするのであった。

「続いてのふつおたは……?」

「続くんですね」

「もちもち……」

「もちもちにしてやりますよ」

ネイチャがサトイモを抱えてもちもちし続けている中、次のお便りがゴールドシップの手に納まった。

「なになに? マックイーンスイーツ早食い競争?」

「スイーツと聞いて!」

「スペちゃん頑張つて!」

スイーツの話をしたらスペとスズカが、大きなケーキをもって部屋に入ってきた。

「スペとマックイーンの大食い対決だ!!」

「根性で、頑張ります!」

「メジロ家の名を懸けて頑張りますわ!!」

二人とも目の前の巨大ケーキにくぎ付けだった。

スタートの合図とともに二人はすさまじい勢いでケーキを食べていく。

最初はマックイーンが先行していたが、途中あまりの量にペースが落ち始めたマックイーン。

そんなマックイーンを最終段でスペが差し切り、先に食べ切ったのであった。

「あ、マックイーン、明日は痩せるため死ぬ気でトレーニングな」

「スペちゃんも、頑張って走りましようね」

「!?!」

当然これだけカロリーを摂取すれば、二人の体重は危険水域である。

明日の地獄のトレーニングが決まった二人であった。

「ということ、ゴルシちゃんネル、どうだったかな？ お別れの曲は、タキオン博士がこの前のホープフルステークスで歌っていたEN DLESS DREAM!!だ。それじゃあまたな」

後ろで必死に腹筋を始めたマックイーンとスペ。

ネイチヤはサトイモをモチりながら、カメラに向かって手を振ったのであった。

## マックイーンの見る光景

マックイーンが学園に戻ってきて、最初に驚いたのはトウカイテイオーについてだった。

軽くウォーミングアップをした後に、テイオーはカノープスのツインターボと併走を始めた。

ツインターボのことはカノープスに一時期いたマックイーンもよく知っている。

個人的に好き嫌いと言えばかなり好きタイプだが、ライバルになるとはとても思えない実力であった。

ところがテイオーと二人でなりふり構わないスタートからの全力疾走をし始めたのだ。

速度はターボの方があのテイオーより少しばかりだが速い。信じられない速度で1000mまで走ると……

ターボはそのままぶっ倒れた。

テイオーは少しだけ遅れてターボを抜き去ると、1周して1600mまでは走り切ったが、やはりそのままぶっ倒れた。

併走とはいったい何だったわけ？ とマックイーンは不思議に思った。

ただ、マックイーンも一つ分かったことがある。

テイオーが、ライバルになったという事だ。

確かに今までテイオーは強かった。

しかしふわふわした信念のない走りに負ける気は毛頭なかった。

今のテイオーを見るとまだ軽い。だが、こうやって全力で他人と走ることを覚えたのは確かだった。

確実な脅威に、テイオーがなってきたのをマックイーンは認めざるを得なかった。

春の三冠、そして秋の三冠はなかなか厳しいものになりそうだ。

マックイーンはゴールドシップを褒めたい気持ちとともに恨めしい気持ちを抱くのであった。

テイオーに対抗するためにマックイーンも新しい方法を考える必要があった。

今までのゴールドシップから発想を得たあれはかなり負担が大きい。

天皇賞秋に勝つのに使ったのは後悔しないが、春のシニア三冠を取るにはあんな方法では体がもたない。

また、コーナーリングや進路変更を器用に行うゴールドシップに比べ、マックイーンはそこまで器用ではない。そこまでマックイーンに向いた走法とは言えなかった。

安定して勝てるようにするために、新しい何かが必要だった。戦法は先行で走るのが無難だろう。

ただ、周りをウマ娘に囲まれ、もまれながら隙を見て抜け出す先行では、集中が必要なあのゴールドシップの走法は少し難しい。

そう考えていくつか試しに走ってみたが、なかなかこれといった方法が見つからなかった。

スズカや最近よくテイオーと走っているツインターボのような瞬間発力はマックイーンにはない。

あれは小柄な二人だからこそこできる加速であり、体格の良いマックイーンには難しい。

メジロだとパーマーが良く逃げをしているが、あれはマックイーン以上に無尽蔵のスタミナをもって押し切るスタイルだ。

安定して勝てる戦術ではなく、マックイーンには必ずしも向いている方法ではなかった。

試行錯誤自体は無駄ではなかった。スムーズな抜け出しや加速のタイミングなどを含め、見直すこと自体はとても有効だった。だがこれといった決め手にはならない。

「何かいい方法ねえ」

「テイオーばかりにかまわないで私にも構ってほしいのですわー！」  
「うーん」

ゴールドシップに相談すると、悩みながらもいくつか手を教えてく

れた。

「例えばネコだましとか？」

「ねこだまし？」

「レース中に、パン、と手を叩いて周りの集中を乱すんだ」

「そう言いながらゴールドシップは拍手を打つ。ぱああん！と良い音がした。

「こうやってほかの参加者の気を散らす方法もあったりする。相手に直接攻撃してないからルール上セーフだ。だが効果がまちまちなのもあってあまり流行らない手だな」

「なるほど……」

「直接攻撃は原則NGだからな。こういう相手に影響を与える方法っていうのは難しいんだぜ」

「ブロックされた時の跳ね飛ばし以外は、基本相手に当たるのはNGだ。

「だからこそ、意図的に相手に影響を与えるというのは結構難しかったりする。

「一つ手を思いつきましたわ」

「どんなんだ？」

「試してみますのでゴールドシップ、併走してください」

「仕方ねえな」

「マックイーンの新しい何かは完成するのか、それは誰にもわからなかった。」



## 閑話 テイオーのスピカ加入歓迎会

テイオーのスピカ加入歓迎会は、今までの歓迎会に比べれば非常に小規模なものであった。

そもそもチーム変更による編入でもあるので、あまり大騒ぎせずにごじんまりとチーム内だけでやるということになっていた。

基本メンタルナメクジなテイオーは、それでまったく文句はなかった。というか歓迎会という時点で若干胃が痛いぐらいだったので、ごじんまりしてほしいと思っていた。

そう、思っていたのだが……

「なんでこんな大騒ぎになってるの!？」

ご機嫌なキタちゃんを抱えながら、テイオーは叫んだ。

「それは生徒会と商店街の交流企画だからです!!」

スペがスペッと胸を張りながらテイオーにこたえる。

会はずでに

生徒会主催 トレセン学園商店街交流祭

兼トウカイテイオースピカ加入歓迎会

になっていた。

協賛にメジロ家やらヒーローブランドやらタキオン研究所やらいろいろなどころの名前が並んでいる。

意味が分からなかった。

「ボクの歓迎会とそれ混ぜる必要あるの!？」

「一石二鳥です!」

「ワケワカンナイヨー!!」

「クラシック二冠のテイオーさんがいるとやっぱり盛り上がりが違うんですよ」

メインの特設舞台では、現在キングヒーローがライブ中である。G1を4勝し今年度最優秀ウマ娘候補の彼女はカノープスの出世頭でもある。

カノープスの面々をバックに綺麗に踊り続けている。

この後のネイチヤのライブの後、テイオーもライブ予定だった。テイオーのライブにはバックダンサーはリギルからグラスワンダーとエルコンドルパサーが出てくれる予定になっている。

スペはほわほわと楽しそうに行事を進めているが、実際はいろいろな力のバランスや評判を気にしながら進めているところもあるのだ。リギルからスピカへの移籍は様々な憶測を生みがちだ。だからこそリギルとは円満に別れたことを最低限アピールする必要もあった。その辺りの調整は、セイウンスカイやグラスワンダーがしていて、スペはほわんほわんしているだけだが。

ライブはネイチヤに負けじと「スピカの威信をかけて！」と張り切ったタキオンがマックイーンの後ろで光り過ぎたせいで、強制退場になったりしたが概ね大盛況で終わるのだった。

その後は

『違いが判るウマ娘格付けチェック』  
も行われた。

最初は大食い企画だったが、予算的な問題と体重的な問題で却下され、代わりに高級品と一般品の両方を食べて高級品を当てる大会になった。

参加者は

一流ウマ娘を名乗るキングヘイロー

メジロ家のご令嬢メジロマックイーン

学園の威信を背負う生徒会長スペシャルウィーク

そしてトウカイテイオーとなった。

第一回戦のニンジン食べ比べだった。

キングヘイローは「味、香り、色、どれも全く違いすぎるわ!」と

言いながら3本2000円の普通のニンジンを選び、

マックイーンは「こんなの簡単すぎますわ!」とやはり3本2000

円の普通のニンジンを選び

スペは「こちらの方がおいしいです!!」と食べなれた3本2000円の普通のニンジンを選び

テイオーだけが「え？ え？」と自信なさげに、おいしいと思った1本1万円のニンジンを選んだ。

第二回戦ははちみつ飲み比べであった。

キングヘイローは「こちらのはちみつがいつも飲み慣れたはちみつの味ですわ」と言いながら1杯500円のはちみつを選んで、ヘイロー家で出されるはちみつは高級品でないことをぼらし

マックイーンは「お代わりくださいまし！」と言いながら安い方はちみつをがぶ飲みし

スペは「こちらの方がおいしいです!!」とやはり飲み慣れた安い方はちみつを選び

テイオーだけがやはり「え？ え？」と自信なさげに、おいしいと思つた1杯10万円のはちみつを選ぶのであつた。

徐々に待遇が悪くなつていく3人を尻目に、テイオーは1人正解を続けていた。

そして最後は、ショートケーキの食べ比べだつた。

違いはクリームやバターがスペ牧場のものか、市販品の差である。

明らかにスペに有利な条件だつたが……

「こっちです!!」自信満々にスペが選んだのは市販品のクリームとバターを使ったものだつた。

「いつもお母ちゃんが作つてくれたのはこの味でした！」と自信満々に述べるスペ

「私の母が作つてくれたケーキの味もこれでしたわ！」と追隨するキング

「良いからお代わりをくださいまし！」と結局安い方がおいしいと言い出すマックイーン

やはりテイオーは自信なさげに正解のケーキを食べていた。

映す価値なし三人組がずた袋をかぶせられる中、一人優勝してしまつたテイオー。

違いが判るウマ娘としてインタビューを受けたが、恥ずかしくなり

すぎたテイオーはキタちゃんを抱えて逃げ出してしまった。

キングは「私は所詮三流ウマ娘じゃけえ……」と落ち込んでウララに慰められ

スペは「貝になりたい……」とズタ袋をかぶって落ち込んでスズカに慰められていた。

マツクイーンは一人余ったニンジンとケーキを食べ、はちみつを飲み干していた。

## 第五章 春の風が吹く 春の風吹くシニア戦線

マックイーンは春のシニア三冠の初戦大阪杯を目指し調整を続けていた。

マックイーンが春のシニア三冠を目指すのに、一番の難関はこの大阪杯だと思っていた。

ゴールドシップも同じ分析をしている。

「マックイーンの強みはパワーとスタミナだ。一方でスピードも一流だが、テイオーの抜けだし速度なんかには劣るところがあるな」  
「そうですね」

「天皇賞春は何と言っても3200m。距離で言っても圧倒的に有利だ。宝塚記念は阪神レース場で再三レースが開催された最終日だ。毎年芝が非常に荒れていてかなりのパワーが必要なレースだ。内回りのコースで直線も短いしな」  
「そうですね……」

「でも大阪杯は3月開催の最終日だからまだ芝はそこまで荒れてない。内回りの2000mだから早めに前に行くのが有利なスピードレースになる可能性が高い」

「テイオーに一番向いたレースですわね」

今年のシニア戦線はそう目立った相手はいない。

自分とテイオーを除けばイクノディクタスか、テイオーがクラシックで競っていたブレスオウんだンスぐらいだろうか。

言いたくはないがあまり脅威になる相手ではない。

ナイスネイチャは有馬記念まで無理をし過ぎたらしく休養中で、現在はキンイロリョテイのドバイクラシック挑戦に付き添っている。春の戦線に出てくる可能性は低かった。

油断するわけでもないし、ほかの参加者もゴールドシップが調べてくれているが、やはり一番のライバルはトウカイテイオーだった。

おそらく無茶をしても勝ちに来るだろうテイオーをどうやって

抑え込むか、どうやって出し抜くか。

天皇賞秋の時のような無茶はできない。大阪杯の次の天皇賞春までは1月もないのだ。

あれをやったら天皇賞春は碌に走れない。

「ひとまずあれを使って、あとは力勝負で十分だと思うぜ。早めの勝負をしていけば、スタミナで勝ってるんだから負けることはないだろう」

「そうですね」

ネコだましからヒントを得たあれは、おそらく一回限りだ。確かにそれなら、一番不利な条件のここで使うべきだろう。

効果があるかないかはわからないが、なければ単なる力比べだ。全力で勝ちに行くのをマックイーンは誓うのであった。

一方トウカイテイオーはスペとスズカと一緒に会議をしていた。

最初はゴールドシップが作戦会議をする予定だったが、さすがにマックイーンと兼任でいいのかという事で、スズカが引き受けたのだ。

一時期同じチームにいたのも気になった理由の一つだった。

スペもさすがに慣れて来たのか、生徒会の仕事を多少抜けても大丈夫なようになってきているようである。

「スペちゃんもスズカ先輩も、大阪杯勝ってるよね？」

「そうね。私の場合、とにかく逃げてるからどこまで参考になるかわからないけど……」

「私も大逃げで勝ちましたし、あまり参考にならないかもしれないです。でも、大阪杯なら先に行った方が有利なレースですよね」

「阪神の内回りは直線も短いから前に残る方が有利だし、大阪杯の季節なら内のバ場が荒れてないから大外からマクするのも難しいわ」

「なるほど……」

コースによって有利不利はかなりあるのだ。

こういう分析を聞くと、逃げてしまった方が有利なようにも思えてくる。

テイオーはどの戦術も使えるので、逃げるのも検討し始めた。

「でも逃げるのも結構大変なんですよね、あそこ」

「そうかしら?」

「スズカさんは最初から速いから気にしないかもしれないですけど、2000mだとスタートしてからすぐ登り坂なんですよ。2200mの宝塚記念以上に先に行く場合はパワーが要りますよ」

登り坂が苦手なスぺは愚痴る。

中山の坂ほどではないが、阪神の坂も非常に急だ。

「じゃあマックイーンはかなり前に行くかな?」

「その可能性も高いかもしれませんがね」

大逃げ、とまではいわないまでも先頭に立って進む必要があるかもしれない。

テイオーもまた、勝つためにどうするか考え始めるのであった。

阪神レース場11R 芝2000m 大阪杯 パドック

大阪杯は例年より参加者が少なく8人しか出走していない。

2番人気に押されたのは2枠2番のトウカイテイオーであった。中性的なカツコよさで人気を集める彼女だが、今回のパドックは少し雰囲気違った。

終始笑顔で、観客に手を振るシーンもあつたりした。

いままでよく言えば冷静、悪く言えば冷徹な部分があつたテイオーだったが、年をまたいでそういった角がなくなっていてファン一同驚きを隠せなかった。

三冠の菊花賞敗北後、精神的ショックを受け復活も難しいなどというニュースも流れていたが、今回のこの愛想のいい姿を見ると皆驚いていた。

テイオーとしてはとても楽しかった。

今までは周りを全く見ていなかったが、周りのみんなは多く応援をしてくれていた。

キタちゃんも一生懸命手を振ってくれていたので振りかえしたらとてもうれしそうだった。

こんな体が軽いのは初めてだった。

応援してくれているみんなのためにも、勝ちたいとテイオーは思った。

1番人気はメジロマックインであった。

いつものように華麗にファンサービスを行うパドックである。

丁寧に手を振りながら、見つけたサトノダイヤモンドにも笑顔を送る。

サトノダイヤモンドはキャーキャーと叫んでいた。



メジロマックイーンは武者震いをしていた。  
今回のレースも負けるわけにはいかない。

しかし、今までと違い、絶対に勝つだけの何かを準備できたわけではなかった。

そういう意味では小倉記念の時とも似ているが、あのとときと違い負けてはいけないという状況であった。

こんな極限状態は久しぶりだった。

そしてこれこそがレースだった。

マックイーンは思い出した。

押し殺されそうなくらいのプレッシャーにマックイーンは、逆に闘志を燃やした。

こういう時に一番重要なのは精神力である。

ウマ娘の場合、単なる生物学的な要素では説明しきれない、不思議な力がある。そして基本的にそれはすべて精神力が影響するのは経験則上わかっていた。

負けたくないという気持ち。

誰よりも速く走ろうという気持ち。

それを自分の中でマックイーンは高めていく。

それはメジロの家を背負うという自負でもある。

それはゴールドシップを助けたという恩でもある。

しかしそれらを含めてなお、一番強いのはただただ勝ちたいというウマ娘の、そしてメジロマックイーンの本能だった。

(トウカイテイオー、あなたは強くなりました。私のライバルとして認めましょう。それでなお聞きましょう。私に勝てると、そう思っていますか?)

心の中でそう尋ねるマックイーン。当然返事は返ってこない。

しかしその答えは、レースでわかる事であった。

イクノディクタスは何かいやな予感をほんの少しだけ感じていた。

何かは全く分からない。

すぐに何か起きそうな直感でもない。

今回8枠8番と大外になってしまった。先行する予定であったイクノにとってこれは非常に不利である。

テイオーもマックイーンも前に行くレースをしてくるはずだ。2番のテイオーと4番のマックイーンに並ぶのも大変だと予想された。

まあそれは大きな問題ではない。

自分が二人に走力で劣るのは疑いようもない事実だ。

南坂トレーナーも勝てば御の字ぐらいの、入着を目指すレベルのレースしか指示しなかった。

勝ち目があるなら貪欲に勝利を目指す一方、勝ち目がないレースも積極的に出るのがカノープスの方針だ。

それ自体は特に問題なかった。

ほんのちよつとだけ引つかかる、この感覚。

そのうち大変なことになるのではないかという、前兆の前兆のような予感。

今はレースに集中しようと、イクノは首を振るのであった。

阪神レース場11R 芝2000m 大阪杯 本戦

レースは皆綺麗にスタートした。

先を切るべく先行したのはトウカイテイオーとメジロマツクインとイクノデイクタスであった。

三人が並んで先行していく。

内側がテイオー、真ん中がマツクイン、外側がイクノで進んでいく。

スタート最初の上り坂で、パワーに任せてマツクインが前に出ようとしたが、テイオーはぴったりとマツクインについていき、内側にはいらせないようにしていた。

テイオーは枠に恵まれていた。

スタートから直線が長い阪神の2000mでは外枠がそう不利なわけではないが、しかしこのように先行バとして先陣を切りたい場合にはやはり内枠が一番有利だった。

テイオーより外枠だった二人は内側に潜り込むことができない。この差はコーナーに於いて走行距離が1m、2mといった差になって現れる。

1mは約半バ身だ。

それだけのアドバンテージをテイオーは得ることができるのだ。

テイオーより前に出る、もしくは後ろへ行くことでそのディスプレイアドバンテージを削ることもできるが、テイオーはマツクインと並走することで内側に潜り込めないようにしていた。

イクノは二人についていくのがやっとだった。

二人の速さはかなりのものであり、ハイペースといえるものだった。できれば前に出たいところだが、二人の走りはそれを許すような速度ではなかった。

かといって後ろに入ってしまうと二人が壁になる可能性が高い。テイオーが外側なら二人の間から割って出ることが可能かもしれないが、外側がマツクインだとまずパワー負けして跳ね飛ばされてしまうだろう。

そんな事情もあり、イクノは一番不利な外側を走り続ける羽目になつてしまつていた。

マックイーンは焦つていた。

テイオーががちり内側をブロックしている。前がふさがれることはないが、これのせいで一人分外側を走らざるを得ない。

そのロスは約1mだが、テイオーと実力が伯仲している現状では1mの差がかなり大きい。

スタミナ的な問題はないが、スピード的に届かなくなる可能性があつた。

ゆさぶりをかけて内側に入ろうとするが、テイオーはこちらの動きに合わせてしつかりブロックしてきた。

このままだとどうしようもないだろう。最終コーナーから抜け出すときにどうにか隙を作る以外、マックイーンには手がなかつた。

第一、第二コーナーを抜け、向こう正面でも、そして第三コーナーに入つても、マックイーンとテイオーとイクノは並走を続けた。

マックイーンは加速減速を繰り返し内に入ろうとしたが、テイオーは完ぺきにブロックし続けた。

マックイーンとしてはスタミナ的な問題は心配はあまりないが、抜け出し時に半バ身差つけられるだろうこの状況で、直線勝負になるのは勝ち目が薄かつた。

だからちようど第四コーナーの三分の二ぐらいのところ、抜け出すタイミングで、マックイーンは決意を込めて、一步を踏み込んだ。

ドゴーン!!!

大きな音がレース場全体に響いた。

震脚といわれる動作である。

強く踏み込むことで地面からの反発の力を使う技法だが、今回の場合はその力利用ではなく、音と振動の利用がメインであつた。

ここ半年ほど死ぬほどリョテイとイクノにさせられた柔軟により、マックイーンの体はかなりの柔軟性を得ていた。

その柔軟性を生かし、足を大きく上げると、そのまま全力で踏み下

ろしたのだ。

その大きな音と衝撃波に、一番影響を受けたのは、隣を走っていたテイオーだった。

テイオーはマツクイーンの様子を全力でうかがっていた。

現状並んだ状況からは、コーナーの外と内の分、テイオーが半馬身分有利だ。

そうしてそんな有利な状況でスパートをかければ、テイオーはマツクイーンに負けるつもりはなかった。

スパートタイミングを誤らないように、マツクイーンに注意を振りすぎたのが、敗因につながった。

空気が震えるほどのすさまじい音に、テイオーは一瞬ひるんだ。それは時間として見たら1秒も満たない。コンマ数秒の時間だっただろう。

しかしそれは、ウマ娘のレースにおいては絶対的な差であった。

なんせウマ娘は1秒で5馬身程度、10mぐらいは進む。コンマ数秒でも数メートルは進むのだ。

大きな音とともにスパートをかけたマツクイーンに対し、テイオーは致命的に遅れてしまうのであった。

すぐに態勢を立て直して全力で追いかけるテイオー。

しかしすでにマツクイーンは三バ身ほど先を走っていた。

ラストスパートをかける二人だが、距離は縮まることもなく、そのままマツクイーンが1位でゴールに走りこむのであった。

## 悔しいという気持ち

「勝てると思ったんだけどなあ……」

ライブ前の控室

G1ともなると、個室が与えられるそこで、テイオーはぼんやりと  
いった。

コース取りも完璧だった。

マックイーンの対応も完璧だった、はずだった。

いや、完璧ではなかったのだ。

ああいう手をあそこで使ってくるのは予想外だったのは確かだ。

だが、マックイーンが、あのまま負ける現状で素直に負けてくれる  
はずなんてなかったのだ。

こういうところがおそらく、ネイチャのような準備を完全にして挑  
む子と自分のようなウマ娘の差なのだろう。

経験の差、知識の差、努力の差。

そういったものが自分とマックイーンの間にあることを感じてい  
た。

キタちゃんが買ってきてくれたコーラを飲み干す。

甘くて少しだけ元気が出た。

キタちゃんは何も言わないで近くにいてくれる。

前に傷つけてしまったときのことを考えて何も言わないのだろう。

少し悪い気がして、抱っこすると暖かった。

「惜しかったわね」

「勝てると思ったんだけど」

「作戦負けだったわね。ごめんなさい」

「そんなことないよ。スズカもスペちゃんもいろいろ教えてくれた  
し、そうじゃなきゃボクもあそこまで勝負できなかつたと思うし」

「……」

テイオーはそういうがスズカは自分が不甲斐なかった。

スズカはトレーナーを目指していた。

自分ではスぺのように人の上に立つのは難しい。

同期のタイキシヤトルのように人を魅せるのも難しい。

同じくマチカネフクキタルのように特殊な技能もない。

そんな中、自分が何をしたいか、何になりたいかと考えたときに思いついたのがトレーナーだった。

誰かを導く、そんな自分になってみたいとスズカは思ったのだ。

テイオーの面倒を誰が見るか、となった時に手を挙げたのはそんなこともあったからだ。

もちろんまだトレーナー免許の勉強中のスズカは名義上トレーナーではない。

だが、スピカのトレーナーもゴールドシップもかなりの部分をスズカに任せてくれた。

ときにはスピカのトレーナーやゴールドシップのアドバイスも受けて自分なりに頑張ってみた。

しかしやはり甘くはなかった。

実力的に見たら、テイオーはマックイーンを上回っていたはずだ。

スパート開始時三バ身あった差はゴール時には二バ身に縮まっていた。

マックイーンの奥の手がなければ、道中の有利も加味すれば最低でも一バ身半の差で勝っていたはずである。

だがあれを読めず、また、そういう場合に備えた対応も取れなかった。

実力負けではない。完全に作戦負けだった。

テイオーがああいう場合に対応力が低めだというのもあるが、それを含めてみるのがトレーナーだった。

最低でもリギルでもスピカでも、そこまでトレーナーたちは対応していた。

「でも、悔しいんだけどさ、ちよつとうれしかったりもするんだ」

「？」

「マックイーンに負けて、悔しいって、今度は勝ちたいって思える自分がいる」

「……いいことね」

「こうやって、一緒に悔しがつてくれる仲間もいる。二人とも、ありがとう」

「次こそは、勝ちたいわね」

「勝てますよ、絶対」

キタちゃんが楽しそうにそういう。

そうだ。祈ってくれる彼女の願いも叶えなければならぬのだ。テイオーもスズカも気合を入れるのであった。



## 焦燥と負けたくない気持ちと

「テイオー、強かったですわね」

レースの翌日。

スピカでワンツーフィニッシュを決めたため、みんなで大騒ぎした翌日。

ゴールドシップと二人、昨日の片づけをしているときにマックイーンは思わずこぼした。

今のマックイーンの実力は有数のレベルである。

ゴールドシップはそう思う。

自分の最盛期だって今のマックイーンだと五分だったと思う。

さらに成長が見込めることも考えれば、ゴールドシップを超えるのではないかと思っている。

そんなレベルのさらに一段上を大阪杯でテイオーは行った。

直線勝負に持ち込まれても勝てる可能性はあると思っていた。

だが、直線直前で一度よれたにもかかわらず、テイオーはマックイーンとの差を詰めてきた。

また、コース取りも完璧だった。内側を完全にブロックされ、不利なレース展開にマックイーンは持ち込まれていた。

そのまま直線勝負になっていたら、マックイーンが完全に力負けしていただろう。

マックイーンのあれは奇術の類だ。

一回やって種が割れば次からはあまり有効ではない。

まったく意味がないわけではない上、最初の加速も兼ねているので次以降も利用するだろうが、あれで次以降勝つのは難しかった。

天皇賞春までは一月も残っていない。

距離適性から言えばマックイーン的能力は長距離向けでありその点は有利だが、テイオーも菊花賞で2着を取っており、決して長距離が苦手なわけでもない。

次もまた厳しい勝負になりそうであった。

「確かに強かったな」

「今回は私が勝ちました。しかし、天皇賞春はもつと厳しくなりそうです」

「そうだな、マックイーンにとっては天皇賞が大事だからなあ」

メジロ家の家訓により、マックイーンも天皇賞を比較的神聖視している。

確かに秋の盾は取ったが、春の盾もまたマックイーンとしては欲しいというのはゴールドシップも理解していた。

「体に負担をかけてでも、追い込みで行くしかないでしょうか」

「マックイーン、それは却下だ」

「負担が大きすぎますか？」

「いや、単純にそれじゃテイオーに勝てない」

「……」

「先ずコースが悪い。天皇賞春は京都レース場だ。アタシぐらいコーナリングがうまければ別だが、マックイーンじゃコーナー前からスパート掛けたら、淀の下り坂の遠心力ですっ飛んで下手すると外ラチにぶつかる。危なすぎて使えるもんじゃない」

京都競馬場は最後の第四コーナーが下りになっている。

なのでその部分は減速するのが鉄則なのだ。

ゴールドシップも菊花賞でロングスパートをしたことがあるが、さまざまにつらかった記憶がある。

ただでさえ自身で加速しているのに、坂での加速度まで加わるのだからその抑え込みは非常につらかった。自分でもよく曲がれたと感心するレベルだった。

ゴールドシップより不器用なマックイーンでは曲がれないと思っただ方がいいだろう。

「もう一つは、テイオーはおそらく潰してくるだろうな。大阪杯であれだけマックイーンを上手くマークしてたんだ。ネイチャの手をまねるのは難しくないだろうな」

距離の問題もある。2000mぐらいなら天皇賞秋のように押し切ることも可能だが、3200mの天皇賞春ではそういうこともできない。

使つても勝てないという風に考えた方がいいだろう。

「つまり、総じて不利、という結論ですわね」

「そうなるな」

「じゃあ私のすべきことは簡単ですわ」

「なんだ？」

「テイオーが他人の真似をするなら、私も他人の真似をしようかと」

「ふむ…… カノープスの皆が手伝ってくれるかね？」

マックイーンは本気なのだろう。

だからプライドも置いて、冷静に分析を始めた。

今までマックイーンは対テイオー2戦2勝である。圧勝しているといつてもいいかもしれない。

しかし、現状では特に抜け出しの速度で負けている。まだトレーニングなどで伸ばす余地があるとはいえ、天皇賞春までは間に合わない。

マックイーンは自身が弱者であることを認めた。

だがそれは負けを認めると同義ではないのだ。弱者でも勝つことがあるのを、マックイーンは一度経験しているのだから。

「そこは最悪、土下座でもしますわ」

「まあ私も頭を下げよう。ダメなら他の手を考えればいいしな」

そんなことをしゃべりながら二人は目的地へと向かう。

会う予定なのはカノープスの南坂トレーナーと、遠征付き添いから帰ってきているはずのナイスネイチャだった。

## 閑話：スペちゃん生徒会長のはじまり

生徒会長は選挙で選ばれる。

だが、実質的な意味はあまりないことが多い。

大体先代の生徒会長から指名された者が次の生徒会長になるのだ。長年生徒会長をやっていた伝説でもあるシンボリドルフが、後任に選んだのがスペシャルウィークだった。

実績的には申し分ない。

シンボリドルフには劣るが、それでもG1を6勝したダービーウマ娘だ。この実績に対抗できるようなウマ娘で、彼女の就任に反対する者はいなかった。

信任投票も特に荒れることなくスペシャルウィークが生徒会長になったのだった。

それはちょうど、スペシャルウィークがキングヘイローに宝塚記念で負けてから3カ月後ぐらいの話だった。

「でも、正直レースの成績なんてどうでもよくないです？」

「たしかにそうだよね」

「人ははつきりわかる指標をありがとうございますから」

スペシャルウィークは自身が生徒会長に選ばれたことにあまり納得していなかった。

先代のシンボリドルフは確かにお堅い雰囲気や言い回しが難しいところがあり近寄りがたいところがあったのは確かだ。だが、彼女はすべてのウマ娘を幸せにするためにいろいろな施策をしていた。

その情熱は本物だったと思っていた。

一方の自分は特にそんなことは考えていない。

楽しく走って、スズカさんと二人で牧場に帰って、牧場を継ぐか、ぐらいしか考えていない普通の牧場系ウマ娘だ。

こんなふわふわな椅子に座らされたって、なんの覚悟もできてない小娘だった。

幸いグラスちゃんやセイちゃんは手伝ってくれると言っているし、先代の時代から副会長だったエアグルーヴ先輩も残ってくれている。

仕事が滞ることはないだろう。

だがこれでいいのかなーということは今でも思うところだった。

「エアグループ先輩が生徒会長になればよかったのに」

「残念ながら私では実績が足りん。あと誰かに責任を取ってもらって好きなことをする方が性に合っている」

「ぶー」

スペシャルウィークは、自分より生徒会長に向いていると思う相手が何人もいた。

例えば今話しているエアグループ先輩。

確かに言葉が強くてちよつとびっくりすることがあるが、基本的に非常に優しい女性だ。

心配りも非常にできる人で、みんなのために動くまさにお母さんだった。

確かにエアグループ先輩の方が生徒会長に向いていると思うのだが、実績が足りないとか言って引き受けてくれなかったのだ。

その辺が非常にもやもやしていた。

他にもグラスちゃんだって、責任感が強くてしっかりしたウマ娘だ。自分なんかよりよほど生徒会長向きだと思う。

なんで自分がこんなところにいるんだろうと思ってしまうのだ。

そうやってぶー垂れてると、エアグループがため息をついた。

「スペ、お前が思う以上に、お前は生徒会長に向いていると思うぞ」「そうですかー、どんなところがですか？」

「お前を助けようとみんなが動く。人望というやつだな。それは先代の会長も、私もグラスもセイも持っていない稀有な素質だ」

「みんな優しいし、私じゃなくても動いてくれますよ」

「はあ、あまり自分を貶すものじゃないぞ。お前を好いている相手への侮辱だ」

「気を付けます」

シヨンボリしてしまうスペシャルウィーク。

しかし仕事はどんどん来るのだ。

「スペちゃん。トレセン学園交流会の企画書、来てますよ」

「ありがとうグラスちゃん」

例えば今度始めようとしているのはローカルシリーズの地方トレセン学園との交流だ。

中央のトウインクルシリーズがレベルが高く、地方のローカルシリーズがレベルが低い、と一般的に言われているが、必ずしもそうとは限らない。

地元を出たがらないウマ娘は一定数いるし、そういった中に素質あるウマ娘もいるのだ。

地方交流を通じて、ウマ娘全体のレベルを上げていくとともに、ローカルもトウインクルも盛り上げようという企画であった。

ハルウララから持ち込まれ、最初は高知トレセン学園との交流イベントが計画されていた。

「スペちゃん、こつちも企画書あがったよ」

「セイちゃんもありがとう」

こつちはこつちで学園内の制度改革だった。

バックのチームやサポーターなどが学園内にいるが、そういった子たちの評価軸が非常にあいまいなのだ。

スピカもタキオン博士はじめ、バックのチームの部分があるが、その辺りの評価も明確でないまま外郭組織としてタキオン研究所までできてしまった。

そういったものを評価する資格制度やレーティングなどを設定予定だった。

現状いろいろな意見が出ているのをセイウンスカイがまとめていた。

「会長、既存のイベント関係はすべてまとめたぞ」

「エアグルーヴ先輩もありがとうございます。これでいいので各委員会にそのまま全部回してください」

「チェックはどうする?」

「予算が例年のままならお金的には問題ないでしょうし、アンケートを取れば質の低下はわかるでしょう。それだけで十分ではないでしょうか」

「なるほど、じゃあ回しておく」

「よろしくお願いします」

スぺの方針は基本丸投げである。最低限のチェック以外は基本何もしない。

先代の会長とは大違いであるが、その分スぺにはある程度余裕があるようにも見えた。

任せて仕事を投げることが出来るスぺは、生徒会長に十分向いているとエアグルーヴは思ったが、これ以上言うのもくどいと思い、生徒会室を後にするのであった。

## 閑話：ゴルシちゃんネル ぱーと2

「ということで、チームスピカの宣伝担当 兼 タキオン研究所宣伝大臣 兼 高知トレセン学園宣伝部長 兼 ブランドヘイロー宣伝執行役員 兼 メジロ家お抱え宣伝員 のゴルシちゃんだぞー」  
「肩書が増えてますわね……」

「前回好評だったから、第二回やるのぜー」

「という事で今回はゴルドシップとわたくしメジロマックイーンとマスコットのサトノダイヤモンドさんでお送りします」

マックイーンがサトイモを抱っこしながら放送がスタートした。

「今回はいろいろお便りが来てるからな！ それも参考にしながらいろいろやつていくんだZEE！」

「で、最初は何をしますの？」

「スペシャルウィークの考えを当てる「スペちゃん王」決定戦だ！」

ルールは簡単。こちらに用意したスペが映っているVTRから、スペが何を考えているかを当てるゲームだ！ ちなみにタキオン研究所から、新開発されたスペの考えが分かる機械、『スペノカンガエヨム』を借りてきたから、判定もイージーだぜ!!」

「なるほど、では参加者の皆さんの紹介です。一枠一番、サイレススズカさんです」

「スペちゃんの隣は譲らない！」

「気合十分ですね。続いて二枠二番、グラスワンダーさんです」

「お手柔らかに、よろしくお願いします」

「その笑顔の裏に隠れているものはなんでしょうか。三枠三番、エルコンドルパサーさんです」

「やつと出番が来ました!!!」

「以上三名で勝負するぜ。という事で早速第一問」

ゴルドシップが合図すると、トレーニング中のスペシャルウィークの映像が流される。

「スペがトレーニング中のシーンだな。何を考えているか当てろ。はい、スズカ」



『走るのとても気持ちいい』とかじゃないかしら」

「ふむ、グラスは？」

『走っているスズカさんカッコいい』だと思いますよ。視線がだれかを追いかけていますし」

「なるほど、エルは？」

『ふっふっふ、ここでダイワスカーレットとウオツカの二人を亡き者にすればスピカ征服計画もまた一歩進むのデース！　ひとまずタキオン印の』……痛いっ！　グラス！　痛いデス!!』

「エル？」

「ぎゃあああああ！　関節が曲がらない方に曲がるうううう!!』

「さて正解は？」

「グラスさんとエルさん、止めなくていいんでしょうか。えっと正解は、『スズカさん、カッコいい』ですね。グラスさん正解です」  
「そ、そんな……　スペちゃんのことは何でもわかってると思ったのに……」

問題を外してスズカはショックを受けていた。

「のろけにしか聞こえねー……」

「あの、グラスさん。エルさんはそれくらいで許してあげてはいかがでしょうか。後、正解の感想もお聞かせいただければ……」

「そうですね、ストレッチはこれくらいでいいかもしれませんね。感想ですか……？」

落ち込んだスズカを見てグラスは告げた。

「落ち込んでるスズカさん、可愛いですよね」

「えっ？」

「まさかの乗り換え上手!？」

「いえ、恋愛的な感情はないですよ。でも、自分に勝った相手が落ち込んでいるのを見ると、こういういろいろ湧き上がってきまして」

「なんか拗らせてません……？」

スズカはグラスに毎日王冠で勝利している。グラスにはそこにかと思うところがあつたのかもしれない。

知りたくない知識がまた一つ増えてしまったマツクイーンであつ

た。

「さて、收拾つかなくなったから次行くぞ、次は人気投票の結果発表だ」

「100回記念と同時にとっていたアンケートでしたね」

「そうだ。栄えある一位はこのゴールドシップ様だったぜ!!」

「三分の一以上の得票ですから、圧倒的でしたわね。さて、お気持ちはいかがですか?」

「みんな、応援ありがとー!! ゴルシちゃんはまだまだ頑張るんだぜー!!」

「続いて、2位は、メジロのおばあ様だぜ!!」

「なんで私より上なんですの……」

「皆さん、投票ありがとうございます。メジロのおばあ様、メジロの総帥ことメジロアサマです。私と彼女の物語は終わってしまっていますが、マックイーンやゴールドシップの物語は今がクライマックスです。皆さんには頑張ってもらいたいですね」

「おばあ様、ありがとうございます」

「3位がメジロマックイーンだな」

「私が2位だと思っていました。普通に負けてちよつと意外でしたわ…… ですがこれからも頑張りますので、皆さん応援よろしく願います」

「4位はアグネスタキオン博士だな」

「粹順の有利もあつたのでしょうか。でもかなり強かったですね」

「ああ、みんなこんばんは。アグネスタキオンだ。まあ私のことなんかどうでもいいんだ。うちのスカーレットかわいいだろう? 私の票はすべてスカーレットに譲るからそうすれば2位ぐらいにはなるだろう?」

「ならないです」

「え?」

「タキオンさんとスカーレットさんの得票足してもおばあ様の方が多いです」

「……なぜだ……」

「予想以上におばあ様強いですね……」

「5位は、ナイスネイチャだな」

「ネイチャさん、お気持ちはいかがですか？」

「いやあ、私みたいなのがこんなところにいるのいいのかなって思っちゃいますね」

「ネイチャさん、そういうネガティブなこと言うと……」

「あ、しまった」

「！！！！ネイチャかわいいー！！！！」

「ネイチャさん応援し隊が来ちゃいましたね」

「わあああああ！！！！」

「！！！！ネイチャかわいいー！！！！」

「説明しよう。ネイチャさん応援し隊は、ネイチャさんご自身ががんばってとてもかわいいアピールをしない限り延々と付きま妥妥かわいいと言いつける組織である。ネイチャ、頑張れ」

「あ、うん、がんばる」

「頑張ってください」

「ちなみに6位がリョティパパで、7位がハルウララ、8位がティオーで9位がキングヘイローだな。で、その次がツイインターボだ」

「この小説らしいと言えばらしいラインナップですね……」

「そうだな。という事でみんな、協力ありがとうなー。ついでにキタサトフアンみんな、入れられなくてすまなかつたなー。お詫びにサトイモモチモチをマックイーンがしておくから許してな」

「もちーん」

「もちーん」

「さいごにふつおたするぜ」

「ではゴルシちゃんネーム『ウルト兎』さんから

ファル子ちゃんの人気を見て、ウマドルグループを作ろうとしているのですが、良い子達ばかりで中々メンバーを決めることができません。ゴルシちゃんはウマ娘を見る目があるウマ娘だと聞いています。ゴルシちゃんおすすめのアイドル性があるウマ娘は誰ですか？」

「なるほどな」

「ゴールドシップおすすめのウマ娘…… 私も気になりますね」

「アイドルなら、ズバリメジロライアンとメジロドーベルのペアだな」  
「なかなか意外なところが来ましたね」

「二人とも可愛らしい乙女乙女した格好に憧れてるからな。かわいい格好させて3人組ユニットになれば完璧だろう。ただしメジロの実家に連れ込まれる可能性があるから初心者にはお勧めできない」

「さすがにそんなことしませんわ…… しない、ですよね……?」

「どうだろうなあ……」

「続いて次のふつおたに。ゴルシちゃんネーム『月影夜葬』さんから

ゴルシちゃんは、別世界線ではシリウスに所属していてマックイーンとチケゾーとライスシャワーと一緒にですが、そちらの世界ではチケゾーとライスシャワーはどうなってるんですか?」

「ライスシャワーはタキオン博士たちの翌年デビュー、チケゾーはさらに一年後にデビューだ。そしてこの話は今年いっぱい終わりでから出てこないZE!!」

「最初はライスさんはスピカ所属で出てくる予定でしたが、完全に予定からなくなっちゃいましたね」

「ライスシャワーファンのお兄様お姉様、すまん!! 代わりにサトイモがモチモチしてくれるから許してくれ!」

「といったところでゴルシちゃんネルもそろそろお時間だぜ」

「お相手は、スイーツ大好きメジロマックイーンと」

「実はお酒が飲める年だけどお酒が飲めないゴールドシップでお送りしましたなのぜ!」

閑話：ファイナーレまではもう少し

「こんなものができるとはですね」

「温故知新というけどね。やっぱり古くからあるものには意味があるって事なんだろうね」

東京郊外の森の中。

たくさんの岩が並ぶ中心に、アグネスタキオンとメジロの総帥はいた。

「しかし、仮定に仮定を重ねるのはあまり科学的ではないから好きではないね」

「でも、あの子のためならその無理を通してくれるでしょう？」

「恩があるからね」

リョテイやイクノからの他メジロ家が雇った歴史学者などからの報告から、ゴールドシップがどういう者か、タキオンは大体予想は付いていた。

ゴールドシップがこのままここで暮らすのは難しいというのも予想できていた。

歴史を変えたはずみはゴールドシップに集まっている。これが限界を超えたとき、彼女はここからいなくなるだろう。

といっても消えるわけではない。どこかへ弾き飛ばされるだけだ。ならばその弾き飛ばされた先を未来、彼女が来た未来に送り出すのが一番だろう。

歴史が限界を超え、整合性を合わせるために戻ろうとする力。

それによって生まれる力はゴールドシップに集まるはずだ。それに上手く指向性をもたせ、彼女を未来に送り出す。

そのための施設がこの遺跡もどきだった。

「この施設に掛かるのは概念的な力だ。だから必要なのは物理的な強度ではなく、歴史の重さに潰されないだけの頑丈さだ。そうするとやっぱり素材は岩になるんだよね」

「そうなのですか」

もしかしたら昔の精霊ウマたちもこういった施設で元の場所に帰

ろうとしたのかもしれない。

それがうまく行ったのか、行かなかったのかはわからなかった。

だが、そういった類の遺跡も調べ、それを参考にしながらタキオンが中心になって作ったのがここだった。

「うまく行きそうですか？」

「ラストダンスは今年のみだろうね。そしてファイナーレは年が明けてすぐぐらい、ちょうど新入生が入ってくる入学式のあたりだろう。現時点でもそれなりに行けそうだけど……あとはレース次第かな」

「歯がゆいですね」

「総帥の力がなかったらこんな施設作れなかったんだから、みんなの力だよこれは」

「そうですね」

メジロのおばあ様がしてきたことは無駄ではない。

こういったことへの金銭的な援助を始め、社会に多くの爪痕を残した。

これはかなりの力になるのは疑いようもない。

だが、根本的な、芯になる部分の力はやはりレースなのだ。

それもゴールドシップ自身が走ってもあまり意味が無い。

ゴールドシップは受け取る側なのだから、彼女を想って走る者が必要なのだ。

例えばメジロマックイーンのように。

例えばそう、自分のように。

その力が大きな力になって、彼女を未来のあるべき場所に送り込めるはずだった。

デビューするかどうかすら迷っていたタキオンがクラシック戦線で戦っている理由はここにあった。

「あなたは三冠を取れそうですか？」

「正直かなり厳しいね。ウオッカ君もスカレット君も強すぎる。あとカノープスのマチカネタンホイザ君も脅威だ。ホープフルに皐月賞は無敗でいけたが、ダービーが越えられるか……」

「……」

「でもね、無敗の三冠。私はあきらめるつもりはないよ」

「……私はあなたを止めるべきなんでしょうね」

「それが親つてもんだらうさ」

ただ勝つだけでは意味が無い。ライバルや強敵と戦って勝つからこそ、捧げるものに意味があるのだ。

ダービーには先ほど挙げた3人も出てくるだろう。

それに勝てないわけではない。

だが、勝つための代償は非常に大きいのだ。

強さとは、才能と努力から出来上がる。

アグネスタキオンの才能は、当代一だとタキオンは自負している。皇帝やテイオー、メジロ最優秀といわれたマックイーンにも負けないどころか勝っていると思っている。

だが、才能があっても勝つのに必要なだけの努力が積み上げられるかという別だ。

科学が発展しても、道具が発展しても、限界はある。

既に皐月賞の時点でタキオンの体はかなり厳しい状況だった。

ダービー出走ですらトレーナーから反対されているのだ。

さらに勝てるだけの努力を、自分ほどではないにしても才能あふれる三人に勝つだけの努力を積み重ねるのは、非常に厳しいのはわかっていた。

熟練のウマ娘である目の前の老人はそれが分かっているのだろう。

だが彼女はタキオンを止めないだろう。

タキオンとゴールドシップを天秤にかけて、彼女は後者を取ったのだから。

それを恨むつもりはない。そういう選択をするだろうからこそ、自分には彼女に声をかけたのだから。

しぼりつけてでも止めるだろうカフェにもスカーレットにも言うていない話だった。

「マックイーン君に任せてもいいんだらうけどね。やはり私は私で、あきらめられないのさ」

「……」

「死ぬことはないさ。そのためのこの勝負服なんだから。やはりゴードシップ君に感謝しないとね」

見上げる月はとてもきれいで、導くように明るく輝いていた。



## 第六章 春の終わり 作戦会議

「おハナさん。都合のいいことばかり言っているのはわかっています  
が……」

「別に気にしなくていいわ。そろそろあのバカへの貸しが返済不能に  
なりそうなら溜まってるだけだから」

スズカが自分の力不足を感じ、相談した相手は東条トレーナーだっ  
た。

スズカは元リギル所属であり、まったく縁がないわけではない。

だが、スズカも今面倒見ているテイオーもリギルから移籍したウマ  
娘だ。

決して東条トレーナーとしても気分が良いものではないだろうと  
スズカは思っていた。

それでもあまり交友関係が広くないスズカにとって、頼れる相手は  
東条トレーナーぐらいしかいなかった。

沖野トレーナーもある程度面倒を見てくれているが、現状彼は彼で  
クラシック組の面倒で手いっぱいだ。

特にタキオンが全くいうことを聞かないという事でよくケンカし  
ている。

医師としてドクターストップをかける立場にいた彼女だが、彼女自  
身の暴走を止める者がいないのだ。ライバルとして走っているダイ  
ワスカーレットにこの情報を流すのは難しい。現状マンハツタンカ  
フエが説得しているらしいがあまり芳しくはないようだった。

そんなこともあり沖野トレーナーにこれ以上頼るのはできないと  
思っていた。

ゴールドシップに頼るのも考えたが、彼女が受け持つマックイーン  
は最大のライバルである。できれば最終手段にしたい。

そう考えるとあと頼れそうなのは東条トレーナーしかいなかった  
のだ。

虫の良い願いだとスズカは思っていたが、東条トレーナーは別段気にしていなかった。

そもそもスズカを引き受けたのもテイオーを引き受けたのも、自分の失敗だったと東条トレーナーは思っていた。スズカはエアグルーヴの、テイオーはシンボリルドルフの強い後押しがあつたため引き受けてしまったが、元来リギルに向いていないタイプのウマ娘だったのだ。

自分の方が加害者であり、申し訳なく思っていたにもかかわらず、こうやって頼られてもともと世話好きな彼女は悪い気はしていなかった。

それはそれとして、相変わらず過労になる沖野トレーナーには心配半分、怒り半分の複雑な気持ちを抱いていたが。

「で、テイオーのレースプランね。天皇賞春、他のメンバーをどう分析してる?」

「天皇賞春は大阪杯よりも相手が増えます。メジロマックインも脅威ですが、ハイペースで逃げるだろうメジロパーマーもテイオーと相性が悪いでしょう。長距離ですからブレスオウんだンスも気になります。最近成長してきましたし、ここに懸けてくるように思います。あとは阪神大賞典を勝ったカミヤクラシオンも注意した方がいい対象だと思っています」

そう言いながらスズカは参加者全員のレースデータをまとめたタブレットを取り出した。

基本的な書式は東条トレーナーと同じものだ。

ちゃんと全員分データがまとめられていて、それによる予想展開まで表示されている。

「で、誰が勝つと思ってる?」

「テイオーが6、マックインが4ぐらいでしょうか?」

「たぶんパーマー、かなりハイペースで逃げるわよ。そのペースの中でテイオーはスタミナ残せる?」

「カノープスのツインターボと練習しているし大丈夫だと思ったんですが」

「マックイーンとパーマーはレースでの対戦経験もあるし、そもそも同じメジロ家だから同じような練習もそれなりにしたことがあるはずよ。でもテイオーはないし、自分が大逃げしたことはあっても他人の大逃げを経験したことが無い。ターボとの経験があったとしても、あの子中距離まででしょう？　長距離のスタミナ任せの大逃げはズいぶんと違うしその点はマイナスに見ておいた方がいいわ」  
「なるほど……」

「とはいえ何もしなければ五分五分ぐらいとみてそう間違いはないと思うわ」

「それで、ここからどうするかが難しくくて」

「ここから先は人によって違うし、センスもあるからねえ……」

あらゆる状況を計算するなんて無理なのだ。

ただ、前提としてどんな展開になりうるか、誰が優勝しうるかを計算するのは非常に大事なことだ。

もちろんここまで丁寧に情報分析することも非常に大事だ。だがそこを前提にどこまで詰められるかがレースプランナーとしてのトレーナーの腕の見せ所である。

おそらくスズカはスズカに適したやり方がある。

自分のやり方を教えるべきか、東条トレーナーは悩んだ。

「ひとまず、スズカはどうすればいいと思う？」

「大阪杯では、テイオーがマックイーンに勝つ方法を考えました。マックイーンにインコースに入られるとどうしてもプレッシャーなんかを掛けられる可能性を考えてマークをさせたんですが結果はあれでした」

「あんな手を読むのは普通じゃ無理だったと思うけどね」

「でも、おハナさんなら読めたでしょう？」

「完全には無理よ。でも、テイオーがそうしてくるのを相手が読めるなら、相手もそれに対抗する手段は用意してくるだろうことは想像できるし、何かするならコーナー抜け出したところだろうという予想はできたわね」

「……？」

「順に想像していきましょう。外枠でマックイーンは不利が分かっている。そうするとどうにか内に潜り込みたいだろうというのは予想するのは簡単じゃない？ で、テイオーが内枠でブロックしてくるのも予想できる。そうすると前か後ろに揺さぶって内側にはいろうとする。でも入れないかもしれない」

「そうですね」

「ここで例えばうちのグラスやエルみたいに足が鋭い子なら後ろに下がって差すという選択もあるでしょうけど、マックイーンは長くて良い脚を使うタイプだから後ろに下がるのは論外。となるとテイオーとお付き合いせざるを得ないでしょう？ そうなったときに打開策として仕掛けてくるとしたら最終コーナー終わりよ。それより後だとラストスパート中だから大したことはできないでしょうし、それより前だと対応されて効果が薄いかもしれないし。特にああいう相手に干渉する系のことをするならそこ以外ないわね」

「なるほど……」

「スズカは大逃げが多かったからああいう手を使う相手と競ったことがないでしょうけど、猫だましとか、場合によっては体当たりとか、いくつか手はあったりするわ。あんな豪快な手段は初めて見たけど」

「不勉強ですね……」

「そういう失敗を繰り返してトレーナーも成長するのよ。悔しいけどね」

「おハナさんもそういう経験あったんですか？」

「ええ、もう、たくさんあったわ」

「……」

「まあ気を取り直しましょう、天皇賞春では他の子はどうしてくると思うっ？」

「前にパーマーが行って、マックイーンも前についていくでしょう。あとは大体後ろからの展開ではないでしょうか」

「じゃあそれをもとにテイオーはどう走るといいと思うっ？」

「先行してマックイーンと競り合うのは微妙でしょうか？」

「微妙ね。枠にもよるけど、マックイーンに逆にマークを受けるわよ。」

他に有力バがいなければ問題ないけど、パーマーにペースを乱されて  
いるテイオーでは対応しきれないでしょう」

「なるほど……じゃあ後ろから、末脚勝負とか……？」

「それもありね。マツクイーンが末脚勝負してくるとは思えないし。  
テイオーがマツクイーンに一番勝っているところだからね」

あらゆるパターンを考慮しながら、二人は話を進めていく。

夜はまだ、長かった。

京都レース場10R 芝3200m 第105回天  
皇賞 本バ場入場

京都レース場はいつも以上の熱気に包まれていた。

メジロマックイーンとトウカイテイオーの対戦を見に観客が例年以上に集まっていたのだ。

そんな中、落鉄により、マックイーンが靴の修理に入ることがアナウンスされた。

ゲート裏で、蹄鉄の修理をしようとするマックイーンにゴールドシップが蹄鉄を持って現れた。

「大丈夫か？ マックイーン」

「落ち着いてますわ。大丈夫です」

「ばっかだな、マックイーン」

「なにするんですの!？」

直す作業に入ろうとしたマックイーンの頭をゴールドシップがぐしゃぐしゃとなでる。

「トラブルが起きて、想定外のこと起きて何も無いわけないだろ？」

「もー、ゴールドシップ！ 髪が乱れてしまいましたわー！」

「よしよし、多少は緊張が解けたかな」

「十二分に解けましたわ!!」

「マックイーン」

「なんです？」

「予想外のこと起きて驚くのも、緊張するのも当然だ」

「……そうですわね」

「その緊張感を上手く使えよ」

「わかりましたわ」

幸い壊れたのは蹄鉄だけであり、勝負服の靴自体に傷はなかった。

蹄鉄を付け替えるだけで、レースは問題なさそうだった。

「頑張つて来いよ」

「頑張りますわ」

マックイーンはそれだけ告げて、ゲートへと戻っていった。

待たされているテイオーは、落ち着いていた。

今回の作戦についてはスズカとよく話し合って決めた。

スズカはどうかやおハナさんと相談していたらしい。

テイオーとしては少し怖かったトレーナーさんだが、結局恩を仇で返すような形でチームから離れてしまったので、とても悪い気がしていたが、それでも協力してくれるのはありがたかった。

昔より、レースのたびに考えることは非常に増えた気がする。

皐月賞やダービーの時は何も考えずに走っていた。

菊花賞の時やホープフルステークスの時は何も考えないで走って負けた。

この前の大阪杯は考えたが負けた。

だが、その方が楽しかった。

今回はもつと考えた。

勝てるかどうかはわからない。

今回のレースは長距離でマックイーンにとって有利な距離だ。

しかし全力を尽くそうとテイオーは気合を入れたのだった。

ちようにど蹄鉄をつけなおしたマックイーンが戻ってくる。

その眼には闘志が宿っている。

負けたくないとテイオーは思うのであった。

メジロパーマーは考えた。

どうすれば勝てるか。

今回のレースの参加者の中で自分が一番なのは何か。

それを考えると答えは一つ、スタミナだった。

マックイーンにはパワーもスピードも負けている。

テイオーにはスピードで大きく負けている。

同じところからスピード勝負になったら確実に勝てない。

しかしスタミナ勝負になればどうなるか。パーマーはスタミナ勝負なら、テイオーはもちろんマックイーンにも負けるつもりはなかつ

た。

今夏は3200mというロングディスタンスだ。

天皇賞はメジロ家の悲願であるが、メジロはマツクイーンだけでは  
ないのだ。

パーマーもまた、勝てる方法を考え、この勝負に挑んでいた。

参加者は皆、そのウマ娘なりの戦略を練ってこの場に挑んでいた。  
それがすべて合わさった時に何が起きるのか。

答え合わせはすぐそこまで迫っていた。



京都レース場10R 芝3200m 第105回天皇賞 本戦

マックイーンの落鉄トラブルにより少し遅れてレースは始まった。シニアの天皇賞春ともなると参加してくるウマ娘は皆歴戦のつわもの達である。

アクシデントでも動揺することなく、皆一斉にゲートから飛び出した。

先頭を切るのはメジロパーマーだった。

独特な、頭を高く上げる走りで先頭を切って走っていく。

それに続いてメジロマックイーンが前に行く。

体格が良い分、若干脚にずぶさがあるマックイーンはあまり先頭から離されたくはなかった。

そうしていつもマックイーンがいるあたりに、場合によってはもつと前に行くことがあるトウカイテイオーが、しかしマックイーンの周りに見当たらなかった。

マックイーンが見回すと、テイオーは後方集団の外側につけていたのであった。

「あいかわらずマックイーン先輩、かつこいい走りですね」

「そうね。のびのび走れているし、良いんじゃないかしら？」

「マックイーンさん、がんばれー!!」

天皇賞に二人も出走しているのもあって今回はスピカ総動員で応援に来ていた。

スカレットとウオツカが目を輝かせながらレースに集中している。

ゴールドシップの肩の上で、サトイモが一所懸命応援していた。

「テイオー君、今回後方待機なんだね。これも予想の範囲内かな？」

「ゴールドシップ君」

「あんまり想定していなかった展開ですね。タキオン博士」

テイオーは先行策で来ると予想していたゴールドシップとマックイーンは、カノープスの人たちも交えて徹底的にマーク戦術を習得する練習をしていた。

だが完璧に肩透かしを食らった形だ。後方待機するテイオーに対して、マックイーンではマークして対抗するのは難しい。

残念ながらマックイーンの末脚はそう鋭くないのだ。脚を溜め切ったテイオーの末脚には追いつけないだろう。

その場合の作戦も考えているが、それはテイオーをフリーにしてしまおう。

展開がますます読めなくなっていくた。

マックイーンの今日の予定はテイオーへの徹底マークだった。

しかしテイオーが後方待機戦略を選んだため、完全に肩透かしを食らった形だった。

その場合は前にできるだけ行ってセイフテイリードを守る作戦の予定であった。

さてどうするか。一瞬だけ悩んでいると、パーマーが少しだけペースを落としてマックイーンに並び、マックイーンを一瞥した。

パーマーが煽ってきたのだ。

マックイーンは京都大賞典で逃げあつて競い、パーマーを競いつぶしている。

あの頃のパーマーと今のパーマーは実力も、そして気合も違った。

あの一瞥はついてこれるか、という挑発だ。

メジロの3人の中では温厚な彼女からの、珍しい挑発だった。

パーマーはマックイーンにとって幼いころから共に育ち、共に練習してきた幼馴染だ。

最近メジロ家で時々会うことがあるぐらいで、あまり交流がなくなってきたが、気心知れた相手だ。

そんな相手が勝負を挑んできたのだ。

マックイーンに引くつもりはなかった。

レース展開としても、こうなつた以上できるだけテイオーからリー

ドを取るべきであるのもある。

マックイーンはパーマーに一瞥し返すと、徐々に加速していく。ロングディスプレイスタンスとは思えないペースでの潰しあいが始まった。

「ペース、速いですね」

「そうだな、1000mで60秒前後だ。どれだけ速いんだ……」

通常天皇賞春の最初の1000mは62秒前後だ。

だが、今回逃げウマ娘二人で競い始めたせいでペースがかなり速い。

あまりのハイペースに後続集団もどんどんばらけてきている。

「テイオーさん、頑張れー!!」

「スズカ。テイオーは直線でどこまで追い込めると想定してる?」

「前のパーマーとマックイーンの二人が完全にばてているなら12バ身、2秒分ぐらいまでは詰められると思います。スタミナが残って抜け出すなら半分ぐらいですね」

「なるほど、だからこのペースだと前は完全に崩れると読んで、10バ身ぐらいの距離でキープしてるわけか」

沖野トレーナーはキタサンブラックを肩車しながらスズカにレースでの想定を尋ねる。

おハナさんの助言を受けたスズカはすらすらと想定していたものを語った。

「テイオーさんの末脚なら確かにそれぐらいの差でもとどくと思います。…… 最後まで脚が残りますかね……」

「……それはわからないわ」

テイオーは先頭から10バ身ぐらいの距離をキープしながら走っていく。

絶妙な距離感覚であり、作戦通りでもある。

だが、作戦と違うところもあった。ペースが速すぎるのだ。

こんなハイペースをスズカも誰も想像していなかった。

誰が最初にゴールに飛び込むか、予想ができなくなってきた。

2分2秒台で2000mを通過するマックイーンとパーマー。

天皇賞秋でマックイーンが勝ったときとそう変わらないペースで二人が走り抜けていく。

後続は完全にペースを乱され、追いつけないぐらい遅れてしまった者も出ていた。

そんな中、着々と相対的な位置取りをキープし続けるテイオー。

京都のカーブは坂があるため、スパートをかけるなら下り坂の終わる少し前からだった。

そこまでできるだけ力を残しながら、テイオーはペースを維持し続けるのであった。

第三コーナーの坂を上り、第四コーナーの下り坂を勢い任せに下る。

そのまま直線に入る頃には、マックイーンもパーマーもスタミナが完全に切れていた。

だがすでに後続の大部分が大きく後れ、今からスパートしても届かない位置にいた。

京都レース場はコーナーの坂の関係で早仕掛けがむずかしいのだ。直線は長いとはいえ、一定以上リードを取られてしまうととても追いつけるものではなかった。

そんな中、絶妙な距離を確保しつつ追いつがっていたテイオーが、第四コーナーの坂を利用してスパートを仕掛けた。

すさまじい勢いで追いつけていくテイオー。

前との差が、10バ身、9バ身、8バ身と徐々に縮まっていく。

最後の直線の半分。残り200mの時点で、テイオーと前二人の差は3バ身ほどまで詰まっていた。

前二人は既に執念だけで走っている。とても再加速ができる状態ではない。

このまま差し切ろうとするテイオー。

だがしかし……彼女のスタミナもこの時点で尽きていた。

結局同じ距離を維持して走るとなれば、最初以外は前と同じ速度で

走らないといけない。

一定距離を維持し続けたため、テイオーもかなり消耗してしまっており、直線全部でスパートをかけるだけのスタミナが残っていないかった。

負けたくない!!

そんな気持ちで精神力を振り絞りながら走るテイオー。

しかし、スパートをかけたときのように脚が動かなかった。

背中に手が届く距離まではそれでも詰め切ったが、そこが限界だった。

マックイーンとパーマーがほぼ並んで、ゴールに飛び込んでいった。

## 宴の後に

「テイオー、大丈夫?」

京都での祝賀会后、一泊することになりスピカの面々は京都市内の旅館に宿泊することになった。

費用はゴールドシップがどこからともなく調達してきた資金があるらしい。

テイオーは、スズカとキタちゃんと同じ部屋に泊まっていた。

マックイーンの優勝祝賀会后、汗を流して落ち着いたところで、キタちゃんの頭を乾かしながらスズカはテイオーに声をかけた。

マックイーンの優勝祝賀会という事で、メジロ家からもお金が出てとても楽しく、また美味しいものが多い会だったが、負けたテイオーのことがスズカは心配だった。

見ている限り、とても楽しんでるように見えたが、感情を押し殺していないか、本当はつらいのではないか、そんな心配ばかりが浮かんでしまっていた。

手招きするとテイオーは素直によってきて、そのままスズカに膝枕された。

キタちゃんはテイオーの上のにしかかった。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ」

「本当? 無理してない?」

「んー、そうだねー」

仰向けになったテイオーは胸に乗つかるキタちゃんを持ち上げた。

そんなこんなで謎の姿勢になりながら、テイオーは話を続ける。

「悔しくないかといわれたら凄い悔しかったよ。でも、レースが楽しかった」

「楽しかった?」

「今まで周りあんまり見てなかったなーって思った。マックイーンがすごいのもいつものことだけどき、あの前を逃げてたパーマーもすごかったし、カミノクラシオンの後ろからの追い上げもすごい圧力だったし。ああやってマックイーンと離れて走ると、いろんなものが見え

てき、それで楽しかった」

「そう……」

「でも、次は勝ちたいなあ」

「勝ちましょう、絶対に」

「そうだね、頑張ろう」

「テイオーさん、頑張ってください！」

「キタちゃんもいつもありがとう」

テイオーがギューツとキタちゃんを抱きしめる。

次こそは、次こそは勝ちたいとスズカは思った。

「マックイーン君？」

「なんですかタキオンさん」

「ちよつといいかな」

風呂に入りに行くところで、マックイーンはアグネスタキオンに呼び止められた。

ゴールドシップとサトノダイヤモンドは先に風呂に行つて、時間がかかりそうなら先に部屋に帰っているというので、タキオンと二人、川辺のバルコニーに出て座った。

周りには誰もいなかった。

「ゴールドシップ関連のことですか？」

「いや、それは全部君のおばあ様任せさ。何かあればおばあ様経由でそちらに情報は伝わるはずだ。聞きたいことがあるなら答えるが、特に私から言うことはないよ」

「じゃあ何でしょうか？」

「脚の調子は大丈夫かい？」

「……問題ないですわ」

「……」

「……宝塚記念までは走れますわ。夏を休めば、秋も行けるでしょう」  
「正直言えば、やめておいた方がいいと思うよ。疲労がたまりすぎて  
いる。今日も、前回もかなり無理してるだろう？」

「ここで止めるわけにはいかないのですわ。あなたと一緒に」

「……」

タキオンが日本ダービーに出走を決めるときもひと悶着あった。脚部不安があるタキオンのダービー出場を沖野トレーナーが反対したのだ。

かなり大騒ぎして、どうにかタキオンの出場を認めさせた経緯がある。

スピカはげがに關してはかなり敏感だ。

マックイーンのレース後検査は悪いものが出そうだとタキオンは薄々感じていた。

まだ故障はないだろう。

だが次のレース、宝塚記念に万全の状態で出れるかは怪しいのではないかと思っていた。

しかし、タキオンは察していた。

マックイーンも回避するということはありえないだろう。たとえば脚が砕け、二度と歩けなくなる可能性があったとしても。

「データはちゃんとゴールドシップにも見せるから、マックイーンから説得するんだよ。私は口利きまではしないからね」

「大丈夫ですわ。絶対に譲りませんから」

それは説得じゃなくてごり押しではないだろうか。タキオンは思ったが、自分も同じようなことをしたので文句が言えなかった。

自分も、彼女も不器用だな。

そう思いながら、タキオンはマックイーンと別れるのであった。



## 春の終わりまでに後少し

マックイーンに脚部不安の気が出ているというのはタキオン研究所から報告を受けた。

天皇賞を春秋制覇したのだし、春期の残りは休みにしたいのだが、マックイーンが宝塚記念に出るのを非常にこだわっている。史上初の春の三冠を取るのだと鼻息が荒いのだ。

ゴールドシップとしても、まったく無理をするなどは言わない。勝負というのは多かれ少なかれ無理をするものだ。

これが天皇賞だったらゴールドシップも無茶を承知でゴーを出しただろう。

だが、ここでマックイーンが無理する理由がほとんどない。何度も話し合い、場合によっては大げんかまでしたが、マックイーンは宝塚記念に出るという意思を曲げなかった。

マックイーンはそもそもそこまで体が丈夫なわけではないのだ。

特に腱関連については、未来でもそうだったし、現状出ているデータにおいてもあまり丈夫ではない。

このままだと屈腱炎や繋靭帯炎などを発症しかねない。

タキオン博士の研究で、幹細胞移植などの治療方法が確立しているとはいえ、一度やると復帰まで半年は最低でもかかるし、トレーニングもできない関係上実力も落ちてしまう。

宝塚記念を回避すれば、夏休暇を挟んで来年の天皇賞秋まで半年近く休みがとれる。

だからこそ宝塚記念の回避は必須だと思ったのだが、マックイーンは「絶対に嫌ですわ!!」と一切自分の考えを曲げなかった。

なぜマックイーンがそんなに切羽詰まった様子なのか、ゴールドシップには理解できなかった。

最悪、トレーナー権限で出走回避という手もないわけではない。

レース申請はトレーナーの権限だ。ゴールドシップが出走を取り消してしまうことは可能なのだ。

未来でのマックイーンの引退原因は繋靭帯炎だ。できれば歴史を

繰り返したくはない。

ゴールドシップがいた世界と、現在の世界では大幅に変わっているのは確かだ。

繋靱帯炎が不治の病だったゴールドシップの過去の世界と、時間がかかるが確実に治るこの世界では、怪我の重さが違うのだ。

スズカのやった粉碎骨折のように、レース中に事故が起きる類の怪我ではない、そうマックイーンは主張していた。

ゴールドシップとしては無理やり出走を取り消すのだけは避けたかった。

沖野トレーナーも最終的にはリスクを全部マックイーンに説明したうえで説得してくれているがマックイーンは頑として首を縦に振らなかった。

「おい、スカーレット!!」

「何よ」

「お前、なんでダービーでねえんだよ!!!」

日本ダービー。

ウオツカのあこがれるレースであり、一生に一回しかチャンスがない、日本有数の大レースだ。

桜花賞でダイワスカーレットの2着に敗れたウオツカだったが、ティアアラ二戦目のオークスには参加せず、ダービーに参加するのは既定路線だった。

そこには当然無敗の貴公子であるアグネスタキオンも出走する。

あれだけタキオンと競うことにこだわっていたスカーレットだ。自分とタキオンが参加する以上、ダイワスカーレットもダービーに参加するとウオツカは思っていた。

なのに、スカーレットが選んだのはティアアラ三冠の二戦目、オークスだった。

意味が分からなかった。

トレーナーが止めたのか、と一瞬思ったが、ほかのチームならさておき、スピカではそういうことをするとは思えない。

現に沖野トレーナーに確認したが、彼自身、スカーレットはダービーに出るものと準備していたらしく、オークスを選んだことに戸惑っていた。

絶対何か無理している。

親友として、捨て置きなかつたウオツカはスカーレットに怒鳴り込んだのだった。

「私は無敗のティアアラ三冠を取るの。あとチーム的にも分散した方がいいでしょ。だからダービーは出ないわ」

「そんな建前の話なんて聞いてないんだよ!! この機会逃したら、タキオンさんと一緒にいつ走れるかわからないんだぞ!!」

「わかってるわよ。ダービーを逃したら、二度と走る機会はないかもしれないわね」

「!? スカーレット、何を知ってるんだ?」

タキオンの脚部不安の話は、タキオンもトレーナーも二人には話していない。

同じチームとは言えライバルであるし、タキオンが伝えるのを嫌がったのもある。

だが、タキオン研究所に頻繁に出入りし、マンハッタンカフェとも付き合いのあるスカーレットはその事実にとどり着いていた。

「タキオン先輩。結構脚の状況が良くないらしいわ。ダービーは出れるけど、その後どうなるかわからないって、デジタルさんも言ってたし」

「じゃあなんでダービーに出ないんだ?」

それならば意地でもダービーに出る方向になりそうだが、なんでもないことになったのだろうか。ウオツカは余計に混乱した。

「カフェさんと一緒にね、いろいろ調べたのよ」

そもそもタキオンが目指すのはウマ娘の可能性の先であり、個別のレースにこだわりがあるわけではない。

だから無理せずタキオンにあったペースでレースに出ればいいのに、タキオンはかなり無理をしていた。

そうしてタキオンをストーキングしてまでスカーレットとカフェ

が突き止めたのが、謎の遺跡とメジロ家とのつながりだった。

メジロ家へ面会を申し込んだり、関係が深そうなカノープスのキンイロリヨテイやイクノディクタスに話を聞いたりして情報をまとめた結果、たどり着いたのがゴールドシップのことだった。

ゴールドシップを想って、タキオンは頑張っているというなら、スカーレットもまた同じように頑張ることにしたのだ。

ゴールドシップに恩があるのは別にタキオンだけではないのだ。

「そこまで言うなら止めないけどさあ」

「腑抜けたこと言っていないで、あんたにも重大な仕事があるんだからね」

「なんだよ」

説明を聞いたウオツカは納得したような、納得していないような顔をする。

そんなウオツカにスカーレットは告げた。

「あんたは、タキオン先輩に勝たなきゃいけないんだから。タキオン先輩の気持ちを継いでダービーで勝って、菊花賞にも勝って行かないきゃ、タキオン先輩が安心して休めないじゃない」

「無茶いうなあ」

スカーレットが一方的にウオツカの予定を指定してきて、ウオツカは面食らった。

ただ、それくらいの方が分かりやすいのは確かだ。

自分は遊びでダービーを目指しているわけではない。勝つために勝負するために出るのだ。

結局それが何にどう作用するかはよくわからなかったが、ゴールドシップに世話になったのは自分も同じだ。

「俺がタキオンさんに勝って、スカーレットに勝っても泣くなよ」

「それは勝ってからいいなさい」

運命の時までの時間は、着々と進んでいた。

## アグネススタキオンの東京優駿

東京競馬場で行われる日本ダービー

もつとも幸運なウマ娘が勝つといわれるこのレースに、今年もまた、多くの観客が集まっていた。

一番人気には皐月賞ウマ娘であるアグネススタキオンが推された。

今までのレース結果を見ても実力的にも圧倒的であり、無敗の二冠目はまず間違いないと思われていた。

対抗する二番人気はマチカネタンホイザだった。

今まで重賞では二着ばかりで一着にはなれていないが、あの「カノープス」のウマ娘だ。

何かしらの方法で、どんでん返しをしでかすのではないか、という期待をするファンが一定数いた。

ウオツカは三番人気であった。ジュベナイルフィリーズを勝利したG1ウマ娘だ、今まで戦ってきたのがテイアラ路線であり、二人には劣るのではないかというのがもっぱらの噂だった。

スピカのメンバーは皆観戦に来ていた。

いつものように応援である。

わいわいと、今回のレース展開を皆で予想していた。

「アタシはやっぱりタキオン博士が勝つと思うな」

なんだかんだ言ってもアグネススタキオンファンのゴールドシップは言った。

実力的にもアグネススタキオンは当代一である。

ゴールドシップの予想は無難であり、また一般的なものだった。

「私はマチカネタンホイザさんが勝つ可能性もあると思いますわ」

「カノープスのみんな、怖いからボクもその可能性はあると思うな」

マックイーンとテイオーはマチカネタンホイザの名前を挙げた。

二人ともカノープスと縁があり、マチカネタンホイザのことをよく知っている。

実力的には確かに劣るが、自分の実力が分かったうえで勝ちに行く

レースをするのがカノープスだ。

痛い目にあっている二人や、同じチーム所属のキングにしてやられたスペなども同じような意見を述べていた。

大勢の予想は大体そんなところだろう。

そんな中、スカーレットははつきりと述べた。

「勝つのはウオツカよ」

「ん？」

「ウオツカが勝つ以外の未来が見えないわ」

「スカーレットはウオツカ推しか。タキオン博士じゃないんだな」

「タキオン先輩は確かに強いわ。マチカネタンホイザさんの強さもよくわかってる。でも今日のレース、勝つのはウオツカしかいないわ」

そんな風に断言するスカーレット。

普段以上に強い断言に、チームメンバーも一瞬黙ってしまう。

ゴールドシップが笑いながら、話をトレーナーに振った。

「トレーナーはどう思うよ」

「このタイミングで聞くかよ。そもそもうちのチームから二人出てるからな、どっちかが勝ってくればいいんだが」

「そりやそうだけどさ、トレーナーの意見が聞きたいんだよ」

「うーん、それじゃあまあもうレース始まるし言うけどさ」

「おう」

「スカーレットと同意見だ」

ゲート入りも、スタートも特に問題なく、レースは始まった。

いつものように好位置をキープし続けるアグネスタキオン。

いつもと異なり好位置をキープするタキオンをマークしたマチカネタンホイザ。

そしてウオツカは最後方の内側で様子をうかがっていた。

「ウオツカさん、大丈夫でしょうか？ 内側につけちゃって」

スペが心配そうにそう言った。

ウオツカが最後尾につけるのは珍しい手ではない。鋭い末脚が彼女の特徴だ。

だからこそ一番後ろにつけるのも作戦としてありうる。

だがその場合、直線では大外に出ることが多い。内側だと詰まってもちろん内側ならではの有利はある。なんといつてもコーナーでの距離のロスが内側はない。

場合によっては10m以上多く走らねばならなくなる大外は距離だけでも不利なのだ。

そんな厳しいところを、ウオツカはついて走っていた。

アグネスタキオンはマチカネタンホイザからのマークに苦戦していた。

本来マークというのはいくつかの目的があるが、今回タンホイザが仕掛けたのは、好位置をキープすることで相手に負担をかける方法だった。

当たり前だがウマ娘は他のウマ娘と重なることはできない。

だから、一番いい所を先に走られると、自分がいい所を走れないのだ。

自分が良いコースを走り、相手にはよいコースを走らせない。

かなり高等テクニクだが、タンホイザはタキオン相手にそういったことを行っていた。

現在、タキオンとタンホイザは2番手争いの位置だ。

確かに道中のレース運びでは非常に苦戦している。

だが、それでもタキオンは負ける気がしなかった。それに、ゴールドシップのためにも負けるわけにはいかないのだ。

第四コーナーを回るタイミングで、コーナーの遠心力を使って外に出る。そのままタキオンはラストスパートを仕掛けるのであった。

タンホイザの走りはここまで想定範囲内だった。

ここでタキオンが外に回って並んでくるのもまた想定内だった。

そして、これ以上は何も策はない。

道中は有利に運べ多分スタミナ消費は相手の方が多いだらう。

だから勝てるわけではないのは、タンホイザもわかっていた。足りない分は、あとは根性でどうにかするしかない。

ただただ、タンホイザは必死にラストスパートをかけ始めるのであった。

直線に入ったウオツカはバ群に完全に囲まれていた。大内を走っていた故に外に逃げるのも厳しければ前も詰まっている。

このまま前に行けないと観客のだれもが思った。

しかし、ウオツカはそこから前に進み始めた。バ群の隙間を縫い始めたのだ。

これは言うが易し、行方は難しの典型的な行動だった。

ウマ娘同士、走るときは一定の間が空いている。

当たり前だが常に接触しかなれないような距離で走るのは危険なため、本能的に一定の距離を取って走るのだ。

ウマ娘一人分あるかどうかともわからない、そんな隙間をウオツカはくぐり始めたのだ。

しかも全速力で。

当然下手に他のウマ娘にぶつかれば事故になりかねないし、失格にもなりかねない。

そんなギリギリのことをするウマ娘などまずいなかった。

そんな常識にウオツカは挑戦したのだ。

抜群の空間認識力と身体感覚でウオツカはそんなギリギリを、ぶつかることなくすり抜けていった。

そうしてそのすり抜けた速度のまま、最短ルートを取って前を走る二人を追いかけ始めるのだった。

タキオンは焦っていた。

このまま一気に抜け出せると思っていたにもかかわらず、タンホイザを引き離せないのだ。

必死に走るその表情はすでに限界に来ているように見える。

事前データから言ってもすでに限界を超えていると思う。



現に若干ふらついており、まっすぐ走っていない。にもかかわらず速度が落ちない。

突き放したいのに完全に追いつがられていた。

このままどうにか引き離そうとタキオンが最後の力を振り絞ろうとした瞬間。

二人の間を一陣の風が吹いた。

「嘘、だろ」

黒い風が一気に二人を抜き去った。

その速さは絶対的であり、並んで走る二人にも追いつがることができないものであった。

ラスト1ハロン。あとは彼女の背中を追うことしかできなかった。

ダービーは、ウオツカが見事制したのであった。

## 継る想い

「お疲れさまでした」

「ああ、本当に疲れたよ。まさか彼女に負けるとは思わなかったよ」

学園の裏山で寝転がるタキオンに声をかけたのはメジロマックイーンだった。

「ところでゴールドシップは？」

「スカーレットさんとウオツカさんにつかまって今頃大騒ぎしていると思いますわ」

「なるほど」

「で、タキオンさんはずいぶん落ち込んでるように見えますが」

「負けたからねえ。いや、負けると思っていないのに負けたから、だね」

「ウオツカさん、速かったですね」

マックイーンから見ても驚くほどの末脚だった。

しかもあのウマ娘集団後方からのすり抜けである。魔法か何かかと思つた。

進路のロスが減らすことがスタミナとタイムのロス、さらには速度のロスが減らすことにつながり、あの末脚につながったのだろう。

彼女の本当に奥の手だったようだ。

あんな芸当できるのは本当に彼女だけだろう。何でもできる器用なゴールドシップですら、「絶対無理」といったテクニクであった。

「あの後控室で、みんなに怒られたよ」

「みんな？」

「ウオツカ君と、スカーレット君と、あとカフェだね」

「仲良しですわね」

「そうだね、私にはもつたないぐらいの友人だよ。みんな」

「そんなことないと思いますけど。それで、何を言われましたの？」

「もつと自分たちを頼ってほしい」って言われたよ。ゴールドシップのことも、私が何で走っていたかも、全部ばれていたらしい」

「ふむ……」

ゴールドシップが居なくなることや、ゴールドシップを未来に無事

帰そうとしていることは別に秘密なわけではない。

だが、不思議な力でそれを理解し認識できる人物が限られているのだ。

もともとの話が突拍子もなさすぎるのもあり、この情報を共有できている相手の方が少なかつた。

だがタキオンの周りの3人は情報を集めきつたらしい。

「だから、私は彼女らを頼ることにしたよ。スカーレット君ならテイアラ三冠に届くだろう。ウオツカ君が菊花賞を走れるかは知らないが、彼女もまた頑張ってくれるだろう。だから私は研究と根回しに尽力するさ」

「……」

「そっちの方が、私しかできないことだからね」

「応援してますわ」

「ありがとう」

「さて、そろそろ戻りましょう。あまり席を空けてしまうと、スカーレットさんあたりが血相変えて飛んできますよ」

「あれはあれでかわいいんだよ」

「心労を考えてあげてください」

手を差し出すマックイーン。

その手を握ってゆっくりと立ち上がるタキオン。

「結局さ」

「？」

「私は、ウオツカ君の想いに、スカーレット君の想いに、そしてみんなの想いに負けたのさ」

「……」

「周りをもっとよく見て、もっとみんなと話し合うべきだったのさ。ゴールドシップ君のためなんて思いながら、結局全部自分一人できると驕った私が、勝てる勝負じゃなかった」

「……」

「マックイーン君は私よりももっと助けてくれる人がいるんだ。一度立ち止まってもいいと思うよ」

「……」

帰りがけに独り言のようにつぶやくタキオン。

マックイーンはそれに、何も答えることなく皆が待つ場所へと戻る  
のであった。

## 運命の宝塚記念

春のシニア最終戦であるグランプリレースの宝塚記念もまた、多くの人が集まるレースだ。

今回は、マックイーンの史上初の春シニア三冠を懸けたレースでありより多くの人が集まっていた。

マックイーンの控室にはいつものゴールドシップとサトノダイヤモンドが訪れていた。

いつもべたべたに甘えるサトノダイヤモンドも、今日は少し心配そうにマックイーンを見ている。

健康状態などは当然秘密事項であり、チーム外のウマ娘であるサトノダイヤモンドには一切話していない。だが、毎日のようにマックイーンを見ているマックイーンファンの彼女にも、あまり脚の状態が良くないのが分かっていった。

逆にいえば、目に見える程度には状況が良くないのだ。

「マックイーン、無理だけはするなよ」

「マックイーンさん、無理しないでくださいね!!」

「大丈夫ですわ」

結局ゴールドシップはマックイーンを説得しきれずに今日まで来てしまった。

怪我は現状していないが、疲労がたまってきているのは確かだった。

勝ち負け以前に無事に戻ってきてほしいとゴールドシップは思っていたが、マックイーンにそれは伝わっていなかった。

一方テイオーの控室には、スズカとキタサンブラックがいた。

天皇賞春から約2か月弱、テイオーはさらに努力を積み重ね、スズカもまた知識を蓄え、準備してきた。

今度こそ必勝を期してこのレースに挑んでいた。

「テイオーさん、がんばってください!!」

「テイオー、あなたなら勝てるわ」

「二人ともありがとう。今日こそボクが勝つよ」

ライバルは多い。

マックイーンはもちろんだが、天皇賞春で好走したメジロパーマーや、パーマーと競つてくるだろうダイタクヘリオスも出ている。

今までテイオーがあまり得意でなかったハイペースなレースになりそうなメンバーだ。

他にも油断できないウマ娘達は何人もいる。

それらをすべて見て、研究して、それでいまこそ、テイオーは勝つべくレースに臨むのだった。

大外の枠になり、一番最後にパドックに入ったメジロパーマーは、違和感を感じた。

いつものように羽織っていた上着を脱ぎ捨て、笑顔で手を振れば観客の反応は悪くない。

しかし、何とというかいつも以上にパドックがチャカついている気がする。

いつものようにダイタクヘリオスは騒がしい。

パーマーにハンドサインを送ってきたので、いつも通りハンドサインを返せば嬉しそうに尻尾を振っていた。

彼女がうるさいのはいつもだ。テンションが上がれば上がるほど強く成る彼女はおそらく絶好調だろう。

しかし、同じようにテンションが高く、観客に手を振るマックイーンを見て、いろいろなものを察した。

幼馴染のパーマーはマックイーンのことをよく知っている。

彼女が調子がいい時というのは、大体ふにやふにやスイーツを食べているときだ。

気が抜けているように見えるぐらいの時が自然体で一番実力が発揮できる。

一方で真面目ぶって真剣な顔をしているときは若干イレ混み気味のときだ。ああいうときのマックイーンは大体がんばりすぎるので、

時に大ポカをする。

そしてああいうテンションの高いときは、イレ込み過ぎていて大体大失敗をするときである。

一番人気で期待がかかっている大一番でのマックイーンのあの態度は、観客から見たら余裕にも、体調が良いようにも見えるだろう。だからこそ、歓声が多いのだろう。

一方二番人気のテイオーを見ると何も表情が浮かんでいない。

今年に入ってからしつかりとパドックで観客アピールをしてきたテイオーにはやはり珍しい態度だった。

対抗するウマ娘の不調に会場は落ち込んでいるのだろう。

こういった雰囲気合わさって異様な雰囲気になっているのだろうな、とパーマーは察した。

なんにしろパーマーには都合がいい。

逃げて逃げて逃げまくって、今度こそ勝つと、彼女もまた気合を入れたのであった。

今年の宝塚記念は、変な雰囲気だとキンイロリョティは思った。

今年で彼女が宝塚記念に参加するのは4回目である。

スズカに負け、グラスに負け、キングに負け、今度こそ4度目の正直と思って参加した宝塚記念。

前走のドバイシーマクラシックで優勝し、念願のG1ウマ娘になったリョティの調子は絶好調だった。マックイーンの強さはよく知っている。テイオーの強さも、ほかのメンバーの強さもよく知っている。だが勝つつもりでこのレースに挑んでいた。

宝塚記念はグランプリレースだけあり、毎回かなり独特の雰囲気がある。

だがそれでも今回のレースはかなり浮ついたというか、チャカチャカした雰囲気漂っていた。

そんな中でも一番落ち着いている彼女が、リョティにとっての最大のライバルである、とリョティは直感していた。

また今年も荒れそうだな。

た。  
リヨテイはそんなことを想いながら、レースに向けて準備をしてい



## 私の夢 あなたの夢 彼女の夢 そしてみんなの夢

春の総決算であり、グランプリレースである宝塚記念。

一流ウマ娘ばかりそろったレースの熱気は最高潮であった。

大きく響く歓声はスタート地点にも大きく聞こえていた。

参加するウマ娘それぞれの気持ち、観客が抱くそれぞれの夢が、今まさにゲートに入っていく。

しかし栄光の一着はただ一人なのだ。

それを求め、ウマ娘たちは今、全員がゲートから飛び出した。

先頭を切るのはメジロパーマーか、もしくはダイタクヘリオスか、そんな風な予想がされていた。

パーマーは当然逃げウマ娘であり、先を行くのがいつもだ。ダイタクヘリオスは逃げから先行を得意とするウマ娘であり、やはり前に行くのが予想された。

二人が前で競り合えば当然ペースは上がっていく。

そんな展開になると予想された中、一番先頭を切って走り出したのはトウカイテイオーであった。

テイオーはスズカと話し合い、考え、そして一つの結論に達していた。

自分らしい走りができないときに負ける、という結論である。

元来テイオーは気が弱いナメクジなウマ娘だ。

レースに関しては天賦の才があるとはいえ、気の弱さゆえの弱点があり、それを突かれると負けることが多かった。

逆に言えば、そういうことがなければ勝つのではないかという結論である。

テイオーが苦手な戦法というのの特にない。

大逃げから追込まで何でもできる。

先行策が多かったのは一番無難に強かったからというだけである。つまりなんでもいいわけだが、ほかのウマ娘に干渉されがたい位置

をキープしたい。

今回、そういつた干渉を受けにくい場所はどこかと考えた結論が一つ。大逃げするだろうパーマーやヘリオスのさらに前という、狂気の大逃げだった。

幸い大内1枠1番をとれたテイオーは、スタートから全速力でトツプに躍り出た。大外のパーマーやヘリオスたちに並ばせないほどの大逃げである。

大逃げに関しては、一流のウマ娘だったスズカの指導や、ターボとの練習など経験値も多い。

パーマーは本質的にステイヤーであり、スピードがそうあるわけではない。1000m60秒切るぐらいがギリギリの速さだろう。

その分緩急をつけたり駆け引きが非常にうまいのだが、無視して前を走ってしまえば脅威ではない。

ヘリオスはそもそもマイラーだ。2200mの宝塚記念は彼女には長すぎるだろう。この速度の逃げについていけば潰れてしまうので控える選択肢しかできないだろう。

テイオーの走りはスズカの勝った宝塚記念の再現である。

追いつがろうとするパーマーとヘリオスを突き放しながら、テイオーはさらに加速し、1000mを58秒4というすさまじいペースで駆け抜けていった。

逃げるだろう二人に、並ばせることのないさらなる大逃げをマックイーンは予想していなかった。

前に行く二人もかなりのペースで飛ばしているのにそれすらおいでいく大逃げである。

向こう正面の1000m時点ですでに10バ身以上は距離がありそうだ。

これ以上離されると追いつけない可能性が出てくる。ちょうどテイオーが第三コーナーの残り1000mのハロン棒を越えたところで、マックイーンは奥の手を繰り出した。

強く踏み込み、ドンツ！ と鈍い音がレース場に響く。

ゴールドシップの走法から学び、昇華してきた必殺技だ。

京都レース場では第四コーナーが急な下り坂であったために使えなかったこれだが、阪神の緩やかな下りのコーナーなら大外からマクることが可能だ。

特に今の時期の阪神レース場の内回りコースはインコースの芝が非常に荒れている。

外側の芝の良い場所を走れば確実に追いつけるはずである。

ゴールドシップには脚部に負担がかかるそれは使わないように言われていたが、手段を選んでいる余裕はなかった。

逃げる3人の後ろに、4番手でつけていたマックイーンは特に妨害もされずに加速をし始めたのだった。

テイオーもスズカも、マックイーンが猛烈な追い込みをしてくることは当然予測していた。

そしてその対応も考えていた。

その答えはシンプルに一つだった。

マックイーンより先にゴールに飛び込む。ただそれだけである。

マックイーンがこれを使って勝ったレースといえば去年の天皇賞秋である。

確かに圧倒的な勝利であったが、レースタイムでいえばレコードを更新できたわけではない。

速度はすさまじいが、コーナーリングに難があり大外に振られるうえ、加速にも時間がかかるのだ。

そういったロスを合わせれば、常識的なタイムでゴールに飛び込むことになるというのをスズカは見抜いていた。

2分11秒台でゴールすれば十二分に勝ち目があるとスズカは計算していた。

そしてそれができるだけの練習とレースプランが、テイオーにはあった。

マックイーンがスパートをかけた音が聞こえる。

1年半ほど前、まったくテイオーは追いつけなかった。しかしあ

の時とは、テイオーは違った。

第三コーナーから第四コーナーは丁寧に曲がっていく。

逃げの一番の利点は、大内の距離が一番短いコースを走れることだ。

そしてそれはコーナーで一番差が出る。

スズカの教えに従い、直線で再度スパートをかけるためにも、丁寧に、ていねいに曲がっていく。

そうして直線に入れば、すべての力を振り絞り、全身全霊をもってスパートをかけ始めるのであった。

膝がひどく痛む。

負荷が強すぎるのだろう。

だがここで止めるのも難しい。ゴールまで駆け抜ける必要がマックイーンにはあった。

大外に振られ、コーナーを抜け出したマックイーンにとっては、テイオーの背中にはるか先であった。

差し切るべく全力で飛ばすマックイーン。

しかし、予想以上に距離が詰められない。

テイオーのスパートの速度が速すぎるのだ。

マックイーンの現在の速度はそれすら上回るすさまじいものだが、大外に回った不利に直線までに稼がれたリード分の不利はあまりに大きかった。

絶対に届かないのが見えてしまったマックイーン。それでも意地で走り続けるが……

阪神の最後の坂を上り切ったときには、テイオーはすでにゴール板の前にいたのだった。

閑話：ゴルシちゃんネル ぱーと3

「ということで、チームスピカの宣伝担当 兼 タキオン研究所宣伝大臣 兼 高知トレセン学園宣伝部長 兼 ブランドヘイロー宣伝執行役員 兼 メジロ家お抱え宣伝員 のゴルシちゃんだぞー」

「このタイミングでこの茶番をやりますの……?」

「1章10話ぐらいに収めたいからこのタイミングなのぜー!」

「メタいですわね……」

「このチャンネルは、本編とは少し違う感じの世界線っぽい何かだから大丈夫なのぜー!」

「はあ、しかたないですわね。という事で今回はワールドシップとわたくしメジロマックイーンとマスコットのサトノダイヤモンドさんでお送りします」

マックイーンがいつものようにサトイモを抱っこしながら放送がスタートした。

サトイモはキリつとした表情をしていた。

「ではさっそく視聴者様のご要望から行きますわね。ゴルシちゃんネーム紫溪さんから「ゴルシチャンネル開くときは最初から最後までオネエサマ全力でお願いしたいです!」だそうです」

「え、もう普通のモードで始めちゃったのぜ!?!」

「今からでも遅くないのでは?」

「じゃあがんばるのぜ! ん、ん!!」

「頑張ってください」

「マックイーン」

「なんですか?」

「お姉さまモードですと、マックイーンと区別がつかなくなるのではないですか?」

「……」

「……」

「まあ、頑張りましたよう! ひとまずふつおたから行きますわよ!

ゴルシちゃんネーム劉玄さんから。「タキオンがダスカに全票譲れば

メジロのおばあ様の159票を超えるのでは……?」

「感想にも同じような意見が出てましたね。はい、単なる計算違いです。気づいた方には皆さんサトイモモフモフ券を一枚プレゼントいたします。ただし、サトイモちゃんは付属しておりませんので、別途そちらはお買い求めいただくようよろしくお願いいたします」

「つまりどういうことですか……」

「もふーん」

マックイーンがサトイモの頭を撫でる。とても柔らかかった。

「続いてゴルシちゃんネーム音操さんから。「スペシャルウィーク現生徒会長様以外に生徒会長適性の高いウマ娘とは誰が居るのでしようか。」ちなみに音操さんはティエムオペラオーを推していますね」

「なるほど。オペラオーさんは確かにリーダーとしての素養があると思います。ですが私あげるとすれば…… ハルウラちゃんとかですかね?」

「ウララさんですか!」

「リーダーに向いているのはみんなが手伝いたいと思うカリスマ性と、何を言われても折れないメンタルの強さです。そういう意味ではスペちゃんは向いているでしょうし、ウララちゃんも向いていると思います。世にウララのウラランことを」

「謎の呪文唱えないでくださいまし!? こほん、次に行きましょう。」

ゴルシちゃんネームゼルガーさんから「ゴルシちゃん、まんじゅうさん、

ピースピース!」

「びすびす!!」

「びすびす!!」

サトイモもノリノリでピースをする。

「二いつの間にか年月が5年経過していますが、学年とかはどうなってるんでしょうか?」

「……」

「ゴールドシップ」

「それに気づいてしまったあなたには、消えてもらうしかありませんね」

「ゴールドシップ!？」

「大丈夫、もう済みました」

「……」

マックイーンは聞かないことにした。

「えつと、次は…… ゴルシちゃんネーム尚識さんから」とあるウマ娘の育成をしていたら、クリスマスの日はそのウマ娘が部屋の壁ぶつ壊して入って来た上に、玉鋼をクリスマスプレゼントとして渡されました。自分はそのとあるウマ娘と分かり合えるでしょうか?」

「百万倍返しですね」

「百万倍返し?」

「文字通り百万倍の価値のものを返すというクリスマススの礼儀作法です。ちなみにその玉鋼は約4kgで値段は約4万円ですから、400億円ぐらいの価値のものを返せばいいでしょう」

「えつ?」

「返せない場合は、体で返すしかありませんね。そちらの世界のゴルシちゃんと、末永くお幸せに」

「えつ、えつ?」

「ほら、マックイーン、次に行きましょう」

「あ、はい…… ゴルシちゃんネーム09e16さんから「ちよいとメタい話ですがそちらの世界ではリョテイさんの血縁関係ってどうなってるんですか?」」

「しりません!」

「しらないんです?」

「私はリョテイパパの親族にあったことないですからね。史実馬とも血縁かなり違いますし、親族関係は決めていません」

「なるほど、続いてゴルシちゃんネーム消耗品さんから「マックイーンの身体が成長したようにテイオーの身体も成長しますか?」」

「たぶんしません。まあ少しは体格は良くなるかもしれませんが」

「そうですね?」

「史実の馬に合わせた設定ですから、マックイーンが大きくなってポニーちゃんが小さくなりましたが、あとはそうずれてないですから

ね」

「なるほど」

「という事で応えていたらいいところになったので、この辺で終わりにしますね」

「何かしてほしい企画や、ふつおたは下のアドレスの活動報告に送ってくださいね」

「なあマツクイーン」

「なんですの?」

「やっぱり書き分けで来てない気がするのぜ」

「私は正直違和感しかなくて寒気がしていましたわ」

「私は好きですけどね」

「スズカさん!」

「ボクも好きだよ」

「テイオー!」

どこからともなく現れたスズカとテイオーがゴールドシップに抱き着いた。

「ありがとうな、二人とも」

「ゴールドシップ」

「なんだ?」

「後ろ後ろ」

「?」

ゴールドシップの振り返ったそこには、修羅のオーラを纏ったスペシャルウィークがいた。

「ゴールドシップさん?」

「ひっ!」

「指、何本行きましたようか?」

「ホラーなのぜ!」

逃げ出したゴールドシップをすさまじい脚で追いかけるスペシャルウィークだった。

「という事で、今回のゴルシちゃんネルはこのあたりで。メジロマツクイーンと」



「サトノダイヤモンドでおおくりしました♪」

## 第七章 最終章まであと少し 夢の祭りの後

全治三か月

マックイーンがレース後に発症した屈腱炎の治療にはそれだけの期間が必要だった。

そこまで重いわけではなく、また最新の治療法である幹細胞移植注射もしたのでそこまで長引く怪我ではない。復帰も可能だが、今年の秋冬期のレース出走は絶望的だった。

「バカだなあ、マックイーンは」

ベッドで休みながらしょんぼりしているマックイーンを見舞いに来たのはキンイロリヨテイである。

イクノデイクタスは既にずっと泊まり込んでいて、今でもマックイーンにくつついていた。

体調不良は薄々察していたイクノだが、さすがにライバルチームという事でマックイーンの体調までは知らされていなかった。

なのでこうしてマックイーンが怪我をしたことで拗ねてくつついているのだ。

「なんでこうなるまで頑張っちゃうかねえ」

これがリヨテイの本音であり、イクノの本音だった。

マックイーンが優秀なのは知っている。

一期上だがまだ重賞止まりのイクノや、スズカと同年代でデビューして何年もかけてやっとG1に勝てたりリヨテイと比べてマックイーンは非常に優秀だ。

ゴールドシップを助けたいと誰よりも思っているのがマックイーンであるというのも二人は知っている。

しかし、だからこそ二人はマックイーンに頼ってほしかった。

ゴールドシップに勝利を捧げるというならば、マックイーンが怪我するまで無理しなくても、別の誰かが勝つといった方法もあったはずであった。

それこそ同じチームスピカの中ならトウカイテイオーだっている。カノープスだって、八百長をすることはないが、ゴールドシップに縁深いメンバーも多く、そういったメンツが同じようにゴールドシップを想って戦ってくれる可能性は十分あった。

そう言うのに頼らないほど、いや、気付けないほどマックイーンは追い込まれていたのだろう。

うええええええ……

と謎の鳴き声を漏らしながら泣き始めてしまうマックイーン。

イクノは抱きしめて優しくその頭を撫で、リョテイはやれやれと肩を竦めた。

「だつて、だつてえ……」

「落ち着いて、マックイーン。はい、お鼻チーン」

「ずびびびび」

「ゆっくり話してください」

「わだぐじだつて、いろいろがんばっだんでずよお」

マックイーンもマックイーンなりに周りに声をかけていた。

特におばあ様やカノープスの目の前の二人とバツティングしない範囲は自分で頑張ろうといういろいろ画策したが、結果はさんざんだったのだ。

幼馴染で同年代のライアンやパーマー、そして少し年下の妹分のドーベルなどに声をかけたが全く理解してもらえなかった。

クラスで仲の良い友人にもいろいろ声をかけたがやはり全く理解されなかった。

マックイーンが声をかけた人たちは基本全く駄目だったらしい。

おそらくゴールドシップとの縁が強くないからだろうとは、漠然と想像した。

「……はあ」

「頑張りましたね、マックイーン」

「がんばりました……」

思い立ったら即行動、というのはスピカのスペシャルウィークと同

じだが、マックイーンとスペでは全く違ふところが一つある。属性の違いだ。

マックイーンはメジロのご令嬢なのだ。しかも一見非常にお嬢様然としている。

ほわほわと明るいパーマーや、スポーツ万能で快活なライアンと違い、しゃべり方や外見が、とてもお嬢様っぽいので、第一印象がそれになってしまう。

実際はポンコツで脳筋で、自分で一生懸命やってしまう庶民的なウマ娘なのだが、それを理解している者は少ない。だから、皆マックイーンのポンコツ行動に、きつと何か深い意味があると深読みしてしまうのだ。

これがスペだと何か勘違いしていると周りがすぐ気づいて正してくれるが、マックイーンはそういったことをしてくれる相手が少ない。

そのせいか自分一人だけで誰にも相談せず暴走特急になってしまふ悪癖があつた。

結局最初から最後まで、マックイーンはそういう子だったというだけであつた。

まあ、マックイーンの世話はいクノに丸投げでいいだろう。

イクノが黒いチョーカーをマックイーンの首に巻き始めたり、なんか指輪を取り出したりしているのは見ないふりをしながら、リヨティはさつきと逃げ出した。

後は二人で好きにすればいいし、マックイーンはもう戦力外だと思つておいていいだろう。

リヨティにとつても大事なものはゴールドシップだった。がんばつた者は報われるべきだとリヨティは思つていた。

その報われる量は当然違うだろうが、あれだけ皆のために頑張つてゐるゴールドシップの最後が一人寂しく消えていく、なんていうことはリヨティにとつても許容できる話ではなかつた。

彼女に入れ込んでいる理由が血縁による本能なのか、それとも単なる友人への気持ちなのか、そういつたものはリヨティにとつてはどう

でもよかった。ただ気に食わないだけだった。

そのために必要なメンバーを一度集めて話し合うべく、リョティは皆に声をかけた。

マックイーンの話はイクノに投げたのだから、残りは全部自分でやるべく、リョティは病室を後にするのであった。

## 夏合宿の始まり

今年の夏合宿はカノープスと合同で近場の高原に行くことになった。

最初は高知の予定だったが、夏の高知は南国であるせいで非常に暑い。

なので近場で涼しく、療養ができる温泉もある場所が選ばれたのだった。

「……暑い」

「お姉さま♪」

「おねえさま〜」

「ゴールドシップは私のものですわ!!」

そんな涼しい湖のほとりで、ゴールドシップは囲まれていた。

木製のテラスで、なぜかギルなのにこちらに交じって合宿に参加しているグラスワンダーのお茶を飲んでいた時の話だった。

まずサイレンススズカが当然の様に近寄ってきて、当然のように正座するゴールドシップの膝の上に自分の頭を乗せた。膝枕である。

続いてトウカイテイオーが近寄ってきて腕にへばりついてきた。お茶が飲めなくなった。

そして最後にその姿を見たマックイーンが後ろから抱き着いてきたのだ。

三人の体温でとても暑かった。

あと、すぐそばの木の陰から覗くスぺの視線がとても怖い。

暑いのに悪寒を感じる。

「グラス、助けて……」

「……」

笑顔だけで無言で拒否された。

結局その後、のそのそと出てきたスぺは、この4人の塊に入る隙がなくてしょんぼりしてしまう。単に一人はぶられて寂しかっただけのようだ。

全員にかわるがわる膝枕させられたゴールドシップの脚は完全に

しびれて、しばらく動くことができなくなるのであった。

やることが、やることが多い……

リヨティは内心で愚痴っていた。

まずはマックイーン対策が必須だ。

別にマックイーンが潰れまんじゅうになっただけでもリヨティ自身はあまり困らないのだが、そういう状態になるとゴールドシップもまた凹んでしまう。

ゴールドシップに元気を出してもらいながらできればティオー当たりの面倒をスズカとみてもらいたいと考えると、マックイーンへの対応が必須であった。

ひとまずスズカもティオーもなんだかんだでゴールドシップを慕っている。二人をくつつけておけば嫉妬したマックイーンも元気を出すので、それで十分だろうというのがリヨティの判断だった。

もっとも放置し過ぎるとスpegが修羅に目覚めたり、グラスワンダーが良くわからないちよつかいを出してかき混ぜ始めたりするので、あまり目を離せないのが難点であったが、ひとまずそれで対応は良しとした。

次にイクノデイクタスの対応も必須だった。

最近若干病んできているこいつをちゃんと走らせる必要がある。

表情が常に真面目で考えていることが分かりにくい、付き合いが長いリヨティはその辺りが良くわかっていた。

マックイーンが好きすぎるのはいいが、イレ込み過ぎて面倒なことになる前に死ぬほど走らせておく必要があった。

このまえ鎖付きの首輪を通販で取り寄せていたのは既に没収済みだ。

トレーナーやネイチャにお願いして無茶苦茶走らせているが、目を離すとすぐ暴走しかねないので、リヨティが監視するのはやはり必須だった。

カノープスのリーダーとしての仕事の量もうなぎのぼりだ。

ハイローブランドと学園との交渉に同席させられたり、高知のトレ

セン学園との交流に関しての会議に学園側として出させられたり、自分の立ち位置がころころ変わる交渉をしよつちゆうさせられていた。

同じようにスピカのチームリーダーであるスズカはあんなに余裕がありそうなのに、なんで自分は下手すると分刻みのスケジュールになっっているのか、トリョテイは泣きたくなった。

後はゴールドシップ対応の音頭も取る必要があった。

ゴールドシップの周りに集まる者は皆癖がある連中ばかりだ。

そして協調性があまりない奴が多い。

だが、今回のタキオンとマックイーンの失敗から、協調する必要性を実感させられたため、集まって話し合いなども必要だろうということになったのだ。

しかしその音頭を取る者がいなかった。

マックイーンは脳筋だし他人の話を聞かないのでダメだし

メジロの総帥が出張ると格上すぎてみんなが発言できなくなってしまう。

同じ理由でスピカのトレーナーもダメだろう。

タキオンは学者肌で協調性がない。

結局別チームなはずのリョテイが言い出しっぺなのもあり、やらざるを得なくなっていた。

「そうはいつでも投げ出さないのがあなたのいい所ですよ」

苦笑しながらリョテイを慰めてくれるのは南坂トレーナーだった。

彼自身も非常に忙しく、目の下にいつもクマを作っている。

今回の夏合宿で少しは温泉で療養できればいいのだが……

二人でため息をつく、遠くから騒ぎが聞こえた。

リョテイはゴールドシップを追いかけ始めたスペを止めるべく駆け出し、トレーナーは湖の上を走って渡ろうとして湖に落ちたターボを助けるべく駆け出したのだった。



## 夏の星空の下で

「なあマックイーン」

「なんですの？」

「なんでこんなに無茶したんだ？」

星空の下のバルコニー。

他のメンバーは部屋に戻って、今頃ゲームでもしているだろう。

マックイーンとゴールドシップの二人だけがそこにいた。

「なんで、ですか……」

「宝塚記念はパスして、天皇賞秋を目指してもよかったら？」

「そうですね。かなり無理をしました」

「その理由、教えてほしいなつて」

「……単純にゴールドシップのためですわ」

「……アタシのため？」

ゴールドシップは首を傾げた。

「おばあ様から、全部聞いていますのよ」

「……」

「あなたが、すべてを懸けて過去にきているということも、全部聞いてますのよ」

「……」

ゴールドシップもメジロのおばあ様が他人にそれを話すことを想定していなかったわけではない。

だが、修正力の影響もあるし、理解できる者は他にはいないと思っていた。

楽しむだけ楽しんで、こっさり消える。

おばあ様にだけは申し訳ないが、記憶も記録も残らないのだから、問題ない、とそう思っていた。

「ゴールドシップ。いうことはありますか？」

「ゴルシちゃんには何のことかわかんないぜー」

「消えるのは大体来年の頭。そうですね。私とゴールドシップが会った時ですわね」

「……」

ゴールドシップはごまかそうとしたが、まったく乗ってくれそうな雰囲気ではなかった。

「タキオンさんやイクノさん、リョテイがいろいろ調べてくれました。おばあ様もいろいろ協力してくれました。ゴールドシップを未来に無事送り届けるための方法もタキオンさんたちが考えてくれます」  
「……」

「私たちが走り、あなたを想えばきつと未来に届くはず、そういう話でした。まあ、私も気がはやり過ぎたのは反省してますわ」

ゴールドシップすら知らない情報がマックイーンから出てきて、ゴールドシップは困惑していた。

元に戻るってなんだ。

自分がいた未来では、スズカは亡くなり、スぺもグラスも惚けていた。

ネイチヤさんは涙を流し、キングさんは月曜日を待ち望み、イクノさんはずっと苦しんでいた。

もうそんな過去は無くなった。それは疑いようもない話だった。過去は変わった。

じゃあ自分が戻れる場所はないはずだ。

それが別に悲しいわけではない。それは想定してここに今いるのだから。

後は残り少ない時間をみんなと楽しみ、人知れず消えるはずだったのだ。

その覚悟は既にできていた。まったく怖くないわけではないが、受け入れていたのだ。

「余計なお世話だぜ」

だからそんな軽口が口に出る。自分のことなんてどうでもいいからだ。

それよりマックイーンやタキオンや、みんなのことが大事だから。

そのマックイーンのは回答は、握りこぶしだった。

「歯あ食いしばりなさいゴールドシップ!!」

「ふげらっ!!」

頬を思いつき殴られた。

親にも殴られたことないゴールドシップにとって初めての痛みだったかもしれない。

「あなたが！ いなくなつて！ なんでみんな幸せになれると思ってるんです!!」

「……」

「みんなを助けたあなたがいて初めて!! 私も、みんなも幸せになれるんですよ!!! なんてそんな簡単なことが分らないのです!!」

「どうせみんな忘れる」

「忘れられるわけありませんわ!!!」

「……」

「あなたは何でそんな簡単なことすらわかりませんの!! 私が！ タキオンさんが！ スズカ先輩やスペ先輩が!! チームのみんなが!! イクノさんやりヨテイが！ あなたのことを忘れると本当に思ってるんですの!!」

ゴールドシップの肩をつかんで揺らすマックイーン。

涙が零れ落ちていた。

「あなたがここに来た目的は何ですか?」

「みんなを幸せにするためだ」

「あなたも幸せじゃなきゃ、みんな幸せじゃないのです」

「……」

「私も反省しました。一人だけで頑張るなんて傲慢でした。しかし、ゴールドシップ。あなたも反省してください」

「……」

「私は、部屋に帰ります」

「ごちやごちやになったマックイーンは頭を冷やすためだろうか、その場から立ち去った。

一人ぼんやりと星空の下に残ったゴールドシップ。

どうしていいかわからなくなった彼女はやはり困った表情を浮かべることしかできなかった。

夜の闇は安らぎであり

「で、マックイーンに怒られて拗ねてるわけか」

「拗ねてねーもん」

呆然としていたゴールドシップを迎えに来たのはキンイロリョテイだった。

床に体育座りをしているゴールドシップの後ろから抱き着いて、頭の上に顎をぐりぐりと押し付けていた。

「とうかさー、一つ不思議だったんだけど」

「なにさ？」

「未来に大事な人っていなかったわけ？ そっちの話聞いたことねーし。親族とかも全然残ってない感じ？」

リョテイは結構不思議だった。

未来で何が起きたかは知らないが、まあ別に大災害が起きたわけじゃないだろう。

ゴールドシップの動きは大災害に備えるようなものではないし、おそらく個別にいろいろな不幸が積み重なってきたはずだ。

そうすると大事な人の一人や二人、残っていそうな気がするのだが

……

親族でもそうだし、恋人とか、そういう相手もいなかったのだからと不思議に思っていた。

「うーん、リョテイパパもママも亡くなってたし」

「お前パパママっていうのな」

「リョテイパパがそう呼べて言ったんだけど」

「……」

思わぬブーメランがリョテイに突き刺さった。

「リョテイパパの親族は全然わからなかったし、ママの方もマックイーンしか知らないんだ」

「駆け落ちでもしたんかね」

「よくわからないよ。パパも何も教えてくれなかったし」

「メジロ家はどうなってたんだよ」

「アタシが生まれたころにはもう無くなってたよ。マックイーンが解散させちやったらしい」

「何があつたんだ……?」

「レースに絶望して、それで組織をバラバラに解散させちやつたんだってさ。だから跡形もなかったよ」

「ふむ……」

「で、イクノ教官から聞いたんだけど、祖母がマックイーンで、でもマックイーンも亡くなって……」

「ちよいストップ」

「?」

「イクノ教官つてだれだ?」

「イクノデイクタスだよ。学園入学時からずっと優しくしてくれてお世話になってたんだ」

「? なあゴールドシップ」

「?」

「いや、お前の母親のもう一人の親つてイクノだろ?」

「え?」

「え?」

ゴールドシップは呆けたままだ。

ゴールドシップにとつてイクノデイクタスはとても親切にしてくれた教官だった。とてもお世話になっていたが、もう一人の祖母だという認識は全くなかった。

「いや、イクノ教官はマックイーンの元恋人とは言っていただけだし、そんな話聞いたことないぜ」

「目のあたりとか輪郭とか思いつきりイクノじゃんお前! どう見ても血縁だろ!」

「え? うそだろ?」

「気づいてなかったのかよ……」

何というか、自分のこと蔑ろにするところとか、自分のことに察しが悪い所がゴールドシップはマックイーンそっくりである。

手が焼けるな、トリヨテイはあきれた。

「とうかさ、親族が居なくても、トレーナーとかチームメイトとかライバルとか普通にいただろ!? 大事な相手じゃないのか?」

「……」

「全くそういう変なところまでマックイーンに似るなよ……」

頑固で思い込んだら一直線。自己犠牲ばかりしてしまい周りに助けを求めない、本当にマックイーンそっくりだった。

「……」

「はあ、まあいいや、あとは周りのみんなに任せとけて」

「任せとけて……?」

「お前を未来にちゃんと届けてやるってことだよ。スピカのメンツも頑張ってるし、うちの連中もいろいろ動いてるからな。ちゃんと未来まで一直線で連れてってやるさ。誰かが」

「リョテイパパが連れて行ってくれるんじゃないのかよ」

「お前みたいな面倒な娘は未来で世話するだけで精いっぱいだよ」

世話が焼ける、とあきれながら、ゴールドシップの手を引き立たせるリョテイ。

本当にゴールドシップが自分の娘になるのかも不明だが、なんにしろゴールドシップを未来に送り返してやらないとな、と気合を入れる。

「ひとまずテイオーのこと面倒見てやれよ。お前が拾ってきたんだろ」

「うん」

大人しく成ったゴールドシップを連れて、リョテイは部屋へと戻るのであった。

## 閑話：ウマ娘脚漕ぎボートレース

「という事で第一回、チーム対抗スワンボートレースを始めるぜ！」

「わーい！」

「スイーツ！ スhirts！」

「テンションたけえあ」

若干おかしな雰囲気になっているためにイベントとしてキンイロリヨテイがいきなり企画したのは、合宿場所の近くにあった湖のスワンボートを使ったレースだった。

優勝賞品は宿のスイーツ食べ放題ペアチケットであり、必然的に皆盛り上がり始めた。

ルールは、ブイを回ってスタート地点に戻ってくるまでを競うという単純なものである。ただし、スワンボートが二人漕ぎで左右にペダルがあり、それぞれが独立して別のスクリューを回す方式だった。息が合わないとその場で旋回を始めてしまう。

身体能力のみならず二人の息が合うかどうか重要な競技になっていた。

各々が選んだペアが次々とボートに乗っていく。

「誰が勝つと思う？ マックイーン。あれ？ マックイーン？」

隣にいると思いついていたマックイーンがいない。視線を巡らせて探すゴールドシップ。マックイーンはイクノと一緒にボートに乗り込もうとしていた。

「スイーツですわ！」

「スイーツですね」

「おい、マックイーン、イクノ」

「なんですの？」

「なんですのじゃ、ねーだろ!!」

「ですわ!？」

ゴルシドライバーで投げ飛ばされたマックイーンは湖に逆さまに突き刺さるのであった。

「脚怪我してるのにレースでちゃダメに決まってるだろ！ イクノも

止めろよ！」

「私が二人分がんばれば問題ありません」

「問題しかねーだろが!!」

イクノの首をひつつかみ、マックイーンを湖から引き上げるゴールドシップ。

びしょぬれになったマックイーンはしょんぼりしていた。

そんなトラブルがあったが、レースは始まった。

ゴールドシップの合図でスタートした各ボートはしかし、最初からトラブル続きだった。

まず事故を起こしたのはスペとスズカのボートだった。

スズカの最初からフルスロットルな漕ぎ方に対して、スペはぼややんと、ゆっくり漕ぎ始めてしまった。

二人の息が全くあっていなかったスペースボートは、高速で左回りを始めた。

「ひゃあああああ!!」

「まだ速さが足りない……」

そうしてそのまま、左にいたりヨテイとネイチヤのペアのボートに激突し、二つのボートとも転覆してしまうのであった。

次にトラブルが起きたのはテイオーとターボのボートだった。

息があった二人は、最高速度で大逃げを始めたのだが、全力でこぎ過ぎたらしく、ちょうど湖の真ん中あたりで二人して体力が尽き果ててしまった。

ボート内で倒れ伏す二人が見えるが、少しも動けなさそうだった。次にトラブルが起きたのはウオツカとスカーレットのボートだった。

息があった二人のボートはテイオーとターボに少し遅れて進んでいたが、ブイの近くに来た時にトラブルが起きた。

どうやら右に回るか左に回るかで、二人の意見が割れたらしい。

そのまますったもんだで大げんかをしたせいで、船がバランスを崩し、やはり転覆していた。



残るボートは二つになった。

一つのキングヘイローとハルウララのペアのボートは、ゆつくりと進んでいた。

「キングちゃん、お魚さんだよー!」

「そうね、きれいね」

キヤツキヤウふふしながら、二人で楽しそうにボートデートをしている。

レースに出ている意識もどこかに行ってしまったようで、そのまま綺麗なちようちよを追ってブイとは違う方へとふらふらと航海をはじめてしまうのであった。

あと一つは、沖野トレーナーと南坂トレーナーのボートだった。

「なんでこんな地獄みたいなペア作ったんだよ……」

「わかりません……」

男二人でボートに乗るといふ苦行に耐えながら、ゆつくりと進んでいくトレーナーボート。

途中でくたばっていたテイオーとターボのボートを捕まえてけん引しながら、予定通りのコースを通って無事にゴールをするのであった。

「どーすんだよこれ……」

結局優勝してしまったトレーナー二人にスイーツ食べ放題無料チケットが渡された。

だが、二人ともスイーツ食べ放題には興味がなかった。

かといってチームの誰かに渡すと絶対角が立つ。

二人は呆然と立ち尽くすしかできなかった。

## 第八章 秋の風が吹くころに 秋の戦いの準備

スピカの今秋のシニア戦線はテイオー一人だけである。

マックイーンはまだ休養中であり、練習が始められるのは10月ぐらいになりそうだ。そこから有馬記念に直行するのは不可能ではないが、マックイーンはその予定を取るつもりはないようだった。

「万全の準備をしていけばまだしも、無理に出ても正直勝てる気がしませんし。わたくしは来年の天皇賞春二連覇を目指しますわ」

マックイーンはナッツをもぐもぐと食べていた。

タキオン博士から体にいいと言われて食べているようだが、正直食べ過ぎだとゴールドシップは思った。

テイオーの方はスズカとゴールドシップが面倒を見て、マックイーンもそれをサポートすることになった。

スズカだけだとトレーナー資格がなくてトレーニング設備の申請等が大変だったが、ゴールドシップがその辺りをすれば問題も解消されるだろう。

テイオーの予定は秋の三冠、天皇賞秋、ジャパンカップ、そして有馬記念である。

まずは初戦。前哨戦なしに秋の天皇賞に挑む予定であった。

おそらくカノープスのナイスネイチャとイクノデイクタスが参戦してくるだろう。

特にナイスネイチャは一度負けた相手だ。油断ができる相手ではなかった。

その後のジャパンカップには外国のウマ娘達が

有馬記念にはそれらに加えてクラシッククラスのウマ娘が出てくる。

油断できない勝負が続いた。

そうしてそれらに勝てば、テイオーはウィンタードリームトロフィーに参加し、そのまま皇帝に挑む予定だった。

UR A最優秀ウマ娘に選ばれば、そのままウィンタードリームトロフィーの決勝へ優先出走が可能だ。

そこで皇帝と雌雄を決する。そんなことをテイオーは目指していた。

そしてそれには少なくとも秋のシニア三冠を2勝、できれば3勝する必要があった。

ウオツカやスカーレットの成績次第ではそちらに取られかねないし、ネイチャあたりも成績次第では最優秀ウマ娘になる可能性がある。

もう1度も負けない決意を胸に、テイオーは準備を始めるのであった。

一方ウオツカとダイワスカーレットについても、沖野トレーナーとタキオン、そして当事者二人を交えてスケジュールを検討していた。「それで、二人の予定はどうするかね？」

「ウオツカ君が菊花賞でタンホイザ君に勝つ可能性は低いだろう。ウオツカ君は基本的にマイルから2000mぐらいがベストだろう？」

2400mだって長いと思うのに、菊花賞は長すぎるよ」

「じゃあ秋華賞からエリザベス女王杯、そして有馬記念か？」

「秋華賞の代わりにスズカ君みたいに天皇賞秋へ出るとか、エリザベス女王杯の代わりにジャパンカップに出るといふ選択肢もあるね。どちらにしろチーム内でバッティング多数だ。あとは本人に決めてもらえばいいのではないかな？」

一流ウマ娘のレーススケジュールなんてそうパターンがあるわけではないのだ。

距離適性次第で一つにしかないことも多いし、多くても二つか三つぐらいだ。

現役が同じチームに何人もいるとバッティングしてしまうのはやむを得なかった。

最初ウオツカがタキオンの代わりに菊花賞を走ることを主張していたが、タキオンの立場からそれは反対することにした。

単純に距離適性的に京都の3000mはウオツカにはきついだろう。本人が出たいというならこれ以上止めるつもりはないが、適性的には2000mがベストだ。

そうすると秋華賞か天皇賞秋がいいだろうとおもっていた。

「ウオツカ君、どうするかね?」

「そうですね。菊花賞に無理に出たいわけではないし、秋華賞からジャパンカップかなあ…… 東京の2400mはダービーで走って思ったけど走りやすかったし」

「なるほど、スカーレット君はどうする?」

「タキオンさんと一緒に有馬を走りたいです!!」

「え?」

「タキオンさんと一緒に有馬を走りたいです!! だってウオツカは一緒に走ったのに私は走っていないもん! ずるい!!」

「ふむ、まあいいんじゃないか?」

「え?」

スカーレットが急に駄々をこね始め、トレーナーがそれを追認しようとしている状況に、タキオンの思考は止まった。

「ちよ、ちよっとまってくれよトレーナー君。私、もう引退届だしたよね?」

「あれ、まだ手元にあつて学園には出してない」

「なんで!」

「ドリームトロフィーリーグに移籍ならまだしも引退の届けなんて出すのは学園離れる直前だから、普通はこのタイミングでは出さねよ」

「なんと!」

一度引退届を出すと撤回は難しいのだ。別にレースに出る義務があるわけでもないのに、通常引退届は卒業時など学園を離れるときに同時に出すのが通例だった。

当然タキオンの届もまだ出されていない。

「出場資格はちよつとギリギリかもしんねーけどまあ大丈夫だろ。脚の方だって、トレーニングして年末にもう一回走るぐらいなら大丈夫

「だろう？」

「いやしかし……」

「タキオンがスカレットを説得できるなら俺は別段どっちでも構わねーが？」

「……」

「タキオンさあん」

涙目ですがるように、そして期待する目でタキオンを見るスカレット。

この顔にタキオンが逆らえた試しがないのだ。

諦めたタキオンは、有馬記念出走に同意するのであった。

何のために走るのか

カノープスの秋期のスケジュールは過密を極めた。

その筆頭がイクノデイクタスだ

毎日王冠から始まり天皇賞秋、マイルチャンピオンシップ、ジャパンカップ、スプリンターズステークス、そして有馬記念である。

G1を5戦とか聞いたことが無い過密スケジュールであった。

「さすがにこれ、大丈夫なの？」

ネイチャはドン引きであるが、イクノは自信をもってこれをやると断言した。意味が分からない。

トレーナーも

「無理そうになったらゲート開いた後でも走るの止めてくださいね」  
しか言わない。

無理はしないだろうというところについては確かにイクノは信用できるが、それでもこのハードスケジュールはくないか？ とネイチャは疑問だった。

リョテイは天皇賞秋、ジャパンカップからの香港ヴァーズという海外レース狙いだ。ドバイの実績を考えると海外レースの方が調子がいいのではという事でこんなスケジュールになったがやはり過密気味だった。

ターボはオールカマーに勝てば天皇賞秋に出走予定、勝てなければ秋の別の重賞の予定だった。

マチタンは菊花賞から有馬記念というクラシッククラスならよくあるルートだ。

そんな中、ネイチャは迷っていた。

夏の間小倉記念に再度勝っているし調子は悪くない。

天皇賞秋からジャパンカップ、有馬記念と順当に出て、テイオーと戦うのも悪くないだろう。

そう、悪くない、というだけなのだ。

ネイチャは走る意味を見失いつつあった。

前は違った。

キラキラしたウマ娘になりたいとか、テイオーに勝ちたいとか、そういう気持ちで走っていた。

しかしテイオーに勝って、G1も勝って、どうすればいいかわからなくなってしまうていた。

迷ったネイチヤはみんなに聞いてみることにした。

「はしるのたのしーもんー!」

ウララは元気よくそう言っていた。

年間30レース以上走る彼女は伊達ではなかった。

いつも楽しそうに走っているウララ。

そう言えば自分はいつから走るのに理由を求め始めたんだろう。

ネイチヤはそんなことを想った。

「走るのが楽しいからですね」

イクノも似たような答えをした。

万年勝てないウララとG1出走するイクノではレベルが違うが、結局考えているのは同じことなのだろう。

「それって練習ではダメなの?」

「あのびりびりとした緊張感や、歓声がいいんですよ。あとみんなで競うというのが楽しいのです。だからできるだけG1を選びますし、たくさんレースに出ます」

「なるほど」

ネイチヤにはちよつとない境地だった。

「あ? そりゃ楽しいからに決まってるだろ?」

キンイロリヨテイも結局似たような答えをした。

彼女にとつてはゴールドシップのためというのもあるが、この回答自体も本心だった。

「すげー奴と走るのはやっぱり楽しいもんさ。負けると悔しいけどな。フクやスズカはやっぱりヤバかったし、スペの奴もやばかった。スペやスズカに勝ったキングもやばかったし、テイオーやマツクイー

ンもやばかったな。結局みんなやべー奴ばかりだからこそ楽しいんだよ」

中央のレースを40戦以上という破格の数を走っている彼女のいうことはやはり違った。

「走るの楽しいもん!!」

ターボは元気よく答えた。

「でも負けたら悔しくない?」

「そしたらもつと頑張るもん!!」

素直にそう答えるターボ。

「ターボは強いねえ」

純粹に自分を信じているのだろう。

その気持ちの強さにネイチャは感心するとともに、やはり自分にはないものだなと思った。

「走るの楽しいから、かなあ」

マチタンはそう答えた。

「みんなで頑張って、みんなで走って、みんなでレースすると楽しくない?」

純粹な目でそう聞き返されてしまい、ネイチャは言葉を詰まらせた。

「うーん、ごめんね。あんまり答えになってなさそう」

マチタンは困ったようにそういう。

悪いことをしたと思ったネイチャであった。

「楽しくなくなったなら、止めるのも手ですよ?」

トレーナーに相談したらそう答えた。

「走りたくないのに走ってもいいことはありませんから」

まあ、トレーナーはこういう人だっただけわかってる。

予想通りといえば予想通りの回答だった。

「でもどこか走りたい気持ちもあるんです」



「じゃあ秋のG1、好きに走ってみればいいと思いますよ」

「好きに？」

「何も考えず一生懸命走ってみればいいのでは？」

「でもそれだと勝てないし……」

ネイチヤは自分の実力が分かっている。

綿密な作戦を実行する知力と器用さ、そして視界の広さが彼女の武器だ。

何も準備せずにただの実力勝負になってしまえば勝てない相手は多い。

何も考えずに走れば、おそらくテイオーには勝てないだろう。

「勝つだけがレースじゃないですからね。負ける覚悟をして出るのもいいのではないですか？」

「うーむ」

「どうしても勝ちたくなったらまた作戦をたてますよ」

そう言われると、ネイチヤはいつもトレーナーと作戦を綿密に立てていた。

そう言うのじゃないレースをするのもありなのかもしれない。

結局ネイチヤは天皇賞秋にも、ジャパンカップにも、有馬記念にも登録をした。

勝てるかどうかはわからないが、勝てないとしても、あの頃の楽しさを思い出すために頑張るつもりだった。

## テイオーの天皇賞秋

この年の天皇賞秋は、非常に逃げウマ娘が多かった。

まずオールカマーを勝ったツインターボがこのレースに出ていた。1枠2番とかなり良い枠を当てていたので、その逃げは油断できないだろう。

さらに2枠3番にはメジロパーマーがいた。

彼女の逃げは相変わらず脅威だ。しかも今回は距離の短い2000mであり、全力で飛ばしてくれるだろうと予想されていた。

他にも3枠6番にダイタクヘリオスがいる。基本マイラーだが、2000mぐらいなら走り切りそんな実力は持っている。全く油断できない。

かなりのハイペースが予想されるレースとなっていた。

すでに4回目の出場になり落ち着ききつたキンイロリョティ。

初めてのG1にテンションが上がりまくってパドックにもかかわらず他の参加者に話しかけまくっているターボ。

盛り上がるパドックの中、一人だけ異様な雰囲気になっているのがテイオーだった。

刺すような殺気に近い気合を纏った彼女の姿は、かつての皇帝を思い起こさせるものだった。

レース経験が参加者中一番多いリョティすら若干ビビるような雰囲気を纏ったテイオーだったが、そんなテイオーにすら話しかけたのがターボだった。

「テイオー！ ターボがんばるからな！ テイオーも頑張ろうな!!」

初めての勝負服にテンションが上がり切って目をキラキラさせたターボがテイオーにそう言う。

「そうだね、がんばろう」

「ターボの勝負服、かっこいいでしょ！ それで、このぬいぐるみがチャームポイントなんだ！」

「可愛いと思うよ」

アルカイックスマイルで対応するテイオー。

ターボは一方的に話しかけ続けると、満足したのか別の人のところへ向かって行った。

トウカイテイオーはシンボリルドルフやスペシャルウィークが身に着けていた「絶対」の領域に足を踏み入れつつあった。

ずっとシンボリルドルフを見ていた経験と知識、実際に身に着けたスペシャルウィークの存在、そして彼女自身の素養をもつてすれば、その領域に入るのはそう難しいことではなかった。

これを身に着けるときに、一番反対したのはスペシャルウィークだった。

ゴールドシップもサイレンススズカも、せいぜい消極的賛成程度だが、反対はしなかった。

スペを見て、体に負担をかける方法なのは理解している。しかしレースとは多かれ少なかれ過剰に負担をかける行為だ。例えばマツクイーンあの追い込みなんてやばいぐらい体に負荷をかける。

確かにあの状態の使いすぎは厳禁だろうが、強くなるのだから大きく反対するほどのものではないと思っていた。

二人はスペの走りを直接見ていない。絶対を身にまとったスペを直接見ていない。だからその本質が分かっているかないのもあった。

スペは絶対の果てを知っている。胸の奥で眠る未来の残滓がそれをスペに教えていた。

また、スペは絶対といわれるそれが何かも知っていた。

絶対とは拒絶である。最適な位置を最適な速度で走り続けるそれは、周囲の影響を一切受けない。自分の力で確実に勝利をつかむ拒絶の力である。

Clipse first, the rest nowhere.  
トレセン学園のスクールモットーをそのまま実現した走り方だった。

スペはこのスクールモットーだけはいつか絶対に変えてやると

思っていた。それくらい強く、速くて、悲しい力だった。誰も幸せにしない走り方だった。

テイオーも薄々それは察していた。

利他主義的なゴールドシップや他人に影響されやすいスズカでは達しない境地だが、テイオーには非常に親和性が高い。だからこそどういうものかよくわかっていた。

それを選んだのは皇帝を理解したいと思ったからだ。

彼女の感じたことをテイオーは考えたことが無かった。常に憧れる対象だった。だから知りたかった。そしてテイオーが選んだ方法がこれだった。

実際やってみると、確かに勝負に最適な境地だとテイオーは思った。

実力を100%出せる。こうなれば後は走るための素質と努力の勝負だ。そしてこの二つに限って言えばテイオーは他者に負けない自信があつた。

異様な雰囲気を纏う自分に、しかしツインターボは普通に話しかけてきた。

テイオーにとって一番の友人はターボだった。向こうも一番かどうかは知らないが、友人だと思ってくれているだろう。

ターボから学んだことは多かつた。一緒に話して、一緒に遊んで楽しい相手だった。

今回のG1非常に張り切っていたのも知っている。一緒に走れると喜んでくれていたのも知っている。

しかし、今の境地のテイオーにとって、それは何一つ心を動かさなかつた。

心を動かさない自分にテイオーは驚いていた。

ここまで孤独な心境なのか。ここまで孤独に走らなければ皇帝になれなかつたのか。

そんな驚きを感じていた。

テイオーは絡んでくるターボを適当にあしらつた。ターボも何か

を感じているだろうが、気にする様子は出さずに他の人のところへといつた。

そう言ったことまで冷静に計算してしまう自分にテイオーは嫌気がさしつつあった。

## 吹きすさぶ木枯らしに

レース展開は予想通りになった。

大内から全速力で逃げ始めたツインターボに、メジロパーマーがついていく。

さらにダイタクヘリオスまで競り合い始めるのだから狂乱的なペースになりつつあった。

他の参加者が皆、その狂乱的な雰囲気とペースに流され始める中、テイオーは一人氷のように冷静だった。

バ群後方を走り続けるテイオーは、その速いペースの中で脚を溜め続ける。

ハイペースになったときには脚を残し切ったウマ娘が一番有利だ。だが、後につけていれば脚が残せるかというところというわけではない。

ハイペースというのは先頭だけが速いわけではない。参加ウマ娘全員の速度が速くなるのだ。だから下手についていこうとすると予想以上に体力を消耗する。最終直線で脚が残っていないなんていうことはしばしばあることだ。

じゃあ全く無視をしてしまうと、先頭を自由に走らせてしまう。それだとあまりにリードが出来過ぎる。セーフティリードと呼ばれる、先頭が完全にぼてたとしても追い込みバがとどかない状況になってしまう。

速すぎることもなく、遅すぎることもなく。脚を残せるだけのペースを維持することが対逃げウマ娘では必須なのだ。

そしてターボの逃げに対してはそういった適正なペースの範囲が非常に狭い。

彼女の逃げに駆け引きはない。パーマーのように幻惑したりすることも非常に少ない。

ただただ、全力で逃げて、ただただ、ゴールまで必死に走る。シンブルなそんな戦略だからこそ、しかし対応が難しかった。

1000mを57秒台で駆け抜けていくターボ。

圧倒的なペースに他のウマ娘達は次々にペースを崩していく。  
テイオーはそんなウマ娘の後ろに隠れながら、じつくりと足を溜め  
続けていたのであった。

ネイチヤはただただ走り続けていた。

ターボがいる以上展開は読めていた。

パーマーやヘリオスの逃げは勝つための逃げだ。ターボのあの、ただ全力で走りたいから走るといふ破滅逃げの方が展開を作することは予想されたことであつたし現にそういう展開になつた。

適切な場所を陣取りながら、ネイチヤは走っていく。

ハイペースになりバ群がバラバラになっている現状で、差すときの進路がつぶされる心配もない。

直線に入ってからスパートをかけるべく、ネイチヤは準備して  
いた。

ネイチヤは考える。

自分はターボに勝てるのだろうか。自分はリョテイに勝てるの  
だろうか。自分はイクノに勝てるのだろうか。何より今の自分はテイ  
オーに勝てるのだろうか。

そんなことを考えながら、いまいち気持ちが燃えなかつた。

ターボのエンジン全開の大逃げだが、どうせいつものように最後  
には失速する。

十分脚を残して直線に入れば追いつくことは難しくくない。府中  
の直線は長いのだ。

丁寧にコーナリングをして直線に入り、スパートを始める。既に周  
りのウマ娘は皆顎が上がってしまっている。すでにスタミナが切れ  
てしまっているのだろうか。

あの狂乱のハイペースを走るのは非常にコツがある。だがネ  
イチヤはこのペースに慣れていた。

しかし……

ターボが、垂れてこない。

明らかに顎が上がって息も絶え絶えになっている。しかしそれで

も執念で走るのを止めないターボに、ネイチヤは詰め切れない。

あの青い髪の中が遠い。

そう思った瞬間、自分の右を風が通り抜けた。

テイオーは十分溜め切った脚を直線で解放した。

バ群に隠れ空気抵抗を減らし、体力を可能な限り温存したテイオーは、スローペースの時と変わらないぐらいのスタミナを維持していた。

そして直線に入ってスパートをかければ、圧倒的な速度になった。

3ハロン33秒台のとてつもない末脚だ。

疲れ切った先行ウマ娘達では並ぶこともできない。

大外の綺麗な芝を駆け抜けていくテイオー。

ターボを追いつがるネイチヤをかわし、先頭を行くターボもかわし、そのままゴール板の前へと駆けこんだのであった。



皆でいれば温かい

「テイオー!!」

「ふぎやつ!!」

戻ろうとしたところで、後からゴールしたターボにテイオーは押し倒された。

その小さいからだが熱くなっており、その心臓の音が聞こえてくるぐらい鳴っている。

息も荒く、限界まで走ったように思えた。

「テイオー、速いなあやつぱり!!」

「ターボも速かったよ」

「次は勝つからな!!」

負けたのにターボはテンション上がりっぱなしである。

でも歩く余力もほとんどないだろうことは、付き合いがそれなりにあるテイオーにはわかっていた。

よいしょとお姫様抱っこで持ち上げる。

ネイチャも寄ってきて三人でライブ控室まで戻ることになった。

「テイオー、調子が悪いのか心配したんだぞ! パドックで元気なかったし」

「あはは、ごめんね、心配かけちゃったね」

本当に心配していたのだろう。

ターボはテイオーにギューツと抱き着いていた。

勝ち負けと関係なくこうやって心配してくれる彼女にテイオーはかけがえのなさを感じていた。

これがかきつと、皇帝が捨ててしまったもので、スペちゃんが捨てそうになったものなのだろう。

スペちゃんがあれだけ大反対していた理由がわかる気がした。

「お二人さん、仲良しだねえ」

「ネイチャのことも大好きだぞ!!」

謎の動作で跳ねるとネイチヤに抱き着くターボ。

そんなターボの口に、ネイチヤはニンジンのはちみつ漬けを詰め込んでいた。

レース後はエネルギーが足りないのだ。

こういった方法で栄養補給する必要があった。

もぐもぐするターボは確かにかわいらしい。

テイオーもターボに並んで口を開けたら、ネイチヤはテイオーの口にもはちみつ漬けを詰め込み始めた。

もぐもぐ。

甘くてとてもおいしい。

最低でもライブができる程度の体力を回復させる必要があるので、遠慮なく食べていた。

「テイオーはさ、なんで走ってるの?」

「?」

唐突なネイチヤからの問いかけに、テイオーは首をかしげる。

今日のネイチヤの走りは悪くはなかったように思うが、あの菊花賞の時のような、すべてを知り、操っているかのような怖さは全くなかった。

スランプか何かになっているのだろうか?

そんなことをテイオーは考えた。

「なんのため……」

「うん」

「みんなに追いつきたいからかな……」

「?」

「ネイチヤにも追いつきたいし、マックイーンにも追いつきたいし、皇帝にも追いつきたい。だからかな」

テイオーはそもそも外交的な性格ではない。

最近少しは改善されてきているが、もともと引きこもりのナメクジなのだ。

友達も作ることができないテイオーにとっての自己表現が走るこ

とだったのだ。

皇帝に憧れ、リギルに入り、紆余曲折を経てスピカに移籍し、少しは話せる相手が増えていても、それは変わらなかった。

「私に追いつきたいって、テイオーの方がよっぽど強いじゃん」

「そんなことないでしょ。今日でやっと一勝一敗だし」

今日みたいな単純な実力勝負な展開になれば確かにテイオーは負ける気がしない。

しかしネイチャの本領はレース展開を支配することだ。あれをやられるとあまり駆け引きが得意でないテイオーは勝てる気がしなかった。

「テイオー、ターボは？ ターボは？」

「ターボはもう、友達でしょ」

「うん!!」

嬉しそうにテイオーに抱き着くターボ。

「じゃあさ」

「うん？」

「一勝一敗になったし、私もテイオーの友達かな？」

「え、うん！ ネイチャも友達だよ！」

ネイチャにそう言われてテイオーは嬉しそうに頷いた。

テイオーが皇帝になるには友情は不要なのだろう。

心は不要なのだろう。

しかしテイオーは既に皇帝になるつもりはなかった。

抜きん出ずとも上に上がる方法はあるはずだ。

決戦の時は近い。

三人で楽しくはちみつニンジンを食べながらテイオーはそんなことを考えていた。

閑話：ゴルシちゃんネル　ぱーと4

「ということで、チームスピカの宣伝担当　兼　タキオン研究所宣伝大臣　兼　高知トレセン学園宣伝部長　兼　ブランドヘイロー宣伝執行役員　兼　メジロ家お抱え宣伝員　のゴルシちゃんだぞー」  
「司会進行のメジロマックイーン with サトノダイヤモンドです」  
「あ、肩書だけど募集中だからな。ふつおたと一緒に送ってくれよ」  
「それ募集するものじゃないと思うのですが……」  
「細かいことを気にするとはげるぞ」  
「ストレスで禿げるならリョティは今頃ツルツルですわ。というか禿げろ。という事で今回はゴールドシップとわたくしメジロマックイーンとマスコットのサトノダイヤモンドさんでお送りします」  
「よろしくなー」

「という事で最初は何からしますの？」

『「これ作ってみたかったん！絶対に美味しいタピオカ選手権」だ』  
「つまり？」

「各自がタピオカ料理を作って、そのおいしさを競うわけだ」

「試飲は私がやりますわ」

「……」

「なんですの？」

甘いものを期待してマックイーンが名乗りを上げたのだろうが、そんな簡単にいかなさそうであった。

「まあいい。マックイーンが全部試飲して、順位をつける審査員だ」

「まかせてくださいませ」

「という事でエントリーナンバー1番。エルコンドルパサーだ」

「……」

いやな予感がするマックイーン。しかしすでに逃げ場はなかった。

「ハーイー！　今回は、真っ赤なレッドタピオカドリンクを作ってきました!!」

「落ち着きなさいマックイーン、きつとあれは、そう、イチゴとかそう

いう系統の赤さですわ。まさかタピオカドリンクにサルサソースとかを持ってくるわけじゃないですわ」

「この赤ハ、トウガラシで作リマシタ!!」

「死んでしまいますわ!!!」

マックイーンが泣いても許されず、目の前に持ってこられた真つ赤なタピオカドリンク。

絶望の表情をするマックイーンだったが……

「エル?」

「なんですかグラス」

「食べ物で遊んではいけないって言いましたよね?」

「遊んでないデース!」

「そうですか」

乱入したグラスが真つ赤なタピオカドリンクのふたを開けると、そのままエルの口に全部流し込んだ。

「ぎよええええええ!!!」

「遊んでないなら自分で飲めますよね?」

「からいいいいいい!!!」

「お騒がせしました」

エルの首根っこをつかんで、グラスは控室へと戻っていった。

「あー、続いてエントリナーナンバー2番。スペシャルウィークだ」

「任せてください!!!」

そう言って持ってきたのは真つ白なタピオカドリンクだった。

「ミルクですか?」

「砂糖たっぷりホイップクリームを詰め込みました!!」

生クリームの中にタピオカを入れているというカロリーが狂気の産物だった。

ゴールドシップが止める前に、マックイーンは飲み始めてしまう。

「甘いですわ!!!」

甘党でなければ胸焼けしそうなものだが、激甘党なマックイーンにとっては至高の飲み物だった。

しかし絶対明日体重が増えるのが確定なやばいものでもあった。

しばらくマックイーンに何も食わせないことも検討するべきか、とゴールドシップは思った。

「続いてエントリーナンバー3番。セイウンスカイだ」

「ロシアンルーレットとタピオカ饅頭だよお」

セイウンスカイが持つてきたのは、葛桜のようなお菓子だった。タピオカ粉はでんぷんなので、こうやって透き通った饅頭を作ることも可能だった。

しかし、ロシアンルーレットとは何か。

絶対ヤバいのが混ざっている。

出てきた饅頭は三つ。赤、黄色、緑である。

どうやらゴールドシップとマックイーン、そしてサトイモの分のようだった。

サトイモはいそいそと緑色のものを取る。ゴールドシップが赤。マックイーンが黄色になった。

ゴールドシップが先陣を切ってかぶりつく。トウガラシとかだったら派手なりアクションを取ろうと思っていたが、幸いなことにイチゴジャムだった。

続いてサトイモが緑のまんじゅうにかぶりついた。ワサビだとかわいそうだな、と思ったがどうやら鶯餡だったようで、美味しそうに食べていた。

マックイーンが食べた黄色は芥子だったようでマックイーンは悲鳴を上げた。

「セイちゃんやりすぎだわ!」

慌てて出てきたキングが、マックイーンに紅茶を飲ませ始める。

どうやら自分のドリンクに使う予定だった紅茶らしい。

ふんわりした香りと程よい渋みで、どうにかマックイーンは立ち直るのだった。

「えらい目にありましたわ」

「マックイーンの悲鳴、ちよつとかわいかったぜ」

「褒められてもうれしくないですわ……」

「まあ気を取り直して、ふつおた行こうぜ」

「そうですね……ではゴルシちゃんネーム『醍醐』さんから。「この作品の中では、ゴルシとマックイーンのように血縁関係があるウマ娘はいますか？」」

「基本的に決まった設定はないな。変わった未来だとスぺのこの子供とかもいそうだけだな」

「トーホウジャツカルさんとかスぺちゃんの子ですが、惨劇の世界線ではどうなってたんでしょうね。続いてゴルシちゃんネーム『火焰狐コウ』さんから。「最初の方サラツとサトイモちゃんを攫ってたじゃないっすか。アレ、通報とかされなかったんすか…？」」

「通報されないようにご両親にちゃんとご挨拶して菓子折り持って行ったんだぜ」

「あらそうでしたの？」

「そうでしたのじゃねーだろ!! マックイーンが何もしないからゴルシちゃんが走り回る羽目になったんだぞ!!」

「ほつぺた引つ張らないでくださいまし——!!!」

めじろまんじゅうはとてもよく伸びた。

「ほら、次」

「ふえええ……ゴルシちゃんネーム『yadokari782』さんから「マヤノトップガンが同室のナメクジテイオーのことを、幽霊だと思っていたようですが、今はどうなのでしょうか？」」

「幽霊さんは成仏して、新しくテイオーが入ってきたと思ってるぜ。時々テイオーの枕元にお花をお供えしているらしい」

「結局勘違いは戻りませんのね……」

「という事で今回のゴルシちゃんネルはこのあたりなんだぜー」

「何かあれば活動報告の方にご連絡ください。お相手はメジロマックイーンと」

「ゴルシちゃんと」

「サトノダイヤモンドでお送りしました♪」

## 第九章 頂点までの道のり 絶対に勝つために

「ゴールドシップ、お願い」

「良いけどさ、役に立つかはわかんねーぞ」

「やってみてから考えるから」

テイオーが「絶対」を捨てることを決意し、新たな道を模索し始めて最初に頼ったのはゴールドシップだった。

ゴールドシップとしてもテイオーを勝たせてやりたいが、しかしどうやるかはまだ思いついていなかった。

テイオーとしてもまだその方法は思いついていなかったが、参考にとゴールドシップに併走をお願いしたのだ。

ゴールドシップ自身、能力が落ちない程度にはトレーニングを続けているが、身体能力はまだしも勝負勘は鈍りに鈍っている。

参考になる自信はなかったが、テイオーが望むならという事で一度併せて走ることにしたのだ。

クラシックデイスタンス2400m

芝のトレーニングコースで併走を始めるゴールドシップとトウカイテイオー。

テイオーはどうかやらゴールドシップをびったりマークするつもりのようなだった。大内を走るゴールドシップの外側にびったりとくっついて走り続ける。

序盤はとてもしろいなペースで走り始めたゴールドシップだったが、これは作戦でも何でもなく、ゴールドシップがこういう走り方しかできない故だった。

体格が大きく体が柔らかいゴールドシップは、それゆえ怪我をしなかったという利点があったが、一方で静止状態からの瞬発力に非常に欠けるという欠点があった。

そのため序盤はどうしても後ろにつくしかできなかった。

だがある程度スピードが出始めれば、そこからゴールドシップの



本領である。

ちょうど半分ぐらい、1200mのあたりを通過した時点で、ゴールドシップはスパートをかけた。

どんっ！　どんっ！

マックイーンの本家本元、ロングストライドを生かしたスパートである。

土と芝が舞う中、ゴールドシップは徐々に加速していく。

それに対して、テイオーはぴったりと外側マークを続ける。

ゴールドシップは察していた。

トレーニングコースのコーナーはかなり小さい。

このスパートの速度だったら内側を綺麗に回るのは難しい。

ならば外側でマークして、外にぶれた瞬間弾いて体勢を崩す、そんな、小倉記念でネイチャがマックイーンにやったことの亜種を考えているのだろうかと察した。

ちゃんと他人のことも見て自分の成長に使ってるんだなと感心したが、ゴールドシップはそれに乗るつもりはなかった。

その速度のまま、最内を器用に曲がっていくゴールドシップ。

外にぶれることのない完璧なコーナーリングである。

これにはテイオーも驚いた。

ゴールドシップはそのまま、テイオーを少しづつ引き離して、先にゴールしたのだった。

「ゴールドシップ凄すぎない？　あれで最内を回れるなんて思ってたかったよ。マックイーンも同じようにもっと内側まわれないの？」

「あー、これはたぶんマックイーンには無理だぜ」

「そうなの？」

マックイーンは追い込みの時はいつも大外まわりだ。

コーナーリングの都合で、外にぶれざるを得ないのだろうとと思っていたが、ゴールドシップぐらいの旋回半径で回れるならもっとやりたい放題できるだろうとテイオーは感じた。

だが、それも簡単ではないらしい。

「遠心力の問題だからな。内側に体を倒せば外に振られなくて済むが、倒せば倒すほど地面を蹴るのが難しくなる。うまく地面を蹴るには足首の柔軟性が必要だが、マックイーンは固いからな」

「あー」

ゴールドシップの柔軟性なら体を内に傾けながらも地面を強く蹴り出せるが、マックイーンにはそれが難しいという事だろう。

テイオーはゴールドシップやマックイーンと比べて小柄なので、まったく同じような走り方はできない。しかしゴールドシップ以上の柔軟さがある。

「参考になったよ、ありがとう」

「それならよかったぜ」

何かがつかめそうな気がしてきていた。

次にテイオーが教えを乞いに行ったのはグラスワンダーだった。

最近は生徒会の関係もあり、またリギル内もごたついているせいか、スピカでトレーニングしていることが多い彼女は、あの一番組まっていた時のスペシャルウィークに勝ったウマ娘だ。

皇帝に勝つにはあの絶対を破る必要がある。

それを成した先人に話を聞くのも大事だと思ったのだ。

「どうやったか、教えてもらえませんか？」

「なるほどわかりましたテイオーさん。でも私は、あまり複雑なことはしていませんよ？」

「？」

「私がしたことは二つ、走りをとにかく研ぎ澄ませること、あとはスペちゃんを想い続けること、この二つです」

「……」

テイオーはちよつと気まづい雰囲気になった。

スペシャルウィークがサイレンススズカ一筋なもの、そしてグラスワンダーがスペシャルウィークを好いていたのも、ある種の公知の事実だ。あまり実感していないのはスペシャルウィークぐらいだろう。

失恋の一連の話を聞きだしてしまい、テイオーは微妙な気持ちに

なっていた。

「気にする必要はありませんよ。あの気持ちだけは本物でした。そしてテイオーさんの思うシンボリルドルフへの、皇帝への気持ちも本物だと思います」

「ありがとうございます」

「あの人が何を悩み、何を苦しんでいるかを察してあげてください。私も、周りの誰も、きつとそれが本当は何なのか、わかっていません。あの人へのテイオーさんの想いが、きつと最後の一步に、あの人が手が届く一步になるはずです」

皇帝の周りに誰もいなかったわけではない。マルゼンスキーだった。いたし、エアグルーヴだった。仲間は何人もいたはずだ。しかし彼女の苦しみに手が届いた人がいたのか、テイオーにはわからなかった。そして、助けてあげたいとテイオーは思った。

「技術的な話はキングちゃんに聞いた方がいいと思います。私が勝てるお膳立てを全部してくれたのはキングちゃんですから」  
「わかりました。ありがとうございます」

テイオーはふと思った。

グラスさんがスペちゃんを助けたのはわかった。

しかしグラスさんは誰が助けるのだろうか。

失恋の痛みはいついえるのだろうか。

しかしそれはテイオーには関係のないことだ。傷に触っていないのはきつと当事者だけなはずである。

それでも優しいあの人が幸せになれることを祈らずにはいられなかった。

想いを一つずつ集めて

「いらっしやいテイオーさん。私も話したいことがあったのよ」  
「話したいこと？」

キングヒーローとの面会は、学園近くのヒーローブランドの店の一角になった。

テイオーが挨拶すると、キングも話したいことがあったような口ぶりに、テイオーは少し驚いた。

「この前の天皇賞秋の後、ネイチヤちゃんやターボちゃんがずっとテイオーのこと心配してたからね」

「あー……」

「皇帝を理解するために使ったっていう話はスペちゃんからも聞いていたけど、あれは本当に見ている周りが心配するのよ」

「ご心配かけました……」

「それはネイチヤちゃんやターボちゃんに言っておいて」

「わかりました」

所属チームの先輩にまで話が行ってしまうぐらい心配をかけたのかと、テイオーは反省した。

「仲直りには甘いものもいいよ！」と言いながらキングの隣にいたウララから渡されたスイーツ券をテイオーはありがたくいただいた。

「それで、皇帝に勝つ方法ね。多分、そんなに複雑な話じゃないわよ」

「え？ 本当ですか？」

「スペちゃんと同じものだとするなら、だけどね。方法は一つ、無視させなきゃいいのよ」

「？」

「スペちゃんのあれは、自分だけに没入して走り続ける方法よ。つまり気になる他人が思考の中に混じると途端に弱体化するわけ。あの宝塚記念の時、私が競いに行ったらから思考の純粋性がなくなったんでしょね。ビデオ見ると、スペちゃんも完全に最後へばってたし」  
「なるほど」

自分も使ったテイオーには非常にわかりやすい話だった。

心が揺らいだ瞬間、あれは使えなくなる。天皇賞秋の時点ではまだ使えたテイオーだが、きつと今はもう使えないだろう。それだけターボやネイチャのことがテイオーは気になっていた。

「あの時の私の実力じゃ、そのまま勝ち切ることもできずに最下位に終わったけど、今の私ならばあのまま勝ち切る自信があるわ。テイオーだって、できるでしょ？」

「頑張ります」

キングの堂々たる自信と、自分への当然のような信頼に、テイオーは身が引き締まる思いだった。

しかし、活路は見えた気がした。

「で、私のところに来たの？」

「マークとかそういうのがうまいと言ったらネイチャだし」

「いやいや、ライバルだし、最低後2戦はやるじゃん。私が嘘つくとか考えないわけ？」

「？ だって友達だし」

テイオーは首を傾げ、隣にいたターボも同じように首を傾げた。

謎の2対1の状況になったネイチャはひるんだ。

「しかたないなあ……」

「わーい、ありがとうネイチャー！」

「ま、できるだけわかりやすいように説明するけど、よくわからなくても許してよ」

「了解！」

「じゃ、まずは一本走ってみますか」

テイオーはそういうネイチャについてトレーニングコースに出ることになった。

「ターボは自由に走って。テイオーも好きに走っていいよ。私はテイオーをマークするから」

「わかった」

「がんばるよー！」

そう言つてターボは全力で走り始めた。

テイオーは一番慣れた先行策で、ターボについていく。

ネイチャはテイオーの外側にぴったりついていった。

ただ併走している、それだけなのに妙なプレッシャーを感じた。

友達だというのもあるが、それ以上にネイチャに意識が向いてしま  
う。

足音が、呼吸が、なんとなく気になるのだ。

ちらつと見るネイチャと視線が交わる。

なんか少しだけ気まずい雰囲気を感じた。

しかし目のあつたその瞬間、ネイチャはスパートをかけた。

完全に遅れたテイオーは、前を逃げるターボも、ターボをかわした  
ネイチャも追いつけずに沈むのだった。

「こんなかんじ。わかった?」

「えっと、ボク、ネイチャのことが好きなのかな」

「なんでやねん!」

ネイチャは思わずツツコミを入れた。

「だって、ネイチャのことが気になってしょうがないし、目が合うとド  
キドキしちゃうし」

「だからなんでやねん! マークつていうのはそういう風に意識させ  
るテクニクだってば!」

「二人が仲良しでターボは嬉しいぞ!」

ずれたことを言うテイオーにいつも通りのターボ。

ネイチャは苦笑する。

「で、冗談はさておいてどうやったかわかった?」

「冗談じゃないんだけど…… 多分、呼吸や走るテンポを合わせて、  
時々少しだけずらしてた感じかな?」

「そういうこと。特にライバルとか思っていると、こういうわずかな  
差が非常に気になったりするんだよね。ちなみに横でやると一番効  
果的だけど、前とか後ろでも普通に効果あるよ。ウマ娘はみんな耳が  
いいからね」

「菊花賞でネイチャにやられたあれか……」

「そゆことー」

後ろにくつついて、微妙に気になるぐらいのずらしをやりながら、少しずつテンポを上げていく。テイオーはそんな天才的なマークを受けて完全に掛かってしまったあのレースを思い出す。

方法としてはなるほどと理解できるものだった。

「単純についていくことによつてペースメイキング任せて楽するつていう方法もあるけど、まあマークするならこれくらいやってもいいかなつて思つたりするわけです」

「予想以上に高度な技だね、これ」

「まーね。私だつて、よほど研究した相手じゃないと使えないし」

「ふーん」

つまりネイチャもまたテイオーをよほど研究してくれているわけだ。

少しテイオーは嬉しくなった。

「じゃあ、ネイチャとターボにお礼として、スイパラに連れて行ってあげるね。チケツトあるし！」

「どれどれ…… ってこれ、期限今日までじゃん!!」

「ほんとだ!?!」

「じゃあみんなでスイパラまで競争だー!」

「ターボ!?! ちょっとまってー!!!」

ドタバタと走りだす三人組。

その姿はとても楽しそうであった。

## とどかぬ指先に祝福を

テイオーが次に向かったのはリギルだった。

一応の古巣であるが、テイオーは不義理をした記憶しかない。

それでもなりふりを構っている余裕がないのもあり、おハナさんに相談したところ勧められたので、テイオーはリギルのチームルームを訪れた。

ルドルフがいないのはわかってる。彼女はきつと、テイオーのかつての生息場所であるトレーニングルームにいるに決まっている。

そうして訪れたところにいたのは、マルゼンスキーとエアグルーヴだった。

テイオーはエアグルーヴが苦手だ。

なんせ何回塩を投げられたかわからない。

悪いのは自分だが、苦手意識は消えなかった。

「テイオーか。待っていたぞ」

「エアグルーヴちゃん、相変わらず口調が硬いわねえ」

「いえ、大丈夫です。マルゼンスキー先輩、エアグルーヴ先輩。今日はお時間いただきありがとうございます」

挨拶をしたらマルゼンスキーは驚いて、エアグルーヴは心配そうにテイオーのおでこに手を当てた。

「熱はないな」

「えっ?」

「いや、心を入れ替えたとスズカやおハナさんからは聞いていたが、どうしても信じられなくてな」

「あはははは」

よくよく考えなくてもクソガキな態度を取っていたからエアグルーヴの反応はもつともだと思ったテイオーは、苦笑するしかできなかった。

ネイチヤに持たされた菓子折りを渡して、さっそく二人からも話を聞き始めることにした。



「おハナさんから頼まれたが、話せることはそう多くはないな。レーズに絶対はないが、皇帝には絶対がある。それだけの強さを持ったウマ娘がシンボリルドルフだ」

「つよいよねえ」

「そうだ。私は母を継ぎ、皇帝を超えたかった。しかし、私には無理だった」

「……」

「私も、マルゼンスキー先輩も、皇帝を超えられなかった。私には才能が足りなかった。マルゼンスキー先輩には丈夫さが足りなかった。結局届かなかったのが私たちさ」

そんな弱音がああ女帝から出るなんて、テイオーは驚いた。

自分に厳しく、他人に優しいエアグルーヴはその強さに多くの者が憧れている。

だからこそ皇帝に並ぶ女帝という二つ名を持っているのだ。

テイオーだって、皇帝に対して程ではないが、彼女にある種のがれを抱いていた。

こんな悲しい顔をする人だとは思わなかった。

「私はテイオーに嫉妬していた。皇帝に並ぶ素質を持ち、皇帝に並べる健康さを持った君に嫉妬していたんだ」

「……」

「すまなかった。私はひどいことをした」

「そんなことはないです」

エアグルーヴに対して苦手意識はあるが、嫌いなわけではない。

仕事の邪魔ばかりしていたし、あんな文字通りの塩対応をされてもしょうがないことばかりしていた。

嫉妬などではないようにも思ったがエアグルーヴ先輩としてはそれでは気が済まないのだろう。真面目なことである。

「先ずはそれを言いたかったんだ」

「エアグルーヴちゃんは真面目ねえ……で、テイオーちゃんはルドルフちゃんに勝ちたいのよね」

「はい、それにはどうすればいいか、いろいろ考えているところです」

「そうねえ…… 単純に一つ言えるのは、一にも二にも、ルドルフちゃんには強いってことよ」

「強い……」

「そうよ。スピード、スタミナ、パワー、すべてがバランスよく高レベルなのがルドルフちゃんよ。単純に強い。勝つにはルドルフちゃんを実力で上回らないといけない。とても大変よ」

シンボリルドルフのトウインクル時代に戦った相手は弱い相手だけではない。

何よりあの三冠ウマ娘、ミスターシービーだって同時代で戦っているのだ。

同じ三冠ウマ娘すら勝ったルドルフが弱いはずがなかった。

ルドルフの単純な強さと、それを乗り越える必要があるとテイオーは気づく。その大変さを改めて自覚し、身を引き締めた。

「ボク、頑張るよ」

「テイオーなら皇帝を超えられるかもしれない。頑張れよ」

「うん、ありがとう」

覚悟を決めた表情で、テイオーは手を振りチームルームから去っていった。

「羨ましいな」

「そうね」

「私は彼女みたいになれなかった、皇帝には届かなかった」

「私も彼女みたいになれなかったわ」

「悔しいな」

「お姉さんの胸、貸そうか？」

「……」

皇帝を好いた二人。しかしその手が届かなかった二人。

その泣き声を聞いたのは、お互い二人以外にはいなかった。

## 特別なところ

「シンボリルドルフさんに、勝つためにですか？」

「スペちゃんからも話を聞きたいなって」

テイオーが次に訪れたのは生徒会室にいるだろうスペシャルウィークの元だった。

しばらく見ないうちに生徒会室の中身もかなり変わっていた。

前は各役員の机といす、そして応接セットであるソファと机しかなかった。

質実剛健な感じだった生徒会室が、今はカオスになっていた。

まず、机が大きなテーブル一つしかなくなっている。

「自由席です！」とスペちゃんがどや顔をしているが、書類の山があり、確実に席が決まっているだろうところが1カ所ほどあった。きつとスペちゃんの場所である。

他にも隅に畳が敷いてあるのはグラスワンダーがお茶をたてる場所だろうし、布製のハンモックはセイウンスカイあたりの持ち込んだものだろうか。

壁一面ぬいぐるみが置いてあって、スクールモットーもすでに埋もれているし、やりたい放題のカオスになっていた。

あの真面目なエアグルーヴが文句を言わないのか、少し不思議になった。

「ルドルフさんの実際の走りって見たことないんですが、この前のテイオーさんのと同じでいいんですよね」

「そうだと思うよ」

「んー、それならそんなに怖いですか？」

「え？」

スペはとんでもないことを言い始めた。

「いえ、ルドルフさんは無敗の三冠を達成して七冠を達成した、すごいウマ娘ですよ。今の練習してない私ではとてもかなわない相手だとは思いますが」

「そうだよね」

「でも『それ以上に』強いですかね？」

「皇帝だから強いんであって、絶対だから強いわけではないと思います。むしろ完璧な皇帝の弱点がそこなのではないかと思えます」

「むむ……」

「精神は肉体を凌駕するともいいます。絶対の状態の精神が強いとはとても思いません。スピードでもスタミナでもパワーでも勝つのが難しいなら、勝つにはそこをつくのが一番かなあと」

「なるほど」

皇帝の走りは確かに強い。テイオーもかなりのものであるという自負があるが、皇帝に敵うかというところ若干疑問符がつく。だからここぞこうやっていろいろな対策を考えているのだが、スぺの言うことは确实なきっかけになった気がした。

ただ速いウマ娘が勝つわけではない。ただ強いウマ娘が勝つわけではない。

それは今までの経験でテイオーが一番わかっていたことだ。

「ありがとうスぺちゃん。とっても参考になった」

「絶対勝ってくださいね」

スぺは笑顔でそう激励した。

「テイオー、頑張ってるみたいですね」

「マックイーンも、頑張ってるみたいだからね」

スピカのチームルームに戻ってくると、そこには偶然マックイーンが残っていた。

すでに怪我も治り、リハビリに励んでいる状況だと聞いている。

現状は低負荷で長時間動いて固まった関節などを柔らかくしているのだろう。だからこそマックイーンは遅い時間までチームルームにいたのだろうとおもった。

「マックイーンはさ」

「なんですの？」

「どうして頑張ってるの？」

「ん〜 結構難しい質問ですわね」

テイオーは今年の前半、マックイーンと競い続けてきた。とても強かったが、それ以上にマックイーンは身を削るようにレースに出ていた気がした。

そこまでして頑張っていた理由は何か。少し気になった。

「私のためでもあり、ゴールドシップのためでもあり、メジロ家のためでもありますわね」

「多いね〜」

「私は欲張りなのですわ。それだけ目標があれば、それだけががんばれますの」

「マックイーンは強いね」

ゴールドシップのことはある程度聞いている。

メジロ家の因縁は単純に有名だ。

背負うものは時につらいが、それだけ力を与えてくれるのかもしれない。

「テイオーだつて同じではありませんか」

「ボクが？」

「自分のためでもあり、共に競う友のためでもあり、目指すシンボリルドルフのためでもあり、指導してくれるスズカやゴールドシップのためでもあり、私よりよほど背負っているように思いますわ」

「……そうかもしれないね」

思えば走り始めた時とはまるで違った。遠くまで来たような、そんな気がした。

「初めてあなたと走った時」

「ホープフルステークスの時だね」

「テイオーのこと、なんて詰まらない子なんだろうって思っていました」

「ボク、そんな風に思われていたんだ」

負けた後、さっさとクラシックに出ないと宣言したマックイーンに、テイオーは見捨てられたと悲しんだが、まったくその通りだったようだ。

「菊花賞でネイチャさんと走っているのを見ても、全く燃えませんでしたし」

「そうかもねえ」

「でも、大阪杯の時は、テイオーは強くなっていました。とても強くなっていて、目を離せなくなりました」

「そうだったんだ。ちよつとうれしいかも」

「天皇賞、そして宝塚記念。テイオーは私よりどんどん強くなって、最後には負けてしまいましたわ」

「頑張ったからね」

テイオーのことをある意味一番追いかけてきたのは、マツクイーンかもしれない。

がんばって、勝って、最後に負けて。とるに足らない詰まらない相手にいつの間にか追い抜かれていた。

「私に勝ったんですから、皇帝にだって負けてはいけませんよ」

「責任重大だなあ……」

様々な思いがテイオーの肩に乗っていく。それはとても重くて、とてもきついけど、いやな気持はしなかった。

## 閑話：幸せな未来への覚悟

「なんでこんなに頑張ってくれてるんだ？」

ゴールドシップを未来に送り届けるという計画をゴールドシップに隠さなくなつた結果、ゴールドシップ自体を被検体として利用し実験することが可能になっていた。

測定にどんな意味があるのかゴールドシップにもわからない。

どうかタキオン周辺の一部研究者しか理論も何をしているのかもわからない状態だった。

暇そうにベッドに座るゴールドシップは、タキオンにそんなことを聞いた。

「逆に聞こう。なんでキミはそんなに頑張るんだ？」

「？」

「未来から来たキミに関係ある相手なんて、マックイーンとリョテイの奴ぐらいだろう？ 私も、スズカ君も、スぺ君も、テイオー君も、他のキミが助けてきたいろんな人たちも、皆キミとは関係がほとんどないはずだ。なんでそんな相手にも、キミは手を差し伸べたんだ？」

「なんでだろうな……泣いてるのが嫌だったからかな」

「それが分かっているならなんでみんなキミのために頑張るかも簡単だろう。無益な質問さ」

いつもだと特にゴールドシップに対してはくどいぐらい説明してくれるタキオンには珍しい突き放すような回答であった。

「もしかして、怒ってる？」

「ふふ、どうかね」

そう言うタキオンの耳は思いつきり後ろに向いている。耳を絞るというこの動作は怒りを示している。

言うまでもなかった。

「そういうところはマックイーン君に本当にそっくりだね」  
「？」

「他人のために動けるのに、その相手のことをあまり考えないで突っ走ってしまうところさ。だからこそ助けられる人も多いのだろうけ

ど、ときには非常にイラつくこともあるよ」

「……」

ゴールドシップ自身心当たりがないわけではなかった。

ゴールドシップは協調性がないのは自分が一番わかっている。

そういうところがマッククイーンそっくりと言われて、嬉しいような、複雑なような、そんな気持ちだった。

「だからね、私もキミがどう考えているかとか、考えないことにした。キミが望んでいなかろうと何だろうと、「私が」キミが消えるなんていう結末に耐えられないから、無理やりでも未来に送ることにした。ただそれだけさ。感謝なんてしなくていいよ」

このままこの時間軸にゴールドシップをとどまらせる、という方法も検討していたが、それは非常に難しそうだ、というのがタキオンの結論だ。

修正力が強くなり、ゴールドシップの存在を維持するのが難しくなっているのは数値でも出ている。

5年という期限はおそらく間違いないだろう。

だからこそ何でもやっている。

最近はずカ經由でフクキタルまで呼んで神頼みだっけしている。

一人のウマ娘にこんな過酷な運命を背負わせる三女神はいつか締め上げると誓っているタキオンだが、それはそれとして祈ってうまくいくなら全裸で土下座だって何でもやってやる覚悟だった。

それが理解できないゴールドシップにタキオンは苛立っていた。

情操教育が不足しているのではないか。誰のせいだ。きつとマッククイーントリヨテイのせいには違いはないだろう。

あの二人にタキオン特製七色青汁を飲ませるのを心に誓った。

タイムリミットが来た時に、何が残り、何が助かるのか。

全く予想ができていなかった。

しかし絶対に幸せな未来を作って見せる。タキオンはそう決意していた。



## 年末のグランプリ

「しっかし、ほんとスピカだらけだな」

「カノープスだって同じぐらいでてるだろ」

有《font:ul40》馬《font》記念。

年末の総決算となるこのレース。

香港ヴァースに勝利し、年末限りでドリームトロフィーリーグに移籍する予定のキンイロリヨテイと、スピカの応援に来ていたゴールドシップは隣でそれを見ていた。

スピカから出ていたのは

天皇賞秋とジャパンカップに勝利し、秋のシニア三冠に王手のかかったトウカイテイオー

トリプルティアラを達成した新女王ダイワスカーレット

ダービーに勝利し、ジャパンカップも2着と健闘したウオッカ

そしてダービー後長期療養に入っていたアグネスタキオンの四人であった。

誰もが有力バであり、誰が勝ってもおかしくないメンツである。

一方のカノープスからは

去年の有《font:ul40》馬《font》記念勝ちウマ娘

ナイスネイチャと

菊花賞ウマ娘のマチカネタンホイザ

そして天皇賞秋2着だったツインターボ

そして鉄の女、G1今期9戦目のイクノデイクタスが  
出ている。

リヨテイは残念ながら2週間前に海外G1に出て勝利していたために出ることができずにいたが、それでもカノープスからもかなりの数のウマ娘が出ている。

「スピカの方は誰が調子がいいんだ？」

「テイオーはいつも通り好調だな。三冠目指して頑張っている感じだ。スカーレットはティアラ路線を制覇して絶好調だ。ちよつと掛

かり気味なのは気になるが」

「タキオンの奴は大丈夫なのか？」

「まあ悪くはなさそう、ってかんじかな」

ここでケガをされては元も子もない以上、タキオンは安全第一の調整をしている。

調子は8割がた、といったぐらいだろう。万全とはいいがたいが、それでもやる気はあるようであった。

「カノープスの方はどう？」

「イクノとターボはいつも通り、マチタンはこの前変なもの食ったみたいで調子が結構良くないな。ネイチヤは少しは吹っ切れて上向ってきたがまだまだ、といったところか。全体的にいまいちだな。今のイクノじやさすがに力不足だし、ターボは2500mは長すぎると思うしなあ」

一方のカノープスの方はいつも通りといえはいつも通りパツとしない感じである。

ターボは2500mは長すぎる。本人が出たいというから出走しているが、おそらくスタミナが持たないだろう。

イクノは頑張っているがまだG1の一線級でないのは先のシルバークレクターであったリョテイの感覚から間違いないだろう。

ネイチヤとマチタンは勝負になる実力があるが、ネイチヤは今期は調子がいまいちだ。

最近やつと何か吹っ切れてきたようだがそれでも少し厳しい。

マチタンは体調不良で正直微妙である。

ただ、こんな微妙なのがカノープスである。

去年何を間違ったか最優秀チームになんかなくなってしまったが、本来癖があつてあまり走らないウマ娘の寄せ集めチームなのだ。

だからなんかパツとしない、ぐらいがちようどいいとリョテイはどこか安心感を抱きながら思っていた。

だが、それはそうとして頑張ってもらいたいという先輩として複雑な思いを抱くりョテイであった。

シニア三冠。

春と秋に行われるそれを制覇した者はいまだいない。

その過酷さをテイオーは身をもって知った。

春は2000m、3200m、2200mと長い距離と短い距離が混在した3レースだった。その三つとも勝利するというのは非常に難しい。

特に三つ目の宝塚記念は、短距離路線で走っていたものや、前半不調だったものが出てくる激戦であり、非常に難易度が高いレースであった。

そして秋の三冠。距離は2000m、2400m、2500mと春に比べれば距離のばらつきは少なめである。

しかしこの有馬記念が最難関である、とテイオーは考えていた。

クラシッククラスが本格的に出走してくる、まさにこの年の総決算である。

スピカの面々はじめ、レースでは初めて対戦する相手も多い。

厳しい状況だが、それでもテイオーは負けるつもりはなかった。

ピリピリした空気が流れる中、相変わらず一人ターボだけは楽しそうにびよんびよんしている。

あまり暴れすぎて体力を消耗しないようにか、ネイチャがターボを抱きしめた。テイオーが手を振ると、二人とも楽しそうに手を振り返してくれた。

## 祭りの始まり

ファンファアールの鳴った後、ゲートインは特にトラブルもなく終わる。

そうして一瞬の沈黙の後、ゲートが開き、レースは始まった。

グランプリレース、有馬記念に出場するのは一流のウマ娘ばかりである。

この時の出場するウマ娘もまた、皆一流ばかりであった。

特に目立って出遅れるウマ娘もおらず、並んでスタートする。

いつものようにハナを切るために全力で飛ばすツインターボ爆逃げするためにセーブしない逃げをするダイタクヘリオス

そしてそれをいつもの頭が高い走り方で追いかけるメジロパーマー

三人が一気に飛び出し、先頭争いを始める。

単純な瞬発力ならヘリオスが

最高速度ならターボが

スタミナとパワーならパーマーが

それぞれ優れる状況での先頭争いである。

一番最初に先頭に立ったヘリオスに最高速度で勝るターボが追い抜こうとし

その二人に駆け引きで迫り追い抜こうとするパーマー

激しい先頭争いが始まっていた。

その後ろ、先行集団にはダイワスカーレットとトウカイテイオー、

そしてイクノデイクタスがつけていた。

こちらもちちらで激しいポジション争いが起きていた。

年末の冬の有馬記念の芝はかなり荒れている。

どうしても冬場は芝の生育が遅い上、レースを繰り返して芝の生育が間に合っていないのだ。芝のコースにもかかわらず、砂ぼこりが舞うぐらい芝が荒れて、バ場が重かった。

そのためより良い芝の部分走ってスタミナ消費を抑えたいのだが、そのコースをテイオーとスカーレットが争っていた。

今のところテイオーの方が優勢である。

駆け引きという面については、強力なライバルがいてレース経験の多いテイオーの方がスカーレットより勝っていた。

だが、特にパワーについてはスカーレットの方が分があり、どうなるかわからない状況である。

そんな二人のポジション争いから一步引いて、良さそうな場所を走り続けているのがイクノデイクタスだった。

タキオンは、今回は後ろ気味に控えていた。

タキオンの得意戦法は先行である。しかし先行策で行くと確実にスカーレットと競合し、またテイオーと競合する可能性も高い。

休養明けで勝負勘が鈍っている。

そんな中でポジション争いは分が悪いと考えていた。

それなら後ろからの勝負の方がいいだろうと思つて後ろにつけたのだ。

だが、そんなタキオンをマークし続けているのがナイスネイチャだった。

ネイチャがタキオンをマーク相手にした理由は、ある種の消去法だった。

テイオーを相手にマークするのは少し厳しい。

テイオーも対マークやらマークやらの練習をしているし、お互いそれなりに研究している。

テイオーだけならギリギリ勝てる可能性があるが、おそらく潰しあいになったら二人して沈むだけだとネイチャは判断していた。

ならばという事でマークしたのがタキオンだった。タキオンの実力はネイチャもよく知っている。おそらく単純な走りというだけならばテイオー以上の才能を持つウマ娘だ。しかし休養明けで勝負勘が鈍っているだろうからここがねらい目だと思つていた。

そんな風にタキオンとそれをマークするネイチャ、そしてウオツカ

をはじめ他のウマ娘達は後方で一団となって走っていくのであった。

## 決着

ホームストレッチで大歓声を浴びながら、逃げる三人はさらに速度を上げた。

ここまでくると逃げる三人は意地の勝負になってくる。

駆け引きも何もない、後続全て含めた潰しあいになるハイペースである。

1000mのタイムは57秒台という信じられない速度で通過していく。

この時期の中山レース場の芝は非常に重くスピードが出にくい。さらにホームストレッチには有名な中山の坂がある。

にもかかわらずこの速さである。

第一コーナーに入る頃にはすでに実力に劣るウマ娘から少しずつ脱落していく狂乱のペースであった。

先行集団は少しばらけ始めた。

このペースに完全についていくか、それとも少し様子を見てスピードを落とすか、の差である。

ダイワスカーレットはこのペースについていくことを選んだ。

彼女の売りは体格に似あったパワーと、負けず嫌いな精神力だ。ここで様子を見るなんて大人しい選択を取るようなウマ娘ではなかった。

一方トウカイテイオーは少しだけペースを落としたり。

明らかに速すぎる。全体のペースに巻き込まれて自分のペースを乱されるのをテイオーは嫌った。

後についていくイクノディクタスは二人のペースを見て自分もペースを下げた。

必然的に先行集団は縦に並んで走るようになっていく。

後方集団では早くも何人か遅れ始めていた。

ウマ娘にとって、1秒の差は約6バ身、12mぐらいといわれている。

る。

1000mをたとえば60秒で走れば、その時点で18バ身、36mは差がついてしまう。

ちなみに有馬記念では最初の1000mを先頭が62, 3秒ぐらいで走るレースもままあるぐらいスピードが出ないレースである。

それでも62秒で走れば30バ身、60mもの差がついてしまう。さすがにこうなったらいくら脚を溜めても追いつけるものではない。

最低限差せるだけの距離を保たなければならぬが、それができなかったウマ娘は脱落していくしかなかった。

タキオンは戸惑っていた。

予想以上に脚が重いが、それはまだ想定範囲内だ。

一緒についてきているネイチヤのマークが厳しい。

自分に余分にスタミナを使わせ、それでいながらちやつかりスタミナ消費を抑えるようないやらしいやり方だ。体力を吸い取られているのではないかと錯覚をしてしまう。

加えてこのハイペースだと、体力が持たないような、そんな気がしていた。

一方のウオツカは隙を狙っていた。

彼女はライバルのスカレットを基軸に見ていた。

先に大逃げする3人がいるとしても、スカレットの位置でも通常なら十分大逃げと評価される位置だ。

そしてウオツカのいる後方集団だって、通常は先行策といわれるようなそんな速度で走っている。差すんじゃないやなくて、先行から抜け出す、そんなイメージで走るべきだと意識を切り替えていた。

先行策からの抜けだしは、普段はやらないが、スピカでは得意なメンツが多い。彼女たちから見て、時には練習に付き合っ、やり方はわかってる。

ちようにいいところでウオツカは抜け出すべくタイミングをうかがっていた。

第二コーナーを曲がって残り1000mのハロン棒を越えても、前



3人のペースはあまり落ちていなかった。

しかし息も入れずに逃げ続けたせいで、三人とも体力がつきつつあった。

明らかに速度が落ちながら、第三コーナーを曲がり始める。

しかし一方で、後のウマ娘達もコーナーで一息を入れるべく速度を少し落としていた。

直線に入り、まず先頭から脱落したのはツインターボだった。

彼女の距離適性から言っても、2500mは長すぎた。すぐにずると後退していく。

同時にダイタクヘリオスもまた、ずると後退していく。彼女もどちらかといえばマイラーであり、距離適性から言っても走れる距離ではなかった。

一人、パーマーだけがスタミナと執念に任せて先頭を走り続けた。

そこを一気に差したのが紅の女王、ダイワスカーレットだ。

大逃げに近いペースで脚はほとんど残っていないかったスカーレットだが、しかし前を行くパーマーをぎりぎり差せる程度の余力は持っていた。

そのまま差してゴールを目指すスカーレット。鬼の形相に普段の余裕は一切ない。

このまま最後まで気合と根性で粘ろうとしながら坂に差し掛かったスカーレットを、しかしトウカイテイオーがさらに外側からすると差した。

坂のところで減速した一瞬を突いた抜け出しだった。

そのまま快調に坂を上っていくテイオー。もちろん余裕なんて一切残っていない。

しかし体力を振り絞りながら坂を上っていく。

後方集団がすさまじい勢いで追い上げをしてくる。

特に最内を駆けあがってくるウオツカの勢いは尋常ではない。垂れてきたターボとヘリオスかわし、どうにか追いつかろうとする

パーマーをかわす。

最後の方までついてきていたタキオンは、すでにスタミナが切れて沈んでしまっており、それをマークしていたネイチャはあわててスパートをかけ全力で追いかけて始めるが、タイミングを逸している感じであった。

テイオーは負けたくなかった。

いつも負けたくないとは思っていたが、今の気持ちはもつと重いものに思えた。

これが終わればテイオーはドリームトロファイリーグに移籍予定だ。もしかしたらドリームトロファイリーグでまた競うこともあるかもしれない。しかしその可能性もそう高いわけではない。

最後の勝負。だからこそ全力を尽くし、負けたくなかった。

後悔をしたくなかった。

ゴールした瞬間に一片の余力も残したくなかった。

全力で走り続けるテイオー。

追い抜いたパーマーやスカーレットの圧をまだ感じる。

後ろからさらにすさまじい勢いで追いかけてくる圧も感じる。

それらから逃げきるように最後の力を振り絞った。

全身全霊尽くし、ゴールに飛び込むトウカイテイオー。

最初にゴール板を過ぎると、テイオーはそのまま地面に倒れ込むのであった。

## 祭りの後

本当に一歩も動けずに倒れるテイオー。  
よろよろと遅れてゴールしてきたターボがその上に倒れてきた。  
ターボもまた余力を使い果たしたのだろう。

「おーもーいー」  
「むーりー」

小さくつぶやくテイオーとターボ

二人とも立ち上がる余裕もなかった。

どうにか三着には入ったネイチャが二人に寄ってくる。

最初は肩を貸して二人を連れていこうかと考えたが、さすがに二人一度は骨が折れる。

それにどちらか運ぶと絶対あとで文句を言われる。

かといって担架を呼べば大事になる。

二人とも疲れ切っているだけなのでそこまで大事にする必要性も感じなかった。

どうしようか迷っているとイクノがターボをつまみ上げた。

「ターボさん、ダメですよ。テイオーさんに乗っかっちゃ」

「イークーノー」

イクノはそのままターボを抱き上げた。

「お疲れ、テイオー」

「お疲れ、ネイチャ」

ネイチャの差し出した手を握ってテイオーは立ち上がる。

そのまま大歓声の観客にテイオーは手を振った。

皇帝も誰もなしえなかった秋のシニア三冠である。

その歴史的瞬間に観客は大歓声を上げていた。

「おめでとう、テイオー」

「いやあ、速すぎでしょ、テイオー」

「すごかったよ、テイオー」

他の参加者も皆から祝福の言葉をもらい、テイオーはとてもうれし

かった。

おそらく内心は悔しがっている子もいるだろう。

涙を呑んでいる子もいるだろう。

それでもこうやって健闘をたたえてくれているのだ。

それがうれしくて、テイオーは皆に頭を下げた。

テイオーが思い出したのは、皇帝シンボリルドルフの二回目の有馬記念である。

皇帝の二回目の有馬記念も、こうやっていろいろな人に祝福されていたのを覚えている。

テイオーが全力で出した大声が聞こえたのか、皇帝も小さく手を振ってくれたのも覚えている。

並ぶものはいなかったかもしれないが、それでも彼女はこうやって同じように祝福されていたのだ。

テイオーはもう一度覚悟を決め直したのだった。

ライブが終われば、あとは適当に皆で食事でもして帰るだけである。

テイオーはスピカやカノープスのみんなと打ち上げをすることになった。

マックイーンが「私、いいお店知っていますの」というのでついていったところはただの焼き肉食べ放題の店であった。

てつきり高級な店だと思っていたのに、案外普通の店で皆顔を見合わせた。

とはいえ食べ盛りのウマ娘ばかりであるのも考えると、こういう店の方がいいのかもしれない。

主にトレーナーの財布的に、であるが。

テイオーは、ネイチャ、ターボ、マチタンの三人と同じ席に座った。

見事にカノープスばかりであるが、スピカメンバーの席はどこも地獄そうだったので避けた形である。

マックイーンのところはゴールドシップ、イクノ、そしてリョテイというなんかよくわからない家族オーラを出す席になっていた。とてもではないがテイオーが割り込める気がしない。

スぺちゃんのところはスズカとなぜかいるグラスワンダーの3人だ。イチヤイチャする二人に茶々を入れるグラスという謎空間に足を踏み入れる勇気はテイオーにはなかった。

ダイワスカーレットとウオツカはいつものように言い争いしながら肉を焼いて、それをタキオンが食べるという謎サイクルが出来上がっていた。あの元気な二人と一緒の席はそれでつらい。

唯一ありそうなのは、キングとウララのペアのところだが、そっちに移っても結局カノープスばかりだし、トレーナー二人がそちらに移っていったので遠慮していた。トレーナーたちが休める場所も必要だろう。

自称普通のペースで、すごい勢いで肉を置きまくるマチタン。焼けてない肉を食べようとするターボ。そしてその二人を制御するネイチヤという予想できた展開になりつつあった。

「テイオーとの実戦は今日が最後かなあ」

「ネイチヤもドリームトロファイリーグに移籍すればまた当たるでしよ」

「私はしばらくトウインクルシリーズにいる予定だからね」  
「へえ、そうなんだ」

ドリームトロファイリーグは大きいレースは年2回、あとはその予選しかなく、レース回数が劇的に下がる。

その分体調管理も楽になるし、勉強など将来の準備に使える時間も増える。

しかしやはり、注目を集めるのはトウインクルシリーズの方だ。こちらに居続けるウマ娘も時々いた。典型としてはキンイロリョテイだ。今年末でやっとドリームトロファイリーグ移籍予定だが、彼女はスズカと同期だ。

かなりの期間トウインクルシリーズにいたことになる。

スズカやエアグルーヴだけでなくスぺたちの世代とも、マックイーン

ンやテイオーとも勝負を繰り広げて来た彼女だ。知名度や人気だけなら一番かもしれない。

ネイチャももしかしたらそういう路線に進むのかもしれないな、とテイオーは思った。

「でも、練習とかならいくらでも走れるし。ボク達、友達だからね」

「ターボも走る!!」

「だからターボ、それ焼けてないってば!! でもそうね、また一緒に走ろうね」

「うん」

大騒ぎしながら食べる焼肉はとてもおいしかった。

有馬記念後、トウカイテイオーは年度最優秀ウマ娘に選ばれた。

秋のシニア三冠を達成したテイオーは、既に皇帝を超えたか、などといわれることもある。

しかし、テイオーは、確実に皇帝を超えたと皇帝に見せつけるために、ドリームトロフィーリーグに移籍し、皇帝に挑むつもりであった。ウインタードリームトロフィー

その時は近づいてきていた。

閑話：ゴルシちゃんネル ぱーと5

「ということで、チームスピカの宣伝担当 兼 タキオン研究所宣伝大臣 兼 高知トレセン学園宣伝部長 兼 ブランドヘイロー宣伝執行役員 兼 メジロ家お抱え宣伝員 兼トレセン学園イベント実行委員長 兼 タキオン発光センター大総統 兼 ゴルシちゃんネル進行係 のゴルシちゃんだぞー」

「司会進行のメジロマックイーン with サトノダイヤモンドです。また肩書が増えましたのね」

「そろそろというのがつらくなってきたんだぜ……」

「しかしそれでも肩書やふつおたは募集しております」

「奮ってお便りくれよな！」

「という事で今回もゴールドシップとわたくしメジロマックイーンとマスコットのサトノダイヤモンドさんでお送りします」

「よろしくなー」

「という事で最初の企画は…… ウマ娘にウマ娘プリティーダービーやらせてみた!! だぜ!!」

「もう何でもありなのですな……」

「ひとまずゴルシちゃん世界から、スマホを3台持ってきたので、みんなでやるのぜー!」

「わーい、私、マックイーンさんの育成をします!!」

「そうか、頑張れよ」

そうして嬉々として始めたサトノダイヤモンドのメジロマックイーン育成

2番目の目標、「ファンを3000人集める」をホープフルステークスで達成しようとして当然のように5着になって失敗。京都ジュニアステークスに出るだけの知識がサトイモにはなかった。

メジロマックイーンを作ってしまったサトイモはショックを受けていた。

マックイーンもまた、メジロマックイーンの育成をしているよう

だ。

そして同じように2番目の目標、「ファンを3000人集める」を  
ホープフルステークスで達成しようとしていた。

「メジロ家の名を懸けて!!」

そう言ったマックイーンのメジロマックイーンはなぜか追い込み  
を指示をされてそのまま前が詰まって沈んでいき、16着になってし  
まった。

メジロマックイーンを作ってしまったマックイーンは切れていた。

「なんでですの! 私は追い込みで勝ちましたのに!!」

「原作要素全てに喧嘩を売ってるこのお話のマックイーンがおかしい  
んだよ」

ゴールドシップは的確に突っ込んだ。

ゴールドシップは無難に進めていき、Aランクゴールドシップを無  
事に作り上げた。

ゲート難がついているのはお約束であった。

「という事でふつおたのコーナーだ」

「では最初はゴルシちゃんネーム「ピノス」さんから『メタな話かもで  
すが、紫電の女王との繋がりやクロスオーバー等はあつたりしますか  
?』」

「ない! あつちの世界はやばいからな! 絶対に混ぜない! そもそも  
そも皇帝のキャラからまるで違うしな!」

「最近は更新できていませんが、落ち着いたらまたしたいところでは。  
続いてはゴルシちゃんネーム「ウルト兎」さんから『ゴルシちゃん達  
が好きな曲はなんですか?』」

「なかなか難しいな。でもゴルシちゃんは「ドーナツホール」だな。米  
津玄師のやつ。ドーナツの穴つとつても惹かれるじゃん。そもそ  
もこの話自体、ゴルシでドーナツホールっていう動画見て思いついた  
話だからな」

「そうなんですの」

「サトイモはなんだ?」



「はじまりの signal です!!」

「マックイーン狂信者め…… マックイーンは？」

「六甲おろし？」

「野球狂いめ!!」

「いいじゃありませんか。好きなんですよ。さて、続いてはゴルシちゃんネーム「(●?)、(●)」さんから『惨劇世界ではテイオーとお米が事故で亡くなってトドメ刺してたけど、この世界線むっちりんは実際パエリアと戦ったことってあるの?』」

「ライスシャワーって今何してたつけ？」

「そろそろメイクデビューだったはずですわね。チームはわかりませんわ」

「スピカにくんのかな？」

「さあ…… 最低でもまだ一緒に走ったことはありませんわね。続いてのゴルシちゃんネーム「ゼルガー」さん。『今回は突如現れた緑の悪魔に存在を消されかけましたが、何とか再生できました。』」

「生きてたか。めでたいな」

『劇場版、黄金船の長い旅路、歴史の真実、今まで精霊ウマ娘達によって改変されてきた歴史のツケが今襲い掛かる とかどうでしょう』

「いや、それ多分あんまりおもしろい展開にならねーぜ」

「? そうでしょうか？」

「だってグラスの怨念はきつとグラスの薙刀で真つ二つじゃん」

「グロですわね」

「スぺの怨念はたぶん飯食わせれば丸くなって無力化できるじゃん」

「弱すぎませんか？」

「マックイーンの怨念もスイーツ食わせればいいし、スズカの怨念とかずつと左回りで回ってるだけだろ」

「テイオーは？」

「塩撒いておけばいいだろ、怨念にナメクジとか塩絶対効くじゃん」

「たしかに」

「まー、悪夢シリーズは終わった後に追加で書くかもしんねーな。2

期に出てきた人たちはやってねーからな」

「予定は未定です」

「という事で今回はこの辺でだぜー」

「次回から最終章ですが、最終章の後にも1回はやりますのでふつおた等は募集しております」

「よろしくだぜー」

「お相手はメジロマックイーンと」

「ゴルシちゃんと」

「サトノダイヤモンドでお送りしました♪」

## 最終章 すべてのウマ娘を幸せに ドリームトロフィーシリーズ

ドリームトロフィーシリーズは、いわばプロリーグである。

賞金もきちんと出るそのリーグ戦は、年に2回、総決算としてのドリームトロフィーレースが行われる。

トウインクルシリーズでの成績は一切不問で予選から競っていくレースだが、結局トウインクルシリーズで強かったウマ娘がそのまま強いというのが基本だ。

なので総決算のサマードリームトロフィーとウインタードリームトロフィーでは、トウインクルシリーズで有名だったウマ娘が揃うことが非常に多い。

だが、有名だったウマ娘がすべて出てくるわけではない。トウインクルシリーズから移籍後、勉学や仕事などによりトレーニング量を減らすウマ娘も少なくないのだ。

そう言う子たちも気分転換を兼ねてレースに参加するが、大体本戦には上がれず、本戦に上がったとしても実力は今一つということになってしまうことが多かった。

例えば生徒会長になったスぺなんかはもうボロボロである。トレーニングしていない上に体重が増えてしまい、予選でスタボロに負けていた。

グラスワンダーやセイウンスカイといった他の生徒会メンバーもトレーニングがほとんどできておらず予選で負けている。

スぺの同世代では、キングも家業の手伝いに忙しくともではないがトレーニングができていないため、やはり予選敗退。

唯一エルコンドルパサーが頑張っているといった状況だった。

そんな中、今年度のサマードリームトロフィーに勝利し、二連覇を狙うのが絶対皇帝シンボリルドルフだった。

生徒会長だったときは業務が忙しかったため、トレーニングもあまりできておらず成績はそれなりぐら이었다が、生徒会長を辞めてか

らの強さは絶対的だった。

強すぎてつまらない、などといわれるぐらいに圧倒的に強かった。

ウインタードリームトロフィーレース自体は、距離ごとに短距離1000m　マイル1600m　中距離2400m　長距離3000mの四種類がある。

それぞれのウマ娘が得意な距離に参加しているが、一番注目が集まるのはクラシックデイスタンスである2400mの中距離レースであった。

シンボリルドルフが参加するレースもこれであり、トウカイテイオーがシンボリルドルフに挑むのもこのレースだった。

今回のレース、スピカから出ているのはトウカイテイオー以外にはサイレンススズカだけである。トレーナーになる勉強の傍ら、トレーニングを欠かさなかったスズカは全盛期ほど走れる自信があった。

しかしそれでも皇帝には一度負けている。

距離の問題もある。マイルから中距離適性が高いスズカにとって2400mは少し長すぎた。だが、それ以上に皇帝が強すぎた。

1800mぐらいの短いレースならかうじて勝負になりそうに思ったが、2400m　のクラシックデイスタンスでは勝てる気がしなかった。

それでもスズカはこの距離に出場している。距離適性だけであきらめたくない負けん気もあり、テイオーのために少しでも多く情報を取るためでもあった。

一方リギルからはかなりの数が出ている。

マルゼンスキーを筆頭に、現生徒会副会長のエアグルーヴ、フジキセキやヒシアマゾンといった面々も出場している。

シンボリルドルフと同じチームの彼女らだが目的はただ一つ、シンボリルドルフに勝つことだった。

多くの夢と希望、意地と絶望の入り交じるウインタードリームトロフィー

その日は刻々と迫っていた。

大きく跳ぶには一度かがむ必要がある

テイオーはウィンタードリームトロフィーレースの前の期間、休養で過ごした。

もちろん全く動かないわけではなく、軽いランニングはもちろん、準備体操などをして最低限のトレーニングはしている。

だが、強度の高いトレーニングは一切していなかった。

単純にG1の三連戦で体も仕上がり切っており、これ以上やるとオーバーワークで持たない可能性があった。

そのため調子を維持するための軽めの調整のみが行われていた。

といってもテイオーは本質的にナメクジなのである。

トレーニングを禁止されてやれることは本当に少なかった。

「テイオー、昨日何してたの」

「一人カラオケ」

有馬記念から二日後の教室。

同級生のネイチャがテイオーに昨日何してたかを聞いたときの回答がすべてを物語っていた。

「いやさすがにやばいっしょ」

テイオーがトレーニングしている間、ネイチャはゴールドシップに直談判に来ていた。

このままだと2週間連続一人カラオケとかし始めかねない。

しかも理由はライブのための練習だ。本人は大丈夫かもしれないが、主にネイチャの精神がやられかねないのもある。

それもありネイチャはわざわざおせっかいを焼いてスピカの部屋に乗り込んだのだ。

「じゃあ私が一緒に「却下だ」なんですの!？」

マックイーンが閃いたかのように自分が遊びに行くのを誘うのを提案しようとしたが、ゴールドシップに即時却下された。

「マックイーンが連れていくと甘いもの食べ歩きになるだろ。食べるなどは言わないがマックイーンと同じペースで食べたなら明らかに太

め残りになる。絶対ダメ」

そもそもマックイーンとテイオーで体格が違い、基礎代謝もかなり違うのだ。

そしてマックイーンは本当においしそうに食べる。絶対体重調整ミスする。

なので却下せざるを得なかった。

「さ、最近はイクノさんと一緒ならもうちよつと文化的なところも……」

「おまえ、自分とイクノのデートにテイオーを連れていくつもりかよ……」

イクノは確かにこういう時にとても健全なデートコースを準備しているようだが、それだと二人のデートにテイオーを交ぜるという鬼畜の所業をすることになる。

きっと三人全員にきつい地獄のような光景になる。いや、イクノは気にしないかもしれないが。

だが、そうすると同行者がスピカ内で思いつかない。

スぺは生徒会が忙しいから難しいし、スズカは現状最終調整中だ。すでに移籍して1年経っているスズカはここめがけて調整しているので、現状余裕がない。

タキオンはスカーレットやウオツカを引き連れて何か裏で暗躍しているようで、年末年始は完全に休みにして学園にすらいない。

ゴールドシップが適当に声をかけて何度か遊びに行くのもありうるが……

テイオーの顔見知りならリギルのメンバーだが、誰もかれもドリームトロフィーレースに向けて絶賛調整中だ。特に現状リギルはドリームトロフィーレースメインになっているから、この時期に手が空いている者はいないだろう。

「うーん、私も手は尽くすけど、ネイチャたちもテイオーのこと誘ってやってくれね?」

「まあ、構いませんが……」

カノープスのメンバーはネイチャもターボもマチタンも、年末を越

えたのでみんな手は空いている。

ひとまず動かせるメンツで、テイオーの年末年始をどうするか、予定を組み立て始めるのであった。

## 最後の休養

「で、ゴールドシップ」

「なんだマックイーン」

「なんというか、渋すぎませんか？」

ゴールドシップがマックイーンとテイオーを連れてきたのは、近所の温泉施設だった。

そこで三人で温泉に浸かって、三人でマッサージを受けて、三人でニンジン牛乳を飲んで、そのまま休憩スペースでくつろいでいた。

ゴロゴロするマックイーンに抱き着いて、そのままテイオーは眠ってしまった。

胸に頭を埋めるとちようど抱き枕にいいらしい。

気持ちよさそうに眠るテイオーに、マックイーンはどうしていいかわからなくなっていた。

「テイオーも動いてくれないし」

「ゴルシちゃんが膝枕しながらマンガ読み聞かせてやろうか？」

「ではお願いします」

「え？」

「膝枕お願いします」

「あ、はい」

ゴールドシップの冗談に普通に乘ってきたマックイーンに若干困惑を覚えつつ、ゴールドシップはマックイーンに膝枕をした。

謎の三連結である。

暇なのでゴールドシップは備え付けの漫画を読み始め、マックイーンもまた漫画を読み始めた。

ただただそうして、1時間ほど、テイオーが起きるまで三人のんびり時間を過ごしたのであった。

ちなみにゴールドシップは足が極限までしびれ、抱き着かれて身じろぎできなかつたマックイーンの体はバキバキになったが、テイオーの調子は上がったようだった。



違う日、テイオーはネイチャやターボと一緒に料理教室を受けることになった。

料理教室といっても教えてくれるのはトレーナーさん達である。

トレーナーになるには栄養学の知識が必須であり、大なり小なり料理ができる。

現状比較的余裕があるカノープスの南坂トレーナーが、3人に加わったゴールドシップに料理を教えてくれることになった。

内容は定番のニンジンハンバーグである。

合挽のひき肉とニンジンのすりおろしを混ぜて焼くだけという簡単なレシピであったが……

なんせテイオーとターボは全く料理をしたことが無い。

包丁を持つ手からおつかなびづくりであるし、ニンジンをおろし金ですりおろす途中で指をすり下ろしそうになるし、と大騒ぎであった。

その度の実家で料理経験があったネイチャが必死にフォローし、トレーナーさんが必死に止めることでどうにか進んでいく。

一応チームメンバー全員分という事で、予備も合わせて20人分のハンバーグ種を丸めることができた。

「で、ゴールドシップは何作ってるの」

「フルコース」

ゴールドシップはコース料理を作っていた。

イタリアンのフルコースから、お酒類を抜いたものだ。

パスタやリゾット、鯛のアクアパッツアに子羊のロースト等、色とりどりの料理が出来上がっていく。

スゴイ腕前に感心はするが、もともとのニンジンハンバーグはいいまいどうなったのか、全員が首を傾げた。

そしてそのまま夕食はここで作った料理になった。

ニンジンハンバーグは大好評であり、作った三人は鼻が高かった。

「これならご飯5杯はいけますー」

そう言ってモリモリ食べてたスペは、3杯でスズカに止められていた。

一方マックイーンもニンジンハンバーグを食べたかったが、なぜかフルコース料理を食べさせられていた。

脳筋でも一応メジロのご令嬢である。

礼儀作法は一通り身に着けており、作法通りに美しく食べるその姿に周りは感心していた。

一通り料理は出てくるが、しかしマックイーンの腹は膨れない。

人だったら十分な量だが、運動するウマ娘には足りないのだ。

結局マックイーンはきれいに完食した後、部屋に帰って特盛カップ麺を食べて無事太った。

そんな感じでテイオーはいろいろ楽しんでいた。

寮のみんなで除夜の鐘をきくこともあった。

栗東寮の寮長であるフジキセキも苦笑しながら許してくれて、寮に残ったみんなで食堂に集まって除夜の鐘をきいたのだ。

普段ならほとんど寝ている深夜12時に起きているというのも少しわくわくした。

最後にゴールドシップがあらかじめ用意してくれていた甘酒をみんな飲んで、寝ただけだがとても楽しかった。

他にもみんなで初詣に行ったり、七草がゆを食べたり、カラオケ大会を開いたり、いろいろ遊んで騒いでいた。

徐々に近づいていくウインタードリームトロフィーレース。

テイオーの調子は絶好調であった。

## 終わりの始まり

ウインタードリームトロフィーレース

今回の目玉は、絶対皇帝のシンボリルドルフと、不屈の帝王トウカイテイオーの一騎打ちだった。

とはいえ人気はシンボリルドルフの方が圧倒的に上であった。

いままで最優秀ウマ娘となり、その直後のウインタードリームトロフィーレースに出るというスケジュールを取ったウマ娘で、勝利した者はいないのだ。

半年に一度のこのレースに照準を合わせた者と、激戦を繰り広げた後にレースに挑むものでは前者が圧倒的に有利であるし、また、経歴値的にも前者の方が有利である。

さらに出るのは歴代の優秀な成績を収めたウマ娘達だ。

移籍していきなり勝つのは難しいと考えられていたし、現に勝つのは難しかった。

そのため圧倒的一番人気はシンボリルドルフだ。

他のメンバーは夏のサマードリームトロフィーでシンボリルドルフに負けたウマ娘ばかりなので、対抗バとして新顔のテイオーが二番人気に推されているが、期待度は全く違った。

パドックはトウインクルシリーズのレース以上に盛り上がっている。  
ここにいるウマ娘達は誰もがドラマを持っている。

各自ファンが大量にいるわけで、それぞれのファンが一生懸命声援を送っていた。

もちろんテイオーのファンもたくさんいた。

カノープスの面々に加え、スピカのマックイーン達も応援してくれている。

昔からのファンであるキタサンブラックだって、メイクデビューから応援してくれてるファンだっている。

その人たちだけの声援でも、G1と同じぐらいの歓声の量だった。

それでも、そんなドラマを持ったウマ娘達の祭典でも、絶対の皇帝シンボリルドルフは一番人気だった。

シンボリルドルフに向く大量の歓声。

デビューから皇帝を追いかけて来た者、無敗の三冠ファンになった者、最近になってファンになった者。

等しくシンボリルドルフへ歓声を上げ、彼女を応援していた。

素直にすごいとテイオーは思う。

いや、今でも昔でも、皇帝シンボリルドルフは、きつとテイオーにとってのヒーローだ。

多くのヒトを、ウマ娘のあこがれを集めるのがかの皇帝シンボリルドルフなのだ。

だがテイオーは憧れるだけの生き方を止めた。

皇帝に並び、追い越す道を選んだ。

ここがその道の総決算、最後の勝負である。

テイオーは現状を正確に分析していた。

皇帝シンボリルドルフと比べてもテイオーは遜色ない実力を持っている自信はある。

逆にいえばそのレベルである。決して勝っていないし、一部については多少劣っている自覚があった。

だからこそ勝つために策を練ることにした。

策などという汚いという者がいるが、テイオーはそうは思っていない。

勝負というのは全力でやるべきであり、そこには駆け引きだつて含まれる。

スペが皇帝を精神力に弱点があるかもしれないと分析していたが、テイオーもその通りだと思っていた。

だからこそ、徹底的にそこを突くことにしたのだ。

「かーいちょよ♪」

「もう私は会長ではないぞ、テイオー」

「会長はボクにとつてずっと会長だもん」

パドックで並んでいる間にテイオーは皇帝に声をかけた。

去年一年間、皇帝と話した記憶がないが、その前はいろいろなことを話していた。

ルドルフはしばしばテイオーにお菓子をくれたし、テイオーはしょっちゅう皇帝にまわりついていった。

邪魔で仕事が捗らないとエアグリーブが時々切れていたぐらいまわりついていった。

そのころのことを思い出しながら、テイオーは皇帝に声をかけた。皇帝もそのころを思い出したのか、声がいつも以上に優しい気がした。

「ボクね、心配なんだ」

「なにがだ？」

「会長がね」

だが、テイオーはあの頃の庇護されるだけの少女ではない。憧れるだけの少女ではない。

スゴイと仰ぎ見るだけの少女ではない。

「ボクに負けて、泣いちゃわないか、ね♪」

満面の笑みでテイオーはそう告げた。

傍から見ればただ楽しそうに談笑しているように見えただろう。

しかし、皇帝にはテイオーの意図が伝わった。

笑うという行為は本来攻撃的なものであり獣が牙をむく行為が原点である。

これは宣戦布告、などといったものではない。

単純な勝利宣言である。

走る前からテイオーは、皇帝に勝つと断言したのだ。

テイオーは既に皇帝の下ではない。

愛される存在ではない。

庇護される存在でもない。

落胆される存在でもない。

勝利すると断言した、<sup>ライバル</sup>敵なのだ。

「お手柔らかに頼むよ、テイオー」

皇帝は何も気づかないふりして軽く流した。

しかし、その笑顔は皇帝の目に強く焼き付いていた。

## 響けファンファーレ

東京レース場にファンファーレが響き渡る。レースのスタートが徐々に近づいていく。一人ずつ、ゲートに入りスタートの準備をしていく。ゲートを嫌がるウマ娘も現状はないようだ。全員がゲートに入り、一瞬の静寂が流れる。そして、レースがスタートした。

ハナを切ったのはマルゼンスキーとサイレンススズカの二人であつた。

競いながら、圧倒的な速さで逃げ出す二人。

スズカは逃げしかできないだけだが、本来マルゼンスキーは逃げ以外にもできるウマ娘だ。

現役時代は速すぎて逃げになっていたが、戦法や駆け引きが苦手なわけではない。

だが今回はスズカに積極的に競って、ペースを上げていく。

単純な勝負ではシンボリルドルフに勝てないということマルゼンスキーは嫌というほど理解している。

だから波乱を起こすべく、超ハイペースを目指し全力で競いながら逃げていた。

その一方でエアグルーヴやフジキセキ、そしてエルコンドルパサーは先行策を取り、前目をキープしている。

波乱になろうとなるまいと、先行策は王道であり、実力の出しやすい戦法である。

誰もがシンボリルドルフを見ている。

彼女に勝つためにそれぞれが考えている。

この三人は、自分の実力を最大限発揮することで勝利を目指していた。

そして後方集団。

シンボリルドルフは後ろ目につけており、その外側にトウカイテイ

オーがぴったりとマークをしていた。

逃げに近い先行策から、追い込みに近い差しまで、シンボリルドルフも多彩な戦法を取ることができる。だが、一番得意なのは後方気味につけて差すという戦法である。

展開に左右されがたく、切れ味のある末脚を一番活かせるこの位置が、シンボリルドルフにとってのベストポジションであった。

しかし、今回はテイオーがぴったりマークについている。

シンボリルドルフの対マーク技術が劣るわけではない。

むしろ皇帝にとってマークされるといいうのは日常茶飯事だ。だからこそ、マークされた時の対応もかなり極まっているはずなのだが、どうしてもテイオーをいなすことができなかった。

テイオーにとって、シンボリルドルフのマークがうまくいっているのはいわば当然だった。

シンボリルドルフの全レースを穴が開くほど見ているのだ。

レース時の癖から何から、全部わかっていた。それだけ皇帝はテイオーにとってのヒーローだったのだ。

どれがフェイントでどれが振り払うためのアクションか。テイオーにはすべてわかっていた。

だからこそずっとマークが可能であった。

テイオーが一瞬だけ皇帝を見る。

皇帝もまた、一瞬だけテイオーを見ていて、目が合った。

これからが本番だった。

「マルゼン先輩の脚が軋んでる。多分レース生命全部かけて逃げる」

囁くようなテイオーの声。

レース中のそれぞれの足音と風の音で消えそうな音は、しかしすぐ隣を走るルドルフの耳に刺さった。

よく耳を凝らせば、確かに何か音が聞こえる。

マルゼンスキーだけではない、フジキセキだって似たような状況だ。



二人とも脚が強い方ではない。常に爆弾を抱えて走っている。今回も全力で走っており、だからこそいつレース生命が終わってしまうかわからない走り方だった。

そして二人の意識が、常に自分に向いているのに、皇帝は気づいた。気づいてしまった。

「エアグルーヴ先輩も、必死に走ってる。絶対負けたくないと思いつながら走ってる」

またテイオーの囁きが皇帝の耳に入る。

エアグルーヴ。

生徒会の戦友にして常に自分に挑み続けてくれた彼女の背中が目に入った。

その息遣いは既に荒れている。スタミナが厳しいのだろうが、それでもあきらめない気迫を、皇帝はその背中に感じた。

「ヒシアマ先輩は後ろから機会をうかがっている」

テイオーの囁きは続く。

確かにヒシアマゾンのすさまじい気迫は背中に感じる。

常にタイマンと叫ぶ彼女だが、その最後に自分がいるのを皇帝は知っていた。

彼女の意識も常に自分に向いているのに気づいた。

既に皇帝の集中力は外に向いてしまっていた。

通常ならばそれ自体が悪いことばかりではない。

しかし、テイオーは絶対の弱点を自身の経験からよく知っていた。

ただただ、自分の内面に埋没していくあれは、つまり、逆に外へ意識を向けることになれば意味が無くなるのだ。

そして、まったく外に意識を向けずに走ることなどできない。

他のウマ娘を躲さなければ1位でゴールできないのだ。

つまり、付け入る隙はあり、テイオーはそこをついたのだった。

## その結末は

外から見れば皇帝は何も変わらず淡々と走っているように見える。しかしテイオーは手ごたえを感じていた。

さつきから、皇帝の走るペースが単調になっている。

マークを外そうとする意志が感じられない。

それだけ内心は動揺しているのだろうことはテイオーに容易に想定出来た。

1000mのタイムは57秒台というすさまじいハイペースでレースは進んでいく。

超一流ばかり集まるウィンタードリームトロフィーレースとはいえ明らかに速すぎる。

脱落するまではいかないが、向こう正面に入った段階で皆息が上がり始めていた。

高レベルな戦いに歓声はさらに大きくなる。

向こう正面を走っている間でもそれが聞こえてくるぐらいの大歓声である。

10万を超える人たちの熱い歓声。

テイオーを応援する声も当然聞こえてくる。

他のウマ娘を応援する声も聞こえてくる。

しかし、それでも、一番大きいのは。

「かいちよーを応援する声が一番大きい」

ぼそつとつぶやいたテイオーの声はまた、皇帝の耳に突き刺さった。

別に皇帝の息が上がっているわけでもない。

ペースが崩れているわけでもない。

それでもテイオーには皇帝の絶対がはがれてきているのを感じていた。

皇帝のレースペースは差しをするのに最適なもので、マークしてつ

いていくだけでテイオーもスタミナを温存できている。

後は、最後の直線の勝負である。

第四コーナーに入り、もう一度テイオーは皇帝を見た。

皇帝もまた、テイオーを見ていた。

視線が交わる。

二人の間に一瞬の静寂が流れる。

皇帝が息を呑んだ瞬間、テイオーはスパートをかけ始めた。

内ラチ際を全力で走り始める。

当然先行するウマ娘達のバ群が前にあり、すぐに詰まってしまうように見えた。

しかし……

ぬるり、とテイオーはそのバ群をすり抜けた。

ウオツカがダービーで見せたバ群すり抜けに近い方法である。

だが、ウオツカが絶妙な空間認識能力を活かしてギリギリを抜けたのとはちよつと異なる。

テイオーはその柔軟性と小柄さ、あと軽快なステップを活かして、一人分もない間を上手くすり抜けたのだ。

蛸か蛞蝓がぬるつと狭い所をすり抜けるような、そんなすり抜け方である。

後ろから見ていた皇帝はもちろん、抜けられた方も驚きである。

そして速度を落とすどころかささらに加速しつつ、スパートをかけるテイオー。

皇帝はここで出遅れているのに気づいた。

慌てて皇帝も大外に回りながらスパートをかけ始めた。

最後の直線に入れば、みんなスタミナが切れかけていた。

あれだけのハイペースになれば体力なんてまず使い切る。

スズカがずるずると後退していく中、マルゼンスキーは意地で前に残り続けている。

先輩として、ルドルフに背中をみせたかった。

隣に並びたかった。

そんな意地がこもった走りである。

しかし、いくら頑張っても、脚の強さだけはどうにもならなかった。痛いを通り越してすでに感覚がなくなりつつある脚では、それ以上の速度を維持できない。

そして粘るマルゼンスキーの内側から、テイオーが軽やかに抜けてくるのであった。

全てを置き去りにしたテイオーのラストスパートについてこれるウマ娘は誰もいなかった。

皇帝すら、すでにスタミナ切れを起こしてついてこられていない。既に皇帝はテイオーに、周りに心を取られていた。

スピードも、パワーも、スタミナも、もしかしたらすべて皇帝はテイオーに勝っていたかもしれない。

しかし、ゴールを見つめ、1着を取るのに全力を尽くすテイオーに、レースに集中できていない皇帝が勝てるわけもなかった。

追いつがる皇帝を突き放し、テイオーは見事一着でゴール板を通過した。

帝王は、皇帝を超えたのだった。

## その夢が終わった時

テイオーは観客に手を振っていた。

絶対の皇帝を破った新しいヒーローの誕生に、観客席が沸き立っていた。

一方の皇帝は意気消沈していた。

負けて、どうしていいかわからなくなっていた。

あれだけ多くの相手を負かせて来たのに、いざ自分が負けるとどうしていいかわからなくなってしまった。

怒ればいいのか、泣けばいいのか、悔しがればいいのか、平然とすればいいのか。

頭がごちゃごちゃしてどうしようもなくなっていた。

「ボクね、心配なんだ。会長が、ボクに負けて、泣いちゃわないか、ね」  
♪

テイオーがそういつていたのが頭によぎる。

ああ、本当に泣いてしまっそうだ。

テイオーの心配は当たっていた。

呆然とするシンボリルドルフに声をかけたのはエアグリーブだった。

「ルドルフ」

「……なんだい、エアグリーブ」

「お疲れさまでした。今日も皇帝は速かったです」

「テイオーに負けたがね」

「それでも、ルドルフは私の目標です」

「……」

ルドルフの目を見て、エアグリーブは言い切った。

「そうよ。私もまだ、絶好調のルドルフちゃんに勝ててないんだから、意気消沈されちゃいやよ」

「マルゼンスキー」

「今度こそは勝ちマス」

「そうです、次こそは私が勝ちますよ」

「エル、フジキセキ……」

リギルの皆が集まり、ルドルフに声をかける。

皇帝は確かに負けた。

帝王は皇帝を超えた。

だが、ならばまた超え返せばいい。

皆の瞳がそう語っていた。

「そうだな。私も粉骨碎身、精進せねば」

ルドルフは上を向く。

その目からこぼれた涙は果たして悲しみか嬉しさか。

それは本人にもわからなかった。

夜の神社の森は、非常に静かで、何かしかし神聖な雰囲気でした。

「テイオーさん、おめでとうございます」

「ありがとうキタちゃん」

かつて二人でよくここで過ごした場所である。

今でもジメジメしていて、寒くて、しかし思い出深い場所だった。

テイオーがキタちゃんを抱き上げる。

とても温かくて、とても安らいだ。

「キタちゃんが居なかつたら多分ここまでこれなかつたよ、ありがとう」

「そんなことないですよ……」

テイオーの本心だった。

マックイーンに負けたとき、復活できたのはキタちゃんのおかげだった。

スピカ移籍後も、キタちゃんに無様なところは見せられないと思っただからこそ頑張れた。

結局キタちゃんは、テイオーにとって……

「キタちゃんはボクのとても大事な人。ボクの大好きな人だよ」

「恥ずかしいですよ……」

薄暗い神社の森の中でもわかるぐらいキタちゃんは真っ赤になっ

た。

「かわいい」

「からかわないでください!!」

「からかってないよ」

「ううううう」

そうしてしばらく抱き合った二人は、昔を懐かしみ、そして今を喜ぶ。

そのままテイオーはキタちゃんをお姫様抱っこしながら家へと送っていく。

キタちゃんは真っ赤になっていた。

「これで終わりですね」

「そうだな、マックイーン」

「私とゴールドシップがあつた入学式の日。あの日がすべての始まりでしたのね」

「そうだな」

ゴールドシップとマックイーンは二人で学園に居た。

初めて会った日を思い出していた。

あの時、登校するマックイーンをいきなりさらったのがゴールドシップだ。

ゴールドシップもテンションが上がり過ぎていたし、マックイーンも入学という事で舞い上がっていた。

そんなことがあつたのもかなり前である。すでに懐かしむだけの過去になっていた。

すでに二人とも、終わりが近いのは気づいている。

これが最後の会話になるだろうことも気づいていた。

「なあ、マックイーン」

「なんですか?」

「100年後ヒマ? 空いてたら宇宙行こーぜ」

「100年後? そんな先はわかりませんわ」

「そういうことだぜ。私もそんな先のこととはわかんね」

苦笑するゴールドシップ。

笑うマックイーン。

そうだ、そんな先のことなんて誰もわからない。

ゴールドシップはマックイーンの孫だ。

しかしマックイーンにはまだ子供もいない。結婚もしていない。

どう短く見ても20年、30年先のことである。

そこでどうなっているかなんて誰もわからなかった。

「じゃあこれ、おまじないですわ」

「なんだよいきなり」

「必ず返してくださいませ。おばあ様からもらったリボンですから」

マックイーンが右耳につけているリボンを解き、ゴールドシップにつける。

ウマ娘にとって耳飾りとはとても愛着のあるものである。

それを他人に預けるのは、無事な帰還を願うおまじないでもあった。

「責任重大だな」

「そうですわよ」

「じゃあ代わりに、これをやるぜ」

そう言っつてゴールドシップも右耳につけていたリボンを解き、マックイーンの右耳に結ぶ。

「私のばあちゃん形の形見らしい。母ちゃんが残してくれてたんだつて」

「そうですか。預かっておきますね」

あれ、よく考えたら自分の形見なのか、と謎なことを思ったりした。

運命の歯車は回る。

物語のフィナーレはすでに終わり、あとは幕が下りるだけである。そんなわずかな時間。

二人は別れまでの時間を楽しんでいた。



## 長い旅路の終着点

今日がその日であるというのはアグネスタキオンは計算でわかっていた。

マックイーンがゴールドシップに初めて出会った日がちょうど5年前。

その5年後の前日、ちょうど丸5年になるのがこの日であった。都内某所に作られた石と機械を組み合わせ作られた遺跡状の建物。その中心部の祭壇の上にゴールドシップはいた。

見送りにはスピカのメンバーも、カノープスのメンバーも、リギルのメンバーもいる。

メジロ家の面々も、タキオン研究所やブランドゴールドシップの関係者もいる。

皆、ゴールドシップを見送りに来ていた。

「タキオン先輩、大丈夫なんですよね?」

「私の計算を疑うのかい?」

「そうではありませんが」

心配そうに聞いてくるマックイーンにタキオンは自信満々に、ふてぶてしく答える。

実際タキオンも自信があるわけではない。

計算上は十二分にエネルギーもたまり、確実にゴールドシップを未来に送ることができるはずである。だが、その計算自体が仮説の上に成り立ったものだ。

自信はなかったが、しかしそれはおくびにも出さない。

弱気が失敗を招くことも多いのだ。

だからこそ、堂々と、ふてぶてしい態度をタキオンはとっていた。「そろそろ時間だ」

そう言ったときに劇的な変化が起きた。

夜空にはオーロラが浮かび、遺跡の楕円状の輪、ゲートと呼ばれる部分が光り輝き始める。

そのゲートの先には、トレセン学園が見えた。

ただ、今のトレセン学園とは違うところがいくつもある。  
きっとこれが未来のトレセン学園なのだろう。

「タキオン博士！」

「なんだい？」

「ここまでしてくれてありがとうな！」

「お礼を言うのは私の方だよ」

ゴールドシップがタキオンに声をかける。

「マックイーン！」

「なんですの？」

「会えてうれしかった!!」

「未来でまた会えますわ」

マックイーンは意地でも200歳ぐらいまで生きてやると誓った。

「スズカ！ テイオー!!」

「お姉さま、向こうでもお元気で」

「二人ともがんばれよ」

「ボク、頑張るから！」

笑顔で見送るサイレンススズカとトウカイテイオー

一言ずつ、皆に声をかけた後、ゴールドシップは深呼吸をする。

そうして一言

「また会おうな！」

それだけ言って、ゲートをくぐっていった。

まばゆい光とともに、ゴールドシップは消えていった。

世界が修正されていく。

ゴールドシップがいたという事実が変えられて、歴史が確定して  
いく。

ゴールドシップというトレーナーの存在はなかったことになった。

ハイローブランドのゴールドシップシリーズの由来も誰もわから  
なくなった。

覚えている者もほとんどいなくなった。

これが修正力か、とタキオンは舌を巻いた。

ゴールドシップのことを一番覚えていたのはアグネスタキオンであつた。

なぜ自分が一番覚えていいのか。記憶も何もほとんど欠損なく覚えているのか、その法則はよくわからない。ただ、単純に時間の経過で忘却していくだろうことは予想できたので、早めに記録媒体に文字として記載をしていた。

他にゴールドシップのことを覚えているのは、マックイーンとスズカとテイオーぐらいだつた。

あれだけ仲が良かったリョテイやイクノも何も覚えていなかった。事業まで一緒にやったキングも何も覚えていなかった。

ウララやメジロの総帥は何か引っかけりを覚えているようだが、記録を見せてもあまりピンとこないようだった。

これがきつと世界の、そして歴史の修正力である。時を渡るだけのエネルギーを生じさせられるだけあり、すさまじかつた。

タキオンがすることはまだ少しだけあつた。

ゴールドシップは未来へと帰つた。それは間違いない。

だが、この先で生まれるゴールドシップと合わさるのか、それとも別の存在として同時に存在するのか、そこまではタキオンにはわかっていなかった。

生まれるだろうゴールドシップと合わさるならば問題ないが、別存在になつてしまった場合、なかなか厄介な展開である。

その時に備えて、彼女が一生遊んで暮らせる程度の財産を用意するとともに、事情を知っている自分が生きていく必要があると考え人一倍健康に気を遣うようにし始めた。

ダイワスカーレットは健康的なタキオンの生活を喜んだ。

マックイーンはさつそくイクノと学生結婚をした。

どうやら孫をできるだけ早く作ろうとしているらしい。

スピカはテイオーを中心に頑張っている。

リギルもまた、改心したらしいルドルフを中心に頑張っている。

カノープスは元に戻りあいかわらず若干微妙な立ち位置である。ネイチヤが頑張つて年に1回程度G1に勝つぐらいだ。

いろいろなのはあつたが、幸せな結末を迎える未来にはたどり着いたようである。

では、この幸せをゴールドシップが暮らす未来まで続けないといけない。

少女たちの頑張りは、まだまだ終わらない。

そしてすべての始まり

その日、マックイーンは病院へ全速力で走っていた。  
孫が生まれるのだ。

その孫を見るために、車にも乗らずマックイーンは走っていた。  
3600mレコードになりそうな速度で走っていた。

イクノと結婚したマックイーンは、あまり多くの子宝には恵まれず、生まれたのは娘一人だけであった。

キソジクイーンとメジロの名を継がなかった彼女は、外見と体格と葦毛と脳筋はマックイーンから、丈夫さと走りはイクノから受け継いでいた。

つまり脚が遅かったのだ。

トレセン学園に入れる程度の学力と実力はあったが、残念ながら未勝利で終わってしまった。

そんな彼女がしかし大騒動を起こす。

物心ついたころから初恋の相手で、彼女の専属トレーナーで教官のキンイロリヨティを押し倒して既成事実まで作り上げてしまったのだ。

10年を超える初恋を拗らせ切った狂行に、関係者は阿鼻叫喚に包まれた。

形式的には一回り以上歳上なことに加えて教官であるリヨティの責任である。

しかし、周り中皆、やらかしたのがキソジの方だとわかっていた。  
子供もできてしまい責任をいろいろ取らざるを得ない状況だ。

学園理事長になっていたシンボリルドルフの胃に多大なダメージを与え、イクノが土下座を繰り返し、うちの娘に手を出したなど切れるマックイーンが娘に返り討ちにされ、どうにかこうにかまとまって3年が経過した。

なんだかんだで仲良くやっているリヨティの夫婦の、今回が3人目の子供である。

今まですでに二人産まれているが、どちらもリヨテイに似て小柄な子供だった。

今回の子はしかし、マックイーンは直感的に確信していた。きつと、葦毛のあの子であろうことを。

孫がかわいくないわけがない。とうかすごくかわいい。

リヨテイに似てるのが少しだけ不満だが、それを差し引いてもすごいかわいい。

あまりかわいくて甘やかしすぎて、マックイーンは娘から時々怒られていた。

だが、次に生まれるのが葦毛のあの子ならば。

それは孫であることはまた別の、特別なことである。

だからこそ、いてもたってもいられずにマックイーンは走り出してしまったのだ。

既におばあちゃんと呼ばれる年齢とは思えない速さで走っていた。

マックイーンが病院についたとき、既に子供は産まれていた。

マックイーンが病室へ行くと、娘の腕に抱かれた葦毛のウマ娘の赤子が目に入ってくる。

彼女が何なのか、マックイーンはすぐに理解した。

「お母様。生まれましたのよ、この子の名前は……」

「ゴールドシップ」

「そう、ゴールドシップですわ。お母様、どうしてお分かりに」

「一人だけ特別扱いは良くないのかもしれないかもしれませんが……」

そう言いながら娘から赤子を受け取るマックイーン。その右耳に、自分がつけていたりボンをつけてあげる。

「彼女が私にとって、特別な存在だからですわ。おかえりなさい、ゴールドシップ」

祖母に抱かれた葦毛の赤子は、楽しそうに笑っていた。

## エキストラパート おまけのお話 マヤの隣の幽霊さん

マヤノトップガンの寮の部屋は、二人部屋と聞いていた。

もう一人は誰だろうと胸を膨らませていたマヤノだったが、しかし、しばらくしても隣のベッドは空っぽのままだった。

荷物はある。

しかし生活感がまるでない。

そもそも隣のベッドで誰か寝ているのを見たことが無いし、その姿を見たこともない。

とても不思議な状況である。

おそらく幽霊さんなのだろう、とマヤノは一人納得した。

ルームメイトが幽霊さん、というのはマヤノをワクワクさせた。全く分からない状況だ。

時々鹿毛の毛が落ちているから、きつと幽霊さんは鹿毛のウマ娘だろう。

しかしそれ以上の情報が一切なかった。

カメラなど仕掛けておけば、幽霊さんの姿を見ることができるかもしれない。

しかしマヤノはそういうことはしなかった。

きつと幽霊さんは恥ずかしがり屋なのだ。

恥ずかしいからマヤノの前に出てこれないのに、盗撮するのはかわいそうだと思った。

だが、幽霊さんはルームメイトだ。

マヤノは仲良くしたかった。

なのでお手紙を書くことにした。

『ごんばんは、ルームメイトのマヤノトップガンです。幽霊さんのご趣味は何ですか?』

メモにこれだけ書いて、ニンジンをお供えした。

幽霊さんが好きなものはわからないが、ウマ娘だとわかっている。

きつと幽霊さんもニンジンが好きに違いない。

手紙を置いた翌日、手紙とニンジンは無くなっていた。

きつと幽霊さんが食べたのだろう。

マヤノは嬉しくなった。

幽霊さんはきつと恥ずかしがり屋だからお返事も難しいだろう。

もしかしたら幽霊さんなのでお手紙を書く道具もないのかもしれない。

そう思つてマヤノはお気に入りの便箋とかわいいニンジンペンをお供えした。

マヤノのお気に入りで。きつと幽霊さんも気に入ってくれるだろうと断腸の思いで幽霊さんのベッドに置いた。

『ごんばんは、ルームメイトのマヤノトップガンです。幽霊さんお手紙のやり取りしませんか？ お気に入りの便箋とペンを差し上げます』

お手紙とニンジンも添えておいたら、翌日、ニンジンとお手紙は無くなつており、便箋とペンは机の上に載っていた。

『マヤノさんニンジンごちそうさまでした。便箋はマヤノさんの方が似合っているのでお返しします』

幽霊さんからのお手紙が、味気ない便箋に書かれて置いてあった。

マヤノは嬉しくなった。

マヤノと幽霊さんの文通は続いた。

マヤノは毎日手紙を書いて、ニンジンをお供えする。

幽霊さんからのお返事は多くはない。

1週間に1回ぐらいだろうか。

でもマヤノはそのお手紙が楽しみだった。

便箋はいつも味気も柄もないものだが、文字が丸くて小さくてとてもかわいいのだ。

幽霊さんはきつと小柄で可愛らしい鹿毛のウマ娘さんなのだろう。

マヤノはそんな想像を膨らませていた。



幽霊さんとのそんな細々としたやり取りは長く続いたがある日突然終わってしまった。

ルームメイトにトウカイテイオーが来たのだ。

テイオーちゃんはとても明るくていい子だったが、幽霊さんの形跡がなくなってしまうイヤノは少し悲しかった。

テイオーちゃんが来た翌日イヤノは幽霊さんにお別れのお手紙とお花を置いた。

返事はなかったけどお手紙とお花はちゃんとなくなっていた。

きつと幽霊さんに届いたのだろう。

イヤノは少しだけ嬉しかった。

不思議なイヤノの隣の幽霊さんのお話はこれだけである。

イヤノは今でも時々お花を飾っている。

幽霊さんも見てくれているといいな、とイヤノは願っている。

## ゴルシちゃんネル ぱーと6

「ということ、チームスピカの宣伝担当 兼 タキオン研究所宣伝大臣 兼 高知トレセン学園宣伝部長 兼 ブランドヘイロー宣伝執行役員 兼 メジロ家お抱え宣伝員 兼トレセン学園イベント実行委員長 兼 タキオン発光センター大総統 兼 ゴルシちゃんネル進行係 兼 マックイーンファンクラブマスター のゴルシちゃんだぞー」

「司会進行のメジロマックイーン with サトノダイヤモンドです。本編は終わりましたが、ゴルシちゃんネルは続いております」

「よくわからない時空のメタ空間だからなー」

「という事で今回もゴールドシップとわたくしメジロマックイーンとマスコットのサトノダイヤモンドさんでお送りします」

「よろしくなー」

「という事でいつもの企画ですが、『ウマ娘の皆さまに、別の自分でもある馬に乗ってレースしてもらおう』コーナーです」

「もう何でもありだな」

「という事で早速皆さんの馬を用意しました」

そうして入ってきたのはキンイロリョテイと『ステイゴールド』である。

明らかに荒ぶる『ステイゴールド』にキンイロリョテイが泣きそうになっていた。

サラブレッドでは小柄とはいえ『ステイゴールド』の体重は400kgを超える。

つまりとてもデカイ。一方のリョテイはかなり小柄な少女である。ぶつちやけ泣いていた。

「ゴールドシップ」

「なんだマックイーン」

「何かに目覚めそうですわ」

「おい、戻って来いマックイーン。そっちは行ってはいけない道だ」

結局尻尾を噛みつかれたリヨティイは逃げ出してしまい、『ステイゴールド』はあらぶつたままだった。

他の馬も結局上手いかなかった。

ゴールドシップ対決は確実に問題を起こしそうなそれぞれを引き離すことになり。

マックイーン対決は気位が高い双方がやはりにらみ合いになったため乗馬もできず。

結局サトイモがおとなしいサトノダイヤモンドに乗馬し、かつぽかつぽと楽しそうに歩くことしかできなかった。

乗ることができた、というだけでサトイモが優勝だった。

「いやあ、ゴルシちゃんは強敵だったな」

「私の馬は大人しいと聞いていたのですが……」

「いや、マックイーンが馬になった程度でおとなしくはならないだろ……」

「どういう意味ですか」

「そのままの意味だぜ。さて、ふつおたにいくのぜ。マックイーン。たのむ」

「仕方ないですわね、ゴルシちゃんネーム『ジエガンB型』さんから「ウマ娘同士でも子供はできるそうですがブルボンさん家みたいな男性パートナーのところでゴルシちゃん世界のようなウマ娘同士でのパートナーの比率ってどのくらいなんでしょうか？」

「大体トレーナーと結婚するウマ娘が1%ぐらいだな。で、ウマ娘同士は半分ぐらい。あとは一般の男性と結婚するパターンかな」

「トレーナー相手は少ないのですのね」

「そもそも毎年300人近くウマ娘は入ってくるが、トレーナーなんて毎年数人しか入れ変わらないから…… 重婚もないし」

「確かに」

「ウマ娘同士は圧倒的に多いが、男性と結婚するのも少なくないな。学園卒業して外で働き始めれば結構モテる子は多いからな」

トレーナーは基本モテるが、彼ら彼女らは当然良識のある大人であ

る。学生に手を出すことはない。だが、学生に手を出されないとはだれも言っていないのだった。

「では続いて、ゴルシちゃんネーム『火焰狐コウ』さんから「どうしてサトイモちゃんのほっぺたはムニムニしてるんですか」

「サトイモだけじゃなくてマックイーンのほっぺもムニムニしてる。というかうま娘は結構みんなムニムニしてるぞ」

「ゴールドシップのほっぺもムニムニですわ」

「ちなみにウマ娘の頬に下手に触ると犯罪だから触っちゃだめだぞ」

警察に捕まるレベルの犯罪だが、それ以上に蹴とばされて大怪我を負う可能性が極めて高い。蹴とばされてケガもしないのは、訓練された沖野トレーナーぐらいである。

「続いてゴルシちゃんネーム『消耗品』さんから「マックイーン監修によるスペ特製のショートケーキは何カロリーになるんですか？」

「……」

「ゴールドシップ？」

「世の中、知らない方がいいことがある。マジでやばいが、マックイーンは昨日それを食べていた。体重計がやばそうだ」

マックイーンの体重は増である。ある場所のポリウムがとても良い。一方スズカはポリウムに気を付ける必要があった。

「…… 続いてゴルシちゃんネーム『ランパ我聞』さんから「某リョテーさんところの某全兄弟に対して一言お願いします」。改変後の世界線ではゴールドシップには姉が二人います。ドリームジャーニーとオルフェーヴルです。とてもかわいいですね。とてもいい孫たちですよ。外見がリョテーに似てるのがちよつと不満ですが」

「過去に行つて未来に帰ってきたらいつの間にか姉が二人増えていた」

その話はいつか書かれる、かもしれないが予定は未定である。

「あとはゴルシちゃんネーム『ジエガンB型』さんからまだ来てますね「マックイーンのお嬢様の皮つてクラスメイトにばれてないんですか？」

「クラスではばれてないとマックイーンは思い込んでいるが初日から

ばれてる」

「本当ですよ!?!」

「チームでも当然ばれている」

「嘘ですよよね!?!」

「マックイーンが気づいてなさそうだからみんなマックイーンに気を使って話を合わせてくれてるだけだ」

「そ、そんなあ……」

衝撃の事実にもマックイーンはショックを受けていた。

「……ゴルシちゃんネーム『黒松』さんから「ゴルシちゃんが着けている頭の飾りには、頭部と首を保護する機能があるのでしょうか?」

「バリア機能があつて、真空でも呼吸できるし隕石がぶつかつても壊れない特別製のぞ」

「そんなすごいのですよ!?!」

「冗談だぜ」

「冗談ですよ……」

真相は闇の中である。

「もう一つ来てますよね 「絶対」の領域に入っていると、「お姉さま」をゴールドシップと認識できるのは、拒絶の力で世界の修正力すら遮断しているからなのでしょうか?」

「全く関係ないぜ」

「関係ないんですよ!?!」

「修正力は運命が大きく変わった者には働きにくいので。だからスペは気づいただけなのぜ。ちなみに最後に記憶が残っていたのは、各自のアタシへの好感度の差も大きいので。だから運命があまり変わつてないリヨテイ。パパやイクノばあちゃんは記憶に残らないし、アタシへ好感度があまり高くないスペも記憶に残らなかったというだけだな」

「でもじゃあ、なぜズカさんはゴールドシップに気づかなかつたんですの」

「単純にズカが天然なだけだろ」

「……」

身もふたもない理由であった。

「という事で今回はこの辺でだぜー」

「ふつおた等は一応募集しておりますがまたやるかは不明です」

「よろしくだぜー」

「お相手はメジロマックイーンと」

「ゴルシちゃんと」

「サトノダイヤモンドでお送りしました♪」

## やり直し転生系主人公になったゴルシちゃん

未来に帰ったゴールドシップがどうなったかというところ、元の卒業間近の時期に戻る……

ことなくなぜか物心ついた子供の時代に戻っていた。

どこかの小説サイトで流行しているような、やり直し系転生チート主人公である。

ゴールドシップはテンションを上げていったが、知識と全く違う状況が発生していた。

まず、元の世界より、なんか家族が増えていた。

前の世界ではゴールドシップは一人っ子だったが、こちらの世界ではなぜか姉ウマ娘が2人もいる。

どちらもリヨテイパパにそっくりで、美人だがちよつと男勝りなオーラのある姉である。

姉二人は自分に興味があるらしく、しよっちゆう会いに来てほつぺたをつついてくる。

正直若干うっとうしい。

だが、気に入ってもらっているのだろうと思うとなかなか邪険にはしにくかった。

リヨテイパパの方の親族はいまだ不明だが、ママの方の両親であるイクノとマックイーンは健在であった。

しよっちゆう遊びに来てはやつぱりほつぺたを突っついてくる。

なんなんだうちの家系は子供のほつぺたを突くものなのか。

だが、前世ではママの記憶もほとんどなく、マックイーンと会った記憶も全くなかったから、家族が増えた状況はとても楽しかった。

前世の知識というか、未来の知識というか、過去の知識を持っているのは比較的すぐにばれた。

一番最初にばれたのはリヨテイパパだった。

だってしゃべり方がすごいのだ。

マックイーン顔負けのお嬢様言葉だし、所作もマックイーン以上に

上品なのだ。

どうしても過去の男勝りでガサツなりヨテイのイメージが強くて、しかも所作以外は何も変わってないリヨテイにゴールドシップは耐えきれなかった。

察しのいいリヨテイパパにキリキリ自白させられてしまった。

とはいえそういったことを話しても何か変わったことが多くあったわけではない。

マックイーンが喜んで、いきなり家に来たアグネスタキオンに莫大な財産を押し付けられそうになったぐらいである。

よく考えたら非常に大変なことは起きていた。子供も孫もいるんだからタキオン博士にはもっと自重してほしい。

前世知識や過去知識といってもそんなに役に立つことはなかった。

前世知識自体既に陳腐化している知識ばかりだ。

ただ、前世の記憶よりも温かい家庭環境で、ゴールドシップは育つていった。

前の時と比べてもトレセン学園は死ぬほど賑やかだった。

まず姉二人が死ぬほどうっとうしい。

しかし二人ともG1ウマ娘。オルフェのアネキに至っては三冠ウマ娘である。

そんな二人が何が楽しいのか自分にまわりついてくるのだ。

二人ともちっこい癖に目立つことこの上なかった。

そんな二人に連れられて加入したのはあのスピカだった。

トレーナーはかなりじいちゃんになっていたがあ頃のままだった。トモを触ってきたので蹴とばすまでがお約束だ。

さすがに老人だしやばいかと思ったが全く大丈夫そうだったのでトレーナーズゲーと思っただけのものである。

他にも前世からの親友のジャスタウェイや、相変わらず威圧感のスゴージェンティルドンナのアネキ、相変わらずオラつくトーセンジョーダンなど、いろいろな人に囲まれて楽しくやっていた。



戦績は、二回目だから無敗の三冠取っちゃうぞーとか思ったが、結局全く変わらなかった。

三つ子の魂は百まで。一度やり直した程度では治らなかったらしい。

日本ダービーでは無茶苦茶マークされて惨敗するし、天皇賞春はマックイーンのはあちゃんにいい所見せようと入れ込み過ぎて半分ぐらい走った時点で息切れしてしまった。

三回目の宝塚記念は、スペン所の娘のトーホウジャツカルが威嚇してくるものだから威嚇し返したら完全に出遅れてしまい惨敗に終わった。

全く、スペと違ってあいつは性格が悪い。とてもスペとスズカのところの娘とは思えなかった。

他にもフランスにジャスタウエイと旅行ついでに凱旋門賞に出場したらジャスタウエイが森で迷子になったり、ジャパンカップで跳ね飛ばされた挙句チビといわれたオルフェのアネキがジエンテイルドナのアネキと大喧嘩したり、従姉妹のオジュウちゃんやんと障害競走走ってみたり、やりたい放題学園生活を楽しんだ。

そんなこんな大騒ぎした学園生活も終わり、今日で卒業である。

前の時は、今日この噴水のところで過去に戻ったのを思い出す。

また祈れば過去に戻るのかな、なんてことを思ってしまう。

まあ戻れても戻るつもりはもうないが。

後ろから家族が、友人が、恩師が、みんなが自分を呼んでいる。

ゴールドシップは皆のところに向かう。もう彼女が振り返ることはないだろう。

### 第三部 未来でのゴールドシップ 第一章 黄金船の入学

#### 黄金船の入学

ゴールドシップの入学は、トレセン学園内でもそれなりに話題であった。

なんせ、あの、ドリームジャーニーの妹であったからだ。

学園一の暴れん坊ドリームジャーニーは、学園内では知らないものはいなかった。

盗んだゴルシちゃん号で走りだす（ゴルシちゃん号はゴルシちゃんのものだがドリジャのアネキに学園入学時に持っていかれてそのまま返してもらえていない）のは序の口で、授業から逃亡するのは日常茶飯事、寮の門限を破るし、ついでにトレーナーさんの寮の部屋の扉も物理的に破っていた。

そのたびに、祖母であるイクノデイクタス教官が謝罪し、親であるリョテイママも謝罪し、しかし本人は謝罪しないのだから大変だったろうと思う。

それでもまだ、最近は少しは大人しくなった「要出典」らしい。多分去年、オルフェーヴルのアネキが入学したからだろう。

反社会的ウマ娘のドリジャのアネキだが、妹には比較的甘く、いいお姉ちゃんぶるのだ。

オルフェのアネキもゴルシちゃんも、ドリジャのアネキのことはよく理解しているので頑張つて猫をかぶっているのはわかっている。だから、生暖かく見守るだけであった。

何にしろ、ゴルシちゃんが入学し、無事新入生代表挨拶も済ませて体育館から出てきたところを、このシスコンアネキ二人は待ち構えていた。

「ゴールドシップ！ このお姉さまが学園を案内してやるぜ!!」  
「……………」

胸を張るドリジャのアネキ。いつも以上に小さく見えるし、現にと

でも小さいのだ。

なんせ現在身長132cmしかない。

アネキは日本最低身長G1勝利の記録すら持っている。アネキが4年前に勝利した朝日杯フューチュリティステークスの時は129.9cmしかなかったのだ。それから頑張つて牛乳などを飲んでいたようだが、結局これだけの身長にしかならっていない。

170cmあるゴールドシップと比べればその身長差は一目瞭然である。飛びついてこられると、アネキの顔はちやうどゴールドシップのみぞおちあたりに来る。それくらい的身長差があった。

見た目だけ見ると非常にかわいらしいのがドリジャのアネキである。

鹿毛というありきたりの髪色だが、外見は小柄な美少女であり、いつも背負っているウサギさんぬいぐるみリュック『イケゾエ』が非常に似合っている。

だが、彼女の持つ威圧感と業のせいで、周りから思いつきり避けられている。

体育館前の出口近くにもかかわらず、半径5mを避けて、皆歩いていた。新入生からすら、やべー奴と認識されている証拠であった。

だが、そんなことを気にしないのがドリジャのアネキである。

気性難を示す真っ赤で大きなリボンのついた尻尾を嬉しそうに振っていた。

隣でマスクをして、睨むようにゴールドシップを見上げている栗毛のウマ娘はオルフェのアネキだ。

オルフェのアネキはやはり小さい部類に入るウマ娘であり、ドリジャのアネキほどではないが、身長140cm台しかない。

常にマスクをしており、睨んでいるような表情を常にしているため、怖い人と認識されがちである。

だが、その内実は照れ屋さんであり、マスクを外すと恥ずかしくて暴走してしまう乙女なのである。まあ、暴走すると恥ずかしがって動けなくなる、とかではなく、どこその人型決戦兵器のように大暴れるのが問題なのだが……

今も、はたから見るとゴールドシップを睨んでいるだけに見えるが、単に妹に逢えてうれしただけだろう。

やはり気性難を示す真っ赤で大きなリボンのついた尻尾を嬉しそうに振っていた。

新入生代表のあいさつをした、なんかでかいウマ娘ゴールドシップ問題児で有名なウマ娘ドリームジャーニー

問題児でまだ有名ではないが、マスクをして目つきが怖いウマ娘オルフェーヴル

これだけそろえば周りは確かに近寄りたくないだろう。

現に徐々に立ち入られない範囲が広がっている気がする。

入学式後の入り口付近なのにすごい邪魔だろう。

これは早めにどいた方がよさそうだ。

「はあ、ドリームジャーニーのお姉さまと、オルフェーヴルのお姉さま。ここは皆さまの邪魔になりますし、ひとまずカフェの方に移動しましょう？」

お嬢様言葉でそんな提案をする。

一応メジロの血を引くご令嬢だし、どこかのおばあさまのように学園にいきなり赤じゅうたんを敷くような無茶はしないが、最低限お嬢様っぽく振舞おうとゴールドシップは今のところ考えていた。

まあおそらく、すぐに飽きるだろうが。

お姉さまと呼ばれた二人はともにご機嫌である。

シスコンだが、普段からゴールドシップが姉と思わないような扱いしかしていないため、その点だけはまれに喧嘩になるのだ。まあ、フィジカル的にゴールドシップのほうが圧倒的にでかいため、喧嘩になってもゴールドシップが負けることはないのだが。

ご機嫌になった姉二人を連れて、ゴールドシップはゆっくりと学園内のカフェへと向かうのであった。

## 黄金船の学園案内

拝啓、メジロのお屋敷にいるおばあ様

ドリームジャーニーのお姉さまと、オルフェーヴルのお姉さまはいろいろダメウマ娘であることをここに報告差し上げます。

というか、オルフェーヴルのアネキは1年、ドリジャのアネキに至っては5年も通っているのに、食堂にたどり着けないのは本当にどうかしてると思うゴルシちゃんである。

食堂にも行けないのにドリジャのアネキはどうやって自分を学園案内しようとしたのだろう。きっと何も考えていないのだろう。妹を学園案内するというそのお題目に惹かれただけに違いない。

そういう考えなしなところがあるのがドリームジャーニーというウマ娘だった。

一方ゴールドシップは前世？で10年以上学園に通っている。目をつぶっていてどこにでも行ける自信があった。

「というかお二人とも、お昼どうしてるんですか？」

ゴールドシップは疑問に思った。

生徒のほとんどは、この食堂で昼食を食べているはずだ。

なのに二人とも場所を知らないということは、ここをあまり利用していないのだろう。

どこで昼食を食べているのだろうか。購買で何か買っているのだろうか。

なんか嫌な予感がするが……

「オレ様は、周りからいろいろ貰ってやってるぜ！」

ドヤ顔するドリジャのアネキ。

人が多い食堂で暴れられると面倒だから、隔離されているようだ。

あと、なんだかんだで見た目だけで言えば、ドリジャのアネキは小さくてかわいい小動物系ウマ娘である。食べている間は大人しいし、小さい口で一生涯懸命食べる姿はリス的な可愛さがある。見た目だけはいいのだ。

多分クラスメイトがうまく扱っているのだろう。今度菓子折りを

クラスに差し入れた方がいいかもしれない。

「でオルフェお姉さまはどうしてるんですか？」

「トイレで一人パンを食べてる」

「え？」

「トイレで一人パンを食べてる」

オルフェアネキ、トイレボツチ飯発覚。

ネットなんかでの逸話でしか聞いたことがなかったトイレボツチ飯。

それをこんな身近で実行している人が居ることに、ゴールドシップは衝撃を受けた。

いじめられているのだろうか？

視界に入った教官でもあるイクノデイクタスおばあちゃんにアイサインを送る。

イクノおばあちゃんは笑顔で手を振り返してきた。

イクノおばあちゃんは、孫にやさしいところはあるが基本は放任主義だ。いじめられていたりしたらさすがに助けるだろうが、自分でボツチになりに行く孫を助けるタイプじゃない。

でもトイレボツチ飯はないだろう。いくらトレセン学園が女子高でトイレがきれいだからって、そんなところで飯を食うものではない。

特に気にせず、マスクも外さずにオレンジジュースをチューチュー吸うオルフェのアネキを見ると、なんか怒りがこみあげてくるゴールドシップであった。

この怒り、誰にぶつけるべきか、ゴールドシップは考える。

本来一番悪いのはあのイクノおばあちゃんだ。絶対あの感じ、オルフェのアネキがボツチ飯をしていたのを知っている。

だが、敵に回すには分が悪い相手だ。頭も回るし口も回るタイプだ。過去の頃は口が回るタイプじゃなかったと思うが、癖馬が多いトレセン学園で長年教官をしていれば鍛えられるのだろう。きっと文句を言っても丸め込まれるだけで、フラストレーションが溜まるだけである。

くそつ、マックイーンならば簡単に丸め込めるのに。

祖母であるメジロマックイーンは、メジロを背負い、メジロを終わらせただけありその政治力は素晴らしいものがあるが、孫バカなので、ゴールドシップが何か言うとは無条件で信じてくれるのだ。

端的に言うとはちよい。

脳内でメジロまんじゅうをぷにぷにして精神を落ち着けながら、ゴールドシップは八つ当たり先を探す。

そうして、ゴールドシップの視線はドリジャのアネキで止まった。

ドリジャのアネキは涙目になった。

「あ、あのねゴルシちゃん、お姉ちゃん、オルフェちゃんがそうなるなんてこと知らなかったというか」

「そうでしょうね、1年間、妹がボツチ飯してても気づかないぐらい鈍感なお姉さまですからね」

「な、何で手を伸ばしてくるんぎい!？」

ゴールドシップはドリームジャーニーの顔面をアイアンクロードつかみ上げた。

暴れるドリームジャーニーだが、体格も、パワーも、何もかもゴールドシップのほうが圧倒的だ。

「妹が可愛いならもうちよつと気を使ってあげるべきだと思うの？」

「一緒にご飯食べようっていえばこんなことにならなかったのに」

「指食い込んでる! みぎやああああ!!」

そのままゴールドシップは食堂から外に出て、ダートコースに行く  
と……

「そおい!!」

「みぎやつ!!」

ドリームジャーニーをダートコースに突き刺した。

かつてスピカでの名物だった、ダートに埋めるぞ、である。

過去から戻ってから10年以上、一度もやったことがなかったが、魂が覚えていたようだ。非常にスムーズにドリジャのアネキをダートに突き刺すことができた。

まあ、結局八つ当たりでしかないのだが。

そのまま突き刺さったドリジャのアネキを放置したゴールドシツプは、

「オルフェーヴルお姉さま、明日から、お昼一緒に食べましょうね」と、オルフェーヴルのアネキと食事を一緒に取る約束をするのであった。ついでに朝晩も、トイレ飯をしていないか、確認する必要があると認識したゴールドシツプであった。

この事件により、ゴールドシツプはドリームジャーニーを上回るスクールカーストトップと周りから認識される。

それに加え、問題児の姉二人に比べ、成績もよく、上品な彼女により学園が落ち着くことを期待する教官やトレーナーも多くいた。

それに対してイクノディクタス教官は、こう述べている。

「学園が騒がしいのは昔からずっとです。それに、ゴールドシツプは三姉妹の中で一番騒々しいですよ」

気性のママ暴れるドリームジャーニー、恥ずかしがり屋でラインを超える暴走するオルフェーヴルに比べ、ゴールドシツプは確かにそう暴走することはない。

だが、その胸に秘めた情熱は、二人を上回るものなのだ。

更にその知性と行動力が合わさればどうなるか。

上品で優秀なウマ娘と認識されたゴールドシツプだが、

すぐにあの姉二人の妹だと認識され、

更に姉の方が可愛いものだったと認識されるのは、そう遠い話ではないかもしれない。



## 黄金船の姉のルームメイト

ひとまずダートに沈めたドリジャのアネキを引き抜いて、寮の方へと向かう。

ドリジャのアネキは「もう一人にしないからねえ!!」と泣きながらオルフェのアネキに抱き着きつづけており、オルフェのアネキは若干うっとうしそうにしていた。

「オルフェーヴルお姉さま。うっとおしいなら埋め直してきますが」「もうダートに埋められるのは嫌だよ!」

「大丈夫です、さすがにダートコースにずっと刺さっていたらトレーニングの邪魔ですから、ちゃんと裏山に埋めてあげます」

「余計ひどい!!」

「ん、大丈夫」

まあなんだかんだでオルフェのアネキもシスコンなので、おねえちゃん大好きだ。

ゴルシちゃんもなんだかんだで好きなのだが、ちゃんと教育しないと社会生活が送れなくなるだろうと心を鬼にしているのだ。

泣いてるドリジャのアネキが可愛いという、さでずむ、に目覚めているわけではない。多分。

何にしろ、入学式の日と言ったら、部屋割り確認という一大イベントがあるのだ。

新入生は同じ部屋が誰になるか心を躍らせ、

先輩たちも新入生の誰が来るか緊張する。

「そう言えばお姉さまたちはルームメイトは?」

「オレ様はいないぜー」

ドリジャのアネキが胸を張ってそういう。

まあ、ドリジャのアネキ、気性難除いても、一人でもずつとうるさいので、ルームメイトはかなりストレスが溜まるだろう。

多分今後ルームメイトができることはないだろう。

「私は今一人だけど、今回新しい人と一緒の部屋になるはず……」  
ぼそぼそというオルフェのアネキ。

去年1年間は一人部屋だったが、今年からは誰かがルームメイトに来ると。

一人部屋になったり、ルームメイトが変わったりするのはそう珍しいことではない。

オルフェのアネキの場合、マスク取った状態で他人がいると暴走状態になってしまうが、今後レースの時はマスクしっぱなしというわけにもいかないし、慣れるためにも面倒見のいい誰かとルームメイトになって練習を積んだほうがいいだろう。

寮長なんかもそんな判断をしていそうである。

ということでは……

「オルフェーヴルのお姉さまのルームメイトを見に行きましょう」

「おー!!」

「……心強い」

知らないかもしれない相手と一人で会うのが不安だったらしいオルフェのアネキは、ゴルシちゃんとドリジャのアネキが同行するとうことになり、嬉しそうに尻尾を揺らしていた。

ひとまず挨拶の菓子折り（4個入りプリン）を購買で購入し、オルフェのアネキの部屋に向かう。

扉の前に来ると、部屋の中にすでに人の気配がある。ルームメイトは先に部屋に入っているようだ。

「こ、こんにちは」

「あ、おかえりー」

おどおどと扉を開けるオルフェのアネキに、中から明るい声が返ってくる。

さて、いったい誰がいるのか、と戸惑いながら部屋にはいるオルフェのアネキの背中越しに中をのぞくと、青っぽい、ふわふわのツインターをしたウマ娘が見えた。

「お、トーセンジョーダンじゃん」

「やつほ、ドリームジャーニー先輩。相変わらず変なところで過保護ね」

その気の抜けた笑顔を見たゴルシちゃんは……

「うおおおおお!!!」

「え? ふべっ!?!」

反射的に、その顔にドロップキックをしてしまうのであった。ちゃんと峰打ちなので大丈夫。怪我はしていないはずである。

「な、いきなりなにすんのよ白いの!?!」

「白いのじゃないですわ、ゴールドシップですわ」

「圧倒的蛮行からのお嬢様ムーブ怖すぎる…… 誰なのこの子……」

「オレ様のかわいい妹」

「ああ、なるほど……」

ありえなさすぎる蛮行である自覚はあるが、どうしてもその顔を蹴りたくなってしまうのだからしょうがない。

そして、ドリジャのアネキの妹、という説明だけで納得したトーセンジョーダン。アネキの日常が気になる。それはそうと……

「トーセンジョーダン先輩?」

「なに?」

「もう一発行っていいですか」

「ダメに決まってるでしょ!?!」

「うおおおおお!!!」

「こいつ人の言うこと聞かないな!?!」

しかし、ゴルシちゃんスペースキックは、ランディングオフの直前で、オルフェのアネキに止められた。

「ゴルシちゃん。乱暴、ダメ」

「……」

ゴルシちゃんはショックを受けた。いつも激アマなオルフェのアネキが、ゴルシちゃんのしたいことよりトーセンジョーダンをかばったのだ。

ゴルシちゃん的には天動説ぐらいあり合えない話だった。

「お、オルフェねえ……」

「めっ」

「う、うわあああああん!!!」

ゴルシちゃんも敗北した。泣きながらそこから立ち去らざるを得なかった。

一方ドリジャのアネキは持ってきたプリン4個を貪り食っていた。

「……騒がしいわね。あなたの姉妹」

「でもみんないい子」

「あなたがそういうならいいけどさ……」

泣きながら走り去ったゴールドシップと、プリンを貪り食ってカラだけ残して帰っていったドリームジャーニー。騒がしいのが居なくなると、部屋は急に静かになった。

「それより、マスク外したら？ 息苦しいでしょ？」

「……緊張する」

「ルームメイトなんだから、気にする相手じゃねーって」

もしかしたら、顔に傷跡なんかがあるのかもしれない。そんなことをトーセンジョーダンも考えていた。

ただ、レースに出るときにマスクしながら走るのとは明らかにハンデである。傷跡なんかがあるなら隠す化粧も教えてあげよう。面倒見の良いギャルのトーセンジョーダンはプリンのカラを片付けながら、そんなことを考えていた。

ゆっくりとマスクを外すオルフェーヴル。

マスクの下から覗いた素顔は、普通にかなりの美少女だった。

よく考えたら、ドリームジャーニーも、さつき傍若無人を振るいきつていたゴールドシップも、中身はともかく見た目は良いのだ。

マスクで肌を守られていたオルフェーヴルは、二人よりも一段上の美しさだった。

傷なんかがあったらできるだけ見ないようにしようと考えていたトーセンジョーダンだったが、予想以上の美人っぷりに思わずオルフェーヴルを見つめてしまった。

「……よ」

「？」

「なに、みてるんだよお!!!」

それがオルフェーヴルの逆鱗に無駄に触れてしまった。

「みぎやああああ!!!」

暴走状態に陥ったオルフェーヴル

悲鳴を上げるトーセンジョーダン

触らぬウマ娘に祟りなしと、知らんぷりを決め込む他の寮生。

その後部屋で何が起きたかは二人しか知らない。

ただ、トーセンジョーダンが部屋替えを希望しなかったあたり、彼

女はかなり世話焼きであるというのは間違いないだろう。

## 黄金船のルームメイト

オルフェのアネキから逃げたゴルシちゃんは、自分の部屋へと向かっていった。

今世では初対面の、大親友に慰めてもらおうと考えていたのだ。

芦毛好きの大親友、ジャスタウエイ。

チームも一緒なら部屋も一緒に前世過ごしてきた彼女によしよししてもらおうとゴルシちゃんは考えていた。

だが、ゴルシちゃんはこの時見落としていることがあった。

過去は変わった。

じゃあ未来だって大きく変わるのだ。

これだけ違ったら同じわけがないのだ。

だが、ゴルシちゃんは無邪気にも、ルームメイトがジャスタウエイだと信じ切っていたのであった。

その誤解を抱えたまま、ゴルシちゃんは自分の部屋へと向かうのであった。

「ただいまあ……」

「あら、初めまして」

「初めましてなんだぜえ……」

そっくりいながら、ゴールドシップは部屋の中にいた人物の胸に飛び込んだ。

ぐにゆう、という柔らかい感触で、顔が埋もれる。

うーん、ジャスちゃんの胸部装甲は今日も硬いな、と思おうとして、何かがおかしいとゴルシちゃんは気づいた。

ジャスタウエイの体格は、ゴルシちゃんと同じぐらいであり、身長はゴルシちゃんと同じ170cmだが、そのスリーサイズはポリウムには気を付けなければならぬあの人と同じだったんだ。

胸に飛び込んでみると、硬い板の上の微妙な少女らしい柔らかさ、というとてもジャスちゃんらしい感触が楽しめるのだ。

だが、今抱き着いたジャスタウエイ（仮）の胸部装甲は極めて豊満

であった。ゴルシちゃんの顔がおっぱいに埋もれるぐらいだ。マツクイーンやイクノ教官では再現不能な胸部の柔らかさである。

部屋が同じで鹿毛ということで、ジャスちゃんだと信じ込んでいたが……

ゴールドシップはその柔らかい二つの塊を顔面で楽しんだ後、恐る恐る顔を上げた。

「あ、あの、ゴールドシップさん、過激な挨拶は困ってしまいます……」  
真っ赤になって困惑している彼女は、ゴールドシップも知る同期、ジエンテイルドンナだった。

ジエンテイルドンナ

ゴールドシップの同期の中で、最もレース成績が良かったウマ娘を挙げよといわれると、ゴールドシップと彼女が半々ぐらいの割合で挙げられるのではないか、と思われるぐらい前世では名バだった。

スタイルも体格もよい彼女は、普段はまじめな委員長だが、レースになるとバーサーカーに豹変する。特技はブロックに対するタツクルで、競い合うと本当に強い闘志全開で走るタイプだった。

ゴールドシップとは、なんだかんだで仲が良かったと思う。

ゴールドシップがいたずらすると苦言を呈するが、優しくしてくれる、ママみあふれるウマ娘であった。

つまり、ゴールドシップが甘える相手として悪い相手ではない。

悪い相手ではないのだが、ゴールドシップは現状、ジャスタウェイを求めているのだ。

お好み焼きを注文してたこ焼きが出てきたような話だ。

材料ほとんど一緒だからいいやろみたいな、言われてもそんなバカなという話である。

それを許すのはうちのメジロまんじゅうだけである。

つまり、ゴールドシップは大混乱に陥った。これがトーセンジョーダンなら蹴とばして照れ隠しすれば済んだが、ママみあふれるジエンテイルドンナを蹴とばすわけにはいかない。というか蹴とばすと10倍ぐらいの威力のタツクルになって返ってくるからゴルシちゃん

がもたない。

そうして混乱したゴールドシップは……

「……うわあああああん!!」

人目を憚らず号泣を始めたのだった。

泣き始めたゴールドシップに一番困惑を覚えたのはジェンテイルドンナだろう。

ルームメイトが初対面でいきなり抱き着いてきて、そして胸に顔をうずめた後、号泣し始めたのだ。

泣きたいのは自分だといいたくなる状況である。

そうしてゴールドシップの声を聴き、

「かわいい芦毛ちゃんの声が聞こえる!!」

芦毛フェチが扉から飛び込んでくるのであった。

まごうことなき変態の脈絡もない登場である。

ジェンテイルドンナは涙目になった。

「ジャスう……」

「お、芦毛ちゃん、私のことをご存じとな。ゆっくりお茶でも飲みながら語らい合いませんか?」

「いくう……」

いきなり現れた鹿毛の彼女は、ゴールドシップを連れて部屋から立ち去った。

いったい何が起きているか、ジェンテイルドンナは全くわからなかった。

まあ、そのうち戻ってくるだろうとジェンテイルドンナは荷物の整理を始めたのだが……

「あの、すいません。ジャスタウエイさんから、部屋が変わってほしいといわれて追い出されてしまったのですが……」

「何が起きていますの!?!」

いきなり初対面のウマ娘が、荷物を担いで部屋を訪れた。

ジャスタウエイって誰だ。さっきの芦毛フェチの変態か?

そしてこの子は誰だ。



というかルームメイトって生徒で勝手に変更していいのだろうか。  
疑問ばかりが浮かび上がる。

ストレスが溜まって荒れるジェンティルドーナと、彼女にビビって部屋に入れず部屋の前で立ちすくむ鹿毛のウマ娘、デーパーブリランテの膠着状態は、もう少し続くのであった。

## 黄金船の日常

トレセン学園の新生にとって最初の目標は、入学3か月後にある選抜レースである。

最終的にはトウインクルレースの大舞台で走り、栄冠を手にするこ  
とが目標だが、それまでには何段階もステップがあるのだ。

そして、レースに出るには自分に合うトレーナーを見つける必要があり、自分に合うトレーナーを見つけるには選抜レースで走るのが手っ取り早い。

また、選抜レースはトレセン学園で初めて行われる準公式レースである。

そんなレース自体を楽しみにしている新生も非常に多いのだ。

とはいえ、トレーナーを見つけるといいう目的だけなら、何も選抜レースに頼る必要は必ずしもない。

自分の脚で情報を稼いで、トレーナーに申し込むもよし、姉妹や親族に関係者がいればそこから紹介を受けるのもよし、何でもありなのである。

「ゴルシちゃん、うちのチーム見学に来る?」

オルフェのアネキが昼食時、そんな話を提案してきたとき、ゴールドシップは素直に頷いた。

オルフェのアネキも、ドリジャのアネキもミモザという同じチームに所属している。

なんだかんだであの気持ちが変わるのが激しいドリジャのアネキが長い期間同じチームに所属しているのだから、興味がかなりあった。

「え、本当に行くつもり!?!」

オルフェのアネキに同席し、アネキの口の周りを吹いてあげているトーセンジョーダンがそんなことを言う。相変わらずオラつくウマ娘である。

だが蹴とばそうとするとオルフェのアネキに「めっ!」って言われるのでそれも難しかった。

「なんだよー、文句あるのかよー」

「いや、ないけど…… ミモザはいろいろあるっていうか……」

口ごもるトーセンジョーダン。何かあるのかよくわからないがオルフエのアネキをチラチラ見ている。あまり良い話ではないのかもしれない。

さすがにチームメンバーの前でそのチームの悪口は言い難いのだろう。

まあ、どうせ見学、そこから進んだとしても体験入部もある。心配はないだろう。

「お姉さま、友達を連れて行ってもいいですか？」

「そんな一杯じゃなきや大丈夫」

ただ、トーセンジョーダンは善良なウマ娘なのは間違いなく、嘘や嫌がらせで思わせぶりの態度をとっているとは思えない。何か懸念があるのは間違いないだろう。

一応誰かを連れて行こう、ゴールドシップはそんなことを考えたのだった。

「ということで、みんなでミモザに見学に行こうぜー。体操着でコーズに3時集合な」

「芦毛のかわいい子いるかな？」

「ゴルシちゃんだけでも十分だろ」

「確かに」

早速仲良くなったジャスタウェイに声をかけたら、すぐに同行を承諾した。

「お嬢も行こうぜ」

「あなたにお嬢といわれると複雑なんです……」

ジェンテイルドンナに声をかけると複雑そうな表情をするが、耳と尻尾は正直で、興味はあるようだ。

血統的にメジロ系のゴールドシップと、そこまで特殊な何かではないジェンテイルドンナでは、確かにゴールドシップのほうがお嬢様だろうが、立ち振る舞いとか、存在感とか、あとその胸部は豊満だった

りすることを考えれば、お嬢様っぽさはジエンティルドンナのほうが圧倒的だ。

だからお嬢なのである。クラスでも徐々に根付き始めているニツクネームだった。

「私が行ったら、鯰大根にされたいですかね……」

「いや、さすがにされたいだろ……」

デープブリランテが謎の懸念を口にする。

ブリちゃん、体格は他の3人にも劣らない高身長でいい体格をしているのだが、かなり気弱なウマ娘だ。

だが、鯰大根にはされたいだろう……なんだその懸念……

「ほら、ブリランテも一緒に行ってみましょう。入るかとかはあとで考えるにしても、先輩方の走りはきつと参考になるわ」

「お嬢がそういうなら……」

ジエンティルドンナの提案に、ブリちゃんも一緒にチーム見学に行くことになったのであった。

## 黄金船と姉のチーム見学 1

チームミモザ

GIウマ娘も輩出しているそれなりに有名なチームだ。

去年の宝塚記念、有馬記念を制したドリームジャーニー、うちのアネキが現在の代表的な所属ウマ娘だろうが、過去は宝塚記念含めたGI3勝したスイープトウショウや、短距離で大活躍したデュランダルなどなかなかの名バがそろったチームである。

そんなチームなはずなのだが……

「うおおおおお!!」

トレーナーらしきアラフォーの男性がコースを全速力で走っている。

その後ろを、マスクを外した暴走モードのオルフェのアネキと、同じくすごい形相のドリジャのアネキと、魔女帽に猫耳生やした独特の格好をした、推定スイープトウショウが追いかけている。

併せウマってそういうのじゃないよな、とゴールドシップは困惑した。

ジャスは芦毛を探してきよろきよろしている。

ブリは、「やっぱりブリしやぶにされるんですね……」と頭を抱えている。

お嬢は茫然と謎の併せウマを見つめていた。

併せウマだか、競争だか、何かだかわからないそれは、推定トレーナーがオルフェのアネキにドロップキックを食らい、ドリジャのアネキに人間魚雷頭突きをうけ、最後にスイープトウショウ先輩に頭からかじられることで終わった。

終わったとっていいのだろうか。何が起きているかわからない。

「あなたが、オルフェちゃんとかとジャーニーちゃんの妹さん？」

「あ、そうですけど…… あれはいつたい？」

「お兄ちゃんに対する愛情表現かな」

「ア、ハイ……」

まだかなり色が濃く黒っぽい芦毛のウマ娘が声をかけてきた。

チームメンバーだろう。芦毛は白くなつてからが本格化、なんて言われるからまだ発展途上なのかもしれないが、先輩だろうことは間違いないかった。

「芦毛のお嬢さん、私とデートしませんか」

ジャスがそんなことを言い始める。相変わずぶれない奴である。

だが、ジャスのナンパの成功率は実はそう悪くはない。

ジャスは身長が高くて外見がいいし、中性的なので男装の麗人っぽいのだ。

ウマ娘には人気が高いタイプである。

「あはは、カレンちゃんをデートに誘うには、まだ力不足かな。お嬢さん♪」

だが、その芦毛のウマ娘、カレンちゃんはそう言つて人差し指でチヨン、つとジャスの鼻先を触る。何と云うか、アクションがいちいちかわいいというか、あざといというか。

「ゴルシさん、カレンちゃんですよカレンちゃん!!」

「知っているのかライデン!？」

「ライデンじゃないけど知っていますう!」

ブリちゃんに興奮して早口で説明をし始める。

お嬢もジャスも知らなかったようなので一部だけの人気だろうが、ネット界のウマドルらしい。

確かに何と云うか、見た目が可愛いのもあるが、動きがいちいち計算されててかわいらしい。あざといともいえるが、それもまたいいだろう。最低でもゴルシちゃんにはまねできない可愛さだった。

「そして、カレンちゃんの恋人、ロードカナロア様だ!!」

「カナロアちゃん?」

「なんだいマイハニー」

「そおい!!!」

そんなカレンちゃんと話していると、急に話に割り込んできたウマ娘が現れた。ロードカナロアと名乗った彼女は、カレンちゃんにアイアンクローを食らい、そのままダートに突き刺された。

「あの、チームメンバーじゃないのですか?」

「カナロアちゃんはそのうちのチームじゃないし、単に付きまとってくるストーカーだから放置でいいよ。トレーニング終わったら焼却炉で燃やしておくから」

笑顔でそんなことを言うカレンチャン。きつとウマドルは大変なのだろう。突き刺さっているウマ娘は気にしないことにしたゴールドシップたちであった。

## 黄金船と姉のチーム見学 2

「ということ、ボクがチームミモザのトレーナーの沼添だ。よろしく、ツて痛たたたたた!?!」

「がるるるるるるる」

「スイーピーちゃん、押さえて押さえて」

笑顔でゴールドシップたちにあいさつしたトレーナーに、スイープトウシヨウが物理的に噛みついた。

気性難のゴルシちゃんと言えどもここまでひどくはない。

何が彼女をここまで駆り立てるのだろうか。

一瞬スイープトウシヨウを引き離そうとしたカレンチャンだがすぐに諦めた。

おそらく日常なのだろう。

「スイーピーちゃん、パパが大好きだからほかのウマ娘と会話していると、嫉妬しちゃうんだよね……」

「大好きじゃないし！ 大嫌いだし!!」

「パパ泣いちゃうよ!?!」

「……パパ?」

ゴールドシップたちは首をかしげる。

「トレーナーさんとスイーピーちゃんは実の父娘なんだよ」

「珍しいですわね……」

父親がトレーナーというパターンはそれなりに多いが、お嬢の言うように担当を受け持つというのはレアケースだろう。親子の情が入るのを嫌うためだ。

そのため、一瞬パパ活的なパパがよぎったゴールドシップは口に出さなくてよかったと内心で思っていた。口に出した瞬間、あのスイープトウシヨウの牙はこちらに向きかねない。

「あれ、でもカレンチャンさんは、トレーナーさんのことをお兄ちゃんって言ってましたよね? ということは、カレンチャンさんはスイープトウシヨウさんのおば「カレンチャンはみんなの妹だからトレーナーさんのことをお兄ちゃんって呼んでるだけだよ」アッハイ」



余計なことを言いそうになったブリちゃんがカレンチャンに睨まれる。

「お前、鰯大根にすんぞ、と言わんばかりの視線である。」

「というか、ゴルシちゃんの後ろに隠れるんじゃない。カレンチャンの視線が怖すぎんだよ。」

「さて、すまないが見学に来てくれた諸君、自己紹介してくれないか？」

「スイープトウショウを頭にくつつけたトレーナーが仕切り直して、そんなことを聞いてきた。」

「身替りの早さにビビりながら、こちらも自己紹介を始める。」

「ゴールドシップです。ドリームジャーニーのお姉さまと、オルフェーヴルのお姉さまがいつもお世話になっております」

「ジャスタウェイ。世界一のウマ娘になる予定だぜ」

「ジェンティルドナです。今日は一日よろしくお願いします」

「デイ、ディープリランテですう」

「なるほどなるほど。今日は見学つて言つてたけど、どうせだからウチのトレーニングに付き合ってくれよ」

「いいですけど……」

「見学だし見ているだけかと思つたが、トレーニングまで見てくれるらしい。」

「じゃ、ブリランテちゃんは、カレンチャンに頼むわ」

「まかされたよ」

「ひっ」

「カレンチャンがブリちゃんの手を引く。」

「ブリちゃんのほうが体格はいいのだが、その姿は市場へ向かう牛かなにかのようだ。」

「照り焼きにされたら、おいしく食べてください……」

「ブリちゃんはそんな遺言を残してカレンチャンに連れていかれた。」

「芦毛が居なくなったジャスは明らかにやる気を失っていた。」

「ジャーニーとオルフェはドンナちゃんと走つて来い。できれば潰れない程度でな」

「任せろ」

「よろしくお願いしますわ……」

ゴルシちゃんの本性を知っているお嬢は、ゴルシちゃん以上のやばさを醸し出す姉二人に警戒しながらついていった。

「スイーピーはジャスちゃんにいろいろ教えてやってくれ」

「仕方ないわね」

「お手柔らかに」

外面モードになったジャスがスイープトウショウについていく。

「ゴルシちゃん余ったんだが？」

「ゴルシちゃんはボクがみてあげるよ」

ゴールドシップはトレーナーさんの担当となったようだった。

## ディープリランテとカワイイウマドル

カレンチャンは人気ウマドルである。

特にネット上では根強い人気を誇るが、強いウマ娘かといわれるとそうではない。

先日格上挑戦で出走した桜花賞トライアルのフィリーズレビューでは8着に惨敗し、ティアラ前2戦に出走するのは難しい状況になっていた。

だが、実績と人気は関係ないのだ、ということ、ネット上で活動しているのが彼女である。

彼女のウマスタや、ウマツターの使い方、うまいところは、トレセン学園の学生の日常が垣間見え、にもかかわらず他の人のプライベートが明らかにならない発信方法だろう。

昔、あるウマ娘が同室のウマ娘を写真でとって、ウマスタにあげたのが問題になったことがある。

プライベート空間を無断で撮影したというのが非常に問題になったのだ。

だから、SNSの使い方については非常にうるさく指導される。

特にトゥインクルシリーズにおいては参加者一人一人が人気者なのだ。変な者に目を付けられかねなかった。

そんな中で、カレンチャンは常に計算しつくされた日常風景をSNSで投稿していた。

外部の人間は、トレセン学園内部で何が行われているかを知らない。

泥臭い努力も、気の抜けた日常も、何もわからない。

トレセン学園は女子校であるから警備も厳重であり、何もわからず、だからこそ人々の興味を誘っていた。

そんな中、ウマ娘の学園生活を配信しているカレンチャンは大人気になったのだ。

知らないものを知りたいという人の欲望はかくも強かった。

だが、学園生の一部は別のところで感心していた。

カレンチャンが投稿するものは、とにかく自分だけである。そしてその公開するものはすべて管理されたものだけである。

寮の自室だって、自分のスペースである半分しか映らず、ルームメイトが誰かすら、明確にはわからない。

トレーニング風景だって、写るのは自身以外はせいぜいトレーナーだけであり、チームメイトも写らない。

友人とお出かけしているときも、友人が写るのは稀だ。

嘘ではないが、意図をもって切り抜かれた、投稿するのに問題のない日常風景なのである。

それを作るのにどれだけの労力があるのか、学園生の目線で見ると感心するレベルであった。

自分をうまく見せる、そんな彼女にブリランテは憧れを持っていった。

そう、憧れていたのだが……

「カワイイは作れるってね。よしっ」

「何がよしっ、なんですか……」

体操着を脱がされ、綺麗なコスプレのような衣装を着させられたウマドル、でいーぷ☆ぶりらんで ちゃんが爆誕しつつあった。

カレンチャンに部屋に連れ込まれ、ドキドキワクワク（恐怖的な意味で）の2人きりの密室であったが、鯰大根にもぶりしゃぶにもされず、ブリランテはきれいに着飾らされた。

「こういうの、私には似合わないですよお」

「あなたが服に似合うかどうかは問題じゃないの。服をあなたに似合わせるのよ」

カレンチャンの押しが強い。

そのままカレンチャンの言われるがままに10秒動画を撮影し、ウマスタにアップさせられる。

「よし、カワイイカワイイ」

「私なんてかわいくないですよお」

「そんなこと言っていると、あの三人に置いていかれるよ」

カレンチャンの発言に驚いて振り向くブリランテ。  
カレンチャンは今までの笑顔とは違う真剣な顔をしていた。

「才能って残酷だよな。カレンは、ミモザの子たちに比べたら全然才能ないもの」

「そんなことは……」  
「あるよ」

カレンチャンは淡々と断言する。

マイルチャンピオンシップ連覇したデュランダル

ティアラ路線からグランプリ宝塚記念に勝利したスイープトウ  
シヨウ

気性難ゆえに勝ちきれなかったが最近グランプリ夏冬連覇したド  
リームジャーニー

オルフェーヴルはまだデビュー前とはいえその脚の速さは一級品  
以上だ。

一方カレンチャンは格上挑戦に大失敗し、ティアラ路線で走るのは  
絶望的な状況だ。

「レース以外で人気を取るなんて情けないという人もいる。才能がないという人もいる。だけどそれで諦めたら、みんなに届かないから、自分もカワイイって周りにも、何よりも自分に認めさせたいから」  
「……」

「カレンは、嘘を本当にするため、嘘をつき続けているんだ」

人気ウマドルの裏側を見たブリランテは困惑していた。

「なんで、そんなこと私に話すんですか？」

「ブリちゃんは、たぶん同類だと思ったから。ブリちゃんは私なんかより才能ありそうだから、同類というのは失礼かもしれないけど」

「そんなことないです……」

「それでも、カレンはそう感じたし、お兄ちゃんもそう感じたからこういう風に分けてる」

「……」

ブリランテにはわからなかった。キラキラして、しかしその裏では

きつとすさまじい努力をしているカレンチャン。

何もできていない自分。

どこが同じかわからなかった。

「あの三人に、追い付きたいと思ってる？　追い越したいと思ってる？」

「……」

「このままだと置いていかれるって、薄々感じてるんじゃない？」

カレンから見ても、あの3人は異質の強さを持っているのを感じていた。

ゴールドシップは、血統から見ても、その立ち振る舞いから見ても簡単にわかる強さがある。

自分に対する圧倒的自信。それを裏付ける身体能力と頭脳。隙も無く、簡単にクラシック三冠を取ってしまったようだ。

ジェンテイルドンナもまた圧倒的である。あの体つき、あの身体能力は学園内でもきつとトップクラスだ。

表面上はお嬢様だが、闘志もまたすさまじいものがありそうである。お兄ちゃんかドリムジャーニーとオルフェーブルの姉妹に併走をさせるぐらいだ。闘志を持って余す二人と同等以上であつても不思議には思わない。

ジャスタウエイは二人に比べればまだまだだが、きつと伸びしろは一番多い。

飄々とした昼行燈っぽい性格に見せているが、目が全くふざけていなかった。いつか全員に勝ちきつてやるという熱い闘志を胸に秘めたウマ娘である。クラシッククラスではそこまでかもしれないが、シニアで本格化したら一番強いのは彼女かもしれない。

そんな化け物3人に対して、ブリランテは、普通に才能があるウマ娘である、というのがカレンの感じたところだった。

普通ならGIにだって勝てるだろう。ライバルに恵まれば、複数のGIにだって勝てるぐらい、その年一番強いウマ娘になれるぐらいの才能はある。

だが、化け物に比べたら全く足りていない。

化け物に囲まれているカレンは、それにすぐに気づいた。

そしておそらくブリランテ本人も……

「あなたには二つの選択肢がある。一つは限界まで頑張つて、限界を超えて、あの3人についていく」

「……」

「もう一つは、普通のお友達として付き合っていく。別に、レースで劣っても友達にはなれるからね」

「……どうやって……」

「？」

「どうやってついて行けつていうんですか、あんな、あんな強い人たちに」

「その答えの一部をカレンは持つてる」

「……」

「最高に、最強で、最凶な自分を。最もカワイイ自分を追い求め続けるしかないよ」

「……」

「あと2年しかない。止まってる余裕はないよ」

「……」

「怖いのはわかる。カレンだつて毎日、凍え死ぬかと思うぐらい怖い。でも、そこまですないとみんなに追い付けないから。お兄ちゃんに申し訳ないから」

「……」

そうして最凶にカワイく微笑むカレンチャン。

「私も……」

「？」

「カレン先輩みたいに、少しはなれますか？」

「ブリちゃんはカレンなんかよりよほどカワイくなれるよ」

ブリランテに自信なんてなかった。

自身が無くても、無理でも、それでもあの三人に追い付きたかった。ただの友達ではなく、ライバルとしても並びたかった。

諦めるしかないと思つていた。

だが、この最高にカワイイ先輩が断言するのだ。

それなら、きつと、もしかしたら

あの星にも手が届くのかもしれない。

不安そうに、恐怖で歪んだ笑顔を見せるブリランテ。

しかしその顔は、最高にカワイイとカレンチャンは感じるのであつた。



## ジャスタウエイと本物の魔法使い

「ジャスタウエイは、どうして優等生でいようと思うの?」

「ジャスちゃんはまじめじゃないですよ、スリーピー先輩」

二人でどこそこランニングをしていると、スリープトウシヨウがそんな話をし始めた。

「真面目じゃない。一人だけ冷静でいようとしてる。それで内心を明かさないうようにしてる」

「なんでそんなこと聞くんですか?」

ジャスタウエイは純粹に不思議に思った。

今日のミモザの先輩なら、カレンチャンのような世話焼きっぽいウマ娘なら気になるところかもしれない。

だが、ジャスタウエイが見ている限りスリープトウシヨウは女王様気質だ。

周りが自分に合わせると思っているタイプで、ジャスタウエイのようなくまなく身替りできるタイプのほうが相性がいいだろう。

にもかかわらず、わざわざ被っているネコを引っぱがそうとするのはいったいなぜだろうか。

「昔の我慢してた私みたいだから」

「スリーピー先輩、昔はまじめだったんですか?」

信じられない、みたいなちよつとオーバーリアクションで反応するジャスタウエイだが、スリープトウシヨウは気にした様子はなかった。

「ならどうして優等生辞めて、パパに噛みつくようになったんです?」

嫌いになったんですか?」

「幸せになるため、ね」

「幸せ、ですか」

ジャスタウエイには、いまいちわからなかった。

「パパ、トレーナーじゃない」

「そうですね」

「トレーナーって周りにかわいくて若いウマ娘侍らせてるじゃない」

「その表現はどうかと思いますけど……」

一部恋愛関係になるトレーナーとウマ娘はいるとはいえ、全体から見たら少数派だ。

「ママは、パパの最初の教え子なんだって。それでそのまま結婚して私が生まれたってわけ」

「ふむふむ」

「でもパパはトレーナーだから、若いウマ娘に囲まれてるわけ」

「言い方あ……」

あのトレーナーが他のウマ娘を邪な気持ちで見ているとはとても思わない。どう考えても子煩悩だし……

「パパが何を考えているかなんて、ママだってわかってる。でもね。やっぱり気持ちって正直で、外から見えてるものにすつごく影響されるんだよ」

「ふむ」

分からなくもない。若いウマ娘学生に囲まれる夫。自分も元々同じ立場にいたのを考えると、浮気の一つや二つ、想像してしまうだろう。それは信じているとかそういう話ではないのだ。

「だから私はパパにかみつく。私が見てるから大丈夫ってママに安心させるために。そういう自分になりたいから、私は今の私になった」  
「でも、ジャスちゃんは今この自分を気に入ってますしー」

要領のいい自分というのもジャスタウェイにとっては別に嘘ではないのだ。

自分のある部分を強調しているだけに過ぎない。

それで悪いとも思っていないし、悩んでもいない。

スリーピー先輩の言うことは、当たってるような外れているような、そんな話だった。

「むう、説明が難しいなあ」

「何がそんなに気になってるんです？」

スリーピー先輩は気性難でツンデレだが、悪いウマ娘だとは思わない。

ひねくれ度合いで言えばジャスタウェイの方がよほどひねくれて

いると思う。

スィーピー先輩に見えている何かがあるのだろう。それが正しいのか間違っているのかはわからないが、ジャスタウェイには見えてないものであり、それゆえに興味があった。

「優しくてちよつとひねくれた後輩が、大事なものを失う運命だよ」

「先輩は、なんでそんな未来がわかっちゃうんですか？」

スィーピー先輩はジャスタウェイの心配をしているようだ。

どうせ自分とスィーピー先輩の仲なんて、そんな深いものではないし、おそらく今後も深まらないだろうから、特に気にしなればいのに。

ミモザのトレーナーと今回参加している4人はあまり相性がよさそうにない。

スィーピー先輩もそれはわかっているだろうし、ジャスタウェイもわかっている。この後、二度と会いませんでしたなんてなっても不思議ではない。

それでも彼女は目の前の後輩が心配なようだ。

とはいえ、大事なものを失うって何だろう。

運命って何だろう。彼女の目に写るのは何なのだろうか。

恐怖はない。ただ、興味があった。

「私は魔法使いだからね」

「大学部になって魔法少女ごっこは痛いですよ、先輩」

「ごっこじゃないし！ 本物なんだから!!」

スィーピー先輩の勝負服が魔女風で、今も魔女帽をかぶっているのは知っている。

魔法少女にあこがれていそうな雰囲気だ。

だが、それが許されるのは小学生までだろう。ゴルシちゃんあたりがやったら可愛いと思うが、さすがにいくつも年上で、大人に片足突っ込んでいる彼女がそれをするのは、外見が似合っているでも痛ましいという感想しか浮かばなかった。

「信じてないでしょ」

「信じられます?」

「じゃあ魔法を見せてあげるんだから」

「正直魔法は結構興味あります」

彼女が言う魔法とは何だろうか。

手品もどきかもしれない。

もしかしたら、本当に神秘の力かもしれない。

ジャスタウエイはそつけない態度に反して内心は興味津々だった。

好奇心はウマ娘を殺す。

そんなことわざは忘れていた。

「仕方ないわね……」

スィーピー先輩とジャスタウエイは立ち止った。

スィーピー先輩が服の中から取り出したのは単なる木の棒であった。杖みたいなものだろうか。

その木の棒をジャスタウエイに向ける。

『これから行うは幸せの魔法。運命を見せ幸せを呼ぶ魔法』

「ちよつと雰囲気出ますね。場所は河原ですが」

『これから行うは不幸の魔法。運命を見せ不幸を除く魔法』

「どきどき」

『幸せに導け運命の輪よ。最悪を見せよ運命の理よ』

そうして木の棒がジャスタウエイの額に触れると、ジャスタウエイの意識は暗転した。

あ の とき

彼女が消えたとき

私はそれを見ていた

手を伸ばした

叫んだ

止めようとした

だが彼女は一切振り返ることなく  
消えていった

二度とここには還つてこない  
それを理解して

私は……

――

――

――

――

「ぜえ、ぜえ、ぜえ、うつ……」

「ちよ、ちよつと大丈夫」

「うげえええええ」

「全然大丈夫じゃなかった!？」

ジャスタウエイは蹲り、胃の中身をぶちまけた。

スィーピー先輩が慌てて背中をさする。

「はあ、はあ、はあ……」

「ごめん、そんなやばいもの見えちゃった？」

「……」

ジャスタウエイは何も答えられなかった。

見てはいけない運命だった。

しかし見ないといけない運命だった。

死ぬよりつらい気持ちって、あんなものなんだなと冷静なところが  
分析していた。

「スィーピー先輩、ひどいですよ。ウマ娘ちゃん虐待ですよ……」

「でも、私が心配していた理由、わかってくれた？」

「ええ、とても」

ジャスタウエイはこの一瞬で色々認識を改めた。

悩んでなさそうな人でもいろいろ悩んでることもある。

上手く生きるといふのは必ずしも上手く生きられているわけではない。  
ない。

そして、

魔法使いというのは恐ろしいものだ。

ただの魔法少女にあこがれるイタイ先輩の方がよほどよかつたな。そんな失礼なことをジャスタウエイはぼんやりと考えていた。

## 黄金船とその姉のトレーナー

「で、トレーナーさん、誰をスカウトしようと考えているんだ？」

ゴールドシップは率直にトレーナーに聞いた。

「どいつもこいつも、才能あふれまくっているウマ娘だ。」

欲張りなトレーナーなら「全部だ」と言いかねないぐらいいい子がそろっている。

ミモザは全体的に闘志あふれるウマ娘が多いし、そう考えるとやっぱりお嬢だろうか。

ブリはまじめだが気が弱いし、ジャスは何考えてるかわからないところがある。

ゴルシちゃんも、姉二人のように闘志バリバリで走るタイプのウマ娘じゃない。

そんなことを考えていたが……

「んー、たぶん誰とも契約しないんじゃないかな」

トレーナーはあっけらかんとそんなことを言った。

「はあ!? 目ついてるのかよ!? お嬢もジャスもブリもすげーウマ娘じゃん!!」

「そりやそうだ。みんな震えるぐらい才能にあふれてるね。でもうちじゃない」

「なんでだよ」

別にここに誰かが絶対入ってほしいわけではない。だが、誰も選ばないというのはゴールドシップには意外過ぎた。

「うちみたいな、短距離専門チームに向いてる子がいないよ。だってみんな長距離に向いてそうだし」

「いやいや、おたくの娘さん普通に中距離だったよな?」

スイーピー先輩が勝ったのは秋華賞、エリザベス女王杯、宝塚記念。全然短いレースじゃない。

過去所属していたらしいデュランダル先輩や、ブリを連れて行ったカレンチャンは短距離っぽそうだが、うちの姉二人だって中長距離向

きだし、全然短距離のチームっぽくないのだ。

「あれは、スイーパーが気性難過ぎて、うちでとるしかなかったただだよ」

「どんだけ暴れたんですかあの人」

トレーナーが遠い目をする。

父親だからって責任取らされるぐらい暴れたようだ。

「で、そしたらほかのトレーナーが持て余した子がちよくちよくうちに来るようになったちゃって」

「二人とも私の姉ですけどね!!」

あの二人が何をやらかしたか。まあ妹の自分ならよくわかる。やべーことである。

「ん、でもそれなら、ゴルシちゃんはいかがですか？」

「パス！」

「そんな断言しなくてもー」

「そもそも君の姉二人にしたって、ボクは全く適当じゃないんだ。なんせもともと短距離専門だからね。だけど、ボクより適当なトレーナーが居なかったという消去法に過ぎない」

「アネキい……」

あの二人、そこまで持て余されていたのか。まあ、そうだろう。うん、疑いはないが現実がづらいというだけである。

「その点キミは、気性難だとしても賢いからね。きつともっと合うトレーナーが居るよ」

「ですかね」

「キミだって、ボクにビビツとこないだろう？　そういう直感は大事にした方がいい」

そんなもんだろうか。

まあ確かに、ミモザトレーナーにはビビツとこない。もつと人生面白くなさそうにしているやつのほうがゴルシちゃんの好みだ。ミモザトレーナーはちよつと頼りなさそうだがとても楽しそうである。

遠くを見ると、コースを姉二人とお嬢が爆走している。姉たちよりお嬢のほうが一回り大きく、遠近感がおかしくなりそうである。



コーナーリングでオルフェのアネキがお嬢に体当たりを食らって吹き飛ばされた。

お返しとばかりにドリジャのアネキがお嬢に体当たりを仕掛けるがお嬢はびくともしない。

いつの間にかコース上の荒々しい戦いになっている。

「あれ、良いんですか？」

「んー、楽しそうだねえ」

「あれ止めないといけないのトレーナーさんですよ」

オルフェのアネキは闘志120%になってるし、お嬢も普段の優雅さをかなぐり捨てて闘志バリバリである。ドリジャのアネキは若干引いている。

ゴール過ぎても二人は全然止まる気がしない。

止めるなら生贄が必要だろう。

ミモザのトレーナーは二人を止めようとして跳ね飛ばされた。

走るウマ娘の前に飛び出してはいけません。

「自分のトレーナーか」

ゴールドシップは悩んでいた。

かつての現役時代、ゴールドシップはトレーナーを何度も変えていた。

誰もじっくりこなかったのだ。

誰かあっているトレーナーはいないだろうか。

こちらから探して見つけ出すべきか。

そんなことを考えながら、他の三人を連れてゴールドシップは帰るのであった。

「いたたたた、あのお嬢様、あたり強すぎだろう……で、上手くいった？」

「わからないけど、やれることはやったわ」

「カレンも、いうべきことは言えたと思う」

「しかもどかしいな、直接何もできないのは」

「しようがないんじゃない。姉といっても、できることは限られてるよ」

「そうなんだけどさ」

「トレーナーも協力してくれたんだし、きっと大丈夫でしょ」

「ということでもゴルシちゃんネルはじめるぞー」

「どうして相方が私なんですかあ!？」

「いや、ブリが一番人気そうだから」

　ディープリランテの話がこの前のアンケートで一番希望が多かったから、特に理由なく流用して相方を選ばれたのであった。

「それでなんで私水着で大根持たされてビニールプールに入れられているんですかあ!？」

「鰻大根だな!!」

　なお、画像はないので各自脳内保管してほしい。ブリの胸部は非常に豊満であり、そのトモも張りが抜群である。

「あと、部屋の隅でガタガタ言ってる箱は何ですか……」

「ジャスが『ゴルシちゃんの相方は私だろ!!!』って騒いだから縛って箱詰めした」

「ゴールドシップさん、ジャスタウェイさんに対してだけは対応が雑ですよね」

「友情だな」

　なお、部屋の隅の箱はガタガタ言った後、なぜかはあはあ言い出したので、お嬢が部屋の外に回収していった。

「よし、このチャンネルはゴールドシップと」

「ディープリランテでお送りします……」

　ちなみに感想やアンケート結果によっては相方は変わるかもしれない。

　皆さんジャスちゃんに清き一票をよろしくね。

「ということでもまずはふつおたからだぜ。かなり前に書いてもらったのが溜まってるところからそこから流用しよう」

「リサイクルですね」

「まず最初から読み上げますね。ゴルシちゃんネーム「ラダーマン」さんから「サトノダイヤモンドちゃんとキタサンブラックちゃんに質問

です。お二人がトレセン学院に入学したころのスピカはどれくらい変わっていましたか？」

「どうだったんだろうな。おーい、サトイモー」

「はい、サトノダイヤモンドです！」

「いきなりでできた!？」

「ゴルシちゃん空間だからな。で、どうだったんだ」

「一時期すごい数が増えましたが、私とキタちゃんが加入したころには二人つきりでしたね。いろいろありましたし」

「いろいろってなんだよ」

「いろいろです。本編で語られるかもしれないし語られないかもしれない」

「そうか」

「まあ、二人つきりでも楽しかったですけどね、キタちゃんかわいいいし」

「なんかこれ以上話させるとガイドライン違反が発生しそうだからサトイモはボツシユートしておこう」

「にやああああ!!」

「いきなり床に穴が開いて落ちてった……」

「年代的には本当は私らの後輩なんだが、さすがに時系列おかしくなるからキタサトは未来編では出てこないのぜ」

「あと同じく「ラダーマン」さんからです。「最終回で赤ん坊のゴールドシップと再会した後、積極的にリョテイ夫婦の下に通いおばあちゃんとの如く会いに行っては可愛がっているのでしょうか？またどれくらいの頻度で会いに行くのかも知りたいです。(流石に毎日ってことはないでしょうが…毎日ならリョテイちゃんどんまい)」

「マックイーンばあちゃんは孫誰もが大好きだけど、3人それぞればあちゃんへの好感度が違うんだぜ。ドリジャのアネキは構いまくるマックイーンばあちゃんがあまり得意じゃない。で、オルフェのアネキはイクノばあちゃんがちょっと怖いらしくてあまり得意じゃない」

「ゴールドシップさんのお姉さんたち、結構性格違いますもんね」

「ちなみにマックイーンが家に入り浸っているのはしよっちゆうで、

よくママと邪魔だつて大喧嘩してるぜ。まあ頻繁に来ると迷惑だから、ある程度大きくなってからは孫たちが遊びに行くようになってきた。最近では孫みんな独立したから、妹が増えるかもしれないね」

「ご両親が仲良しなのはいいことだと思います」

「次はゴルシちゃんネーム「シユペルター」さん。「ウマ娘同士で子供ができるならウマ娘と人間の女性とでも子供はできるのでしようか？」」

「人によって世界は違うし、物語によっても違うが、この世界だどどのようなカップルでも子供ができるぜ。多分読者の世界とはヒトも生き物として別物だな」

「男性トレーナーさん同士の同性愛の話はウマ娘たちの間でも時々話題に上がりますからね」

「ブリ、何それ知らない、ゴルシちゃん怖い……」

「ひとまずこんなところかな。ふつおた、企画案募集してるからよろしくな。あと次回の相方をアンケートとるし、次々回の相方のアンケート候補も募集してるからよろしくな」

「よろしくおねがいします。あの、私いつまで鰻大根になってればいいんですか？」

「この後写真撮影して写真集売るからそれまでだな」

「何それ聞いてないです!？」

「ということ、ゴルシちゃんネルフユーチャー、ゴールドシツプと鰻大根でおおくりしました。またな」

「締めないでください!？」

## 第二章 黄金船のチーム探し

### トレーナー探しって難しい

入学してしばらくの間、ウマ娘達は教官とトレーニングを重ねながら自分のトレーナーを探し続ける。

そのためのイベントは各種あり、典型的なのは選抜レースであるが、体験入部や合同説明会といったイベントも存在している。

そういうのにも出てみたが……

「なんかぴんとこねーな」

ゴールドシップの正直な感想だった。

選抜レースで圧倒的なロングスパートを見せたゴールドシップは、トレーナーたちのスカウトに囲まれた。

やれ三冠も確実だの、世界も狙えるだの、そんな誘い文句を皆口々にしていた。

だが、どれも正直ピンとこなかった。

おそらくゴールドシップ自身が走る目的がちやんと見つけられないからだろう。

また、声をかけてきた連中が、皆まじめすぎるのもあった。

ネコをかぶったゴルシちゃんはマックイーン以上のお嬢様だが、その本質は目を離すと1秒後に何になっているかわからないような気性難ウマ娘である。

現に、ゴールドシップを取り囲んでいたトレーナーたちが一瞬みなゴルシちゃんから目を離れた瞬間、変わり身の術でにゃーさん（1mの高さのゴールドデン招き猫）と入れ替わってみたりしている。

そんなゴールドシップについていけるトレーナーはあの囲んでいるトレーナーにはいなさそうだった。

「そんなこと言っていると永久に決まらないんじゃないの？」

早々にトレーナーを決めたお嬢が呆れたように言った。

お嬢は選抜レース後、あっさりトレーナーを決めた。

腕はあり、熱血指導だが、レース指導の内容が荒っぽく、評判が分かれるトレーナーだ。

お嬢のことだからもっとさわやか系なトレーナーを選ぶと思っていたのでちよつと意外だったが、ビビツと来たらしいのでそんなものである。

「いい人いっぱいだと思いますけど」

ブリもブリで、お嬢と同じチームに入った。

ブリのほうはもつとおとなしいトレーナーを選ぶと思ったのでこれも意外であった。

ただ、お嬢に流されたり、トレーナーに流されたわけではなく、自分で選んだトレーナーのようであり、トレーニングを頑張っている。

「そう？ 私も全然ピンとくるのがないな」

ジャスは全くトレーナーが決まっていない。選抜レースの成績もよかったから、トレーナーに囲まれていたが、誰もピンとこなかったようだ。

今は勝手に食後の休憩といつてゴルシちゃんの膝を枕にしてる。

「でもどうするの？ 二人とも、めばしいトレーナーの勧誘断つちやっただじゃない」

大体のトレーナーは選抜レースを見に来るし、それで勧誘を全部断ってしまったから、今後選抜レースでいいトレーナーを見つければ難しそうだ。

もちろん二回三回と、三顧の礼のように勧誘に来るトレーナーはいるが、あまり期待はできないだろう。

「こうなったら選抜レースを見に来なかったトレーナーを探すしかないな」

「いるの？ そんな人」

「案外いるぜ」

例えば過去の頃のスピカなんかだと、全く選抜レースを見に行かなかった。なんとなく誘拐したりして集めていただけだ。

後、リギルなんかは自分のところで選抜レースをしていた。規模が大きいからできる方法であるが、今でもそういうことをしているかも

しれない。

そこまで考えて、一つ思い当たるところがあった。

過去にかかわりのあったチーム、スピカやリギル、カノープスはどうなっているのだろうか。

「なーなー、お嬢、スピカとか、リギルとか、カノープスっていうチーム知らねーか？」

「リギルはシンボリルドルフがいた最強チームよね。トレーナーが高齢で閉めちゃったって聞いたけど」

「ふむ、他のチームは？」

「聞き覚えがないわね」

「私少しは知ってますよ」

「そうなのかブリ」

「カノープスはゴールドシップさんのおばあさまのイクノ教官が所属していたチームですよ。トレーナーさんも年だからやっぱりもう終わらせちゃったとか、イクノ教官が話してました」

「そうなのか」

「といふかなんでゴールドシップがイクノ教官で聞いてないのよ。そういう話題出るでしょ普通」

「いや、なんとというか、イクノばあちゃんとはちよつと話が合わないというか」

「なんだかんだでおばあちゃんっ子のゴールドシップは現在イクノデイクタス教官に指導を受けている。」

「だが、普段走り方の話や、家族の話ばかりで、カノープスの話は聞いていなかった。近すぎるせいだろう。案外そんなものである。」

「スピカはゴールドシップさんのおばあさまのメジロマックイーンさんもいたチームですよ。閉めたとか、誰かが引き継いだとかいう話は聞いていませんが」

「マジか、沖野トレーナー、じいちゃんになっても頑張ってるのかな」

「ブリの情報が正確でない可能性があるが、ゴールドシップの知っている沖野トレーナーは確かにゴキブリのようにしぶといので、もしかしたら今でも残っているかもしれない。」



里帰りということ、一度見に行ってみようか。

「ということ、思いついたが吉日！ スピカに行ってみるぜ！」

「私も一緒に行くー」

ジャスタウェイと二人、ゴールドシップはスピカの部室へ向かうのであった。

## チームスピカ

チームスピカのチームルームの場所は、昔と変わっておらずしてぼろくなっていた。

月日の経過を感じるところだ。

だが看板がまだ出ている以上、チームとしては存在しているのだろう。

「たーのもー」

沖野トレーナーは今70ぐらいだろうか。普通ならとつくに辞めている年齢だが、それでも彼ならきつと元気にトレーナー業をやっているだろうと思いつつ、ゴールドシップは扉を開けたのだが……

「あら、どなた？」

そこにいたのは初老に差し掛かった栗毛のウマ娘だった。

「……お姉さま？」

「ポニーちゃん？」

思わず口に出してしまったゴールドシップは自分の失敗を悟った。

サイレンススズカ。

最速の機能美といわれた有名ウマ娘だ。

トウインクルシリーズではGIは2勝、重賞9勝という成績を持つ彼女だが、彼女を一番有名にしたのはドリームトロフィーシリーズ2000mで、58秒フラットで前半1000mを走り、58秒フラットで後半1000mを走り切るというレースをしたことだ。

当時最強を争っていたシンボリルドルフやトウカイテイオーすら影を踏ませなかった、大逃げで差すの究極形を行ったパーフェクトレースは、今でも有名、らしい。ジャスが説明してくれた。

一般的に広く知られている話らしいが、現在のレースしか見てなかったゴールドシップはそういう過去の偉業にはまったく無知であった。

ジャスの解説を聞いていたスズカは照れていた。

そんなサイレンススズカが、今はスピカを継承し、トレーナーをし

ているらしい。

「おね…… ゴールドシップさんも、もう学園生ですか」

「ふっふっふ、今度は三冠とってやるぜ!!」

そんなことを言いながらゴールドシップは部屋を見回す。

あのころと変わらない、というか年月が経った分ずいぶん古臭く  
なったチームルームだ。

「どうかさ、チームメンバー少なくね?」

ロッカーの状況から言ってチームメンバーがほとんどいなさそう  
だ。

一人、二人? それくらいだろう。

名門チームスピカがこんなにさびれていていいのだろうか。

「それは…… そう、少数精鋭なのよ」

「母さんが人見知り発揮してスカウトしないからでしょ」

そういいながら外から帰ってきたウマ娘がいた。

「お、あたしはゴールドシップだ。スズカとは…… まあ、いろいろあ  
る仲だ」

ゴールドシップがそんな自己紹介をすると、彼女はとても妙な顔を  
した。

「え、この、スペ母さん以外とコミュニケーションとれるか怪しいスズ  
カさんといういろいろある仲って何? すごい怖いんだけど……」

スズカの評価がさんざんすぎる。でも、母さんとか言ってるから二  
人の娘なのだろうか。

「私はジャスタウエイ。先輩のお名前窺っても?」

「ああ、ごめんね。ブエナビスタ。チームスピカの唯一のメンバーよ。  
そのスズカ母さんの娘ね」

ジャスタウエイが話の脱線を察し、強引に話を戻すべく自己紹介を  
した。彼女もそれに応じて自己紹介をした。

ブエナビスタのことは、ゴールドシップも知っていた。

去年桜花賞とオークスに勝ち、有馬記念ではドリジャのアネキに  
迫って2着だった有名なウマ娘だ。

それがスぺの娘だと知らなかったが、さすがの血統といったところだろうか。

「で、キミたち二人はスピカの希望者？　こんなマイナーチーム良く見つけたわね」

「ちよつと先代のトレーナーに縁があつてね」

「ああ、沖野さん？　まあそれならいいけど。で、どうするのさ母さん。二人のこと、入れるの？」

「ん〜」

スズカが悩み始める。

「わかった、じゃあ入部テストしましょ」

「え、今のスズカの反応から何を理解したのブエナ先輩」

「母さんは嫌だったら嫌っていうから、悩んだってことはOKの意味合いだからね」

「何そのスズカ語」

「だから今日から頑張ろうでもいいけど、どうせだから入部テストしたいなつて」

「何がどうせなんだ……」

ジャスタウエイは困惑した。

ゴールドシップはやる気満々だった。

「つまり、ブエナ先輩をぶつ潰せばあたしがチームリーダーだな」

「お、いいねいいね。その無鉄砲ぶりは。私に勝てると思うなよ」

「あ、レースする流れになつてる」

飛び出すゴールドシップ。

追いかけるブエナビスタ。

困惑を覚えながらついていくジャスタウエイ。

「あ、みんなまってるえ」

3人が飛び出していくのに気づいたスズカトレーナーは慌てて追いかけてチームルームを飛び出すのであった。

## 入部試験レース

「入部試験の内容は単純。スズカ母さんに2000mで勝てばいい」「いやそれ無理でしょ。サイレンススズカと言ったら2000mドリームトロフィーのレコード保持者じゃん」

ジャスタウェイがぼやく。

スズカの得意距離で勝てというのはなかなか荷が重い。まあ、もちろん全盛期だったら、という条件が付くが。

「もうスズカ母さんはかなり年だし「ブエナ？」最近トレーニングサボってるし「ブエナ？」少し豊満になったほうがいいのかしらとか言って食べ過ぎてるから「ブエナあ」そんなに怖くないよ。というか全盛期のサイレンススズカには私でも勝てないと思うし」「なるほど」

ゴールドシップは思いついたことがあり、こっそりスズカの後ろに回り込んだ。

「おね、ゴールドシップさん！いきなりお腹揉まないで!？」

「見事なスぺツ腹」

「ウソデショ」

スズカは落ち込んだ。

ゴールドシップは考える。

今回の目標はブエナビスタ先輩だ。

これに勝って、スピカのリーダー、はまあいいが、とにかく勝つことが目的だった。

ブエナビスタ先輩の実力は、レースを観戦しているのである程度把握している。

ティアラ三冠は逃したが、年末の有馬記念ではドリジャのアネキと競い合って2着に入っている。

つまり、レベルで言うと今の全盛期のドリジャアネキと同等であり、化け物級に強いということである。

まだ成長途中のゴールドシップではなかなか歯が立たない相手だ。

だが、ブエナビスタ先輩は最近までドバイシーマクラシックに参加していた、海外帰り直後である。

疲れも抜けていないだろうし、そのあたりが隙になるとゴールドシップは睨んだ。

ゲートに4人で入る。トレセン学園トレーニングコース、2000mだ。

相変わらずゲートは狭苦しくてゴールドシップはイライラするが、必死に気持ちを抑えようとしていた。

ゲートが開くと一斉に皆飛び出す。

スズカのスタートは洗練され切っており、真っ先にハナを取る。

年を取り、身体能力が衰えてもこういう技術の部分はなかなか衰えないようだ。

惚れ惚れするぐらいきれいなスタートだ。

ジャスタウエイがそれに続く。悪くないスタートだ。

ゴールドシップはいつものように出遅れてスタートした。

そしてブエナビスタは、それ以上に出遅れていた。

「ブエナ先輩スタート下手すぎだろ!? スペもスズカもスタート上手いほうだろ!?!」

「うるさい! お前だってスタート下手すぎだろ!」

そんな罵り合いがスタート直後に始まっていた。

「ふむ……」

ジャスタウエイはサイレンススズカの後ろにぴったり付けていた。

マークして、楽をしようという魂胆だが、それが難しい。

絶対の逃亡者サイレンススズカといえば、すさまじいペースで逃げて、直線で伸びて、そのまま押し切るただの化け物みたいなウマ娘の印象だ。

だが、こうやって走ってみると、ただただ速いだけではない、駆け引きを強要してくる巧みなウマ娘だった。

後ろにつけばペースを落としたり、さりげなく左右に振ったりして

ジャスタウエイにスリップストリームの恩恵を与えようとしな。

ただ、年があるのだろう。そこまで速くないので、抜いてしまおうかとしたが、それはこちらの動きを予期しているのではないかと思うぐらい完璧にブロックしてくる。

後ろを見ていないのにどうやってこっちの動きを把握しているのか、不思議になるレベルだ。

高レベルな駆け引きにジャスタウエイが苦戦しながら1000mを過ぎたころ。

ドンツ、と後ろから音がした。

ゴールドシップがスパートを始めたのだ。

「うおおおおお!!」

ゴールドシップの優れたところは何かと言われれば、このロングスパートだ。

実際ゴールドシップの最高速度は遅いとは言わないが一流ぐらいのレベルだ。

GIにおいてはこれぐらいの速度を出せるウマ娘は多くいる。

だが、ゴールドシップはその最高速度の持続距離が半端なく長いのだ。

約1000m。これがゴールドシップのスパート距離だった。

向こう正面から最後尾にいるウマ娘がペースを上げれば、しかもそのペースがスパート速度ならば、周りも否応なくそのペースに巻き込まれる。ハイペースに巻き込まれればラストスパートのスタミナが尽き、控えれば先にスパートしたゴールドシップには勝てない。

そんなスパートであった。

ブエナビスタは、ゴールドシップのスパートと同時に速度は上げたが、すぐに置いていかれる。このタイミングでスパートするつもりはないようだった。

それに合わせてジャスタウエイはペースを上げるが、スズカはずると失速していく。もうスタミナが尽きたらしい。年を考えていなかったのだろうか。大丈夫か、ジャスタウエイは少し心配になる走りだった。

そのまま直線に入り、ゴールドシップはジャスタウェイに並ぶが、ゴールドシップのスパートはそこまでだった。

最初にふざけ過ぎだったし、そのあとブエナビスタと競いすぎたせいでスタミナが切れている。

一方直線に入ってスパートをかけたブエナビスタは、トレセン学園のトレーニングコースの短い直線では十分伸びきれずに、ゴールドシップをかわすだけで精いっぱいだった。

結局ジャスタウェイが一番最初にゴールに飛び込むのであった。



## レースの後で

「久しぶりに走ったけどやっぱり気持ちいいわね。もう少し走ってくるわ」

それだけ話して、スズカはどこかへ走り去ってしまった。  
やっぱりスズカはスズカであった。

残された三人は水分補給をしながら、チームルームへと戻る。

「というこで、チームリーダーはジャスタウェイに決まりだな!!」

「はあ!？」

「負けたからには二言はないわ。あなたがチームリーダーよ!!」

「ちよ、ちよっとまって!？」

そうして民主主義の名のもと、多数決の暴力によつて、ジャスタウェイはスピカチームリーダーを押し付けられようとしていた。

「ジャスちゃん、スピカに入るなんて言つてないし……」

「ジャス、入らないのかよ!？」

ゴールドシップがショックを受け、しょんぼりした上目遣いでジャスタウェイの袖の裾をにぎってくる。

あざとい態度だ。こういうのにジャスタウェイが弱いのを分かつてわざとやっている。

そして、わざとやっているのをジャスタウェイが気付いているのま  
でわかつてやっている。

ゴールドシップはとでもずるいウマ娘なのだ。末っ子気質は伊達  
ではない。

「えっ、入ってくれないの?」

一方ブエナビスタは本気でショックを受けているようだった。

強がっていてもソロチームはメンタル的に辛かったのだろう。

二人も入ってくれると内心喜んでいた彼女にとっては意外な状況  
である。

それに気づいたジャスタウェイの良心が痛んだ。

「なあ、入るだろう?」

「ねえ、入ってくれないの?」

両側から挟まれて、ジャスタウエイは逃げ場を失った。

「は、はいりましゅう」

ジャスタウエイは完全に押し負けたのであった。

「でき、チームに入るのはいいけど、実際何するのさ。トレーナーどっかに走って行っちゃったし。いつ帰ってくるの?」

「うーん、久しぶりの暴走だから門限まで帰ってこないと思うわ」

「職務放棄じゃん」

スズカはすでに走り去ってしまった。きつと今頃楽しく走っているだろうし、帰ってくるのはおそらく門限を過ぎてからだ。

暗くなったら帰るという発想はスズカには存在しない。星空は綺麗だからだ。

「ブエナ先輩、何するんですかー」

「何すると聞かれても…… 私も普段一人で練習していることが多いからわからないわ」

「完全機能不全チームじゃん!?!」

「明日はきつと沖野元トレーナーが見に来てくれるから大丈夫よ」

大丈夫じゃないし、これどうすればいいんだ。ジャスタウエイは途方に暮れた。

「ふっふっふ、お困りかな、スピカリーダー」

「すごい困ってるよ、ゴールドシップ」

「では、元スピカチームリーダーにしてサブトレーナー、宣伝担当だったゴルシちゃんがいろいろ教えてやろう」

「入って一日目なのに経歴と肩書が多すぎる……」

ゴールドシップが言うことが理解できないのはいつものことだ。ブエナビスタは困惑したが、ジャスタウエイは軽く流した。

「スズカからすでにメールで指示は受けている。今日はタキオン研究所で身体測定だ」

「え、なんで母さんのメールアドレス知ってるの!?! 後走ってることに集中してる母さんにどうやってメール読ませてるの!?!」

「疑うのかよ。ほら」

「本当に返事来てる!!」

ブエナビスタは驚いていた。サイレンススズカというウマ娘は、いくつになっても走りジャンキーである。走っていたら止めようがない。止められるのはスペ母さんのスペドライバーだけであった。

メールなどの連絡をしても当然回答が来ないのだが、なぜかゴールドシツプには回答が来ている。

「コツは五連打メールだ。ア・イ・シ・テ・ルのサインだな」

「スペ母さん!! スペ母さん!! スズカ母さんの近くに變なのがいるよお!! 助けて!!」

「ブエナ先輩」

「ジャスちゃん……」

「諦めが肝心ですよ」

慰めに見せかけたジャスタウェイのとどめで、ブエナビスタの目は死んだ。

「というこで、今日はこれから身体検査、明日は歓迎会ライブだからな!!」

「はいはい、頑張ろうね」

歓迎会ライブってなんだ、とジャスタウェイは思ったが、いつものわけわからぬ発言だろうとスルーした。それを彼女が後悔するのは明日のことであるが今は関係ない。

「スペ母さん…… 助けて」

ブエナビスタは死んだ目をして北の大地にいる母に助けを求めていた。

## 歓迎会

いったい何が起こっているのだ。

ジャスタウエイは茫然としていた。

今日は、スピカ新入部員歓迎会、だったはずである。

そう、そんな会だったはずである。

超一流と言えるウマ娘、ブエナビスタが所属しているとはいえ、チームメンバーは一人という弱小チームであるはずだ。

だから歓迎会といっても内輪でゆつくり楽しむようなイベントを想像していた。

だが、ふたを開けてみれば大騒ぎである。

現在舞台では、違いの分かるウマ娘選手権が行われている。

生徒会長ティープインパクト先輩が、あらゆる違いが判らず、いや、わかってあえて違う方を選んでいるのではないかと思うぐらい外し続け、映す価値なしとなっている。

ドサ袋を被せられて泣いている生徒会長を見られるのはここだけだろう。

「ティープもまだまだかわいいな」

シンボリルドルフ学園理事長のそっくりさんが、隣でドヤ顔でワインを飲んでいた。

なんせ、当てたのは最後の一问だけだ。ドヤっているがそっくりさんに違いない。

「一流ですわ♪」

ゴールドシップはいつもはあんなでもやはり名家のウマ娘、全問正解して余裕のポーズである。

庶民のジャスタウエイは半々ぐらいの正解率であった。

そんなイベントの最中、ゴールドシップを応援して元メジロ家の面々がメジロの歌を歌っているし、野外舞台の一角が一般解放されているので、一般客も大量に来て大盛り上がりである。

新入部員歓迎会なのになんでこうなっているのか、全く理解できない状況であった。

そもそも、加入を決めたのは昨日であり、その日は身体測定しかしていない。

怪しいウマ娘博士（アレが、かの有名な大博士、アグネスタキオンだとはジャスタウェイは認めたくなかった）にいろいろされそうになった挙句、その怪しいウマ娘博士は真つ黒なウマ娘に投げ飛ばされて、ダートに突き刺さっていたぐらい刺激的な身体測定である。

ダートに埋まるのは最近流行っているのだろうか。

何にしろ、そんな大騒ぎしかしていなかったため碌に準備などできなかったはずだ。

それがなぜ、一晩でここまでのメンバーを集めた大騒ぎができるのか。

ジャスタウェイは理解を諦めた。

ブエナビスタは理解できずに頭から煙が上がっていた。

スズカは何も考えていないように楽しそうにしていた。

格付けが終わったら次はライブである。

格付け順に並ぶのだろうと思っていたジャスタウェイは、センターにさせられて困惑した。

「チームリーダーがセンターに決まってるだろう!!」らしい。

碌にライブ練習をしたことがないジャスタウェイがセンターである。

両脇にはブエナビスタ先輩とゴールドシッポ。

更にその後ろにはシンボリルドルフ学園理事長のそっくりさんと、推定ディープインパクト生徒会長であるズタ袋をかぶった謎のウマ娘だ。

すべてがやばい。

何がやばいってメンバーもやばいが、ジャスタウェイのライブ技能が一番やばい。

もちろん全く踊れないわけではない。小さいころからライブのまねごとをするのは、ウマ娘の遊びの一つであり、振り付けと動き程度

はわかっている。

だが所詮遊びレベルだ。

授業でだってまだ発声練習程度しかしていない。

それでも容赦なく流れ始める うまびよい伝説

ジャスタウエイは、引き攣った表情で、どうにか踊り始めることしかできなかつたのであつた。

この後も焼きそばを焼きまくったり、お好み焼きを食べさせられまくったり、ずっと大騒ぎが続いていた。

途中で、ブエナビスタのもう一人の母親であるスペシャルウィークも急遽参戦した。

北海道から飛行機であわててこちらに来たらしい。

「ゴールドシップさん？」

「ス、スペ、落ち着くんだ。というかお前、私のこと覚えてるのかよ」

「穏やかな怒りにより全部思い出しましたよ」

「その表情、全然穏やかじゃないよな!？」

すさまじく黒いオーラをまとつた、往年の名バスペシャルウィークが、真つ黒なオーラを放ちながら、なぜかゴールドシップに詰め寄っている。

「昔、言いましたよね？ 指は足まで含めれば20本あるって」

「折られる!!」

すごい勢いで逃げだしたゴールドシップ。

すごい勢いで追いかけて始めるスペシャルウィーク。

解説席に座る学園理事長のそっくりさんとズタ袋ウマ娘。

学園中を逃げ回つたゴールドシップは、最後スペシャルウィークにつかまり、ダートに突き刺されていた。

ジャスタウエイは考えるのを止めた。

そんなこんなで大騒ぎはおわつた。

チームスピカの再始動は、まだ始まったばかりであるが、ジャスタウエイの思考力とはつくに0になり、ブエナビスタの胃へのダメージ

はまだまだ続くのが容易に想像できる状況であった。

閑話：ゴルシちゃんネル　フューチャー　part 2

「ということでもゴルシちゃんネルはじめるぞー。今回の相方はばーちゃんだ」

「ゴールドシップにとっては昨日のこの様かもしれませんが、私にとっては何十年前のことなんですよ」

「ばあちゃん、すげー強者感だしてくるじゃん」

「孫までできればいろいろ変わりますわ……　ところでサトノダイヤモンドさんは？」

「サトイモは今、ギアナ高地で修行中だぜ」

「……なんですの？」

「ゴルシちゃんの最初はグーといいながらパーを出す必殺技に対して、見切りつつチョコキを出すサトイモに、さらにゴルシちゃんがそこまで見切つてグーを出すというの見切りつつパーを出そうとしたサトイモに、そこまで読んでくるだろうと思つてチョコキを出そうとしたゴルシちゃんに対してさらにグーを出そうとしたサトイモを、明鏡止水の境地で当初の予定通りパーを出して、ゴルシちゃんが勝つたからだぜ」

「……まったく、サトノダイヤモンドさんは……　もうちよつと年を考えなさいよ」

なお、サトイモは過去編で出ているので、年齢はゴルシちゃんより上だぞ。学園で出てきたら、サトイモ2世とか、サトイモ3世だと思われる。

そんなこんなで、ゴルシちゃんネル、始まります。

「じゃあふつおたから行くぞー」

「では、ゴルシちゃんネーム・ジョインジョイントキイさん『メジロ神拳を使えるメジロ系ウマ娘はどのくらい居るんだ？後、メジロ神拳の正当伝承は誰だ？』」

「アタシはほとんど使えねーけど、実際どれくらいいるんだ？」

「メジロの名を持つものは大なり小なり使えますわ。ちなみに正当伝



承者は今はわたくしです。指先一つでダウンさせますわよ」

「いや、マックちゃんが使ったの主に力技じゃん」

「メジロ神拳は奥が深いのですわ」

あまりツツコみすぎてメジロスパークを受けたくないゴールドシップは口をつぐんだ。

なんせゴールドシップはさぼってきたので受け技しかできないのだ。

「じゃあ次行くぞ」

「ゴルシちゃんネーム：火焰狐コウさんから。『お嬢とディーブな鯨とジャ：誰だっけ：まあいいやジャスとゴルシちゃんに質問です。4人の中で押し相撲をしたら誰が優勝しますか？』

また、4人の中で食い意地張ってるのは誰でしょうか、気になり過ぎてヨルシカ眠れません』」

「夜も寝て、昼もちゃんと寝て、ちゃんともやしみたいに育つんだぞ。で、押し相撲か。お嬢が一番強そうに見えて、多分一番弱いと思うぜ」  
「でしようね、体格的に他三方の方が一回り大きいですし。レース中のタックルは技術が必要ですからそこまで体格差が重要ではないですが、押し相撲になれば体格の勝負ですからね」

「存在感だけは超一級だが、体格で見たら普通ぐらいだからな。スペースはあるから小さいわけじゃねえが」

「で、残りは性格的にゴールドシップが勝ちそうですね」

「まあそうなるんじゃないね」

この4人のうち3人はとてもガタイがいいのだ。鯨が猫背なのは、身長が高いのをごまかそうとしている節もある。

「ということ、今回もお便りありがとなー」

「今後は、続きを書くか、リメイクするか、他のを書くかは未定です。ご意見等ありましたらお寄せくださいまし」

「ということ、今回もゴルシちゃんと」

「還暦を超えたメジロマックイーンでお送りしました」